ウルトラマンティガ&ハートキャッチプリキュア！～光と闇の超決戦～

ソラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ウルトラマンティガ＆ハートキャッチプリキュア！～光と闇の超決戦～

【Ｎコード】
Ｎ５２４５Ｑ

【作者名】
ソラ

【あらすじ】
砂漠王デューンとの戦いから3年後人々は平和の時間が流れたいたのだが突如こころの大樹から新しい種が生み出された。それはこころの大樹が最初に生み出した伝説のプリキュア・キュアアンジェからのメッセージだった。コレは戦いを終えたつぼみ達プリキュアと新しい力を手にした大人、琢磨、傑の新しい敵とのぶつかり合いが繰り広げられる戦いの物語である

プロローグ～夢～（前書き）

新しい戦いのプロローグは夢から始まったのだった・・・邪神の復活と巨人の存在・・・その正体とは？

プロローグ～夢～

此処は４００年前のとある国のとある場所・・此処に今一人の男と一人の女が立っていた・・・・

？？？「レナ・・・よくやったよコレでしばらくは砂漠の使徒も奴も地球に災いをもたらす事はないだろう・・・コレでボクも此処にいる理由がなくなった」

レナと呼ばれる女性は黒髪の長髪で黒いレースの入った服を着ていた・・・男は今いも泣きそうな彼女に優しい言葉を掛けた・・・顔に手を添えて悲しむ彼女に最期の別れを言うために・・・・

レナ「でもいつまた砂漠の使徒や邪神が蘇るかは分かりません。貴方の力がまだ必要です・・・ダイゴ、お願いです！！地球に残ってください！！じゃないと私はまた一人になってしまいます・・・・」

ダイゴと呼ばれる男はレナの訴えを聞きながらも首を横に振った・・・自分達は元々は結ばれてはいけない関係なんのだ・・・君の中には新しい命が・・・ボクの力を受け継ぐ命があるのが唯一の救いだ・・・

ダイゴ「レナ泣かないで。大丈夫ボクは遠くから君を見守っているよ。そして君がピンチになったらボクは戻って来る。」

レナ「ダイゴ・・・」

ダイゴ「さよならレナ・・・キュアアンジェ！！！」

ダイゴはＩの字型の形をしたモノをレナに渡して彼女に背を向けて離れていく・・・そしてダイゴから渡されたモノをそしてこれから地球を守らなくてわならない使命を後世に託すという重大な仕事が有ったのだから・・・徐々に景色が白くなっていった・・・・

大人「はっ！！！・・・・またあの夢かコレでもう一週間同じ夢の繰り返し・・・でもデューンは倒したはず・・・邪神って何のことなんだ？」

夢から覚めた大人は汗で身体中びしょびしょだった・・・実は今までヴィジョンは大人の夢であった・・・しかしリアル感がありすぎて気持ちが悪かった・・・そんな中カーテンを開けると朝日があたりを包みこんでいたのだった。

砂漠王デューンとの激闘から既に3年の月日が経過していた。かつての仲間もそれぞれ自分の夢い向かって歩き出していたのだった。大人とはあの戦いのゆりの監督の元で後猛勉強してつぼみ達が通っよっている明堂院学園の大学部に進学し琢磨は大人とは違う大学ではあるが一応進学をして今は日本一周の為にバイクを買う為にせっせとバイトをしている。傑は外交官の夢をかなえるために明堂院学園の姉妹校のアーバンド大学の外国語学部に夕もその大学の教育学部に入学していた

つぼみ、えりか、いつきの3人はそのまま明堂院学園の高等部に進学し今の仲良く過ごしていた。ゆりは大人と同じ明堂大学に進学して自分達の夢を見つけるために頑張っているのであった・・・

大人「さてと～今日は5限までだったな。晩飯どうしようかなぁ～」

流石に大学生ともなれば一人暮らしをせざるを得ない環境となり大人は大学の寮に住まいを移していたのだった。一人暮らしとなれば面倒なのは食事だ・・・今日はどうするかと悩みながら大学へと自転車で向かうのだった・・・

大人「（天道さんとかマンティス達は元気にしてるかなぁ？・・・天道さん達はあの後も《もう俺達の教える事は何もない・・・後はお前達で人生を切り開け》って言ってハイパーゼクターで元の世界に戻っちゃったし・・・マンティス達は残りの人生で楽しみたいって言って旅に出た・・今思えば懐かしいな・・・皆どうしてるかな？）」

大学についた後も大人は上の空だった・・・何せあの激闘からもう3年が経過した・・・すると今までと同じ平和がやってきたのだ・・・そして帰り道あてもなく何処かに行こうと自転車置き場に行

こうとしたその時後ろから声が聞こえてきた・・・聞き終えボ絵のあるあの声を・・・

ゆり「大人！！・・・もう何度呼んでも返事ないんだから」

大人「あ？・・ゆり・・・久しぶり・・・ってほどでもないか同じ大学だから顔ぐらいは見るし」

ゆり「そうね？・・・あ、そうだ今日時間ある？つぼみ達が久々に仲間で集まらないかってメールが来たんだけど」

大人「へぇ～またあの３人何か企んでるな？よし分かったどうせ暇だからいいよ♪場所は？」

ゆり「植物園でやるみたいよ。」

大人「分かった。準備が出来たらすぐに行くよ」

大人は一度ゆりと別れて自宅に戻る。そしてある程度身だしなみを整えていくと愛車の自転車に乗りこんでいきつ植物園にへと向かうのだった。

大人「はぁ～大学からは遠いな。さてやっとついた。」

つぼみ「大人さん！！来てくれたんですね♪」

大人「ああ♪久々に仲間の顔を見たかっからね～あれ・・えりかとかは？」

つぼみ「もうすぐ来ると思います。あっ！噂をすれば・・・」

えりか「ごめん、ごめん～遅くなっちゃった！！」

いつき「えりかったら色々買いすぎだよ～」

大人「相変わらずだね・・・二人とも♪」

えりか・いつき「大人さん！！！お久しぶりです♪」

大人「うん。久しぶりだね♪」

大人達は久々の再会にテンションが上がっていた。そして遅れてゆり、琢磨、傑、夕も合流してきた。

８人「カンパーイ！！！」

８人は植物園のテーブルでジュースを飲みながら昔の話をしたり今

の現状を報告したりと和気あいあいになっていたのだ。
つぼみ「アレからもう3年もたつんですよね。何だか信じられませんよ」
えりか「ほんとだね～あの戦いが嘘みたいだからね」
いつき「でもコレはボク達だけの秘密・・・誰にも言えない」
ゆり「ええ。私達の頑張りが今の未来なんですもの・・」
大人「未来かぁ～」
つぼみ達の言葉に大人は夢の事を思い出していた・・・覚えている単語はキュアアンジェ・・・そして邪神・・・どういう意味なのだろうか?もしかしたらまた何か起こる予兆なのか?・・・この事を話すべきかな?・・・いや止めておこう。この話をしたら仲間によけいな心配をかけるだけだ・・・今は黙っておこう・・・そう思ってこの場で夢の話をしなかった・・・しかしこの夢こそ新しい戦いの予兆である事にまだ大人は気がつかなかったのであった・・・
・

翌日・・・場面は変わりこころの大樹を育えてている妖精達はいつもどうりこころの大樹にこころの種のエネルギーを送り大樹を育てていた。つぼみ達のお陰でこころの大樹は順調の育ちつつあり今は大体人間の子供くらいの大きさまでに成長したのだった。
シプレ「?・・・何ですか」
コフレ「どうしたです?・・あぁ!!」
ポプリ「うん?・・・わぁあぁ!?」
今日もいつもどうり様子を見行こうとしたシプレ達だったが何と突然こころの大樹が光出しているではないか・・・コレは3年前の事を考えるとまた何かが起こる前兆であり戦いの前触れでもあったのだ・・・案の定こころの大樹から光がなくなったと思えば其処には今まで見た事がない銀色の種があったのだった。
シプレ「コレは・・・まさか」
コフレ「また新しい何かが地球を狙っていると言う事ですか?」

ポプリ「だとしたらまあポプリ達がいちゅき達のところにいくでしゅね！！」

シプレ&コフレ「うん！！」

妖精達は大急ぎで地球へと向かうのだった。異変の前兆をつぼみ達に知らせるために。

其処の頃大人はというと・・・

大人「はぁ～昨日は唐揚げだったから今日は思いきって牛丼にしようかなぁ～」

授業を終わらせて帰宅途中だったのだ。大学生の特権は時間がある事であるから時間を持て余していたのだ。そんな中彼は特に行くあてがなかったため懐かしいあの場所に行ってみた。

大人「うぅ～ん～。はぁ～此処から見える景色は変わらないな～アレから3年たつんだよな・・・何か懐かしい」

そんな物思いつふけていると頭上から何かの声がしてきた・・・

大人「？・・・ぐぉぉお！？？」

なんとそれはシプレ達妖精であり上を向いた大人の顔面に妖精達の身体パンチがクリーンヒットしたのだった

大人「はっひゃぁあ～～～・・・・」

シプレ・コフレ・ポプリ「「うぐぅ～・・・んっ？・・あぁあぁ～～～～大人さん！！！」」」

その場に倒れてしまう大人・・・妖精達はかつての懐かしい顔にあぁ～あとやってしまったとでも言う様な声を上げてしまう・・・そしてしばらくして・・・

大人「いっつー・・・空から隕石が・・・・ん？ここは・・何処だ？」

つぼみ「あ、気がついたようですね！！」

大人「つぼみ？・・・ここはつぼみの家か・・・あぁ頭が～痛い」

シプレ「ごめんなさいですぅ（汗）」

コフレ「ボク達も慌ててたんですうっ！！！」

ポプリ「大人しゃん大丈夫でしゅか？」
大人「ああ、大丈夫だよ心配かけたね♪・・・って何でシプレ達が此処に？君達はこころの大樹のお世話をしてたんじゃないのかい？」
つぼみ「それが・・・コレを！！」
大人「それは・・・こころの種？・・・いや・・・違うね。ハートキャッチミラージュにセットするパワーアップの種に似てる」
シプレ「こころの大樹が何かを伝えるためにシプレ達に託したでしゅ！！」
大人「こころの大樹が？・・・（まさか夢の邪神って奴に関係が？）」
つぼみ「今えりか達には連絡しました。もうすぐ来ると思います」
大人「そうか。じゃあまた植物園に行くんだね？」
つぼみ「はい！！おばあちゃん人も了承は得てあります。」
大人は直感的にそう思った・・・邪神が復活するとでも言うのか？
でもあり得ないはずだ夢の話だし第一砂漠の使徒は壊滅させたから侵略者なんてもいないはず・・・でも夢の事が大人は気がかりであった・・・・・しばらくして全員集まり植物園にある秘密の扉からプリキュアパレス向いプルキュアパレスの奥のブロッサム、マリン、サンシャイン、ムーンライトの石像がある場所に収めてあるハートキャッチミラージュの所まで辿りついた・・・
つぼみ「やっぱり！！」
えりか「ミラージュの収まる形だね」
ミラージュと取って種を確認してみるとやはり形が同じだった・・・
でもなんの種なのだろうか？その疑問だけが残るのだ。
いつき「でもなんの種なんだろう？」
ゆり「分からないわ・・・でもこころの大樹がわざわざ出したと言う事はまた地球に危機が迫っていると言う事かも知れないわね」
琢磨「そんな筈は・・・だって砂漠の使徒は壊滅したしネイティブの過激派達も天道さん達が片付けたじゃないか！！！」
傑「ああ。確かにデューンはこの手で倒したしＺＥＣＴだって壊滅

させた・・・なのに何で今更種を・・薫子さん何か聞いていませんか？貴女の前のプリキュアから」

薫子「いいえ。残念だけど私のも分からないわ・・・こんな事は今までなかったし」

全員が困惑する中大人は確信に迫っていた・・・そう自分の夢の中の”ダイゴ”と”レナ”が言っていたセリフにある《邪神》という言葉だ・・・もしかしたら今度の敵は《邪神》なのか

大人「・・・・皆聞いてくれ。思い当たる事があるんだ・・・」

大人は全員に自分が見た夢の話をした・・・邪神の存在をほのめかす夢の話を・・全員は大人の話を聞いてもう一度状況を推理してみた・・・

ゆり「つまり大人が見た夢から考えると・・・敵は砂漠の使徒だけではなかったという事になるわ。」

夕「そんな！！砂漠の使徒以外だったらネイティブしか・・・」

傑「確かにそうだ・・・でも《邪神》なんてのは初耳だしこのタイミングで大人はそんな夢を見たんだぞ？・・話が出来過ぎだ」

大人「とにかく種をミラージュにセットしてみよう！！何か分かるかもしれない！！！」

全員「うん！！！」

大人の意見に全員が賛同してミラージュに種をセットする。すると種は輝きだしてその輝きはミラージュにも広がって行った・・・

全員「！！！？？」

するとミラージュから光が放たれて人型の影が映る・・・其処には大人の夢に出た人物gあ写っていた・・・

大人「アレは・・・キュアアンジェ！！！」

つぼみ「アレが！？」

キュアアンジェ「私はこころの大樹を守る戦士キュアアンジェ。このこころの種がこころの大樹から出されたと言う事は地球に大異変が起き大地を揺るがす怪物ゴルザ、空を切り裂く魔龍メルバ、炎であらゆるものを燃やす怪物ガルラが復活します。」

えりか「コレって・・・もしかして」
いつき「キュアエンジェからの警告・・・」
キュアアンジェ「後世のプリキュア達よ・・・貴方達の力ではゴルザ達を倒すことはできません。かつての私も空からやってきた光の戦士達が私と共に邪神と共に戦いゴルザ達を倒して全ての黒幕である邪神を辛くも封印する事が出来ました。そしてその光の戦士達は自分達が戦いに使った身体をティガの地にに残して星雲に帰って行きました。後世のプリキュア達よ!!巨人を蘇らせて再び協力してゴルザ、メルバ、ガルラを倒すのです!!巨人を蘇らせる方法はただ一つ・・・・」
此処まで言い終えると映像は消えてしまった・・・・
大人「ティガの地にある巨人・・・・邪神の復活の前触れだって?・・・」
つぼみ「敵は砂漠の使徒だけではなかった・・・」
傑「決まりだな・・一旦戻ろう」
全員一度プルキュアパレスから出ていく。すると何やらつぼみの両親がやってきた。
つぼみ「どうしたんですか?お母さん、お父さん」
みずき「つぼみ!!急いで家に戻って。テレビで凄いニュースがやってるの!!」
大人「?」
この場にいた全員が一度つぼみの家に行ってテレビのニュースを見てみると・・・・
TVキャスター「ごらんください!!!モンゴルに突如謎の巨大生物が出現しました!!!更にイースター島、ナスカの大平原にも同じような巨大生物が出現しました!!!」
其処には青い身体に頭にツノをはやした巨大生物と赤い姿をした龍の様な生物と全身が鎧のようなモノに覆われた炎をまき散らす怪獣が泡られ他の姿が映っていた。
大人「あ、あれは!!!」

全員一度つぼみの部屋に集まり状況を整理していた
つぼみ「予言のとうり・・・・」
いつき「じゃあ本当に地球に異変が！？」
えりか「でも何で今になってあんなものが・・・」
大人「分からない・・・でもいつきのいうとおり地球に異変が起きているだ・・・後は《ティガの巨人》だけなんだ」
ゆり「《ティガ》・・・でもティガって何処なの？」
傑「何かヒントがあれば・・・・」
すると突如ハートキャッチミラージュが光出していくするとそこには希望ヶ丘市から近くの森であった・・・・
大人「あの場所は・・・・」
ゆり「あの丘の近くのあるとなり町との境界線部分の森ね！！！」
つぼみ「皆行きましょう！！！キュアアンジェの予言どうりなら光の戦士達は私達の味方のはずです！！！あの怪物たちに町が壊されてしまう前に！！！」
えりか「こうなったらやるしかないね・・・久々に大暴れしちゃうぞぉ～！！！！」
いつき「皆の笑顔を守る・・・キュアアンジェの意思をボク達が受け継ぐんだ」
ゆり「皆・・・すぐに行くわよ」
夕「バイクで来て正解だね～」
傑「ああ。」
琢磨「久々に走るとしますか！！」
大人「ああ。皆行ぞぉ！！！」
7人「おーーーーー！！！」
大人達はそれぞれバイクに乗り込んでティガ地へと大急ぎで向うのだったが3体の怪獣たちも申し合わせたかのようにティガの地へと向かうだった

プロローグ～夢～（後書き）

先ずはプロローグです♪
次回からもう一度つぼみ達はプリキュアに変身します。

次回のお楽しみに♪

第1話「蘇る巨人」（前書き）

前回までのあらすじ～

戦いを終えたつぼみ達はそれぞれ自分達の未来に向って歩き始めていたのだ。だがそれは異変の予兆でしかなかった・・・突如蘇る3体の怪獣。一行はキュアアンジェの警告に従いティガの地と呼ばれる場所にへと向かうのだった。

第1話「蘇る巨人」

つぼみ達はハートキャッチミラージュの映像を頼りに《ティガの地》へとたどり着いた・・・この森はよくお化けが出るなどの噂が流れていて地元の人間からも気味悪がられているのだった。
つぼみ「此処がティガの地」
大人「この何処かに光の戦士達が・・・」
ゆり「でも何処にあるというのかしら?肝心な場所まではミラージュに映し出されなかったし」
琢磨「この広い森を探すしか無いのか?」
傑「それしか無いんじゃないか?」
夕「早くしないとあの3匹が大暴れしてるんだから!!!」
大人「ああ。行こう!!」
大人、つぼみ、琢磨、えりか、傑、いつき、夕、ゆりの4班に分かれて森を探索する事にして森に散会する大人達。その間にもゴルザ、メルバ、ガルラの3体の怪獣は申し合わせたかのようにティガの地へと突き進んでいたのだった・・・・・

大人「やっぱり広い流石に地元の間じゃ不気味な噂が流れているからな」
つぼみ「そうですね・・・ちょっとしんどいです」
大人「大丈夫か?」
つぼみ「はい。何とか」
大人「ちょっと休憩するか?」
つぼみ「だ、大丈夫です!!!伊達にプリキュアしてませんから!!!」
大人「そうか。なら急ごう!!」
つぼみ「はい!!」

えりか「ホントにこんなとこがティガの地なのかな?」
琢磨「さぁ?でもミラージュが示した場所は此処だったから間違いないと思うけど・・・」
えりか「むぅ!!何でキュアアンジェももう少し分かり易くしてくれないかなぁ?~あぁ~もう!!」
琢磨「落ちつけっての。とにかく時間がないんだ早く探さないと」
えりか「だってぇ~」
駄々をこねるえりかに手を焼く琢磨。やはりえりかの性格は変わらなかった・・・取り合えず今は早くキュアアンジェの予言どうり戦士を復活させなくてはなわない・・・駄々をこねるえりかをしり目に琢磨は必死にティガの地を探す・・・・

いつき「傑さん~早く!!」
傑「い、いつき・・・体力あるね?・・・お、俺バテてきた(滝汗)」
いつき「もう~だらしないなぁ。ひょっとして戦いが終わった後鍛えてなかったんじゃないですか?」
傑「え?・・・バレた?」
いつき「バレバレです!!!」
傑「はい。日ごろの運動不足です。」
いつき「帰ったらボクが稽古付けてあげます。」
傑「それだけはやめてぇ!!!!」
流石にいつきは日ごろ鍛えているだけの事はあり傑の様にばてる事はなかったのだが傑は既にばてばてであった・・・平和ボケと言えば仕方がない・・・というかいつきの家庭環境が特殊だと思われるのだが・・・・

ゆり「光の戦士が封印されている・・・どういう形で封印されているのかしら?」
夕「え?でもミラージュじゃ此処にあるって・・・」

ゆり「考えてもみてよ。あの巨大な生物は私達では倒せないとキュアアンジェは言っていた・・つまり私達が探している光の戦士って言うのもは巨人であるのならあの巨大生物と同じくぐらいの大きさと考えるの自然じゃない？そうすると封印する場所もかなり大規模なものになるはず」
夕「あぁ！！そうか！！」
ゆり「巨人なんてこんな森で隠せるものなのかしら？」
夕「確かに～。う～ん分からないね」
ゆり「もしかしたらプリキュアパレスやこころの大樹のような特別な加護で守られているのかもしれないわ・・・今は頑張って捜しましょう！！！」
夕「うん！！！」
ゆりの鋭い推測に夕は驚きが隠せなかった。確かに彼女の理論は納得がいく部分が多い。いや恐らく殆ど当たっているかもしれない・・・だがその答えも探し出せば分かる・・・二人は時間がないと焦りながらも探し始めた・・・・

大人「・・・・！！（声が聞こえる・・・）」
《選ばれし者よ・・・私は此処だ・・・早く・・・》
つぼみ「はぁ、はぁ～中々見つかりませんねぇ・・・ちょっと休憩・・・ん!?大人さん?」
8人では探すには広い森を探索しながらも必死に探すのだが中々見つからない・・・森の吊り橋近くで大人とつぼみはいた。どこを探しても見つからないのだが大人には声が聞こえたのだ何かの呼ぶ声が・・・・大人はつぼみの呼びかけも耳に入っていないようで橋をわってあたりを見回す・・・あたりをよく見てみるとなんと黄金色に輝くピラミッドが出現したのだった・・・
大人「はっ！！！」
つぼみ「アレは?」
その頃の他のメンバーはと言うと・・・傑はばてばてになってい

た・・・
傑「はぁ、はぁ、はぁ・・・」
いつき「大丈夫?」
傑「なんとか・・・・はぁ、はぁ～」
えりか「いつき!!傑さん!!!」
いつき「えりか、琢磨さん!!どうだった?」
琢磨「いや・・・ホントに此処にあるのかな?」
ゆり「皆!!!」
いつき「ゆりさん!!!」
夕「どうだった皆?」
傑「ぜーんぜんダメだ・・・はぁ～」
ゆり「おかしいわね・・・」
えりか「え?」
夕「もしかしたら今の私達には見つからないかもしれないの」
えりか・琢磨・いつき・傑「「「「!?」」」」
ゆり「ええ。あくまでも推測だけど」
ゆりは自分の仮説を全員に説明した。光の戦士達が巨人であるのなら今まで他の人に見つかっていなかったのは不自然であるということだ。仮にプリキュアの特殊能力の加護があるという事なら話は別であるかもしれないがそれにしても過去にプリキュアであった自分達がコレだけ探してもに見つける事が出来ないのはおかしい
傑「成程・・・確かにゆりの推測が正しいのなら怪しすぎるな。」
琢磨「でもゴルザとかは出てきてるじゃないか?戦士だったいるかもしれないじゃんか!!!」
いつき「確かに。もしかしたら何かあるのかもしれない」
えりか「何かって?」
傑「そこまでは分からない・・・でも今は探してみるしかないな・・・」
6人は歩いていきながらも探索を再開しようとするのだが大人とつぼみがいる橋の下の所に行くと・・・

傑「あぁっ!!」
えりか・琢磨・いつき・ゆり・夕「「「「「!!?」」」」」
えりか「大人さん?・・・それにつぼみ!!!」
大人はピラミッドの方へと向かって走っていった。近くでつぼみの驚く声が響いたがそれに構わず大人はピラミッドに向かって走り出していくのだった。
琢磨「大人ぉ!?」
えりか「ちょ、ちょっと!!!」
夕「馬鹿ぁ!!!」
つぼみ「大人さん!!!」
つぼみも急いで後を追い他のメンバーも急いで彼の後を追うのだった。

その頃ゴルザとガルラは地底を突き進みメルバは翼で空を飛んでティガの地へと突き進んでいたのだった
ニュースキャスター「先程体長５０メートル以上の巨大生物が日本列島に上陸し北北東に進んでいます。またこの生物がモンゴルに現れた生物とナスカに出現した生物と同一ではないかと防衛庁は調査しています。また近隣の住人には避難するように呼び掛けています。」
３体の怪獣は着々とティガの地へと向かっていた・・・このままではつぼみ達が巨人たちを蘇らせる前に３体の怪獣たちが日本をめちゃくちゃにしてしまう・・・

その頃つぼみ達は・・・もとい大人はピラミッドの前まで来ていた・・・
つぼみ「はぁ、はぁ、はぁ・・・やっと追い付いた・・・」
えりか「おーい!!!」
つぼみ「あぁ!!えりか!!それに皆さんも!!!」
琢磨「大人は?」

つぼみ「あそこです！！！」
ゆり「大人！！！戻りなさい何があるか分からないわ！！」
傑「大人ぉーーー！！！」
だが大人はつぼみ達の説得には耳を傾けずにピラミッドを眺めていた・・・そして近づくと手がピラミッドのなかに入った・・・彼はその後なんの躊躇(ちゅうちょ)もなくピラミッドのなかに消えてしまうのだった・・・つぼみ達も急いでピラミッドの方に走る。近づくと凄い光を放っていて眩しい・・試しにつぼみが手を伸ばすを手が中には言った・・・・

つぼみ「す、凄いですぅ！！！」
いつき「中は空洞みたいだね・・・入ってみよう！！！」
えりか「うん・・・」
7人は恐る恐る入っていく・・・ピラミッドの中は真っ白で眩しく目をあけるのに少し慣れが必要な位であった・・・・
つぼみ「大人さん？・・・・」
つぼみは大人に呼び掛けるのだが反応がない・・大人は上を見ていた・・・それにつられて上を見てみるとそこには3体の巨人の石像があった。キュアアンジェの予言どおり石像は存在したのだった・・・大人は巨人の石像に近づき真中の石像の足先に触れた・・・いまだに信じられなかったがコレは紛れもない現実である・・・あとはこの戦士を蘇らせる事が出来れば・・・・問題はそこだけであった・・・・・・

その頃薫子は花咲家のテレビで怪獣たちの様子を伺っていたのだがどうやら後少しでゴルザ、メルバ、ガルラはティガの地にたどりつくとこまで着て来たのだった・・・
薫子「大変！！！早くしないと・・・・」
薫子は何とかしてキュアアンジェの立体映像(ホログラム)から戦士を蘇らせる方法を解き明かそうとしていたのだが中々進展しないのだった・・・・
つぼみ「あ、おばあちゃんから？・・・もしもし・・・えぇえ！！

！あの怪物たちがこっちに向かってるんですか！？」
大人「何っ！？」
薫子「急いで戻ってきて・・・自衛隊の殲滅部達がそっちに向かっているそうよ！！！」
つぼみ「分かりました！！！」
琢磨「でも折角みつけたのに・・・」
ゆり「やむを得ないわね・・・此処は撤退しましょう！！ゴルザ達がそこまで来ているそうよ」
大人「待ってくれ！！！巨人は？・・・巨人を蘇らせる方法は？」
つぼみ「おばあちゃんが頑張ってくれてるそうですけど・・・どうしても進展がないそうです・・・」
つぼみは大人に残念そうにそう言うのだった・・・大人はため息をついて巨人を見上げる・・・折角此処まで来たのに・・・ダメなのか・・・？・・・なんだ脳裏に何かが語りかけてくる・・・止めろぉ！！！止めろぉ！！！
大人「あぁあああぁあああぁーーーっ！！！！！！！」
夕「大人ぉ！！待ってよぉ！！！」
傑「オイぃ！！！」
大人は突然大声を上げながらその場から走り去ってしまった・・・
折角みつけたのに蘇らせる方法がないのならどうしようのないそんな絶望の中つぼみ達も大人を追いかけるのだった・・・・

そしてしばらくするとゴルザが最初にピラミッドの前に到着するのだった・・・
琢磨「近くで見るとおぞましいな・・・・」
ゴルザ「グルルルルゥ！！！！」
ゴルザは低いうなり声を上げると額のツノから光線を放っていきピラミッドに当てていく。するとピラミッドはみるみる砂が崩れる様に溶けていき石像が露わにされたのだったそしてそのそれに合わせるかに様にガルラとメルバも到着するのだった・・・そして3体

が石像を破壊しようと近づいたその時・・・
大人「やめろぉぉおおぉおおお！！！！！！！！！！」
大人は瞬速で自身が封印していた能力仮面ライダーカブトの力を解放するために瞬時にカブトゼクターを呼び出してそれをライダーベルトに収めていくとヒイロカネと呼ばれる鎧に包まれた仮面戦士仮面ライダーカブトに変身していく。次にカブトゼクーのツノを反対側に倒して鎧を拡散させる・・・カブトはシャープなスタイルであるライダーフォームへと変身する。そして最大の能力であるクロックアップと呼ばれる光速移動能力をを発動してゴルザとガルラにパンチを見舞わせて更にはメルバにカブトクナイガンで射撃していく・・・
琢磨「あのバカぁ！！！！変身！！」
傑「無茶しやがって！！！！変身！！！！」
夕「ホントにもぉ！！・・・変身！！！！」
琢磨達も急いで自分達の変身アイテムを召喚する。琢磨は青のクワガタ型のゼクターのガタックゼクターを傑は黒いカブトムシ型のダークカブトゼクターを、夕は白銀の蝶型のゼクターのバタフライゼクターを手に取っていくと琢磨と傑は大人と同じくライダーベルトに、夕は首に付けているブローチ型のアイテムライダーブローチにバタフライゼクターをセットしていくと3人はヒイロカネの鎧に包まれていき琢磨は仮面ライダーガタック、傑は仮面ライダーダークカブト、夕は仮面ライダーフェアリーにそれぞれ変身して大人のサポートに回る。
つぼみ「私達も変身しましょう！」
えりか・いつき・ゆり「うん！！！」
シプレ・コフレポプリ「「「プリキュアの種いくですぅ～～！！！」」」
つぼみ・えりか・いつき・ゆり「「「「プリキュア・オープンマイハート！！！！」」」」
つぼみ達4人は光り輝くワンピースのような姿になりピンク、青、黄色、藍色のそれぞれのプリキュアの種を妖精達に召喚させると変

身アイテムを取りだす。つぼみとえりかは香水の様な形をしたココロパヒュームをいつきはその色違いで黄色のシャイニーパヒュームをゆりはコンパクト型の変身アイテムであるココロポットにそれぞれのプリキュアの種をセットしていく。するとつぼみ、えりか、いつきは香水を身体に噴きかけていく事でピンク、青、黄色の光に身体が包まれゆりはココロポットの生み出した銀色の光のに身を預けると光に包まれて姿が見えなくなる。そして光がやむ頃には４人はつぼみ達の姿ではなくかつて砂漠の使徒との戦いで地球を守り抜いた伝説の戦士にへと姿を変えていた・・・その名は・・・

ブロッサム「大地に咲く一輪の花キュアブロッサム！！！」

マリン「海風に揺れる一輪の花キュアマリン！！！」

サンシャイン「陽の光浴びる一輪の花キュアサンシャイン！！！」

ムーンライト「月光に冴える一輪の花キュアムーンライト！！！」

ゴルザ「グルルルゥゥウッ！！！！ガァアァアアァアアアーーーーっ！！！」

メルバ「キシャァアァアアアアアアーーーッ！！！！！」

ガルラ「グォォォオォオオォオオオオォォ！！！！！！！」

ゴルザ達は突然の乱入者に困惑するのだが怯えることなくブロッサム達に向かっていった。此処でブロッサム達はゴルザとガルラをブロッサム、カブト、サンシャイン、ダークカブトが担当しメルバをガタック、マリン、ムーンライト、フェアリーが担当するという感じでグループ分けをしてそれぞれ石像守るべく奮闘するのだった

ブロッサム「はぁああぁああああーーーーっ！！！！！石像は破壊させません！！！」

カブト「絶対にアレは守り抜いてやる！！！！！」

ゴルザ「グオォォオオっ！！？・・・・グアアアアァアアァアアアアッ！！！！」

ブロッサム「くっ！！！硬い身体です・・・パンチもキックも手応えがありません。」

カブト「こうなれば・・・ハイパーキャストオフ！！！」
電子音「ＨＹＰＥＲ－ＣＡＳＴ－ＯＦＦ！！！ＣＨＡＮＧＥ　ＨＹＰＥＲ－ＥＥＴＬＥ！！！」
ハイパーカブト「うぉぉおぉおおおぉおおっ！！！！！！！！！！」
カブトはハイパーゼクターを使ってハイパーフォームに変身するとそのままパーフェクトゼクターを構えて一気にゴルザを一刀両断してやろうと振り翳すのだが・・・
ゴルザ「グォォォオオ！！！！ガァアアアァアアアアッ！！！！！」
ハイパーカブト「なっ！！？・・・うわぁあああぁあああああぁああっ！！！！！！」
ブロッサム「カブトぉぉぉおおっ！！！！」
カブトはゴルザの額からのビームを直接受けてしまい爆発と共に森の奥へと飛ばされてしまった・・・
ブロッサム「許しません・・・私、私・・堪忍袋の緒が切れましたぁあ！！！」
ブロッサムはゴルザにフルパワーラッシュを行っていくのだがゴルザの硬い皮膚には自分のパンチやキックは全然歯がたたなかった・・・
サンシャイン「はぁああっ！！！！」
ダークカブト「うぉぉおおおっ！！！！」
ガルラ「！？？ガァアアッ！！！！！」
サンシャイン「サンフラワーイージス！！！」
ガルラとサンシャイン・ダークカブトペアの戦いも激しさを増していた・・・ガルラの火の球をサンシャインが石像に当たらないように石像にバリアを張りながら更にサンフラワーイージスを発動させると言う瞬速の技サバキを見せるのだがガルラは火炎弾を連続で乱射してきた・・・・このままでは砕けてしまう・・・・
ダークカブト「いい加減にしろぉ！！！クナイガン・アックスモード！！！！」

ダークカブトがガルラの足元を斬り裂こうとするのだが装甲は硬くクナイガンの刃が欠けてしまった・・・
ダークカブト「何っ!?・・・・!?・・・うわぁあああぁあっ!!!!!!!」
ダークカブトの怯んだすきを逃さずガルラはダークカブトを尻尾のテイル攻撃で吹っ飛ばすと追い打ちに火炎弾を打ち込んでいく
サンシャイン「はっ!!!ダークカブトォオオ!!!!!!」
爆炎がやむ頃にはダークカブトの姿はなかった・・・どうやら森の奥深くに飛ばされてしまったらしい・・・
サンシャイン「よくもダークカブトを・・・許さない!!!!」
サンシャインはサンフラワーイージスを解くとそのままガルラに突進していく・・・

ガタック「くっ!!素早い・・・追いつけねぇ～!!!」
ムーンライト「あの巨体でなんてスピードなの?」
マリン「くっ!!!!」
フェアリー「早すぎで照準が合わない・・・コレじゃうかつに攻撃できないじゃないの!!!」
メルバのスピードにムーンライトとマリン更にガタックのガタックエクステンダーのキャストオフ形態が追い付こうと必死になるが中々追い付けない・・・それどころか自分達が翻弄されることとなった・・・
ガタック「くっ!!こうなればクロックアップ!!!!」
電子音「ＣＬＯＣＫ―ＵＰ!!!」
ガタックはこのままではラチが空かないとクロックアップで一気に追い付きメルバの首にガタックダブルカリバーを突き刺していくのだがコレは危険な行動であった・・・当然怒ったメルバはガタックを振り払うように首を動かしてガタックを無理やり身体から振り落としていくとガタックはまっさかさまに下に落ちていく・・・そして更に追い打ちを変えける様にガタックに向けてビームを放つ!

！！！

ガタック「うわぁあああぁあああああああああっ！！！！！！！！！！！！」

マリン「ガタックぅぅうううう！！！！！！！！」

ガタックはそのまま森へと落ちていくと姿が見えなくなってしまう・・ムーンライト、マリン、フェアリーの3人は怒りを隠せなかった・・・特にマリンは・・・・

マリン「アンタ・・・よくもガタックを！！！！絶対に許さない！！！海より広いアタシの心も此処らが我慢の限界よ！！！！」

マリンは決め台詞を言うとそのままメルバに突進していく！！！絶対にガタックの仇はこの手で取ると誓うかのように・・・・・

大人「（ぐぅぅ・・・身体が動かない・・・・俺・・・此処で死ぬのか？・・・・こんな所で・・・・・）」

《ヒ・・・ロ・・・ト・・・》

大人「（誰だ？俺を呼んでるのは）」

《テ・・ィ・・・ガ》

大人「（ティガ？・・・それは地名じゃ？）」

《チカラガホシイカ？》

大人「（力だって・・・ほしいさ・・・今よりもっと強い力が！！！）」

《ナラバワガナヲサケベ》

大人「（お前の名前を？）」

《サスレバチカラガテニハイル》

大人「（分かったよ・・・叫べばいいのだろ？・・・お前の名前を・・・お前の名前は・・・ティガ！！！！！）」

大人はその瞬間白い光に包まれていった。正体不明の光となって・・・

傑「がぁあっ！！？？傷が深い・・・流石にお手上げか・・・・」

《アキラメルナ》
傑「え？」
《ワレガお前にチカラヲカソウ・・・》
傑「力だって？」
《オマエガタダシクツカエバセカイモスクエル》
傑「・・・いいぜ！！どうせこのまま死んでしまう・・・だったらお前の力を俺にくれぇ！！！」
《イイダロウ…ワガナヲサケベ・・・・サスレバワレノチカラガテニハイル》
傑「お前の名前？・・・・」
《ソウワガナハ》
傑「お前の名前は・・・デュナミス！！！！」
傑は声の主の名を叫んだ瞬間に青い光に包まれていった・・・・

琢磨「このまま・・・俺は消えるのか？・・・・」
《キエテクナイカ？》
琢磨「！？・・・誰だ！？」
《トイニコタエヨ・・・キエタクナイカ？》
琢磨「当り前だ！！俺にはまだやりたい事が沢山あるんだ！！！・・・今消えるわけにはいかない・・・」
《ソノココロイキ・・・キニイッタ・・・ワレノナヲサケベ・・・サスレバオマエハキエルコトハナイ・・・》
琢磨「お前の名前？・・・お前の名前は・・・・・」
《ワガナハ・・・・》
琢磨「アース！！！！」
琢磨は赤い光に包まれていった・・・

ブロッサム「プリキュア・ピンクフォルテウェイブ！！！」
マリン「プリキュア・ブルーフォルテウェイブ！！！！」
サンシャイン「プリキュア・ゴールドフォルテバースト！！！」

ムーンライト「プリキュア・シルバーフォルテウェイブ！！！」
フェアリー「ライダーバースト！！！」
５人の渾身の必殺技が炸裂していきあたりに爆炎が漂っていくのだがゴルザ達は無傷でありダメージの一つすらないように思えた・・・
ブロッサム「そんな・・・・」
マリン「アタシ達の攻撃が効かない？」
サンシャイン「どうすれば！！！」
ムーンライト「くっ！！！！」
フェアリー「このままじゃ石像が！！！」
ゴルザ「ガァアアアアアッ！！！！」
メルバ「キシャァアアー！！！！！」
ガルラ「グゥゥゥウウウォゥウウウウッ！！！」
５人「うわぁあああああぁあああああっ！！！！！！！！！！！！！」
ゴルザ達は今度は自分達の番だとばかりにビームと火炎弾をブロッサム達に見舞わせていくとブロッサム達はふっ飛ばされて変身か強制解除されてしまった・・・そしてサンシャインが張っていたシールドが粉々に砕かれてゴルザ達は３体の石像に手を添えていき石像は倒されてしまう。まだ破壊はされていないが完全に絶望的な状況だった・・・そしてゴルザは真中の石像をメルバは右の石像をそしてガルラは左の石像にそれぞれ近づいていった・・・・
つぼみ「あぁあっ・・・だめぇえええええええええっ！！！！！！！！」
つぼみの悲痛な叫びが森に響き渡る。その瞬間に白、赤、青の光が石像の額に吸収されていった・・・ゴルザ達は一瞬何だとあたりを見回したがないもなかった・・・・改めて石像の方に向き直りそのまま踏みつぶそうと足が下ろされていく・・・だがなんとそれに合わせて石像の腕が動きゴルザ達の足を受け止めた・・・
ゴルザ達は首をかしげる・・・そしてよく見ると石像の胸のランプの部分が青く輝いていた・・・・
大人・琢磨・傑が融合した石像達「「チャァアアアッ！！！！」

」」

そして次の瞬間巨人が石像ではなくなり動き出しのだ!!!ゴルザ達は脚を上げられてバランスを崩して倒れてしまう・・・・

つぼみ「巨人です!!!巨人が蘇りました!!!」

いつき「でも何で?」

つぼみは興奮した様子でそう言う・・・いつきは理由が分からずに混乱してしまうのだったが頼もしいと言わんばかりの目で3人の巨人の見ていくのだった。

石像が破壊される危機一発の瞬間大人・琢磨・傑は光となって巨人と融合した。巨人は3人の生命を得る頃で長き眠りから目覚めたのであった!!!

第1話「蘇る巨人」（後書き）

今回は石像が蘇る所までです～。さて次回はティガ及びオリジナルウルトラマンの能力を紹介します。

次回は期末テストがあるのでしばらくお休みします～

次回もお楽しみに♪

第2話「3人の名前」（前書き）

前回までのあらずし～

ティガの地へと向かった大人達は光のピラミッドの中にいた3体の巨人の石像を発見する。時同じくしてゴルザ、メルバ、ガルラの3怪獣も日本に上陸してきたのだった。

一行はライダーとプリキュアに変身して石像を守ろうとするが大人、琢磨、傑はゴルザ達の攻撃を受けて瀕死の重傷を負う・・・ブロッサム達は彼らの為に必死になった戦うが変身を強制解除されてしまい絶体絶命に陥るが3つの光が石像に転移し巨人は蘇ったのだった！！！！

第2話「3人の名前」

赤と紫の巨人「チャア！！！」
赤い巨人「ジュワ！！！」
青い巨人「シュワ！！！」
ゴルザ「ガァアアオオオオーーーーーーッ！！！」
メルバ「キシャァアアァアアアーーーーッ！！！」
ガルラ「グアアァオォオオオォオウウウッ！！！！」
3人の巨人は右腕を天に突き出して左手を顔の隣に置くという独自の構えを行って起き上がると構えを取って3体の怪獣に近づいていく・・・そしてゴルザは赤と紫のに体色に銀色のラインと金色と銀色のプロテクターを胸につけている巨人にガルラは赤と銀色の体色をした巨人にメルバは青と銀色の体色をした巨人に向かっていく。
3人の巨人もそれに合わせてそれぞれの相手に向かっていく。

ゴルザ「ガァアアッ！！！・・・グォォオオオォオオッ！！」
赤と紫の巨人「チャァアッ！！・・ハァアッ！！！」
赤と紫の体色の巨人は細身の体格ではあるがスピードと力のバランスは取れているような印象だ。彼はすぐにゴルザの首にチョップを二発放ち更に掴みかかってひざ蹴りそしてそのまま首を掴んでヘッドロックを仕掛けるという技サバキでゴルザを攻めていく。だがゴルザはそれを持ち前の腕力を使い力任せにヘッドロックを解くと離れていきビームを打とうとツノにエネルギーを溜めていく。しかし巨人がそれをさせまいとゴルザの顔に掴みかかり組み合うが力ではゴルザが勝っていて巨人が振り回されることとなった。
ゴルザ「グォォオオオォアアアア！！！！グルルルル」
赤と紫の巨人「グゥウゥ！！！？・・・ジュワァア！！？」
とうとう巨人はゴルザに力負けしてゴルザの拳を受けてふっ飛ばされる。更にゴルザは追撃のビームを放つが巨人は側転をして身軽な

動きで避ける・・・だがゴルザは彼が体勢を立て直す前に体当たりで彼を思いっきり吹き飛ばしたのだった。ゴルザは《どうだ?このやろー》とでも言わんばかりに彼に向って咆哮をあげる・・・彼はゴルザの動きを観察するように一度見つめると
赤と紫の巨人「ンンンンーーーーッ!!!・・・ジュワァアッ!!!」
彼の額が赤く光った。次に両腕を額のクロスさせるように添えて両腕を振り下ろすと色が赤と紫から赤一色に代わった。すると見かけもがっちりとした筋肉質になり華奢だった身体は瞬時にパワーファイターへと変化したのだった。
ゴルザ「ガァアアッ!!」
ゴルザは《それがどうした!!!》と言う様にビームを放つが巨人はそれを片手でガードする。よく見ると半円銃の光の壁が彼を守っていた。
赤一色となった巨人「ハッ!!!!」
ゴルザ「グガァアアアアアア!!!!」
ならば接近戦で勝負だとゴルザは巨人に近づくがそれと同時に肘を突き出してゴルザのボディに命中させるそして更にゴルザに自分の腕を背中に回して逃げられなくするとゴルザの背中で組んだ腕に力を込める
ゴルザ「ギギガァアアアアアア!!!!!!!??????」
赤一色となった巨人「ウウウンンン!!!!・・・チャァアアアアアアーーーーツ!!!!!!!!」
ゴルザは背中に激痛が走り堪らず彼から離れるが彼は逃がさすにゴルザの上半身を掴むとそのまま頭から地面に叩きつけてやる。
赤い巨人「デュワ!!!」
赤い巨人は体格はガッチリしていて見かけはパワーファイターとでも言える。向ってきたガルラにパンチを重たい見舞わせて怯ませるとそのまま頭を抱えてバックドロップで投げ飛ばす

ガルラ「ガァアアアオォオ！！！！」
近距離では不利だと察したガルラは赤い巨人に向かって火炎弾を放つ。だが赤い巨人はそれを受け止めるとそれをガルラに跳ね返していきガルラに逆にダメージを与えてやる。
ガルラ「ガァアアァアッ！！！！！」
だがガルラもいつまでもやられっ放しではないと長い尻尾で赤い巨人を転ばせると馬乗りになるように上に覆いかぶさりそのまま零距離から火炎弾を放つ。流石に彼もコレには彼もダメージは避けられなかった。
赤い巨人「ヂュゥゥワァアア！！？？・・・デヤァアアッ！！！」
だがダメージを受けながらも何とかガルラの顔にパンチを見舞わせて押し倒すとそのまま尻尾を掴んで投げ飛ばす。
赤い巨人「ハァッ・・・ンンンーーー！！！！ハァアッ！！」
そして彼は一度手を胸の前でクロスさせると・・・腕に炎が宿る。
彼はどうやら炎を使いの戦士の様である。
ガルラ「ガルルゥゥウウゥゥウ！！！ガァアアアアアアッ！！！！」
ガルラは怒りに任せて赤い巨人に体当たりを放つが赤い巨人は炎が宿ったその上でガルラにパンチを放ち怯んだすきにかかと落としをガルラの頭に放つ。
青い巨人「シュワァ！！！！」
メルバ「キシャァァーーー！！！！」
青い巨人の体格は赤と紫の巨人と同じく細身の体であった。メルバと組み合うがメルバの方が腕力が強い様で青い巨人は押し倒されそうになるが身体を青く発光させてメルバをふっ飛ばす。更に彼は腕に青い光を集めるとメルバに放つ。
メルバ「ギシャァアアアァウウ！！！！」
メルバは不利と判断して空に飛び立ち青い巨人を翻弄しようとするが青い巨人もすぐに空へと飛びメルバを追う

一方ゴルザと戦ってきた巨人はゴルザを格闘戦で圧倒してトドメを放とうと近づくのだったが空に飛んでいたメルバが彼に向かってビームを放つ・・

赤一色になった巨人「グァァアッ！！！？」

するとその隙にゴルザは地面に穴を掘り逃げようとしていた巨人は追いかけようと近づくがメルバがさせまいとまたビームを放つ。そしてしばらくすると胸の青いランプが赤く光って点滅を始めたのだランプ音「ピコン、ピコン、ピコン」

赤一色となった巨人「！！・・・ジュっ！！」

メルバは青い巨人の追撃を避けながらも今度は赤い巨人にも攻撃を放っていく。

赤い巨人「ジュワァ！！！・・・グゥッ！？・・・ハァアッ！！！」

赤い巨人は紅い光弾をメルバに放つがメルバはそれを避けて空を飛びまわる・・・するとその隙にガルラにも逃げられてしまうのだった・・・

赤い巨人「ヂュゥ！！！！・・・！！」

ランプ音「ピコン、ピコン、ピコン」

そして今度は赤い巨人の胸のランプが点滅を始めていく・・・・二人とも何やら焦っているようにも見えてる・・・そんな彼らにメルバは一匹となったが果敢に向ってくる・。すると赤一色となった巨人の額が今度は青く輝くと・・・

赤一色となった巨人「ンンンーーー！！！・・・デヤァア！！」

今度は赤一色から紫一色となり身体も赤と紫の時の様にシャープとなった。そして素早く飛びあがると飛び蹴りをメルバに見舞わせてやるとメルバはそのまま地面に落下していった。それと同時に青い巨人も地面に降り立ち3人がメルバに向かって構えを見せる。

メルバ「キシャァアァアーーー！！！！！！！！」

紫一色の巨人は両腕を水平に広げて光を集めていくと腕をそのまま上に上げて素早く左手を腰に当てその上に右手を添えると言う手裏

剣を投げるようなポーズを取るとそのまま右腕を素早くメルバに向けていくと光の矢の様なモノがメルバに放たれる。
赤い巨人は両腕を交差させると紅い光が集まり左腕が上に右手が下になるようなポーズを取りそのままを右腕を縦に左手をその上に横にクロスさせていくと赤い光線がメルバに向けて放たれていく。
青い巨人も腕を前方に交差させるまでは同じだが右手を上に左手を下になるようなポーズを取ると青い光が集まる。その後左手を縦に右手をその上に横にクロスさせて青い光線を放っていく。
紫一色となった巨人「ウーーーン！！！！！チャァアッ！！！！」
紅い巨人「ウーーーン！！！・・・ジュッワァアアアッ！！！！」
青い巨人「ハッ！！・・・ハァアアァアアアッ！！！！」
メルバ「！！？・・・ギシャァアアアッ！！！！？？」
3人の巨人の攻撃を受けるとメルバはまるでガラス細工が壊されるように粉々に砕け散った。そして巨人たちはポーズを崩すと同時にランプの音と点滅も早くなっていき3人は空を見上げる。
3巨人「ヂュワァアアア！！！」
ものすごいスピードで空に飛び立つ3人。そしてそのまま何処かへと消えていったのだった。

つぼみ・えりか・いつき・ゆり・夕「「「「「・・・・・・・・・」」」」」
つぼみ達はその光景を呆然と眺めていた。彼らの力はプリキュアを超えていて凄まじいものだ。キュアアンジェが彼らを蘇らせろと言ったのも、彼ら巨人の石像を簡単にみつけられないようにしたのも納得ができた。だがつぼみ達は喜ぶ気にはなれなかったのだ・・・何故ならカブト達がゴルザ達に殺されたのだから・・・
つぼみ「カブト・・・・」
えりか「仇は取れたけど・・・3人は・・・・」
いつき「くっ！！」
ゆり「・・・・・・」

夕「・・・！！皆何か聞こえない？・・・ほらぁ！！」
つぼみ・えりか・いつき・ゆり「「「「！！！！」」」」
夕の言葉に全員が耳を澄ませてみた・・すると自分達を呼び掛けている声だ・・・この声に全員が振り返るとそこには走って来る影があった。その正体につぼみ達は歓喜余って涙が出てきた。
大人・琢磨・傑「「「おーーーーい！！！！！！！」」」
その正体は大人、琢磨、傑であった。なんと3人は生きていたのだ。
つぼみ達は急いで彼らの元に走っていく。
つぼみ「《おーーーい》じゃありませんよ！！心配させてホントにもう！！！」
いつき「でもよかった無事で」
夕「バカ3人組！！！」
つぼみと夕は大人を叩いていきえりかは琢磨をポカポカと拳で叩きいつきは傑に涙で濡らした顔を見せる。４人はそれだけ大人達を心配していたと言う気持ちの表れであった。
えりか「ばか！ばか！！ばかぁ！！！アタシ達の涙を返せぇ！！！」
大人「つぼみ！！夕・・ちょ、痛いって（汗）」
琢磨「ごめん、ごめん（汗）悪かったって！！」
傑「心配かけてゴメン！！！」
ゆり「ホントに心配したのよ！！一体何があったの？」
大人「俺はビームが当たる寸前でクロックアップしたんだけど・・・衝撃で飛ばされて。そのまま気絶してるみたいで」
琢磨「俺は森に落ちた時木がクッションになって助かった」
傑「俺も琢磨と同じだよ。木のお陰で助かったんだ」
ゆり「全く～運がいいんだから！！！じゃ帰りましょう！！」
夕「うん！！この後心配かけた3人にケーキでも奢ってもらうか？」
つぼみ・えりか「おおお！！いいですねそれ！！」
大人・琢磨・傑「「「いいわけないだろ！！！」」」
いつき「何言ってるんですか！！3人は働いてないでしょう？」

大人「うっ・・・確かに（汗）」
夕「というわけで奢ってもらうよ？」
大人・琢磨・傑「「「いやぁああーーー！！！お金がぁ～！！！」」」
8人はそんな風にふざけ合いながら植物園へとバイクで帰還するのだった。
そしてその夜には大人達3人の僅かな現金でケーキパーティーをして盛り上がっていった・・・全員が解散してそれぞれの家に帰る。

誰もいない植物園の一室にハートキャッチミラージュがあった。何か音が聞こえる・・・しばらくすると輝きを放っていきキュアアンジェの立体映像（ホログラム）が現れた。
キュアアンジェ「巨人を蘇らせる方法はただ一つ。ヒロト、タクマ、スグルの3人が光となる事です。その巨人たちの名は・・・・ウルトラマンティガ、ウルトラマンアース、ウルトラマンデュナミス」

同じころそれぞれ自分の家に帰宅していた大人、琢磨、傑の3人はその声が聞こえていた。
大人「ウルトラマン・・・ティガ？」
大人はそう繰り返した・・・自分が選ばれた？だから助かったのか・・・！？・・・胸に何か入ってる？
大人はそう思ってジャケットの胸ポケットを見てみるとそこには夢で出てきたIの字アイテム《スパークレンス》が出てきた・・・赤と紫の巨人のプロテクターと同じ金色のレリーフが入ったソレを大人はただ見つめていた・・・・

琢磨「ウルトラマン・・・アース？」
あの声の主の名前・・・じゃあ俺を助けたのもそいつか？・・・・・！？・・・何か入ってる？
琢磨も同じころ何処からか聞こえた声に困惑していた・・・あの時

俺は重傷を負ったのに何もなっていなかったかのように身体がピンピンしている・・・そして上着を見てみるとそこには紅い変身アイテム《アーススパークレンス》が入っていた・・・真中のクリスタルの様なモノが赤く光り火を宿しているかのようだ

傑「ウルトラマン・・・デュナミス・・・」

俺が助かったのはそのせいか・・・あの時の声もそいつの声・・・!?・・・何だ?

傑も3人と全く同じころに聞こえた声に自分が助かった理由が理解できた気がした・・・そして不意に上着を見てみるとそこには蒼い変身アイテムの《デュナミススパークレンス》が出てきた・・・青いクリスタルのようなそれは水の様に透き通っていた・・・

3人はそれぞれに与えらた力がどんなものかまだ分からなかった。そしてこの時真の敵が動き出していた事も・・・3人の超人(ウルトラマン)と新しい敵との戦いはまだ始まったばかりである。光の戦士プリキュアと超人(ウルトラマン)はこれから起こる異変をどう乗り切るのか・・・それはまた次の話で語られることとなるだろう・・・・

第2話「3人の名前」（後書き）

ゴルザとガルラを逃がした理由は後々分かります。メルバには原作どうりにやられて頂きました。

さて次回は大人達に託された秘密を語ろうと思います。

次回もお楽しみに♪

第3話「受け継がれる力」（前書き）

前回までのあらすじ～

３つの光と共に巨人たちは蘇りゴルザとガルラは逃がしてしまうがメルバは見事に撃退した。そして巨人の力は大人、琢磨、傑の３人に光は受け継がれたのだった。その名はティガ、アース、デュナミス。

第3話「受け継がれる力」

日曜日の昼下がりに大人達は植物園に集まっていた。というのも先日現れたゴルザ達の事や蘇った巨人の事を整理するためだった。巨人たちは何故蘇ったのかそれが今回の一番の議題だった。全員の推測を並べても答えが中々出ないのだった。シプレ達はそんな彼女達をしり目にキュアフルミックスで食事を取っていた。

シプレ・コフレ・ポプリ「「チューチューチューチュー」」

コッペ「・・・・・」

ゆり「分からないわね。どうして巨人は蘇ったのか」

つぼみ「光が3本巨人たちに宿ったのが見えたんですがね。あの光は一体何だったんでしょう?」

いつき「分からない。キュアアンジェのメッセージも巨人を蘇らせる方法の所で途切れていたし。」

えりか「でも何であんな事したんだろ?蘇らせる方法が分からないとアタシ達の力にならないじゃん?蘇らせろって言ってるのにさぁ～」

夕「それは巨人の力を悪用させない為じゃないかな?実際にあの巨人たちのパワーは凄まじいものだったし。砂漠の使徒とかに悪用される事を恐れた故の措置かもしれない。」

ゆり「いずれにしてもあの巨人たちが私達の味方であると言う事はゴルザ達を退けてメルバを撃退してくれた事から証明されたわ。」

大人・琢磨・傑「「「・・・・・」」」

つぼみ「どうしたんですか?3人とも」

大人「え?・・・あ、ああ何でもないよ」

琢磨「ああ。別に何でも」

傑「・・・うん」

えりか「あ～そうか3人は森に飛ばされちゃったから実感わかないんですね?だったらいいのがありますよぉ!!」

つぼみ「巨人たちの容姿が分かるＶＴＲを作ったんです。専用の部屋があるのでそこに行きましょう」
大人・琢磨・傑「「「！？」」」
するとつぼみは何やら大人達を植物園のゲストに花の資料を見せるときに使う視聴覚室のような部屋へと案内する。どうやらこっそりと携帯電話のカメラ機能で巨人たちが戦っていた映像をしっかりと録画していたようだ。そしてそれを上手くＤＶＤに焼いて大人達にも見れるようにしてくれたらしい。部屋の機械にＤＶＤを挿入していくと大画面映像が流れ始めたのだった。ある程度巨人たちの戦いの様子を見ていき巨人たちがゴルザとガルラを追い詰めた所でメルバの援護で巨人たちのランプが点滅するところでゆりが映像を止めさせると何やら確信を抱いた口調で自分の推測を語り始めた。
ゆり「胸のランプが赤く点滅し始めてから巨人たちがメルバを倒すまでほんの数十秒間・・・私が思うにあの巨人たちは決められた時間でしか活動できないじゃないかしら？」
大人「何でそう思うんだ？」
琢磨「ああ。言いきれる根拠は？」
ゆり「えりか。ランプが点滅し始める所まで戻して。」
えりか「はいはい！！」
ゆりの指示でえりかは映像をランプが点滅する前の所まで戻す。
ゆり「ゴルザとガルラが逃げたのに巨人は追わなかった・・・・いえ追えなかったのよ。だからこそ巨人たちはメルバを倒すことに集中し始めた・・・あともう一つ気になる事があるわ。えりか紫と赤の巨人が色が変わるところに切り替えて。」
えりか「はい♪ちょっと待ってくださいね～」
ゆりは更に自分の推測を他のメンバーにも分かるようにえりかに指示を出す。そして紫と赤の巨人の色が変化する前の部分の映像を出させる。
ゆり「ゴルザと戦っていた巨人の身体のストライプは最初はレッドとパープルの二色だった・・・でもストライプがレッド一色になる

と筋肉質の体系になった。いわばこのタイプではパワーファイターのように凄まじい力を発揮できるのよ。」
大人「だったら最初からレッドで戦えばいいのに」
傑「確かに言えてるな。わざわざ敵に有利なる様な事はする必要ない気がする」
大人と傑はそう言っていくがゆりはその二人の質問に答える様な顔になるとえりかの方を向く。
ゆり「私も最初はそう思ったわ。えりか次はパープル一色に変わる場面を出して。」
えりか「ほい～♪」
今度は赤一色になった巨人が紫一色になった映像を見せる。そしてまた自分の推測をゆりは続けて話していく。
ゆり「パープル一色になった時は動作が機敏なるみたいなの。つまりレッド一色だとパワーが高くなった分スピードが遅くなっていると考えられるわ。そしてその反対にパープル一色の場合はスピードが格段に速くなるけどその分パワーが落ちるという理屈が成り立つ。つまり敵に与えるダメージが大きいのはレッドの方なのよ。でもメルバの様な身軽な怪獣はパープルでも倒せる」
大人「そうか敵の特徴に合わせてあの巨人は自分の身体をコントロールする事が出来るんだ!!」
大人は納得が出来た。あの時の記憶はあまりなく覚えている部分も薄っすらとしか記憶にないのだ。だがゆりの仮説を聞いて納得できた。自分が持つ力の事を。複雑な心境ではあったがどういう形にしろ力を力を理解する事はたいせつであるからだ。
ゆり「ええ。えりか次は赤の巨人と青の巨人の映像を。」
えりか「はぁ～い」
今度は赤の巨人と青の巨人の解説を始めるゆり。琢磨と傑はその映像に釘付けとなっていた。
琢磨・傑「「・・・・」」
ゆり「さっきの赤と紫の巨人で例えるなら赤い巨人はパワーファイ

ターで青い巨人はスピードファイター。赤と紫の巨人のように力を使い分けるよ言う事は出来ないみたい。」
琢磨「へぇ～。あ、赤い巨人は炎を使ってる」
傑「青い巨人は・・・光線を出した。」
ゆり「ええ、青い巨人も赤い巨人のように自然的な何かの特殊な力があるのかもしれないけど今の所は分からないけわ。じゃ話を戻して何で巨人が蘇ったのかだけど」
ゆりはハートキャッチミラージュにあの銀色の種をセットするとキュアアンジェの映像を出す。
キュアアンジェ「後世のプリキュア達よ!!巨人を蘇らせて再び協力してゴルザ、メルバ、ガルラを倒すのです!!・・・」
ゆり「薫子さんがあの後も何度も試しているみたいなんだけど相変わらずノイズの部分は修正できないみたいなのよ」
キュアアンジェ「巨人を蘇らせる方法はただ一つ・・・ヒロト、タクマ、スグルの3人が光となる事です」
大人・琢磨・傑「「「!!!!!」」」
つぼみ「やっぱり肝心な所は聞き取れませんね」
えりか「うん。これじゃメッセージの意味がないよねぇ～」
いつき「確かに。」
ゆり「本当ね。でも夕の言ってる事にも一理あるから一丸には悪いとは言えないけど」
夕「結果的に巨人は蘇ったしね」
い、今確かに聞こえた・・・自分達が光になる事が蘇らせる方法だと・・・だがつぼみ達には聞こえていないらしい。どういう事なんだ?俺達は気でも狂ったのか!?そんな事をさえも頭によぎる3人はキュアアンジェの立体映像(ホログラム)を見つめていく。すると彼女の立体(ホログラム)理像は同じ事を繰り返していく。今度は3人に語りかける様に。
キュアアンジェ「巨人を蘇らせる方法はただ一つ・・・ヒロト、タクマ、スグルの3人が光となる事です」
大人・琢磨・傑「「「光と・・・なること・・・・」」」

つぼみ達はスッキリしない顔になりながらそう言うが大人達は逆に困惑した顔をしながら思わずキュアアンジェのセリフを口走ってしまった。するとえりかが問いかける様に大人達の方を向く。

えりか「ナルト？」

大人「え！？」

琢磨「あ、いや・・・」

つぼみ「あ、そう言えばそろそろお昼ですね～ラーメン食べたいんですか？」

傑「あ・・うん。」

えりか「だったらちょっと待っててくださいね～私達が作ってきますから」

大人「え？・・あ、でも作るって言っても」

いつき「実はボクの家に自家製のラーメンの麺があるんですよ。丁度良かった♪すぐに持って来ますよ！！」

つぼみ「なら私は材料を買いにスーパーに行きましょうか！！」

えりか「あ、ならアタシはつぼみと一緒に行くよ」

ゆり「なら私はお椀とかを持ってくるわ」

夕「ゆりのだけじゃ足りないからアタシも家からもってくるよ。大人達は留守番してて。すぐに支度を済ませて料理するから」

大人「え、ああ～じゃあお願いするよ」

何やら色々誤解が生じて残されたのは大人、琢磨、傑の3人だけとなってしまった。大人達はすぐに立体映像（ホログラム）の方を向くと。ホログラムが喋り出した。

キュアアンジェ「ヒロト、タクマ、スグル・・・またの名をウルトラマンティガ、ウルトラマンアース、ウルトラマンデュナミス」

大人「貴女は立体映像（ホログラム）じゃないんですか？」

キュアアンジェ「この姿は立体映像（ホログラム）よ。でも貴方達に話しかけている私は当時のキュアアンジェの分身。つまり心があるの。だから貴方達と会話が出来るのよ」

琢磨「それもプリキュアの力なのか？」

キュアアンジェ「いいえ。プリキュアだけの力ではないわ。こころの大樹の力と光の戦士達の力の結晶」
傑「じゃあ質問を変える。なんで俺に・・いや俺達に貴女の声が聞こえるんだ?」
キュアアンジェ「貴方達が超人(ウルトラマン)だから」
大人「!!・・・違う!!俺は・・・俺達は俺達だ。超人(ウルトラマン)なんかじゃない!!!」
大人はすぐに否定した。俺が・・・超人(ウルトラマン)だって?カブトの次は今度は超人(ウルトラマン)に目覚めたと言うのか?・・・そんな事認めたくない。カブトの力はまだ人間として認められる。プリキュアだってそうだ。だけど超人(ウルトラマン)は別だ・・・次元が違いすぎるじゃないか・・・ゴルザ、メルバ、ガルラと力の意味では違いはない。これ以上自分に特殊能力なんていらないと思ったからこその思いが大人からこぼれたのだ。
キュアアンジェは大人に意味有り気な瞳で見つめていく。
キュアアンジェ「貴方達3人の身体にはかつて私と共に戦った光の戦士達の遺伝子が受け継がれているのよ」
大人「何なんだそれは?」
キュアアンジェ「貴方達が持っているスパークレンスこそ貴方達が超人(ウルトラマン)という戦士に選ばれた証」
大人・琢磨・傑「「「!!!!」」」
3人はすぐに持ってきているスパークレンスを取りだした。大人はそれを見るなり手が震えていた・・そして・・・
大人「こんな物ぉ!!!」
琢磨・傑「「!!??」
大人「大体アンタが砂漠王のデューンを完全に倒せなかったから3年前につぼみが・・つぼみだけじゃない。ゆりも、えりかも、いつきも薫子さんだって苦しむ事になったんじゃないか!!!。自分達の尻拭い彼女達にさせておいて今度は巨人と協力して邪神を倒せだって?・・・いい加減にしてくれよ?またつぼみ達が傷つくのかよ・・・ふざけるのも大概にしろぉ!!!」

大人は自分のスパークレンスを勢いよく床に投げ捨てた。そしてキュアアンジェを睨みつけると今の自分の思いをぶちまけるかのように次々と思った事を口にする。興奮しているようで口調も普段と比べるとかなり荒くなっていた。あの時の戦いは犠牲が多かった。特にネイティブ殲滅作戦の時は自分達にカブトの力をくれた安西の犠牲になった事が一番の傷だった。その事が今でも彼の心の中に暗いモノを生み出しているのだ。それを察したかのように大人を見ると静かに口を開いた。

キュアアンジェ「・・・確かに私の力不足で砂漠の使徒を完全に消す事は出来ず今度は邪神を倒す事を貴方達に託すしかなかった。」

大人「アンタはゆりが言うには伝説にして最強のプリキュアなんだろ?それにあんなの仲間には巨人もいたんだろ?なのにどうしてデューンもその邪神とかも倒せかったんだよ!?おかしいよな?あんなに凄い力があるのに・・何でなんだよ!?」

キュアアンジェ「超人(ウルトラマン)はプリキュアと違って人類の選択にまでは干渉しない。何故なら彼らは光だから。でもヒロト、タクマ、スグルの貴方達は別よ。貴方達は光であり人である・・・」

大人「!?」

《光であり人ある》・・・どういう事なんだ?・・・俺が選ばれたのは運命だとでも言うのか?下らない!!!そんなの俺は信じない!!!

大人は言葉がなくなってしまった。今度は自分達が超人(ウルトラマン)として重大な選択を迫られるかもしれない。その時自分は正しい選択が出来るのか・・・そんな思いが大人の心の中をグチャグチャに掻きまわしていった。そんな風に考え込んでいた数秒後につぼみが部屋に入ってきた。それと同時にキュアアンジェの立体映像(ホログラム)も消えてしまった。

つぼみ「お待たせしましたぁ!!もうすぐラーメンができますよ!!!って・・・どうしたんですか?3人とも・・・あら何ですかコレは?」

大人「!!・・・あ、つぼみゴメンそれ俺のなんだ。ありがと」

つぼみ「あ、大人さんのですか。もうすぐ支度が出来るので下に降りましょう！！」
琢磨「ああ。分かった」
傑「先に行くぞ？大人」
大人「！？・・ああ。」
大人はつぼみからスパークレンスを取り返すとソレを見つめていた・・・コレが俺の超人（ウルトラマン）の証・・・信じたくはないが受け入れるしかないのかもしれない・・・大人はそう思いながらスパークレンスをしまうと琢磨と傑に続き部屋を出るのだった。

とある海底ではキュアアンジェの警告の邪神と呼ばれる者が蠢いたいた。
？？？（ボス）「ゴルザ達による石像の破壊は失敗したか・・・やはり知性が低い怪獣という者どもでは役に立たんし話にならんか」
闇の中に潜んでいるソレはヒューマノイドタイプのようで人型の姿に見えるが人間の様な影ではない。海底に人間がいるわけがないのだから当然である。だが声は低く男の様な声であるのだが機械のように濁らせた声でありはっきりとは分からなかった。良く見ると他にも複数の影があった。
？？？A「ダーク様。今度は私の配下にお任せを。」
ダーク「ほう。キリエル人か？何か策があるようだな・・・いいだろう今回は貴様に任せる。」
キリエル人「ありがたき幸せ。私（わたくし）の頭脳で必ずや光の戦士達とプリキュアを葬って御覧にいれましょう」
ダーク「楽しみにしているぞ？キリエル人」
キリエル人「はっ！！！」
その声の主はどうやら《ダーク》と呼ばれるらしい。そしてダークが《キリエル人》と呼んだ者は自分から名乗りを上げる様に声をあげると彼は闇の扉を開いてその場から地上へとワープする。残され

たものは彼の戦いを巨大な水晶玉の様なもので見届ける事にしたのだった。

大人達は昼食を終えるとまた巨人の事を考えてみたが結局のところ考えても仕方がないと判断したため気晴らしに全員で久々にどこかに出かける事にした。

えりか「久しぶりだよね～8人で何処かに行くなんてさ！！！」

つぼみ「そう言えばそうですね。さてと今日はどこに行きましょうか？」

いつき「折角だし町のショッピングモールに行こうよ！！！あそこなら色々あるしさ」

夕「おっ！！！いつきナイスチョイス」

ゆり「荷物持ちもいる事だしね」

大人・琢磨・傑「「「！！！」」」

大人「荷物持ちって・・・」

琢磨「俺達の事じゃ・・・」

傑「ないよね？」

つぼみ・えりか・いつき・ゆり・夕「「「「「当然でしょ？」」」」」

大人・琢磨・傑「「「結局そう言うフラグですかぁあぁぁ！！！！」」」

大人達の事は無視して今日はいつきの提案でショッピングモールに行くこととなった。此処に最初に来たのはネイティブとの戦いの時でありそれ以来はあまり来ていなかった。このショッピングモールにはオシャレな洋服ショップは勿論ゲームセンターやボーリング、更にはバスケや卓球などが出来る運動施設や映画館等などバラエティに富んだでいていろんなものが沢山あるのだが・・・勿論女性達の興味は服などの買い物にしかなかったのだった。

大人「何かデジャブを感じる・・・」

琢磨「ああ・・何でだろうな？」

傑「それにしても・・・・」
大人・琢磨・傑「「「重いぃ！！！」」」
3人は荷物を絶妙なバランスで持ちながらもつぼみ達の買い物に付き合っていた。そしてひと段落して今度は自分達が楽しみたいと言う提案をつぼみ達が飲んでくれたので大人は料理グッズやレシピ本があるコーナーにつぼみ、夕、ゆりを連れていき琢磨はバイクのパーツがヘルメットがあるコーナーにえりかを傑は外国の様々なものが置いてるコーナーにいつきを連れていくというようにグループに別れていくこととなった。

大人「ほうほう《角煮がとろとろに仕上がります》か。でも高いなぁ～今月は思わぬ出費があって厳しいからな・・・はぁ～。コレは来月だな」
つぼみ「大人さん料理に興味があったんですね。意外でしたよ！！」
夕「そうそう。昔は出来なかったのに。」
大人「え？・・・そりゃ一人暮らしすれば料理ぐらいね」
ゆり「もしかしたら貴方の師匠の影響かしら？」
大人「バレタか。そのとおり。天道さんの影響だ。」
つぼみ。夕「「成程～」」
大人「さてと。今日はコレだけにしとくか」
つぼみ「あれ・・・今日は本だけですか？」
大人「とあるケーキをバクバク食べる美少女達（プリキュア・フェアリー）のお陰で今月ピンチですから？」
つぼみ・夕「うっ！！！」
大人「冗談だよ♪そんな顔するなって～」
夕「冗談って・・・こらぁ大人ぉ！！！」
つぼみ「ヒドイですよぉ～」
ゆり「ふふっ♪（この子達たらホントに楽しそう。不思議ね私まで楽しくなっちゃう！！）」

えりか「うわぁ～バイクのパーツって色々あるんだね～」
琢磨「ああ。バイクってのはただの機械じゃない。人の思いが詰まってる・・・そんな気がするんだ」
えりか「ふふっ・・ふふふっ。はははは♪」
琢磨「な、何だよ?急に」
えりか「い、いやだって琢磨さんには似合わないセリフだなぁ～って思って」
琢磨「／／／／悪かったなぁ！！！」
えりか「へへっ♪」
琢磨「ったく。お前にだけは言われたくないわい！！・・・なんてな～」
えりか「ねえ琢磨さん！！いつかアタシをバイクに乗せてくださいよ。ガタックのじゃなくて琢磨さんの思いが詰まったバイクを！！」
琢磨「分かった。じゃあ俺からも頼みがある。」
えりか「何ですか?」
琢磨「えりかがファッションデザイナーになったら俺のバイク用のジャケットを作ってくれ。それでソレを羽織って君を俺のバイクに乗せる。」
えりか「なぁ～んだそんな事か！！。分かりました！！約束ですよ？」
琢磨「ああ。約束だ！！」

傑「アメリカではこう言うのが文化的に根付いているのか・・・面白い」
いつき「外国のモノって面白いものばかりですね！！！」
傑「うん。考え方や文化が違うだけでいろんなものが違う。世界って不思議だ。だから俺はいろんな世界と関わる仕事がしたい。」
いつき「それが外交官っていう傑さんの夢」
傑「ああ。俺は3年前の戦いが終わってからある事を考えてきたんだ。」

いつき「ある事？」
傑「日本のように発展してる国もあれば世界のどこかでは飢えに苦しんだり戦争で絶望のどん底に落ちている人もいる。そんな彼らを救う事は出来ないものかってね」
いつき「・・・・」
傑「砂漠の使徒の幹部達やダークプリキュア、サバークだったゆりのお父さん、そしてデューンも全員の形は違えど救われた。でも世界の多くの人々はまだ救われていないというのが現実だ。俺はそんな現実を少しでも良くできる様に自分の力を使いたい。そう考えてるんだ」
いつき「傑さん。凄いですよ！！ボクもプリキュアになった時は皆の笑顔を守れるようになるって決めたんですど傑さんはそれを自分の仕事にしようとしてる。憧れます！！！」
傑「ははは♪おだてても何も出ないよ？」
いつき「期待してませんよ～」
傑「なんだよぉ～それは」
いつき「ふふっ。あっ！！あっちに可愛いものが！！！」
傑「おいおい。あんまりはしゃぐなよ！！。ホントいつきは可愛いモノの前だと可愛くなるだから」

それぞれ仲間たちとコミュニケーションを取りながらも時間が過ぎていく・・・すると何やら外が騒がしくなってきた。このショッピングモールでは定期的にショーなどが行われるが今はそんなシーズンでもない・・・何だろうと思って大人達は外に向かう。
何かが爆発する音「ドカァアアァアアアン！！！！！！！！！」
大人・つぼみ・夕・ゆり「「「「！！！！！？？？？？」」」」
琢磨・えりか「「！！！！！？？？？」」
傑・いつき「「！！！！！？？？？」」
外で近くの建設中の無人ビルが大爆発を起こしたのだ・・・その場にいた全員が困惑しており大人達もビルが爆発する瞬間を目撃し

ていた。最初は爆発物の爆発かと思われていたが近くで不気味な笑みを浮かべた男がいた事に大人達はこの段階では気がつかなかったのであった。

第3話「受け継がれる力」（後書き）

お待たせしましたぁ！！！続きです。今回はリクエストにあったキャラを登場させました。因みにボスキャラについては決めてありますので皆さん推理してみてみてください！！
さて次回はバトルが始まります！！！！敵の宣戦布告に大人達はどう戦うのか！？

次回もお楽しみに♪

第４話「動き出した影」（前書き）

前回までのあらすじ～
キュアアンジェいわく大人達にはかつて彼女と共に戦った光の戦士達の遺伝子を受け継いでいるために大人達はウルトラマンの力を手にしたと言う事らしい。
大人は必死に否定するが運命は変えられない・・・・
そして同じころ海に潜む巨大な闇の存在が動き出すのだった。

第４話「動き出した影」

建設中の無人ビルが爆発したとの知らせを受けてある組織が動き出していた。その名は《ＧＵＴＳ》。《ＧＵＴＳ》とは砂漠の使徒の侵略によって地球が砂漠化された事から教訓を得た国連が発展拡大し日本を中心とした地球平和連合という組織の別名《ＴＰＣ》内部のエキスパートたちが集まりで自然災害、怪奇現象などの様々な分野の解決に努める特殊チームである。知らせを聞きつけたＧＵＴＳはエースパイロットのシンジョウ、科学とメカの専門家のホリイが専用戦闘機ガッツウィング一号に乗り込んで現場に向かったのだった。

ホリイ「ホンマに綺麗サッパリと蒸発してもうたもんやな～」

シンジョウ「感心している場合じゃないぞ。建設中だったからまだ良かったようなものを・・・こんな爆弾が人がいるビルとか近くにあるショッピングモールで爆発してみろ被害は甚大に・・」

ホリイ「爆弾ちゃう」

シンジョウ「え？」

ホリイ「爆発物の痕跡ちっともあらへん」

シンジョウ「どういう事だよそれは・・・じゃあ何であのビルは爆発を・・・」

ホリイ「何とも言えへん・・・とにかく調査や」

シンジョウ「そうだな。リーダー応答願います！！」

ムナカタ「此方本部。どうした？シンジョウ」

ＧＵＴＳの基地ダイブハンガーで状況報告を受けているのはＧＵＴＳ隊副隊長で通称は《リーダー》のムナカタであった。ムナカタはシンジョウとホリイの報告を受けるとウィングを着陸させて身辺調査を許可するのだった。

ムナカタ「ヤズミ、爆発物でないとすると・・・」

ヤズミ「遠隔的に何らかの力を加えたと考えられます。開発局のチ

ヤンネルを希望ヶ丘に集中するように申請してみます。」
ムナカタ「頼むぞ。・・・しかし一体何があってあんな爆発が？」

その頃ホリイとシンジョウはビルの爆発を調査するため現場近くでガッツウィングを着陸させる。それと同じころに大人達は混乱が続くショッピングモールの中で何とか全員合流できたのだった。
大人「なんだったんだ今の爆発は？」
つぼみ「まさかゴルザ達が？」
琢磨「だったら何で姿を見せないんだ？アイツらだったらこんなことするとは思えないんだけど」
傑「確かに・・・こんな回りくどい事が出来るとは思えないしな」
いつき「じゃあ一体誰が？」
ゆり「とにかくその場所に行ってみましょう！！何か分かるかもしれないわ」
７人『うん！！！』
大人達はもしかしたらゴルザ達が出てくるかもしれないと思い爆発があったビルの方へと向かった。大人達がついた事には既にホリイとシンジョウが周辺区域の閉鎖及び調査にあたっていたのだった。
ホリイ「この先は立ち入り禁止です！！引き返してください・・・あ！！ゆりちゃんやないか久しぶりやな！！！」
ゆり「えっ！？・・・ホリイさんじゃないですか！！久しぶりですね」
ホリイ「ホンマやなぁ～お父さんが失踪する前にあったのが最後やからもう８年も前やな・・・立派になったなぁ～！！」
大人「ゆり誰だいこの人は？」
ゆり「ＧＵＴＳ隊員のホリイさんよ。前にお父さんの研究室を手伝ってくれた人なの」
つぼみ「つまり科学者さんですか？」
えりか「凄い～」
ホリイ「いやいや、それほどでもないでぇ～」

ゆり「ホリイさん一体何があったんですか？爆弾か何かでビルが爆発したそうですけど」
ホリイ「爆弾ちゃうんや・・・それ以外はサッパリわからん・・・いま調査しとる最中や。とにかく危ないから帰って。」
シンジョウ「ホリイ隊員何をしてるんだ？早く調査をして本部に戻るぞ！！」
ホリイ「わあとるがな。じゃあまた今度な。此処は危険やから早く帰ってや」
会話している所にシンジョウが現れて調査をするように促すのだった。ホリイはゆり達に帰るようだけ言うとその場を後にして調査へと戻るのだった。
大人「仕方がない。大人しく引き上げるか・・・」
ゆり「そうね。ＧＵＴＳが調査してる様じゃ入れないでしょうし」

ホリイにそう言われると大人達は此処にいても仕方ないためしぶしぶとその場を後にする事になった。
そして植物園に戻ることにしたのだったのだがその途中で青い影が大人達の目の前に通りかかった・・・最初は幻覚かと思っていたのだが・・・・
大人「い、今青い影が・・・見えたよね？」
琢磨「た、確かに・・・・・か、影が・・・」
傑「・・・ゆ、幽霊？」
つぼみ「ま、まさか・・・」
えりか「う、嘘でしょ！？」
いつき「・・・・（汗）」
ゆり「私も見えてわ・・・行ってみましょう。」
夕「ちょ、ゆりマジで？」
一同ビビっている中ゆりだけは違ったようで影が走った所まで走って行った。大人達はおっかなびっくりになりながらもゆりに続いていく。するとそこには確かに青い影があり何やら笑っているかのよ

うにも見えた。
大人「な、何だあれは・・・」
つぼみ「ほ、ホントに幽霊!?」
えりか「あわわわ・・・・」
いつき「・・・・・（滝汗）」
琢磨「ゆ、幽霊が実在した!?」
傑「バカ・・そんな事・・・」
夕「じゃ、じゃあアレは何よ?」
ゆり以外の面々はかなり動揺してる中でもつぼみ、えりか、いつきはかなりビクビクとビビっていたのだった・・・
ゆり「皆落ちついて・・・こんな下らない事で私達を惑わすなんてバカらしいわね・・・いるのは分かっているのよ・・・出てきなさい!!!」
7人『!!!??』
大人達はゆりの堂々とした態度にもそうだったが誰かがいるらしい発言に一番驚かされた・・・そしてその言葉に合わせるかのように男が物影から姿を現すのだった。
???「騒がないでください。私は貴方達と話をしに来ただけです」
大人「話だって?・・・アンタ一体何者だ?」
???「私は・・私はキリエル人の預言者です。メッセージを伝えるだけのね。」
つぼみ「キリエル人の?」
えりか「預言者?」
いつき「メッセージ?・・・!?・・・まさかあのビルの爆発もキリエル人の仕業なのか!?」
預言者「はい。ではなぜ私が貴女達の前に現れたのかをお教えしましょう。それは貴女達がプリキュア、そして仮面ライダーである事も私は存じてるからですよ」
8人『!!??』
預言者「時間がないので手短に・・・それではまずキリエル人に敬

意を称してください。先ず貴方達が」
大人「何？・・・何で俺達が？」
預言者「本当に時間はあまりないですよ？・・・・貴方達が今この場で地球人類を代表して敬意を表さないと・・・次は希望ヶ丘市の北区を・・・」
ゆり「止めなさい！！！」
預言者「汚れを焼き払う炎は神聖なもの・・・しかしソレを止める事が出来る貴方たちなら」
つぼみ「ふざけないでください！！！」
えりか「何が神聖な炎よ・・・町を壊してめちゃくちゃにしかできないくせに！！！」
いつき「皆の笑顔を奪うモノが神聖なものなんて絶対に認めない！！！」
預言者「・・・答えは？プリキュアそして仮面ライダー達・・・敬意を称します？」
８人『・・・・・』
預言者「残念だ・・・また無駄な犠牲が出るとは・・・ふん！！」
男は大人達に本当に残念そうにそう言うと預言者の男は光を放ってその場から消えた。全員が呆然としながらもその場に立ち尽くすしかできなかったがその場には奴が技と残したものらしき一枚のカードが落ちていた・・・

大人「・・・一体何だったんだ？・・・！！・・それよりも早く北区に！！」
ゆり「待って大人！！」
大人「しかし！！」
つぼみ「今から行っても間に合うかどうか分かりませんよ！！」
大人「じゃあどうするんだよ！！！」
ゆり「・・・そうだ！！ホリイさんに連絡をしてみるわ」
ゆりは急いで携帯電話を取り出すとホリイに連絡を取る・・・

ホリイ「は?なんやて・・・ちょっと待ってや・・・ゆりちゃんそれは・・・」
シンジョウ「どうしたんだ?」
ホリイ「いや・・・知り合いの子が今度は北区で大爆発が起こるっていうやけど・・・」
シンジョウ「本当かそれは?・・・信用できるのか?」
ホリイ「分からん・・・どうせ此処はもう調査も終わったし・・・分かったでゆりちゃん!!すぐに向かうで。」
ゆり「お願いします!!!。とにかくGUTSには連絡出来たわ・・・私達も行きましょう。」
7人『うん!!!』

つぼみ達も急いでキリエルの預言者が爆破予告をした希望ヶ丘市の北区へ向かった・・・まだ幸いなにもなかったようだがすぐに変化はあらわれたのだった・・・・
爆発音≪ドカガァアアアアアアアアアンンンンッ!!!!!≫
8人『!!!!!!!!!』
何と突然あたりは光り始めたと思ったら大爆発と倒壊を起こし始めたのだ。全員が息を飲む中逃げ回る人々、爆発を続ける建物・・・あたりは一面火の海となり被害は凄まじいものとなったのだった・・・・そして数分後にガッツウィングが現場に到着する。
ホリイ「ゆりちゃんの言ったとおり・・・ごっついエネルギーや・・・」
シンジョウ「・・・本部、本部、応答願います。建物の中には多数の市民がいた模様・・・被害は・・・被害は甚大です!!!!」
GUTS本部ではGUTS隊の残りの隊員でかつてのZECTの関係者の矢車と影山、エースパイロットのレイナ隊員そして隊長のイルマが指令室に来ていた。全員が爆発に言葉を失っていたがイルマはすぐに冷静に対処を行う。

イルマ「これは・・・ヤズミ隊員監視衛星で何処から攻撃があったか調べて。」
ヤズミ「了解!!」
GUTS隊体長イルマの指示でヤズミがすぐに動き出す。そしてその頃の大人達は

大人「アイツ・・・本当にやりやがった」
琢磨「くっそぉ!!!!」
傑「くっ・・・・」
つぼみ「とにかく生存者の救出に行きましょう!!」
えりか「やるっしゅ!!!!」
いつき・ゆり「「うん」」
シプレ・コフレポプリ「「「プリキュアの種いくですぅ〜〜!!!!」」」
つぼみ・えりか・いつき・ゆり「「「「プリキュア・オープンマイハート!!!!」」」」
つぼみ達は生存者の救出に向かう為連れて来ていた妖精達にプリキュアの種を出させるとそれぞれココロパヒューム、シャイニーパヒューム、ココロポットに装填して変身を開始し光に包まれる。
ブロッサム「大地に咲く一輪の花キュアブロッサム!!!!」
マリン「海風に揺れる一輪の花キュアマリン!!!!」
サンシャイン「陽の光浴びる一輪の花キュアサンシャイン!!!!」
ムーンライト「月光に冴える一輪の花キュアムーンライト!!!!」
ブロッサム達は変身が終わると大急ぎで爆発があった現場に向かう。
夕はバタフライゼクターを呼び寄せると変身の準備をしていきながら大人達の方を向く。
夕「3人ともアタシ達もいくよ?変身!!!!」
電子音「HENSIN」
大人・琢磨・傑「「「変身」」」
電子音「「「HENSIN」」」
大人達も夕に促されて変身していき住民の救助に当たる。だが被害

はかなりの者だったらしく死者及負傷人は多数発見されることとなった。大人、琢磨、傑は自分の無力さにくやしさが溢れ出た・・・そして時間は流れていきその日の夜帰宅した大人は暗い部屋で一人でスパークレンスを眺めてた・・・・・金色のラインとレリーフが光る超人の証の変身アイテムを

大人「（あの時すぐにウルトラマンになってあの場に向かえばあんなに犠牲者は出なかったんじゃないか？・・・結局俺には何も守れないのか？・・・！？・・・そう言えばアイツ消える前にこのカードを投げつけたよな・・・投げつける・・指紋・・・！！・・・・そうだ！！！）」

大人は何か思いついたように携帯電話を取り出してある人物に電話をかける。その相手とはかつての仲間である彼であった。

大人「もしもし須藤さんですか？大至急調べてほしい人の指紋があるんだけど明日いいですか？はい！！お願いします。」

大人は電話を切った。相手はかつて仮面ライダーザビーの須藤だ。須藤はあの後に警視庁に配属となり今は捜査一課で働いている。そうカードの指紋を須藤に調べてもらい人物を特定しようと言うのだ。

大人「何が預言者だ・・・・」

翌日～

須藤「調べてほしい事って？」

大人「このカードの指紋を持つ人について何ですが」

須藤「指紋照合か？・・・分かった何か分かり次第すぐに連絡するよ」

大人「お願いします！！」

須藤「ああ。」

大人は例のカードを須藤に渡して指紋を調べてもらう事にしたのだ。そうすればあの男の正体やキリエル人についても何か分かるかもしれない・・・そう思ったからだ。そして時間が流れて夕がたになって須藤から連絡があった。

大人「須藤さん何か分かりましたか？」
須藤「・・・君彼指紋を何処で手に入れたんだい？」
大人「え？それは・・・俺達の前に現れたっていうか」
須藤「そんなバカな！！」
大人「！？・・・どういうことですか！？」
須藤「いいかい。よく聞いてくれ。この指紋の人物であるイタハシ・ミツオは3年前に死んでいるだよ」
大人「3年前に死んでいる？」
須藤「ああ。何処で仏さんの指紋を手に入れたかは聞かないけどに気になるのなら住所も教えるから向ってみるいい。」
大人「分かりました。ありがとうございます」
あの男はすでに死んでいた？・・・なら俺達の前に出てきた男は一体何なんだ？・・・そんな疑問が生まれてきくるが今はそれよりもこの事を伝える事が先だと思い琢磨達を呼び出す。

琢磨「マジかよ！！」
傑「死んでいる人間が俺達の前に？」
大人「ああ。その男の住所も手に入れた。今日皆で行ってみる」
つぼみ・えりか・夕「「えぇえええ！！！？？？」」」
大人「何驚いてる？」
つぼみ「だ、だってその男の人は死んでるんでしょ？」
えりか「・・・何か抵抗あるっていうか・・・・その」
夕「怖い・・・」
大人「そうか・・・じゃあ来なくていい」
つぼみ「え？」
大人「俺はもうあんな被害を出したくない・・・そのためにもキリエルの事を知る必要があってと思ったから調べただけなんだ・・・。つぼみ達がイヤなら無理して来る必要はない。俺一人だけでも調べに行くつもりだ。」
つぼみ「・・・そう言う事なら私も行きます！！！」

大人「!?」
えりか「しゃーない。付き合うか」
いつき・ゆり・夕「「「うん。」」」
琢磨「カッコつけるなよ～俺達は仲間だろ?」
傑「そうだぜ?・・・リーダー?」
大人「・・・ふっ。じゃあ今夜植物園の前に集合だ。」

同じころGUTS隊隊本では爆発物の原因をリサーチしていた。そしてやっとヤズミが共通点をはじき出したのだった
ヤズミ「間違いない・・・分かったぞ!!!宇宙開発局?監視衛星のチャンネルを至急戻してください!!地下です!!!」
そうどうやらエネルギー波の様なものが地下から出現して周りの建物を粉砕していたらいいのだ。原因が分かれば対処法はすぐにでも準備はできる。GUTSはすぐに対策にとりかかりるのだった。

大人「このマンションか」
琢磨「此処って希望ヶ丘でも有名な高級マンション街じゃんか」
傑「須藤さんの調べによればイタハシは大手の商社の部長。まあ当然と言えば当然か。」
夕「とにかく行ってみよう。さっと終わらせてさっさと帰りたいからさ」
大人「ああ。」
つぼみ・えりか・いつき「「「はい。」」」
ゆり「うん。」
シプレ「いくですぅ～」
コフレ「冒険ですっ～」
ポプリ「頑張るでしゅ～」
大人達は恐る恐るだがイタハシが住んでいたマンションへと入っていた・・・彼ら達の後ろでその様子を監視していた影があるとは知らずに・・・イタハシが住んでいた部屋の前までついた8人は最

初こそ入るのを躊躇(ちゅうちょ)したが思い切って入ってみた。すると中には何もなく殺風景のままであった・・・本当にコレが人の住んでいた部屋なのか？・・・そんな事さえ思う様になった・・・・しばらくすると妖精達が何かの気配に気がついたらしく声を上げる。それに合わせて全員が振り返る。

大人「アンタがキリエル人？」

大人が問うた瞬間に衝撃波で全員がマンションの壁に磔にされるように飛ばされてしまった

８人『うわぁあっ！！！！』

シプレ・コフレ・ポプリ「あぁああ！！！」

つぼみ「ぐぅうっ！！？？・どうして私達何ですか？」

つぼみも同じくキリエル人の影に問い始める・・・すると突然例の預言者であるイタハシが姿を現わした。

イタハシ「貴女達が神になりかねない力を持っているからですよ」

琢磨「神？」

えりか「アタシ達が神様になるってどういうことよ！！！」

イタハシ「キリエル人は貴女達の持つチカラが降臨する前からこの地球に来ていたんですそれなのに後から来た者に好き勝手にされては堪らない。」

傑「後から来た？」

いつき「ボク達の力に好き勝手にされるって・・・！！（アレは・・・）」

ゆり・夕「「！！！（矢車さん、影山さんも！！！）」」

イタハシ「分かりますか？・・・」

イタハシが大人達に語りかけている後ろでは何と矢車と影山が駆けつけていた。

矢車「大人ぉ！！！」

影山「大丈夫か！！？」

大人「二人とも気を付けてください！！！」

イタハシ「！？」

矢車「喰らえ！！！」
矢車と影山はＧＵＴＳの専用武器のＧＵＴＳハイパーガンをイタハシに向ける。姿は人間であったため霧吹き上の麻酔モードを発射する。するとイタハシの姿は消えていた。
矢車「大丈夫か？」
大人「ありがとうございます。」
つぼみ「お二人とも何でここが？」
影山「須藤から聞いてな後をつけてたんだ。」
大人「あの人も人が悪い」
影山「民間人が何言ってるんだ。これからは慎んでくれ」
つぼみ「はい。」
イタハシ「最後の預言を語ろう！！！」
傑「最後？」
イタハシ「貴方達が生きて聞く事の出来る《最後》という意味だよ。次に聖なる炎が焼くのはここだ！！！」
矢車「何だと！？」

次のターゲットはこの場所という事らしい。このままでは他の住人にも被害が及ぶ。矢車達は急いでこの事を本部に報告すると警報ベルとアナウンスでマンションの住人達に避難を呼びかけるのだった。
イルマ「了解。矢車隊員、影山隊員、民間人の避難を頼みましたよ。」
ムナカタ「巨大なエネルギーを止める！！ヤズミ隊員有効と思われる装備は？」
ヤズミ「分からない・・・しかし地下にまで届かせるには電磁波しか無いです。」
ムナカタ「・・・ホリイ隊員マイクロウェーブをガッツウィング一号に搭載」
ホリイ「了解！！！」
ムナカタ「シンジョウ隊員は1号に搭乗、レイナ隊員は2号機でホ

リイ隊員と共に支援を」
シンジョウ・レイナ「「了解！！！」」
ＧＵＴＳ隊のホリイ、シンジョウ、レイナの各隊員は迅速に準備を整えると次の爆破現場であるイタハシの住んでいたマンション街へとガッツウィング一号、二号で急行する。

矢車「住民の方にお知らせします至急このビルから避難してください爆発する危険があります！！！」
影山「君達も早く非難を！！」
大人「・・・いいえ俺達も手伝います！！。
影山「何を言うだ！！。民間人だろ？」
琢磨「お願いします！！！手伝わせてください！！」
矢車「・・・分かった。影山俺達はこのマンションのＡ塔に行って避難誘導をするぞ。大人達はこのＢ塔を頼む」
８人『はい！！！！！』

シンジョウ「ホリイ隊員マイクロウェーブ砲の照準ポイントを指示してくれ」
ホリイ「ちょぉ待って今アイツの動きを解析中や」

大人「向こうへ避難してください！！！向こうへ！！」
つぼみ「急いでください！！あ、大丈夫！？行って！！」
えりか「早く向こうへ！！！」
大人達は住民の避難を何とかさばいている所だった着々とキリエルのエネルギー波が近づいてきているため大急ぎで住民たちを避難させるのだった

ホリイ「出たでシンジョウ。目標はポイント２０６。交差点や！！」
シンジョウ「了解！！」
ホリイ「シンジョウ、ワンチャンスや。しかも通過するのは０．３

秒」
シンジョウ「よし任せろ！！！」
シンジョウはウィングで照準ポイントへと向かう。だがまだ住民の避難は3分の2程度しか終わっていなかったのである。
レイナ「矢車隊員、影山隊員。聞こえる？攻撃ポイントはポイント２０６」
矢車「待ってくれまだ避難が終わってない！！」
影山「急いで！！」
レイナ「急いで！！攻撃はそのワンチャンスしかないの！！」
シンジョウ「矢車、影山・・・頼むぜ！！！」
矢車達は大急ぎで住民の非難を行い何とかポイント２０６付近の住民は避難を完了させたのだった・・・そいて急いで大人達にも非難する世に呼び掛ける。
矢車「大人。そっちの首尾は？」
大人「何とか非難は終わらせました。で、俺達は？」
矢車「我々も非難を開始する。君たちもココから急いで住民たちのいる場所に移動するんだ。」
大人「はい！！」
矢車「避難完了！！！」
シンジョウ「おっしゃ！！！」
矢車、影山達はマイクロウェーブの影響がない場所まで自分達も移動する。大人達も住民たちのいる場所に行こうとしたのだが大人は何かの影をみつけた。またその頃シンジョウはウィングでポイント２０６へと向かうのだった。
大人「あっ！！！」
琢磨「どうしたんだ？」
大人「あそこに子供が！！！」
傑「何っ！？」
大人「俺が急いで連れてくるから琢磨達は先に行け！！！」
琢磨「！！・・おい・・大人ぉ！！！」

大人は琢磨の制止を振り切り子供が残されているマンションの前まで大急ぎで向かうだがその間にマイクロウェーブの発射が始まろうとしていた・・・
ホリイ「発射5秒前・・・・」
大人「くっ!!!此処からじゃ間に合わない!!!」
ホリイ「4・・・・・・3・・・・・・2・・・・・1・・・・・・」
大人「（くっそぉおぉおおおぉおお!!!!!!）」
ホリイ「0!!!!!」
大人は走るのだがこの距離では間に合わない・・・だが見殺しにできないとスパークレンスを取りだしてスイッチを入れて起動させる。すると大人の身体は光に包まれて赤と紫の巨人ウルトラマンティガへと変身するのだった。
つぼみ「あれは!!!」
えりか「あの時の巨人!!!」
いつき「でも何で?・・・・・!!!」
琢磨・傑「「（大人）」」
ティガはギリギリのところで少女をその巨体な手で優しく包み込んで保護するとつぼみ達がいる所に下ろす。
つぼみ「この子を助けるために?」
ティガ「・・・・」
ティガは頷く。周りにいた矢車達や住民の人々も彼の姿に釘づけになるがそれと同時に聞き覚えのある声が。
イタハシ「君を待っていたのだよウルトラマンティガ!!!」
ティガ「!!?（この声は・・・まさか）」
イタハシ「君はこの星の守護神になるつもりかね!?おこがましいとは思わないか?」
ホリイ「あそこに人がおる・・・誰や?」
ティガ「・・・（俺が守護神だって?・・・何を言ってるんだコイツ）」
イタハシ「君が巨大な姿を現すずっと前からこの星の愚かな生き物

たちはキリエル人の導きを待っていたのだよ！！！君は招かれざるものなのだ。見せてやろうキリエル人の力をキリエル人の怒りの姿を！！！」

イタハシの周辺から炎が上がるとそこから白と黒の悪魔の様な姿をした巨人の様なものが現れた。

つぼみ「アレがキリエル人の正体・・・」

ゆり「いいえ。多分身体のサイズまでをもあの巨人に合わせて変身したのよ。」

いつき「挑戦するために・・・」

ティガ「ハッ！！！」

キリエロイド「キリ！！！」

ティガ「ハッ！！ジャアァ！！」

キリエロイド「キリィイイい！！！！」

ティガ「ハッ！？・・・ヌワァアアアッ！！！！」

ティガとキリエル人のファイティングモードであるキリエロイドの両者が町の中で凄まじい格闘戦を繰り広げていく両者とも譲らない戦いを繰り広げていくが格闘戦ではキリエロイドが有利のようでティガに得意のキックで果敢に攻めていきティガをケリ飛ばしてしまう。

ティガ「ハァアッ！！！（コイツ強い・・・だけど負けるわけにはいかない！！！）」

キリエルは巧みなキックと技サバキでティガを圧倒するがティガも負けるものかと応戦していきキリエロイドを投げ飛ばす。それにより流れが変わったのかキリエロイドに反撃のパンチをキックの格闘技を放つ。更に右手から青い光の矢である《ハンドスラッシュ》をキリエロイド放ちダメージを与えていくとキリエロイドは怯んだ。

その隙に腕を交差させる。

ティガ「ウーーーーーーーン・・・・・ハァッ！！！！」

えりか「色が変わった！？」

ティガはパープルの迅速の戦士ティガ・スカイタイプへとタイプチェンジを行いスピードで圧倒し抵抗としていく。キリエルもその程度など受け流してくれるとばかりに応戦するがティガ・スカイタイプの猛攻はキリエロイドの想像以上のようでスカイタイプの身軽な技サバキに圧倒されていき投げられてしまう。

キリエロイド「キリイィイ！！！」

ティガ・スカイタイプ「チャァアッ！！！」

キリエロイド「グォオオッ！！？」

ティガ・スカイタイプの身軽な動きでジャンプすると踵落としをキリエロイドの頂頭部に叩きつける

琢磨「よし！！！」

更に回し蹴りチョップ、キックなどでキリエロイドにダメージを与えて更にコレで終わりだとばかりに投げ飛ばす。だがキリエロイドもこれ以上は好きにさせるものかとティガ・スカイタイプに炎で攻撃していく。更にその隙をついてティガ・スカイタイプに掴みかかりそのままビルへと投げ飛ばすと追撃の炎を見舞わせていきティガ・スカイタイプに大ダメージを与えていく

ティガ・スカイタイプ「グアアァアアァ！！？」

ティガ・スカイタイプはまだやれると構えようとするがそれと同時に胸のランプである《カラータイマー》が青から赤に変わる

カラータイマー「ピコンピコンピコンピコン！！！！」

ティガ・スカイタイプ「ハッ！！！」

カラータイマーが点滅を始めるとティガ・スカイタイプは焦り始める

つぼみ「このままじゃ巨人が！！！」

えりか「アイツ・・・調子に乗っちゃって！！こうなったらアタシ達も援護しよう！！！」

いつき「うん。彼が頑張ってるのにボク達がないもしないわけにはいかない！！」

ゆり「皆・・行くわよ！！」

つぼみ・えりか・いつき「「「はい！！！」」」

シプレ・コフレポプリ「「「プリキュアの種いくですぅ～～！！！」」」
つぼみ・えりか・いつき・ゆり「「「「プリキュア・オープンマイハート！！！！」」」」
つぼみ達４人は光り輝くワンピースのような姿になりピンク、青、黄色、藍色のそれぞれのプリキュアの種を妖精達に召喚させ変身アイテムを取りだす。つぼみとえりかはココロパヒュームをいつきはその色違いで黄色のシャイニーパヒュームをゆりはコンパクト型の変身アイテムであるココロポットにそれぞれのプリキュアの種をセットしていく。するとつぼみ、えりか、いつきは香水を身体に噴きかけていく事でピンク、青、黄色の光に身体が包まれゆりはココロポットの生み出した銀色の光のに身を預けると光に包まれて姿が見えなくなると夜の町に４色の光が輝きあたりを照らす。
ブロッサム「大地に咲く一輪の花キュアブロッサム！！！」
マリン「海風に揺れる一輪の花キュアマリン！！！」
サンシャイン「陽の光浴びる一輪の花キュアサンシャイン！！！」
ムーンライト「月光に冴える一輪の花キュアムーンライト！！！」
ブロッサム・マリン・サンシャイン・ムーンライト「「「「ハートキャッチプリキュア！！！」」」」
琢磨・傑・夕「変身！！！」
電子音「「「ＨＥＮＳＩＮ」」」
琢磨・傑・夕「「「キャストオフ！！！」」」
電子音「「「ＣＡＳＴ－ＯＦＦ」」」
電子音「ＣＨＡＮＧＥ　ＳＴＡＧ－ＢＥＥＴＬＥ」
電子音「ＣＨＡＮＧＥ　ＢＥＥＴＬＥ」
電子音「ＣＨＡＮＧＥ　ＢＵＴＴＥＲＦＬＹ」
ガタック「戦いを支配せし戦いの神・仮面ライダーガタック！！！」
ダークカブト「闇を司りし黒点の神・仮面ライダーダークカブト！！！」
フェアリー「聖なる翼を持せし白銀の神・・・仮面ライダーフェア

リー！！！」

キリエロイド「キリィキリキリィ！！！」
ティガ・スカイタイプ「デゥアァ！？・・・ヌゥウアアッ・・・」
ティガ・スカイタイプはカラータイマーが鳴り始めるとスタミナが足りなくなってしまったのかキリエロイドに追いつめられる形になる。更に追い打ちのパンチをキックの猛攻を受けそしてトドメの炎が彼に迫る。だが・・・
サンシャイン「サンフラワー・イージス！！！」
ティガ・スカイタイプ「！！？（コレは・・・はっ！！）」
キリエロイド「キリ！！？」
炎が当たる直前にヒマワリの形をした光の盾がティガ・スカイタイプを守る・・・カラータイマーが鳴り響く中周りを見てみるとそこにはマントを見に纏って空を飛んでいたブロッサム、マリン、サンシャイン、ムーンライトが更にビルの上にはガタック、ダークカブト、フェアリーがいたのだった。
ブロッサム「よく頑張ってくれました。貴方は私達の仲間です・・・だから私達も一緒に戦います！！！」
マリン「最初にあった時は不思議に思ったけど今の戦い方を見て分かったよ。貴方はアタシ達と同じだってね。だからアタシ達も全力で貴方をサポートする」
サンシャイン「貴方の太陽の様な心しっかり伝わりましたよ。だから貴方と一緒に戦う！！」
ムーンライト「光の戦士である貴方の戦いしっかり見させてもらったわ。貴方の心も私達が守る！！」
ガタック・ダークカブト「「まけるなぁ～！！（大人、頑張れ！！）」
フェアリー「頑張ってぇ！！！アタシ達も貴方の味方だからぁ！！！」
ティガ・スカイタイプ「！！！（皆ぁ！！！）」

ティガは何とか立ち上がろうとするが身体に力が入らない・・・・
そんな彼を嘲笑うかのようにキリエロイドが声を上げる
キリエロイド「キリィイイっ！！！・・・キサマラァ！！！キリエル人ニサ逆ラウノカァアア！？キリエル人コソ人類ヲ導ク絶対ノ存在デアリ神ダト言ウノニィィイ！！！」
ブロッサム「貴方なんか神でも何でもありません！！！」
キリエロイド「何ィ？！」
マリン「アンタは逃げ遅れた女の子の事を気にもとめなかった」
サンシャイン「でも彼は女の子を救うために現れて貴方から人々を守るために戦っている！！」
ムーンライト「本当の神は人々の命を悪戯に奪ったりはしないわ！！！貴方はただ神になりたいだけの化け物よ！！！！」
ガタック「そのとおりだ・・・お前は神なんかじゃない！！！」
ダークカブト「我儘な子供と何も変わらないんだよ！！！！」
フェアリー「アタシ達はアンタなんか絶対に認めない！！！！！」
ブロッサム「沢山の人を苦しめた挙句自分が絶対の神だと言い張るなんて・・・私、堪忍袋の緒が切れましたぁ！！！！」
マリン「アタシもアンタのこれ以上の横暴は許さない！！海より広いアタシの心も此処らが我慢の限界よ！！！！」
サンシャイン「貴女の傲慢さは決して許さない・・・その心の闇私の光で照らしてみせる！！！！」
ムーンライト「これ以上悲しみを作らせはしない。全ての心が満ちるまで私は戦い続ける！！！！」
キリエロイド「オノレェ！！！！」
キリエロイドは激昂してブロッサム達に炎を放つがサンシャインのサンフラワーイースがそれをガードする。そして自分達が小さい事を利用してキリエロイドにブロッサム達はパンチとキックをガタック達は陸戦メカでブロッサム達を援護する・・・その間にティガ・スカイタイプは何とか立ち上がりブロッサム達に合図を送る。
ティガ・スカイタイプ「チャァア！！！（皆、奴から離れるんだ）」

ブロッサム「!?・・・皆一度離れましょう巨人が何かするそうです!!!」
キリエロイド「キリィイイっ!!!!」
キリエロイドは今度こそトドメと炎を放つがティガ・スカイタイプはそれをギリギリで避けていきすぐに立ち上がる。
ティガ・スカイタイプ「フン!!ハッ!!・・・」
キリエロイド「キリィイイっ!?・・・グォォオォオオ!!??」
右手をカラータイマーの上に左手をその下に重ねてエネルギーを溜めるとそのまま右手を上にかざして《ティガフリーザ》という光線をキリエロイドの頭上に放っていく。するとそれは爆発して絶対零度の吹雪がキリエロイドに降り注ぐとキリエロイドの身体は凍て付き固まっていき氷の塊が形成される。その間にティガ・スカイタイプはもう一度腕を額に組んで白い光と共にティガの基本形態のマルチタイプに戻る。
ティガ「フンッ!!・・・チャァアアアアアアアアッ!!!!!!!!!」
そして腕を腰に当ててから前方に組んでその腕を水平に広げると白い光りが腕の集まりそのまま右腕を縦に左手を右腕の肘に重ねていってL字を作って光線を放つ。ウルトラマンティガ最強の光線のゼペリオン光線である。
爆発音「ドカァアアアアアアアンッ!!!!!!!!」
ブロッサム・マリン・サンシャイン「「やったぁあ!!!!」」」
ムーンライト「流石よ。ありがとう」
ガタック・ダークカブト「「(やったな大人)」」
フェアリー「凄い!!!」
ティガ「・・・チャァ!!!」
ゼペリオン光線が直撃したキリエロイドは跡形もなく粉々になり残されたのは破片のみだった・・・ティガはカラータイマーの点滅が早くなると空を見上げると空に飛び立って何処へと消えていったのだった。

ブロッサム「所で・・・大人さんは？」
大人「ブロッサム！！！」
ブロッサムの疑問に皆（ガタックとダークカブト以外）はあたりを見回すと声が聞こえてきた。全員が合流し朝日が昇る空とともに月曜日を迎えた。そして全員学校での授業を終わらせて植物園に集まる事になった。
そして時間は流れて植物園にて・・・
つぼみ「巨人、強かったですね！！！」
えりか「うん。巨人サマサマって感じ。」
いつき「うん。でも何で町中に現れたんだろ？」
ゆり「それは分からないわ。」
大人「あの・・思うんだけどさ。怪獣にもゴルザやメルバやガルラっていう個々の名前があるのに巨人だけが巨人、巨人って呼ばれるのは何か可哀想な気がするんだけど。」
夕「そう言えばそうだね～。名前かぁ～」
大人「・・・案がないなら赤と紫の巨人は《ウルトラマンティガ》なんてどうかな？」
つぼみ「ウルトラマンティガ？」
琢磨「あ、俺も案が有るんだけど・・・赤い巨人は《ウルトラマンアース》っていうのは？」
傑「・・・青い巨人は《ウルトラマンデュナミス》ってのはどうかな？」
つぼみ・えりか・いつき「「「おぉ～！！！」」」
ゆり「いいわね・・・ウルトラマン。カッコ良くて」
夕「うん！！何かあってるよ。光の戦士って感じで！！」
こうして巨人の名前が決定した。というのもキュアアンジェが言ったのをそのまま取っただけなのだが。つまり自分達が戦士として戦うと言う事を大人達は受け入れたと言うなのかもしれない。最初は否定した大人だったが自分達には仲間がいる・・・だからもう迷わ

ない！！だからこそ巨人の名前を皆につたえたのかもしれない・・・

その頃とある海底では

ダーク「キリエル人よ・・・所詮貴様の配下とやらも大したことはなかったか。」

キリエル人「こ、これは様子見でございます。今一度チャンスを」

ダーク「ええい。下がれ。雑魚に用はないわ！！！」

キリエル人「・・・はは っ」

ダーク「ティガよ・・・やはり貴様は私の邪魔にしかならないようだ・・・だが必ず貴様を倒してくれるわ。」

キリエルが消えた玉座の間のような部屋に一人たたずむダーク。その姿は何処かティガと似ているようにも見えた・・・果たしてそれは錯覚か・・・それとも・・・・・

第４話「動き出した影」（後書き）

今回はティガがメインでした＾＾意外と描写が難しいです。さてコレからは色々と忙しい時期になるので更新も遅れてしまうかもしれないです＾＾しかし楽しみにしていてください！！

ではでは次回もお楽しみに♪

オリジナルウルトラマンの設定～アース編～

ウルトラマンアース　《ポテンシャルデータ》
身長５３ｍ
体重４万６千トン
ボディカラー　赤と銀色。

《基本データ》ウルトラマンティガ・パワータイプに相当する力を持ち主。ティガ・パワータイプを超える力を持つのだがスピードではティガ・パワータイプを下回るため遠距離戦や空中戦では苦戦を強いられる。しかし水中での戦いや重量級のクラスの怪獣との格闘戦やスタミナが高い事を活かした長期戦での戦いはその真価を発揮するのである。また炎を操る特殊能力があり状況に応じて炎を自在に操り敵との戦いを有利に進める事が出来る。

《変身アイテム》
アーススパークレンス
ウルトラマンアース専用の変身アイテム。スパークレンスとの違いはウィング部分のレリーフやグリップ部分グリップの上の古代文字が刻まれている部分が赤くクリスタルに炎が宿されている事である。原作のティガのスパークレンスと同じ能力で琢磨を《光》に変換してウルトラマンアースの姿に変身させる。またクリスタル部分から炎を発して敵を怯ませる事が出来る効果がある。

《必殺技》
ボルテックストリーム
ウルトラマンアース最強の光線技。手順はティガのゼペリオン光線と同じように手を腰に当てるとその後前方に交差させていきその後左腕を上、右腕を下になる様に広げて炎のエネルギーを腕に集めて

いきそのまま右腕を縦にその上に左手をクロスさせて十字を作った後に発せられる破壊光線。しかしエネルギーの消費は凄まじく最後の切り札として使われる。またエネルギー集約時に炎のエネルギーを調節する事で破壊力を操作できる。

破壊力が低い技（炎を使った技もあり）

バーンナックル

炎を腕に纏い自身のパンチの破壊力を増大さる技。元ネタはウルトラマンエースの《フラッシュハンド》第2話にてガルラ戦にて初使用

ウルトラスライサー

ティガのハンドスラッシュと類似する光のカッター光線。威力は低いが敵に隙を作らせるのに有効である。第2話にてメルバに初使用。

オリジナルウルトラマン設定～デュナミス編～

ウルトラマンデュナミス　《ポテンシャルデータ》
身長５３ｍ
体重４万２千トン
ボディカラー　青と銀色

《基本データ》ウルトラマンティガ・スカイタイプに相当するスピードの戦士で水を操る事が出来る戦士である。パワーやスタミナではティガ・スカイタイプよりも下回り肉弾重視の格闘戦や重力クラスの怪獣との戦いは不向きだが多彩な光線技や水を使った戦術、そして何よりもスカイタイプと以上の迅速の技サバキによる格闘戦と飛行能力で敵を追いつめる事が出来る。また水に冷気を送り込んで氷を作る事も出来る。

《変身アイテム》
デュナミススパークレンス
ウルトラマンデュナミス専用の変身アイテム。アーススパークレンスとおなしくウィングのレリーフ、グリップ、古代文字が刻まれている部分の色が青である事が特徴。またクリスタルには水の力が宿っているクリスタルに水を集める事で水の剣を造る事が出来る。（この設定の元ネタは烈火の炎の闇水）

《必殺技》
インブレイス・バースト
ウルトラマンデュナミス最強の必殺技。エネルギー集約ポーズはアースと類似しているが違いは右手が腕に来て左手が下になる事である。また十字に組む腕も左手が縦になり右手が横になる事である。またアースと同じくエネルギー消費が凄まじく最後の切り札として使用される事や水のエネルギーを調節して破壊力を操作できるなど

の共通点がある。

破壊力が低い技（水を使った技もあり）

デュナミスボム
右手に光を集めて敵に叩きこむエネルギー弾。威力は低く主に敵に組みつかれた時に使用する。第2話に手メルバに初使用。

デュナミスセイバー
水を腕に集めてそれを冷気で固めた氷の剣。ただの氷ではなくデュナミスの体内エネルギーによって作りだした氷であるため鋼鉄をも切り裂く事が出来る。元ネタは（ウルトラマンアグルのアグルセイバー及び烈火の炎の闇水）

デュナミススラッシュ
氷を使用したのこぎり状のカッター。（元ネタは勿論初代ウルトラマンのウルトラスラッシュ）

第5話「怪獣からのSOS」（前書き）

前回までのあらすじ～
ダークからの刺客キリエロイドにティガが立ち向かう。大人はその戦いで例え自分が光の戦士とバレタとしてもつぼみ達は自分を受け入れてくれるそう思い全員に巨人の名前を提案するのだった。

第5話「怪獣からのSOS」

とある海底にのダークが封印されている玉座の間にて
ダーク「さて・・・次はどうするか・・・」
？？？「ダーク様。次は私が」
ダーク「貴様は・・・バルタンか」
バルタン「フォフォフォフォ・・・キリエルの低能を信じることなく我々バルタンの科学力を御信用ください」
ダーク「ほう？勝算はあるのか？」
バルタン「ご安心を。既に作戦は開始されております」
ダーク「そうか・・・楽しみにしているぞバルタンよ」
バルタン「ははっ！！！」
ダークの新しい刺客が動き出していた。そしてバルタンの作戦とは。

時同じくして地球から数光年離れている惑星の《サウリア》この惑星には地球には存在しない怪獣であるレッドキングなどが数多く生息していて人間達と同じように心があるかのように仲良く暮らしていたのだった。だがその平和は今は打ち壊されていた。
レッドキング「ピガォォオオオォウ！！！（貴様ら何者だぁ）」
バルタン（下っ端）「フォッフォフォフォフォフォフォ！！！！キサマラ下等生物デモ十分我々ノ計画に役立ツダロウ・・・利用サセテ貰ウゾ！！！」
レッドキング「ピギャゥウウ（そんな事させるものか・・・この星から出ていけ！！）」
レッドキングはバルタンに向かっていくがバルタンの分身技には歯が立たずに何もできなかった。後ろでは子供のレッドキングがブルブルと震えていた。
レッドキング（父）「・・・ガゥゥウ！？？・・・ピギャウゥウ！！（ぐぅぅ・・・私も此処までか・・息子よ・・お前は逃げろ）」

レッドキング（子）「ギャゥウゥウ！！！（父ちゃん！！！・・・そんなの嫌だよ・・・俺も戦うよ！！！）」
レッドキング（父）「ガゥウウ！！！・・・ピギャァアアアァアッ！！（我儘を言うな。お前はこの星のリーダー一族の最後の一匹何だ。お前だけでも生き残らなくてはならない）」
レッドキング（母）「ピギャウゥ（さあ行きなさい。私達が時間を稼ぐから）」
レッドキング（子）「ギャウゥウ・・・・ギャウゥウ！！（母ちゃん！！！・・・分かったよ。グス・・・うわぁあああん！！！」

惑星は今火の海であった。怪獣たちは必死に抵抗するもバルタン達には通用しなかった。あるものは捕えられ円盤にと詰め込まれ、またあるものはバルタン達に殺されたりと平和な惑星も地獄と化していた。この星のリーダー一族のレッドキング家族は果敢に息子のレッドキングを逃がすためにバルタン達に戦いを挑んでいった。子供のレッドキングは振り向かずに走り続けた。怪獣と言ってもまだ子供であるため体長は人間の子供と殆ど変らない為バルタン達にも見つかりにくかった。彼は必死に逃げるのだった。そして森の奥まで逃げ延びた。

レッドキング（子）「ギャウ、ギャウゥ（父ちゃん・・・母ちゃん・・・ゴメンなさい！！！）」
レッドキングの子供は何とか被害の少ない場所まで逃げていたのだが逃げる場所など何処にもなかった。どうしたらいいかわからない為泣きじゃくるしかなかった。
？？？「パムパムぅ（お～いチビキング！！！）」
レッドキング（子）→チビキング「ギャウゥ！？（あ、ハネジロー！！）」
？？？「ガクッ！！！パ～ムパム！！（ムーキットだって！！いい加減に覚えてよ）」

しばらくするとハネジローと呼ばれる黄色い小動物の様な怪獣が現れた。どうやらこの怪獣も逃げ延びたらしい。ハネジローとチビキングは仲が良くて友達同士であった。

チビキング「ギャウギャウ～（俺達どうなるのかな？）」

ハネジロー「パム・・パムパム！！（こうなったらしょうがない・・・ボクが開発したカプセルで逃げよう）」

チビキング「ギャウゥ！！？・・・ギャ、ギャウゥウ！！（カプセル！？・・・こ、怖い）」

ハネジロー「パムパム！！パムムパムウ！！（何弱気な事言ってるんだよぉ！！！君はレッドキングの息子だろ！？ボク達の星が滅茶苦茶にされてしまったけどボク達には何もできないんだ。生き残るしか出来ないんだよ！！！）」

チビキング「ギャウゥ～・・・ギャウギャウゥ！！！（分かったよ・・・でも何処に行くんだい？）」

ハネジロー「パムパムパム～！！（此処から数光年ある地球って星に行こう・・そこは此処と同じような星だって聞いた事あるんだ。だからそこに行こう）

チビキング「ギャウ・・・ギャウゥウ！！！（うん。父ちゃん、母ちゃんオレは生き残るよぉ！！）」

チビキングとハネジローが作った小動物が入れるぐらいのカプセルでサウリアから地球へと向かうのだった。自分達の故郷から離れるのは心苦しかったが自分達の代わりに命を落とした仲間達の思いの為に逃げる事を選んだった。

その頃地球では

大人「アレから3日立つけどキリエルは何もしてこない。諦めたのか？いやアレだけで諦められるとは思えない」

琢磨「まあ確かにな。ゴルザ達も姿を見せないし」

傑「アイツらが何処にいるかは今は分からないけどまた出てくるよ

うなら今度こそ俺達がトドメを刺せばいい」
大人「そうだな。今度は絶対に！！」
大人、琢磨、傑はあの丘に集まっていた。アレから3日も経つが何も変化がない事に不信感を抱いていたのだ。平和なのはいいことだがその平和が逆に不気味だった。そして不意に大人が空を見上げると
大人「まあ平和ならいい事なんだけど・・・・！？」
琢磨「アレは流れ星！？」
傑「い、今は昼間の筈なんだけど」
不意に空を見上げると森の方に流れ星いや隕石の様なものが落ちていったのが見えた。大人達は何事だと思いその場所に行くと何やらカプセルの様なものがあった。
大人「アレって・・・宇宙船？」
琢磨「まさか新しい敵か？」
傑「落ちつけって・・・違うかもしれない。大体この大きさに入っている宇宙人なんて想像がつかないんだけど」
3人は恐る恐る近づいていくとカプセルが突然開いた。
大人「こ、コレって」
琢磨「・・・・怪獣の」
傑「・・・子供！？」
中には目をグルグルと回したチビキングとハネジローがいたのだった。大人達は目が点になったがとにかく保護しようと二匹を植物園に運ぶのだった
つぼみ・えりか・いつき「「「か、か、かわいいいいぃぃ！！！！」」」
ゆり「・・・・（か、かわいい）」
つぼみ、えりか、いつきの3人はハネジローとチビキングの可愛さに興奮した様子を見せていた。中でもいつきは二匹をみて普段見せないテンションでハシャギまくっていた。
夕「ホントだね！！！でも何で宇宙船なんかに？」
大人「さ、さぁ？」

琢磨「それぱかりは俺達のも分からないよ」
傑「シプレ達は何か知らないか？」
シプレ「うむ～分からないですぅ～」
コフレ「ボク達も初めてみるですっ！！！」
ポプリ「ポプリもでしゅ！！！！」
大人「そうか・・・？し、目が覚めるみたいだ」
大人の声に全員が静かになる。最初の起きたのはハネジローであたりを見回す。そして大人達をみるや否や・・・
ハネジロー「パァアーーー！！？・・・パ、パム！？・・・パ、パムパム！（わぁああ！！！・・・び、びっくりした・・・あ、チビキング！！起きろぉ！！！）」
チビキング「ギャウゥ～・・・・ギャウゥ！！！・・ギャ、ギャウゥ？（う～～ん・・・あ、ハネジロー！！。こ、此処は？）」
大人「気がついたみたいだ・・・」
チビキング「ギャ、ギャウゥ！！！！（わ、わぁあ！！な、何だぁああ！！！？）」
ハネジロー「パムパム！！（落ちついて。大丈夫だから！！）」
チビキングは大人達をみるなりハネジローの後ろに隠れてしまう。
それに比べてハネジローは落ちついているらしくチビキングを宥めるのだった。

大人「君達は何処から来たんだい？何で地球に？」
ハネジロー「パムパムっ！！！（それは・・・コレを見て！！）」
大人「？・・・・！！！・・・こ、これは・・・」
つぼみ「・・・・ひどい」
えりか「そうか・・・逃げた来たんだね」
いつき・ゆり「「・・・・・・」」
チビキング「ギャウゥ・・・ギャウゥゥウウウ！！！！（と、突然オレ達の星が襲われたんだ・・・うわぁあああんっ！！！！！）」
ハネジローは大人達の近くまで飛ぶと目から光を放っていき惑星サ

ウリアの出来事を大人達に伝えるために自分の記憶を映像化した映像を見せる。そこにはバルタン達による破壊されていくサウリアの自然と捕えられていく怪獣たちの姿だった。それを見た大人達は言葉を失ってしまった。砂漠の使徒以外にこんな残虐な事をする連中がいたとは・・・チビキングは今まで溜めていたモノが一気に爆発したかのように涙を流した。

第5話「怪獣からのSOS」（後書き）

ちょっと怪獣たちの登場に困ったので惑星があるという設定にさせていただきました。次回はバルタン達が動き出します。

次回もお楽しみに♪

第6話「冷徹な思想」（前書き）

前回までのあらすじ～
惑星サウリアのから辛くも脱出チビキングとハネジロー。宇宙ではまだ侵略者がいることに大人達は言葉が出なかった。

第6話「冷徹な思想」

チビキング「ギャウゥゥ～～（何も出来なかった・・・父ちゃんも母ちゃんも戦ったのにオレは何もできなかったんだぁ！！！）」
大人「・・・・・」
つぼみ「悔しかったんだね・・・・よしよし」
ハネジローが映し出した映像を見た8人は何も言葉が出なかった。
チビキングは今まで我慢していたものが一気に溢れだして泣きだしてしまう。それを見たつぼみが優しく抱き抱える。
ハネジロー「・・・・パムゥ～（・・・チビキング）」
琢磨「そうか・・・お前の家族もこの星人に」
えりか「砂漠の使徒以外にもこんな事する奴らがいたなんて・・絶対に許せない！！！」
傑「こいつ等まだ小さいのによく頑張ったよな・・・こんな小さい子供を泣かすなんて。」
ハネジローは映像を出し終わると頭を下に向けてチビキングと同じように悲しそうな声を上げる。それを見た琢磨はハネジローの頭を撫でていって励ましえりかは今までに見せた事のない怒りのこもった声を上げる。自分達もかつて砂漠の使徒に世界を砂漠化された時の絶望と悲しみは計り知れなかった。でも自分達には力があったから今の青い地球がある。でもこの二匹には力がなく悔しさと悲しみのなか自分達の故郷を捨てて逃げてきた・・・こんな事絶対に許されるわけがないのだ・・・そんな思いがえりかの身体の中でメラメラと炎のように燃えているのだった。勿論それはえりかだけではなく大人もつぼみも琢磨も傑もいつきも夕やゆりも同じだった。植物園の中でチビキングの悲しい鳴き声が響き渡る

時同じころのとある海底ではダークとバルタンが作戦について話していた。

ダーク「バルタンよ惑星サウリアの怪獣たちをどうするつもりだ？」
バルタン「奴らは今後の我々の≪兵器≫として利用するのでございますよ。そして既に私達バルタンの科学力で試作品第一号が完成済みでございます。今からプリキュアと光の巨人たちを殲滅にかかります」
ダーク「・・・期待しておこう。行けバルタン！！！」
バルタン「ははっ！！！！」
バルタンの作戦とは自分達の同胞達の活躍によって手に入れた惑星サウリアの怪獣たちをバルタン星の科学力で改造を行い自分達の兵器として利用するということだったのだ。これならば例え作戦が失敗しても実験材料という手柄があるためキリエル人のような失態にはならないと思ったのだった。だがこの行動が自分を地獄に落とすきっかけになるとはバルタンもまだ知らなかったのだった。

チビキング「がぁ～ぎゅふふふ～（ぐぅ～ぐぅ～）」
ハネジロー「パァ～～パァ～（すやすや）」
つぼみ「よく眠ってます。怪獣と言ってもまだまだ子供ですね」
チビキングとハネジローは長旅で野疲れで植物園でぐっすりと眠ったいた。つぼみは二匹に毛布をかけてあげると起こさないように下に降りていった。
大人「あの二匹は？」
つぼみ「疲れてグッスリです。特に泣いていた子はすぐに寝ちゃいました。」
大人「そうか。・・・よっぽど怖かったんだろうな」
つぼみ「ええ。平和だった日常がいきなり壊されて見ず知らずの星に逃げた来たんですから」
大人「そう言えばえりか達は？」
つぼみ「あの子たちを少しでも元気にしようって何か考えてるみたいです。えりかと傑さんが特に張り切ってました。」
大人「そうか。えりからしいと言えばえりからしいな。」

つぼみ「はい。」
つぼみは笑っていたが大人は表情が堅く下を向いていて何か思いつめているようだった・・・そして突然声を上げた
大人「・・・なんか悔しいよ」
つぼみ「え?」
大人「俺は・・・敵は砂漠の使徒だけだと思ってた・・・でも違った。邪神やキリエル人、更にはアイツ等の故郷を奪った奴ら・・・俺は砂漠の使徒さえ倒せば悲しみが消えると思ってた」
つぼみ「・・・大人さん。でもそれは・・・」
大人「分かってる!!・・・でも守れる力があるのに何もできない自分が悔しいんだよ。」
下を向きながら大人は悔しそうに言った。俺達は守る力があるのに自分達にしかその力を使えなかった。故郷を奪われる辛さを知っているのに守れなかった・・・特に今の自分はウルトラマンの力もあるのに・・・知らない故に守れる命を守れないと言う悔しさが大人から溢れ出ていたのだ。
つぼみ「大人さん・・・それは私も同じです。」
大人「!?」
つぼみ「私も砂漠の使徒を壊滅させたことで全てが終わったと思ってました。でもそれだけではなかった。この広い宇宙にはまだまだ憎しみに囚われて悲しい事をする人がいることを知りました。・・・だからせめてあの子たちの心の叫び、困っているなら力になりたい。それが今の私達に出来ることなんです。」
つぼみは胸に手を当てて優しくそう言った。もう過ぎてしまったことは変えることが出来ない・・・ならばせめてあの子たちの悲しみを自分の愛と優しさで包んであげたい・・・自分達が出来なかったことの穴埋めはそれしか出来ないのだから・・・それが3年前の砂漠の使徒やネイティブ達との戦いで彼女なりに学んだ事であった。
自分達は決して神ではないのだから・・・
大人「・・・そうだね。今の俺達に出来る事はそれしかないんだ

よな・・・アイツ等の悲しみを俺達が0に近くするしかないんだよな」

つぼみ「はい。もう悲しみを増やさないようにしてあげればいい・・・それが私達の出来る事でありするべき事なんです。」

大人「（つぼみ・・・君はホントに優しく、そして強くなったね・・・嬉しいけどなんか寂しいよ・・・）」

大人はつぼみの言葉に自然と悔しさが消えていった。確かに過ぎた事をいつまでも悔やんでいても何もならない。それは事実であるのだ・・・なら今度はこれ以上悲しみを増やさないように・・・悲しみを自分達が受け止めてあげればいい・・・彼女の優しさの後ろには昔とは違う強さが見えた・・・大人はつぼみの成長した姿にどうしてかか懐かしさと寂しさが芽生えてきた・・・小さい頃は自分にべったりで自分以外の他人には心を開かなかったのに

そんな事が頭に過ぎっている中突然シプレ達が慌てた表情で植物園に入ってきた。

シプレ「二人とも大変ですぅ!!!!」

大人「どうしたんだ?シプレ」

シプレ「怪獣が出てきたですぅ!!!!」

つぼみ「なんですって!?・・・ゴルザですか?」

シプレ「ち、違うですぅ!!で、でもゴルザなんかより凄い凶暴ですぅ!!!」

大人「まさかチビたちの星の生物たちが!?・・・つぼみ急ごう!!!」

つぼみ「はい!!!!」

大人とつぼみはシプレを先導させてカブトゼクターで怪獣が暴れていると言う場所に向かう。そしてその怪獣とはなんと・・・・

レッドキング（父）「ピギャゥゥウウゥウウウウ!!!!!!!」

レッドキング（母）「ピギャァアアアアァアアア!!!!!!!」

なんと暴れているのはチビキングの親である2匹のレッドキングで

あった。２匹のレッドキングは紅い目から邪悪な眼光を放ちながら町を破壊していき人々を襲う。それを阻止しようとマリン、サンシャイン、ムーンライトがマントを纏い空中戦をガタック、ダークカブト、、フェアリーはライダーシステムの陸戦メカで、更に既にＧＵＴＳ隊のウィング１号、２号までもが出撃していた。

大人「・・・・まるで戦場だ」

逃げ回る人々、辺りに起こる炎と爆発、ウィングから発射されるミサイルとレーザー、暴れるレッドキング達・・・平和だったはずの希望ヶ丘がいきなり戦場となったその様に大人は言葉が失った。

つぼみ「・・・・どうしてこんな事を」

シプレ「つぼみ・・・シプレ達も戦いに行くですぅ。変身ですっ！！」

つぼみ「はい！！！」

つぼみも言葉が出なかったが今は迷ってる場合ではないとつぼみはココロパヒュームを取り出していき光の衣装に服装が変わる。

シプレ「プリキュアの種いくですぅ！！！」

つぼみ「プリキュア・オープンマイハート！！！！！」

つぼみはピンク色のプリキュアの種をココロパヒュームに装填していきピンク色のそこから発せられる光の香水を身体に噴きかけていきキュアブロッサムの姿に変身する。

ブロッサム「大地に作一輪の花キュアブロッサム！！！！」

名乗りあげてポーズを取る。

ブロッサム「シプレ行きますよ！！！！！」

シプレ「はいですぅ！！！」

ブロッサムはシプレをマントにして身に纏うと凄まじいスピードでマリン達のもとに向かう。

大人「これ以上悲しみを増やさせはしないの為に得たティガよ俺に力をくれ！！！・・・」

大人はブロッサム達から資格になる場所に移動するとスパークレンスを取り出す。今こそこの力を使って皆を守る時だという決意に同

調したかのようにスパークレンスも光を放っている。そのままそれを天に掲げると・・・
大人「ティガァアアアアアアア！！！！！」
大人はティガの名前を叫びスパークレンスのスイッチを起動するとスパークレンスから発せられたまばゆい光に包まれていき姿が変わっていく。
ブロッサム・マリン・サンシャイン「「「ティガ！！！」」」
ムーンライト「来てくれたのね」
フェアリー「待ってたよ！！！」
ブロッサム達は仲間のティガの登場に待ってましたとでもいうように笑みを見せるとマントで飛んでレッドキング達を惑わせながら町の被害を食い止めようと奮闘する。
ホリイ「あれはあの時の・・・」
シンジョウ「光の巨人！！！」
矢車「彼はやはり・・・」
影山「俺達の味方なのか？」
ムナカタ「・・・何者にせよ敵ではないようだな。全員あの巨人を援護せよ！！！」
ホリイ・シンジョウ・矢車・影山「「「了解！！！！」」」」
ガッツウィングの機体の中でホリイ、シンジョウ、矢車、影山、ムナカタのＧＵＴＳ隊面々もティガの事を信頼し始めていた。彼の正体が分からない以上は信用は出来ないが自分達と利害が同じなら協力するまでだ・・・ムナカタはそう判断すると各員にティガの援護を命じる。
ティガ「チャァアア！！！」
ティガは右手を空に突き上げ左手を顔に添えるような独自のポーズとともにその巨大な姿を現すとレッドキング達に向かっていく。
ダークカブト「大人の奴この前の迷いが完全に吹っ切れたみたいだな・・・」
ガタック「迷いか・・・俺もこの力が俺が使っていいのか迷って

る・・・誰にも相談できないし・・・」
ダークカブト「俺もだよ。でもその答えは俺達が見つけるべきなのかもしれない。この力を使いながら」
ガタック「・・・そうかもな」
ダークカブト「俺達も行こう!!!力を得た責務を果たす為に。」
ガタック「ああ。」
ガタックとダークカブトは大人と同じように誰にも気づかれない場所に移動すると変身を解除して琢磨はアーススパークレンス、傑はデュナミススパークを取り出していき
琢磨「アーーースぅぅうううう!!!!!!」
傑「デュナミスゥーーーーー!!!!!!」
それぞれ赤い光と青い光に包まれていき二人の姿が光の戦士に変わっていき光が消えてなくなる頃には光の巨人ウルトラマンアースとウルトラマンデュナミスが現れる。
アース「シュワ!!」
デュナミス「ハッ!!!」
ブロッサム「アースとデュナミスも来てくれたんですね!!」
マリン「よっしゃぁ!!これなら絶対に負けないよ!!!」
サンシャイン「うん!!!」
ムーンライト「3人とも彼らに負けないように私達の力を見せるわよ!!!」
ブロッサム・マリンサンシャイン「「「はい!!!」」」
アースとデュナミスの出現にブロッサム達はコレで仲間は揃ったと強気な態度になっていくがムーンライトはティガ達に負けないように自分達の力を見せてやろうとブロッサム達を先導しティガ達と共にレッドキングに向かっていくのだがそれに合わせる様に黒いオーラの影が現れる。

全員『!!!???』
???「フォフォフォフォフォフォ!!・・・地球人よ・・・プリ

キュアよ、光の戦士たちよ聞け!!私はバルタン星人!!そし覚えておきたまえよ私が作り上げた《作品》を簡単に壊せないと言う事を」

ブロッサム「貴方はあの子達の星を滅茶苦茶にした異星人!!!!!」

マリン「今度は地球に狙いをつけたってわけ?」

バルタン「あの子達の星?・・・惑星サウリアの事を言っているのならそれは違うな・・・あの星には我々の兵器の《材料》を調達しにいっただけだ」

サンシャイン「兵器の材料・・・まさか!!!」

ムーンライト「惑星サウリアの怪獣達が目的であんな破壊を!?」

バルタン「その通りだ・・・あの星の生物たちは実に我等の兵器の材料には適してたのだ。故に《資源確保》の為に星を殲滅したまでだ」

フェアリー「たったそれだけの理由で・・・《資源確保》のためにあんな事をしたって言うの!!?」

ティガ「・・・(ちょっと待てじゃあ今目の前にいる怪獣ってまさかチビ達の仲間なんじゃ!?)」

バルタン「ウルトラマンティガ・・・貴様の考えている事は当たっているぞ?貴様の読み通り子の怪獣たちはサウリアの怪獣を私が改造したものだ!!!」

ティガ・アース・デュナミス『!!!』

ブロッサム・マリン・サンシャイン・ムーンライト・フェアリー『!!!』

全員の動揺が一気にレッドキング達とバルタンに向けられた・・・つまりは彼らはただバルタンに利用されているだけに過ぎず無理やり暴れさせられているだけだったのだ・・・こんな卑劣な真似を行ったバルタンにブロッサムであるつぼみはバルタンを普段彼女が見せた事のない形相で睨みつけると・・・

ブロッサム「ふざけないでください!!!・・・平和に暮らしていたあの子達の日常を奪い両親とも離れ離れにされて故郷を離れたあ

の子達の気持ちが貴方に分かるんですか!!??・・・あの子達がどんなにつらい思いで地球に逃げてきたかが貴方に分かるんですか!?」

バルタン「・・・下らんな。私は私の科学力でこの星を制圧するのみ。」

ブロッサム「そんな事絶対にさせません!!!」

バルタン「フン!!ならばやってみるがいい。行けレッドキング達よ!!!」

レッドキング（父）「ピギャァアアアアアウウゥウウ!!!!」

レッドキング（母）「ヒギャァアアァアアアアアアアアア!!!!」

ティガ「ハッ!!」

アース「フゥ!!」

デュナミス「デァ!!」

バルタンの号令に合わせてレッドキング達が自分達に向って来る。

ティガ達はレッドキング達を迎え撃とうと構えるのだったがその前にブロッサム達が彼らの前に立つ。

ブロッサム「待ってください!!!」

ティガ・アース・デュナミス「「「!!??」」」

ブロッサム「あの怪獣たちの私達に任せてください!!!」

ティガ「・・・・（ブロッサム・・・お前）」

マリン「お願い!!。アタシ達が助けてあげたいの。」

アース「（マリン・・・）」

サンシャイン「彼らは利用されてるだけ・・・悪意がないのなら傷つけたくないんです」

ムーンライト「必ず救ってみせる!!!だから貴方達はあの異星人を」

デュナミス「（サンシャイン・・・ムーンライト・・・）

ティガ「・・・ジュワ!!（分かった・・必ずあの二匹を救ってく

れよ！！！）」
ティガはいやティガやアース、デュナミス達はブロッサム達の必死の決意と熱い思いが伝わったらしくブロッサム達のレッドキングの事を全てを任せると言うかのように首を縦に振る・・・アースもデュナミスも賛同したように頷く・・・彼女たちなら救えるかもしれないと確信したかのように。
ブロッサム「ありがとございます！！！任されたからには必ずあの二匹を助けて見せます！！！」
マリン「うん！！うっしゃー行くよ！！！」
サンシャイン「あの二匹の心の闇を私の光で照らしてみせる。」
ムーンライト「プリキュアの力が破壊だけじゃない事をバルタンに教えてあげなきゃね」
ブロッサム達はレッドキング達をティガ達はバルタンに狙いを定めてそれぞれの戦いをしに向かうのだった。そしてバルタンはプリキュアの奇跡を目の当たりにすることとなる事にまだ気がついて気なかったのだった

第6話「冷徹な思想」（後書き）

今回は前篇となりました（汗）次回こそはバトルを描きたいと思います＾＾

次回もお楽しみに♪

第7話「バルタンの誤算」（前書き）

前回までのあらすじ～
突如出現した二匹のレッドキングは惑星サウリアで暮らしていたチビキング達の両親であった。そしてダークの第2の刺客バルタンも現れて惑星サウリアの出来事を冷徹に語る。怒りに燃えるブロッサム達はレッドキング達を救うために戦いを挑む。

第7話「バルタンの誤算」

レッドキング（父）「ピギャゥウウウウウゥウウ！！！！」
レッドキング（母）「ピギャァアアアアアアあ！！！！！」
レッドキング達はバルタンに命令に従うべくティガ達に突進していくが彼らの前にブロッサム達が現れ二匹を静止する。
ブロッサム「貴方達の相手は私達です。」
レッドキング（父）「ギシャゥウウウゥウウ！！！！」
二匹は《邪魔するなぁ》とブロッサム達に襲いかかるが小回りが利く彼女達はレッドキングの攻撃を可憐に避けて見せる・・・そして気がつけば二匹はバラバラにされていてブロッサム・マリンのチームとサンシャイン・ムーンライトのチームに別れさせられているのだった。当然コレはブロッサム達４人の作戦であり町の被害を最小限にするとともに自分達に有利になる様に形勢なるように仕向けた事であったのだ。
ブロッサム「貴方達の苦しみ、怒り全てがバルタンに利用されているだけ・・・だから必ず助けて見せます！！！」
マリン「ちょっと痛いけど・・我慢してよ！！！」
ブロッサム・マリン「プリキュア・ダブルインパクト！！！！」
レッドキング（父）「ピギャァアアア！！？？？」
ブロッサム、マリンのペアは体格が一回り大きいレッドキングにターゲットを絞り先ずは体力をなくそうとある程度のパワーでセーブしながらレッドキングに攻撃を仕掛ける。勿論レッドキングも攻撃はするのだが素早い二人の動きに攻撃が当たらないのだ。業を煮やしたレッドキングはビルを持ち上げて岩投げをするかのように２人に自分が持つ腕力を見せつけるかのように得意げな顔でアピールを見せる。
レッドキング（父）「ピギャァアァアウウウ！！！・・・グッフフフ！！」

ブロッサム「な、なんて力なんですか！？」
マリン「す、スゴイ・・・って感心してる場合じゃないっての！！！マリン・シュート！！！」
ブロッサムはビルを軽々と持ち上げたその姿に言葉を失うのだがマリンは危険を感じてレッドキングに向かってマリンシュートを発射してしてビルを破壊を狙うのだがマリンのマリン・シュートに驚いたレッドキングは思わずビルを持っていたその手を離してしまいそのビルが重力に従って彼の足の上にゴチンと凄い音を立てて落下したのだった
レッドキング（父）「！！？・・・ピ、ピギャァ～～～グゥゥウウ～～～っ！！！！」
ブロッサム「あ、あらら（汗）」
マリン「自分の足にビルを落としちゃったよ・・・痛そう～」
ブロッサム「そうですね・・・・あ！！今がチャンスです。今のうちにフォルティシモの準備を！！」
マリン「え！？でもデザトリアンじゃないのに効果あるのかな？」
ブロッサム「分かりません・・・でも傷つけずに正気に戻す頃が出来るかもしれません・・・やってみる価値はあります！！！」
マリン「・・・分かった！！試してみよう！！」
レッドキングはあまりの痛みに思わず頭を抱えて飛び回るのを見てブロッサムとマリンはあぁ～あとでも言うかのような顔していたがコレはチャンスだと思いフラワータクトを召喚しようと自分のプリキュアのコスチュームの胸の所にあるクリスタルに手を当てる。
ブロッサム・マリン「「集まれ花のパワー！！！」」
ブロッサム「ブロッサムタクト！！！」
マリン「マリンタクト！！！」
二人の掛け声に合わせる様にブロッサム、マリンのクリスタルはピンクと青の光を放つ。ピンク色の光からはブロッサムの専用アイテムのブロッサムタクトがブロッサムの手に、青い光からはマリンの専用アイテムのマリンタクトが召喚されて二人の手に握られるそし

て中心のクリスタルドームを回すと先端にピンク青の二つの光がタクトに集まり輝きを放っていくとプリキュアの聖なる花のエネルギーが溜まる。
ブロッサム・マリン『集まれ二つの花の力よ！！プリキュア・フローラルパワーフォルティシモ！！』
二人はタクトでフォルテッシモ記号の様な形をしたピンクと青のエネルギーを作り出すとそれを身に纏った後二人は手をつないでレッドキングにものすごいスピードで突撃していくと貫通してレッドキングの身体にハート型の穴が開く。
ブロッサム・マリン「「ハートキャッチ！！！！」」
ブロッサム・マリン「「はぁあああぁあああああーーーーーっ！！！！！！！！！！！！！」」
次の瞬間レッドキングは大爆発を起こして辺りに爆風が漂う。そして二人はタクトのクリスタルドームを回していき花のエネルギーを送り込んでいくと後ろにピンクと青の花がレッドキングを優しい光が包み込むように浄化していく・・・
ムナカタ「アレがプリキュアの技か？」
矢車「リーダー彼女達を援護しますか？」
ムナカタ「焦るな矢車・・・彼女達の攻撃がどんなものか分からない。それに今無理に攻撃をしたら彼女達の邪魔になるかもしれない・・・此処は様子を見よう」
矢車「はっ！！！（フォルテウェイブが決まれば恐らく大人しくなるだろうがね）」
矢車と影山はかつてキックホッパー、パンチポッパーとしてブロッサム達と戦った事があるため彼女達の力は殆ど分かっていた。だからこそフォルテッシモが決まればレッドキングも大人しくなるかもしれないと言う事は予想が出来ていたのだった。そしてウィングの中からブロッサムとマリンが浄化していくのを見守るＧＵＴＳ隊達。
勿論失敗すれば即座に攻撃を再開する準備を整えているため迅速な対応は臨機応変に出来るようになっていた。

レッドキング（父）「ピギャァ～ウ・・・」
光がおさまるとそこには正気を取り戻したレッドキングがあたりを見回すような仕草をしていた・・・赤く光っていた目はレッドキング特有の白目のない黒い目となっていた事が正気を取り戻した証拠であった
レッドキング（父）「ピギャ～ウ！？（私は一体今まで何を？）」
ブロッサム「やりました！！」
マリン「やっぱりプリキュアの力って凄い！！！」
レッドキング（父）「ピギャウ、ピギャァ～！？（君達が私を？）」
ブロッサム「大丈夫です。暫くそこで休んでてください。」
マリン「すぐに貴方のもう一匹の仲間も助けて見せるから♪」
レッドキング（父）「ギャ、ギャウゥ・・・（ありがとう・・・そして申し訳ない）」
レッドキングはその場に膝をついて身体を休める様に動かなくなる。
当然ＧＵＴＳ隊はレッドキングに攻撃することはしなかった。折角の感動を打ち砕く事はしないと言うムナカタの気配りと矢車と影山の配慮があったからである。

サンシャイン「はぁあああーーーっ！！！！」
ムーンライト「ふっ！！！やぁあああーーっ！！！！」
サンシャイン、ムーンライトのペアともう一匹のレッドキングの戦いにも時間の経過と共に流れが出来始めていた。的が小さい事や小回りが利く事、更には技の多さなどがその要因でありレッドキングのパワーも彼らには通用せずに体力だけを削られていく・・・勿論コレが二人の狙いである。
サンシャイン「花よ舞い踊れ！！！プリキュア・ゴールドフォルテバースト！！！！」
此処でサンシャインがクリスタルから黄色の光を放つとタンバリン型のサンシャイン専用アイテムの『シャイニータンバリン』が召喚

される。そして外側のドーム部分を回していくと中心にエネルギーが溜まり必殺技のゴールドフォルテバーストが発射される。勿論コレは囮でレッドキングの動きを封じるためのものであるため沢山のヒマワリの花の様なエネルギー弾がレッドキングの動きを封じる。

レッドキング（母）「グギャァアウウウ!??」

レッドキングはどうにかして逃れようと暴れ回るのだが力ではこの技の拘束を解くことなど不可能であった・・・そしてその隙にサンシャインとムーンライトはどうするかを考える。

サンシャイン「何とか動きを封じましたけどどうしましょう?このままではあの子を甚振る事にしかならない・・・」

ムーンライト「そうね。今はフォルテバーストで動きは封じられてるけどコレじゃ根本的な解決には・・・」

ブロッサム「サンシャイーーン、ムーンライトーーー!!」

ムーンライト「!??・・・ブロッサム!!」

サンシャイン「マリン!!」

此処で父親の方のレッドキングを浄化できたブロッサムとマリンがサンシャイン、ムーンライトと合流するのだった。そして傷つけずに助け出すにはフォルテウェイブが有効であると言う事を説明する。

ムーンライト「分かったわ・・・なら全員でフォルテッシモよ!!!」

ブロッサム・マリン・サンシャイン『はい!!!』

サンシャイン・ムーンライト「プリキュア・フローラルパワーフォルティシモ!!!」

先ずは先陣を切ってサンシャインとムーンライトがムーンタクトとシャイニータンバリンをクロスさせていくと黄色と藍色の光に包まれると合体して一つの大きな光になる。そして次は

ブロッサム「次は私達です。いきますよ?マリン」

マリン「やるっしゅ!!!」

ブロッサムとマリンももう一度フラワータクトを召喚していきフォルテッシモの準備に入る。

ブロッサム・マリン『集まれ二つの花の力よ!!プリキュア・フローラルパワーフォルティシモ!!』
ピンクと青の光が融合して一つの光なる。またサンシャインとムーンライトの光りも合わさって４つ分の光が動きを封じられているレッドキングの身体を貫通してハート型の穴が開く。そして４人は浄化のエネルギーをレッドキングに送り込んでいく
ブロッサム・マリン・サンシャイン・ムーンライト『はぁあああああぁーーーっ!!!!』
レッドキング（母）「ピ、ピガゥゥウ・・・・」
光がおさまるとともに正気に戻ったもう一匹のレッドキングが横に倒れていた。どうやら今の戦いと無理な改造がたたり体力を使い果たしたらしい・・・そのまま息を荒くしながら身体を休める・・
ブロッサム「大丈夫!?」
レッドキング（母）「ピ、ピギャウゥ～～（な、何とか・・・）」
マリン「・・・改造された負担とアタシ達との戦いで体力を使い果たしたんだ」
サンシャイン「・・・平気でこんな事をするなんて」
ムーンライト「絶対に許せないわ!!皆私たちもティガ達の援護に行くわよ!!!」

ブロッサム達プリキュアがレッドキング達を浄化し終えたその頃ティガ達はバルタンと戦っていたのだがかなりの苦戦を強いられていた。バルタン特有の分身攻撃や光波バリアーという光線を無力化するバリアによって３人がかりでも中々思う様に戦えないのだった・・・此処でアースはバーンナックルで拳に炎を纏いデュナミスはデュナミスセイバーを発動させて氷の剣を造り出す。
アース「デヤァアア（うぉおおおぉ!!!!!!）」
デュナミス「ダァアアアアアア（はぁあああああっ!!!!!）」
二人は勢いよく走りながらアースは炎の拳でデュナミスは氷の剣でバルタンに攻撃を仕掛けるのだったがバルタンが易々と攻撃をさせ

てくれるわけがなかった。
バルタン「愚かな！！」
アース・デュナミス『！！？？』
何とバルタンの腕が二人の腕を掴んでいくとそのまま勢いよく投げ飛ばされてしまった続いてティガがプロテクターにエネルギーを送り込んでティガスライサーを放つがそれは光波バリアーで砕かれてしまった
ティガ「グゥウ！！（強い・・・何かつけいる隙があれば！！）」
バルタン「フォフォッフォフォ！！！貴様らでは私には勝てん。大人しく私の実験材料のサンプルになりたまえ！！！」
ティガ・アース・デュナミス『ウワァアアアアァア！！！！！』
バルタンの鋏から白色破壊光線が放たれると辺りを爆発させながらティガ達3人に大ダメージを与えエネルギーを消耗した3人のカラータイマーが鳴り始める。
カラータイマー『ピコンピコンピコンピコン！！！！！』
ティガ「グゥ！！・・・アァアッ！！！」
アース「ウゥゥ・・・グゥフォォ・・・」
デュナミス「ガァアア・・・ウウゥウ！！」
3人は悶え苦しむが決して諦めなかった・・・このまま負けるわけにはいかない・・・この町を守れるのは自分達しかいないのだ・・・その使命感を胸にフラフラのカラダに鞭を打ちなんとか立ち上がるがすぐにバルタンが近づき3人に鋏での衝き攻撃としなやかな足でのキックを見舞わせてふっ飛ばす
バルタン「ふん・・キリエルが負ける理由が分からん。所詮貴様らなど下等生物と同じ。私になど勝てるわけがない！！」
ティガ「ハァ、ハァ・・・・グゥウウ！！！」
バルタン「先ずは貴様からトドメを刺してやろう・・・ウルトラマンティガ！！！」
バルタンが最初にティガからトドメを刺そうと鋏で首を掴んで持ち上げると腹にもう片方の鋏を押しあてる。そして赤い光を集めてい

くと特徴的な笑い声を発する・・・ティガは必死に抵抗するがバルタンの鋏から逃れられない・・・アースとデュナミスはティガを助けようと身体を動かそうとするが力が入らず思う様に動かない・・・ティガもアースもデュナミスも諦めかけたその時

ブロッサム・マリン・サンシャイン・ムーンライト『はぁあああああーーーーっ!!!!!!』

バルタン「っ!?・・・グォォオオオ!!!!??」

トドメの一撃がティガに決まる前に４つの光がバルタンの横っ腹に直撃してバルタンを勢いよく後ろにふっ飛ばした。ギリギリのところでブロッサム達がティガを助け出したのだ。

ティガ「ウワァッ…ハッ!!」

ティガは膝をついて呼吸を整えていた。一瞬の出来事で何が起こったのか分からなかったが声のほうを見るとそこにはブロッサム達が堂々とポーズをとり彼らの窮地に駆け付けたのだった。

ブロッサム「お待たせしました!!あの子たちは無事に助け出せましたよ!!」

バルタン「な、何ぃ!?・・・私の完璧な≪作品≫が貴様ら下等生物に破られたと言うのか!?」

ブロッサムはティガを労わる様に近づきレッドキング達を無事に助けた事を伝える。それを聞いたバルタンが驚きの声を上げるがそれに反論するかのようにマリン達がバルタンのほうを睨みつける。

マリン「あの二匹はアンタの作品なんかじゃない。ましてや町を破壊する道具でもないよ!!!」

サンシャイン「平和に暮らしていたあの二匹の日常を壊した揚句自分達の目的の道具にした・・・その行為は決して許されないわ!!」

ムーンライト「貴方のエゴで犠牲になったあの二匹の痛み、悲しみ、怒り・・・ありとあらゆる感情を受けてみなさい!!!!」

バルタン「フォフォフォフォフォフォ!!!奴らの悲しみや怒りだと?笑わせる・・・下等生物に感情など・・・」

ブロッサム「黙りなさい!!!」

バルタン「何！？」
マリン、サンシャイン、ムーンライトが自分達の思いをバルタンにぶつけるバルタンは理解できないと彼女達をあしらう様に笑い声をあげて更に見下した言葉を発しようとしたがそれをブロッサムが無理やり止めた。
ブロッサム「先ほどから下等生物と彼らを見下していますが貴方の心のほうがよほど劣っています！！！」
バルタン「何だと！？貴様などに私の思想など分かるわけが・・・」
マリン「分からないよ・・・それに分かりたくもない！！！！弱いものを虐めて自分のいいように利用する卑怯者の思想なんかね！！」
バルタン「き、貴様らぁ！？」
ブロッサム「貴方の下らない目的の為に罪もない二匹を利用するなんて・・・私堪忍袋の緒が切れました！！！」
マリン「海より広いアタシの心も此処らが我慢の限界よ！！！」
ブロッサムとマリンの決め台詞の後にティガ、アース、デュナミスの3人も立ち上がる。カラー―タイマー点滅が早くなるがそれでも関係ないと構えを取りバルタンを睨みつける。
ティガ・アース・デュナミス！！！「シャァアアア！！！！！」
ティガ「（例え貴様の科学力が如何なるものであろうと俺達ウルトラマンとプリキュアが悪しき野望を打ち砕く！！！）」
バルタン「己ぇ～下等生物どもがぁ！！！喰らえぇえぇえ！！！」
ブロッサム「やぁあああっ！！！！てやぁあああっ！！！」
マリン「たぁあああーーーっ！！やぁああ」
サンシャイン「サンフラワー・イージス！！！」
ムーンライト「ふんっ！！！はぁあああぁあああーーーっ！！！」
ティガ「ハァアアッ！！！フン！！チャァアアアアア！！！」
アース「デヤァア！！！ハァアッ！！！シャァアア！！！」
デュナミス「シュワァアア！！！ダァアアあ！！！」
バルタンは自分の心のほうがレッドキング達よりも劣っていると言われると激昂して腕の鋏から赤、白の光線、光弾を放っていくがテ

ィガ、アース、デュナミス、ブロッサム、マリン、サンシャイン、ムーンライトが町に被害が及ばないように全て跳ね返す。すると光線・光弾乱れ撃ちがバルタンに返されて逆にバルタンが大ダメージを受けることとなった。

バルタン「ぐ、あぁぁあ・・・な、何故だぁあ!!?」

バルタンはダメージを受けると信じられないと言う様に叫んでしまう。この隙にティガ、アース，

デュナミスの3人が必殺技の準備を始める

ティガ「ハッ!!!ンーーーーッ!!! ハァアアアァアアアアアァアアアアッ!!!!!!」

アース「フッ!! ハァアアアァアアア!!!デヤァアアアアアァアアアアアアッ!!!!!!!!!」

デュナミス「フンっ!!ウォオォオオオッ!!タァアアアアアアァアアアアアアア!!!!!!」

バルタン「グアァアアアアアアアアアアアアッ!!!!!!!・・・わ、私も此処までか・・だ、だが我々バルタンの同胞はまだ全宇宙に散り散りとなっているのだ・・・その同胞が貴様らを・・・グッォォオオォォオオオオオオ!!!!!!!!!!!!」

ティガのゼペリオン光線、アースのボルテックストーム、デュナミスのインブレイスバーストの3大光線がバルタンの身体に放たれるとバルタンは最後の捨て台詞を吐き捨てると大爆発を起こして消滅した。

ティガ・アース・デュナミス『ジュワァアアッ!!!!』

ティガ、アース、デュナミスの3人はバルタンの消滅を確認すると空へと飛び立っていた。

ブロッサム「ありがとうございます。ティガ、アース、デュナミス」

その姿をブロッサム達はしっかりと見送る。戦いが終わり休んでいるレッドキング達の所に行くとGUTS隊のウィングが既に近くで着陸していたのだった。

ムナカタ「麻酔弾とワイヤーをスタンバイ」
シンジョウ「了解！！」
ブロッサム「あ、あの！！あの二匹をどうするつもりなんですか？」
既にムナカタが何やら準備を始めていた。まさかこの二匹を殺すんじゃ？そんな不安をブロッサムが思わずムナカタに問い掛けてしまうムナカタ「・・・心配はいりません。悪意がない以上は我々ガッツが責任を持って保護します。貴女達の努力は無駄にはしません！！！」
マリン「ホントに！？」
サンシャイン「よかったぁ！！！」
ムーンライト「・・・宜しくお願いします」
どうやらあの二匹はＴＰＣの管轄内で保護されることになるらしい。それを聞いた４人特にブロッサムは喜びが隠せなかったのだった。
カブト・ガタック・ダークカブト・フェアリー『お～～いブロッサム！！』
ブロッサム「あ、カブト、それに皆さん！！」
カブト「凄かったな４人とも」
ブロッサム「そ、それほどでもないですよ」
マリン「あ、ブロッサム顔が赤いよぉ～」
ブロッサム「そ、そんなことないでよぉ～」
カブトにほめられた時なぜかブロッサムは照れている仕草を見せていた為マリン達にからかわれる。そして一同は戦いで壊された町の修復を手伝いを行い一日を費やすのだった

その頃のとある海底
ダーク「バルタンめ・・・あと一歩のところでプリキュアを甘く見たな・・・まあいい。奴の同族はいくらでもいるから代わりは沢山いる。それに奴は奴で私にとっては≪資源≫でしかないからな」
ダークにとってはバルタンの死などどうでもよく寧ろ使い捨ての駒としか見ていなかったのだ。下等生物と他の生物を蔑んでいたバル

タン自身もダークからすれば使い捨ての下等生物であったと言う事なのかもしれない。闇が広がる深海でダークはティガ達ウルトラマンとブロッサム達プリキュアの脅威に苛立ちが募るのだった。

第7話「バルタンの誤算」（後書き）

今回はバルタンを強くしすぎたかな?でもバルタンの設定を活かすならこれ位強いと思います＾＾；

さて次回はダークの最後の側近を紹介しようと思います。

次回もお楽しみに♪

第8話「データ収集」（前書き）

前回までのあらすじ～
ブロッサム達の渾身の力がこもったフォルテッシモで二匹のレッドキング達を巣食う事が出来た。バルタンは自身の科学力に溺れた事が仇となりティガ達に逆転のチャンスを与えて3巨人の合体光線の前に敗れ去った。

追伸；ブロッサムファンの方本気でゴメンなさい！！！！！どうしてもつぼ大で描きたかったんです！！！ファンの方に不快な思いをさせてしまう事を此処で謝っときます！！！！！↑土下座

第8話「データ収集」

大人「あぁ～身体中痛い・・・こりゃライダーの能力以上に性質が悪いかも」
先日の戦いのダメージが身体に残っている大人・・・いくら力が超人レベルでもそれを使うのは所詮は人間であるため受けたダメージはそのまま大人のカラダに蓄積されるのだった。その為今日は学校が休みである事もあり一日中家でダラつこうと思ったのだが大人の携帯が鳴る。
大人「・・・誰だ?・・・・つぼみだ・・・どうしたんだろ?は～いもしもし。」
電話の相手はつぼみであった。つぼみからかかってくるのは珍しいため何だろうと思って電話に出る大人
つぼみ「もしもし大人さん今時間大丈夫ですか?」
大人「一応今日は暇だけどどうかしたの?」
つぼみ「いや、その・・・もしよかったら遊びにでも行かないかなと」
大人「あ、いいよ～どこに行こうか?」
つぼみ「実は特に考えてないんです・・・それに私と二人きりだと・・・・その」
大人「ん?夕の事言ってるの?・・・実は俺夕とは別れたんだ」
つぼみ「えぇえ!?」
大人「まあまだ誰にも言ってないから知らないのは無理ないか。だから・・・別につぼみと二人だけでも問題ないよ?」
そう実は大人と夕は別れていたのだ。理由を話すと長くなるのだが簡潔に言うと大学に入ってからお互いに夢を目指す事に集中することとなりお互いに『仲間』である関係は変わらないのだが『恋人』としての関係は解消することでお互いに同意したのだった。因みに言いだしたのは大人に告白した夕であった。

つぼみ「・・・（なら私にもチャンスがあるかもですね）だったら映画にもどうでしょ？」
大人「映画かぁ～そう言えば映画館では長らく見てないな。じゃあそうしようか」
つぼみ「はい！！じゃあお昼過ぎに植物園に集合しましょう。」
大人「ほいほい～じゃあ昼過ぎに～」
大人はそれだけ言うと電源を切る。これは色々と楽しみだと大人は痛みが走る身体を動かして荷支度をすませようと動きだす。つぼみとのデートがそれだけ楽しみと言う事なのだろう

その頃のとある海底のダークがいる玉座の間ではダーク「キリエルもバルタンも使い物にならんな・・・こうなれば私が・・いや邪神復活の為には私の≪闇≫が必要であるが故に迂闊なことはできん・・・・くっ！！！」
とある海底でダークは苛立った態度が隠せなかった。キリエルに続きバルタンの作戦も失敗したのだから当然と言えば当然だ。バルタンのおかげで怪獣たちと言う≪資源≫は手に入ったがプリキュアがいる以上また浄化されてしまうのが落ちである事は明白だった・・・・こうなれば自分が出るしかないかもしれないとダークは一瞬考えるが邪神復活の為には自分の『闇エネルギー』が必要であるため自分がもし万が一負ける様な事があれば全てが水の泡となるため迂闊なことは出来ない・・・ではどうすればいい？と考えているところに一つの影が彼に近づいていた。今度は人間の女性のような影だった。
？？？「ダーク様・・・今度は私が」
ダーク「お前はサロメ星人のドクタークレイズ・・・・・プリキュアに有効な作戦があると？」
クレイズ「はい。対プリキュア兵器は完成しつつあります・・・しかし完成の為には3年前に砂漠の使徒の科学者のサバ―クが残した研究の『遺産』に適合できる者が必要です。・・・私は『月の影』

と呼んでおりますが」
ダーク「『月の影』とは例のアレか？・・・・だがアレはムーンライトに敗れたと私は記憶しているぞ？一度破れた者が勝てるとは思えぬが？」
サロメ「ご安心を・・・私の作戦に狂いはありません。必ず《適合者》をみつけだします。そして対ウルトラマンの兵器は我々サロメの高度なロボット技術にお任せを。オリジナルのデータ収集の作戦も既に考案済みでございます。」
ダーク「いいだろう。キリエル人やバルタンの二の舞にならん事を期待しよう・・・行け！！」
サロメ「ははっ！！！！」
クレイズは闇の扉から姿を消す。対プリキュア用の兵器の『月の影』とは一体何なのか？そしてクレイズがいうサロメのロボット技術とはつぼみ「ちょっと早すぎましたね・・・はぁ～初デートなだけに緊張します」
ちなみにつぼみはこれが初デートであり前日にえりかといつきからアドバイスを受けたがそれでもかなりの緊張してしまっているのであった。
大人「ちょっと早かったかな？・・・・そうでもなかったみたいだ。お～い！！待った？」
つぼみ「いいえ。私も今来たとこですから（と、とうとうこの時が来ちゃいましたぁ～。物凄く緊張します）」
とか言いながら実際は緊張のあまり３０分前から待っていたつぼみである。前日えりかといつきに協力してもらいデート用のコーディネートを手伝ってもらった事などいろいろと準備はコッソリとしてきているのであった。
大人「（つぼみってこんなに可愛かったっけ？・・・な、なんだろ？今日は可愛く見えるぞ）」
今日のつぼみのコーディネートに心の中でそんな叫び声をあげてし

まう大人・・・何せつぼみのイメージは未だに自分の妹の様なイメージしかない為『可愛い』という感情が今まで芽生えていなかった・・・だが今日は違った。一人の女の子としての魅力が今日は感じられたのだった。

大人「じゃそろそろ・・行こうか？」

つぼみ「は、はい！！」

お互いにしばらく心の中でいろいろ考えていたがそろそろ出掛けようかと大人が声を掛ける。つぼみもそれに合わせて一緒に植物園から出口へと歩く。しかし実はその後ろには・・・

えりか「昨日突然デート用のコーデを教えてくれって言うからおかしいと思ったらこう言う事だったんだぁ～」

いつき「つぼみは大人さんに気があるみたいだね。意外だったなぁ～」

ゆり「ええ。でも大人と夕が別れていたって言うのも新事実ね。（本当はこう言う事したくないけど・・・つぼみと大人の事が気になっちゃうし・・・今回はいいわよね・・・）」

なんと植物園の物陰でえりか、いつき、ゆりの3人がつぼみの応援（本当は興味本意）をしようと実はえりか経由で様子を見に来たのだった。応援というよりは殆ど面白半分の行動にしかみられないが・・・そんな監視（えりか達）があるとは知らないで二人は色々と雑談しながら目的との映画館にたどり着いた。

大人「色々あるね～つぼみは何見たい？」

つぼみ「そうですね。アクション系もいいすけど恋愛ものも捨てがたいです！！」

大人「う～んどうしようかなぁ。」

えりか「映画で何を見るかで悩んでるみたいあぁ～もう何かじれったいなぁ！！！」

いつき「つぼみはともかく大人さんも結構優柔不断みたいですね」

ゆり「まあいいんじゃない？二人ともそう言う所は似てるんだし」

二人が何を見るかで悩んでいるすぐ近くでえりか達は歯がゆそうに状況を見ていた。するとやっと決まったようである。今回はどうやらアクション系映画にしたらしい。

大人「先に行っててくれ飲み物とか買ってくるから」

つぼみ「分かりました。」

つぼみを先にシアターに行かせて大人は何か飲み物でも買おうとショップに行くのだがその途中で見覚えのある顔が見えた・・・

大人「・・・今えりか達が見えたような?気のせいか?おっと早くしないと映画が始まってしまう」

そんな疑いを持ちつつも大人はつぼみを待たせては不味いと思い急いで適当に飲み物とポップコーンを買いつぼみがいるシアターへと向かうのであった。

えりか「あ、危なかった（汗）」

いつき「大人さん感が鋭いから見つかるかと思ったよ」

ゆり「私達も映画見に行きましょうか?」

えりか「そうですね～つぼみの事が気になるし!!」

いつき「（まだ続けるんだ）」

えりか達も大人とつぼみに見つからないようにチケットを買いに行き同じシアターで映画を見ることにした。そして映画が終わり今度は近くの遊園地に行く事になった。

大人「いろいろ増えてるな～小さい頃言って以来だから懐かしぃ～」

つぼみ「ホントですね。何から乗りましょう!?」

大人「やっぱり最初はアレでしょ!!」

つぼみ「ですね!!いきましょう♪」

というわけで最初に乗ったのは定番のジェットコースターにのりその次はコーヒーカップ、ゴーカートと色々なアトラクションを堪能する。そして最後はやはり定番の観覧車に・・・・

大人「うわぁ～いい眺め♪」

つぼみ「うぅ～（汗）」

大人「あら?どうしたつぼみ・・・あ、もしかして高いとこダメだった?」
つぼみ「は、はい・・・観覧車だから大丈夫だと思ったんですけど・・・やっぱり駄目でした(泣)」
大人「あらら~(汗)。でも大丈夫だよ俺がそばにいる」
つぼみ「あ・・・///(大胆すぎです・・・は、恥ずかしい)」
大人は高い景色に怯えるつぼみの手を掴んで落ちつかせる。つぼみは大人の大胆な行動に顔を赤くする・・・そして観覧車の中でいいムードとなる。
大人「はぁ~今日は楽しかった!!」
大人は身体を伸ばし今日一日の事を振り返った。久々にこんなにリフレッシュ出来てかなり充実した一日だった。大学に入ってからは一人でいる事が多かったからこんなに楽しくて充実したのは本当に久しぶりだったのだ。
つぼみ「そう言ってくれると嬉しいです♪・・・あ、あのもしよかったら・・・また誘っても?」
大人「勿論!!」
つぼみ「あ、ありがとうございます!!じゃ、じゃあ今度は何処に行きましょう!?」
大人「おいおい。そんなに急がなくても」
つぼみ「あ、すみません(汗)」
大人「ははっ♪そう言う所は変わらないね」
えりか「いいムードじゃん」
いつき「二人ともお似合いって感じ」
ゆり「ホントね。楽しそう」
後ろにはとある3人組が様子を見ているがそんな事に気がつかない二人は遊園地での帰り道中昔の事や自分の夢の事そして今の事を語り合った。つぼみは植物学者になる事が夢は変わらないらしい。そして宇宙に美しい花や大地を作りたいそんな大きな夢を持っていた。そのためにも今大人がいる明堂院大学の進学を考えているとか。ま

さに最高のムードだったのだが突然二人のムードをぶち壊す輩が町に出現するのだった。

テレスドン「グォォオオォオ！！！グァアアァアア」
大人「ちょ・・いきなり怪獣が出た」
つぼみ「！！！（折角楽しんでたのに～・・・もう！！）」
えりか「ちょと二人とも何ぼっとしてんの！！！」
大人「！？・・・えりか、いつきにゆりまで何でここにいるの？」
えりか「え？・・あぁ～それは色々と・・・ってそんな事は後でいいから今は町を守るよ！！」
つぼみ「はい！！！」
大人「つぼみ達は奴の気を引いていてくれ。俺は町の人々の避難と琢磨達に連絡を取るから！！」
いつき「分かりました！！」
大人は近隣の町に被害が出る前に避難誘導をするとその場を後にする。当然目的はそれだけではない。
ゆり「皆いくわよ！！」
シプレ・コフレポプリ「「「プリキュアの種いくですぅ～～！！！」」」
つぼみ・えりか・いつき・ゆり「『プリキュア・オープンマイハート！！！！』」
ゆりの合図に全員突如現れた地底怪獣テレスドンに全員の視線が一転に集まると光に包まれて私服を光を放つワンピースの様な姿に代わるとこころの種を妖精達に召喚させてソレを変身アイテムのココロパヒューム、シャイニーパヒューム、ココロポットに装填しつぼみ、えりか、いつきは光の香水を浴びプリキュアのコスチュームを装着しゆりはココロポットから放たれる藍色と銀色の光に包まれてプリキュアコスチュームを身体に纏う。全員が変身完了し４人でポーズをビシッと決め名乗り上げに入る。
ブロッサム「大地に咲く一輪の花キュアブロッサム！！！」
マリン「海風に揺れる一輪の花キュアマリン！！！」

サンシャイン「陽の光浴びる一輪の花キュアサンシャイン！！！」
ムーンライト「月光に冴える一輪の花キュアムーンライト！！！」
ブロッサム・マリン・サンシャイン・ムーンライト『ハートキャッチプリキュア！！！』

テレスドン「ギシャァアア！！！！！」
ブロッサム・マリン「はぁあああーーー！！」
テレスドンに先制攻撃とブロッサムとマリンのダブルパンチがテレスドンの腹部に叩きこまれるがテレスドンの堅い皮膚には通用しない。
ブロッサム「な、なんて硬さなんですか？」
マリン「まるで鋼鉄だよ」
テレスドン「ガァアアウゥウウウウウ！！！！」
ブロッサム・マリン「きゃぁあああああああ！！！！！」
テレスドンは強靭な肉体の防御力をブロッサム達に見せつけると今度は此方の番だと巨大な腕をブロッサム達に叩きつけてブロッサムとマリンを町のほうに思いっきり吹っ飛ばすがそれをサンシャインとムーンライトが受け止める
ブロッサム「あ、ありがとうございます」
マリン「なんてパワーなのよ・・・あの堅い身体にはアタシ達の攻撃は通用しないよ！！」
サンシャイン「せめて町を守る事が出来れば・・・」
ムーンライト「こうなったら一気に決める方がよさそうね。皆でフォルテウェイブを！！」
ブロッサム・マリン・サンシャイン『はい！！！』
ブロッサム・マリン・サンシャイン・ムーンライト『集まれ花のパワー！！！』
ブロッサム「ブロッサムタクト！！！」
マリン「マリンタクト！！！」
サンシャイン「シャイニータンバリン！！！」

ムーンライト「ムーンタクト！！！」
ブロッサム・マリン・サンシャイン・ムーンライト『はぁあ！！！』
こうなれば一気に浄化して大人しくしようと全員がクリスタルに手をあてそれぞれブロッサムタクト、マリンタクト、シャイニータンバリン、ムーンタクトを召還させるとそれぞれクリスタルドームを回していってエネルギーをタクトとタンバリンに充填させる。
ブロッサム「花よ輝け！！プリキュア・ピンクフォルテウェイブ！！！」
マリン「花よ煌めけ！！プリキュア・ブルーフォルテウェイブ！！！」
サンシャイン「花よ舞い踊れ！！プリキュア・ゴールドフォルテバースト！！！」
ムーンライト「花よ輝け！！プリキュア・シルバーフォルテウェイブ！！！」
全員の必殺技がテレスドンに叩きこまれ浄化の手順に入ろうとしたがその瞬間に新手が出現しブロッサム達に光線が放たれる。
ブロッサム・マリン・サンシャイン・ムーンライト『うわぁあああああっ！！！！！』
何とテレスドンの援軍として用心棒メカ『グランドランザー』と呼ばれるドクタークレイズのロボットメカが2体現れる。いくら自分たちが持つプリキュアの力が浄化の属性があるとしてもそれは『心』があるものにしか通用はしない・・・機械相手にはまったくもって無意味なのだ。ブロッサム達はそれでもあきらめずに立ち向かうが体力だけが消費されていく一方ロボットのグランドランザーやテレスドンは体力ではかなり上回り持久戦では不利だった。
ブロッサム「はぁ、はぁ、はぁ・・・このまま持久戦になれば私達が不利です」
マリン「あの真中の奴はともかくあの二体のロボットにはアタシ達の必殺技は通用しないよ！！」
サンシャイン「どうすれば・・・」

ムーンライト「弱音を吐くのは止めなさい!!私達は絶対に負けられないのよ?」
ムーンライトはそう言って励ますが実際には自分たちが不利なのは明らかであり諦めたくなる気持ちは分かる。だが自分達が諦めてしまったら町は破壊され人々に絶望に落とすことになる。だがその気持ちさえも撃つ砕くかのようにテレスドンと二体のグランドランザーが炎をブロッサム達に向けて放つ。
サンシャイン「サンフラワーイージス!!!」
サンシャインが特大の光の盾で炎を防御する。だが3体の合体攻撃の勢いに押され始め盾の真中から全体に亀裂が走る・・・このままでは砕けて自分ごと町が全てが炎に包まれてしまう・・・サンシャインは踏ん張るが限界が近づく・・・そしてテレスドン達が炎の勢いを上げてきたその時・・・

突如青白い光線が炎を消し去った。そして今度は赤い光線と青の二つの光線が3体の怪獣に降り注ぐ。
ブロッサム・マリン・サンシャイン・ムーンライト『!!??』
ティガ「チャァアアアア!!!!!」
アース「デヤァアアアア!!!!!」
デュナミス「ハァアアアアッ!!!」
その正体はティガ、アース、デュナミスの3人のウルトラマンであった。ティガが飛行しながら両腕を光させて後に前方に突き出す事で発射される『ハンドシューター』で炎を相殺しその隙にアースの炎属性を持つ光線『バーニングシュート』、デュナミスの水の属性を持つ『スプラッシュトルネード』が2体のグランドランザーとテレスドンに当てて3体を怯ませる。
ティガ「ハッ!!」
アース「フッ!!」
デュナミス「シャァ!!」
3人は地上の降り立つや否やティガはテレスドンにアースとデュナ

ミスは二体のグランドランザーを相手とする。
ティガ「フッ！！タァアアアーーっ！！！」
テレスドン「・・・ガァアアアアア！！！」
ティガ「チャッ！？・・・ヂュワァアアア」
テレスドン「ギシャァアアアウゥウウウウ」
ティガ「ウーーーン！！ハッ！！！」
ティガは基本形態のマルチタイプで先ずはテレスドンの戦い方の特徴と弱点を探す。パンチとキックでテレスドンにダメージを与えようとするが頑丈な皮膚には効果が見られない・・・ならばパワーが一番高いティガ・パワータイプにタイプチェンジする。
ティガ・パワータイプ「ジュワァアア！！」
テレスドン「ギシャァアアウゥウウウ！！！！」
ティガのエルボードロップがテレスドンの腹に命中するとテレスドンは思わず怯んでしまいそのまましっぽを掴まれてジャイアントスウィングで投げ飛ばされる

アース「フッ！！」
グランランザー「ガガガガガガッ！！！！」
アース「デアァアッ！！」
グランドランザー「ガゴゴオォォオオオ！！」
アース「ダァアアアアアッ！！！！」
グランドランザー「ギギギガガガガ・・・・」
アースは特有のパワーと炎との連携技で機械的な攻撃しか出来ないアースのパワー戦法とバーンナックルの威力に圧倒され満足な戦いが出来ないまま勢いよくアースホイッパーで投げ飛ばされる。
アース「ハッ！！フゥゥウウウーーーー！！！」
グランドランザー「ガガガガガガガガガガガァ！！！！！」
アース「ハァアアアアアアア！！！！！！！！！」
アースはボルックストームの発射態勢に入る。グランドランザーはこのままやられるものかと光線の発射態勢に入るのだがその前にア

ースのボルテックストームがグランドランザーに叩きこまれて大爆発を起こす。

デュナミス「ハァアッ！！」
グランドランザー「ギガガガガガガガッ！！！！」
デュナミスと二体目のグランドランザーの闘いもデュナミスのデュナミスセイバーの剣サバキと素早さを活かした攻撃に圧倒されていた。やはりマシーンと言う心がない相手にはウルトラマンの相手にはならないと言うことらしい。
デュナミス「フン！！！ ハァアアアア」
そして止めのインブレイスバーストがグランドランザーを突き破り大爆発を起こして消滅するのだった。そして残ったのがテレスドンだけとなった。

ティガ・パワータイプ「チャァアアアア！！！！！」
テレスドン「ギシャッゥウウウウ・・・・・ギシャァアアアア・・・・」
パワータイプの力あふれる攻撃にテレスドンとの闘いにも決着がつきそうであった。フラフラになりながらも何とか立ち上がるテレスドンにティガ・パワータイプは止めの一撃の準備にかかる。
ティガ「ハッ！！デヤァアアアーーーー！！！・・・・ハァアアアアア！！！！！！」
両腕を左右から上にあげ、胸の前に高密度に集めた超高熱の光エネルギー粒子の塊を作りだしそれを相手に向かって投げつける。これぞティガ・パワータイプの必殺技のデラシウム光流である。
テレスドン「ギャァアアアアアウゥウゥウゥウゥウ！！！！」
カラータイマー「ピコンピコンピコン」
ティガ・アース・デュナミス『ジュワァアア！！！！』
デラシウム光流を受けたテレスドンは断末魔の悲鳴を上げると大爆発を起こして消滅した。そして構えを解き集まった3人は空を見え

げるとそのまま飛び立っていった。

ブロッサム達も変身を解きふぅ～とため息をついたとこまでは良かったのだがつぼみは何か言いたげに3人を見つめていた。
つぼみ「ところで3人とも何であのタイミングで現れたんですか？」
えりか「あ、それはそのぉ～（汗）」
大人「もしかして俺達二人の事をずっと見てたんじゃないの？映画館の時から」
いつき・ゆり『（ギクゥ！！』
大人「図星か・・・・」
つぼみ「もう～恥ずかしいじゃないですかぁ！！！」
えりか「ごめんごめん～」
つぼみは顔を赤くしながらえりかを追っかけえりかはそんなつぼみから逃げ回る。いつきはゆりはそんな姿を見てにこやかに笑う。こんな平和な時間を守るためにウルトラマンの力があるのかもしれない。だったらこの力は人を守るためだけに使おう大人はそんな思いの中ウルトラマンティガとして戦う事に完全に迷いがなくなったのだった。

クレイズ「バルタンが捕まえてきた怪獣も少しは使えるじゃない・・・これでウルトラマンのデータは完全に集まったわ。あとは≪月の影≫の適合者さえ見つかれば」
サロメ星の科学者ドクタークレイズはその姿を別の所から眺めているのだった。あの3体の怪獣たちも彼女の仕業であるのだがそれは『データ採取』が目的であり初めから期待などはしていなかったのだ・・・ウルトラマンのデータは集まったから後は『月の影』の適合者を探し出す事であった・・・そしてまた同じころ・・・

？？？「此処が・・・希望ヶ丘・・・・」
希望ヶ丘の入り口である少女が立っていた・・・・それがクレイズ

の探している人物なのか？・・・そして『月の影』とは一体何の事を言うのだろうか？

第8話「データ収集」（後書き）

最後の幹部の宇宙人を誰にするかで時間がかかっちゃいました（汗）
いやぁ～恋愛描写はやはり難しいですね・・・何せ作者の私が経験あまり・・・ゲホゲホ・・・失礼＾＾；
そしてもう一度言います。ブロッサムファンの方本気にゴメンなさい！！！！

次回もお楽しみに♪

第9話「漆黒の戦士」（前書き）

前回までのあらすじ～
ダークの新しい刺客ドクタークレイズが3人のウルトラマンのデータを収集するべくテレスドンとグランドランザーを送り込みデータ採取を行い次の作戦の準備にかかっていた。そして同じころ希望ヶ丘に謎の人物の影が・・・

第9話「漆黒の戦士」

？？？「此処が希望ヶ丘・・・此処に私の探しているものがあるかもしれない」

希望ヶ丘の近くの丘で少女が町を見下ろしていた。此処が自分が長い間探していたものが見つかるかもしれない。3年間という長い間ずっと探していた大切なものがこの町にあるかもしれない・・・・少女はその希望も思いを胸にゆっくりと丘から町へと歩いて行った。

その頃海底ではクレイズがダークに呼び出され状況報告を行っていた。ダークは何やら深刻そうな声を上げながらクレイズに話しかけるのだった

ダーク「クレイズよ。早速だが対ウルトラマン用の兵器の製作度合いはどうなっている？」

クレイズ「順調でございます。先日のテレスドンとグランドランザーから採取したウルトラマンのデータをフル活用し急ピッチで製作を。」

ダーク「・・・では≪月の影≫の適合者は？」

クレイズ「現在全力で調査を行っておりますが中々適合者らしき人物は・・・」

ダーク「そうか・・・では出来る限り早く適合者を探し出せ。」

クレイズ「はっ！！！」

ダーク「ついでにお前にいい情報を与えよう。かつてこのダークがキュアアンジェと光の戦士ウルトラマン達に敗れたのは奴らが強かったのもあるがそれ以外にこころの大樹の持つ奇跡とウルトラマンの持つ光が融合した事が大きな敗因だった・・・」

ダークはかつて自分がこの地球に来た時の事を思い出していた。

あの時はプリキュアも一人だけでプリキュア自体は大した事はなかったのだがそれを補うかのように手強かったのは光の戦士ウルトラ

マンであった。だが俺は最後の決戦時にプリキュアの力をを甘く見たことで屈辱にも戦いに敗れこの漆黒の海底に封印される事になった。あの時の奇跡の力の正体は分からなかったがあの力さえ潰せていれば・・・

その後悔に怒りがこみ上げてくるダーク・・・だからこそ今回は邪神を復活させて攻撃の手を完璧にさせれば今回は絶対に負ける事はない・・・より慎重になっている理由の要因である。

クレイズ「こころの大樹の奇跡とウルトラマンの光？」

ダーク「そうだ。あの時邪神が復活していればそれぞれ一つずつを潰す事はたやすかったのだが邪神の復活が間に合わなかった事も重なり私は敗れることとなった・・故に今回は邪神復活に専念することにしたのだよ。その時間稼ぎとして宇宙や別次元から貴様らを呼び寄せた。」

クレイズ「・・・ではそれを肝に銘じ必ずプリキュアとウルトラマンを我が手で息の根を」

ダーク「期待しているぞクレイズ・・・お前が率いるサロメ星の精鋭部隊のロボット技術と科学力は私も高く評価している。バルタンやキリエルと違ってな。では行けクレイズ！！」

クレイズ「ハハッ！！！」

クレイズは玉座の間から闇の扉を使い出ていく。残されたダークは海底の闇の中でかつての闘いの事を思い出していたのであった。

闇の扉を潜り出てきた所はサロメの拠点としている超巨大工場であった。此処はサロメの科学の中枢ともいえここで先日襲撃させえたグランドランザーも生産されているのである。そして今此処に対ウルトラマン用の兵器が造られているのである。

クレイズ「どう？完成度合いは」

助手「順調ですドクタークレイズ。これこそあと少しで完成します対ウルトラマン用の兵器が」

クレイズ「ふふ。データは完全に集まっているわ・・・これが完成

すればバルタンやキリエル人をも配下に置く事が出来る。そして我々サロメがダーク様の最高幹部の座に!!」
クレイズは笑いが止まらなかった。何故ならば今製作している兵器は完璧であり負ける要素がないと考えているからである。

全く同じ頃の希望ヶ丘のとあるスーパーに大学の授業を終わらせたゆりがいた。
ゆり「今日はどうしようかな～。昨日はシチューだったから今日は和物で行こうかしら」
ちなみに今日の夕食担当はゆりであるため買い出しもゆりがしているのである。そしてしばらくして大体食材を買う事が出来たので食材を持って帰宅しようとするゆり。その帰り道・・・
ゆり「ちょっと買いすぎたかな?」
買い物袋を持ってゆりは自宅の帰り道を歩いていくのだが珍しく食材が安かったので買いすぎてしまった。生ものもあるしとにかく急いで帰ろうと急いで歩いていると・・・・
???「きゃっ!?」
ゆり「わっ!?・・・ごめんなさい!!大丈夫ですか?」
急いでいた事もあり人とぶつかってしまった。買い物袋に入っていた野菜などの食材が道にこぼれてしまった。ゆりには珍しい事である。ぶつかってしまった相手はつぼみやえりかと年があまり変わらない少女で特徴的なおかっぱ頭誰かに似ている雰囲気があった。
???「私は大丈夫ですよ。貴女は?」
ゆり「大丈夫です。すみませんぶつかってしまって」
???「いえいえ。それにしても多い荷物ですね。よかったら運ぶのを手伝いましょう。」
ゆり「あ、でもそんな事出来ませんよ。」
???「いいえ。またぶつかってしまう事もあるかもしれません。それに此処で会ったのも何かの縁です。手伝わせてください」
ゆり「・・・そこまで言われると断れませんね。じゃあお願いしま

す」

ゆりはその少女の行為に甘え食材を家まで運んでもらうことにした。その途中で色々雑談しながら時間が流れていった。彼女の名前はアンナという名前で記憶がないため旅をしているらしい。

ゆり「じゃあアンナさんは記憶を探す為にいろんなところに旅を？」

アンナ「はい。私がどこで生まれたのか、親はいるのか、兄妹はいるのか、その答えを探す為に色々旅をしているんです。記憶があるのは旅を始めた3年前からしかなくて・・・」

ゆり「・・・3年前・・・」

アンナ「どうかしたんですか？」

ゆり「え？・・何でもないですよ。ただ3年前には私もいろんな事があったんです。本当にいろんな事が」

3年前・・・それはゆりにとって数多くのモノを失った年であり数多くの大切なものを貰った年でもある。思い返すと色々な事があった。

最初は私の心に深い傷を付ける事が多かった。父の失踪のすぐあとに私はこころの大樹に選べれてキュアムーンライトとして砂漠の使徒との戦いを始めた。その時出会った相棒の妖精コロン。

彼が最初の失った大切な人だった、彼は私が強さを過信した事と誰も傷つけたくないと言うエゴのせいで私をサバ―クの攻撃から守って死んでしまった。こころの大樹の奇跡で魂は無事であったけれどもう二度と彼の体に触れることも会う事も出来ない。

2番目はダークプリキュア。彼女は私を光自分を影と称して私を着け狙っていた。その本当の理由はサバ―クが・・・いいえサバ―クとして砂漠の使徒に協力していた私の父に自分を一人の娘として認めてもらいたかったからだった。そして父は言った。≪ダークプリキュアはお前の妹≫だと。私は妹を殺してしまったのだ・・・。

そして最後の失ったのは私の父だ。父は私を砂漠の使徒のボスの破壊王デューンから守るために自分の身体を犠牲にして消滅してしまった・・・

私は何度も何度も絶望のどん底に叩き落とされた。父を失った時は憎しみに染まり怒りにまかせて戦おうとしてしまった。でもそんな私を支えてくれたのがつぼみ、えりか、いつき、大人、琢磨、傑、夕という仲間たちだった。特に私を慕ってくれたつぼみに私は助けられ励まされ道を踏み外すことなく自分をプリキュアとして戦わせてくれた。最初は危機感がなく彼女たちを戦わせることになった自分が不甲斐無くて情けなくて彼女たちに冷たくしてしまっていたがそれでも彼女達は私の過去に何があったかを知ると心配してくれた。その時に私は仲間の大切さに気がついたのだ。だから私にとってあの3年前の闘いはつらく苦しい事もあったけどそれ以上に私に大切なものを教えてくれた宝物でもあるのだ。今も振り返れば懐かしい・・・

アンナ「そうなんですか・・・私も失った記憶には何か大切なものがある気がしてならないんです・・・だから必死になって探しているんですけど中々見つからなくて。この街に来たのも手掛かりが無いかと思ってなんですよ」

ゆり「そう見つかるといいですね。貴女の大切な記憶が」

アンナ「ありがとうございます」

アンナはゆりに笑顔で例を言った。ゆりは彼女の顔を見て誰に似ているかがやっと気がついた・・・ダークプリキュアに・・・妹に似ているのだ・・・でもそんなはずはない。彼女は死んだのだ・・・私がこの手で殺したのだから・・・他人の空似だろう・・・自分にそう言い聞かせて無理矢理に納得させた。

そしてしばらくしてゆりの自宅のアパートにつき部屋の入口まで荷物を運ぶ。

ゆり「ありがとうございます。助かりました」

アンナ「いえいえ。それほどの事でもないですよ。では私はこれで・・・」

アンナがそう言うと一礼して立ち去ろうとしたがゆりは彼女を引き

とめた。
ゆり「待って。よかったらご飯を食べていきませんか?」
アンナ「え?しかしいきなり見ず知らずの者がそんなお世話になるわけにはいきませんよ。」
アンナはそんなつもりはないと断ろうとしたのだがそれに対するかのように腹の虫がなった・・・思わずアンナは顔が真っ赤になるがゆりは笑いながら彼女を見つめて遠慮はいらないと言う。
ゆり「でもお腹は正直みたいですよ?それに貴女も言ったじゃないですか。『此処で会ったのも何かの縁』だって。だから夕食ぐらいはご馳走しますよ」
アンナ「・・・ではお言葉に甘えて・・・」
顔を真っ赤にしてアンナはゆりの行為に行為に甘え夕食をご馳走になる事になった。ゆりは久々のお客に腕によりをかけて夕食を作った。
アンナ「ゆりさん凄いですね!!こんな色々なものが作れるなんて」
ゆり「お母さんと二人で暮らしてるから料理は自然を覚えちゃったんです。」
アンナ「へぇ〜凄いですね。家庭的です!!」
ゆり「そんなことないですよ」
感激のアンナの顔を見て同じように笑顔を返す。そして二人で食事を頂く。
アンナ「ご馳走様でした!!美味しかったぁ〜」
ゆり「お粗末さまでした。口にあったようでよかったです」
アンナ「いやぁ〜ホントにおしかったです」
味もかなりものでアンナは大満足のようであった。外を見ると既に日が落ちていて夜となっていた。満月の月明かりが辺りを照らす。
アンナ「さてと・・・夕食もご馳走になったしそろそろ私は」
ゆり「何処か行くあてはあるんですか?」
アンナ「いえ特には・・・」
ゆり「だったら今日は泊っていってくださいよ。同じ女の子をこん

な夜に一人にするわけにはいきませんから」
アンナ「・・・なんかすみません。色々と」
ゆり「いいえ。これもついでですから」
アンナは今夜は成り行きでゆり家に泊まることとなった。勿論最初はそうも出来ないと思ったが彼女の行為であるなら仕方ないとお世話になることとなった。そして翌日。

ゆり「ん・・はぁ～よく寝た。ん?置手紙・・・」
目が覚めたゆりが最初に目に留まったのはテーブルに置いてあった置手紙だった。内容はアンナからの感謝の言葉が記されていた。
ゆり「≪ありがとうございました≫・・・かそう言うのは直接言ってほしかったのに・・・」
ゆりは何やら残念そうにそう言うと大学へ行く荷支度を終えると家に鍵をかけて外に出るのだが・・・その瞬間近くで爆発音がした。
ゆり「!?・・何?」

外を見ると巨大な何かが町を破壊していた・・・その身なりは何と・・・
ゆり「あれは・・・ティガ!?・・・でも色が違う・・・・・・町の被害を食い止めなけいと!!」
その正体はなんとウルトラマンティガに似ている巨人であった。だがラインは黒と赤で目は赤く日光りを放ち町を黒い光線を放って破壊の限りを尽くしていた・・・ゆりは鞄からこころポットを取り出す。
ゆり「プリキュア・オープンマイハート!!!」
ゆりの姿が私服から光のワンピース調の姿になり眼鏡もなくなり辺りが藍色の光が放たれる、そして藍色の種を取り出しそれをココロポットにセットしてココロポットのつまみを回転させて種をココロポットの中に入れると藍色の光に全身が包まれていく。そして髪の色は黒からムーンライトのシンボルカラーの藍色に変化し光のワン

ピースもプリキュアのコスチュームへと変わっていった。
ムーンライト「月光にさえる一輪の花キュアムーンライト！！！」

ムーンライト「止めなさい！！！これ以上待ちを壊すのは私が許さない！！！」
ムーンライトはティガに似た巨人の前に立つとそう命令口調で言い放つが巨人は聞く耳を持たなかった・・・
ティガ？「・・・チャァア！！」
ムーンライト「あれはティガのゼペリオン光線！！？？・・・私がよけたら町が！！ムーンライト・リフレクション！！！」
ティガの必殺技のゼペリオン光線に似た黒い光線をムーンライトに向けてはなってきた。アレをまともに受けたら自分諸共町が全滅してしまう。ムーンライトは急いでムーンライト・リフレクションを発動させて何とか被害のない場所に跳ね返す。巨人の方を見てみると手に青い氷の剣が発生していた。
ムーンライト「なんとか町は無事みたいね・・・今度はデュナミスのデュナミスセイバー！？」
巨大な氷の剣が振り回されるがムーンライトは自分が小さい事を利用して何とかかわしながらも攻撃を仕掛けるのだが全く手ごたえがなく体力だけが削られていく。
ムーンライト「はぁ、はぁ、はぁ・・・このままじゃ体力の差で私が負ける・・・でも絶対に負けるわけにはいかない！！！」
息を切らしながらもムーンライトは必死にあの巨人に対抗できる策を考えていたが力も体力も自分にとって明らかに不利・・・でも諦めるわけにはいかない・・自分の大好きな町を・・・大切な人々を守り抜くために！！！
ムーンライト「花よ輝け！！プリキュア・シルバーフォルテウェイブ！！！！」
ティガ？「ハァアアアア！！！！」
ムーンライトはムーンタクトを取り出し必殺技のシルバーフォルテ

ウェイブを放ち一気に決着をつけようとしたがそれに対応して巨人は黒いゼペリオン光線を放って二つの技がぶつかり合う。その直後に大爆発が起きて辺りに爆風が漂う。
ゆり「あぁあ・・・くっ・・・なんて強さなの」
結果はムーンライトが力負けして変身が強制解除されてしまった。
ゆりの元に巨人が迫る。自分も此処までかとゆりは諦めたように目を瞑る・・・だがその彼女に諦めるなと言うかのように自分に向かってきた人影がいた・・・その正体は・・・
ゆり「・・・・・？・・・・あ、貴女は」
アンナ「ゆりさん大丈夫ですか？・・・次は私が行きます」
ゆり「だ、ダメよ！！普通の相手が敵う相手じゃ・・・」
アンナ「大丈夫です・・・私には特別な力があるんです・・・だから貴女は逃げてください」
ゆり「特別な力？・・・」
なんと自分を助けたのはアンナだった。そしてアンナは黒いステッキ状で先端が青い宝石がついたアイテムと黒いプリキュアの種のようなものを取り出す。
ゆり「（・・・プリキュアの種・・・まさか）」
アンナ「プリキュア・ナイトイリュージョン！！！」
アンナは私服からつぼみ達他のプリキュアとは違う黒い光を放つワンピース調の衣装に変わると黒いステッキのロッド部分を伸ばすとその中に黒いプリキュアの種を装填する。すると彼女の周りに黒い光が集まり黒いワンピースから黒を強調したコスチュームに変化する。その姿はダークプリキュアにそっくりであったが何処か雰囲気が違った。
アンナ？「漆黒の闇から生まれた戦いの戦士キュアナイト！！！」
ゆり「キュアナイト？アレがアンナさんの特別な力？」
ゆりは目の前にいるのがダークプリキュアではないかと一瞬疑ってしまった。なぜなら漆黒の翼がない事以外はダークプリキュアに姿がそっくりであったからだ・・・でも彼女は確かに名乗った≪キュ

アナイト≫と・・・そしてアンナが変身したキュアナイトは黒いマントを身に纏うとティガに似ている巨人の前に飛び上がっていったキュアナイト「無益な破壊を行うものは許さない!!お前を闇に沈めこの町の人を守ってみせる」

サロメ星人が拠点とする本部の大ホールではその様子がリアルタイムの映像として送られていてそれを見ていたドクタークレイズはにやりと笑みがこぼれていた。

クレイズ「ふふっ♪見つけたわよぉ~≪月の影≫の適合者・・・まさか希望ヶ丘市にいたなんてね灯台もと暗しとでもいうやつかしら?それとも影は光に無意識に近づくのが宿命なのかしら?・・・・・さあ見せてもらおうかしらお前の腕を・・・行きなさい!!!ウルトラキラートリニティ・・・3人のウルトラマンの力が融合した対ウルトラマン最強兵器よ!!」

そうあの巨人の正体はサロメの科学力と3人のウルトラマンのデータをもとに造られた最強ロボット兵器≪ウルトラキラートリニティ≫であったのだ。突如現れた漆黒の戦士キュアナイトとウルトラキラートリニティ・・・果たして両者の実力とは!?

第9話「漆黒の戦士」（後書き）

はい。オリジナルプリキュア『キュアナイト』の登場です！！！＾＾プリキュアのネタ考えるのに3日もかかってしまった（汗）。さて次回はキュアナイトの技およびバトル回になると思います。そしてまた更新が遅れてしまうかもしれませんが気長にお待ちください！！！

次回もお楽しみに♪

第１０話「アンナの過去」（前書き）

前回までのあらすじ～
突如町にティガそっくりな巨人が現れ破壊を開始した。その正体はドクタークレイズ率いるサロメ精鋭部隊が製作した対ウルトラマン用兵器『ウルトラキラートリニティ」であった。ムーンライトの攻撃は通用せずに変身が解除されてしまう。
絶体絶命のその時ゆりを助けてくれたのはもう一人のプリキュアであった

第１０話「アンナの過去」

Ｕ（ウルトラ）キラートリニティ「・・・・・ハァアッ！！」
ティガの姿をしたそれの名はウルトラキラートリニティ。ティガ、アース、デュナミスの３人のウルトラマンのデータを集め３人の必殺技が使えるようにしたクレイズが最強を自称するロボット兵器である。
Ｕ（ウルトラ）キラートリニティは新しい戦士キュアナイトに黒いハンドスラッシュを放って攻撃を仕掛けるが
ナイト「ナイト・シュート！！！」
ナイトは黒いステッキ状のアイテム≪イリュージョンロッド≫の青いクリスタルから複数の光弾を発射してハンドスラッシュを相殺させる。先ずはお互い手の内の探り合いと言うところだが力では互角のように見える。
Ｕ（ウルトラ）キラートリニティ「デヤァアッ！！！」
今度は先に流れを掴んでやろうとアースのバーンナックルを発動させて腕に炎を纏う。そしてナイトに向かって炎の拳を放つがナイトは俊敏な動きでそれを避けていきＵ（ウルトラ）キラートリニティを翻弄する
ナイト「ナイト・イリュージョンソード！！」
Ｕ（ウルトラ）キラートリニティ「グォオオ！？・・・ダァアアア」
イリュージョンロッドのグリップ部分を伸ばしクリスタルにエネルギーをためると黒い光を集めてそのエネルギーを高質化し黒い光の剣を作る。そしてＵ（ウルトラ）キラートリニティの背後の周り背中を斬りつける。Ｕ（ウルトラ）キラートリニティはすぐに後ろを向き炎の拳を突き出すがその時には既にナイトの姿はなかった。
ゆり「強い・・・」
ゆりはキュアナイトと言う戦士の強さに驚きが隠せなかった・・・
キュアナイトと言う戦士の強さにも驚いたが自分やつぼみ達とはまた違うプリキュアがいたという事実が何よりの驚きだったのだ。

Uキラートリニティ「！！？」

ナイト「上よ！！はぁあああああああっ！！！！」

辺りを見回すのだが何処にも姿がない・・・焦るUキラートリニティだが天空からナイトの声が響き渡るとつられて上を見るとそこにはイリュージョンソードを構えたナイトの姿があり急降下しながらUキラートリニティの巨大な頭部を斬りつける。

Uキラートリニティ「グォォオオォオオオオ！！！？？？・・・ガァアアオォウゥウグゥゥウ」

頭部に火花を散らしながら苦しむUキラートリニティ。傷口から火花を散らしながらロボットの外骨格のようなものが露出している。

ゆり「アレはロボット！？・・・そうかだからティガ達の光線が使えたのね・・・でもあんなモノを作るなんて」

ナイト「作り物の人形なら容赦する必要はないわね・・・このまま一気に決める！！！」

ナイトはイリュージョンソードを構えながらこのまま一気に決めようとするが二人の間に突如闇の扉が開き宇宙船のような超巨大な母艦が現れた。

クレイズ「見せてもらったわ・・・キュアナイト。私のUキラートリニティを此処まで追い詰めるなんてたいして腕前ね？」

母艦からはドクタークレイズの声が発せられUキラートリニティの頭上に母艦は移動するとそのままUキラートリニティを回収する。

クレイズ「今回のテストは此処までよ・・・いい戦闘データが取れたわ。次はもっと楽しいショーが始まるから期待していなさい・・・ハハハハハッ！！！！」

クレイズの独特の高笑いが辺りい響くと母艦は闇の扉を潜って姿を消すのだった。ナイトもそれに合わせて変身を解いてアンナの姿に戻る。

アンナ「ふぅ～ゆりさん大丈夫ですか？」

ゆり「私は丈夫よ・・・それよりもどういう事なのか聞かせてもら

えないかしら?貴女が何でプリキュアの力を持っているのかを」
アンナ「・・・分かりました。お話します・・・私は3年前からの記憶がないと言いましたよね。私は3年前のある日とある山のふもとの所で倒れていたらしいんです。私は近くの村の村人の方に拾われて九死に一生を得ました」
ゆり「・・・じゃあその時から記憶が?」
アンナ「はい。その時は既に記憶がありませんでした。そして倒れていたそばにこのイリュージョンロッドとこのメダルのようなものが落ちていたそうです。勿論私にはこの二つの事も最初は分かりませんでした・・・その村の方々は本当に優しい人ばかりでした。見ず知らずの私に名前や住む場所もくれたんです。でもある日私は自分に有る力について知ることになるました」
ゆり「・・・何があったの?」
アンナ「ちょうど3数週間前です。突然赤い竜のような巨大生物が現れたんです。村は破壊され多くの人々が死んでしまいました。」
ゆり「(3週間前ってキュアアンジェの予言の種がこころの大樹から出てきた日・・・赤い竜ってメルバ!?)」
アンナ「私も必死に逃げました。でも逃げ遅れた子供を助けようと引き返したんです。あの竜は私達を虫けらのように踏みにじろうとしてきたんですがその時このロッドと種が私にプリキュアの力をくれたんです。」
ゆり「それで貴女プリキュアの力を得たのね。」
アンナ「はい。何とか赤い竜を退ける事は出来ましたけど村は壊滅してしまい生き残ったのは私一人だけでした・・・私が記憶さえしっかりしていれば何とかなったんじゃないかって後悔してるんです」
ゆり「・・・・」
アンナ「だから私はこの力に選べれた意味を・・・私が何者なのかを見つけるために旅をしてるんです・・・それが私の出来る唯一の償いなんです」
ゆり「そうだったのね・・・貴女にそんな過去が」

アンナ「はい。」
ゆりは言葉が出なかった。彼女にそんなつらい過去があったとは。自分も大切な人を多く失くしたが彼女はそれ以上につらい思いをしていたのだ。記憶がない事、そしてそのせいで数多くの大切な人を失った事・・・自分とは比べ物にならないほど酷な過去を持っていたのだ・・・ゆりはどう声をかけていいかわからなかった
ゆり「これからはどうするの？・・・また旅を続けるの？」
アンナ「いいえ。しばらくはこの町に留まろうと思います。奴はまた来るかもしれません・・・そうなったらあの村と同じ悲しみが生まれてしまいます。私はもう二度とあんな悲しい思いをしたくないし誰かにさせたくない・・・」
ゆり「・・・なら家が必要ね？」
アンナ「・・・え？」
ゆり「この町に留まるなら暮らす家が必要でしょ？そう言うことなら喜んで協力する。だから私の家は狭いけど遠慮なく使ってください。」
アンナ「・・・ありがとうございます！！！」
かくしてアンナはゆりの家に居候することになった。彼女の悲しい過去にゆりが共感を得たのもあるがそれよりも死んだ妹に似ている彼女が放っておけなかったのかもしれない・・・・

クレイズ「キュアナイト・・・月の影の適合者はかなりの強さね・・・どうやってアレを覚醒させるかが問題ね・・・私の作ったＵ（ウルトラ）キラートリニティをいとも簡単に追い詰めたあの実力・・・最高の素材だわ・・・」
クレイズはサロメの工場の自室で今後の作戦をどう進めるか考えていた・・・奴の実力は相当なものだが必ず攻略法はあるはず・・・そして奴をとらえて『月の影計画』を進めなくてはならない・・・手始めに次は奴のデータを集めることにするかと考え部屋で一人笑い声を響かせるのだった・・・・

翌日・・・
ゆり「さて今日は忙しくなるわね～アンナさんの部屋にいるものを色々買わないと♪」
ゆりは大学の授業を終わらせると急いで自宅に戻るとアンナと一緒に買い物に出かけるのだった。一緒に暮らすとなると色々必要なものがある。パジャマや布団、歯ブラシや茶碗など色々買い集めるのだった。
ゆり「ふぅ～大体こんなものね。」
アンナ「ゆりさん。本当にありがとうございます。何から何までお世話になってしまって」
ゆり「気にしないで。協力するって言ったのは私なんだから♪」
アンナ「はい。ふふっ」
アンナも久しぶりに優しい人間と出会い笑ったのは久しぶりだった。旅をしている時はいやな思いもしてきたから人と接する事を忘れいたため思わず笑みがこぼれた。
ゆり「これで大体集まったわね。じゃあ貴女の部屋作りを始めましょうか？」
アンナ「はい！！！」
意気揚々と二人はアンナの部屋作りに取り掛かるのだった。ゆりも長らくこんな事はなかったため本当に楽しそうであった。

大人「長い長い授業が終わった・・・今日はどうしようかなぁ～」
大学の授業を終わらせた大人は時間をどうしようかと考えていた。なにしろ大学生の一番の特権ともいえるものは時間があり余ると言うことだ。今日は特にすることもないし怪獣も出なくて何も起きないため暇を持て余していた。
大人「つぼみを誘って何処かに行こうかなぁ～・・・ってつぼみはまだ学校か（汗）あぁ～大学生って暇だよなぁ～」
つぼみとまたデートなんて言うのも考えたがつぼみはまだ学校の時

間であるからそれも出来ない・・・仕方がないため一人でどこか適当にぶらつくかとカブトエクステンダーに乗り込む。すると何処からかカブトゼクターが飛んできた。
カブトゼクター「！！！（大人～僕も連れて行ってよ）」
大人「ん？なんだお前も何処かに行きたいのか・・・よしじゃあバックの中に入りなよ」
カブトゼクター「！！！（やったぁ！！）」
カブトゼクターを鞄の中に入れるとそのままカブトエクステンダーで町を走る。あてもなくただブラブラと自分が住んでいる街を彷徨うのが大人の暇つぶしスタイルであった。そして1時間ぐらい走り時間をある程度潰す。
大人「たまには一人で走るのもいいものだな・・・って一人じゃないか相棒」
カブトゼクター「！！！（そうそう。相棒を忘れるなよ！！）」
カブトゼクターとも長い付き合いでありお互いに意思疎通が出来るほど心が通じ合っていたのだった。相棒を鞄の中に載せながら二人でのドライブを楽しんでいたが・・・・
爆発音「ドォォオオン！！！」
大人「！！？」
何やら大きな何かが落下する音が辺りに響き渡った。辺りを見回すとそこには修理を完了させたUキラートリニティー（ウルトラ）が姿を現していたのだった。
大人「アレはティガのパチものか？ニセモノならもっと似せて作れよな・・・ってそんな事を言ってる場合ではないな」
大人はスパークレンスを取り出すと腕を十字に組んでスパークレンスを持っている右腕を時計回りに回して天に掲げてスパークレンスを起動して光に包まれていきウルトラマンティガの姿へと変身してUキラートリニティ（ウルトラ）の前に立ちはだかる。
ティガ「チャッ！！」

二人の巨人が向かい合い睨み合う・・・・
ティガ「ハッ!!（コイツ・・ロボットか?）」
睨みながらもティガはすぐに相手の正体が理解できた。何故ならば怪獣や宇宙人の独特の生物らしい動きが見られず機械的な動きしか見えないからである。
Uキラートリニティ「デヤァアアアッ!!!」
Uキラートリニティは右手にデュナミスセイバー左手にバーンナックルを発動させて序盤から攻めてきたティガは何とかそれを交わしながら反撃の隙を探す。
ティガ「フッ!!・・・ハッ!!」
Uキラートリニティ「シュワァア!!」
攻撃をかわしながら飛び上がりハンドスラッシュを放つがデュナミスセイバーで掻き消されてしまった。遠距離も近距離も攻撃の隙がない・・・しかしこのまま逃げていても勝負には勝てない・・・そう思ったティガは上空でタイプチェンジを行った。パワーと防御力で勝る赤い剛腕の戦士パワータイプへと。
ティガ・パワータイプ「ハァアッ!!チャァアア!!!」
Uキラートリニティ「フン!!ハァアアッ!!!」
ティガ・パワータイプ「ハァア!ハァアッ!!ンーーーーハァアアッ!!!」
Uキラートリニティ「グォオオ!?・・・ガハァアア・・・」
ティガ・パワータイプ「ハッ!!デヤァアアアア!!」
Uキラートリニティ「ぐぉ・・・ガハァアア!!」
ティガ・パワータイプ「チャァ!!」
ティガは斬りつけられながらも怯むことなくパンチとキックの攻撃を浴びせて強引に戦いを進めてやろうとしてやる。そしてUキラートリニティを無理やり押し倒して投げ飛ばしてやるとスタミナを切らしてフラフラになるそしてこのまま止めを刺そうとティガ・パワータイプは必殺技のデラシウム光流を放とうとエネルギーを集約していこうとしていくのだがその後ろから突如ティガ・パワータイプ

に向かって光線が放たれた。思わず後ろを振り返るとそこには・・・
ティガ・パワータイプ「ハッ!?・・・!!!」
そこにいたのは何とアースとデュナミスの色違いの巨人だった・・・
前方にいるU(ウルトラ)キラートリニティと同じく目が赤く黒と銀と赤のラインの体色をしたロボット兵であった・・・・・

第１０話「アンナの過去」（後書き）

今回はちょいと短めにしてみました
次回からは月の影計画の真相やアンナの正体を少しずつびょ者していきたいと思います。
また次回からも更新が遅れてしまうかもしれません（汗）

次回もお楽しみに♪

第11話「絆の力」（前書き）

前回までのあらすじ～
明かされたアンナの過去とクレイズの野望。更に現れた2体のキラートリニティ。
果たしてティガに逆転のチャンスはあるのだろうか

第１１話「絆の力」

３体は無言のままティガに近づいていく・・・・ティガは３体の放つ殺気とも呼べるようなオーラに圧倒されてしまい身体が硬直してしまう・・・このままでは自分は殺されてしまう・・・だが逃げれば町が破壊されてしまう・・・そんなジレンマに精神を支配されて恐怖に心が支配されてしまうティガ。

ティガ・パワータイプ「チャァアアア！！！！（うおぉおぉおおおお！！！！）」

Ｕキラートリニティ・Ａキラートリニティ・Ｄキラートリニティ『ハァッ！！！』

ティガ・パワータイプ「ウワァアアアッ！！・・・グッ・・・アァアッ！！・・・ウゥゥ」

しかし逃げてはだめだとティガは腹をくくり玉砕覚悟でパワータイプで３体に向かって突っ込んでいく。勿論３体のキラートリニティーはハンドスラッシュのトリプル攻撃をティガに命中させて吹っ飛ばしてやる。それでも立ち上がりパワーが溢れる重たいパンチやキックを放っていくのだが我武者羅な攻撃が当たるほど３体は甘くはなくティガを嘲笑う名のように弄びながらティガにダメージを蓄積させていき体力とエネルギーを消耗させていく・・・そして遂にはティガ・パワータイプ「ウゥウ・・・アァアア（強い・・・俺も此処までなのか！？）」」

ティガの精神は追い詰められ絶望が精神を包んでいく・・・散々弄ばれた揚句に町を守れずにこのまま自分は負けてしまうのか？・・・そんな事さえ彼の頭によぎってきた・・・３体のキラートリニティは焦ったティガにパンチとバーンナックルの炎とデュナミスセイバーの斬撃を見舞わせてティガをひれ伏せさせた後終わりだと見下し止めを刺そうとＵキラーはゼペリオン光線ＡキラーはボルテックストームＤキラーはインブレンスバーストの発射態勢を開始し始めた・

・・・最早此処までかとティガは諦めかけた・・・・だがその時・・・

???『プリキュア・フォースインパクト!!!!』

???『プリキュア・イリュージョンソニック!!!』

???『ライダーバースト!!!』

突如二つの光線が3体のキラートリニティーに向かって放たれて必殺技を妨害する。ティガは何事だと思い周りを見回すとそこにはブロッサム、マリン、サンシャイン、ムーンライト、ライダーのフェアリーそして新しいプリキュアのナイトだったのだ。

ブロッサム「お待たせしました!!今からは私達も戦います!!!」

マリン「ブロッサムの言うとーり!!アタシ達も今から一緒だよ・・・だから怖がらないで。」

サンシャイン「危なかった～。もう大丈夫だよ私達も貴方と一緒に戦うから」

ムーンライト「諦めてはダメよ・・・貴方がどうして蘇ったのかを自分で考えなさい」

フェアリー「ムーンライトの言うとーり。自分で考えなさい？・・・なんてね♪仲間のピンチはほっとかないよ!!」

ティガ・パワータイプ「ハッ・・チャァ!!（皆・・・ありがとう!!よーしお陰で勇気１００倍だ。いくぞ!!!）」

そうだ俺には仲間がいる。彼女たちとはどんな時でも繋がっているんだ・・・俺は一人なんかじゃない・・・3年前からそうだったじゃないか・・・。大人（ティガ）は5人の言葉に戦う勇気を取り戻し立ち上がりタイプチェンジを行いマルチタイプに戻る。立ち上がったティガの前にナイトが前に現れ自己紹介をする。

ナイト「はじめましてウルトラマンティガ・・・私はキュアナイトです。ブロッサム達や貴方と同じ悪に戦う戦士です。これからは私も仲間に入れてください。」

ティガ「ハッ!!（勿論だ。よろしくなキュアナイト!!!）」

ティガはナイトに向かってよろしくなと言うようにガッツポーズを

見せると3人のキラーに向かって構えを放ち闘志を見え付けながらティガ、ブロッサム、フェアリーはUキラートリニティーにマリン、サンシャイはAキラートリニティー、ムーンライト、ナイトはDキラートリニティーにターゲットを絞りそれぞれ戦いを始めていく。

ティガ「ハッ!!」

Uキラートリニティー「・・・・」

ティガとUキラートリニティさっきと同じように弄んでやろうと指をクイクイと動かして挑発するがティガはそんな挑発には乗ることなくゆっくりと近づきながらUキラートリニティを睨む。流石のUキラートリニティもティガの様子の変化に気がついたのかすぐにデュナミスセイバーを発動させティガに斬るかかるがティガはそれを難なく避けていき反撃のマルチパンチをUキラートリニティのボディに放つ。

Uキラートリニティ「グォオっ!!?・・・・デヤァアアアア!!」

ティガ「チャァアアアア!!!!」

Uキラートリニティ「ガァアアッ!?」

さっきまで自分たちにおびえていたティガではない・・・いったい何が彼に変化を与えたのか分からないが自分の負けなどあり得ないと自信があるのか攻撃を荒ぶらせてUキラーはデュナミスセイバーをティガにめがけて振りかざすがティガは攻撃を見極めながら格闘技で反撃を行いながら秘儀の手刀攻撃である《スラップショット》でUキラーの黒混じりのデュナミスセイバーを叩き折る。

ブロッサム「ブロッサムシュート!!!」

フェアリー「フェアリーレイピア・ガンモード!!!」

それと同時にブロッサムのピンクの光弾ブロッサムシュートがUキラートリニティに放たれる。Uキラートリニティは黒いハンドスラッシュでブロッサムを狙うがブロッサムはそれを難なくかわし逆にUキラートリニティを翻弄していく。

ティガ「ハッ!!チャアアアーーッ!!」
フェアリー「ライダー・バースト!!!」
そしてその隙にティガはティガスライサーフェアリーは遠距離系の必殺技ライダーバーストをUキラートリニティに向かって放ち胸の黒いプロテクターを破壊して火花を散らせる。

場面は切り替わりマリン・サンシャインのグループはAキラートリニティ相手に互角に戦っていた。アースの技をコピーしたダークバーンナックルとでも呼ぶべき黒炎を身に纏った拳を振り回しマリン、サンシャインを近づけさせない。
マリン「マリンシュート!!!」
サンシャイン「サンシャインフラッシュ!!!」
マリンの無数の水の塊をマリンシュートとサンシャインの無数の光の飛礫のサンシャインフラッシュが合体してAキラートリニティにぶつかっていくが黒い炎が全てを掻き消してしまう。
マリン「なんてやつ・・・アタシ達の攻撃が通じないよ」
サンシャイン「せめて弱点さえつかめれば・・・」
どんな相手にも必ず急所と呼ばれる弱点がある筈なのだ。それさえ見つけられれば小さい力しか持たない自分達でも必ず勝機はある筈だと必死にAキラートリニティの周囲を飛び回りながら弱点を探そうとするのだがその行動に痺れを切らしたAキラートリニティはアースの技の一つの『バーニングシュート』を二人に向けて放つ。
マリン「アイツ街中であんなモノを・・・」
サンシャイン「私達が避けたら町が・・・サンフラワーイージス!!!」
あの炎が町に向けて放たれたら町は火の海になり町は全滅してしまう・・・そうはさせないとサンシャインが黄金の盾サンフラワーイージスで黒い炎の光線を受け止めていくのだが・・・
サンシャイン「ぐっ・・・このままじゃ持たない・・・・」
マリン「サンシャイン頑張って!!!ぐぅう!!?」

3分も経たないうちにイージスの真中にひび割れて亀裂が走っていく・・・マリンも咄嗟にサンシャインに駆け寄り水の力をイージスに合わせて防御力を上げるが気休めにしかならずひび割れが大きくなっていく・・・・このままでは町ごと自分達も・・・・自分達の命をかけても町だけは守ろうと言う意思も壊されてしまうのか？

Aキラートリニティ「フフフッ・・・ハァアアアアアア！！！」

そろそろ本気でトドメを刺してやるとバーニングシュートの威力を上げていく。それに比例してイージスの亀裂が一段と広くなっていき二人は絶体絶命のピンチに立たされてしまう・・・だがその時突如赤い光を放つ光球がAキラートリニティに体当たりを行いバーニングシュートを無理やり中断させる。Aキラートリニティはその光球に向かってハンドスラッシュを放つが光球はそれを難なくかわす。

マリン「アレは！？」

サンシャイン「熱い・・・まるで太陽のように燃えてる」

マリンとサンシャインも驚きが隠せず新しい敵かと思ってしまったが。それに反するかのように光球から赤い光が放たれ巨人の姿に変化する。

アース「シュワァ！！！」

マリン・サンシャイン『ウルトラマンアース！！！』

Aキラートリニティ「フン・・・ハァアアア！！！」

当然敵ではない。その正体は炎を操る光の巨人ウルトラマンアースであった。Aキラートリニティは真打の登場かと鼻で笑うかのように唸るとダークバーンナックルを拳に纏いアースに拳を放つ・・・のだがアースは素手でそれを受け止めるとAキラートリニティを睨みつけてAキラートリニティを動揺させる。

アース「・・・・（・・・今まで二人を可愛がってくれたみたいだな？その謝礼はタップリとさせてもらおうか！！！）」

Aキラートリニティ「！！！？ガァアアアアア！！？？」

アース「ハッ！！！デヤァアアアアアァア！！（まだまだ・・・

・おらおらおらぁああ！！！！）

アースは無言で自分の言いたい事をAキラートリニティに伝えるかのように無言のまま黒い炎を放つ拳をギリギリと握りしめてやるとそのままボディにパンチを放ち背負い投げで思いっきり地面に叩きつける。そしてそのまま無理やり立ち上がらせるとボディと顔に向かってパワーに溢れるパンチとケリを浴びせる。

また画面は切り替わりDキラートリニティとムーンライト・ナイトのグループの闘いもムーンライトとナイトの不利の状況で流れていた。理由はデュナミスを元にされたロボットと言う事がありスピードに特化した戦術であるため隙がない事とそれに合わせて巨大な氷の剣のダークセイバーの剣技で二人の遠距離攻撃を相殺されてしまう事が重なり二人は攻めに転じる事が出来ない事が主な原因であった。

ムーンライト「強い・・・ロボットとはいえウルトラマンの力の凄さが敵になって改めて認識されるわね」

ナイト「はい。せめて私のイュ―ジョンソードの一刺しでも奴に喰らわせる事が出来れば勝機はあるんですが・・・・」

的はかなり巨大なため狙う事は簡単だが攻撃を当てる事が出来なければ何も意味がない。何とか攻撃のパターンを掴んで反撃に転じようとするのだがDキラートリニティは二人に向けて剣を振るう。弱点さえ見つける事が出来れば勝機は必ず訪れるのだが・・・・

Dキラートリニティ「フン・・・ジャァアア！！！」

そろそろ終わらせてくれるとDキラートリニティはダークセイバーを消滅させるとデュナミス最強の必殺技の『インブレイスバースト』の発射態勢に入る。

ムーンライト「まさかこの町ごと私達を！！！」

ナイト「ここからフルスピードで他の場所に飛んでいっても間に合わない！！！」

自分達にはあの力を受け止める力はない・・・だが此処からフルス

ピードで他の場所に飛んでいってももう間に合わない・・・・
？？？『ダァアアアーーーー！！！！」
インブレイスバーストのエネルギー集約中にどこからか突如青い光線が放たれてインブレイスバーストを不発に終わらせるとDキラートリニティとムーンライト、ナイトの間に青い光を放ちながら青い光の巨人ウルトラマンデュナミスが現れる。
ムーンライト「デュナミス！！！」
ナイト「アレが青い光の巨人・・・ウルトラマンデュナミス」
ナイトは初めて見る巨人の神々しさに言葉が出なかった。デュナミスはすぐにDキラートリニティのほうを向くと本家のデュナミスセイバーを発動して構える。勿論Dキラートリニティもダークセイバーを発動させて二人の剣が交差し火花を散らす。
ナイト「これがウルトラマンの闘い・・・凄い」
ナイトはデュナミスの剣さばきに思わず見惚れて動きがとまってしまう。その間にも剣と剣が激しくぶつかり合い火花を散らし合うがだんだんと優劣がはっきりとわかるようになってきた。Dキラートリニティをを自身の剣技で翻弄し追い詰めていっているのだ。
デュナミス「ハァアアアッ！！！！」
Dキラートリニティ「ガァアアアアアアアッ！！」
そして遂にはDキラートリニティの剣をデュナミスの剣が叩き割る様に折る。そして光速に近い見動きでDキラートリニティの身体に斬撃を喰らわす。

3体のキラートリニティはプリキュアとウルトラマン達の絆の力とも呼べるものに追い詰められてしまいロボットらしからぬ焦りや恐怖とも呼べる藻にを感じたのか3体は一纏まりになりどうするかを内部のコンピューターで計算を行う。データ上ではこれほどの力が出されるなどあり得る筈がない・・・では何だと言うのだ?データはウソはつかないし奴らの限界は把握しているはず・・・その証拠として3体のコンビネーションでティガを追い詰める事も出来た。

何故なんだ!?奴らにあって自分達にない力とは一体何なんだ!?
こうなれば主(クレイズ)の為にこの身をささげるのみだとでも答えを出したかのように3体はティガ達を一度睨む。
Uキラートリニティ「・・・・デヤ。」
Aキラートリニティ・Dキラートリニティ「・・・・」
Uキラートリニティの合図に合意したかのように頷くと再度前を向きUキラートリニティはティガの最強必殺技のゼペリオン光線、Aキラートリニティはアースの最強必殺技ボルテックストーム、Dキラートリニティはデュナミスの最強必殺技のインブレイスバーストの発射態勢に入る。ゆっくりと自分達の全エネルギーを集めていくかのように
ブロッサム「まさかあの3人は自分と町ごと私達を道連れに!?」
マリン「やばいじゃん!!皆あの3体を止めよう・・・・!?・・・・アース?」
ブロッサムの感は当たっていた。3体は自分とこの町ごと全てを巻き込んで自分達を葬り去るつもりなのだ。マリンはさせるものかとフォルテウェイブを放とうとしたのだがブロッサム達の前にティガ、アース、デュナミスの3人が前に出る。
サンシャイン「デュナミスどうしたの!?」
ブロッサム達は当然驚く。ティガ達は目で彼女たちに自分の意見を伝えるようにただ黙って見つめていた。何を伝えていのだろうか?
ムーンライト「・・・もしかして貴方達3人が迎え撃つと言いたいの?」
ブロッサム「そんなのダメです!!私達は仲間じゃないですか・・・そんな危険なまねをわざわざさせる事は出来ません!!!」
ムーンライトは彼らの言いたい事であろう事を口にすると3人は頷く。あの3体は自分達の分身のようなもの。その決着をつけるべきなのも自分達であると言いたいようだ。当然ブロッサムはそんなことと出来ないと猛反対する。見す見す仲間を危険な目にあわせることなど出来ないから当然と言えば当然だ。だが彼らの心中を察したフ

ェアリーがブロッサムに語りかけるように声を上げる。
フェアリー「待ってブロッサム。」
ブロッサム「フェアリー？」
フェアリー「・・・・3人の言うことに従おう。」
ブロッサム「な、何を言ってるんですか！！！そんなこと出来るわけが・・・」
フェリー「あの3体は彼らの分身みたいなものなんだよ。だからアタシ達が協力して買っちゃだめなんだよ。3人の力で勝たないと意味がない・・・だから信じようよアタシ達の仲間を・・・絶対にロボットなんかに負けないって！！！」
ブロッサム「フェアリー・・・・分かりました。そのかわり絶対に負けないで下さいよ！！！！負けたら堪忍袋の緒が切れますから！！！」
ティガ「ハッ！！！」
アース「ジャ！！！」
デュナミス「フン！！」
ブロッサムはフェアリーの説得に納得したブロッサムは3人に絶対負けるなという言葉だけ送ると後ろに下がる。
ティガ「フンッ！！・・・・ハァアアアアア！！！！」
アース「ダァアッ！！・・・ジュワァアアアアア！！！！」
デュナミス「ハッ！！・・・デヤァアアアアア！！！！」
Uキラートリニティ・Aキラートリニティ・Dキラートリニティ「イイヤァアアアあ！！！」
3人はお互いに顔を見合いながら前を向くと自分達の最強必殺技の発射態勢に入る。そして3人と3体のエネルギー集約が終わると同時に白、赤、青の3色が合体した光線と3体分の黒一色の光線が混ざった巨大な光線がぶつかり押し合い衝撃波（ソニックブーム）とスパークが起きる。
流石サロメの科学技術は伊達ではないようで全く互角の力と力のぶつかり合いが繰り広げられる。
ティガ「グッ・・・ハァアアアーーー！！！」

アース「ウゥ・・・ダァアアアアアッ！！！！」
デュナミス「ンッ！！ウオォォオオオォオ！！！！！」
だがコピーなどに負けるつもりはないとティガ達の身体が限界を超えるかのように白く光り出すと光線のエネルギーが高まっていき黒い光線をどんどん押し戻していく・・・3人のウルトラマンは3体のロボの力を超えたのだ。
Uキラートリニティ・Aキラートリニティ・Dキラートリニティ「！！！？？？」
3体のキラートリニティは理解が出来なかった。データでは自分達は負ける要素などないはずなのに・・・機械的な動きしか出来ない事が彼らの敗因だったのだろうか？3体は光線を受けると光を放って爆発を起こしながら消滅していった。

ティガ・アース・デュナミス『・・・・・・』
3人のカラータイマーは気がつけば赤く点滅を始めていた。限界を超えたことでエネルギーを極限にまで消耗されたらしく3人はフラフラだった。何とか立ったままブロッサム達のほうを向くと勝利を分かち合うかのようにグーサインを出すとそのまま空にへと飛び立っていった。

その頃サロメ全戦基地指令室では自分が製作した3キラートリニティの末路を見たクレイズは驚きと怒りに心が支配されていた。自分が造った傑作と考えだした計画をぶち壊された事が相当気に入らないと言う事である。
クレイズ「己ぇ・・・プリキュア、ライダー、そしてウルトラマン・・・アタシの傑作をよくも壊してくれたわね・・・こうなればアイツも呼び出すしかないわ。ドクターヘロディアをサロメ星から呼び出して頂戴。こうなったら最高の恐怖を味あわせてやる！！！。そしてキュアナイト・・・月の影計画の≪素材≫よ・・・貴様も最大限に利用させてもらう」

クレイズは荒々しい声を出しながらモニターに映っているブロッサム達プリキュア、フェアリー、ティガ、アース、デュナミス、そしてキュアナイトをを自身が携帯している銃で打ち抜いてやると指令室を後にするのだった。

ダーク「クレイズのキラートリニティも破られたか・・・だが収穫はあったようだなクレイズよ。その点に関しては褒めてやろう。アレが此方の手に収まればプリキュアは下したも同然・・・クレイズよ早くアレを覚醒させよ」

ダークは海底で全てを見ていた。キラートリニティが敗れたのは汚点だが月の影計画の重要なキーパーソンを見つけた事がありそれほどクレイズに対して文句はないようである。問題はアレをどうやって味方につけるかであろう・・・それさえ攻略できれば・・・・ダークは漆黒が広がる海底で次の手を考えるのだった・・・・・・・・・

第１１話「絆の力」（後書き）

サロメのロボット技術はものすごいと思うのは私だけかな?最近はウルトラ兄弟もコピーしたと聞いてＤＶＤを見たのだがジャックとゾフィーの扱いの悪さに嫉妬が・・・ゼロＶＳニセセブンは燃える展開だがせめてジャックとゾフィーも活躍させてあげてよ・・・・さて次回は・・・当分ネタを考えることに集中したいので更新がものすごく遅れるかもしれません・・・誰かいいネタをくれ!!!!!

次回もお楽しみに♪

オリジナルプリキュア設定～ナイト編～

キュアナイト；アンナが変身するその名の通り夜の名を持つプリキュア。つぼみ達が変身する心の大樹が今まで生み出したプリキュアは別系統の戦士。メインカラーはブラックとシルバーでコスチュームはダークプリキュアのコスにブーツをはかせて黒い羽根を取り払いシルバーラインを入れたイメージ。ファイトスタイルはロッドを使った接近戦が主であるがイリュージョンロッドの光線技を使うことでオールマイティーに戦う事が出来る。

アンナ：記憶をなくした少女で「アンナ」と言う名前も3年前にとある村で拾われたときに付けられた前である。自分がどこから来たのか自分が何者であるかを探す旅に明け暮れている。見かけは17歳だが記憶が定かでないため実年齢は不明。容姿は特徴的なおかっぱ頭と黒い瞳。どこかダークプリキュアと似ているのだがそれは偶然なのか？それとも・・・・・・

～変身アイテム～

イリュージョンロッド：アンナが所持するキュアナイト専用の変身アイテム。ロッド部分を伸ばしプリキュアの種を装填することで先端の青いクリスタルから黒い光のエネルギーが放たれて全身を包んでプリキュアの姿にへと変身が完了する。（イメージはムーンライトの変身）またこれを武器として使用する事が可能で敵の牽制を行うときなどに使うなど応用も可能である。

黒いプリキュアの種。ブロッサム達が所持しているプリキュアの種と同類。普段はアンナのペンダントとして所持されている。

～必殺技～

プリキュア・ナイトイリュージョンウェーブ；イリュージョンロッドの先端のクリスタルと胸のプリキュアのクリスタルをシンクロさせて放つソニックブーム型の必殺技。この技の特徴は≪悪しき心≫二のみ反応してそれのみを攻撃対象とする能力があることと人体を破壊をおこうな事が出来るという二つの攻撃属性があると言う事である。どちらの属性になるかはナイトの意思によって決定されるためこの技を使うにはより慎重にならなければならない。

イリュージョンソード：イリュージョンロッドにエネルギーを溜めて硬化させて剣を作り出して的に斬りつける技。剣の表面には文字のようなものが刻まれている。（モチーフがオメガモンの必殺技グレイソード）

ナイトシュート；イリュージョンロッドから放たれる光線。破壊力は低く主に敵の注意をひきつける事に使われる事が多い。

プリキュア・イリュージョンソニック；簡易型のナイトイリュージョンウエーブ。破壊力はナイトイリュージョンウェーブよりは劣るのだが対象に十分なたダメージを与える事が出来る。

第１２話「放電怪獣復活」（前書き）

前回までのあらすじ～

ドクタークレイズの兵器の「キラートリニティ」の出現に追い詰められるティガ。絶体絶命のティガを助けたのは仲間のブロッサム達であった。彼女達の言葉にティガは戦う勇気を取り戻し見事キラートリニティを撃退するのであった。

ドクタークレイズはサロメ星からヘロディアを呼び出し次の計画である月の影計画を進めるべく次の準備にへと取りかかるのであった。

第１２話「放電怪獣復活」

此処は霧門岳と呼ばれる休火山。此処は夏は登山、冬はゲレンデでスキーを楽しむ事が出来る観光スポットで有名であり2月のこの時期はスキーでデートをするカップルで溢れているのであった。冬休みを迎えたつぼみたち一行はえりかの姉ももかの仕事のついでにこの霧門岳に三泊四日の旅行に行くこととなったのだ。

つぼみ「スキーも慣れると楽しいですね～！！」

えりか「だね～いやっほぉ！！！」

いつき「いえ～い♪」

ももか「ゆり～先に行くよ！！」

ゆり「待ってよももかぁ～」

アンナ「スキーというのも面白いです！！！

ももかの仕事は前日に大体終わらせたので今日はゲレンデでスキーを満喫しているつぼみたち一行。最初は初体験のスキーにおっかなびっくりだったのだが慣れるとかなり楽しいものでスポーツが苦手なつぼみも楽しんでいるのだった。当然えりか、いつき、ゆりもである。

大人「噂には聞いていたけど凄いなぁ此処は。」

琢磨「ああ。さてじゃあ俺達も行くとしますか？」

傑「モチ。じゃ御先に！！」

夕「あ、ずるいぞ～傑！！！」

琢磨「おい～慌てるとケガするぞ！！・・・ってあの二人なら大丈夫か。じゃ大人～俺も先に行くから」

大人「ふっ全くあの2人は相変わらずだな。さて俺も行くとします！！！」

上ではそれを大人達が見ていた。自分達もそろそろ行くかと上から傑を先頭に滑り出すのだった。４人とも運動神経はそれなりにあるためスキーを楽しむ。そして時間はあっという間に流れてその日の

夜は定番の中の定番のカレー作りとなった。ちなみに料理の葬式は大人が行うことになっている。
大人「よし玉ねぎ&ジャガイモはこれでいいかな?琢磨ぁ～人参は?」
琢磨「今皮を向いて適当に切ってるとこ。」
大人「よし。つぼみ～ご飯は?」
つぼみ「もう少しで炊けますよ～」
大人「よしよし。夕～肉は?」
夕「準備万端!!」
大人「肉よしと。えりか～カレーのルーは?」
えりか「勿論ちゃんと持ってきて・・・あ!!!!」
いつき「どうしたのえりか?」
ゆり「・・・まさかルーを買い忘れたとかそういう初歩的なミスをしたとか言わないわよね?」
アンナ「まさか・・・違いますよね?」
ももか「・・・違うよね?えりか」
ゆり、アンナ、姉のももかのツッコミに顔が冷や汗まみれになるえりか・・・全員の視線がえりかに集まる。
えりか「・・・す、すみましぇーん!!!ルーを買い忘れちゃいました!!(大汗)」
全員『なんですとぉおおおお!!!!!??????』
えりかは頭を下げて謝りそれと同時に全員の驚きの声が木霊する。
これはかなり困った事態である。当然のことだアルーあなければただのスープライスになってしまうからだ
大人「しゃーない。麓に降りて買ってくるか～。まだ夕食時にはちょっと早いからまだなんとかなる。」
つぼみ「じゃ私も行きます～!!」
大人「了解～。えりか当然ついて来るよね?」
えりか「・・・はい(汗)」
元の原因を作ったえりかも当然のごとくつき合わせる大人とつぼみ。

ちなみに今一行がいる貸別荘から山の麓までは歩いて15分の距離であるため3人でも問題はなかったのだった。雪山の自然が生んだ綺麗な景色を堪能しながら3人は麓のスーパーに向かう。

場面は山の麓近くのスーパーに切り替わる。

大人「よし目的のものは買えた・・・って何しとるの二人とも」

つぼみ「え?・・・食後のお楽しみを・・・・」

えりか「そうそう。食べた後はタップリと遊ばないと・・・」

大人「それでトランプと花火を買おうとしていると・・・因みにその二つの料金は誰持ちだい?トランプらともかくそのデラックス花火セットなんてかなり値が張るんじゃない?」

つぼみ・えりか『それはやっぱり大人さんが・・・』

大人「俺持ちかいな!!・・・というか何で俺持ち前提なんですか!?」

当然のごとく漫才風のツッコミを二人に入れる大人。二人は暫し大人に背中を向けると何やらひそひそと作戦会議を始めるのだった。

大人「!?(な、何が始まるんだ?)」

そして2分後に振りかえると二人だ黙ってただ大人を見つめてくるのだった。何か言いたげな目で。

つぼみ・えりか『・・・・・(何かを訴える目で必死に大人を見つめている」』

大人「・・・分かりました。分かったからそんな顔して俺の顔を見つめないでくれ!!(えりかはともかくとしても・・・つぼみにあんな顔されたらダメだ何も言い返せん)」

つぼみ・えりか『やったぁ!!』

大人「・・・・(こ、コイツら・・・二人になると恐ろしい。この二人とは買い物に行ってはいけないかもしない・・・)」

つぼみとえりかの女の子の眼差し攻撃に大人は何も言い返せずにしぶしぶながら必要なカレーのルーとトランプと花火の清算をすませるためにスーパーのレジへと向かう。その最中でこの二人のチーム

ワークは本当に色々な意味で敵に回したら物凄く恐ろしいかもしれないと思う大人なのだった。

大人・つぼみ・えりか『ただいまぁ～』
買いものを済ませて別荘に戻ってきた3人。丁度時間も夕食時になりすぐにカレーの調理を開始する。流石にカレーとなれば誰も失敗しないが大人の料理の腕は天の道を行き総てを司る男に鍛えられた事はあり其処らのカレーとは質が違うのだった。
つぼみ「ひ、大人さん凄いです。」
琢磨「いつの間にこんなに料理が出来る様になったんだ・・・やっぱりアレか？」
傑「天道さんの影響だろうな・・・師匠が偉大なだけ弟子の器も大きくなると言う事だろう」
夕「・・・・（惜しい事をした。別れたのはもったいなかったかも！！）」
大人「よし！！こんなもんだな。出来たよぉ～」
そう言って器に全員のカレーを取りわけてテーブルに運ぶ。
全員『いただきます！！！』
えりか「お、おいしい～！！」
琢磨「美味い！！
傑「流石だな天道流の弟子！！」
大人「そんな大げさな。一人暮らしするようになるとこうなるって」
夕「いやそれにしても美味しいよ！！」
ももか「うん。男の子で料理が上手いってのはかなり高ポイントだしね」
大人「カリスマモデルさんにそう言われるとなんだか照れるな」
ゆり「でもあまり調子に乗らない方がいいと思うけど」
大人「ゆりさんは相変わらず厳しいなぁ～（汗）」
アンナ「本当においしいです。プロみたいです！！」
大人「アンナちゃんもべた褒めしすぎだってば～」

全員『はははははは!!!』
色々な事を話しながら食事を進めていく面々。この頃は怪獣や宇宙人達の来襲で緊張を強いられていたためこんなに羽を伸ばせる時間はあまりなかったから本当に有意義だった。そして食事を終わらせると買ってきたトランプで恒例のババ抜きをする事になった。

大人「ふっふっふっ!!!俺は天の道を行き総てを司る男の弟子・・・故にトランプで負けることなどあり得ん!!・・・ってまたババだぁ!!!」
つぼみ「大人さんはババ引きに定評があるんですかね?・・・って言ってるそばから私もババを引いてしまいましたぁ!!!」
えりか「二人ともよくババを引くよね~よしアガリ!!」
いつき「またえりかあ一番か~あ、ボクもアガリだ!!」
ゆり「コレで4回目なのにまた同じ流れね。私もアガリ。」
ももか「ある意味気が合ってるのかもね~よし私もアガリ!!」
夕「2回目はまぐれだと思ったけどね~よし。アタシもアガリっと」
琢磨「確かに物凄い偶然だよな~うし俺もアガリ~」
傑「本で読んだことあるけど《4回目以降の偶然は必然》なんだってよ~アガリっと」
アンナ「そうなんですか?じゃ~コレで同じ結果になると偶然から必然になるんですね?私もアガリです。」
大人「またこのパターンか・・・次は勝つぞ!!つぼみ~」
つぼみ「そうはさせませんよ。4回目も勝利は私が貰います!!」
そう実は大人の3戦連敗なのである。こうなってくると大人の勝負運のなさを疑う事になるのだが見ている残りのメンバーはこの必死さが結構ツボであったりするものである。
大人「・・・(どっちだ?・・・右か左か・・・・さっきは左を引いてババだったから右にババを置いているか?・・・いやつぼみに限ってそんなことまで頭が回るとは考えられない・・・だが俺の裏をかいていると考えるならば左にババを置きあえて右を取らせない

ようにするという事も・・・クソ!!俺は天道さんの弟子だぞ?トランプで4連敗などあってはならない事だ。）」
つぼみ「早くしてくださいよ～。（さぁ～どっちを取りますか?太陽の弟子さん」
大人「まあ慌てるなよ・・・（つぼみめぇ～俺を焦らすつもりか・・・落ちつけ・・・焦ってはつぼみの思う壺だ・・・こうなったら此処はあえてババを取る覚悟で・・・）よしでは俺は左を取る!!」
つぼみ「それで良いんですね?（さぁ来てください!!!）」
大人「ああ。（来い俺の勝利の女神よ!!!!!）」
大人は心の中でそう願いながらカードを引く。引いたのは・・・・・
大人「ババだぁ!!!!」
つぼみ「ふふっ♪私のアガリで私の勝ちですね?」
大人「な、何でなんだ?・・・どうせ俺なんかダメという事か?・・・」
夕「ま、まあたかがトランプだから・・・そんなに落ち込まなくとも」
大人「うぅ～（泣）」
琢磨「大人が地獄に落ちた・・・・・」
流石に4連敗の傷は深かったのか地獄兄弟のごとくやさぐれるように拗ねてしまう大人。それを励ますように言葉を掛ける夕が大人のそばによる。
えりか「ババ抜きも飽きたし次は大富豪をやるっしゅ!!!」
琢磨「まだやるのか?よぉ～し今日はとことん遊ぶか!!」
夕「ほら元気出しなさいって。次は大富豪ですってよ」
大人「・・・大富豪・・・なら俺は大富豪で天の道を歩く!!!」
いつき「あははは（大人さんのキャラがおかしくなってる）」
ゆり「・・・負けが続くと人って変になるみたいね」
アンナ「あらら」
大人のキャラの豹変ぶりに全員が苦笑いしてしまうが気を取り直して大富豪をするのだが・・・

大人「うぅ～」
ももか「だ、大富豪でも４連敗・・・」
琢磨「こ、こりゃちょっと異常だ」
傑「此処まで来ると流石に怖くなるな・・・」
なんと大富豪でも大人は４連続ビリということになってしまいまた
連敗街道を走る事になった大人・・・此処まで来るとある意味本当
に怖くなるのだった・・・・
えりか「と、トランプはここまでにして花火でもやろう！！」
つぼみ「そ、そうですね！！！花火をやりましょう」
大人「・・・・そうだね。花火で癒されよう！！」
既に暗さがＭＡＸの大人・・・全員が彼に気を使う様に何とか空気
を変えようと必死になる。特にトランプを大人に買わせたつぼみと
えりかはとにかく必死になっているのだった。
夕「既に大人のライフは０ね・・・」
いつき「こんな大人さんを見たのは初めてかも・・・」
ゆり「何と言うか・・・・不憫ね」
アンナ「彼の勝負運の事はつこまないでおきましょう（汗）」
ももか「３人とも励ましてあげなさいよ・・・・」
冷や汗の３人とそれに突っ込みを入れるももか。そして準備をする
事４分後・・・
つぼみ「冬の花火って綺麗です～」
えりか「ホント。花火は夏にするものだけこう言う雪の多い場所で
やるのもいいよね～！！」
アンナ「これが花火・・・いいですね！！！」
大人「・・・綺麗だな。負の念が消えていく・・・・・」
琢磨「ま、まだ引きずってるのか」
傑「ま、まあ無理もないだろ・・・８連敗なんだし」
ゆり「・・・（戦いのときはすごくかっこいいのに）」
夕「あぁ～あ（スイッチは入っちゃったよ）」
ももか「あ、あははは」

約1名を除いて花火を楽しんだつぼみたち一行。しかしそんな最中・・・この霧門岳のとある井戸では４００年の封印がある者の干渉によって解かれてひそかにその牙を研いでいたのだった。

作業員１「はぁ～何で俺達は仕事などしなければならんのだろうな・・・外はカップルだらけだと言うのに」
作業員２「そう言うな・・・仕事しなきゃ収入ないんだから！！」
作業員１「へいへい。・・・早く終わらせて帰って寝よう」
作業員２「そうしたいならさっさと手を動かして仕事を済ませろよ」
霧門岳の麓付近に建設された電気を送るためマグマエネルギー発電所では二人の夜勤作業員が発電所内部のメンテナンスを行っていた。
作業員１「しかし部長も人が悪いよな～残業俺たちに残してさっさと帰ったばかりか家族とスキーなんてさ」
作業員２「しょうがないだろう？部長だって日頃は俺達の雑務をこなしてるんだから。たまには俺達がフォーローしないでどうすんだよ？」
作業員１「そうだな～さてとじゃみ見回りしてくるわ～」
作業員２「はいよ～。俺は此処で調整してるから」
そろそろ見回りの時間だと男は一人夜の暗い発電所を懐中電灯一つを持って調整室から出ていく。もう一人の男は調整室にて最後の調整を行うことにしたのだが突如発電所の電力が急激に下がり出した。
作業員２「な、何だ！？・・・急に電力が落ちた？・・・そんなバカな台風の季節でもないのに何でこんな事が・・・・」
作業員１「おい！！外に出てみろ！！」
作業員２「はぁ！？・・い、今は遊んでいる場合じゃ！！！」
作業員１「いいから来い！！！何かが電気を吸い上げてるんだよ！！」
作業員２「何ぃ！？」
二人の作業員は急いで外に出てみるとそこには何か透明なものに電気を吸い上げられている様子が目にとまった・・・原因は目には見

えない何者かが電気を盗んでいる事だった・・そしてしばらくして
透明何かが光り出すと一瞬だが巨大何かが姿を現したのだった・・・
・
作業員１「い、今のは怪獣!?・・・」
作業員２「しかも言い伝えのあの怪獣に似てるじゃないか・・・・」
二人は顔を見合わせるなり顔色が真っ青になってそう言い合う。し
かしなぜ今になってあの怪獣が復活を遂げたのかが分からない・・・
そして翌日。

矢車「此処が昨日に異常な停電があったとい言う連絡があったマグ
マエネルギー発電所か・・・」
影山「連絡では怪獣が電気を喰っていたと言う話らしいですが・・・
そんなことあり得ますかね?」
ホリイ「わからん・・・せやけども怪獣ちゅーのはワシ等の想像を
超えた存在や・・・断定は出来へん」
矢車「そうですね。」
ガッツウィング２号に乗り込んで現場に向かう矢車、影山、ホリイ
の３名。本当ならこのシーズンはスキーでも楽しみたいところだが
ＧＵＴＳの任務に休暇などはなくしぶしぶ出動することになった。
その事の大人達はと言うと
大人「やっほぉ!!!」
夕「ちょ、大人飛ばしすぎ!!!!」
つぼみ「速いですよぉ～（汗）」
大人は昨日の負けを晴らすかのようにものすごいスピードで雪面走る
琢磨「昨日のローテンションがウソのようだな」
傑「ああ（汗）。まあそれは置いておいて・・・昨日のあの停電な
んだが実はある噂が流れてるんだ。」
琢磨「噂?」
傑「ああ。聞くところによるとこの近くの古井戸に『ネロンガ』っ
ていう電気を喰う怪獣が眠っているらしくてな。それが目覚めたか

ら停電が起こっただとか・・・」
琢磨「電気を喰う?ていうかそんな怪獣がいるなんて信じ難いけどそれが本当だとしたら・・・・」
傑「可能性はあると思うんだ。昨日は停電になる様な気性でもないし近年の突然の怪獣の出現とかを考えると逆にこの理論がしっくりくるんだよ。」
琢磨「せっかくのオフタイムに考えたくもない事をお前はスラスラと喋れるな」
傑「まあ考えたくはないけど可能性がある以上は心構えをしっかりしとかないとな。いざとなった時に俺達の力はあるんだから」
琢磨「ああ。そうだな・・・」
大人達が楽しんでいる中琢磨と傑は昨日の停電の話をしていた。もしかしたら考えられる可能性を傑が言うと思わず冷や汗になる琢磨。だが傑の理論は間違っていないし逆に筋が通ってそうで嫌な予感がしてくるのだがそうなれば俺達の出番だ思うのだった。しかしその考えが現実になるのはこの数分後の事であった。

???「ギシャァアアウゥゥウウウウウ」
突如雪の被った森林から巨大な唸り声が聞こえてくるかと思ったら二本の角に黄色い背中をした巨大怪獣が姿を現すのだった。
大人「な、なんじゃありゃぁあああああ!!!!??」
琢磨「す、傑が変な話をするから変なのが出て来たじゃないか!!!」
傑「俺のせいですかぁ!!?」
3人のコントが始まるがネロンガはそれを当然無視して巨大な身体を動かして前進してくる。
大人「ったく・・・人が休日をエンジョイしてるって時に。」
つぼみ「ホントですよ!!。せっかく皆で楽しんでいたのに」
えりか「二人ともそんなこと言ってる場合じゃないって早く変身して戦わないと」

大人とつぼみはネロンガに対してそう言うが怪獣に人間の言葉など通用するわけがない。二人に対してえりかは半分呆れながらも変身しようとココロパヒュームを取り出すがそれを傑が制止する。
傑「待て。此処は此処にいる人々の非難が先だ。先ずは俺と琢磨、大人がライダーに変身して奴の気を引きつけるからつぼみ達は避難誘導を頼んだぞ！！」
いつき「分かりました。３人とも気を付けて」
先ずは大人達がネロンガをひきつけて此処の人々の避難の為の時間稼ぎをするとになった。久々にライダーに変身だと全員がベルトを装着してそれぞれの専用エクステンダーに乗ってネロンガに向かうのだった。

第１２話「放電怪獣復活」（後書き）

ネタ作るのに時間がかかったぁ！！！でも皆さんのおかげでしばらくは大丈夫だと思います。さて次回は更なる怪獣が登場します・・・その怪獣とは勿論・・・・

次回もお楽しみに♪

第１３話「霧門岳大噴火」（前書き）

前回までのあらすじ～
ももかのモデルの仕事の場所が観光地で有名の霧門岳ということで一緒についてきた大人達一行。久々に全員で大いに遊びゲレンデをエンジョイしていたのだが突如霧門岳付近ではるか昔に封印されていたと言われる『電気を喰う怪獣』のネロンガが現れた。大人、琢磨、傑の３人は怪獣をひきつけて人々の避難誘導を行うのだった

第１３話「霧門岳大噴火」

大人・琢磨・傑『変身！！！』
電子音「ＨＥＳＩＮ」
ネロンガ「ガァアアアアアっ！！！！」
大人達はエクステンダーに乗り込みながらベルトにゼクターを装填していき重厚な鎧を身に纏い仮面ライダーに変身していく。そして琢磨が変身するガタックがマスクドフォームの遠距攻撃であるガタックバルカンをネロンガに向けて乱射して自分達に気を引かせる。
ガタック「来い怪獣！！お前の相手は俺達だ！！！」
カブト「ガタックはそのままバルカンで奴を引きつけてくれ。ダークカブト！！行くぞ！！」
ダークカブト「ＯＫカブト！！！」
カブト・ダークカブト『キャストオフ！！！」
電子音「ＣＡＳＴ―ＯＦＦ」
電子音「ＣＨＡＮＧＥ　ＢＥＥＴＬＥ」
電子音「ＣＨＡＮＧＥ　ＢＥＥＴＬＥ」
二人はバイクに乗りながらバイクのメーター部分にあるスイッチを同時に押すとバイクの装甲が勢いよく飛び散りエクスーモードに変形する。また同時にカブトとダークカブトが身に纏っているの装甲も飛び散っていきシャープなライダーフォームになる。
カブト「いっけぇえええ！！！！！」
ダークカブト「はぁあああああ！！！！！！」
ネロンガ「！？・・・グォォオオォォオオオ！！！！！！」
二人はエクスモードに変形させたカブトエクステンダーの角の部分をネロンガの前足の部分に突き立てていきカブトムシが角を使って物を持ち上げる要領でネロンガを押して押してやる。
カブト「ガタック、ダークカブト・・・そろそろアレで決めるぞ！！！！」

ガタック・ダークカブト『おう！！！』
ガタック「キャストオフ！！！」
電子音「ＣＡＳＴ－ＯＦＦ」
電子音「ＣＨＡＮＧＥ　ＳＴＡＧ－ＢＥＥＴＬＥ」
３人はこのままネロンガに止めを刺そうとバイクを降りてマスクドフォームのままのガタックはキャストオフして蒼がメインカラーのライダーフォームにチェンジしていくと全員がベルトの右の部分にあるスイッチに手をかける。
カブト・ガタック・ダークカブト『クロックアップ！！！』
電子音「ＣＬＯＣＫ－ＵＰ」
ネロンガ「！？・・・ガグウウ！？」
カブト「はぁあああ！！！たぁあああーーー！！！」
ガタック「おらおらおらぁ！！！！！」
ダークカブト「ふん！！やぁあああーーーっ！！！」
３人はベルトのスイッチを押すと姿が消える。と言うよりは姿が見えなくなるほど光速で移動できるようになったと言うほうが正しいであろう。ネロンガは何が起きたのか理解が出来ずに辺りをキョロキョロと見回すのだが何処にいるかは当然分かるわけがなかった。
その間にも３人はそれぞれの専用武器でネロンガの巨大な身体を切り裂いていく。
ネロンガ「グォォアァアア！！？？・・・・グルグルグルグルゥウ！！！」
ネロンガは何とか３人を見つけ出そうとするが出来るわけがない・・・こうなれば目に目で対抗してくれるとネロンガの姿が突如見えなくなる。
カブト「なっ！？・・・消えた」
ガタック「バカな・・・あの巨大が何処に消えたって言うんだよ？」
ダークカブト「分からない・・・皆・・気をつけろ！！！」
突如姿が消えたネロンガに対して混乱する３人。時間が経つと３人のクロックアップは時間切れになり姿を晒す事になった。今度は自

分達がネロンガに翻弄されることなる。
ネロンガ「グォォオオオオオオ！！！！！！！」
カブト・ガタック・ダークカブト『！！！？？？』
突然ネロンガは姿を見せると3人に向かって角から放たれる雷撃で攻撃してきた。3人は咄嗟の不意打ちには対応できずに避けるのが遅れてしまう。
カブト・ガタックダークカブト『うわぁあああああああ！！！！！！』
3人は雷撃攻撃の爆発でものすごい勢いで雪に覆われる白い地面にライダーの鎧ごと行きおいとく叩きつけられてしまう。ネロンガはその隙に3人に近づこうとするがそれをさせまいと何処からかレーザーが飛んできた。
矢車「カブト大丈夫か！？」
影山「無茶しやがって・・・兄貴、ホリイさんデキサスビームを奴のドッテ腹にぶち込んでやりましょう！！！」
ホリイ「待ちや・・・デキサスよりもレーザーで牽制させて奴の気をこっちに引くのが先決や」
援護に来たのは矢車達であった。ウィング2号のレーザーショットでネロンガを制止させて間一髪でカブト達を守ったのである。そして今度は自分達に注意を引こうとレーザーを打つ。
ネロンガ「・・・・グルルルルル・・・・」
ネロンガは形勢が不利だと判断したのかもう一度透明になるとその場から立ち去るのだった。
矢車「逃げられたか・・・・」
ホリイ「それよりも仮面ライダー達は大丈夫かいな？・・・」
影山「大丈夫ですよ・・ライダーシステムも資格者もあの程度では死にません」
矢車「とにかく俺達は奴の情報が欲しい。麓に着陸して情報を得よう」
ホリイ「そやな。」

矢車達はウィングを霧門岳の麓に着陸させるのだった。

大人「うぅ、ぅうう・・・・二人とも・・・大丈夫か？」
琢磨「なんとか・・・・」
傑「左に同じだ・・・・・」
３人は変身が解除されてしまいフラフラになりながらも辺りを見回すがネロンガの姿は既にどこにもなかった。３人の事が気がかりになったつぼみ達が大人達の元に走ってきた。
つぼみ「３人とも大丈夫ですか！？」
大人「一応五体満足だよ」
えりか「何言ってるんの！！！ボロボロじゃない」
琢磨「面目ない・・・奴にあんな能力があるとは・・・」
傑「予想外だったよ・・・願わくは止めを刺そうと思ったんだが・・・」
いつき「とにかく別荘に戻って手当てをしないと！！！」
ゆり「そうね。３人とも歩ける？」
大人「ああ。別荘まではなんとか歩けるよ」
ももか「でも辛そうね・・・肩を貸して一緒に行けば早いでしょ」
琢磨「ありがとう」
傑「すまない・・・」
大人達はつぼみ達の肩を借りてなんとか別荘まで歩く。
そして場面は別荘に切り替わり。
大人「いたぁーーー！！！・・・うぅ～（泣）」
つぼみ「い、痛かったですか？（汗）」
大人「い、いや・・・それほどは（汗）」
ゆり「それにしてもボロボロね。ライダーフォームにだったとはいえ此処まで人体に酷いけがをさせるなんて」
大人「ああ。直撃してたらこんなんじゃ済まないよ。いつつつ・・・」
琢磨「ちょ、えりか、夕さん少しは丁寧に・・・」

えりか「もぉ～うるさいな。どうせ痛いんだからちょっとは我慢しなさい！！」
琢磨「い、いやそれはそうですが（滝汗）」
夕「男の子でしょ？大人しくしてなさい！！！」
琢磨「ちょ、そんな大量に（汗）いぎゃぁあああああー！！！！！」
えりか「よし終わり♪」
夕「全く世話がかかるんだから」
琢磨「お、鬼だ・・・えりかと夕は鬼だぁ！！！（泣）」
傑「すまない・・・3人とも。この程度は自分でやるものなんだが」
いつき「しょうがないですよ。うわぁ～背中に大きい傷が」
傑「ぐうぅ・・・結構深いのか？」
アンナ「と言うよりは範囲が大きいです。すぐに終わらせます。」
傑「頼む。」
ももか「じゃあ先ずは消毒を」
傑「うぅう！！・・・結構痛い（泣）」
いつき「我慢してください。すぐに終わらせますから」
3人は傷の手当てを行うのだが痛みは避けられず3人の声が室内に響く。特にえりかと夕に手当てを受けていた琢磨の悲鳴はものすごい物であった。そしてしばらくして手当てを終わると3人の身体は服を脱げは包帯だらけの状態となっていたのだった。そしてしばらくするとももかは別の仕事の時間となり大人達に後を任せて現場に向かうのだった。

大人「しかしアイツは一体何なんだ？突然姿が消えたと思ったら角から雷撃攻撃なんて・・・・」
傑「噂は本当だったらしいな。奴ははるか昔に一人の侍に封印された「ネロンガ」っていう雷獣らしい」
琢磨「雷獣ってことは雷を使う怪獣ってことか？」
傑「ああ。だけど言伝え程度の話だったらしいけど・・・何で今になって復活したんだろ？」

大人「まさか・・・・宇宙人の仕業か？」
つぼみ「バルタンが言っていた残党がこの地球に？」
えりか「でもレッドキング達が住んでいた星の怪獣たちがいるなら何でわざわざ封印された怪獣を復活させたのかな？めんどくさくない？わざわざ封印を解くなんて・・・」
いつき「確かにえりかの言うこといも一理あるね。そんな手間をしても一体だけしか現れないわけだし・・・バルタンの考え方的に一気に何体も怪獣を送り込んできそうなのに・・・・」
ゆり「・・・・もしかしたら何かの外的要因でネロンガが復活したんじゃないかしら？」
アンナ「外的要因っていうと？」
ゆり「そこまでは分からないわ・・・・でもそう考えるのが一番筋が通ると思うのよ」
確かにゆりの言うとりである。バルタンなどの侵略者がこのような効率の悪い作戦を考えるとは思えない。現に今までの敵の作戦は町を破壊する傾向が強かったし今回は停電という被害ぐらいで人命の被害は全くなかった。そう考えるとネロンガは何か別の要因で復活したと考えるのが妥当な考えとなるのである。
大人「とにかく調べてみる必要があるね。麓の人に色々と聞いてみよう」
全員『うん！！』
とにかく考えていても仕方ないため今は行動あるのみだと大人達は麓の人々からネロンガについての情報を得ようと麓に向かうのだがそこには既に情報収集を行っているところのＧＵＴＳ隊の矢車達の姿があった。
矢車「大人！！無事だったか？」
大人「はい。何とか五体満足です」
影山「無茶しやがって・・・でも無事でよかったよ」
琢磨「すみません心配をかけて」
アンナ「大人さんあの此方のお二方は？」

大人「あ、アンナちゃんは初めてだったね。こちらはＧＵＴＳの矢車さんと影山さんです。３年前俺達と闘ってくれた仲間ってところだね」
大人さん「彼女はアンナちゃんです。此処だけの話ですけど彼女もプリキュアなんです」
矢車「ほう。君もプリキュアなのか・・・初めまして。矢車想だ宜しく」
影山「同じく矢車さんの部下の影山です。宜しく！！」
アンナ「宜しくお願いします。アンナです。」
大人「自己紹介はこの辺にして。矢車さん達がいると言う事はＧＵＴＳも調査ですか？」
傑「もしかして矢車さん達もネロンガの事を？」
矢車「ああ奴の事は大体わかったよ。奴が封印されている古井戸は霧門岳と近くの海に繋がっているらしい」
大人「海と霧門岳に！？」
影山「ああ。ネロンガを何かが復活させたとなると海からか霧門岳のマグマじゃないかと考えられるんだ。でも一番可能性が高いのは前者だね。霧門岳は休火山であるからマグマと言う原因は考えにくいから。」
つぼみ「となると・・・海にネロンガを起こした原因があると考えるべきでしょうか？」
えりか「でも何が起こしたんだろう？」
いつき「分からない・・・矢車さん海にすんでいる怪獣って何か心当たりは何ですか？」
矢車「分からん。ＺＥＣＴにいた時はワーム専門だったしゴルザ達が出てくるまで怪獣なんて夢の産物だと思っていたな」
ゆり「影山さんは？」
影山「う～ん海に住む怪獣かぁ～・・・分からないな」
大人「・・・（海に住む怪獣・・・しかし本当に海からって断定できるのか？・・・霧門岳にもつながっているとなると霧門岳にも

何かあると考えるのが自然ではないだろうか？・・・何か忘れてる気がする・・・一体なんだ？・・・喉元まで来てるんだが思い出せない・・・・）」

矢車達の調査結果を聞いて大人は何かおかしいと思った。海に怪獣がいるとしても何のためにわざわざネロンガが封印されている井戸まで行くと言うのだろうか？そこを住みかにしているのなら４００円の今まで何故何事もないようにネロンガは封印されていたんだろうか？その近くに何か眠っていたにしろなぜ今更封印が解かれたのか・・・本当に海の怪獣が原因なんだろうか・・・俺達は何かを見落としている・・・・その思いが大人の中で疑問を更に生んでいく・・・

つぼみ「大人さん？・・・・どうしたんですか考え込んでしまって」

大人「・・・いや海だけに断定するのはまだ早い気がするんだよ・・・だって霧門岳にもつながっているとなるとネロンガのように霧門岳にも怪獣が眠っていてそいつが原因でネロンガが目覚めたとも考えられないかなって思ってさ・・・・」

ゆり「成程ね。確かに海だけとは断定するにはまだ判断材料が足りないわね。怪獣が出始めたのもゴルザ達が出現し始めてからだし霧門岳にも怪獣が眠っていると考えるのが普通ね」

琢磨「待てよ霧門だけって休火山とはいえ火山だぞ？・・・マグマがある場所に怪獣が眠っているなんて考えられるのか？」

傑「そこまでは何とも言えないけど俺達の常識を超越するのが怪獣だとしたら可能なんじゃいか？」

ホリイ「そのとーりや！！」

大人「ホリイさん！！」

ホリイ「怪獣に人間の常識は通用せえへん。霧門岳も調べてみる価値はあると思うで」

矢車「そうですね。では本部に連絡して地底タンクのピーパーで霧門岳内部を調査できるよう申請してみます」

ホリイ「じゃあ海はドルファーの出番やな」

矢車がＧＵＴＳ本部に連絡しようとしたその時突如辺りが揺れ始める。その揺れは立っているだけで精一杯なほどであった。
つぼみ「な、なんですか急に!?・・・きゃぁあっ!!!」
大人「つぼみ!!・・・・・っと大丈夫?」
つぼみ「は、はい・・・（は、恥ずかしいです）」
つぼみがバランスを崩して転びそうになるがその前に大人が咄嗟につぼみの身体を掴んでバランスを保つ。つぼみは顔が真っ赤になるが大人は特に何も気にしていないようであった。
えりか「な、何でこんな揺れが・・・な、何あれ!!!」
全員『!!!!!』
えりかが霧門岳のほうを指差して大声を上げる。全員が霧門岳のほうを見ると霧門岳から火の柱が上がっている様子であり霧門岳が大噴火を起こしているのだった。山の山頂からは凄まじい勢いで炎が上がりマグマが火口からドロドロと溢れ出ていく・・・その自然の脅威とも呼べるものに全員が言葉を失いじっと眺めてしまうのだった。
大人「な、何で休火山が噴火なんかを!?」
ゆり「休火山が噴火する事は珍しくない事だけど・・・生で見ると凄いわね」
矢車「ノンキにそんなこと言っている場合じゃない!!!早く此処にいる人々の避難を!!!」
影山「そうですね!!!。ホリイさん俺達はウィングで消火活動を」
ホリイ「了解や。矢車，避難誘導は頼んだで!!」
矢車「分かりました。大人達も手伝ってくれ!!俺一人じゃザバキきれない。」
大人「勿論です。皆行くぞ!!!」
つぼみ・えりか・いつき・アンナ『はい!!!!』
琢磨・傑『おう!!!』
ゆり「うん!!」
夕「ガッテン承知!!!」

矢車を先頭に大人達も避難誘導に参加するのだった。しかしなぜ突如霧門岳が大噴火を起こしたのかは原因が分からなかった。人々は突然の火山の大噴火に戸惑いを隠せるわけがなく人々は混乱する中避難所へと避難する。大人達も殆ど避難が完了すると避難テントへと向かうのだった。

???「グルルルルルッ!!!」

???「グォオオオオッ!!!」

マグマがあふれる霧門岳の内部には2体の巨大な影が蠢いていた。

この影げ霧門岳を噴火させたのは言うまでもないだろう・・・この2匹の正体は何者なのか!?

第１３話「霧門岳大噴火」（後書き）

久々のライダーでの闘いです！！いやぁ～懐かしいと感じてしまうのはこう言う時なのかもしれませんね！！！。
さて次回はＧＵＴＳの大活躍（！？）をご期待下さい。

次回もお楽しみに♪

キャラクター紹介?~主要人物編~

Δオリジナリキャラ

上原(うえはら)　大人(ひろと)　２０歳　　イメージＣＶ　宮野　真守　／ウルトラマンティガ

前作から引き続き登場。前作の『仮面ライダーカブト×ハートキャッチプリキュア!ライダーシステムと心の大樹』では仮面ライダーカブトの資格者としてハートキャッチプリキュアの面々と共に砂漠の使徒と闘った。本作ではウルトラマンに選ばれ、自分がキュアアンジェと共に戦った光の英雄戦士の血を受け継ぐ子孫の一人である事を知る。現在はゆりの監督のもとで猛勉強をして明堂院大学経済学部経営学科に在学中である。幼馴染で恋人関係だった夕とは恋人関係を解消しており最近は妹分だったつぼみの事が気になりだしているが妹分であった過去が切り離せずに思いを伝えられないでいる。また前作で出会った天道総司の影響で料理の腕を磨いていてその腕は師と変わらないほどにまで上達した。最初はウルトラマンティガとして戦う事を拒み自分の得た力に戸惑いが隠せない部分があったがキリエロイドとの戦いでブロッサム達の言葉にウルトラマンとしての自分を受け入れた。

漆山(うるしやま)　琢磨(たくま)　２０歳　　イメージＣＶ入野　自由　／ウルトラマンアース

前作から引き続き登場。前作の『仮面ライダーカブト×ハートキャッチプリキュア!ライダーシステムと心の大樹』でも仮面ライダーガタックの資格者としてハートキャッチプリキュアの面々と共に砂漠の使徒と闘った。現在は大人達とは違う大学に通いながらバイクで日本を一周という夢を叶えるためにアルバイトに励んでいる。アースに選ばれた事で自分がキュアアンジェと共に戦った光の英雄戦

士の子孫である事を知るが自分の力を受け入れて世界を守る為に戦う事を決意する。また最近はえりかとの距離が縮まりえりかが将来デザイナーとなった時に自分のレザージャケットを作ってもらいその後えりかと共に日本を一周する事を約束した。

影山（かげやま）　傑（すぐる）　２０歳　　イメージＣＶ福山　潤　／ウルトラマンデュナミス

前作から引き続き登場。前作の『仮面ライダーカブト×ハートキャッチプリキュア！ライダーシステムと心の大樹』では仮面ライダーダークカブトの資格者としてハートキャッチプリキュアの面々と共に砂漠の使徒と闘った。現在は外交官になる夢を叶えるために大学にて外国語、海外文化、外国経済について勉強中である。デュナミスに選ばれたことで自分がキュアアンジェと共に戦った光の英雄戦士の子孫である事を知るのだが琢磨と同じく自分の力を受け入れ世界を守るために戦う決意をする。最近はいつきとの距離が縮まりいつきとよくプライベートの時間を過ごしているとか。

里中（さとなか）　夕（ゆう）　２０歳　　イメージＣＶ堀江　由衣　／仮面ライダーフェアリー

前作から引き続き登場。前作の前作の『仮面ライダーカブト×ハートキャッチプリキュア！ライダーシステムと心の大樹』では仮面ライダーフェアリーの資格者としてハートキャッチプリキュアの面々と共に砂漠の使徒と闘った。現在は子供の笑顔を守ると言う夢の為に大学で教育について学んでいる。大人とは相思相愛の関係だったのだが自分の夢と大人の事を思って自分から別れる事を決意し大人との恋人関係を解消した。しかし大人の料理の腕前を見てその事を後悔している節があるが近年はつぼみが大人の事を思っている事に気がづきひそかにつぼみの事を応援している。大人達のようにウルトラマンの力はないがフェアリーの力を果敢に振るい平和を乱し自由を奪う者は容赦がない怒りを見せつける。

Δハートキャッチプリキュアメンバー

花咲(はなさき)つぼみ　17歳　イメージCV水樹　奈々　／キュアブロッサム
ご存知2010年の2月より放送された『ハートキャッチプリキュア！』の主人公。シャイでおっちょこちょいなのな事と弱い者を労わる優しさは相変わらずだが3年前と比べるとメンタル面では成長し芯の強い少女となった。現在はえりかやいつきと共に明堂学園の高等部に進学し高等部でもえりかを部長としてファッション部を設立した。植物学者になる夢を叶えるため日々勉強に励みながらも日々を大切にしている。最近は幼い事に実の兄のように慕ってた大人に恋心を抱いているのだがシャイな性格が災いして告白できずにいる。ゴルザ達の復活で再びキュアブロッサムとして戦うことになり過去の経験を活かして人々心と平和を守るために平和を乱す者と闘う。

来海(くるみ)えりか　17歳　イメージCV水沢　史絵　／キュアマリン
ご存知2010年の2月より放送された『ハートキャッチプリキュア！』の主要人物。つぼみの大親友。つぼみとは対照的にアクティブな性格は相変わらずだが3年前と比べると他者の心に気を配れるようになりつぼみや他の仲間たちと同じく芯の強い少女へと成長している。現在は明堂学園の高等部に進学し高等部でもファッション部を設立し部長として活躍している。最近は琢磨と共に日本を一周する事と姉のももかのようにモデルやファッションデザイナーになる夢を叶えるために日々努力している。琢磨の事は一応気になっているようだが友達以上恋人未満と言う関係である。ゴルザ達の復活でキュアマリンとして再び戦うことになり過去の経験を活かして人々の心と夢を守るために平和を乱す者と闘う。

明堂院(みょうどういん)いつき　17歳　イメージCV桑島　法子／キュアサンシャ

イン
ご存知２０１０年の2月より放送された『ハートキャッチプリキュア！」の主要人物。つぼみ、えりかの大親友であり明堂院学園の理事長の孫娘。一人称は相変わらず「ボク」であることと可愛い物に目がない事は相変わらずだがルックスは長髪にスカートの制服と言う女の子らしいものとなり兄のさつきの病気も完治したことで自分に正直になった。つぼみ、えりかが運営するファッション部の部員にして現在の明堂学園高等部の生徒会長を努めている。現在恋人はいないが外交官の夢を抱いている傑に憧れを抱いている節がありプライベートでも仲がいい。ゴルザ達の復活でキュアサンシャインとして再び戦う事になり過去の経験と今なお明堂院武術で鍛えている武道の心得を活かして人々の心と心の闇を太陽のように照らすために平和を乱す者と闘う。

月影（つきかげ）ゆり　２０歳　イメージＣＶ久川　綾／キュアムーンライト
ご存知２０１０年の2月より放送された『ハートキャッチプリキュア！」の主要人物。つぼみ、えりか、いつきの先輩格で現在は大人と同じ明堂学園大学部に在学中。今現在は自分が何をしたいのかを必死に探している。クールで完璧主義の性格は相変わらずだが3年前の経験で母親のような優しさを持つ女性へと成長した。現在は親元を離れて一人暮らしをしておりその影響で料理の腕が大人と同レベルないしそれ以上となった。ゴルザ達の復活で再びキュアムーンライトとして再び戦うことになり過去の経験を活かして人々の心を守り幸せで満たす為に平和を乱す者と闘う。

Δプリキュアの妖精たち

シプレ　イメージＣＶ川田　妙子
ご存知２０１０年の2月より放送された『ハートキャッチプリキュア！」の主人公花咲のつぼみのパートナー妖精。３年前の闘いの後

は破壊王デューンによって枯らされてしまった心の大樹が生み出した新しい命を育て守っている。つぼみのお姉さん役は相変わらずでつぼみの事に手を焼いているが姉気分としてつぼみと楽しく暮らしている。

コフレ　イメージＣＶくまい　もとこ
ご存知２０１０年の2月より放送された『ハートキャッチプリキュア！」の主要人物の来海えりかのパートナー妖精。３年前の闘いの後は破壊王デューンによって枯らされてしまった心の大樹が生み出した新しい命を育て守っている。えりかのマイペースな性格に手を焼いているが本人も満更ではなく弟分としてえりかと楽しく暮らしている

ポプリ　イメージＣＶ菊池　こころ
ご存知２０１０年の2月より放送された『ハートキャッチプリキュア！」の主要人物の明堂院いつきのパートナー妖精。３年前の闘いの後は破壊王デューンによって枯らされてしまった心の大樹が生み出した新しい命を育て守っている。いつきと同様可愛いものに目がなく大好きなパートナーのいつきともう一度暮らせる事を密かに願っていたため今はいつきと楽しい日々を送っている。

第１４話「噴火の元凶」（前書き）

前回までのあらすじ～
カブト、ガタック、ダークカブトの３人はネロンガに立ち向かうもネロンガの特異の技透明化によって惑わされ反撃を受けてしまう。
一行はその後ネロンガについて調べることにしたのだがそれと同じころ霧門岳が大噴火を起こすのだった

第１４話「噴火の元凶」

此処はＴＰＣ極東本部基地のタイブハンガーの会議室。突如起こった霧門岳の噴火対策会議を行ったいる真っ最中であった。
ミヤザワ「休火山が噴火する事は珍しい事ではありません。ただ問題なのは霧門岳内のマグマの異常な動きです」
サワイ「異常な動き？」
そう宮司局長に問いただす男はＴＰＣの最高権力を持つ初代総監の≪サワイ　ソウイチロウ≫である。サワイはミヤザワに何が異常なのかを説明を求める。ミヤザワは状況を説明する為に全員にモニターを見るように指示をするとモニターに霧門岳の断面図のを出させる。その図では基地門岳の地下に吸い寄せられるように集まっているマグマの図であった。
ミヤザワ「見てください。霧門岳の地下にまるで吸い寄せられるようにマグマが集まっています」
ナハラ「ミヤザワ局長は霧門岳の地下にマグマを集める特別な要因があると？」
ミヤザワ「ええ。このまま放っておくと莫大な量のマグマが一気に噴き出します」
ヨシオカ「そんな事になったら大災害だ・・・責任は誰が取るのかね？」
そう問いただしたのはＴＰＣのハト派の参謀であるナハラ　マサユキ　参謀。そして同じくセンスがトレードマークでかつての防衛庁の庁長せあったＴＰＣのタカ派であるヨシオカ・テツジ警務局長官は難しい顔をしながらそう言う。
ナハラ「一時的にマグマの流れを止める事は出来ないだろうか？」
ナハラはおもむろにそう言う。マグマの流れさえせき止める事が出来れば再び大噴火を起こす事は一時的にはなくなる。一時凌ぎでしかないがそれでも完璧な対策を考える為には時間が必要だ。何か手

があれば・・・全員は何かないかと考えつく・・・・
カシムラ「そうとな危険を伴いますが・・・・ピーパーなら」
最初に口を開いたのはＧＵＴＳ隊のウィングなどの兵器を開発しているカシムラ・レイコ博士であった。
ナハラ「ピーパー？」
カシムラ「ええ。地底探査用のタンクです」
ヨシオカ「探査？そんな悠長（ゆうちょう）な・・・」
サワイ「よし。ピーパー出動！！！」
かくして霧門岳のマグマせき止め作戦が開始されることとなり指令室には矢車、影山、ホリイの３名以外の隊員が指令室に集まった。
イルマ「地底タンクピーパーで霧門岳地下のマグマの流れを操作できないかしら？」
ムナカタ「ピーパーにコールドビームを搭載しましょう。マグマを凍結して溶岩石にすればマグマの流れをせき止められます」
イルマ「では各員準備に取り掛かって」
全員『了解！！！』
こうして既にウィング二号で現場に向かった矢車達３名と合流し地点タンクピーパーによるマグマ凍結作戦が開始されることとなった。

大人「大変な事になっちまった」
つぼみ「せっかくのお休みが（泣）」
琢磨「悲惨散々だ・・・ケガもするし」
えりか「それは関係ない気がする」
いつき「気になるのがネロンガだよ。ネロンガがこの状況で現われでもしたらそれこそ大変だよ」
傑「ああ・・・まるで計ったようにネロンガの復活と霧門岳の噴火が重なったからな」
ゆり「タイミングが良過ぎる気がする・・・こんな偶然って本当にあり得るのかしら？」
夕「うん。怖いよね・・・ゴルザ達もアレから全く姿を見せないし」

大人「夕・・・今なんていった?」
夕「え?だから怖いよねって・・・」
大人「その後」
夕「その後はゴルザ達もアレから姿を見せないって」
大人「そうか・・・それだ!!!これで繋がった・・・・」
大人は夕の言葉に頭の中でもやもやしていたものがハッと晴れたかのような顔をした。全員が頭にクエスチョンマークを浮かべながら大人を見つめる・・・・
つぼみ「大人さん?」
琢磨「どうしたんだよ急に?」
大人「分からないか?ゆりの言うとおりこんな偶然が重なるなんてあり得ない。そして俺達が唯一逃がした敵はゴルザとガルラ・・・・此処まで言えば分かるよね?」
つぼみ「ま、まさか今回の黒幕は・・・ゴルザとガルラ?」
そう大人が言いたい事はつまりこの一連の出来事を裏で操っていたのはティガの地で逃がしたゴルザとガルラだと言う事を言いたいのである。突然大人の言う事に全員が困惑する・・・
えりか「で、でも何でその2匹だって断定できるんですか?他に眠っている怪獣がいるかも知れいじゃないですか?」
大人「俺も最初はそう考えたさ・・・でも今までの事から考えるとこの2匹が一番候補に挙がるじゃない?。それにネロンガが封印されていた井戸が霧門岳繋がっているって聞いたと時ピンと来たんだ。ゴルザとガルラがティガ達に反撃の機会を伺う為に何かをし始めた影響じゃないかってね・・・だとしたら今のところ候補に挙がるこの2匹が霧門岳に近づいた事によってネロンガが目覚めてそれと当時に霧門岳も大噴火を起こした・・・・じゃないかって考えがね」
確かにえりかの言うとおり敵はゴルザとガルラの2匹と断定するには判断材料が足りない。だが大人の言う事にも一理ありネロンガが封印された井戸が霧門岳に繋がっている事とこのタイミングの良さを考えると自ずとこの考えに至るのだ。一同は大人の考えに納得し

たかのような顔をする。
いつき「≪反撃を伺う為の何か≫・・・それと霧門岳と何の関係が？」
ゆり「マグマ・・・もしかしたらゴルザとガルラはマグマをエネルギーに変える能力があるのだとしたら・・・」
アンナ「だとしたらマグマを吸収して自分を強化を図っている・・・とすると」
夕「もしも・・・ティガ達が敵わないほどにパワーアップしてたとしたら・・・」
アンナの言葉に全員が嫌な予感がした・・・もしゴルザ達が最初に出てきた時よりも凄まじくパワーアップをしていたのだとしたら・・・そう考えるだけでゾッとした。あの時はティガ達のお陰でなんとか撃退は出来たがもしもティガ達が敵わないほどにパワーアップしていたとしたら・・・
えりか「だいじょーぶだよ!!!もしもあの二匹がパワーアップしてたとしても今度はティガも、アースもデュミスもいる・・・それにアタシ達が頑張って負けないようにするだけじゃん!!!今度は絶対にアタシ達も諦めない」
大人「・・・そうだね。絶対に」
えりかの言うとおりであった。例えあの二匹が示凄まじいパワーアップをしたとしても自分達は全力で迎え撃てばいい・・・その為に俺達3人の力があるのだから・・・一人で敵わないのなら2人で2人よりも4人で立ち向かえばいい。そうすればどんなに手強くても必ず勝てる。そう信じて。

矢車「これより地底タンクピーパーで霧門岳地下に潜ります」
ムナカタ「了解。二人とも気を付けろ・・・地底では一切の支援が出来ない」
影山「分かってます。よしスタンバイＯＫ」
矢車「よし。いくぞ!!!」

その頃霧門岳のちょうど真横に当たる地点ではＧＵＴＳ隊による霧門岳のマグマ操作作戦が開始されたところであった。地底タンクのピーパーには矢車、影山が乗り込んでいた。そして入口が爆破されるとピーパーは前進していき霧門岳を自慢のドリルで突き進んでいく。

矢車「スピンドラー回転開始」

岩盤を砕くかのように進んでいき目指すのは霧門岳のマグマが溜っているマグマの川がある地点である。

影山「回転数を３０００に上げます。・・・・現在地底９００ｍ視点を通過。」

そしてしばらくすると気門岳の内部に入り目の前には高温でまるで血液近い色をしたマグマの川が広がっていた。

影山「地底洞窟に出ました。マグマの川が霧門岳の地下に向かって続いています」

ムナカタはウィング２号のモニターからその様子を見ていた。これを溶岩石に固めてしまえばしばらくはマグマの噴火を抑える事は出来る筈だ。

ムナカタ「よしマグマを凍結させるんだ」

影山「了解。」

ムナカタの指示に矢車達はピーパーのコクピット内のボタンを操作して絶対零度を利用したマグマすら凍結してしまう凍結光線のコールドビームの発射態勢に入るのだった。

矢車「コールドビーム発射!!!」

矢車の声とともにコクピット内の≪ＣＯＬＤ≫のボタンを押すとピーパーのドリルの先端から青色の光線がマグマの川に無会って放たれていくとそのままマグマは凄まじい冷気で熱を失うとそのまま固められて溶岩石に変化する。

影山「やった!!」

影山がガッツポーズをとり喜ぶと同じタイミングに何か声のようなものが響いた・・・だがこの環境で生物がいるなどあり得ない・・・

・だが確かに聞こえた。
矢車「!?・・・今声が・・・」
影山「声？」
矢車「怪獣の声のようなものが・・・聞こえたんだが」
影山「まさか・・・リーダー直ちに帰還します」
矢車「待て影山」
ムナカタ「どうした？」
矢車「このまま霧門岳方面に行けばマグマを吸い寄せている原因が分かります」
ムナカタ「ダメだ。最初にも言ったとおり地底で何かあってもこちらから支援は出来ないんだ。万が一の事があったらどうする？」
ムナカタは2人にすぐに帰還するように支持を煽るがそこに無線でサワイが割り込む
サワイ「副隊長。副隊長の言う事は正論だ。だが霧門岳に原因があるとしたら探っておく必要もある。ここは偵察の意味も込めて矢車隊員達には危険を背負わせてしまうが私は先に進むべきだと思う」
ムナカタ「分かりました。矢車、影山・・・探索を行え。ただし危険と分かったらすぐに引き返せ」
矢車・影山『了解!!!』
矢車達はピーパーで霧門岳方面へと突き進んでいく深く進めば進むほど異形な空気とも呼べるようなものが流れ始めて辺りもそれに比例するかのように不気味な雰囲気を漂わせる。そしてしばらくすると霧門岳付近の地底洞窟らしき部分に出た。
矢車「・・・なんだあれは？」
影山「あ、アレは目？」
二人はコクピット内から洞窟の柱辺りに光る4つの物体を見つけた・・・よく見ると何かの目に見える・・二人は目を凝らしてよく見てみるとそれは怪獣の顔だった。
矢車「アレは・・・ゴルザとガルラだ!!!」
イルマ「ゴルザとガルラ!?」

指令室にサワイと共にいるイルマが思わずそう叫んで聞いた。長らく出てきていないため当然と言えば当然であろう。
影山「間違いありません。ゴルザとガルラは地底でマグマエネルギーを吸収していたんです」
イルマ「どうしてゴルザがマグマのエネルギーを？」
矢車「こいつらが封印されていたネロンガを起こしたのか・・・リーダーどうします？」
ムナカタ「今刺激すればお前達が危険だ此処は一度帰還しろ。体勢を立て直し殲滅作戦を考案する。」
矢車・影山『了解』
この場でゴルザとガルラを攻撃する事は防火服もなしに火災現場に飛び込むようなものだ。此処は一時帰還し体勢を立て直す事を優先し矢車、影山両隊員はゴルザとガルラに余計なまねをせずにその場を後にする。
サワイ「イルマ隊長、今こそゴルザとガルラに決着（ケリ）を付ける時だ。対策は？」
イルマ「追従式ドリルビームが完成しています。現場には私も向かいます」
同じころサワイ総監とイルマも現場に向かう。

そしてしばらくして矢車達は大人達一行を呼び寄せ霧門岳内部の事を報告していた
大人「ゴルザとガルラが霧門岳内部に？」
琢磨「大人の感が当たったか」
傑「それでこれからどうするんですか？」
矢車「本部から追従式ドリルビームで奴らを地上におびき寄せる」
大人「その後は？」
影山「ハイパーレールガンおよび2機のウィング2号のデキサスビーム更には4機ウィング1号で一斉攻撃を行うつもりだよ」
夕「凄い！！それだけの一斉砲撃を受けたら流石のあの2匹もひと

たまりもないはずだよね？」
大人「いや・・・そうとは限らないよ。地底で強化を図っていたんだ・・・最初の時もアレだけ苦戦したのに」
ゆり「そうね。矢車さんその殲滅作戦に私達も参加させていただきませんか？あの２匹を逃がした責任は私達にもありますから」
つぼみ「お願いします！！！今度は負けません。必ず倒します」
今回の事はゴルザ達を逃がしてしまった自分達のせいでもある。つぼみ達は矢車と影山に必死に協力させてくれるように許可を請う。
今度は必ずゴルザとガルラを倒す為に
大人「（つぼみ・・・・あの時俺があの２匹を倒せていれば・・・）」
矢車「・・・・・」
えりか「お願いします！！！」
いつき「僕達にも協力させてください！！！」
アンナ「私も・・・手伝わせて下さい！！！」
影山「兄貴・・・」
矢車「分かった。ただしお前達の正体がばれるのはマズイ。だから作戦の合流は変身してからだ」
全員『はい！！！！』
こうして大人達一行も殲滅作戦に加わることとなった。そして１時間後にダイブハンガーからサワイとイルマが到着し追従式ドリルビームのセッティングも完了し作戦開始時刻となった。そこには変身したブロッサム達プリキュアとカブト達仮面ライダーがいるのであった
サワイ「私とイルマ隊長が全体の指揮をとる。副隊長ドリルビームを頼む」
ムナカタ「了解」
イルマ「ゴルザとガルラは地底１８２３ｍの０１座標にいます」
サワイ「ドリルビーム照準をロック」
ムナカタ「照準をロック！！」

サワイの合図にムナカタ以下の部下はドリルビームの照準をゴルザとガルラの脳天に合わせるように捜査を開始し発射態勢に入る。
サワイ「ドリルビーム発射！！！」
ムナカタ「発射！！！！」
ドリルビームが発射されると辺りに振動が走る。そして地下を映したモニターにビームの行方が映し出される。
ムナカタ「第１ビーム命中・・・・！！・・第２ビーム命中！！！」
イルマ「２匹が地上に出ます！！！」
サワイ「攻撃スタンバイ」
ムナカタ「総攻撃スタンバイ！！！」
隊員達『了解』
ホリイ「デキサスビームスタンバイ」
レイナ「了解！！！」
カブト「ハイパーキャストオフ！！！」
電子音「ＨＹＰＥＲ　ＣＡＳＴ　ＯＦＦ」
電子音「ＣＨＡＮＧＥ　ＨＹＰＥＲ　ＢＥＥＴＬＥ」
ダークカブト「クナイガン、エネルギー充填開始」
フェアリー「ライダーバースト、発射準備」
陽動に掛かったゴルザとガルラの逆襲に備えてＧＵＴＳ隊の面々は総攻撃の準備に入る。ハイパーレールガンの一斉射撃更、更に２機のガッツウィング２号のデキサスビーム、ウィング１号のハイパーレーザー更にライダー達の各個人の最強技、更にブロッサム達も遠距離系の必殺技の準備に入る。
ゴルザ「グォォオオォオオオオオオ！！！！！！！」
ガルラ「グガァアアアアアアウウウウ！！！！！！！」
サワイ「発射！！」
ムナカタ「発射！！」
ハイパーカブト「マキシマムハイパーサイクロン！！！」
ガタック「ガタックバルカン！！！
ブロッサム・マリン・サンシャイン・ムーンライト・ナイト『プリ

キュア・ハイパーインパクト！！』
ダークカブト「アバランチシュート！！！！！」
フェアリー「ライダーバースト！！！」
地面に亀裂が入り崩れ落ちるとそこから土煙とともにパワーアップして胸に真っ赤なマグマが流れているかのような血管が浮き上がって頭部も赤く光らせたゴルザとガルラが姿を見せる。そこにＧＵＴＳ隊のハイパーレールガン、ウィング２号のデキサスビーム、ウィング１号のハイパーレーザーとプリキュア、ライダー達の一斉攻撃が炸裂しゴルザとガルラに辺りに爆発が起こり爆炎と爆風が辺りを包んでいく。
だが辺りの爆風が止む頃に現れたその２匹の姿はまるで先ほどの一斉攻撃が通じていないかのように平然菜顔をしていた様子だった・・・全員が予想したゴルザとガルラのその防御力は早々を超えていた。
ゴルザ「ギシャァアアアアウゥウウウウウ！！！」
ガルラ「グガァアウアウゥウウウウウウウ！！！」
サワイ「信じられん・・・」
サワイが青くなった顔でそう言う。アレだけの攻撃を受けても平然としていられるその体力と防御力・・・あの２匹の力は自分達の想像を超えているものなのか！？辺りに沈黙が突然崩されることになった。

火山の噴火の音「ドガァアアアアアアンンンンッ！！！」
ハイパーカブト「なっ！？霧門岳がまた噴火し始めた・・・皆！！火山弾から人々を守るんだ！！」
ブロッサム・マリン・サンシャイン・ナイト『はい！！！』
ムーンライト・フェアリー『うん！！！』
突然霧門岳が２度目の噴火を起こして辺りに火山弾を降り注ぎ始めたのだ・・・このままでは避難している一般人や住民に危害が及んでしまう・・・カブト達はブロッサム達に人々を守る様に指示を出

すと自分達は別のほうへと移動する。
大人「今度こそあの2匹と決着をつける。琢磨、傑・・・行くぞ！！」
琢磨「おう！！！必ず奴らを倒す」
傑「これ以上は奴らの好きにはさせない」
ハイパーカブト達は変身を解除してぞれぞれ自分の姿に戻るとスパークレンスを取り出す。今度は絶対に逃がさない・・・必ず奴らを仕留ると言う思いに共鳴するかのようにスパークレンスは光を放っていた。
大人「ティガぁーーーー！！！！！！！！」
琢磨「アーーースぅーーー！！！！！！！！」
傑「デュナミスぅーーー！！！！！！！！」
3人はスパークレンスを空に掲げてスイッチを押して起動させて光に包まれる。白、赤、青の光が発せられる光が止むとそこには右手を天に突き出し左手を顔の横に曲げて添えると言う3人の独自の登場ポーズをしたティガ、アース、デュナミスの3人のウルトラマンの姿があった。

ブロッサム「ティガ！！！それにアースとデュナミスまで！！！」
マリン「待ってましたよぉ～ウルトラマン！！！」
ムーンライト「皆、私達もあの3人に負けないように・・・行きましょう」
サンシャイン「勿論・・・ナイトどうしたの？」
ナイト「皆さん・・・あそこを！！」
ナイトが指をさして方向を見るとそこから雷電が意思を持っているかのように集まるとネロンガも姿を現したのだ。自分を起こしてくれた元凶に復讐でもするつもりなのだろうか？
ブロッサム「ね、ネロンガ！！！」
マリン「この忙しい時に・・・こうなったらネロンガはアタシ達が引き受けようよ！！ティガ達に頼ってばかりじゃプリキュアの名

が廃るってもんだし」
ムーンライト「マリンがそう言うとは思ってなかったけど・・・そうね。ティガ達にはゴルザとガルラの戦いに専念してもらう為にも・・・ネロンガは私達が倒すわよ！！」
ブロッサム・マリン・サンシャイン・ナイト『はい！！！！！』
ネロンガに無かっいて勢いよく飛んでいくブロッサム達プリキュア。
ティガ達に代わって自分達が雷撃怪獣を相手にする。
ティガ達はゴルザとガルラをブロッサム達はネロンガを相手にし霧門岳を舞台にした3体怪獣と光の戦士達の戦いの火蓋は切って落とされた。強化されたゴルザとガルラ、透明化を武器とする電撃怪獣ネロンガを彼らは倒す事が出来るのだろうか？

第１４話「噴火の元凶」（後書き）

更新遅れました～。バイトが立て込んでいてこの時期は忙しいです（汗）

原作ではピーパーにはダイゴとシンジョウだったのであなりましたが矢車、影山コンビではああならないと思って素直に帰還させちゃいました。さて次回は３大怪獣との大乱闘が始まります～

次回もお楽しみに♪

第１５話「３大怪獣との激闘」（前書き）

前回までのあらすじ～
霧門岳のマグマの流れをせき止めることに成功したＧＵＴＳだったが霧門岳内部でゴルザとガルラが潜伏している事が判明した。霧門岳の大噴火およびネロンガの復活はこの二匹が黒幕であったのだ。
ＧＵＴＳは２匹と決着をつけるべく追従式ドリルビームで地上におびき寄せ総攻撃を仕掛けるも作戦は失敗。止むなく大人達はウルトラマンとなり２匹に立ち向かうのだがバットタイミングでネロンガが登場してしまう。ブロッサム達はティガ達にはゴルザとガルラとの戦いに集中してもらうためにネロンガの相手を引き受ける。
霧門岳を舞台に３大怪獣との激闘のッ火ぶたが切って落とされるのだった。

第15話「3大怪獣との激闘」

アース「！！！（ネロンガか・・・くっ！！こんな時に・・・待ってろ俺が援護を）」
アースはネロンガが出てきた事に焦りを感じ自分が援護に向かおうとするがそれをデュナミスがアースの肩を掴んで止める。
デュナミス「シュワ！！（待てアース。此処はブロッサム達にネロンガを任せて俺達は奴らを倒そう）」
アース「デヤァ！！（しかし・・・ネロンガの放電攻撃はライダーでさえも大ダメージを・・・）」
ティガ「チャァア！！（アース・・・お前の気持ちは分かる。だけどブロッサム達を信じるんだ。今度こそゴルザ達を逃がさない為にも）」
アース「・・・シュ！！！（分かった・・・そうときまればサッサとこいつらを片づけるぞ！！！）」
ティガ・デュナミス「ハァア！！！（おう！！！）」
ティガとデュナミスの説得に納得しゴルザとガルラの方向を向くと身構える。今度こそ絶対に逃がすわけにはいかない為に初戦で見せた余裕はなく完全に本気モードで倒してやると3人は武者震いしながらゴルザ達を睨む。

ティガ「ハッ！！！（いくぞゴルザ、ガルラ！！今度こそ決着（ケリ）を付ける！！！）」
ゴルザ「ギシャァアアアアアアウウウウ！！！！」
ガルラ「グガァアオアオオオオオオオオオオ！！！！！」
アース「ハッ！！！！（先手必勝だ！！！オラァアア！！！！」
デュナミス「デヤァアア！！！（おぉおおおっ！！！！）」
ティガはゴルザにアースとデュナミスはガルラに向かって頭から突っ込んでいき体当たりを放つがゴルザとガルラはそれを難なく受け

止めると逆に3人を吹っ飛ばす。
ティガ「！！？・・・・デヤァア！！（何！？・・・くっ！！・・・喰らえ！！！）」
ゴルザ「・・・・・ギシャウゥゥウウウウ！！！」
ティガ「グワァアッ！？・・・ウワァアアッ！！！！」
何と初戦では効果があったティガのマルチパンチを血管が浮き出ている赤光りする胸で受け止めるとそのまま強烈なネイルクローでティガを思いっきり跳ね飛ばしてしまう。
ティガ「ジャァ！！！・・ハッ！！チャァア！！！」
ゴルザ「・・・・・・・」
だがティガは怯まずゴルザに向かいパンチとキックのコンボ攻撃を放つもそれもゴルザの強化された堅い皮膚には通用しない。それどころか逆にティガの攻撃を煽るかのようにニヤリと笑ってみせるとそのまま左手でティガの足を掴みあげてやると・・・・
ゴルザ「ギシャァアアアアアオオオオ！！！」
ティガ「グアァアアアアア！！？？」
片手でティガの足を掴んでバランスを崩させることでさえ驚異のパワーであると言うのにそのままティガの腰めがけて右手でネイルクラッシュを放たれてティガはまたもや身体が空中に飛ばされる程の衝撃で吹っ飛ばされる。
ティガ「ハッ！ハッ！！ハッ！！！・・・ンーーーデヤァアアアッ！！！」
今度はパンチ主体のラッシュ攻撃を放っていってゴルザの急所を探り当てようとしていくのだが顔や肩にパンチを放っても平気な顔をしたままのゴルザ。そして放った拳を掴まれると・・・
ティガ「グゥウ！！？・・・ウォォオォオオオ！！！？？？」
拳を凄まじい力で握られると痛みに怯んでしまうティガ・・・そして腕を掴まれたままゴルザの太い足でキックを放たれるとそのまま投げ飛ばされしまう。
ティガ「ジャァア！！！」

ゴルザ「！！！・・・グゥゥウウウウ！！！」
ティガ「ハッ！？」
格闘線がダメなら光線で追い詰めるとハンドスラッシュをゴルザの胸に向かって放つがゴルザはそのハンドスラッシュを吸収してしまう。
ゴルザ「・・・・ギシャウゥゥウウウウウウウウ！！！！！」
ゴルザは勝利を確信したかのような雄たけびを上げるとティガに襲いかかる。パワーアップしたことで自分の能力に自信がついたのか初戦の時よりもパワーと勢いが全然違う。ティガもなんとかこの状況を打破しようと格闘技で応戦するもゴルザのネイルクローや尻尾によるテイル攻撃、キックなどでまともな反撃が出来ない。ティガは距離を取って隙を伺うがそれをさせるものかとゴルザは角から強化された超音波光線をティガに向けて放つ。
ティガ「グアァアアッ！！！！・・・・ハッ！！！」
こうなればゴルザに出来ない技で反撃する死なないとティガは得意のアクロバティックな動きを見せて翻弄してからとび蹴りを放とうとしたがゴルザにそれを避けられてしまう
ももか「ウルトラマン・・・頑張ってぇ！！！」
避難地で一番に声をあげたのはなんとももかであった。霧門岳が噴火したと聞いてえりかの事が心配になり戻ってきてしまったのだ。
ティガ「シーーーッ・・・・ハッ！！！」
ティガはももかの応援に答えるかのようにティガクリスタルを赤く光らせると剛腕の赤い戦士パワータイプへとタイプチェンジを行う。此処からが本当の闘いだと言うばかりにゴルザに構えを見せつけながら反撃を開始する。

アース「フン！！フン！フン！！！ハァアーーーーッ！！ジュワァア！！！」
ガルラ「グルルルルル」
同じころアースとデュナミスＶＳガルラの闘いも始まっていた。先

ずはアースが自慢の強力パンチとキックのハイパワーラッシュを放って初戦と同じくパワーで圧倒してやろうと思ったのだが強化された堅い装甲で打撃は全て防御されしまう。
デュナミス「（奴に打撃は不利か・・・ならばコイツで一気に！！！）」
ただの打撃が無理でもこれならどうだと次にデュナミスが氷の剣デュナミスセイバーを発動させて一気にガルラを一刀両断してやろうと剣を振るうのだが・・・
ガルラ「・・・ガァアアア！！！」
デュナミス「！？」
突如ガルラの両腕の爪が伸びていくとその伸びた爪を鋏のように利用してデュナミスのデュナミスセイバーを受け止めてしまう。
デュナミス「！？アアアアアアア！！！」
アース「ハッ！！・・・ダァアアアアアアア！！！！！！」
続いてアースが助走を付けてガルラに向かって勢いよくラリアットを放つ。
ガルラ「グル・・・グオォオオオ！！！」
アース「アアァアアア！！！」
のだがそれを受け止められると剣のように堅い爪とパワーアップした腕力でアースのボディに火花を散らすほどのダメージに与える。
流石のアーズもこのダメージは相当なものであり思わず膝をついてしまう。
ガルラ「グッフフフ！！！・・・ガァアアアアア！！！！」
その隙にアースに強化された超火炎放射を放って追撃をするのだが何とかそれを避けるアース。
格闘線でダメなら光線技でダメージを与えてやると二人はハンドスラッシュを同時に放つがガルラはそれを胸で受け止めて吸収してしまう。
夕「負けないで！！！アース、デュナミス・・・アタシは力になれない・・・だからアタシの分まで頑張ってぇ！！！！！」

アース「ハァアアッ！！！」
デュナミス「シャァアア！！！」
夕の言葉に励まされた二人は立ち上がる。アースはバーンナックル、デュナミスはデュナミスセイバーを発動してガルラに挑む。例えどんなに強くなっても諦めずに立ち向かう。此処にいる人々を守るため・・・因縁に決着(けり)を付けるために。

ブロッサム「プリキュア・ダブルインパクト！！！」
サンシャイン「サンシャイン・シュート！！！」
ナイト「ナイトシュート！！！！！」
少し離れた場所ではプリキュアチームとネロンガの闘いが繰り広げられていた。ネロンガは放電攻撃でブロッサム達を近づけさせないが元々遠距離攻撃の技にも富んでいるプリキュア達には放電攻撃しか攻撃手段がないネロンガには不利であった。だが攻撃が多くても一つ一つはネロンガにとって大したものではないため実際は互角の戦いであった。
ネロンガ「ギシャァアアア！！！！・・・グルグルグルグル・・・」
ムーンライト「！？・・・皆！！気を付けて・・・ネロンガが消えるわよ」
ムーンライトの予想どうりネロンガは姿を消す。
ブロッサム「ど、何処に！？」
マリン「まるでカメレオンみたいなやつ・・・」
サンシャイン「あんな巨体がどうやったら・・・・」
ブロッサム達は姿が見えないネロンガを必死に探すが消失したという言葉が適切であるように完全に景色に同化したネロンガを探すのは至難の業であった。
ネロンガ「・・・・・・・・・」
ネロンガは困惑するブロッサム達に牙をゆっくりと近づけるかのように気配を殺しながらゆっくり近づく・・・そして先ずは狙いを

ブロッサムに絞りギリギリまで姿を消しブロッサムまで５０ｍの所まで距離を縮める。
ナイト「！！・・ブロッサム危ない！！！」
ナイトはブロッサムの後ろに現れたネロンガの顔に向かってナイトシュートを放って怯ませる。間一髪ブロッサムはネロンガの奇襲を回避する。
ブロッサム「あ、危なかったです。ありがとうございますナイト」
ムーンライト「それにしても厄介ね。あの透明化の能力をなんとかしないと私達に勝ち目はないわ」
サンシャイン「せめてあの透明化の仕組みが分かれば封じる事ができるかもしれないのに・・・」
いくら技数で勝ってもその攻撃が当たらなくては何も意味がない。
透明化されて姿が消されてしまうとネロンガの奇襲を回避することで精一杯だ。透明化を封じない限り自分達に勝ち目はない。
ヤズミ「リーダー！！ネロンガの透明化の仕組みが分かりました。奴は自分の身体に体内の電気を流すことで身体を透明化しているです」
ムナカタ「と言う事は奴は透明化する時は帯電状態と言うことか？」
ヤズミ「はい。つまりはその状態の時は身体煙や誇りを引きつけます。ウィングの電磁探知レーダーで奴の頭上から重油を落としてやればプリキュアを援護できるかも知れません！！！」
ヤズミの分析曰くネロンガの透明化のプロセスは自分の身体に体内の電気を流して身体を帯電状態にすることで自分の姿を透明にする事が出来るようである。つまりは透明化の時は帯電状態のためテレビの画面にほこりが集まると同じ現象が起こり奴の近くで爆発などを起こせばその煙やほこりが奴の身体に張り付く・・・それをうまく利用すればプリキュア達は勝てるかもしれないのだ。
ムナカタ「了解した。矢車、影山ウィング１号に重油タンクを積んでネロンガの頭上から落としてやれ」
矢車・影山『了解！！！』

ムナカタの指示を受け矢車達はウィング1号に重油タンクを積みこみネロンガの頭上に向かって飛ぶ。
ネロンガ「グルグルグル・・・・」
そんな事に気がつかないネロンガはスタミナで勝る為持久戦に持ち込んで優位に立つ。
ブロッサム「ま、また・・・何処に」
マリン「同じパターンだけど攻略法が思いつかないとどうしようもないよ・・・・」
サンシャイン「これじゃキリがない」
ムーンライト「せめて透明化の原理さえ分かれば」
アンナ「くっ!!!」
またもや透明化されてしまうとネロンガの奇襲攻撃から逃げるしかない・・・それではいつまでたっても勝負がつかない。そうなれば体力などの面で何れ(いず)は負けてしまう。だがその時空に飛んでいるウィングが重油タンクを落として爆発を起こす。
ブロッサム「!?・・・や、矢車さんどうして爆発なんかを・・・」
マリン「・・・!!・・・皆見て!!!」
サンシャイン「アレはネロンガの姿?・・・でも何で?」
ムーンライト「成程・・・そう言うことね」
爆炎が吸い寄せられるように集まるとネロンガの姿になる。その現象を見るなりムーンライトはネロンガンの透明化の原理が理解できたらしい。
アンナ「ムーンライト?」
ムーンライト「ネロンガは自分の身体を帯電状態にすることで透明化するのよ。でもそれが故に自分の身体に煙やほこりを吸いつけるのよ!!!」
まさにそのとおりである。今のネロンガは陸地の魚に等しく完全に形勢は逆転となったのだ。
マリン「よっしゃー!!こうなればこっちのもんだね。皆!!行くよぉ!!!!」

姿が見えれば完全にこちらのものだとブロッサム達はネロンガに対して反撃を開始する。

ティガ・パワータイプ「チャァア！！」
ゴルザ「ギヤウゥウ！？・・・ギシャァアアッ！！！」
パワータイプになったティガはゴルザと向かい合うと腕力が何倍にも強化されたパンチを胸に放ちながら組みかかる。そしてキックで怯ませた後頭を掴んで投げ飛ばしてゴルザを背中から叩きつける。
ゴルザ「ギシュウゥ・・・ギシャァアアア！！」
ティガ・パワータイプ「チャァ・・・ジャァア！！ハッァ！！！ジュワァ！！・・チャァアアーーー！！！」
ゴルザはすぐに立ち上がるとそのまま体当たりを放つのだがティガはその勢いをも利用してゴルザのボディにパンチを放っていき逆にダメージを与え追撃のパンチを放ち最後には巴投げで投げ飛ばす。
ゴルザ「ギシャゥゥウウウう！！！」
ゴルザはティガの猛攻を受けても立ち上がる。これほどの猛攻を受けてもまだまだ戦えるとと言う事はマグマで強化された身体は相当頑丈になったようである。
ティガパワータイプ「フン・・・ハァッ！！チャァアーーッ！！！」
ゴルザ「ギシャゥウゥウウう！！！！！」
ティガ・パワータイプ「ハッ！ハッ！！・・・チャァア！！！」
ティガはまだまだとばかりに追撃のキックを放って怯ませながら取っ組み合うと肩とボディにパンチを放ちそして最後にはキックでゴルザを吹っ飛ばす。
ティガパワータイプ「ハッ！！！ダァアアアーーーーーーッ！！！！・・・ハァアアッ！！！」
ゴルザ「・・・ギシャァアアアア！！！！！！」
ティガ・パワータイプ「ハッ！？」
カラータイマー「ピコンピコンピコンピコン」
トドメのデラシウム光流をゴルザに向けて放つのだがゴルザは胸で

デラシウム光流を吸収してしまう。カラータイマーも点滅を始めてしまう。ゴルザの執念とも呼べるものにティガの技は通用しなのか！？だがティガは諦めるものかと向かってくるゴルザにファイティングポーズを見せつける。

アース「デヤァアアア！！！！」
デュナミス「ハァアアアアッ！！！！」
ガルラ「グルゥゥウウウウ！！！」
アースのバーンナックルで強化された炎の拳とデュナミスのデュナミスセイバーが合わさってもガルラの爪とは互角で一進一退の攻防が続く。ガルラも強化された身体は伊達ではないようで二人の攻撃を受け付けずパワーアップした腕力もただものではない。
アーズ「ウォオオッ！！！！デヤァアアアア！！！」
ガルラ「ギジュゥウウゥウウウ！！？？？？」
だが長い間均等を保っていた勝負も流れが生まれ始める。アースが渾身の一撃でガルラの片方の爪を叩き折ったのだ。そしてその隙にデュナミスのデュナミスセイバーでもう片方の爪を切り落としたのだった。
デュナミス「ハッ！！！シャァアア！！ハァア！！！デヤァアア！！！」
アース「ダァア！！！！ハァアアア！！！！オオオオ！！タァアアアー！！！！」
ガルラが怯んだ隙にアースとデュナミスは絶妙なコンビラッシュでダブルパンチとダブルキックどがら裏の堅い装甲で覆われているボディに向かって放つ。だんだんと衝撃に耐えきられなくなったガルラの装甲にヒビが入っていき亀裂が大きくなっていく。

ブロッサム「はぁあああーーーー！！！！」
マリン「やぁあああーーーーっ！！！！」
サンシャイン「たぁあああーーーーっ！！！！」

ムーンライト「はぁあああーーーっ！！！」
ネロンガ「グオォオォオオオオォオ！！！！！？？？」
ブロッサムとマリンのペアとサンシャインとムーンライトのペアのダブルパンチがネロンガの両方の横っ腹に放たれるとネロンガは悲鳴のような咆哮を上げる。
ネロンガ「ギシャウゥウウう！！！！」
サンシャイン「サンフラワーイージス！！！」
ナイト「イリュージョンソード！！！」
ネロンガ「ギシャァアアア！！？？？？」
反撃しようと角を前に合わせ雷撃を放つのだがそれをサンシャインのサンフラワーイージスで防がれてしまう。そしてその隙にナイトのイリュージョンソードでネロンガの角を切り落とす。
ブロッサム「皆！！止めはフォルテッウェイブで行きましょう！！」
マリン「やるっしゅ！！！」
サンシャイン・ムーンライト『うん！！』
ナイト「私も最強の必殺技で行きます！！！」
ブロッサム達ハートキャッチのメンバーは胸のクリスタルを光らせてそれぞれピンク、蒼、黄色、藍色の光を放つとブロッサム、マリン、ムーンライトはタクト型のアイテム『フラワータクト』、サンシャインはタンバリン型のアイテム『シャイニータンバリン』を召還する。ナイトは胸のクリスタルとイリュージョンロッドの青いクリスタルを共鳴させてロッドを天に掲げる。
ブロッサム「花よ輝け！！プリキュア・ピンクフォルテウェイブ！！！」
マリン「花よ煌めけ！！プリキュア・ブルーフォルテウェイブ！！！」
サンシャイン「花よ舞い踊れ！！プリキュア・ゴールドフォルテバースト！！！」
ムーンライト「花よ輝け！！プリキュア・シルバーフォルテウェイブ！！！」

ナイト「邪悪の心を浄化する黒き波動を受けてみよ！！プリキュア・ナイトイリュージョンウェーブ！！！」

5人の必殺技がネロンガに向かって放たれる。ブロッサム、マリンはタクトのクリスタルドームをサンシャインとムーンライトはタクトとタンバリンそのものをナイトは先端の青いクリスタルから漆黒の波動を放ちネロンガの戦意を失わせる。ネロンガはフォルテウェイブとナイトイリュージョンウェーブを受けるとまるで眠りにつくかのようにその場に倒れ込み目を閉じる。

マリン「やったぁあ！！！」

ブロッサム・サンシャイン「イエーイ♪」

ムーンライト「ふぅ。」

ナイト「何とか勝てました」

アース・デュナミス『デヤァアアアアアっ！！！！！！！』

カラータイマーがなりエネルギーの残りが少なくなっても諦めない二人。そして二人の渾身の力を込めたパンチがガルラのひび割れた装甲に放たれるとガルラの装甲は砕け散り赤く光るボディが露わになる。

ガルラ「ギシャァアウアウゥウウゥウゥウウ！！！？？？？」

ガルラはアースとデュナミスのコンボ攻撃に対応できずにスタミナ切れを起こし既にフラフラであった。装甲が破壊された今は二人の光線技を吸収する事も出来ない・・・それでも負けるものかと一歩、二歩と近づいていく・・・二人のウルトラマンは戦いを終わらせるため自身の最強技の発射準備の体勢を取る。

アース「ハッ・・・オオォオオオオッ！！！！・・・・デヤァアアアアアアーーーーー！！！」

デュナミス「ジャァ！！！・・・ハァアアアッーーーー！！！！ダァアアアアーーーーーッ！！！」

アースのボルテックストームとデュナミスのインブレイスバーストが合体した合体光線の『ダブルトレント』がガルラに放たれるとガ

ルラは胸から火花を散らしてその場に倒れる。

ゴルザ「グルグルグルゥ！！！」
ティガ・パワータイプ「フッ！！ハァアアアアーーーーーッ！！！！チャァアア！！！！」
ゴルザ「グォオオォォッ！！？？」
デラシウム光流すら吸収してしまうあの光線を吸収する能力を何とかしなければ勝ち目はない・・・ティガは身体にエネルギーを溜めて腕に集めるとそのエネルギーをためた腕でゴルザにパンチを放つ。通常のパンチとは違い凄まじい火花を散らすこのパンチは『ティガ電撃パンチ』と呼ばれ通常のパワータイプのパンチの数倍の破壊力を持つ技である。
ティガ・パワータイプ「ハッ！！ジャァア！！！」
ゴルザ「ギシャァアアウゥウウ！！」
更にエネルギーをためた効果はしばらく続くのでティガはそのままキックを放つを先ほどのパンチと同じく火花が散る。この状態のキックは『ティガ電撃キック』と呼ばれる。
ティガ「ハァアアッ！！！・・・ハッ！ハッ！！ハッ！！ハッ！！！！チャァアア！！！・トワァア！！・・ジュワァア！！」
凄まじいダメージに倒れるゴルザ。すぐに立ち上がるがそれに合わせるように肩に踵落とし。更にボディィに連続パンチにローキック二連発にアッパーを決める。この連続攻撃には流石のゴルザも大ダメージは避けられない。
ティガ・パワータイプ「チャッ！！・・・ジュワァ！！！チャァアアーーー！！！」
そしてトドメの急降下からの破壊力抜群の飛び蹴りを放ちゴルザを倒す。既にグロッキー状態のゴルザには傷口に塩だ。
ティガ「ウーーーン！！！ハッ！！！」
ゴルザが完全にダウンしている隙にティガクリスタルを白く光らせてマルチタイプに戻る。

ゴルザ「グ、グォオゥウ・・・・グァアア・・・・」
ティガ「ジュワァアアッ！！！！」
今の状態ならば光線の吸収も発動できない。これで完全に止めだとティガは両腕を交差させてエネルギーを溜めて最強必殺技のゼペリオン光線をゴルザに放つ。ゴルザは胸にゼペリオン光線を受けると爆発を起こしてその場に倒れる。ゴルザとガルラはかくしてティガ、アース、デュナミスに敗れ倒され。ネロンガはブロッサム達に浄化され井戸に封印されたのだった。

ティガ「・・・・ジュワァ！！」
ティガはアクロバットジャンプでゴルザの元に近づくとゴルザの身体を持ち上げる。同じころアースとデュナミスもガルラの身体を持ち上げていた。３人は顔を合わせて頷くと同時に空に飛び立つ。
ブロッサム「ゴルザとガルラをどうするつもりなんでしょう？」
ムーンライト「・・・二度と復活しないよう・・・ゴルザとガルラの細胞の一つすら残さないようにするつもりよ」
マリン「でもどうやって？」
ムーンライト「・・・見ていなさい。」
ブロッサム達の疑問にムーンライトはそう答える。ゴルザとガルラが二度と復活しないようにする方法は一つしかない。ムーンライト以外は分からないようだがその答えはムーンライトの考え通りである。
ティガ達は霧門岳の方向に飛んでいくと霧門岳の火口にゴルザとガルラを投げ捨てる。そうつまりは火口のマグマで細胞の一欠けらも残さずに焼きつくすことで二度と復活できなくなると考えたのだ。
ゴルザとガルラの亡骸は霧門岳の火口に落ちていく
ブロッサム「成程・・・完全焼却ですね」
マリン「これで・・・もうあの２匹は二度と」
サンシャイン「復活しないんだね」
ムーンライト「ええ。もう二度と・・・・」

ナイト「・・・あの2匹も悲しい存在ですね。・・・心があれば彼らも」

霧門岳はもう一度噴火を起こして辺りに火花の雨を降らす。ゴルザとガルラは完全に消滅したこれでもう二度と復活する事はないだろう・・・爆炎で完全に燃え尽きたはずだから。

第１５話「３大怪獣との激闘」（後書き）

ナイトのは必殺技のお披露目でしたが話の構成のせいで目立ちませんでしたね（汗）もっと彼女にもスポットライトを浴びせないと・・・

さて次回は月の影計画編に突入です。メインはもちろんナイトとムーンライトそしてもう一人・・・・

次回もお楽しみに♪

長編予告～月の影計画編～（前書き）

オープニング主題歌「ＮＥＸＴ　Ｌｅｖｅｌ」

エンディング主題歌「ＬＩＧＨＴ　ＩＮ　ＹＯＵＲ　ＨＥＡＲＴ」

長編予告～月の影計画編～

クレイズ「遂に動くわよ・・・月の影計画が」

アンナ「私は・・・いったい誰なの!?・・・時々出てくるイメージは!?・・・お、お前は誰なんだ!?」

???「思い出せ・・・もう一人の私よ・・・月を取り込み私が私になるんだ・・・」

ヘロディア「実験するにはまだまだ不安定よ?・・・どうする気クレイズ?」

クレイズ「どうするも何も・・・《人形》にしてしまえばいいだけの話よ・・・貴女と私のサロメ星科学でね」

アンナ「う、うわぁあああ!!!!!?????」

大人「あ、アンナちゃん!!!!!」

えりか「何するきよアンタ達!!!!!」

ゆり「あ、貴女は!?」

???「久しぶりだな・・・月影ゆり・・・キュアムーンライト!!!!!」

いつき「そ、そんな・・・あ、貴女は3年前にゆりさんに・・・ムーンライトに倒されたはず」

クレイズ「平和を守るウルトラマンティガが地球を・・・・宇宙を
も制圧する」

ティガ「ハッ!?（貴様は?まさか）」

アース「（もう一人の・・・）」

デュナミス「（巨人!?）」

つぼみ「貴女達は・・・誰なんですか!?」

???「私は・・・セイバー・・・・救世主の名を持つプリキュアよ。つぼみ」

???「その相棒の妖精ロモ!!」

クレイズ「その能力はオリジナルをはるかに凌駕する・・・これこそサロメ星の最強ロボット兵器・・・これを量産すればサロメが最強となるのよぉぉおおお!!!!!!!」

大人「そ、そんな・・・ゼクターが作動しない!?」

夕「どうしたのバタフライゼクター!?」

???「今こそ決着だ・・・キュアムーンライト!!!」

ゆり「いやよ・・・私はまた妹を殺さなければならないの!?」

大人「目を覚ませアンナ！！！お前はもう影なんかじゃない・・・・
お前はお前じゃないか！！！・・・自分を取り戻せぇ！！！！！」

アンナ「ありがとう・・・お姉ちゃん・・・・・私・・幸せだった
よ・・・最後にお姉ちゃんに会えてよかった・・・あの時の夢がか
なったんだもん♪・・・でももう私は限界みたい・・・バイバイ」

ゆり「アンナーーーーーー！！！」

クレイズ「こうなったら私が自ら！！！！」

大人「これは？スパークレンスから光が！？」

琢磨「俺のも・・・」

傑「ゆりとアンナの思いに共鳴しているのか！？」

つぼみ「プリキュアの種からエネルギーが！？」

えりか「いったい何が起こるっていうの！？」

いつき「綺麗・・・まるで聖夜の光」

ゆり「あんなに沢山の光が・・・・アンナの身体の中に・・・・」

？？？「私はもう月の影ではない・・・私の名は聖なる夜に咲く一
輪の花！！！」

第１６話月の影計画編「動きだす陰謀」（前書き）

遂に動きだすクレイズの「月の影計画」その真相とは?そして明かされるアンナの出生の秘密と次元を超えて現れる新しい戦士の影。大人達ウルトラマン、つぼみ達プリキュア、クレイズ率いるサロメ軍団、そしてアンナと新たしい戦士の思いが絡み合う時物語は動きだす。

第１６話月の影計画編「動きだす陰謀」

アンナ「此処は・・・何処!?・・・・ゆりさん!!・・・み、皆何処に行ったの?」
アンナは闇の中一人で彷徨っていた。自分は確か今はゆりと一緒に希望ヶ丘に暮らしているはずなのに。此処は何処だ?・・・何で自分はこんな場所を彷徨っているんだ?。あてもなく道を進んでいくと人影が見えた。
アンナ「ゆりさん!?・・・・ゆりさんも此処に迷い込んだんです・・・!!!」
その人影にアンナはゆりかもしれないと思い走っていくがその正体に絶句して固まってしまう。
???「待ってたよ・・・もう一人の私」
アンナ「お、お前は・・・私!?・・・・そ、そんなバカな」
なんとその正体は服こそまるで堕天使をイメージさせる黒いスカートではあるが顔や体格はアンナそのものであったのだ。こんな事現実にはあり得ない事だ。アンナはすぐにイリュージョンロッドを取り出してもう一人の自分とも呼べる存在に向かって構える。
アンナ（?）「驚くことないでしょ?私は貴女で貴女は私なんだから」
アンナ「そ、そんなことあり得ない・・・アンナは・・・私は此処にいる私一人だけだ!!!」
アンナ（?）「私は一人だけか・・・確かにそうね?普通の人間ならそう答えれば終わりよ・・・でも私達は普通の人間かしら?」
もう一人のアンナはアンナが必死になる姿に笑ってそう問う。意味ありげなそのセリフに困惑するアンナ。その間に間合いを詰めてくるもう一人のアンナ・・・自分の正体を彼女は知っているのか?考えてみれば私は記憶がないため普通の人間であるという保証はないじゃいか・・・私は誰なんだ?その疑問がアンナの頭の中で思考

回路を支配する。そして突如視界が暗くなっていく。
アンナ「っ！？・・・・ゆ、夢？」
全ては夢であった。いつもの自分の部屋でゆりの家だ。全身汗まみれになりながらも夢で見たもう1人の自分とも言うべき存在の言った事を思い出すと急に不安が込み上げてきて恐怖で身体は震えてきた。
アンナ「私は・・・いったい誰なの！？・・・時々出てくるイメージは！？・・・お、お前は誰なんだ！？」
最近は同じような夢を何度も見てしまう。もう一人の自分と言っていたあの人物は一体何者なのか・・・そしてアンナの秘密とは一体何なのだろうか？
？？？「思い出せ・・・もう一人の私よ・・・月を取り込み私が私になるんだ！！！」
アンナ「！？・・・誰なんだの声の主は・・・私は・・・本当に人間なの？・・・」
アンナは月明かりが照らされる窓から欠けた月を見てそう呟いてしまう。本当に自分は人間なのか？人間であると信じたいけどそれを証明してくれる人も・・・記憶もない。今は仲間がいるから安心できるけどその仲間も私が人間でないと知ったら・・・・彼女の不安に漬け込む影があるとはこの段階では予想が出来なかった。

クレイズ「遂に動くわよ・・・月の影計画が！！」
クレイズはサロメ基地の自室で狂ったようにそう声を上げていた。とうとうこの時来たと今まで準備を整えてきた。特にゴルザとガルラの戦いで得た戦闘データはかなり役立っていた。もうすぐ最強の兵器が完成しそれの量産体制も間近である。
クレイズ「ありがとうヘロディア。心から感謝するわ」
ヘロディア「当然よ。サロメの科学が全宇宙を制圧するチャンスとなったら喜んで協力するわ。」
クレイズは同僚のドクターヘロディアに礼を言うとヘロディアもそ

れに笑って返す。お互いに持ちつ持たれつがサロメの信条とも呼べるものであるらしく他の星人達のように同族で争う様な馬鹿な真似はしないようである。
クレイズ「ふふっ♪後は月の影を目覚めさせるだけ・・・全てのプランは完璧に動いているわぁ！！！」
クレイズは興奮のあまり普段なら誰にも見せない笑みでそう叫ぶ。
ヘロディア「実験するにはまだまだ不安定よ？・・・どうする気クレイズ？」
クレイズ「どうするも何も・・・《人形》にしてしまえばいいだけの話よ・・・貴女と私のサロメ星科学でね」
ヘロディアの問いのそう答えるクレイズ。モニターには黒い首輪のようなものが映っている・・・あの首輪らしき物が映し出された。
ヘロディア「そ、それはダークネススパイラル・・・そんなものまで完成させていたのね？」
クレイズ「ええ。これさえあれば例え心は拒んでたしても私の命令に従うしかなくなる・・・我々の≪人形≫になるしかなくなる。」
ヘロディア「ふふふっ・・・面白いじゃない！！！これを大量生産すれば私達が宇宙の頂点に立つのも可能になる・・・」
クレイズ「その通りよ・・・ふふふ・・・ははははは！！！！！」

大人「よし。これで衣装の記事はそろったね」
つぼみ「はい。あとはリボン用の生地とデザインビーズですね」
えりか「よし、じゃ～次に行こう！！」
いつき「ちょ、えりか待ってよぉ！！！」
大人「やれやれ、えりかは買い物時はいつもあの調子なのかな？」
つぼみ「はい。いつもそうです。ありがとうございます大人さん。わざわざ私たちの買い物に付き合わせちゃって」
大人「いいよ暇だからね。でもこれはまた大量に買い込んだね～」
えりか「いやぁ～溢れ出る創作意欲が止まらなくて♪」

大人「そ、そうなんだ～（これだけの材料を買う金が何処から出てくるのかは疑問の思わないほうがいいのだろうか？）」
つぼみ「にしても買いすぎですよぉ～えりか！！」
とある裁縫道具店では大人、つぼみ、えりか、いつきの４人がファッション部の買い物をしていた。最初はえりかとつぼみ、いつきだけだったのだが偶然にも大人とばったり会って大人も買い物に付き合う事になったのだった。町の商店街で布生地を買い次はリボン用の生地を買いに出る。そしてしばらくして買い物を済ませて買った物を一度植物園にまで運ぶ。
つぼみ「ふぅ～これで全部ですね」
大人「お疲れ様。しかしこんなに大量に買い込んでどうするんだい？」
しかしこれだけの量の材料を買い込む事に疑問を抱いてしまう大人。何せ４人でもかなりの重労働であったからである。
えりか「もちろん新しいデザインの服を作りますけど今年の文化祭用の材料でもあります」
大人「なるほどね。」
つぼみ「普段はデザインを描くのが主なんですけど一カ月に一度はデザインした服を作ってるんですよ。」
大人「ほうほう」
いつき「おしゃれは人を元気にしますからね。僕もそうでした」
大人「奥が深いんだね～。よしじゃ今度俺の服もデザインしてもらおうかな？」
つぼみ「もちろんです！！！必ず」
大人「待ってるよ♪」

アンナ「私は・・・一体誰なんだろう・・・記憶があれば・・・失った記憶がはっきりするのかな？」
アンナは久々に散歩に出かけていた。最近よく見るあの夢は一体何なのだろうか？・・・もう一人の自分が言う自分の正体は・・・本

当に自分は人間なのだろうか?そんな疑問が頭によぎってしまって最近は気にせずにはいられなかった・・・・この町には何か大切なものがある気がする。そんな気がしてならないのだがそれが何なのかわからない・・・・・

???「何を悩んでいるのかしら?」

アンナ「!?」

突如後ろから声がすると思って視線をやるとそこには女性の姿があった。見かけは眼鏡にスーツを言った何処にでもいるようなOLみたいであったが見るからにあやしい。

アンナ「別にそんなことないです。貴女には関係ないでしょ?」

???「そうかしら?・・・私なら貴女の力になれると思うけど?」

アンナ「生憎ですが私は自分の力で探し物を見つける主義でしてね・・・だから貴女の力は・・・」

見るからにあやしい相手の口車に乗る前にさっさと立ち去ろうと思ったのだが女は彼女に向かって黒いリング状のアイテムを投げつける。それはアンナの手首をがっちりと捕らえる。

アンナ「!?・・・こ、これは?・・・あ、貴女一体何者?」

???「教えてあげましょうキュアナイト・・・・月の影よ・・・私の名はクレイズ。サロメ星の科学者よ。さぁ私の人形となるがいい」

その正体はクレイズであった。クレイズはリモコンのような機械を取り出すとスイッチを押して黒いリング状のアイテムを起動させる。

アンナ「う、うわぁあああ!!!!???」

アンナの身体に黒い稲妻のようなものが走る。そして次第にアンナの瞳が赤く光るようになりアンナの自我が失われるかのように頭(こうべ)を垂らす・・・・

アンナ「・・・・・・」

クレイズ「ふふふっ・・・手に入れたわよ・・・月の影を」

クレイズは闇の扉を出現させるとその中にアンナと共にその場から消えてしまう。アンナにいったい何が起きたと言うのだろうか!?

ゆり「今日はアンナの好きなかぼちゃの煮つけにでもしようかな」
その頃ゆりは今日の夕食の材料を買いに出ていた。今日はアンナの好物かぼちゃの煮つけでもつくろうかとかぼちゃと適当な肉や野菜を買い終えると家に帰宅しようと思ったのだが・・・・・
グランドランザー「・・・・・」
突然建物が爆発したかと思えば以前現れたグランドランザーが現れたのだ。
ゆり「アレは前に出てきたロボット兵器!?私一人じゃ倒すのは無理かもしれないけどやるしかないわね」
ゆりはグランドランザーに注意をひきつけるべくココロポットを取り出すと変身の準備をする。
ゆり「プリキュアオープンマイハート!!!」
ゆりは私服から光のワンピースの姿になるとココロポットにこころの種を装填していき藍色の光に包まれるとそのまま髪の色と服が変化していきキュアムーンライトへと変身が完了する。
ムーンライト「月光に冴える一輪の花キュアムーンライト!!!」
グランドランザー「ギガガガガガ」
グランドランザーは無差別に光線を放っていき町を破壊していくのだったが突如銀色の鏡のようなものが自身の光弾を跳ね返してきた。何事だと後ろを振り返る。そこにはマントを纏ったムーンライトの姿があった。
ムーンライト「また出てきたようね?これ以上は好きにはさせないわ!!!」
ムーンライトは高速移動でグランドランザーを翻弄しながら自分に気を引きつける。グランドランザーは邪魔者を消そうと光線を放ったり腕を伸ばしてりするがスピードで勝るムーンライトには効果がない。
ムーンライト「花よ輝けプリキュア・シルバーフォルテウェイブ!!!」

ムーンライトはもしかしたら自分一人でも倒せるかもしれないと思い必殺技のフォルテウェイブを放つ。しかしパワーではグランドランザーが勝るのかフォルテウェイブを受け止めて握りつぶしてしまう。

ムーンライト「やっぱり私一人では力不足・・・一体どうすれば」

グランドランザー「ゴォオオン!!!!!」

ムーンライト「!?・・・しまっ」

ムーンライトが考え込んでいる隙にグランドランザーがレーザー光線を発射する。今よければ他に被害が及ぶがムーンライトリフレクションで跳ね返せるかどうかは五分五分・・・迷っている間にもレーザーは迫ってくる・・・・

???「サンフラワーイージス!!!!」

太陽の形をした盾がムーンライトと町をレーザーから守った。この技が出来るのは一人だけでありムーンライトが後ろを向くとそこにはブロッサム、マリン、サンシャインであった。

ムーンライト「皆!!」

ブロッサム「お待たせしました。」

マリン「よくもさんざん暴れてくれたじゃない?このツケは高いわよ」

サンシャイン「これ以上町を破壊させはしない!!!!」

3人はグランドランザーに覚悟しろとばかりに睨みつける。グランドランザーは好都合だと思ったのか4人に向けて無差別光弾を放つ。

ブロッサム「ブロッサム・シャワー!!!!」

マリン「マリン・シュート!!!!」

だが自分達に直撃する前にブロッサムとマリンの遠距離技で光弾を全て相殺させる。

グランドランザー「!!??」

以前と比べると確実にパワーアップをしている彼女達の力を分析するのだがグランドランザーのコンピューターでは処理が出来ない。

何故なんだ?と混乱するグランドランザー・・・機械的な処理は

時として思いがけぬ力に対しては脆いものなのか？
ムーンライト「今のうちに一気に決めましょう！！」
ブロッサム・マリン・サンシャイン『はい！！』
シプレ「久々にあの姿を出すですっ！！！」
コフレ「プリキュアの最強の力を見せる時ですぅ！！！」
ポプリ「パワーアップの種でしゅぅ！！！」
シプレ達が言うプリキュアの最強の力とはかつて砂漠の使徒との戦いで使った伝説のアイテム≪ハートキャッチミラージュ≫から解放される無限の力の事だ。４人はハートキャッチミラージュを取り出す。ブロッサム・マリン・サンシャイン・ムーンライト『鏡よ鏡プリキュアに力を！！！』
ハートキャッチミラージュのピンク、青、黄色、藍色のボタンを押すと４人は祈りをささげる。そして光が４人を包むと４人の個々のコスチュームの色が淡くなり金色をメインとしたティアラやピアスが装備され更にスカートがとがると変身が完了する。その名も・・・ブロッサム・マリン・サンシャイン・ムーンライト『世界に輝く一面の花！ハートキャッチプリキュア・スーパーシルエット！』
４人はそれぞれの専用武器を取り出すとグランドランザーに向かって構えを見せる。
ブロッサム・マリン・サンシャインムーンライト『花よ咲き誇れ！！！プリキュア・ハートキャッチオーケストラ！！！！』
４人は武器で音楽を奏でるかのようにブロッサム、マリン、ムーンライトはタクトを振るいサンシャインはタンバリンをたたく動作をしながら必殺技の名を叫ぶと集約したエネルギーから巨大な女神が降臨する。
ムーンライト「ふんっ！！！」
最初にムーンライトが手をかざすとグランドランザーの目の前に女神が瞬間移動する。
サンシャイン「はぁあ！！！」
次にサンシャインが手をかざすと女神の腕が上に少し上がる。

マリン「たぁああ！！！」
続いてマリンが手をかざして女神の拳にエネルギーを溜めさせていく。
ブロッサム「たぁあああああーーーーーっ！！！！！！」
最後にブロッサムが手をかざし女神の巨大な拳をグランドランザーに振り下ろさせる。
ブロッサム・マリン・サンシャインムーンライト「はぁあああああああああ！！！！！！」
女神の手の中に収められたグランドランザーにブロッサム、マリン、フラワータクトのクリスタルドームを回転させてエネルギーを送り込んでいきサンシャインとムーンライトはタンバリンとフラワータクトそのものを回してエネルギーを送り込んでいく。
グランドランザーは次第に抵抗をなくしていき動かなくなる。自分は殺戮兵器であるはずなのに自分の中の何かが消えていく・・・・グランドランザーは動かなくなるとコンピューターがシャットダウンするかのように目の光が消える。
ブロッサム「凄い・・・機械には心がないはずなのに」
マリン「これがプリキュアの力なんだね・・・やっぱり凄い！！！」
サンシャイン「うん！！」
ムーンライト「・・・・・」
ムーンライトは一人納得がいかない顔だった。何かがおかしい・・・自分達を本気で倒すつもりならこの程度で済ませるのはおかしい・・・一体目的は何なのだろう？
？？？「素晴らしい、素晴らしい力じゃないプリキュア達よ」
ブロッサム・マリン・サンシャインムーンライト『！！？？』
突然拍手の乾いた音が響く。辺りを見回すと青いスーツのような服装のクレイズが現れてた。そこにはもう一人の影があったがブロッサム達は信じられなかった。
ブロッサム「あ、貴女は」

マリン「嘘・・・でしょ？」

いつき「そ、そんな・・・あ、貴女は3年前にゆりさんに・・・ムーンライトに倒されたはず」

全員固唾を呑むような視線でもう一人の人物を見つめる。だがあり得ない事だ。なぜならばその相手は・・・・

？？？「久しぶりだな・・・・月影ゆり・・・キュアムーンライト！！！！」

漆黒の衣装に片方しかない悪魔の翼、そして特徴的なおかっぱ頭と片目が金色のオッドアイ・・・・その人物の正体は3年前にムーンライトが倒したはずのダークプリキュアだ。

第１６話月の影計画編「動きだす陰謀」（後書き）

いきなり怒涛の展開です。これからさらに物語は荒れるでしょう。

次回もお楽しみに

第17話月の影計画編？「究極兵器」（前書き）

前回までのあらすじ～
サロメ星の科学者のドクタークレイズはアンナを謎の黒い腕輪を使用して拉致する。同じころ町に現れたグランドランザー・・・ゆりはムーンライトとなりグランドランザーと闘う。戦いの最中にブロッサム達が合流しスーパーシルエットのハートキャッチオーケストラでグランドランザーを撃退する。だがその直後に現れるドクタークレイズとダークプリキュアの影が・・・・４人はダークプリキュアの姿に絶句してしまう・・・・。

第17話月の影計画編？「究極兵器」

ムーンライト「そ、そんな・・・まさか」
ムーンライトは言葉を失った。目の前にいるのは幻影でも何でもない間違いなくダークプリキュアだ。3年前にこの手で倒したはずの自分の身体の一部で亡き父によって自分を倒す為に造られた人形（いもうと）。あの時彼女は父に認められて何の未練もなく消滅したはずなのに・・・・どうして今になって？
クレイズ「何も言葉がないようね？まあ無理もないわ・・・・だってこの娘（こ）は正真正銘ムーンライトの父親であったサバークによって作られたダークプリキュアなのだからね」
全員がその言葉を聞いて固まる。そんなバカなこと信じろと言うほうが無理な話である。特にブロッサムとムーンライトは彼女の最期をこの目で見た為により一層不信感は強かった。
ダークプリキュア「・・・そんなに信じ難いか？私がこの世に・・・地獄から舞い戻った事が」
ムーンライト「本当に貴女は・・・ダーク・・プリキュアなの？」
ダークプリキュア「愚問だな。太陽に向かって『貴方は太陽ですか？』と質問するか？」
ブロッサム「どうして貴女が・・・貴女はあの時確かに消滅したはずじゃ」
ムーンライトとブロッサムは動揺した口調で離しながらもいまだに信じられないと呆然としてしまう。クレイズはその姿に鼻で笑う。
クレイズ「教えてあげましょうか？私が故郷・・・サロメ星の科学で蘇ったのよ？・・・元のデータは3年前にデューンが破壊した惑星城から採取してね・・・さあダークプリキュア今こそ光を取り込んで貴女がムーンライトとなりなさい！！！」
ダークプリキュア「承知！！！」
ブロッサム・マリン・サンシャイン・ムーンライト「！！！！？？

？」

ダークプリキュアは瞬間移動でクレイズの元から姿がなくなると４人の前に姿を見せそのまま黒い光線を４人に浴びせる。なんとか大ダメージには至らなかったそれでもかすり傷は避けられなかった。

ブロッサム「ま、前よりも倍・・・いいえそれ以上強くなってます・・・今の私達で勝てるかどうか」

マリン「・・・やるしかないよ。アタシ達が倒すしかないんだから」

サンシャイン「うん。それが彼女の為でもあるのなら」

ムーンライト「・・・・・・」

パワーもスピードも3年前の最終決戦の時と比べると何倍も強化されている。今の自分達で倒せるか分からないがそれでも自分達は逃げるわけにはいかない。ムーンライト以外の面々はタクトを構える。だがムーンライトはいつもと様子が違いその場に立ちすくんだままであった。

ブロッサム「ムーンライト!?」

ムーンライト「!!・・な、何でもないわ・・・皆、行くわよ!!!」

ブロッサムに呼びかけられるとムーンライトは目が覚めたかのようにタクトを取り出すと先陣を切って突撃するのだがいつもと違ってぎこちない。

ダークプリキュア「今度こそ私が私になる・・・・闇が光を飲み込み全てを奪ってやる!!!」

ムーンライト「ぐぅ!?・・はぁあああ!!!!!!」

ダークプリキュアの狙いはもちろんムーンライトただ一人でありブロッサム、マリン、サンシャインの

攻撃を難なく受け流してムーンライトに牙をむける

ムーンライト「ダークプリキュア・・・・そこまでして私を・・・・」

ムーンライトとダークプリキュアの拳と拳がぶつかり合う。パワーではパワーアップしたダークプリキュアのほうが上なのかムーンライトが押される戦況となってしまう

ブロッサム「はぁあああーーーー！！！！」
マリン「やぁあああーーーーーー！！！！」
サンシャイン「たぁあああーーーー！！！！」
ダークプリキュア「・・・・邪魔だぁあ！！！！」
ブロッサム・マリン・サンシャイン『うわぁあああああ！！！！？？？？』
ムーンライトの助太刀にとブロッサム達が3人のパンチがダークプリキュアに放たれるのだがダークプリキュアはそれを片腕で受け止めると片目から発せられる衝撃派（ソニックブーム）を放って3人を吹っ飛ばす。
ダークプリキュア「・・・こうなれば先ずは貴様らを先にこの手で倒す！！」
このままでは邪魔が入って思う様に戦えないと先ずは邪魔な3人を片づけようとターゲットを変更し先ずは近くに倒れてるブロッサムにタ―ゲットを絞った
ブロッサム「くぅう・・・」
ダークプリキュア「先ずはキュアブロッサム・・・貴様からだ」
マリン「ぶ、ブロッサム！！！」
サンシャイン「に、逃げてぇ！！！」
マリンとサンシャインが必死な叫び声をあげる。此処からではフルスピードで飛んでいっても間に合わない・・・ダークプリキュアの手刀から黒光りする光の剣が召還されるとブロッサムの喉元につきつけられる。
ブロッサム「あぁあ・・・・（皆・・・ごめんなさい）」
ブロッサムにダークプリキュアの刀が振り下ろされた。その瞬間に全員の叫び声が響くのだが・・・・
何かがぶつかり合う音「ガギイィィイン！！！」
何かがダークプリキュアの剣を受け止めるそれと同時に別の何かがブロッサムを捕まえる。ブロッサムは気がつくと誰かに抱きかかえられていた。
？？？「何諦めてるんだ？ブロッサム」

ブロッサム「!?・・・ああぁ!!・・・カブト!!!」
???「そうだぜ皆・・・諦めるなんてお前たちらしくないだろ?」
サンシャイン「ダークカブト!!!」
???「ったくヒヤヒヤさせやがって・・・ほいっと!!!・・・まだまだ俺のカリバーさばきの腕は劣っちゃねーみたいだな。」
マリン「ガタック!!!」
???「アタシ達の事忘れてもらっちゃ困るんだけど?よくもアタシ達の仲間を・・・タップリお礼はさせてもらわないとね?」
ムーンライト「フェアリー!!!」
その正体はカブト達ライダーであった。簡単に今起きた事の成り行きを説明するとブロッサムに剣が振り下ろされる前にガタックのガタックダブルカリバーでダークプリキュアの剣を弾き飛ばした瞬間にクロックアップでカブトがブロッサムを救出したのである。
クレイズ「来たわね・・・惑星ワームの産物・・・マスクドライダー!!!」
カブト「貴様が事の黒幕だな・・・何者だ!?」
クレイズ「私はドクタークレイズ。サロメ星の科学者よ・・・・覚えておきなさい」
ガタック「要するにマッドサイエンティストってか・・・・テメーでは戦わずダークプリキュアを利用する卑怯者じゃねーか」
ガタックはカリバーを構えながらクレイズに吠える。
クレイズ「あら貴方達が使っているライダーシステムも科学の産物じゃない~その力を使って戦ったいる貴方達に私を避難する権利があるかしら?」
カブト「ふざけるな!!!お前のように命を弄(もてあ)ぶような奴を俺は絶対に許さない」
カブトはクナイガンを構えながらクレイズに突進するのだがダークプリキュアがその前に立ちふさがる。
カブト「・・・・ダークプリキュア・・・お前はあの時のままなのか?まだムーンライトを倒す事にこだわっているのか?」

ダークプリキュア「愚問だな仮面ライダーカブト・・・太陽の神」
ダークタクトとクナイガンがぶつかり合いながら火花を散らし一度離れる。
カブト「（おかしい・・・確かにあいつは3年前のダークプリキュアと差異は全くないが・・・どこかが違う・・・）」
何処かがおかしいのだがそれが何かが分からない・・・カブトは記憶を呼び戻しながら必死に何が違うかを考える・・・
クレイズ「ふふ・・・今日の所は挨拶代わりよ・・・行くわよダークプリキュア」
ダークプリキュア「はっ！！！」
クレイズの指示にダークプリキュアは素直に従い闇の扉を潜って姿を消す。

大人「ふぅ～皆大丈夫かい？」
つぼみ「はい。あの・・・何であのタイミングで私を助けてくれたんですか？」
大人「何でって・・・偶々っていうか」
琢磨「嘘つけよ『いやな予感がする』って言って俺らを呼び出して猛ダッシュで植物園にいった癖に～」
大人「そ、それは（汗）」
傑「しかもかなり焦ってたし～」
大人「いや、だからそれは（汗）」
夕「大人は分かりやすいからねぇ～（ニヤニヤ）」
大人「ううぅ～」
実はと言うと大人はいやな予感がするとつぼみ達を探していたのだった。その時にダークプリキュアと闘っている場面を見かけて大急ぎで変身して援護に駆け付けたのだった。琢磨達のその時の事をからかわれると大人は顔を赤くして言葉を失う。
つぼみ「・・・（嬉しかったですよ・・・本当にカッコよかったです）」

えりか「あれ～つぼみ顔赤くない？」
つぼみ「そ、そんなことないですって！！べ、別に赤くなんか」
いつき「何焦ってるんだい？もしかして・・・・」
つぼみ「は、はい！？な、何を考えているんですか？いつき・・・・」
ついでにつぼみもからかわれる事になってしまいえりかといつきにタップリと弄られてしまう。
ゆり「・・・・（どうしてダークプリキュアが・・・今でも私を狙っているの？・・・私の妹・・・）」
ゆりは一人悲しげな顔をしながら空を眺めていた。あの時はただ自分の影と思っていた彼女は自分の妹で同じ血が流れている・・・・その事実を知った時はすでに手遅れで彼女とは分かり合えずに消滅してしまった・・・何度か彼女がよみがえればと思った事もあったのだがまさか本当に現実になるとは思ってもいなかった。もしかしたらこれはチャンスなのかもしれない・・・もう一度彼女と正面からぶつかりもう一度彼女と話が出来る・・・・
夕「ゆり・・・大丈夫？」
ゆり「え？・・・ええ大丈夫よ」
夕に呼びかけられて物思いに更けていた態度から目を覚めさせられるゆり。とにかく今日は帰ろうそう思ったその時人影が見えた。
アンナ「み、皆さん・・・・」
大人「あ、アンナちゃん！！！！」
えりか「大丈夫！！？」
アンナ「うぅ・・・・あぁあ・・」
ゆり「アンナ！！！しっかりしなさい・・・・アンナぁ！！！」
なんとその正体はボロボロになっているアンナだった。全員が駆け寄る前にアンナは力尽きて倒れてしまう。ゆりは彼女を抱き抱えて普段は見せないような顔でアンナにを呼び掛ける。
クレイズ「ふふ。ものすごいパワーね月の影はヘロディア例の究極

兵器はどう?」
ヘロディア「順調よ・・・もう少しで完成するわUキラーのデータをもとに造った究極の兵器がね・・・これが完成すれば光の巨人など恐れるに足らず・・・・」
クレイズ「平和を守るウルトラマンティガが地球を・・・・宇宙をも制圧する」
ヘロディア「最高のシナリオじゃない」
クレイズ「ふふふ・・・はははははははは!!!!!」
工場で生産されている巨人はUキラーでもAキラーでもDキラーでもない。ウルトラマンティガそのものだった。プロテクターが付いている事以外は完全に本物と差異がない。
ヘロディア「そう言えば例の彼女には逃げられたそうじゃない?やっぱりまだダークネスリングは不完全なのかしら?」
クレイズ「いいえ。あえて逃げしたのよ・・・そうすれば彼女も自覚するでしょうしね自分の正体に・・・・」

アンナ「うう・・・こ、此処は!?」
つぼみ「気がついたんですね!!!」
アンナ「つぼみさん?・・・み、皆さん?私は一体・・・・」
気がつくとそこは見慣れない部屋であった。起き上るとつぼみやえりか、大人やゆり、傑に琢磨、いつきに夕といった面々が心配そうにアンナを見つめていた。
大人「覚えてないのかい!?」
アンナ「分かりません・・・・・!!そう言えば変な奴にこの腕輪のようなものを・・・な、ない!?・・・確かに付けられたはずなのに・・・・」
アンナは黒い腕輪のようなものを付けられた左手を見せるのだが腕には黒腕輪は消え去っていた。あの時確かに付けられたはずなのに・・・。そう言えばあの後から記憶は全くない・・・自分は今まで何をしていたのか分からないのだ・・・

ゆり「・・・とにかく無事でよかったわ。ホントに・・・心配したんだから」
アンナ「ゆりさん・・・・ありがとう」
ゆりはアンナを抱き抱えるとそう言って安心した顔でそう言う。一番心配していたのはゆりだから無理もないだろう。
大人「とにかく今日は家に帰って休んだろう方がいい。家まで俺達がついていくよ。」
琢磨「ああ。その変な奴にまた襲われでもしたらシャレになんないからな」
傑「まあ待て。いっそ今日は此処でで休むのがいいかもしれないぞ？アンナの身体のダメージも相当なものだし下手に動くと身体に響く」
つぼみ「そうですね。私、家から何か持ってきます」
大人「じゃあ俺はスーパーか何処かで適当に食事の材料を・・・残りは此処にいてくれ」
琢磨「了解。」
今日の所は植物園で一夜を過ごす事になったアンナとつぼみ達。つぼみと大人は適当に必要なものを持ってくることとなった。しばらくして
大人「よし、これでだけあれば量は足りるだろう」
大人はとりあえずスーパーで適当な肉、野菜などを買って植物園に戻る。そしてしばし時間がたち
大人「よぉ～し出来たよ～」
全員『おぉ～～！！！』
相変わらずというかかなり上達している大人特性の料理で全員は生気を養う。
アンナ「ふぅ～ご馳走様でした」
つぼみ「美味しかったです～」
大人「それは良かった。さてとじゃあ今日は遅いし俺はそろそろおいとまさせてもらうよ」

琢磨「そうだな。明日は俺もバイトで早いし」
傑「俺も今日の所は帰るとするか」
つぼみ「私達も明日学校でした！！（汗）」
えりか「そうだった。でもどうしよう？アンナさんを一人にするわけにはいかないし」
ゆり「心配いらないわ。今日は私が此処に泊るから」
アンナ「そんな悪いですよ・・・私なら一人でも大丈夫ですって！！」
ゆり「・・・お願い・・・今日は一緒にいさせて・・・心配でたまらないのよ」
アンナ「ゆりさん・・・・」
そう言うわけでゆりを残して他のメンバーは帰宅することとなった。
ゆりは一度言い出したら結構頑固である為説得などしても無駄である事は分かったいた為である。

アンナ「ゆりさん・・・今日は・・・その心配かけてごめんなさい」
ゆり「いいのよ。貴女が無事ならそれで」
アンナ「・・・はい。今日も月がきれいですね」
ゆり「そうね。」
ゆりは床に布団を敷いてアンナの近くで横になっていた。今日は月明かりが眩しくて月がきれいに見える。アンナは月を見ながら徐に夢の事を思い出した。
アンナ「ゆりさん・・・私、最近変な夢を見るんです」
ゆり「変な夢？」
アンナ「夢の中で私は暗くて冷たい場所にただ一人彷徨っていて・・・まるで何かを探しているかのようで怖くて・・・それでしばらくすると」
ゆり「・・・それで？」
アンナ「それで・・・もう一人の私が出てくるんです・・・≪思い出せ．≫って語りかけてくるんですよ」

ゆり「思い出せ？」
アンナは今までに見ていた夢の事をゆりに語る。もう一人の自分が出て来て自分に記憶を取り戻せと語りかけてくるあの夢の事を・・・
アンナ「はい。・・・まるで失った記憶を早く取り戻せって言っているかのように・・・そこで突然暗くなって目が覚めるんです」
ゆり「・・・そう」
アンナ「私怖いんです・・・記憶を取り戻すのが・・・記憶を取り戻したら今の私が私じゃなくなる気がして・・・」
ゆり「・・・大丈夫よ。例え記憶を取り戻しても貴女は貴女。他の誰でもないわ・・・絶対に」
アンナ「ゆりさん！！・・・ありがとう」
ゆりはアンナの不安を取り除く様に優しくそう語りかける。アンナの不安は分かる気がするからだ。もしかしたらダークプリキュアも同じ理由で自分を付け狙っていたのかもしれない。今のアンナも彼女と同じなのだ。
アンナ「・・・お休みなさい。ゆりさん」
ゆり「お休み。」
アンナはゆりの言葉を聞くと安心したのかしばらくすると眠りに落ちた。その寝顔は無垢な子供のようだった。

翌日久々に出かける事にしたゆりとアンナは適当に町をぶらついていたのだった。
アンナ「最近は怪獣災害のせいで街の人々もピリピリしてますね」
ゆり「ええ。３年前は砂漠の使徒の侵略を思い出すかのようね」
アンナ「砂漠の使徒・・・・」
ゆり「どうしたの？」
アンナ「いえ・・・聞いたことあるかもしれないと思って」
砂漠の使徒・・・聞き覚えのある名前だけど思い出せない・・・・
やっぱり記憶違いかもしれないとアンナは納得した顔をする。
適当にぶらついていた２人だったが突如地震のような地響きがする。

ゆり「な、何!?」
アンナ「ゆ、ゆりさん!!アレを・・・・」
ゆり「あ、アレは・・・ティガ!?」
その発生源はウルトラマンティガであった。だが怪獣も出ていないのにどうしてティガが・・・2人がそう思った瞬間にティガはハンドスラッシュをビルに向かって放っていく。
ゆり「どうしたのティガ!?・・・・どうして貴方が街の破壊を?」
アンナ「あ、アレはティガなんかじゃない・・・・真っ赤な偽物です!!!」
ゆり「え?」
アンナの言うと通りだった。その正体はサロメの科学によって作れたロボット兵器ニセウルトラマンティガであったのだ。見た目で違うと言えば身体の関節部分や腰などについているプロテクターぐらいであるから遠くから見たら本物と間違えても無理はないだろう。
アンナ「このままじゃ街が・・・ゆりさん私達だけでも戦いましょう!!!」
ゆり「ええ。」
ゆりとアンナはココロポットとイリュージョンを取り出してニセティガに向かって走っていく。これがクレイズの作戦の一部であると知らずに・・・・・

第17話月の影計画編？「究極兵器」（後書き）

最近は寒暖差が激しいですが皆さんは風とか引いてませんか？
もうすぐ春ですが体調管理には十分注意しましょう（汗）

さて次回はダークネスリングの本質について語ろうと思います。
次回もお楽しみに♪

第１８話月の影計画編？「影の覚醒」（前書き）

前回までのあらすじ～
サロメの科学によって蘇ったダークプリキュア、更に同時に現れたニセウルトラマンティガ。クレイズの月の影計画に拍車がかかる。

第１８話月の影計画編？「影の覚醒」

クレイズ「ふふふっこれが最強にして究極兵器。はたして勝てるかしらね？・・・ダーク」
モニター越しに様子を見ていたクレイズはニヤリと笑みを浮かべる。これから行われる実践テストでダークプリキュアの完全覚醒そして願わくばキュアムーンライトを葬り去る事が出来れば一石二鳥。どのようになってもこちらに不利益な事はない。こんなに面白い事はないのだ
ゆり「プリキュア・オープンマイハート！！」
アンナ「プリキュア・ナイトイリュージョン！！！」
ゆりとアンナはそれぞれのプリキュアの種を取り出し私服から光の衣装に変わるとそのまま藍色と黒の光に包まれてプリキュアの衣装にと変化するとプリキュアの姿となり名乗り上げる。
ムーンライト「月光に冴える一輪の花キュアムーンライト！！！」
ナイト「漆黒の闇から生まれた戦いの戦士キュアナイト！！！」
二人はマントを身に纏い飛び上がる。
ニセティガ「・・・・」
サロメ星人が開発したウルトラマンティガをベースにしたロボット兵器「ニセウルトラマンティガ」とも呼べるべきそれはムーンライトとナイトの存在に気づくなりジロリと睨みつける。前回現れたＵキラーなどとは違い完全にウルトラマンティガがベースとなった兵器であるため恐らく強力である事は間違いない。
ムーンライト「（ティガのニセモノなんて一体誰が・・・・前の３体のＵキラーでさえアレほど苦戦したのに・・・）」
ナイト「・・・・・」
以前に現れた３体のロボット兵器「Ｕ（ウルトラ）キラートリニティ」、「Ａ（アース）キラートリニティ」「Ｄ（デュナミス）キラートリニティ」とは違い完全にティガのコピー体。恐らく以前よりも改良などが加えられていると考えるの

が自然であるのなら以前よりも当然だが強力であるのは間違いない。
ニセティガM（マルチタイプ）「・・・デヤァ！！」
ニセティガM（マルチタイプ）はゆっくりと近づきながら二人の出方を伺う・・・と言うよりはかなり隙だらけで余裕の仕草にも見え挑発しているかのようだ。ただそれだけで二人を威圧するかのようである。
ナイト「ニセモノのくせにバカにして・・・イリュージョンソード！！！」
ムーンライト「ナイト！！！」
その挑発に耐えきれなかったナイトはイリュージョンロッドからイリュージョンソードを発動させて光速でニセティガM（マルチタイプ）に突撃していきニセティガM（マルチタイプ）のプロテクターに刃を立てるが・・・
ニセティガM（マルチタイプ）「・・・・・」
ナイト「そ、そんな・・・U（ウルトラ）キラーの頭部を切り裂いたこの剣が・・・効かない！？」
火花は散ったがプロテクターは全く傷一つ付いておらず無傷。ナイト自身は全力で斬りつけたはずなのに・・・信じられないと呆然の表情で固まるナイト。その彼女に向かってニセティガM（マルチタイプ）の巨大な手が迫りナイトを掴む
ナイト「！！・・し、しまった・・・がぁああ！！？」
ニセティガM（マルチタイプ）「・・・・・」
そしてそのまま街に向かって投げ飛ばす。なんとか街に直撃する前にムーンライトがナイトの身体を受け止める。
ムーンライト「大丈夫！？」
ナイト「は、はい・・・何とか・・・」
ムーンライト「よくも・・・よくもナイトを！！！」
ムーンライトは怒りにまかせて飛びあげると銀色の光線を乱れ打ちしながらニセティガM（マルチタイプ）に向かう。
ニセティガM（マルチタイプ）「ハッ！！！」
ニセティガM（マルチタイプ）はウルトラシールドを発してムーンライトの光線を全て防御する。爆炎が辺りを散らすなか辺りを見回すがムーンライト

の姿が見受けられない。
ムーンライト「ムーンライト・シュート！！！」
声のするほうを見てみるそこには既にフォルテウェイブ並みの大きさにまでエネルギーが集約されたエネルギー光弾を放つ。
ニセティガM（マルチタイプ）「！！？・・・グゥウウ」
ニセティガM（マルチタイプ）はすぐにウルトラシールドを張って防御態勢に入るが大きさが尋常ではなくバリア越しにその光線を受け流すのが精一杯であった。
ムーンライト「今よナイト！！！」
ナイト「はい！！！」
今のうちにナイトは必殺技の準備態勢に入る。イリュージョンロッドに黒い光のエネルギーを集約しフルパワーでニセティガM（マルチタイプ）に向かって放つ。
ナイト「邪悪の心を浄化する黒き波動を受けてみよ！！プリキュア・ナイトイリュージョンウェーブ！！！」
ニセティガM（マルチタイプ）「・・・・ハアア！！！」
今度は防御せずにニセティガM（マルチタイプ）は「ニセゼペリオン光線」を放ちナイトのナイトイリュージョンウェーブと互角に打ち合う。だがニセティガM（マルチタイプ）「ダァアアアア！！！！！」
ムーンライト・ナイト『うわぁあああああああ！！！！！！？？？？？？』
出力を最大レベルまで上げたニセゼペリオン光線の前には流石に敵わなかったのか爆発とともにムーンライトとナイトは飛ばされてしまう。
ムーンライト「う、ううぅ・・・ナイト大丈夫？」
ナイト「はい。」
二人ともなんとか無事だったがかなりの痛手で早々には動けない。
その間にニセティガM（マルチタイプ）は二人の物に近づき至近距離でゼペリオン光線の発射態勢に入る。この距離であんなモノを受けたら二人の命はない・・・

ニセティガM（マルチタイプ）「・・・・グォ!?」
ムーンライト「あの光線はハンドスラッシュ!?」
ナイト「アレは・・・・3色の光」
絶体絶命のその時にハンドスラッシュがニセティガM（マルチタイプ）に放たれる。
そして次の瞬間地響きとともに本物のティガが現れる。続いてアース、更にデュナミスが現れる。
ティガ「ハッ!!!（貴様はまさか・・・・）」
アース「デヤァ!!（またロボットか・・・いい加減に凝りねーな」
デュナミス「シャ!!（油断するな）」
クレイズ「現れたわね本物さんとそのお仲間達♪。行きなさい!!
タイプPタイプS!!・・・さて私も行きますか」
3体1と部が悪い状況となるのを見たクレイズは本部から2体のロボを転送させた。そして自身も転送装置に乗り込むと指令室から消える。そろそろダークプリキュアの覚醒の仕上げを行う為に。
ティガ「ハッ!?（な、何だあの光は!?・・・・あのシルエットは・・・・）」
アース「（もう一人の・・・）」
デュナミス「（巨人!?）」
ティガ「（いや・・一人じゃない・・・二人だ!!）」
ムーンライト「あ、アレはティガ!!」
光がおさまると現れたのはパワータイプ（パワータイプ）をコピーしたニセティガとニセティガS（スカイタイプ）だった。そしてその後ろには宇宙船に乗りこんでいるクレイズの姿もあった。
クレイズ「どうかしら?私が造った究極兵器は?」
ティガ「（なんて出鱈目な・・・・）」
アース「（だがタイプごとに造ったってことはティガのタイプチェンジはコピー出来ないと言うことか?）」
デュナミス「（恐らくな。だがその分厄介だ。こうなったら俺はスカイタイプをやる。アースはパワーをティガはマルチを頼む!!）」
ティガ「（分かった。）」

アース「（了解だ。いくぞロボット野郎！！！）
デュナミスの作戦にてそれぞれ散り散りになる。だがそれもクレイズの予想通りである。
クレイズ「キュアムーンライト、キュアナイト・・・アンタ達の相手は私がしてあげる。プリキュアのデータをたっぷりと採取させなさい（本当の目的は別にあるけどね・・・私の狙いはただ一人・・・キュアナイト！！！」
円盤から飛び降りてムーンライトとナイトの前に姿を現すとバトルスーツのような装甲を身に纏う。どうやらクレイズ自らが戦うようである。
ナイト「そう易々とデータ採取なんてさせるわけがないじゃない。ムーンライト行きますよ！！」
ムーンライト「ええ。（おかしい・・・何かおかしい・・・まさかワナ？）」
クレイズの企みに感づいたのかムーンライトは警戒を強める。自分が戦えるのならロボットに頼る必要などまったくもってないはず・・・ニセティガ達に注意をひきつける為か？いや・・・それ以外に何かある気がするが見当がつかない。
クレイズ「さぁ～て行くわよ？でりゃぁあ！！！！」
ナイト「イリュージョンソード！！！」
ムーンライト「はぁあああああーーーっ！！！！」
クレイズは左手からビームソードを発生させて二人に向かって振り下ろす。ナイトのイリュージョンソードとぶつかり火花が散りその隙にムーンライトがパンチを放つがそれを右手に発生させた盾で受け止める。
クレイズ「凄い・・・ホントに凄いわねプリキュアの力・・・これを兵器に応用できればサロメは最強になれる」
ムーンライト「どうして軍事兵器に応用することしか考えられないのよ！！！科学はそんな事に使う為に有るんじゃない！！！」
ナイト「そうです。貴女達の力はもっと友好に使えるはずです・・・

どうして人間達と・・・この星の人々と肩を並べようとしないんですか!?」

二人はクレイズにそう訴えかける。サロメ星の科学力は人類など比ではない事は紛れもない事実であり純粋な目で見れば素晴らしいものであろう。だが科学は他者を傷つける為に、他者を悲しい思いにさせるものなどではない。もしも自分達と肩を並べる事が出来れば人類にとっても有益であるはずなのに・・何故こんな無益な争いを!?二人には理解が出来ないのだった

クレイズ「・・・どうしてか教えてあげましょうか?・・・・はぁあああ!!!!」

ナイト「ぐぅ!!?」

ムーンライト「うわぁあ!!!!??」

クレイズ「我々サロメのはね科学で全宇宙の頂点に立つ事がサロメの同一の目標なのよ。それなのにこの星の人間は何?詰らない事で争い、同族を殺し、憎み、妬む・・・そんな下等なことしか出来ない人間と肩を並べるなんてあり得ないわ!!!。私達は地球を長年観察してきたけど・・・同族同士で下らない事で戦争を続きてる種族なんて今まで見た事なかったわ」

クレイズは二人をまるで汚れた汚物でも見るような嫌悪感をむき出しにしながらそう言う。やはり地球人とサロメでは価値観が違うのかもしれない。サロメはただ純粋に科学が好きなだけであり人間のように余分な感情が全くないのだろう。だからこそ人を見下し自分達こそ宇宙の頂点に立つことしか考えていないのだ。

ムーンライト「確かに人間は過ちを犯すてしまう・・・でもそれだけじゃないわ・・・人間は過ちを正そうと言う心がある・・・それは無限の力になるのよ」

ナイト「・・・・(私には分からない・・・・どうして?・・・・もしかしたら私は人間じゃないのかな?)」

ムーンライトとは対照的にナイトは複雑な顔をしていた。自分にはムーンライトのように人間の良さや素晴らしさを堂々と言う事が出

来ない・・・どうしてだ？・・・その時ナイトの頭によぎったのは『自分は人間じゃない？』ただそれだけだ。
クレイズ「じゃあそれを証明してみなさいよ？まぁ～出来るものならね？はぁあ！！、あぁああ！！！」
ムーンライト「たぁあああ！！！、やぁあああ！！！」
ナイト「私は・・・記憶がない私は・・・人間の事が分からない・・・」
ムーンライトの拳とクレイズのビームソードがぶつかり合う中ナイトは生まれた迷いから戦う事が出来ないでいた。自分が本当に人間ならば迷う事はないはずなのに・・・その思いが複雑に絡み合いナイト・・・
クレイズ「そろそろ仕上げね・・・キュアナイト」
ナイト「！？・・・きゃぁああああ！！！！・・・う、うぅ・・・な、何をするつもりだ！？」
その様子を見ていたクレイズはそろそろ仕上げだとムーンライトをふっ飛ばしナイトにダッシュで間合いを詰めると衝撃波で吹っ飛ばす。
クレイズ「思い出すがいいわ。貴女の影の記憶をね！！」
取り出したダークネスリングをキュアナイトの両腕に装着される。前回は片腕だけだったが今回は二つのダークネスリングを使うことで完全に操り人形にするつもりなのだ。
ナイト「こ、これはあの時の黒い腕輪・・・がぁあああああああ！！！！！！？？？？？・・・な、何をするつもりだ！？・・・あぁあああああぁああーーーーっ！！！！！！！」
ムーンライト「ナイト！！！」
ナイト「い、イリュージョンロッドのクリスタルがこの腕輪と共鳴してる！？・・・あぁあああああああぁああ！！！！！！！む、ムーンライト・・・・に、逃げ・・て・・わ、私は・・・・・・ぐぁあああぁあああああ！！！！」
黒い稲妻がナイトの身体を浸食してナイトの意識を遠のかせる。そ

して突然背中から漆黒の背中が生えていきイリュージョンロッドが汚れた漆黒の光を放ちアンナの身体を包んでいく

ブロッサム「ムーンライト!!・・・・こ、これは!?」
マリン「な、何あれ!?」
サンシャイン「ま、まるでブラックホールみたい・・・」
フェアリー「ものすごいエネルギー・・・アレは一体・・・ムーンライト?」
遅れて現れたのはブロッサム、マリン、サンシャインの3人のプリキュアとフェアリーだった。その場に呆然となっているムーンライトに4人は問いただすのだがムーンライトは固まっていて反応がない。
ブロッサム「ムーンライト!!しっかりしてください」
ムーンライト「アレは・・・ナイトよ」
マリン「え!?」
サンシャイン「そ、そんなバカな事」
ムーンライト「本当なのよ・・・・クレイズが突然ナイトに腕輪をはめたと思ったらああなって・・・」
フェアリー「どういう事!?」
5人は何が何だか分からない。その様子を笑いながらクレイズが前に出る。
クレイズ「ふふふ・・・・貴女達に懐かしい顔がご対面よ・・・」
ムーンライト「懐かしい顔!?」
クレイズ「出でよ月の影・・・・ダークプリキュア!!!!」
ブロッサム・マリン・サンシャイン・ムーンライト・フェアリー『!!??』
次の瞬間包まれていた黒い光が止む。そこから現れたのは漆黒の翼と漆黒コスチュームを身に纏った月影の名を持つ戦士でかつてのムーンライトの宿敵ダークプリキュアが現れた。
ムーンライト「そ、そんな・・・ナイトが・・・アンナがダークプ

リキュアだというの？」
ムーンライトはその場に膝をついてしまい変身が解けてゆりの姿に戻る。他の面々も動揺が隠せない。あのアンナがダークプリキュアだって・・・そんなこと誰が信じられると言うのだ？・・・特にゆりはショックが大きく放心状態になり何も言う事が出来ない。
ゆり「うそよね・・・アンナ・・・・嘘だって言ってよ」
ダークプリキュア（？）「・・・・・・」
クレイズ「残念ねぇ～今目の前にいるのはアンナなんかじゃないわ。正真正銘の貴女の影で妹のダークプリキュア・・・教えてあげましょうか？キュアナイト・・・アンナの正体を」
ゆりは本当に信じられなかった。果たしてクレイズが握るキュアナイト・・・アンナの正体とは・・・・

第１８話月の影計画編？「影の覚醒」（後書き）

更新遅れてすみません。ネタはあるのですが時間がなくて（泣）この時期は本当に忙しいですよバイトが＾＾；

さて次回はとうとう明かされるアンナとキュアナイトの秘密。

次回もお楽しみに♪

第１９話月の影計画編？「アンナの正体と救世の光」（前書き）

前回までのあらすじ～
援軍として現れた2体のニセウルトラマンティガ、バトルスーツを身に纏うクレイズ、そして明かされるアンナの秘密・・・ムーンライトの・・・ゆりの過去の記憶が複雑に絡み合う。果たしてクレイズが知るアンナの正体とは！？

Ｓｐｅｃｉａｌ　Ｔｈａｎｋｓ　桔梗さん
とうとう使う時が来ました。ありがとうございます。

第19話月の影計画編？「アンナの正体と救世の光」

クレイズ「アンナ・・・キュアナイトの正体とはダークプリキュアの残留思念の集合体よ。」
ブロッサム・マリン・サンシャイン・フェアリー・ゆり『！！？？』
クレイズの一言に全員が硬直する。とくにゆりは信じられないと言う表情で瞳孔が開いたままクレイズのほうを見つめていた。
ゆり「ダークプリキュアの残留思念！？・・・じゃあアンナがダークプリキュアに似ていたのンじゃなくてダークプリキュアそのものだったて言うの？」
クレイズ「ええ。だから3年前以前の記憶がないのも当然よ。だって記憶喪失じゃなくて初めから記憶がないんだから。でもキュアナイトの力を心の大樹が与えていたのは誤算だったわ。そのせいですぐにはこの娘の元にたどり着けなかった」
ブロッサム「ナイトの力は心の大樹が与えたものだったんですか！？」
マリン「だからアタシ達の力と似ていたのね」
これですべての謎が繋がった。つまりはアンナはダークプリキュアの転生した姿でキュアナイトの力とは心の大樹が転生した彼女に与えたものだったのだ。
ゆり「そんな・・・じゃあ本当にアンナはダークプリキュアの生まれ変わり・・・そして私の妹・・・・そんな・・・・・」
ゆりはアンナと過ごした日々を思い起こした。初めて会ったときから彼女がダークプリキュアとかつて自分が倒した妹の面影があったのは似ていたのではなくダークプリキュアそのものだったからのだ。
ゆりは言葉を失い涙で頬が濡れる。
フェアリー「ゆり・・・・アンタはそれを分かっててアンナちゃんをダークプリキュアに戻したっていうの！？・・・・ゆりが傷つくと分かっていてこんなふざけた真似をしたと言うの！？」

フェアリーはゆりが人に滅多に見せない姿を見てクレイズを見ながら問う。するとクレイズは嫌味ったらしい笑い声をあげると狂ったような笑みをブロッサム達に見せる
クレイズ「当然でしょ？・・・だってこんなに面白い事ってあるかしら？実の姉妹の命を掛けた殺し合い。姉は妹にもう一度命を狙われ負ければ死、勝てば妹を殺した罪悪感で後の未来をもがき苦しむ・・・それをこの目で拝めるなんて身体がゾクゾクしちゃう・・・溜らないじゃない・・・はははははははは！！！！」
ゆり「・・・・・・」
クレイズ「さあ月影ゆり・・・もう一度変身して戦いなさい・・・最高のショーを私に見せて頂戴」
ゆり「いやよ・・・私はまた妹を殺さなければならないの！？」
クレイズ「何を言ってるのよ？・・・じゃなきゃ貴女は死ぬのよ？・・・あぁ～妹の為に死ぬのかしら？」
ゆり「くっ！！！」
クレイズは身体をブルブルと震わせながら思っている本音をぶちまける。つまり彼女はダークプリキュアとゆりの殺し合いをまるで娯楽のショーのかのように考えているのだ。ゆりは言葉すら出ていない。もう一度自分と全く同じ血が流れている妹をこの手で殺さなければならない・・・一度は取り戻せた妹をもう一度この手で。ゆりは唇を噛み締めながらどうするかわからないでいた。
ブロッサム「ふざけないで下さい！！！！！！」
クレイズ「あぁ！？・・・何かしら？何か文句でも・・・」
マリン「大アリよ！！！・・・・・何が最高のショーよ。平和に暮してたアンナちゃんを何で・・・何で利用したのよ！？・・・・・アンタ、サイテ―よ！！！」
サンシャイン「アンナちゃんとゆりさんの気持ちを踏みにじって・・・絶対に許さない！！！」
フェアリー「二人の絆を断ち切った罪は軽くないわよ・・・タップリと償ってもらおうじゃない！！！」

クレイズの笑い声を断ち切るかのようにブロッサムが大声をあげて吠える。続いてマリンとサンシャイン、フェアリーが同じく大声で反論する。クレイズはウザったそうな態度でブロッサム達を睨む返す。

ブロッサム「二人の絆を断ち切った挙句アンナさんを利用してゆりさんの命を奪おうとするなんて・・・私堪忍袋の緒が切れましたぁ!!!!!」

マリン「海より広いアタシの心も此処らが我慢の限界よ!!!」

サンシャイン「その心の闇・・・私の光で照らしてみせる!!!」

フェアリー「私のこの翼がアンタの野望を消滅させる」

全員は決め台詞を言う。ゆりはその姿を見て過去の闘いが無意識に思い出していた。かつては頼りなく未熟であったのに今はブロッサム、マリン、サンシャインの背中が大きく見える。ゆりは涙を手でぬぐうと立ち上がる。

ゆり「キュアブロッサム、キュアマリン、キュアサンシャイン、仮面ライダーフェアリー・・・貴女達の言葉で戦う勇気を取り戻せた・・・ありがとう皆。クレイズ!!!・・・私の妹を利用した事を必ず後悔させるわ!!!」

クレイズ「後悔?・・・・一度心が折れた癖に・・ダークプリキュア!!!貴女の実の姉を殺しなさい~貴女が本物のムーンライトとなる為にね!!!」

ダークプリキュア「本物のムーンライト・・・・・」

サバ―クが父と分かったあの時も自分はブロッサムの言葉に救われ戦う勇気を取り戻せた。今回はブロッサムだけじゃないマリンやサンシャイン、フェアリーの勇気がゆりに戦う力を取り戻させた。

私は結局また仲間に助けられたのね。あの時変わろうと決めたのに・・・まだまだ私も未熟だと言うことね。

ゆり「(お父さん私にアンナを救う力を下さい!!!あの娘にまた笑顔になってほしいから。今度こそ妹として一緒に暮らしたいから・・・私に力を!!!)」

クレイズ「神頼みかしら!?人間とは愚かしいいきものね」
ゆりはプリキュアの為を一度見つめると今は亡き父の事を思っていた。例え二度と会えなくても自分と妹(アンナ)を見守ってくれてるはず・・・だから私にもう一度力を!!!
ゆり「プリキュア・オープンマイハート!!!」
ゆりは決意を新たに藍色のプリキュアの種をココロポットに装填。
光が発せられるとともにゆりの身体は銀色の光に包まれて私服から光の衣装へそしてそのままキュアムーンライトのコスチュームへとチェンジする。
ムーンライト「月光に冴える一輪の花キュアムーンライト!!!」
ダークプリキュア「・・・行くぞムーンライト・・・・」
ムーンライト「ダークプリキュア・・・いいえアンナ!!私は必ず貴女を取り戻す!!!」
黒と銀の光がぶつかり合い再び月と影の闘いが始まる。だが今度は殺し合いではない。ムーンライトは妹を散り返す為に戦うのだ。今度はこの手で必ず救ってみせる決意を胸に
クレイズ「さてと・・・じゃあ私も加勢に・・・」
ブロッサム「はぁああ!!!!」
クレイズ「!?・・・貴様・・・・・・」
クレイズもムーンライトのデータ採取兼ダークプリキュアの性能を確かめるべく加勢しよう飛び立つがそうはさせまいとブロッサムが飛びかかる。
マリン「アンタの相手はアタシ達よ!!!」
サンシャイン「ムーンライトの邪魔はさせない!!!」
クレイズ「ふん・・・ちょうどいいわ貴女達のデータも採取させてもらおうじゃない!!!」
フェアリー「世の中全てがデータどおりに行くと思わないでよね!!!」
クレイズに対峙するのはブロッサム、マリン、サンシャイン、フェアリーの女性チームであった。ムーンライトだけではない。自分達

も仲間のアンナを取り戻す為に精一杯今できる事をするつもりである。

ダークプリキュア「今こそ決着だ・・・キュアムーンライト!!!」
ムーンライト「アンナ・・・」
ダークプリキュア「私はアンナではない!!!私は貴様の影。貴様を消さなければ私は私になれない。今度こそ私が貴様を倒す!!!」
先陣を切って飛び出したのはダークプリキュアはムーンライトに向かってキュアナイトの技であるはずのナイトソードらしき光の剣を発してムーンライトに斬りかかるがムーンライトはムーンライトリフレクションで跳ね返す。
ムーンライト「いいえ。貴女は私の妹」
ダークプリキュア「だ、黙れ・・・・」
ムーンライト「貴女の中には眠っているはずよ・・・・私と過ごした日々が・・・あの笑顔が!!」
ダークプリキュア「黙れ・・・・」
ムーンライト「・・・今度は絶対に消させはしない!!!私は貴女を・・・大切な妹を救ってみせる!!!」
ダークプリキュア「黙れぇえ!!!!!」
ダークプリキュアは光の剣でなぎ払うとムーンライトを吹っ飛ばす。だがムーンライトは可憐な体サバキで受け身を取る。そして攻撃はせずに必死に訴えかけた。
ムーンライト「あの時貴女はサバークに、いいえ私のお父さんに娘と認められて安らかに消滅していったわ。そして貴女はアンナとして転生してこの町に来た・・・その記憶が貴女の中にある筈よ!!!私やつぼみ、えりか、いつき、大人、琢磨、傑、夕・・・沢山の仲間と過ごした日々の記憶が!!!」
ダークプリキュア「うるさい!!!私は貴様の影として造られた存在・・・その私が貴様と共存など出来るわけが!!!・・・私はダークプリキュアなんだ!!!」

ムーンライト「貴女は私の影なんかじゃない。貴女は貴女なのよ・・・私と同じ血が流れてるただ一人の存在なのよ!!!」

ダークプリキュアの中にはまだ自分と過ごした日々の記憶が絶対に残っているはずだとムーンライトは確信していた。そんなムーンライトにダークプリキュアは迷いが無意識に出ているのか本気で攻める事が出来ない・・・・

ムーンライト「思い出してアンナ!!皆と過ごしたあの日々を。貴女の心からの笑顔を!!!」

初めて会った時私は彼女が生まれ変わったのだと思った。他人の空似なんかじゃない・・・本当にそっくりで怖かった。でも今は違う。大切な家族を取り戻す為なら私は戦う!!

ダークプリキュア「違う・・・私は・・・アンナなんかじゃ・・・」

ダークプリキュアは徐々に戦意がなくなっていくかのように動きが鈍くなるとその場に立ち止まってしまう。

ダークプリキュア「私は・・・・ダーク・・・・アンナ・・・」

この胸が引き裂かれそうな悲しみは一体何なんだ!?・・・私は月の影・・・ムーンライトの分身・・・のはず・・・違う・・・私は・・・お姉ちゃん・・・・

ムーンライト「また一緒に暮らそう!!私の仲間を改めて紹介するわ。皆は貴女の事を一人の人間として認めてくれる。きっと好きになる。今までと変わらず貴女を仲間としてみてくれる・・・きっと・・・きっと!!!」

ムーンライトの言葉にダークプリキュアは涙を浮かべて彼女を見つめる。不思議だ・・・今までこんな感情になった事はないのに・・・この暖かくなる気持ちは何なんだろう?・・・まるで重荷が一気に下ろされたかのような解放感・・・もしかしたら今度はやり直せるかもしれない・・・ダークはムーンライトの差しのべられた手を握ろうとしたが・・・・

ブロッサム「アンナさん!!洗脳が解けかかっているんですね」

マリン「やった!!」

サンシャイン「うん！！」
フェアリー「安心するのはまだだよ。クレイズ！！残るはアンタと巨大なブリキロボだけよ！！」
クレイズとの戦闘に苦戦していたブロッサム達は喜びの声を上げる。残るはクレイズとニセティガ達だけだ。
クレイズ「ちっ！！つまらない物を見せてくれるじゃないの・・・・こうなったらダークネスリング・オーバードライブ！！！」
だがその安心もすぐに壊されることとなった。クレイズはダークネスリングのコントローラーを取り出すとダークネスパワーの出力を最大限に上げた。
ダークプリキュア「！？・・・・ああぁああああぁあうう！！！！！！！・・・・ぐぅぅうぅうううぁああああああああああああ！！！！！！！！！」
ムーンライト「！？・・・どうしたのアンナ！！！・・・アンナ！！！！」
両腕のダークネスリングがもう一度彼女を操ろうと黒い稲妻でダメージを与えていく。ムーンライトは急いで近づくが稲妻に飛ばされてしまう。
ダークプリキュア「お、お姉ちゃん・・・・・に、逃げて・・・・逃げ・・・・・・・」
ムーンライト「アンナ！！！アンナ、アンナぁあ！！！！」
ダークプリキュア・・・いいやアンナに戻った彼女は眼から生気を感じさせる光がなくなり目が赤光する。今度はクレイズの忠実なる機械人形（マリオネット）と化してしまう。
クレイズ「今度は何をしようと戻せないわ・・・・ダークプリキュア！！邪魔者を全て吹き飛ばしなさい！！！」
ダークプリキュア（オートマントモード）「・・・・・・」
ムーンライト「そ、そんな・・・アンナ！！！」
ブロッサム「ムーンライト危ない！！！」
クレイズ「貴女達の相手は私でしょ？」

マリン「邪魔よ！！どきなさい！！！」
サンシャイン「ムーンライト！！！」
フェアリー「ダメ間に合わない！！！」
ダークプリキュアはナイトソードを発動させると今まで以上に早い動きでムーンライトに本気で斬りかかる。この距離では流石のムーンライトもよけきれない。ブロッサム達は何とかしようとするのだがクレイズの妨害で動きが全く取れない。
ぶつかり合う金属音『ガキィィイィィイイン！！！！！！』
ナイトソードがムーンライトにぶつかる前に二つの何かが受け止める。ブロッサム達、そしてムーンライトが目を見開いたその目線の先には手には白銀に煌く剣を左手には黄金に輝く剣を持った戦士がダークプリキュアの剣を受け止めていたのだ。
？？？「光に導かれて来てみれば・・・・どうやらこの世界は私の知っている世界じゃないみたいね」
少女はダークプリキュアをなぎ払うと双剣を振う。ブロッサムは・・・いいやマリン、サンシャイン、ムーンライトは驚きの目が隠せなかった。この世界には自分たち以外のプリキュアがいるのは知ってはいるが彼女は見た事がない顔だから無理もないだろう。
つぼみ「貴女は・・・誰なんですか！？」
？？？「私は・・・セイバー・・・・救世主の名を持つプリキュアよ。つぼみ」
ブロッサム「どうして私の名前を！？・・・・」
？？？「説明は後回し。今は戦うのが先よ！！」
謎の少女戦士はブロッサムに優しい笑みを見せる。クレイズは想定外のハプニングに動揺が隠せないようだったが彼女の事を知っているかのようだった。
クレイズ「き、貴様！！まさか・・・・」
？？？「その通りよ。私の名は全てを希望へ導くの救世の光キュアセイバー！！」
名乗りを上げるキュアセイバーに驚きが隠せない一同。周りに聖な

る光が放たれダークプリキュアを照らす。その光はムーンライトとはまた違いセイバーの名の通り救世の光であった。

第１９話月の影計画編？「アンナの正体と救世の光」（後書き）

映画のオールスターズＤＸ3を見てきました。集大成というだけのすばらしい作品でした＾＾。サンシャインとムーンライトのペアが可愛かった！！。まあハートキャッチ組に限らずプリキュアは全員最高です！！！
皆さんもぜひ見てください！！！

さて次回はキュアセイバ―の活躍と大人達にクレイズの魔の手が・・・・
次回のお楽しみに♪

第２０話月の影計画編？「囚われた３人」（前書き）

前回までのあらずし～

明かされたアンナの正体に勇気を奪われたゆり。クレイズの計画とはゆりとアンナの月影姉妹の殺し合いを再び行わせることだったのだ。ブロッサム達の仲間の言葉に再び戦意を取り戻すゆりはムーンライトとなりアンナを取り戻す為に戦う事を決し一度はアンナの記憶を取り戻しかけたのだがダークネスリングは非常にもアンナを縛り付けクレイズの機械人形へと変容させてしまう。絶体絶命のその時現れたのは別次元のプリキュアである救世の光の戦士「キュアセイバー」だった

第２０話月の影計画編？「囚われた３人」

クレイズ「キュアセイバーだと！？・・・き、貴様が何故この世界に？（ば、バカな奴は別次元の世界の戦士のはず・・・その奴が何故この世界に！？）」

セイバー「さあね？どうしてだけは私にも分からない・・・・でも呼ばれたからには役割を全うするだけ・・・行くわよ！！！」

クレイズはセイバーの存在は他の多次元宇宙で話だけは聞いてはいた。だが何故別次元の戦士であるはずのセイバーがどうしてこの世界に？・・・まさかこれも我が主人ダーク様が恐れていたプリキュアの力か？今は迷っている暇はない。

クレイズ「ダークプリキュア！！邪魔者を全て殺ってしまいなさい！！！」

ダークプリキュア「・・・・・・」

クレイズの命令に忠実に従うダークプリキュア。ムーンライトとセイバーの二人をまとめて相手をするつもりだろう。

セイバー「はぁあああっ！！！！！」

だがムーンライトよりも先にセイバーが先に前に出る。ダークプリキュアの剣とセイバーの双剣が金属音を鳴らしながら火花を散らす。二人とも迷いがなく本気のぶつかり合いが繰り広げられる。パワーでは互角とでも言う所であろう。なぎ払いで飛ばされたダークプリキュアはアクロバットな動きで宙に舞うと着地する。

セイバー「はぁあ！！！！たぁあああ！！！！！」

しかしパワーでは互角でも技術では僅かにセイバーが上回るらしく徐々にダークプリキュアを圧倒していこうとしていく。その動きは実に優雅でまるで踊っているかのような剣さばきでダークプリキュアの斬撃を的確に受け流し形勢を自分の有利な方向に流しているムーンライト「凄い」

ブロッサム「可憐な動きです・・・」

マリン「か、カッコイイ！！」
サンシャイン「彼女自身も凄いけどあの剣のパワーもただものじゃないよ」
フェアリー「プリキュア独自のパワーとアタシ達ライダーのスピード兼ね備えたオールマイティーの戦士って感じね」
５人はセイバーの戦いに言葉が出なかった。かつて自分達が束になっても苦戦を強いられたダークプリキュアに対してたった１人で圧倒しているとなれば当然と言えば当然だ。日の光を浴びて金色と銀色の二つの光を放つ剣が輝きを放つ。
クレイズ「ちっ！！！ヘロディア！！タイプＭをもう一機出撃させてちょうだい」
ヘロディア「了解」
ダークプリキュアの攻撃と互角であるならば援軍を呼ぶまでだと通信でヘロディアにニセウルトラマンティガのマルチタイプ二号機を出撃させ青い光とともに転送される。
ニセティガＭ２「デヤァァ！！」
セイバー「アレは？」
ブロッサム「アレはクレイズが造ったウルトラマンティガのニセモノです」
セイバー「ウルトラマンティガ？」
マリン「あそこで戦ってる巨人！！そこに赤と紫色の！！！」
セイバー「巨人！？・・・まあとにかく敵ってことね・・・だったら容赦しないわよ！！！」
ブロッサムとマリンの大雑把な説明に困惑するセイバーだが敵であるなら容赦はしないとセイバーは一度剣をしまう。
セイバー「鳴らせ、福音の奏をリリィフシンバル！」
セイバーはもう一つの専用武器リリフィシンバルを召還して手に取る。ニセティガＭはその隙にハンドスラッシュを連発していくと地面にそれがセイバーに直撃した・・・かに見えたのだがセイバーは自身の天使を思わせる翅を広げて超高速低空飛行で紙一重でハンド

スラッシュを避けるとそのままニセティガを惑わせる。いくらパワーが上であったとしてもその攻撃が相手に直撃しなければ全く持って無意味。スピードで勝るセイバーはニセティガを惑わせながら高速のパンチとキックをニセティガに見舞わせる。

ティガ「（彼女なんてパワーだ・・・俺達があれだけ苦戦していると言うのにいとも簡単に・・・俺達も負けてられないな）・・・ハァアアア！！！！」

互角の戦いを繰り広げていたティガ達もセイバーの戦闘力の高さに驚きを隠せないでいた。自分達もいつまでも苦戦してはいられないとティガ達も反撃の狼煙（のろし）を上げる。

クレイズ「ちっ！！！なんて強さ・・・・己ぇ！！！」

セイバーの登場により戦いの流れは一気にプリキュア達の方に傾き始めた。このままではマズイと必死に考えるクレイズだがその間にもニセティガはセイバーの攻撃でダメージが蓄積していく。

セイバー「これでトドメよ！！！プリキュア！スターライトチャージ！！」

チャージを完了し一瞬間をおいてニセティガを睨む。

セイバー「クラアアアッッシュ！！」

セイバーは止めの一撃を発動するべく一度動きを止めるとシンバルを天に投げる。シンバルはそのまま上空を舞うと一度輝くと意思をもったように金属音を鳴らしあいながら弧を描いていくとセイバーの元に戻る。そしてシンバルはセイバーの目前で垂直に空中で停止するとを描くように高速で回転し始める。高速回転と同時に銀の環が発生し始め光の粒子が集まり始める。大量の光の粒子がシンバルが生んだ銀の環に集まっていくとその環の中心部にセイバーは両腕を勢いよく伸ばしたた瞬間に銀色の光線がニセティガに向かって放たれる。

ニセティガ「ハアァアアッ！！！」

目には目をとニセティガはニセゼペリオン光線を放って対抗する。

双方の光線がぶつかり合い激しい光が放たれると光線が相殺し合う。
セイバー「人の幸せを奪う奴なんかに私は負けない！！！はぁあああああああああっ！！！！！！！」
セイバーは全パワーを解放してニセティガのニセゼペリオン光線を一気に押し戻していきながら銀色の光線がニセティガに迫っていく。
とうとう光線を全て押し切ると銀色の光線がニセティガの身体に直撃していく。
ニセティガ「グゥォオゥ・・・ォゥゥオオォウウ・・・・ウワァアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！
銀色の光線を全身に受けていくと身体から光をはなりながらニセティガは大爆発を起こして跡形もなく消滅してしまう。その様子を見ていたクレイズはまるで信じられないと絶叫したかのような顔であった・・・・
クレイズ「お、おのれぇ！！！キュアセイバー！！！しかしこのままでは部が悪い・・撤退よ！！！」
クレイズは闇の扉をあけるとダークプリキュアと残りのニセティガと共に姿を消す。ニセティガの姿が完全に消えた事を確認したティガ達はカラータイマーを点滅させながらも空を見上げるとそのまま空へと飛び立つ。
セイバー「ふぅ～・・・終わったわね」
セイバーは変身を解除すると灰色のスカートデニムに英文字が書かれた短い袖の黒のシャツといういかにも今時の高校生とでも言うような姿になる。変身解除するとペンダントが妖精の姿に変化する。
？？？「真夜ちゃんお疲れ様ロモ！！」
つぼみ「あ、あの・・・ありがとうございます！！！助けていただいて」
？？？「お礼なんていらないわよ。大した事してないんだから」
えりか「そんな事ないよ！！ほんとーに助かったんだから」
同じく変身を解いたつぼみ達はセイバーの正体である少女に礼を言う。見た目は自分達と同じぐらいの高校生であるが見かけとは裏腹

にものすごいパワーの持ち主である事は先ほどの闘いで証明済みだ。
いつき「あの・・聞いてもいいですか?貴女は一体?」
??「私は雨牙真夜。貴女達と同じプリキュアよ・・・と言ってもこの世界のプリキュアではないんだけどね。で、この子は私の相棒のロモモ」
ロモモ「宜しくロモ!!!」
シプレ「あぁ!!ロモモ久しぶりですぅ!!」
ロモモ「久しぶりロモ!!元気にしてたロモ?」
どうやら妖精同士は知り合いらしくシプレとコフレとポプリは真夜の妖精のロモモとじゃれあ始めるのだった。一方つぼみ達はと言うといまだに状況がイマイチ飲み込めないでいるのだった。
ゆり「この世界のプリキュアじゃない・・・ってどういう事なの?」
真夜「そうね・・・とりあえず私の世界の話をすると・・・・・」
真夜は自分がいた世界の事をそしてこの世界以外にもプリキュアがいる事を説明する。自分がいた世界でのプリキュアの仲間達の事、自分が今まで戦ってきたことなどを。
夕「ほ、ホントにパラレルワールドなんてのがあったなんてね」
真夜「私の信じられなかったんだけどね。まあ現にこうやって貴女達の世界に呼ばれちゃったんだし」
真夜本人も信じられないとでもいう顔ではあるのだがプリキュアやライダー更にはウルトラマンとぶっ飛んだ力が実在しているだけでも信じ難いが現に自分達が使っている力である彼女たちだからこそ事の事態を飲み込む事が出来るのである。

その頃の大人達はと言うとウルトラマンの変身を解除した後つぼみ達にどういう言い訳をしようか考えながらもクレイズが造り出したニセウルトラマンティガの事やアンナやダークプリキュアであった事更にキュアセイバ―の事について大人の家で話し合っていた。
大人「まさかティガのニセモノまで作りあげるなんて・・・」
琢磨「正に化け物だな・・・サロメの科学とかいうやつは」

傑「ああ。それにロボットであったとしてもあれだけ苦戦させられる相手だ。もしもあんなのが大量に生産でもされてみろ・・・それこそ地球は終わる。」

3人は考えただけでも恐ろしかった。もしもあんなモノが大量に生産されて総攻撃でも受けたら地球は壊滅的な大ダメージを受けてしまう。もしもそうなったらと考えたくないが考えてしまうのが人情と言うものである。

大人「・・・アンナちゃんがまさかダークプリキュアの生まれ変わりだったなんて」

琢磨「ああ。最近ゆりがずっと笑顔だったのもアンナがいたからなんだろうな・・・それをアイツはまるで人形のように利用しがって!!!!」

傑「奴はダークネスリングでアンナちゃんを無理やり操っていた・・もしもダークネスリングを破壊出来たら彼女の意識が解放されるかもしれないが」

大人「ああ。今度は絶対に助けよう。ゆりの為にそしてアンナちゃんの為に!!」

琢磨&傑『おう!!!』

次の議題はダークプリキュアにされたアンナについてであった。クレイズが語った彼女の秘密に3人は信じ難かったがゆりの笑顔を思い出すと納得が自然と出来た。ゆりとアンナは本当の姉妹のように今まで仲良く過ごしていた事を3人も分かっていた。だからこそそれをいとも簡単にぶち壊した揚句アンナとゆりの殺し合いを楽しむクレイズに怒りが炎のように燃え出てきたのは3人も同じだったのだ。ゆりとアンナの為に今度は必ず助けると誓い合う3人。絶対に助けるという思いを胸に。

大人「そして最後に気になるのはキュアセイバー」

琢磨「強かったよな。ニセティガをいとも簡単にお釈迦にしちまう

んだから」
傑「ああ。だけどつぼみ達とは知り合いではないようだった感じだったな」
大人「それも気になっていたんだ。てっきりつぼみ達の仲間だと思っていたのに」
琢磨「・・・これぱかりはつぼみ達に聞いたほうが早いかもな」
傑「だけど・・・どうやった顔向けするんだ?俺達がウルトラマンだって言うわけいもいかないし」
大人「ああ。俺達ってつぼみ達のピンチには必ず駆け付けてたからな。どうやって言い訳しようか・・・」
琢磨&傑『う~ん(大汗)』
最後の議題はキュアセイバーについてである。彼女の戦闘能力は本当に驚かさせられてたのだがつぼみ達とは面識がない事に疑問を感じていた3人。つぼみ達に聞くのが早いのだがどうにも聞きづらい・・・どうしようかと悩んでいた3人だったが・・・

カブトゼクター「!!!!!(お、お~い!!!大変だぁ!!!!)」
考え込んでいた3人にカブトゼクターが飛んできた。何やら慌てている様子だった。
大人「どうした相棒?」
琢磨「まさか・・・ダークプリキュアが・・・アンナが現れたのか?」
カブトゼクター「!!!!!(そ、そうなんだよぉ!!!は、早くぅ!!!!)」
琢磨の言葉にカブトゼクターは反応し勢いよく窓から飛び出る。どうやら琢磨の感が当たったらしい。
大人「もしかしたらワナかもしれないが・・・仕方ない二人とも行こう!!!」
琢磨「異議なし。」
傑「左に同じ!!」

ダークプリキュアの出現だとしたらなぜ町が破壊されないのかは疑問だが今は行くしかないと3人はカブトゼクターが飛んで行った方向にバイクで追うのだった。そしてついたのは近くにある希望ヶ丘公園広場の丘であった。

大人「あ、あれは・・・アンナちゃん!!!」
琢磨「・・・・・」
傑「君が・・・俺達をカブトゼクターに呼ばせたのか!?」
ダークプリキュア「・・・・・・・」
丘の頂上にいたのはダークプリキュアであった。見す見す自分達を待っていたのは何故だ?・・・そんな疑問があった3人だがすぐにライダーベルトを腰につけるとゼクター達を呼び寄せる。
琢磨「アンナすぐに元に戻してやる」
傑「君には罪はない・・・だから絶対に助ける!!!」
大人「そしてもう一度・・・ゆりと一緒に笑ってくれ・。変身!!!」
大人達は一斉にライダーベルトにゼクターを装填するが・・・・反応がない。
大人「なっ!?・・・な、何でだ?・・ぐぅう!?」
琢磨「か、身体が・・・・し、痺れる」
傑「こ、これは毒か!?・・・い、一体・・・誰がこんな姑息な真似を」
突然大人達の身体に毒針付きの矢のようなものが放たれて身体に突き刺さると身体が痺れて動きを封じられてしまう。一体誰がこんなものを?その答えを示す相手はすぐにあらわれた
クレイズ「ふふふ・・・まんまと引っ掛かったわね!!!おバカさん♪」
大人「お、お前はクレイズ!?・・・お前の仕業か!?」
クレイズ「当然よ?月影ゆりでなかったのは残念だけど・・・それ以上の収穫だったわ」

琢磨「ど、どういう意味だ!?」
クレイズ「知らないとでも思ったの?・・・アンタ達3人が持っている特別な力について」
傑「な、何!?・・・何の事だ!?」
まさか自分達がウルトラマンであるとばれたのではないかと焦る3人。だがクレイズは3人に近づき見え見えだとでも言うような顔で3人を嘲笑う。
クレイズ「隠す必要ないじゃないの?・・・アンタ達がウルトラマンだってことはバレバレなんだから。」
大人「・・・どうしてそれを!?」
クレイズ「元々ティガのピラミッドを最初に見つけたのは私達サロメだった。破壊できれば全ては終わっていたのだけど巨人は蘇った・・・原因はないかと我々サロメは密かに調査をしていたのよ・・・そして見つけたのがアンタ達3人ってわけ。」
琢磨「な、何だと!?・・・」
完全に自分達のミスであった。アンナを助けたい気持ちが強すぎたことで敵の策にまんまとハマってしまったのだった。
大人「じゃあライダーに変身できなかったのもお前の仕業か!?」
クレイズ「その通り~♪アンタ達が変身するタイミングに合わせてライダーベルトに向かって妨害電波を流したのよ。その隙に身体に向けて動きを麻痺させる惑星サウリアから採取したシビレ草のエキスを塗った毒矢をアンタ達に放ったの・・・どう身体が痺れて動かないでしょ?さぁ~ダークプリキュアしばしこの3人にお仕置きをして上げて」
大人「や、止めるんだアンナちゃん!!」
琢磨「クッソ・・・汚ねえぞクレイズ!!!」
傑「貴様!!!」
3人の説得の言葉もむなしくはウルトラマンに変身も出来ないままダークプリキュアに生身で甚振られる。だが例え変身できたとしても3人はダークプリキュア相手には戦えなかったかもしれない・・・

そのころのつぼみ達はというと。
つぼみ「大人さん携帯にも出ませんね。」
えりか「琢磨さんも傑さんも出ないなんておかしいね」
いつき「3人ともどうしたのかな?・・・さっきの闘いの時も姿を見せなかったし」
真夜「その3人も仮面ライダーっていう戦士に変身できるの?」
つぼみ「はい。3人ともすごく強いんです!!!」
えりか「まぁ～アタシ達ほどではないけどね～」
ロモモ「何よ言うロモ!!真夜ちゃんも凄く強いロモ!!」
いつき「こらこら、えりかったら」
真夜「ロモモも止めなさいって」
自慢げな顔を見せるえりかの隣で苦笑いするいつきと真夜とロモモの二人に大人達の持つライダーの事を説明するつぼみ。真夜とロモモが新しい仲間に加わったので大人達にも紹介しようと思ったまでは良かったのだが大人達と連絡が取れなくなったのだ。心配になったつぼみ達は彼らを探しに辺りを手分けして探していた。だが既に1時間が経過していて全く姿が見えない事に不安が募る。
ゆり「皆、大人達は見つかった?」
つぼみ「いいえ。ゆりさんのほうもダメでしたか?」
ゆり「ええ。家にも言ったんだけど3人とも留守みたいで」
夕「アタシも収穫ゼロ。ったくアイツ等何処行ったのよ～」
ばらばらになっていた全員は一度植物園に集まり状況を報告する。どうやら全員収穫ゼロであるらしい。すると猛スピードで何処からか夕の相棒であるバタフライゼクターが飛んできた。
夕「どうしたのバタフライゼクター!?」
真夜「この子は?」
つぼみ「バタフライゼクターです。夕さんがフェアリーに変身するときに使う変身アイテムです。大人さん達の変身アイテムも同じように心を持っているんですよ」

真夜「へぇ～不思議。ねぇロモモの世界にもこういうのはいるのかな？」
ロモモ「全くみた事ないロモ。」
真夜とロモモにバタフライゼクターの説明をしている間にバタフライゼクターは何やら慌てた様子で夕達に何かを伝えたい様子である。
夕「大人達の事何か知ってるの！？」
バタフライゼクター「！！！！！」
ゆり「そうみたいね。行きましょう！！」
全員はバタフライゼクターの案内で希望ヶ丘公園広場の丘にまで連れてこられたのだった。そこには大人達が使ってるはずのライダーベルトが落ちていた。
つぼみ「こ、これは大人さん達のライダーベルト！？な、何でこんなところに」
つぼみ達は3つのライダーベルトを拾い辺りを見回す。すると先ほどまで誰かが此処で争ったような形跡が見られてある場所には血の跡があった。
えりか「これって・・・血じゃない！？」
いつき「まさか・・・3人に何かがあったんじゃ」
？？？「その通りだ！！！」
突然声が響く。全員の目線がそこに集まると其処にいたのはダークプリキュアだった。手には何かを持っている。
ゆり「アンナ！！」
ダークプリキュア「・・・・プリキュア達よこれを見るがいい。」
ダークプリキュアは手に持っているリモコンのようなものを稼働させるとつぼみ達の前に映像が映し出されたその映像とは・・・・
つぼみ・えりか・いつき・夕・真夜『！！！！！！！』
その映像に映し出されたものはなんとボロボロにされて十字架に磔にされていた大人、琢磨、傑の3人だったそしてその映像見せた後にダークプリキュアはつぼみ達にカブト、ガタック、ダークカブトのゼクターを投げ捨ててやる。どうやら3匹は命辛々逃げようとし

て捕まり重傷を負わされたのだ。
ダークプリキュア「明日の満月の夜にこの3人を処刑する。阻止したくばサロメの全戦基地があるＢ－3地区にある廃工場に来るのだな」
ダークプリキュアはそれだけ言うと闇の扉を潜りそん場から姿を消すのだった。その間にも痛々しい3人の姿は映し出されていてつぼみ達は言葉が出ないのだった。

第２０話月の影計画編？「囚われた３人」（後書き）

セイバーの戦闘力だとこれ位は軽く行きそうだ（汗）もうすぐ新学期などが始り新生活が始まりますが皆様はいかがでしょうか？

私は・・・新学期は大学の授業がいつも憂鬱です！！！あぁ～学生はこれだから辛いぜ（泣）

さて次回はいよいよ決戦の時が始まります。クレイズに囚われた大人、琢磨、傑そして操られたアンナの運命はいかに！！

次回もお楽しみに♪

第２１話月の影計画編？「救出作戦開始」（前書き）

前回までのあらすじ～
キュアセイバーはニセウルトラマンティガを軽く木っ端みじんにするほどのものすごいパワーであった。一方大人達はクレイズの罠にはまってしまい人質とされてしまう。明日の満月の夜に３人は処刑されてしまうと宣言するダークプリキュア。果たして３人の命はそして操られたアンナの運命は！？

第２１話月の影計画編？「救出作戦開始」

大人達３人がつかまり処刑されると宣言された事に動揺が隠せないつぼみ達一行は植物園に戻っていた。妖精たちもいつも以上に危機感を募らせているらしく普段の元気など全くない。

つぼみ「どうしたらいいんですか・・・・」

えりか「迷ってる場合じゃないよ！！今すぐ助けに行こうよ！！」

いつき「待ってえりか。クレイズがなんの策もなしにこんな挑発をするとは思えないよ・・・それに上手くいったとしてもクレイズは最終手段として３人を僕達の目の前で・・・・」

ゆり「あり得るわね。」

えりかは力強くそう言うがすぐにいつきがえりかを宥める。例え助けに行ったとしても下手をすればクレイズは大人達を見せしめに自分達の目の前で殺す事もあり得るし狡猾なクレイズの事だから二重にも三重にもワナを仕掛けているかもしれないのだ。そう考えると自分達も作戦なしには迂闊な事は出来ない。

えりか「だけどこのままじゃ明日の夜に３人とも・・・・」

つぼみ「分かってます・・・でも大人さんの・・・３人の命がかかってるんですよ？下手なまねは出来ません！！！・・・ごめんなさい。」

えりか「うんうん。アタシこそ・・・ごめん。」

夕「・・・・・」

えりかの言葉をさえぎるようにつぼみは大声を上げるがすぐに座り込んで謝る。えりかもすぐに謝り再び沈黙が包んでいく。

真夜「皆・・・助けに行こう！！貴女達の・・・いいえ私達の大切な仲間を取り返しに。新参者の私が言うのもおかしいけれどいつまでもこうしていても前には進めない。きっと私達が助けに来るのを待っている筈よ！！！。」

その沈黙を一番最初に破ったのは真夜だった。こうやっていつまで

も悩んでいるだけで時間が過ぎてしまったらそれこそ取り返しがつかなくなる。例えワナがあろうとも自分達の力を信じればどんな困難だって乗り越えられる。それがプリキュアだった全員に諭すように。

つぼみ「真夜さん・・・・」

ロモモ「真夜ちゃんの言うとおりロモ！！。あの３人だって絶対にロモモ達が助けに来るのを信じてるロモ！！例え敵がどんなに卑怯な手を使ってもロモモ達が力を合わせれば誰にも負けないロモ！！！」

つぼみ達は真夜方に視線を向ける。続いてロモモがそう言う。自分達がこうしている間にも大人達はクレイズに甚振られて苦しんでいる。だがどんなに苦しんでいようともつぼみ達が助けに来ると信じている筈。そんな彼らを裏切ることなどするわけにはいかない。

えりか「・・・そうだね。うっしゃ！！！ちょっくらおドジな３人を助けに行ってこようよ。アタシ達の大切な仲間をさ」

真夜とロモモの言葉に対して最初に口を開いたはえりかだった。いつもの調子で身体を捻りながらつぼみ、いつき、ゆり、夕の４人に語りかける。自分達の仲間を助けれるのは自分達しかいないと。

いつき「・・・・うん。必ず助け出して二度とこんな事がないように鍛え直さないとね♪」

夕「だね。そして操られたアンナちゃんも絶対に助けよう。」

つぼみ「はい！！！絶対に４人を助けましょう！！！」

ゆり「そうね。でも作戦なしに行くのはあまりにも危険すぎるわ。明日の夜までまだまだ時間はあるしちゃんと作戦を考えましょう。アンナや大人達を助けるために」

シプレ「シプレ達も何か考えるですぅ！！！」

コフレ「大人さん達を助ける方法を皆で考えるですっ！！」

ポプリ「でしゅ！！！！」

バタフライゼクター「！！！！！！！」

全員の戦意の灯（ともしび）が蘇る。大切な仲間達を救えるのは自分達だけなの

だ。だがその為には全員の知恵を絞って作戦を考えなければならない。植物園のテラスの片隅で全員は時間が許す限り出せるだけのアイディアで作戦を練っていくのだった。

その頃サロメ星人全戦基地として使われている廃工場では・・・・・
大人「・・・・・うぅ・・・二人とも・・・大丈夫か？」
琢磨「ゲホ、ゲホ・・・何とかな・・・だけど腹減ったかも」
傑「ギリギリ生きてるさ・・・・俺は水が飲みたい・・・・」
大人「頑張れ2人とも・・・・必ずチャンスはある。カブトゼクター達が・・・ベルトを取ってくるまでの辛抱だ。」
前線基地の収容所のような場所に3人は鎖で繋がられながらも何とか生きていた。身体はボロボロで立っているのもやっとかもしれないほど3人は消耗していた。全身をダークプリキュアに殴られた激痛や空腹感、水に対する飢えが襲いかかるがどうしようも出来ず我慢するしかなかった。しばらくするとサロメの一兵士がやってきて3人を収容所から出す。
サロメ兵士1「出ろ。」
サロメ兵士に無理やり連れて来られたその先は丸型のカプセル様なハッチがある変わった形の壁の部屋に連れてこられた。その中央のコントロールルームらしき部屋からクレイズとヘロディアそしてダークプリキュアいて上から見下ろしている。
クレイズ「来たわね？光の戦士たち」
大人「クレイズ・・・」
琢磨「一体何の用だ？」
クレイズ「面白い物を見せてあげようと思ってね～ハッチオープン！！」
大人・琢磨・傑『！！！！！』
クレイズの号令に合わせて丸型のハッチが一斉に開く。なんとそこにから出てきたのは大量のニセウルトラマンティガだった。3タイプそれぞれざっと数えても数千体は超えているだろうか？

傑「これは・・・・」
大人「なんていう数だ・・・・・こんなものがもしも一斉に起動したら・・・・」
クレイズ「ふっふっふ♪どうかしら?アタシが造ったニセウルトラマンティガは?」
琢磨「何いい気になってんだ!!所詮はニセモノ・・・・そんなもん俺達が必ず叩き潰す!!!」
クレイズ「叩き潰す?何言ってんのかしら~スパークレンスもライダーベルトもない≪ただの人間≫でしかない貴方達が」
大人「くっ!!!」
クレイズは3人のスパークレンスを見せつけて満面の笑みで嘲笑う。今の大人達にはスパークレンスもライダーベルトもなく完全に抵抗する力を失っている。せめてどちらかさえあればそう思う3人の意思も空しくクレイズはそれぞれタイプM、P、Sの個体を出現させる。
クレイズ「平和を守るウルトラマンティガが地球と全宇宙を制圧する!!!その能力はオリジナルをはるかに凌駕する・・・これこそサロメ星の最強ロボット兵器・・・これを量産すればサロメが最強となるのよぉぉおおお!!!!!!!」
大人「(くっそぉ・・・どうすればいいんだ・・・どうすればぁ!!!)」
3人は悔しさに唇をかみしめながら下を向く。今の俺達には何もする力はない。せめてスパークレンスかライダーベルトのどちらかさえ戻ってくればこの状況を打破できるすべはあるのだが・・・数分間考え込んでいると手下の一人がクレイズ達の元に走ってきた。何かの報告を受けるとクレイズは一度鼻で笑うと大人達のほうを向く。
クレイズ「喜びなさい貴方達の仲間が助けに来るってよぉ~まあ貴方達のボロボロな姿を見せられたら当然と言えば当然よね~」
傑「俺達を餌につぼみ達を・・・もう一度ゆりとアンナの殺し合いをさせるつもりか!?」

クレイズ「そのとーり♪今度は絶対に邪魔させないわ。アンタ達は月影ゆりとダークプリキュアの殺し合いを見ることね」
大人「貴様ぁ！！！何処まで腐ってるだ・・・クレイズ！！！！」
琢磨「ゆりの心をまた傷つけるつもりかぁ！？・・・そんな事俺達がさせない絶対に！！！」
クレイズ「うるさいわね・・・こいつ等を早く牢屋に閉じ込めちゃいなさい！！！」
サロメ兵士２「ハッ！！！」
自分達を餌につぼみ達をおびき寄せるつもりだ・・・そうなれば奴の思うツボだ・・・不甲斐なさに大人達は思わず叫んでしまう。このままじゃつぼみ達も自分達の二の舞になってしまう。だが今の自分達には何も出来ない。そして大人達はまた収容所に戻されることとなった。

そして時間は流れ翌日Ｂ－３地区の廃工場へとつぼみ達は足を運んでいた。
つぼみ「ココがサロメの全戦基地の廃工場・・・」
えりか「時間は後１４時間とちょっとね。助け出すには十分ね」
いつき「ああ。絶対に助け出そう！！僕達の大切な仲間を」
夕「とーぜん♪終わったらあの３人に食事でもおごってもらわないと」
ゆり「そうね。３人はむくれるかもしれないけど助けられた報酬ってことなら問題ないでしょう。待っててアンナ・・・必ず貴女を助け出すから。」
真夜「気合いは十分ね。じゃあそろそろ本気で行きましょうか！！！」
つぼみ・えりか・いつき『はい！！！』
ゆり・夕『うん！！！』
シプレ＆コフレ＆ポプリ『ですぅ！！！』
ロモモ「行くロモ！！！」

シプレ・コフレ・ポプリ『プリキュアの種いくですぅ！！！』
先ずはつぼみ達が私服から光のワンピースのような服に変化してつぼみとゆりは眼鏡がなくなる。つぼみ、えりか、いつきは妖精たちから発せられた心の種をゆりは自分でペンダント代わりに持っている心の種をココロパヒュームとココロポットに装填する。
つぼみ・えりか・いつき・ゆり『プリキュア・オープンマイハート！！！』
つぼみ、えりか、いつきの３人は光の香水を身体に噴きかけていくとピンク、青、黄色の光に包まれて衣装がだんだんとそれぞれの色を強調したコスチュームに変化していく。ゆりは藍色の光に包まれながら銀色と藤色を強調した衣装に変化し４人の髪の色もピンク、水色、黄色、藤色とそれぞれのイメージカラーに変化する。
ブロッサム「大地に咲く一輪の花キュアブロッサム！！！」
マリン「海風に揺れる一輪の花キュアマリン！！！」
サンシャイン「日の光浴びる一輪の花キュアサンシャイン！！！」
ムーンライト「月光に冴える一輪の花キュアムーンライト！！！」
４人『ハートキャッチプリキュア！！！』

夕「来てバタフライゼクター！！！」
バタフライゼクター「！！！！！」
夕「変身！！！」
電子音「ＨＥＮＳＩＮ」
夕の声に反応し時空を超えてバタフライゼクターが夕の手に留まる。
そして夕は首に付けている変身ブローチのライダーブローチにバタフライゼクターをライダーブローチに装填していくと首から全身を包んでいき白銀を強調した蝶のサナギをモチーフにした仮面ライダーフェアリーマスクドモードへと変身する。
フェアリー「キャストオフ！！！」
電子音「ＣＡＳＴ　ＯＦＦ　ＣＨＡＮＧＥ　ＢＵＴＴＥＲＦＬＹ！

！！」

フェアリー「聖なる翼を持せし白銀の神・・・仮面ライダーフェアリー！！！」

フェアリーは次にバタフライゼクターの翅を畳むと右にゼクターの本体を数センチ動かする。すると重厚な鎧が広がっていく。次にそのままバタフライゼクターを１８０度回転させると中心にエネルギーが集まりマスクドホームのゴツく重たい鎧が一気に弾け飛んでいきスマートな女性らしいシルエットになり顔はコバルトブルーの複眼と蝶の翼をイメージした仮面ライダーフェアリーライダーフォームにチェンジする。

真夜「ロモモ、私達も行くよ！！！」

ロモモ「オーケーロモ！！！」

ロモモは煙を発してペンダント形のアイテムへと変化する。真夜は右手で持ち左手の人差し指で弾いた。チリーンと美しい金属音が辺りに発せられるそして次の瞬間真夜は叫んだ。

真夜「プリキュア・セイントリバース！！！」

ペンダントが白く光り出し光が彼女の身体を包むと身体を上昇させた。身体を上昇させていくうちに真夜の背中に妖精のようなシャープで透明な６枚の翅が施される。そして真夜は光のりた真夜は微笑みを浮かべながら舞い踊るようにスキップし始めた。スキップするごとに彼女の身体に大量の白い羽毛が集まると衣装へ変わっていく。二の腕までの袖の純白の服に天女のような肩飾り、花が開くような形に裾が広がったスカート、両腕には天使の翼のような形状をしたリストレット両足にはショートブーツとオーバーニーソックス胸には丈の長いリボンが施され、中央には白いバラがあしらわれた。そして黒い長髪が銀に染まっていき、水色のカチューシャが装着され、さらにその上に短くて薄い透明なベールが覆われた。最後に変身アイテムのペンダントを首に掛けそのまま翅をつかって光のガーデンから舞い降りた。そしてゆっくりと地上に降りていくと翅を閉

じて堂々の仁王立ちをする。
セイバー「全てを希望へ導く救世の光！キュアセイバー！！」
名乗りを上げると彼女の背後が聖なる光で輝いた。

クレイズ「意外に早かったじゃない・・・さあアンタ達のお仲間を助ける事が出来るかしらね？」
クレイズは監視カメラから自室のモニターで彼女達の変身の様子を見ていた。まさにこれこそ最高のシチューエーションでの最高のショーの始まりだと興奮のあまり身体を身震いさせる。今度は絶対にその邪魔をさせない。ムーンライトをダークプリキュアに倒させセセウルトラマンティガで今度こそプリキュアとフェアリーを倒し地球を制圧すると言う野望を叶えるために。

ブロッサム「待っていてください大人さん、琢磨さん、傑さん・・・そしてアンナさん！！！必ず私達が皆さんをお助けします！！！」
マリン「だから・・・死なないでよ。アタシ達が来るまで絶対にね」
サンシャイン「そしてアンナちゃん・・・今度こそ貴女を呪縛から解き放つ。」
ムーンライト「私達プリキュアが影ではなく一人の人間として必ず迎えに行く。だから待ってて！！」
セイバー「皆・・・準備はいいわね？行くわよ！！！」
全員『おうーーー！！！』
ブロッサム、マリン、サンシャインはシプレ達と合体してマントを纏いムーンライトはバラからマントを生みだして纏う。捕らえられた大人、琢磨、傑の３人そしてクレイズに操られているアンナを助け出す為に。全員はフルスピードで廃工場に向かって突進する。必ず失いかけているものを取り戻す為に！！
果たして大人達の運命は？アンナはクレイズの呪縛から解放されるのか？そしてクレイズのニセウルトラマンティガによる地球総攻撃計画を阻止する事は出来るのか！？

第２１話月の影計画編？「救出作戦開始」（後書き）

書き出したら止まらなくなってしまった（汗）。本当はもう少し書きたかったけど量が多くなりそうなので此処で区切ります＾＾；

今日はエイプリルフールですね！！ですが円谷プロさんでのイベントは今回はお休みですね。仕方ありませんね。皆さんも出来る限り節電や買いだめなどは自粛しましょう。

しかし今は辛いかもしれませんが辛い事、悲しい事のあとは必ずいい事、楽しい事が待っていると私は信じています。

さて次回はサロメ全戦基地を舞台とした決戦が始まります。

次回もお楽しみに♪

第２２話月の影計画編？「苦渋の決断」（前書き）

前回までのあらすじ～
サロメの前線基地内では既に大量のニセウルトラマンティガが大量に量産されていた。コレが一斉に起動すれば地球は壊滅的な大ダメージを負ってしまう事になる。スパークレンスもライダーベルトもない大人達にはどうしようもできず収容所に幽閉される。
大人達３人の処刑の時間まであと１４時間・・・つぼみ、えりか、いつき、ゆり、夕、そしてキュアセイバーこと真夜の女性戦士軍団は大人達及びダークプリキュアにされたアンナを助け出すべくサロメの前線基地に突入する

第２２話月の影計画編？「苦渋の決断」

ブロッサム達は迎え来るサロメの兵士達を蹴散らしながら大人達が閉じ込められている場所を探す。見た目ではありえないほどの入り組んだ構造にブロッサム達は戸惑っていた。
ブロッサム「外で見た感じではこんなに広い筈はないのですが・・・」
マリン「一体どーう言う事よ！！」
いくらでもわいてくるサロメ兵士を蹴散らしながらブロッサムとマリンは思わずそう呟く。キリがなく夜まで無駄な時間はない為焦ってしまう。
ムーンライト「恐らく表の廃工場の姿は仮の姿で本来はかなりの広さなのよ。こう入り組んでると探すのに骨が折れそうね」
サンシャイン「どうしよう？このままじゃ３人の処刑の時間に間に合わないよ」
フェアリー「そうね。夜まで後１２時間・・・いつまでも手こずってはいられないわ」
こう広いと大人達がいるはずであろう収容所まで辿り着く前に処刑時間になってしまう可能性も否定できないのだ。既に２時間が経過していているのだがまだまだ奥へと続いていてこのままのペースだと間に合うかは分からない。しばらく進むと二つの別れ道となっていた。この二つの道のうちどちらかに大人達３人そして片方はクレイズがいる指令室に繋がっていると思われる。
セイバー「ここから先は２手に別れましょう！！ブロッサム、マリン、サンシャインは右の道を私とムーンライトとフェアリーは左に行くわ」
ブロッサム「分かりました。皆さん気をつけてくださいね」
マリン「絶対に全員で・・・大人さん達やアンナちゃんを助けて全員で打ち上げやるんだからね」

マリンは笑みを見せるとビシッとグーサインを見せてムーンライト達に声援を送る。必ず全員でここから生還すると約束する。
ムーンライト「勿論よ。そっちも気をつけてね」
代表してムーンライトがブロッサム達に声援を返しそれぞれ道を進んでいく。真っ直ぐの一本道でどこまで進んでも薄暗い。

クレイズ「ふふ♪ブロッサム、マリン、サンシャインのグループとムーンライトフェアリー、セイバーのグループに分かれてまさかそれぞれの大切な相手の元にたどり着く道を選ぶとは・・・コレは運命かしら?」
監視カメラのモニターを指令室から監視していたクレイズはブロッサム達が選んだ道について驚いていた。まさかそれぞれの目的のモノがある場所に自ら向うなんて・・・こんなに面白い事はないと兵士を送り込みながら高みの見物のごとくモニターを指令室で眺めるのだった。

大人「な、何の騒ぎだ?」
琢磨「まさかつぼみ達が此処に?」
傑「恐らく来たんだろうな。・・・・」
大人「くっ!!!・・・・ベルトかスパークレンスがあればこんな鎖なんて・・・」
収容所にもブロッサム達の襲撃の情報が流れていた。大人達は集場所の牢屋に監獄されていて此処からではどうしようもできない・・・・なんとか逃げ出そうにも鎖のせいで動けずに力が入らない。
大人「つぼみ・・・・すまない」
大人は思わず下を向いて哀しげにそう呟いてしまう。自分達が罠にはまったばかりにつぼみ達を危険な目に合わせることとなってしまった。情けなくて悔しくて仕方ない。そんな空気を察した琢磨と傑は悪ふざけをする態度でため息をつくと・・・
琢磨「はぁあ〜あ。ったく情けねぇ!!!ベルトとスパークレンス

取られたらホントに足手まといじゃねぇか！！！・・・・えりかにまた世話を掛けちまうな～えりかがこの状況を見たら『男の子なのに情けないなぁ～』とかいって弄られそうだ」

傑「えりかならそうだろうな。いつきだったら『もう二度とこんな事がない様に明堂院流の武術で鍛え直します！！！』って言って助け出された後いつきの家の武道館に強制連行されそうだな。」

琢磨「そうなったらしばらくは筋肉痛地獄だな」

大人「ふっ・・・ははは！！」

大人は二人の悪ふざけに思わず笑みをこぼして笑ってしまう。その大人を見て琢磨と傑も一緒に笑い一気に場の空気が明るくなった。

傑「・・・やっと元気になったか。いつもの大人に戻ったな♪」

琢磨「つぼみ達を信じよう。絶対に此処まで来てくれるさ！！！」

大人「ああ。ありがとうな・・・二人とも」

大人は元気を取り戻したかのようにそう言う。たしかに罠にはまったのは大きな失態だがいつまでもくよくよしていても何も変わらない・・・ならば今は信じようではないか・・・仲間が助けに来る事を。

ブロッサム「やぁああ！！！はぁああっ！！！」

マリン「だぁあ！！うりゃぁあ！！」

サンシャイン「たぁあああぁあっ！！！やぁあああ！！！」

ブロッサム達は迫りくる敵を薙ぎ払い投げ飛ばし気絶させてどんどん前に進んでいく。だんだん壁の模様が変化していき何処かに繋がっているのが分かる。

ブロッサム「一体どこまで続いているんでしょうか？」

マリン「分かんないよ！！でも絶対にこの先には何かあるよ！！！」

サンシャイン「それにしてもいくら倒してもキリがないわ！！」

敵が現れて3人の技で飛ばされたり気絶したりの繰り返しだが雑魚とは言えいつまでも相手をしている時間はない。急ぎながらもブロッサム達3人は邪魔な敵を排除しながらも着実に進んでいく。

ムーンライト「ふん！！はぁあ！！」
フェアリー「うりゃりゃりゃ！！！たぁあああ！！！！」
セイバー「やぁああ！！！」
一方ムーンライト、フェアリー、セイバーの３人も着実に進んでおり奥へ奥へと突き進んでいく。そして出口らしき光が見えてきた。
全員が出た先は円いシェルターの様な壁がる独特の部屋だった。そうこの部屋はニセウルトラマンティガの格納庫だ。
ムーンライト「この部屋は一体なんなのかしら？」
セイバー「コレは何かを格納するシェルターかしら？」
セイバーは一面を見渡してそう言う。確かに言うとおりであるが３人は見当がつかないのである。
？？？「そのとおり！！！」
ムーンライト・フェアリー・セイバー『！！？？」
声のする方を見てみるとそこにはドクタークレイズ率いるサロメ兵士軍団とダークプリキュアが指令室から見下ろしている姿があった。
ムーンライト「クレイズ！！」
フェアリー「大人達は何処にいるのよ！？」
クレイズ「大人？・・・ああぁ～仮面ライダーカブト達のことね。安心しなさい牢獄に閉じ込めてあるから。今頃はアンタ達の仲間が助け出してる頃じゃない？」
セイバー「じゃあブロッサム達が行った道が彼らが」
フェアリー「あの３人だったら大丈夫ね。降りてきなさいよクレイズ！！アタシ達の大切な仲間のアンナちゃんを返してもらうんだから！！！」
大人達はまだ無事であると分かった以上はもう遠慮はいらないとフェアーはフェアリーレイピアを構えるとそう言う。自分達のする事はアンナを救出する事だと。
クレイズ「慌てないでよ。その前にアンタ達に素晴らしいモノを見せてあげるから」

クレイズが指を鳴らすと部屋の壁が一斉に動き出す。現れたのは大人達にも見せた大量に生産されたニセウルトラマンティガである。
ムーンライト達は数えきれない数に思わず言葉を失ってしまう。
クレイズ「驚いて声も出ないみたいね？。さてでは今からショーの始まりよ！！！！」
フェアリー・セイバー『！！？？』
クレイズがもう一度指を鳴らすと突如セイバーとフェアリーの上にカプセルが落とされて二人は身動きを封じられてしまう。
セイバー「コレは！？」
フェアリー「ど、どういうつもりよ！？」
クレイズ「ショーの観客席よ？無粋な邪魔をされないためにね」
ムーンライト「ショー？・・・まさか貴女！！」
クレイズ「賢いわね？ムーンライト。さぁ行きなさい！！！ダークプリキュア！！！」
ムーンライトは嫌な予感がした。その予感が当たる事になりクレイズの合図と共にクレイズはダークプリキュアを指令室の窓から降りさせる。
ムーンライト「アンナ・・・」
ダークプリキュア「・・・チャン・・・・シテ」
ムーンライト「！？・・・アンナ？」
ダークプリキュア「オネエチャン・・・ワタシヲタオシテ・・・・ハヤク・・・・ワタシヲ」
ダークプリキュアの目からは涙が流れていた。操られながらもアンナの意識はまだ完全には消えていなかったのだ。必死に伝えたい事を姉であるムーンライトに・・・ゆりに伝えて自分を終わらせてもらう為に・・・ムーンライトは一度目を閉じると静かに首を横に振った。
ムーンライト「いいえ私は貴女を倒さないわ。渡した決めたのよ・・・必ずもう一度皆で笑い合うって・・・だから必ず貴女を・・・私の大切な妹を取り戻してみせる！！！」

ダークプリキュア「うぉぉおおぉおおおお！！！！！！」
ゆりの答えは既に出ていた。必ずアンナを取り戻してもう一度今度は姉妹として共に未来を過ごすと。
その為にも私の持つ全ての力をぶつけてアンナの心に届かせて見せる！！！！だから待っていてアンナ！！もう少し・・・もう少しで貴女を取り戻すから・・・もう絶対に貴女だけを苦しませたりはしない・・・私がいつまでもそばにいる！！！
ムーンライトは妹に対する万感の思いを込めて突進する。対するダークプリキュアであるアンナもフルスピードでぶつかる。カプセルに閉じ込められたセイバーとフェアリーそしてクレイズ率いるサロメ軍団を観客として光と影の戦いが再び繰り広げられる！！！

大人「ムーンライト・・・アンナ・・・・」
琢磨「始まっちまったか・・・」
傑「ムーンライト・・・絶対にアンナを助けろよ」
その頃集場所に閉じ込められている大人達にもリアルタイムで二人の戦いの映像が映し出されていた。あそこにいる面子（めんつ）を見る限りではブロッサム、マリン、サンシャインの３人は別行動をとっているらしい。大人達はいま自分達が出来る事をするしかなくムーンライトとアンナが共に助かる事を祈る・・・しばらくすると何やら外が騒がしくなと映像が消えてしまう。
サロメ兵士「き、貴様ら！！！ぐあぁあああ！！！」
何やら兵士の断末魔の様な声が聞こえてくる。そしてしばらくすると扉が破壊される。姿を現した影あは３つであった。間違えるわけがなくその３つの影は・・・・
ブロッサム「大人さん！！！皆さん無事ですか！？」
大人「ブロッサム！！・・マリン！！、サインシャイン！！」
マリン「３人とも大丈夫！？・・・ていうかボロボロね。だらしないよ男の子なのに！！」
琢磨「うるせぇ！！！それよか遅いんだよお前達！！」

サンシャイン「思った以上に中が入り組んでて此処まで来るのに手間取ってしまって」
傑「そうだったか・・・必ず来るって信じてたぜ」
ブロッサム「ホントに無事でよかったですよ!!!」
大人「ちょ、ブロッサム・・・痛いって」
サロメ兵士から奪い取った鍵で鎖を外すとブロッサムは大人に抱きついていく。大人は痛みに耐えながらもブロッサムの頭をなでて落ちつかせる。
マリン「よし3人は助け出したしムーンライト達と合流しよう!!」
大人「そうだ・・・早くしないとアンナちゃんとムーンライトの戦いが始まっちまう!!」
ブロッサム「なんですって!?・・・早く止めないと!!!」
琢磨「ああ。絶対に止めるぞ!!!・・いつつつ」
サンシャイン「大丈夫?無理しない方が」
傑「俺達の事は気にするな・・・大切な仲間を助けるためならこんなの何ともない!!」
大人「傑の言うとりだ!!皆・・・行くぞ!!!」
全員『おう!!!!!』
ブロッサム達は大人達の救出に成功しムーンライト達の戦いを止めるべく来た道を全速力で戻りムーンライト達が通った道に走る。

ムーンライト「はぁあああ!!!!!」
ダークプリキュア「たぁあああ!!!!!」
二人は拳と拳をぶつけ凄まじい激闘を繰り広げていた。形勢は未だに互角で両者とも譲らないのだがムーンライトは極力アンナにダメージを与えないようにしながらどうやって彼女を正気に戻せるかを考える。
ムーンライト「アンナ・・・自分を取り戻して!!貴女は私の影なんかじゃない貴女は貴女ただ一人の人間なの。他の誰でもないただ

一人の人間なのよ！！！」

必死に語りかけるムーンライトの声はアンナに届いているのかは分からない・・・だが僅かにある可能性にかけて必死に語りかける。

ダークプリキュア「・・・・・」

クレイズ「無駄よ！！声はもう届かない・・何故なら彼女はもう完全に心が飲み込まれているんだから」

ムーンライト「そんな事ない！！！アンナはまだ完全に心が飲み込まれていないわ」

クレイズ「随分な自信じゃないの？果たして本当にそうかしら？ダークプリキュアよダークパワーフォルテッシモををムーンライトにぶつけなさい！！！！！！」

全員が息をのむ中クレイズはダークプリキュアに命令する。ダークプリキュアはダークタクトをとりだすのだが・・・

ダークプリキュア「・・・・・て・・・・・げて・・・・・ねちゃん・・・・・お姉ちゃん・・・逃げて」

今度ははっきりと聞こえた。ダークプリキュアの・・・いやアンナの本音が。必死になって姉のムーンライトを守ろうとする叫びがのだった。だが非情にも身体は言う事を聞かずにその間にもタクトはムーンライトに向けられる。

アンナの思いとダークネスリングのパワーが戦い合っているのだ。

ムーンライト「負けないでアンナ！！！・・・貴女の心は絶対にクレイズなんかに負けない・・・だから自分を取り戻して！！！」

ダークプリキュア「あああぁあうぅうぅ！？？？・・・・・ぐぅうぅうぅ・わ、私はダークプリキュアなんかじゃない！！！私はムーンライトの・・・たった一人の妹だぁああ！！！！・・・うぉぉおぉおおおおお！！！！！！！！！！！！！」

必死に訴えかけるムーンライト。姉の訴えを聞きながら必死に戦うアンナ。クレイズの命令に無理やり従わせようとダークネスリングが彼女の身体に稲妻を走らせて強制的にダークフォルテウェイブを発射させようとする。だがアンナの残留意識はムーンライトの意思

に答える様にダークネスリングの強制命令に食らいつく。しばらくするとダークプリキュアはダークタクトを投げ捨てて腕を胸の前に組んでいき力強く振り下ろす。すると大爆発が起こりダークプリキュアの姿からアンナの姿に戻る

ムーンライト「アンナ！！！」

アンナ「お姉ちゃん・・・・あぁあ・・」

フェアリー「ムーンライトのアンナちゃんの思いがダークネスリングのパワーに打ち勝ったんだ！！！」

セイバー「やった！！！」

アンナは力を使い果たしたらしくその場に力なく倒れそうになるのをムーンライトが受けとめる。

クレイズ「えぇえい！！所詮は出来損ないのコピーなのね・・・ダークネスリングオーバードライブ！！！こうなればアンナの精神を完全に破壊してあげるわ！！！」

こんな結末は面白くないとクレイズはダークネスリングのパワーを最大限にまで解放していく。稲妻が彼女の身体に駆け巡りアンナの意識を今度こそ完全に消し去る気だ。

アンナ「あぁあああああぁあああ！？！？？・・・・・ぐ、お、お姉ちゃん・・・わ、私にフォルテッシモを！！！」

ムーンライト「アンナ！！・・・でもそんな事をしたら貴女が・・・貴女のカラダが持つかどうか」

アンナ「お願い・・・これ以上奴の操り人形になるぐらいならお姉ちゃんの手で・・・だから私ごとダークネスリングを！！！」

ムーンライト「（例えダークネスリングを破壊出来てアンナをクレイズの呪縛から解放できたとしても今のアンナの体力がフォルテッシモの衝撃に耐えきれるとは限らない・・・もしも耐えきれなかったらアンナは・・・・）私には・・・出来ないわ！！！また妹の命を危険にさらすことなんて」

例えクレイズがダークネスリングを消し去れたとしてもアンナの今の体力がムーンライトの必殺技のフォルテッシモに耐えきれるかど

うかは分からない・・・もしも耐えきれなかったらアンナはもう二度と・・・ムーンライトは躊躇(ためら)いを捨てきれないその間にもダークネスリングが彼女のカラダを蝕んでいく。

アンナ「は、早く・・・お姉ちゃん・・・あぁあああああああ！！！！！！！私は・・・大丈夫・・・絶対に・・・だから・・・早くフォルテッシモを！！」

アンナは苦しみながらも笑みを見せてムーンライトはコレしか方法がないのなら・・・やるしかないとアンナの顔を見る。その目は覚悟を決めた視線と涙があった。

ムーンライト「アンナ・・・・・くっ！！・・・・・集まれ花のパワー！！。ムーンタクト！！！・・・・プリキュア・フローラルパワーフォルティシモ！！！！」

ムーンタクトを召喚するとムーンライトは花のパワーを集めてそのパワーを身体に光を移し替える。そしてフォルテッシモ記号をした明るい赤紫色のエネルギーを見に纏いそのままアンナに向かって突進していく。周囲には大爆発が起こり爆風が辺りを包みこんでいった。

第２２話月の影計画編？「苦渋の決断」（後書き）

また長くなってしまった（汗）。
ムーンライトとダークプリキュアの戦いを書いていると止まらなくなってしまったのだ・・・
さて世間は新学期や新生活が始まっておりますね～私も大学がもうすぐ始まります。正直不安で堪りませんが頑張って行こうともいます～

さてさて次回はアンナのもう一つの力が開花する！！その名は・・・
・
次回もお楽しみに♪

第２３話月の影計画編？「覚醒！！聖夜の戦士」（前書き）

前回までのあらすじ～
大人達を無事に救出したブロッサム、マリン、サンシャイン。同じころムーンライト、フェアリー、セイバー達はクレイズに大量のニセウルトラマンティガを見せられフェアリーとセイバーはクレイズの罠に落ちてしまう。クレイズはゆりとアンナの戦いを強要し二人は哀しき戦いを繰り広げてしまう。戦いの中ムーンライトの呼びかけに僅かに残っていたアンナの意識がダークネスリングに打ち勝ちアンナは自分を取り戻した。だが再会も束の間でクレイズは今度はアンナの精神を完全に破壊してやろうとダークネスリングを起動させる。
アンナの最後の願いを聞き入れたムーンライトは万感の思いでフォルテウェイブを放つ。

第２３話月の影計画編？「覚醒！！聖夜の戦士」

ダークネスリングが砕ける音「パリーン！！！」
辺りに爆風が発生してきたムーンライトとアンナを包み込んでいる。
ムーンライトのフォルテッシモを受けて両腕についているダークネスリングが砕け散る。それと同時にアンナは力なく後ろに仰向けに倒れてしまう。
ムーンライト「アンナ！！！アンナぁ！！しっかりしなさい・・・・死なないで！！！・・・アンナぁあ！！！」
ムーンライトはアンナに近づき彼女の身体を抱き起して必死に呼びかける。アンナはつぶっていた目を開くと笑顔をムーンライトに返す。今見せられる最高の笑顔を。
アンナ「お姉ちゃん・・・泣いてるの？」
ムーンライト「アンナ・・・・ゴメンなさい！！私がもっと早く貴女の事に気が付いていればこんな事には・・・」
アンナ「何で謝るの？・・・お姉ちゃんは悪くないよ」
アンナはムーンライトの手を握りながら。その手の力は弱い。
ムーンライト「いいえ。結果的に貴女に辛い思いをさせてしまった・・・ゴメンなさい。」
アンナ「いいんだよ・・・私はあの時・・・今度生まれ変わったらお姉ちゃんの妹になりたいと思ってたんだ・・・もしかしたらその思いが届いて私はダークプリキュアから『アンナ』に生まれ変わったのかもしれない・・・」
ムーンライト「アンナ・・・うぅ・・・」
アンナ「泣かないで・・・お姉ちゃん」
ムーンライトは涙が溢れて来た。一度失った妹が今度は自分の事を『お姉ちゃん』と呼んでくれた。あの時はお互いに敵同士だったが今回は違った。アンナは仲間として自分の元に戻ったきた。一度は奪われたが今こうして取り戻した・・・・。もう二度と大切な家族

を奪わせたりはしない。ムーンライトは涙の滴ををアンナの手に零す。アンナは力を振り絞ってムーンライトの頬に手を置く。

アンナ「ありがとう・・・お姉ちゃん・・・・・私・・幸せだったよ・・・最後にお姉ちゃんに会えてよかった・・・あの時の夢がかなったんだもん♪・・・でももう私は限界みたい・・・バイバイ」

ムーンライト「アンナ・・・ダメよ!!死んではダメよ・・・アンナぁ!!!」

アンナ「ありがとう・・・・」

ムーンライトの必死にアンナの手を強く握りしめる・・だがアンナは静かに瞳を閉じて全身の力が抜けていく。それからいくらムーンライトが彼女に呼びかけても彼女の身体を揺さぶってももう二度と彼女には届かなかった。ムーンライトは喪失感のあまりに変身を解いてゆりの姿に戻ってしまう。今度こそは取り戻せると思ったのに・・・その思いから彼女は溢れる涙がボロボロこぼれていく・・・彼女が此処まで涙を流したのはかつての相棒コロンを失った時そして父を失った時だった・・・

ゆり「アンナーーーーーー!!!」

変身を解いたゆりはアンナの顔に涙をこぼして彼女の名前を大声で叫んだ。今度こそは取り戻せると思った家族をまた失った。あの時、必ず取り戻すと誓ったのに・・・なのにこんな非情な結末があっていいのか?という思いが爆発したかのようにゆりは普段なら絶対に見せないほどの涙を流した。セイバーもフェアリーも思わず二人から目をそむけてしまう。自分達は何もできなかった・・・その悔しさと哀しさで手に拳を造って震わせて・・・・。その間もゆりは必死にアンナの名を呼び続けた。そしてしばらくすると自分達が来た道から足音が聞こえてきた。

大人「あ、あれは・・・ゆり、アンナちゃん・・・」

琢磨「間に合わなかった!!・・・・ちくしょう!!!!!」

傑「くっ!!!」

ブロッサム「そ、そんな・・・」
マリン「嘘・・・でしょ!?」
サンシャイン「アンナちゃん」
ブロッサム達が駆けつけて頃にはカプセルに閉じ込められたフェアリーとセイバー、そして横たわったアンナの腕をとり涙を流していたゆりの姿だった。そしてしばらくするとクレイズの高笑いの声が聞こえてきた。全員の敵意の目がその高笑いする狂気の科学者(クレイズ)に向けられた事にすら気がつかないまま。
クレイズ「ははははは・・・少しは面白いショーを見せてもらったわよ・・・しかしダメな子ねダークプリキュアは・・・黙って私の操り人形になればよかったものを・・・」
大人「黙れ・・・・」
クレイズ「あぁあ?」
ブロッサム「どうしてこんな真似を・・・どうしてですか?」
クレイズ「・・・何故?その答えは簡単ね~我がサロメの科学力が全宇宙の頂点に立つためよ」
全員『!!!!』
クレイズ「我々は下等な地球人とは違って科学には純粋なのよ・・・科学で頂点に立つ事がサロメにとっては何よりも優先される事・・・そして我らは貴様らを倒し地球を手に入れてることでその礎を築く・・・そのためだけのした事よ」
琢磨「その為だけにアンナを利用した・・・挙句・・・こんな下らない事をさせたのか?」
マリン「ムーンライトの・・・ゆりさんの思いすら踏みにじって・・・アンタの勝手な野望の為にどれだけ二人が傷ついたと思ってんのよ!!!!」
クレイズ「思い?・・・そんな物のが一体何になると言うのかしら?そんな物を重んじる地球人の思想が私は理解できないわよ?・・・」
傑「そんな勝手な思いあがりの為に・・・アンナが必要だったてい

うのか？」
サンシャイン「認めない・・・そんな思い上がりは決して認めない！！！
クレイズ「ふん・・・なんとでも言いなさいよぉ～？全ては我々サロメの為・・・ん？」
鼻で笑いながら全員を見下ろすクレイズ。しかしそれと同時にフェアリーとセイバーを閉じ込めていたカプセルが砕け散った。フェアリーの青く光る複眼が赤い光を放ちセイバーは双剣を構えている。
クレイズ「・・・あのカプセルを壊すなんて・・・大した力ね？マスクドライダーとプリキュアの力というのは」
まさかあのカプセルを砕くなんて・・・もっとデータが欲しいとクレイズは笑みを見せながら9人を見下ろすのだった。
ゆり「クレイズ！！！！」
フェアリー「アンタだけは・・・絶対に許さない！！！！」
セイバー「・・・本気で貴女を倒す・・・アンナさんの思いを無にしないために！！！」
全員がクレイズを睨む。全員全身が震えていてクレイズを今この基地ごと奴を葬り去りたいと思っている衝動が心を呑みこもうとしていたのだ。普段では決してみる事の出来ない戦士達の怒りの形相が・・・このまま復讐鬼と化してしまうのかと思われたその時・・・
クレイズ「ぐぅ！？・・・な、何？この光は・・・こ、これはあの3人の・・・何故こんな光が！？・・・あぁ！！！待て！！！」
大人「！？（スパークレンスから光が！？）」
全員が驚いたクレイズの身体から白、赤、青の光が放たれたのだ慌てたクレイズは身体を見てみるとその光の正体に驚いた。その正体は大人、琢磨。傑から奪い取ったスパークレスだった。スパークレンスは更にまばゆい光を放ちクレイズものとから離れていく。
ブロッサム「あ、あれは一体？・・・え！？へ、変身が解除された！？」
えりか「な、何で？・・あぁ！！ココロパヒュームの中のプリキュ

アの種が！！」
ゆり「！？・・ムーンライトの種まで・・・どうして？」
傑「（ゆりとアンナの思いに共鳴しているのか？）」
ブロッサム達が3本のスパークレンスに気を取られているとブロッサム達の変身が解除される。そしてココロパヒュームとココロポットからブロッサム、マリン、サンシャイン、ムーンライトの種がスパークレンスと共鳴したかのように宙に浮かぶと静かにアンナの方へと向かう。
つぼみ「プリキュアの種からエネルギーが！？」
えりか「いったい何が起こるっていうの！？」
アンナ身体の上に集まったスパークレンスとプリキュアの種は光を更に強める。そして白、赤、青、ピンク、水色、金色、銀色の光の柱が発生するとそれがアンナの身体を優しく包んでいくかのように降り注がれる。やがて彼女の身体は光の球体に包まれる。
ゆり「沢山の光がアンナの身体の中に・・・光がアンナを包んでいく」
いつき「綺麗・・・・まるで聖夜の光」
光の中にアンナは取り込まれていく。全員が固唾をのむように見守る。

アンナ「此処は・・・・天国？・・・・そうかまた私は消えるんだね・・・闇の存在だった私が消えるのは運命か・・・・でもいいかな・・・お姉ちゃんにも会えたし・・・もう思い残すことなんて何も・・・・ない・・・」
アンナはまばゆい光の中で目が覚めた。見渡すと何もない白い空間でありすぐに連想したのは天国であった。かつての記憶がよみがえってきた。自分はダークプリキュアとして人々の幸せを壊し姉のムーンライトを殺すことで父（サバーク）に認めてもらおうとしていたのだ。だが結局は戦いに敗れた。しかし最後の最後では父（サバーク）に娘として認めてもらった。そして消える寸前に自分が願った事・・・それは姉（ゆり）と家族

になる事だ。本当に短い間だったが自分は姉(ゆり)と家族になれた・・・
もう未練は何もない。このまま全てが終わるのならそれでもう十分だ。アンナはもう一度目を閉じようとした。
???「消えませんよ」
アンナ「え?」
突然声が聞こえてきた。アンナは立ち上がりる。その声は優しくまるで実の子供を励ます親の様な感じだった。アンナは辺りを見回すが何もない。もしかしたら天使の声か?そんな事を思いながらももう一度周りを見回す。すると白い光が自分の上にありそこから声がしたのだ。
???「貴女は消えない・・・貴女はかつては闇の戦士だったでも今の貴女は闇ではありません・・・貴女は自分で光を掴み今まで戦ってきたはずです。思い出してください今までの日々を・・・大切な人と過ごした時間を」
声はそうアンナに言った。アンナは思った。確かに自分は一度は闇の存在として生まれた。だが今の自分は違う。記憶を求めて今まで数多くの場所を旅してきた。そのたびで一番つらかったのは独りだった事だ。だが希望ヶ丘に来てゆり、つぼみ、えりか、いつき、大人、タクマ、傑、夕という大切な仲間に会えた。その日々を思い出すと涙がこぼれてきた。
アンナ「じゃあ私は何処に行くの?・・・・・それとも・・・お姉ちゃんに・・・大切な仲間にもう一度・・会えるの?」
???「貴女の死を望まぬ者が沢山いる限りは」
仲間達の事を思うと急に死ぬのが怖くなってきた。このまま死んでしまいたくない・・・せめてもう一度だけでもいいから会いたい。
アンナのその心中をさっした声の主は優しい声で彼女を励ます
アンナ「私の死を・・・望まない・・・沢山の人?」
アンナは心当たりがあった。自分には沢山の仲間がいる。旅では一人だったがそんな自分にも仲間が出来たんだ・・・・。
お花が好きでいつも自分の事を気にかけていた優しいつぼみ、ムー

ドメーカーでつぼみの大親友にしてファッションセンスは抜群のえりか、武道の達人にして太陽の様な笑顔を持ついつき、料理で皆を喜ばせてくれた大人、無愛想のだけど些細な事に気がついて皆の縁の下の力持ちの琢磨、自分にいろんな知識を教えてくれた傑、姉のゆりの友達で自分を本当の妹の様に可愛がってくれた夕。そして自分の事を取り戻そうとボロボロになりながらも戦ってくれたただ一人の姉のゆり。

???「貴女が望めば・・・もう一度だけ力を取り戻す事が可能ですが・・・どうしますか?」

アンナ「私は・・・もう一度戦いたい・・・・もう一度皆でこの世界を守りたい!!!だからお願い、私にもう一度戦う力を私にください」

???「分かりました。アンナ・・・キュアナイトの種を私の光に向けなさい。もう一度戦いという強い思いを込めて」

アンナ「はい!!(お願い・・・もう一度私に力を!!・・・もう一度お姉ちゃんと・・・皆と闘える力を!!!!!」

アンナは必死に祈りながらキュアナイトに変身する時に使うプリキュアの種を光に掲げた。すると光が集まり心の種に注がれるとアンナの服装も白い光のワンピース調の姿になった。プリキュアの種を見てみると黒い種は白に変わった。

アンナ「コレは・・・つぼみ達と同じ。」

???「それが貴女の新しい力・・・・聖夜の力です。さぁ行きなさい・・・新しい戦士よ!!!」

声の主はそう言うと辺りを物凄く強い光で包んでいった。アンナの意識はだんだん薄れていった。

アンナを包んで光の球体は勢いよく砕き散った。そこから姿を現したのはつぼみ達がプリキュアに変身する段階のワンピース調のものと全く同じであった。

ゆり「アンナ!!」

アンナ「皆の心が私にもう一度だけ戦士として戦うチャンスをくれた。・・・ありがとう」
アンナは笑顔を見せた。その笑顔にゆりだけでなくつぼみ達の心から復讐心が完全に消え去ったのだ。その後プリキュアの種がつぼみ、えりか、いつき、ゆりの４人の手に戻り３本のスパークレンスは光を放ってその場から消える。大人達は上着の胸の方に手を置いてみると胸ポケットにスパークレンスが入っていた。
クレイズ「き、貴様・・・何故生きている!?」
クレイズは驚きが隠せなかった。死んだはずの者が生き返ったとなれば当然だ。そんなクレイズ一度睨みつけるとアンナ「私は簡単に死ねないのよ・・・私はかつて闇の存在だった・・・その過去は消しても消えるものではない・・・でも今の私は違う・・・心を持つものなら誰でも自分自身で光になれる・・・そう仲間が教えてくれた・・・だから私はもう絶対に影にはならない!!!」
アンナの手に白い光が発生するとそこからつぼみ達とはまた違うエンブレムが入った白いココロパヒュームが誕生する。
つぼみ「アレはココロパヒューム!?」
大人「ああ。もうアンナは影（ダークプリキュア）なんかじゃないんだ・・・俺達の思いが届いたんだよ・・・だから・・・（ウルトラマンとプリキュアの力が最高の奇跡を生み出したんだ!!）」
アンナ「クレイズ・・・今から私がそれを証明する。皆が私にくれた心の光の為に!!!」
アンナは新しい心の種をクレイズに見せつけてそう言う。もう二度と人形（マリオネット）などにはならない。大切な仲間と共に戦うという決意を胸に。
アンナ「プリキュア・オープンマイハート!!!」
眩く辺りを照らす白い光を放ちながらアンナは白いプリキュアの種を自分の専用アイテム「ホーリーパヒューム」にセットする。つぼみ達と同じくホーリーパヒュームから白く光る香水を先ずは腕に噴きかける。するとムーンライトを思わせる様に左手に白のロング手

袋、右手にはフリル調のリストバンドが出現する。そしてその後今度は上半身に香水を噴きかける。するとブロッサムとマリンのデザインが元のホワイトカラーのミニスカートワンピースが身に纏われる。胸にはブロッサム、マリン、サンシャインど共通のプリキュアのクリスタルが輝きを放つ。次に髪をなびかせて色は黒髪で大和撫子を思わせるロングヘアーにへと髪型が変わる。次に耳に香水を噴きかけて金色と白でハートのエンブレムがデザインされたイヤリングを両耳に装備し最後に両脚に香水を噴きかけると足首までの長さのショートブーツで脚が包まれる。ホーリーパヒュームをタッチしてココロパフュームキャリーにしまう。

???「・・・コレが私の新しい力・・・・・」

クレイズ「キュアナイトではない・・・・貴様、何者だぁ!?」

???「私はもう月の影ではない・・・そう私の名は・・・聖なる夜に輝く一輪の花!!!」

アンナが変身したその戦士はスーパーシルエットを思わせる様に全身が白一色。ナイトのカラーリングとは対象的であった。

???「キュアホーリーナイト!!!」

ポーズをとりながら新戦士キュアホーリーナイトは純白の光を放ちながら名乗りを上げる。

今ここにウルトラマンとプリキュアの力が融合した新しい光の戦士（プリキュア）であるキュアホーリーナイトが誕生したのだ!!!

第２３話月の影計画編？「覚醒！！聖夜の戦士」（後書き）

とうとう新戦士の誕生です。後日に設定などを発表したいと思います。いやぁ～コスチュームを考えるのが大変だった（汗）。

さて次回は新戦士が大暴れ！！（爆笑）

次回もお楽しみに♪

第２４話月の影計画編？「聖夜の力」（前書き）

前回までのあらすじ～
力尽きたアンナに奇跡は起きた。ティガ、アース、デュナミスの３本のスパークレンスとブロッサム、マリン、サンシャイン、ムーンライトのプリキュアの種の力が融合し奇跡が生まれたのだった。超人とプリキュアの力が融合しアンナを闇の戦士から光の戦士へと移し替えたのだ。そしてアンナは新しい力を解放し聖夜の戦士キュアホーリーナイト」へと進化する。

第２４話月の影計画編？「聖夜の力」

眩く照らす光に全員は目を閉じていた。光が少しずつ小さくなっていくとアンナが変身した姿もだんだんとハッキリ見えるようになってくる。キュアナイトが夜の戦士なら彼女は夜の中でも光を失わない聖夜の戦士とでも言うべきだろう。白い天使を思わせる彼女のあまりの美しい姿に全員が言葉が出ない。

ポプリ「す、凄いでしゅ・・・アレがアンナしゃんの新しい力・・・」

コフレ「ホントですっ・・・でも心の大樹が生み出したものとは違うものかもしれないですっ！！」

つぼみ「それはどういう事なんですか？」

ゆり「私達のプリキュアの力は心の大樹によって生み出される・・・でもアンナが変身したあの姿は・・・プリキュアともう一つの何かが融合したプリキュア・・・ということ？」

シプレ「そうです。物凄いパワーを感じるですぅ！！！」

大人「（その力の正体がティガなんて言えるわけないか）」

いつき「その力の正体ってもしかしたら・・・あの変な神器みたいなものなのかな？」

傑「（いつき鋭いな）」

セイバー「いずれにしても・・・物凄い力を感じるわ・・・まるで邪悪なるものを一気に溶かしてしまうかのように・・・・」

シプレ達は本能的に感じていた。本来は心の大樹に選ばれた人間しか変身できないしパートナーである妖精も誕生するはずだがアンナは妖精などいなかった。つまりは何か別の力がプリキュアと合体して彼女に新しい力を与えたと考えられるのだ。因みにその力の正体に気が付いているのは大人達３人だけである。

クレイズ「キュアホーリーナイト！？・・・ば、バカな・・・こん

な事があるわけが」
クレイズの声が指令室からホールに響き渡った。信じられなかった。
一度は影(ダークプリキュア)として自分の手駒として利用するだけ利用しゴミの様に捨て去った存在が自分の目の前で生き返った上に影の力(ダークプリキュア)ではなくキュアホーリーナイトという光の戦士に生まれ変わった。こんな奇跡など自分の計画(プラン)にはないと怒りに狂った目を見せる。
ホーリーナイト「皆、今度こそ一緒に戦おう。アイツに私達の絆の強さを見せるために！！！」
ゆり「アンナ・・・いいえ。キュアホーリーナイト！！！」
ゆりは夢ではないかと思った。助けられなかった筈の妹が今目の前に生き返った。今度は敵でも他人でもなく姉妹として一緒に戦える。感激のあまりゆりは頬で涙を濡らす。すぐにそれを拭うとゆりはいつもの目に戻る。
クレイズ「一人増えたくらいで私の計画に支障などありはしない！！・・・行けぇ！！グランドランザー、ニセウルトラマンティガタイプP、タイプS」
クレイズはホーリーナイトの誕生という希望を今すぐに破壊してやるとグランドランザーとニセウルトラマンティガのパワータイプとスカイタイプを召喚する。ホーリーナイトはやれやれと言うかのように目を細めた。
ゆり「来たわね・・・皆、いくわよ！！！」
つぼみ・えりか・いつき・セイバー『はい！！！』
フェアリー「ガッテン承知！！！」
ニセティガ2体と5体のグランドランザーの出現にゆり達は前に出る。それに合わせ大人達も前に出るのだが・・・
大人「俺達も・・・うぅ！！」
身体に走る激痛のために思うように動けない。倒れそうになった所をつぼみ達に支えられる。思った以上に傷は深く今すぐに戦う事は出来ないだろう。
フェアリー「アンタ達3人は無理しないで休んでて。その傷じゃ戦

えないっしょ？」
傑「しかし・・・そうだカブトゼクター達は？」
つぼみ「・・・あの子達は重傷を負っていて此処には来られません。だから大人さん達は無理しないで安全な場所に・・・此処は私達が引き受けます！！！」
琢磨「何だって？・・・情けねぇ・・・俺達が不甲斐ないばかりにアイツらにも迷惑かけちまったか・・・」
セイバー「そんな事ありませんよ。だから今は精一杯休んでください」
大人「すまん・・・」
ゼクター達にも重傷を負わせる事になるとは・・・3人はそうなれば今の自分達にはウルトラの力を使う以外に戦う手段はないと言う事になる。だが仕方がない。
折角スパークレンスは戻ったと言うのに・・・そう思う3人だが美味しい所を取るもの野暮だと思い素直につぼみ達の言う事を聞くと大人は立ち上がる。
大人「分かった・・・必ず勝つんだぞ！！！此処は・・・お前達に任せる！！！」
スパークレンスは戻ったがつぼみ達の前でウルトラマンに変身するわけにため大人達は大人しくその場から離れた。だが当然逃げるわけではなかった。
クレイズ「ふん・・・プリキュアとライダーだけで我々の兵器に勝てるつもりかしら？だとしたら舐めれたもんねぇ！！！」
クレイズは指令室からそう嘲笑うがつぼみ達は逆にクレイズに笑みを見せる。その笑みには余裕があった。
セイバー「勝てるつもりよ？私が一度倒したロボットをわざわざ出してるんだから」
フェアリー「サロメの科学というはワンパワーンなの？」
クレイズ「何をぉ！？」
えりか「アタシ達の本気を見せてあげるんだから覚悟しなさい！！

！」
いつき「今の僕達が機械なんかで倒せるなんて思わない事だね」
つぼみ「その通りです！」
ゆり「クレイズ・・・貴女の計画は私達が打ち砕く！！この世界を汚させたりはしない！！！」
つぼみ達４人はそれぞれココロパヒューム、シャイニーパヒューム、ココロポットを取り出すと辺りがピンク、水色、金色、藍色の光に包まれる。
シプレ・コフレ・ポプリ『プリキュアの種いくですっ！！！！！』
つぼみ・えりか・いつき・ゆり『プリキュア・オープンマイハート！！！！』
それぞれ赤、青、黄色、藤色の４つの種をココロパヒューム、シャイニーパヒューム、ココロポットに装填していき４色の光に包まれる。
つぼみ、えりか、いつきの３人はパヒュームで光の香水を浴びてワンピースからプリキュアのコスチュームにチェンジしていきゆりはココロポットの光に包まれると瞬時にコスチュームが変化する。光がやむ頃には４人は戦士の姿へと戻っていた。
ブロッサム「大地に咲く一輪の花キュアブロッサム！！！」
マリン「海風に揺れる一輪の花キュアマリン！！！」
サンシャイン「陽の光浴びる一輪の花キュアサンシャイン！！！」
ムーンライト「月光に冴える一輪の花キュアムーンライト！！！」
４人「ハートキャッチプリキュア！！！！」
４人の変身が完了し７人の戦士がそろう。
シプレ「シプレ達もいくですぅ！！！」
コフレ「合体ですっ！！！！」
ポプリ「行くでしゅぅ！！！！」
クレイズ「ふん！！ワンパターンなのは貴様らだろうがぁ～行け！！我が僕達（しもべ）よ！！！」
クレイズの号令に合わせてグランドランザーとニセティガは一斉に

稼働を始める。シプレ達はそれぞれの相棒達に合体してマントとなる。ムーンライト、ホーリーナイトはエンブレムをタッチしてそれぞれのマントを身に纏う。そして7人の戦士達は一斉に散りニセティガとグランドランザーを惑わす

グランドランザー1・2「ゴォオオン！！！！」
ブロッサム「貴方達の相手は私達です！！！」
マリン「ちょちょいのちょいで片付けてあげるんだからぁ！！！」
グランドランザー1号機、2号機はブロッサムとマリンが引き受ける。巨体な身体でパワーではブロッサム達は不利だが一度戦った相手に負けるわけがない。
グランドランザー1・2「グォオォオオン！！！！」
グランドランザー1号機2号機はは先手必勝とブロッサムとマリンに両腕から発射されるサロメ正特製のギガランチャーミサイルを発射する。だがブロッサムとマリンは巧みな飛びでミサイルを避ける。
ブロッサム「ブロッサム・シャワー！！！」
マリン「マリン・シュート！！！！」
避けきれないミサイルをそれぞれの遠距離型攻撃で破壊していくと辺りが爆風で視界が悪くなる。グランドランザー達はレーダーで必死に二人を探すが何処にもいない。
ブロッサム・マリン『プリキュア・ダブルインパクト！！！！』
二人は二機の背後からブロッサムインパクトとマリンインパクトを合体させたプリキュア・ダブルインパクトで1号機は右腕を2号機は左腕を破壊されてしまう。流石に一度戦った相手に負けるほど2人のコンビネーションは甘くはなかった。

グランドランザー3・4・5『ギジャオオオンン！！！』
サンシャイン「貴方達の相手は私達だ！！！」
フェアリー「一度倒した相手なんかに絶対に負けないわよ！！！」
セイバー「機械人形（ロボット）なんか私達には通用しない！！！」

グランドランザー3号機、4号機、5号機はサンシャイン、フェアリー、セイバーが引き受けた。既にグランドランザーの攻撃は完全に把握している彼女達にとっては赤子の手を捻る様なもの全くもって余裕を崩すことなどないのだった。グランドランザー3号機と4号機は先行して3人に向かってギガキャノンを放つ。コレをまともに食らえばプリキュアとは言えひとたまりもないはずなのだが3人は避けることはなかった。グランドランザーは事後処理を確認するべく近づいてくのだったが・・・・

サンシャイン「この程度なんて朝飯前だよ」

グランドランザー3・4『!!!!!』

爆風ががやむとそこにいたのはサンフラワーイージスで守りを固めていたサンシャインの姿だった。だが残りのフェアリーとセイバーの姿が見当たらない・・・・もしやと思い後ろを振り返ったその瞬間・・・

フェアリー「いつもいつも計算通りに事が進むと思うなよぉぉお!!!!!」

セイバー「機械的処理・・それは時に思わぬ落とし穴があるもよぉ!!!!!」

グランドランザー3・4・5『!!!!???』

セイバーの双剣とフェアリーのフェアリーレイピアでグランドランザーのランチャー部分とレーダー部分を破壊されてしまったのだ。火花を散らしながらも3人を探すのだがレーダーが機能しないとまともな動きが取れないのはロボットの宿命でもあるため動きがぎこちなくなってしまう。それに合わせてサンシャインが飛びあがり得意の武術の技をグランドランザー達の装甲に叩き込んでいきダメージを蓄積させる。

ニセティガP「ハァアッ!!!!!」

ニセティガS「チャァアッ!!!!!

ムーンライト「ティガの偽物・・・正直手強いわよ」

ホーリーナイト「大丈夫だよ。どれだけコピーしてもティガの偽物でしかないんだから・・・行くよ!!お姉ちゃん!!!」
ムーンライト「この姿ではムーンライトと呼びなさい!!!アンナ」
ホーリーナイト「お姉ちゃんも今の私はホーリーナイトだよ?」
ムーンライト「そうだったわね♪」
ニセウルトラマンティガを相手にするをはムーンライトとホーリーナイトの二人だった。最初にニセティガを相手にした時は手も足も出なかったが今はあの時とは違い勇気１００倍だ。だからこそ絶対に負けるわけがないと自信にあふれていた。対するニセティガ達も負けるつもりなど全くないと余裕を見せる。先行してスカイタイプがニセティガフリーザーで二人を固めて一気に勝負を決めようとする・・・のだが。
ホーリーナイト「そんな物は私達には効かないよ!!!ホーリー・ディスエイブルメント!!!」
ホーリーナイトがニセティガは放ったニセティガフリーザーに向かって相手の技を無力化する「ホーリーディスエイブルメント」を放ってティガフリーザーを不発に終わらせたのだ。
ムーンライト「流石ね!!」
ホーリーナイト「まだまだ♪こんなもんじゃないよ」
二人は共に飛びあがりムーンライトとホーリーナイトの拳がニセティガ達の胸に叩き込まれ重厚なボディに傷を負わせる。
クレイズ「ば、バカなぁ・・・私の作り上げた最強兵器が・・・・こんな簡単に・・・何故だぁあ!?」
最初の時とは比べ物にならないほど強くなっている。これほどまでのデータなど今までに見たことなかった・・・一体アイツらを此処まで強くしたのは何なんだ?・・・此処まで自分の計画を邪魔するバグは見た事がない・・・このままでは主人のダークに何を言われるか・・・下手をすれば極刑もあり得る。
???「教えてやろうか?・・・それはアイツらの心が・・・・仲

間を助けたいと言う気持ちが・・・お前には予測できない力を生み出すからだよ!!!」
クレイズ「!?・・・・き、貴様ら・・・貴様らみたいなクズに何が出来る!!!」
琢磨「決まってるだろ・・・お前にやられた分をタップリと清算するんだよ」
傑「今の俺達はライダーには変身できない・・・だがお前を今この場でお前を殴り飛ばす事は出来るんだよ!!」
クレイズ「な、何!?・・・バカめ・・・易々と殴られると思うか!?」
大人「確かにな・・・だけど俺達にはもう一つ力がある事を忘れるなよ!!!」
大人達はスパークレンスを取り出す。今の自分達が持っている最高の力を奴に見せつけるために。
クレイズ「ま、まさか貴様ら」
大人「やっと気がついたか・・・二人とも行くぞぉ!!」
琢磨・傑『おう!!!』
大人達はスパークレスを起動させて光のエネルギーを集めるとそれを胸の前に置いていく。するとスパークレンスは輝くを放ち3人を胸から包んでいくと等身大の姿となったティガ、アース、デュナミスが現れた。
クレイズ「己ぇ!!!貴様らもプリキュアも全て塵(ちり)にしてくれるわぁ!!!!」
ティガ「ハァアア!!!!（やってみな!!その前に貴様にはアンナを利用した罪を償ってもらう!!）」
大人達は逃げてはいなかったのだ。クレイズの指令室を密かに探していたのだ。今の自分達にできる事はコイツを一発飛ばす事だけ。
彼らはいま自分達が出来る精一杯の事をするつもりなのだ。
ブロッサム「はぁあああっ!!!!!!」

マリン「うりゃぁあああああ！！！！！」
片腕を失ったグランドランザーの攻撃をいとも簡単に受け流していくブロッサムとマリン。府達の絶妙なコンビネーションの前にはデータなど全くもって無意味なものであった。
ブロッサム「そろそろ決めますよマリン！！！」
マリン「オッケー！！！」
宙を舞うブロッサムとマリンはフラワータクトを召喚して二人の最強必殺技を叩きこむつもりだ。二人は一度地面に着地する。
ブロッサム・マリン『集まれ二つの花の力よ！！！プリキュア・フローラルパワーフォルテッシモ！！！！』
二人はピンクと青のエネルギーを身に纏うと勢いよく飛びあがり二機のグランドランザーに向かって突進し2機の胸に大きなハート型の大穴をあける。
ブロッサム・マリン『ハートキャッチ！！！！」
二人は二機の後ろでポーズをとると二機は大爆発を起こす。二機は反撃の間もなくブロッサムとマリンんの必殺技を受けることしかできないのだった
ブロッサム・マリン『はぁあああぁあああぁあああぁあああ！！！！！』
二人はフラワータクトのクリスタルドームを回転させて浄化のエネルギーをグランドランザーに送り込むと2機はその場に脚を止めて動かなくなった。
マリン「やったぁあ！！！！」
ブロッサム「私達の勝利です！！！」
二人はガッツポーズを取り勝利を喜ぶ。残りは3体のグランドランザーと2体のニセティガである
サンシャイン「はぁあああああっ！！！！たぁあああああ！！！！」
フェアリー「とりゃぁあああああ！！！！！」
セイバー「はぁあ、やぁあぁあああ、たぁあああああ！！！！」

3体のグランドランザーを相手していたサンシャイン、フェアリー、セイバーの3人は有利に戦いを進めていた。装甲に火花を散らせて既にグランドランザーは満身創痍の状態であり完全に流れを掴んでいたのだ。そろそろ戦いを終わらせるとサンシャインはシャイニータンバリンを召喚すると。

サンシャイン「集まれ花のパワー、シャイニータンバリン!!!」

タンバリンを構えるとサークルをまわしてタンバリンにエネルギーを溜める。するとシャイニータンバリンの中央にヒマワリ模様が光それに合わせてクリスタルにも光がともる。エネルギーがそれに合わせて充填されタンバリンをリズミカル叩いて鳴らしていくと沢山のヒマワリが出現する。

サンシャイン「花よ舞い踊れ!!プリキュア・ゴールドフォルテバースト!!!!」

沢山のヒマワリのエネルギー弾が3体のグランドランザーに放たれて身体にまとわりついて動きを封じられた。

サンシャイン「フェアリー、セイバー後は任せたよ!!!」

フェアリー「サンキュー!!サンシャイン♪」

セイバー「全力で行くわよ!!!鳴らせ、福音の奏をリリィフシンバル!」

バトンを渡されたフェアリーとセイバーはそれぞれの必殺技の準備を開始する。フェアリーはフェアリーレイピアをガンモードに変形させてライダーブローチを合体させ、セイバーは双剣をしまいもう一つの専用武器であるリリィフシンバルを取り出す。グランドランザー達は何とかしてゴールドフォルテバーストの拘束を解こうとしたのだが解けるわけがない。

フェアリー「ライダーバースト!!!」

電子音「ＲＩＤＥＲ　ＢＵＲＳＴ」

セイバー「プリキュア!スターライトチャージ・クラアアアッッシュ!!」

フェアリーの最強破壊光線のライダーバーストとセイバーの必殺技

のスターライトチャージクラッシュが合わさり3体のグランドランザーに降り注がれると爆発もせずに跡形もなく蒸発するかのように完全に消滅したのだった。
残るはニセウルトラマンティガ2体だけとなった。

ムーンライト「はぁあああぁあああっ！！！！！」
ホーリーナイト「たぁあああああっ！！！！！」
ティガの力をコピーしたニセティガの能力をムーンライトのムーンライトリフレクションとホーリーナイトのホーリーディスエイブルメントを活用してニセティガの強大なパワーをやり過ごし近距離での格闘技で装甲にダメージを与えていく。
ニセティガP「グゥウウ！！！！」
ニセティガS「ハァアア！！！！」
的が小さく中々攻撃が当たらない為にエネルギーが消耗していく2体のニセティガ。データにはない力に適確な反撃方法が思いつかない。2体は自爆覚悟でそれぞれの必殺技の準備を開始する。
ムーンライト「向こうは全力で来るみたいね・・・・ホーリーナイト！！」
ホーリーナイト「うん。私達も本気で迎え撃つのみ！！！」
二人は笑顔を見せあいながら頷くとニセティガ達の方を向く。
ムーンライト「集まれ花のパワー、ムーンタクト！！！！！」
ホーリーナイト「集まれ花のパワー、ホーリーロッド！！！！」
二人はそれぞれの専用武器を取り出す。ホリーナイトの専用武器ホーリーロッドとは形状こそブロッサム、マリン、ムーンライトのフラワータクトと差異はほとんど見られないのだが一番の違いはクリスタルドームがない事である。
ムーンライト「花よ輝け！！プリキュア・シルバーフォルテウェイブ！！！！！」
ムーンライトの単独での必殺技である銀色の花の形をした光弾のフォルテウェイブを発射する。

ホリーナイト「花よ轟け(とどろ)!!プリキュア・ホーリーフォルテストーム!!!!」
次にホーリーナイトのホーリーロッドに白い光のエネルギーを溜めると先端のクリスタルが輝くを強めるそして勢いよくニセティガ達にホーリーロッドを向けると白い光の衝撃波が放たれる。
ニセティガP・S『ウォォオォォオオオオ!!!!!!!!』
2体のニセティガ達にフォルテウェイブとフォルテストームが直撃すると光を放って粒子状に変化して消滅していった。

クレイズ「ば、バカなぁ!!!!!」
ティガ「フン!!!!(さぁクレイズ年貢の納め時だ!!!!)」
アース「ハァア!!!!(覚悟しろ!!)」
デュナミス「シャァ!!(貴様の悪事も此処までだ・・・諦めて降伏しろ!!!!)」
3人のウルトラマンと格闘戦を繰り広げていたクレイズ。モニターを見てみるをグランドランザーとニセティガを攻略された事に戸惑いを隠せなかった。
クレイズ「くっ!!!!・・・こうなれば私が自ら!!!!」
ティガ「(待てぇ!!!!)」
アース「(逃がさねぇぞ)」
クレイズは隙を見てティガ達から逃亡する。ティガ達はすぐにクレイズの後を追う。そして追う事数分。
ティガ「(此処は・・・何かの格納施設か?)」
アース「(ったく・・・この工場はどんだけ広いんだか・・・物理の法則無視してないか?)」
デュナミス「(ああ。・・・!!・・おい!!!!アレは)」
ティガ・アース『!!!!』
ティガ達が見たのは体長50メートル以上はあると思われる巨大な戦闘ロボだった。
クレイズ「こうなればこの戦闘兵器クィーンエメラルダスで地球を

無差別に破壊してくれるわぁ！！！指導せよ！！！！クイーンエメラルダス！！！」

ティガ「（コイツまだこんな隠し玉を）」

アース「（ヤバイ・・・崩れるぞ！！！！）」

デュナミス「（・・・全員脱出だぁ！！！）」

クレイズはとんでもない隠し玉を隠していたのだった。クレイズが乗り込んだロボが起動するとサロメ前線基地が崩壊を始める。

遂に始まるクレイズとプリキュア、ウルトラマン、ライダーとの最終決戦。果たして勝利の女神が見方をするのは・・・・・勝つのは正義か？悪か？野望か？希望か？

第２４話月の影計画編？「聖夜の力」（後書き）

長くなったなぁ～＾＾；明日から私も大学の授業が始まります。なので更新は遅くなるかもしれません。

さて次回は月の影編も終盤です！！！

次回もお楽しみに♪

第２５話月の影計画編？「奇跡の光」（前書き）

前回までの洗う字
ブロッサム達ハートキャッチメンバー、救世の戦士キュアセイバー、白銀の仮面戦士フェアリーの前にグランドランザーとニセティガは敗れ去り追いつめられたクレイズは自らが出撃するとティガ達から逃亡。
その後彼女はサロメの最終兵器の「クイーンエメラルダス」を始動させて自らがパイロットとなり乗り込んだ。
崩れ去るサロメ前線基地を一行は脱出するのだった。

第２５話月の影計画編？「奇跡の光」

ブロッサム「な、何ですか！？ものすごい揺れです！！！！」
マリン「じ、地震！？」
ブロッサム「えぇえ！？」
サンシャイン「いえコレは地震じゃない・・・・この建物が崩れ始めてるんだよ！！！」
辺りは急に揺れ始めると基地の壁にも亀裂が走る。マリンの言葉にブロッサムはかなり驚いた表情になっているが他の面々はこの揺れが地震にしては不自然な揺れ方である事に気が付きサンシャインが二人を落ちつかせる。
ムーンライト「とにかくここを出ましょう。早くしないと私たち自身も危ないわ！！！」
フェアリー「ムーンライトに異議なし！！！！。早くここと出よう！！！」
全員は崩れ去る前線基地を命辛々脱出を開始する。そして数分後にはブロッサム達一行はサロメの前線基地の外にへと出る。時刻は夕がたになっていて夕日が空を赤く染めていた。
ブロッサム「大人さん達は・・・無事に脱出できたでしょうか・・・・」
マリン「・・・大丈夫だよ。あの３人は先に逃げてるよ。・・・絶対に」
ブロッサムは崩れ去るサロメ基地を眺めながら先に脱出したと思われる大人達の事が気がかりだった。
負傷してなお且つ丸腰の彼らは無事に脱出出来ているのかが不安なのは無理がない。マリンはブロッサムの心中を察して彼女を励ます。
そしてしばらくするとサロメ基地は完全に崩れ去り廃工場の身形だったそれは原形をとどめてはいなかった・・・
ホーリーナイト「・・・・クレイズ。お前の野望はコレで無となっ

た。愚かなる科学者よ」
ホーリーナイトは崩れ落ちたそれを眺めながら静かにそう言った。
コレだけの力をなぜこんな虚しい事にしか使えないのか・・・・自分の様に道を踏み外してもゼロからリスタートできればこんな事にはならなかったのに・・・・。そう思って目を閉じていたその時・・・。
爆発音「ドゴォォオォォオオオオオン！！！！！！！！！！」
全員『！！！！！』
爆発音と共に地面からガンメタルの機械色をした鋼鉄の機械兵士（マシンロボ）が姿を現した。
クレイズ「プリキュアぁあああああ！！！！！まだだぁああ！！！まだ終わっていないぞぉ！！！！！！！！！！」
クレイズの声が辺りに響いた。ブロッサム達はてっきり奴は基地ごと自分達を道連れにしていたと思っていたので奴の執念とも呼べるものに驚きが隠せない。
マリン「アイツまだ生きてたの？」
セイバー「なんて奴！！！」
クレイズ「貴様らぁ生きては返さんぞぉ！！！！・・・今すぐ消えろぉぉ！！！！！」
クイーンエメラルダスの右腕から光弾を6人に向かって放たれる。
サンシャイン「サンフラワーイージス！！！！！」
慌ててサンシャインがサンフラワーイージスで光弾を防ぐのだが何発も何発も打たれると亀裂が走りあっという間に追いつめられる。
サンシャイン「も、もたない・・・・・」
フェリー「頑張ってサンシャイン！！」
クレイズ「コレで終わりだぁああ！！！！！！！」
全員『うわぁあああああぁあああああ！！！！！！！』
全員が力を合わせて彼女を支えるがその健闘もむなしくイージスの罅は大きくなり遂には砕け散ってしまう。全員に光弾の雨が降り注がれて大爆発を起こした。

クレイズ「はん・・・所詮はこの程度だったか・・・・・ったく計画の練り直しじゃないの・・・・早く成果を出さなければダーク様に・・・・ん?」

さんざん手こずらせてくれたなとクレイズはため息をもらしながらも次の作戦(プラン)を考えなければならないと考え始めていたのだったが何か様子がおかしかった・・・爆風がやむと何か大きな影が何かの前に覆いかぶさっていた。

クレイズ「な、何ぃ!?」

その正体は巨大化したティガ、アース、デュナミスであった。3人はブロッサム達に光弾が当たる前にギリギリ自分達の身体を盾にして彼女達を守ったのだ。ブロッサム達プリキュアは飛びあがりクレイズに自分達は無傷であるという事を見せつけるかのように堂々としていた。

ブロッサム「3人ともありがとうございます。残念でしたねクレイズ。私達はこの通りピンピンしてますよ!!!」

ホーリーナイト「誰の力がこの程度だって?」

クレイズ「おのれぇ!!!!・・・貴様ら全員叩き潰してくれるわぁああ!!!!!!!」

なぜ此処までコイツらは自分達の障害となるのかが分からない。何がコイツらに此処までの力を与えるのだ?自分の計画は完璧だったはずだ・・・だがキュアホーリーナイトの誕生によって全ては水泡のごとく崩れ去って行った。こんな事今までなかった・・・こうなればバグすべて排除するとクレイズはリミッターが外れて吹っ切れたかのようにそう言うと全力で叩き潰すとブロッサム達に向かう。

ホーリーナイト「今度こそお前と決着をつける。皆行くよ!!!!!」

ブロッサム・マリン・サンシャインムーンライト・セイバー『うん!!!!』

フェアリー「オッケー!!!!」

ティガ・アース・デュナミス『ハァアッ!!!!!!!』

対するブロッサム達飛び上がる。今度こそ狂科学者（クレイズ）との因縁と決着をつけるために。

ブロッサム「行きます！！！ブロッサムインパクト！！！！！」
マリン「続いてマリンダイブ！！！！！」
一番最初に攻撃を始めたのはブロッサム・マリンのペアであった。
クイーンエメラルダスの同体部分にブロッサムインパクト更に追撃にマリンが飛びあがるとそのまま急降下して頭に向かって強烈な飛び蹴りを放つ。
クレイズ「ぐぅ！？・・・この程度など全然効かんぞ！！！！喰らえぇえ！！」
だがこの程度では硬い装甲には傷一つ付かずクレイズは反撃のレーザーショットを胸から放っていく。近くにマリンがその餌食となりそうだったが・・・。
アース「ハァアアっ！！！！！」
当たる直前にアースが炎の腕でレーザーを受け止めて相殺させる。
クレイズ「ちっ！！！！！」
マリン「サンキュー、アース！！」
マリンはアースに礼を言いそのまま舞いあがりクレイズを翻弄するように飛び上がる。プリキュアとウルトラマンのコンビネーションはクレイズのデータを完全に上回っている。

サンシャイン「やぁあああ！！！！はぁあああっ！！！！！！！」
フェアリー「ライダーストライク！！！」
電子音「ＲＩＤＥＲ　ＳＴＲＩＫＥ」
続いてサンシャインの格闘技がクイーンエメラルダスに放たれるとバランスを崩して倒される。その隙にフェアリーの必殺技のライダーストライクがクイーンエメラルダスの腕に放たれる。
クレイズ「いつまでも調子に乗るんじゃねぇ～～～～！！！！！！」

クレイズはすぐに立ち上がるとフェアリーとサンシャインを掴みあげる。
サンシャイン「し、しまったぁ！！！」
フェアリー「は、離しなさいよ！！！」
クレイズ「このまま握り潰してくれるわぁああ！！！」
腕力を込める腕。このままでは二人は潰されてしまう・・・だがティガ「ハァアア！！！」
デュナミス「デヤァアアアア！！！！！」
その前にティガのティガスライサーとデュナミスのデュナミスセイバーがクイーンエメラルダスの腕を切り裂いて二人を脱出させる。
クレイズ「またしてもぉ！！！！」
サンシャイン「ありがとうティガ、デュナミス！！！」
フェアリー「感謝するよ♪」
解放された2人は二人にそう言って飛び上がる。
ホーリーナイト「たぁあああぁあああああっ！！！！！！！！」
ムーンライト「はぁあああああああああぁっ！！！！！！！！」
続いてムーンライトとホーリーナイトの姉妹ペアがクイーンエメラルダスの同体に同時に強烈なキックを叩きこんでやるとモニターに向かって勝ち誇った笑みを見せつけながらそのまま回し蹴りを叩きこんでやる。
セイバー「やぁあああああああああ！！！！！」
最後にセイバーが双剣でクイーンエメラルダスの身体をメッタ斬りにしてやる。何度も何度も斬りつけられて次第に火花を散らしながらその場に倒れる。

クレイズ「な、何故なんだ！？何故勝てない・・・どうして・・・・こんな事など計画にはなかったはず・・・」
もう戦う力などは完全に残っていないクレイズが操るクイーンエメラルダス。もう立ち上がるのも困難でありもう少しで爆散してしまうかもしれない。データは完全に抑えた筈なのに・・・どうして

？・・・そんな彼女の心中を察したブロッサムが口を開く。
ブロッサム「分かりませんか？・・・・貴女がどうして私達に勝てないか。今の貴女には私達とは決定的な差があります。それが貴女の敗因です」
クレイズ「何だと？・・・・・この私に足りないものだと？」
この自分に足りないものがあるだと？そんな事信じられなかった。
自分には科学という万能なツールがある。今までの作戦だってコレで全て自分の思い通りになってきたと言うのに・・・こんな事信じられるものか・・・・
ホーリーナイト「信じられないようね？・・・・でもあるのよ・・私達と貴女の決定的な違いが・・・それは・・・信じ合える仲間がいる事」
クレイズ「仲間？」
ホーリーナイト「クレイズ。私は一度貴女に操られダークプリキュアとして・・・ムーンライトと・・・お姉ちゃんやつぼみ達という大切な仲間と敵になった・・・あの時私は貴女に無理やり戦う事を強いられた。私はもうダメだと思った。記憶が戻って折角・・・お姉ちゃんの事を思いだせたのにって思った・・・・」
彼女はダークネスリングによって操られた時の事を語る。あの時自分の意識は何処かに眠っていた。暗く冷たい世界を彷徨った。そして微かに見えたのはムーンライト達と戦う自分の姿だったのだ。もうダメだと思った。全てが取り返しがつかないものだと思っていた・・・
ホーリーナイト「でも・・・お姉ちゃんの声が私を導いてくれた。そして光に包まれたあの時・・・私は知ったのよ。元々はムーンライトを殺すために生まれてき私だけど今は大切な仲間がいる。その仲間が私を助けてくれる。・・その仲間がいる限りどんな絶望の中でも絆という光を消し去ることなんて誰にも消し去れないという事を私は知ったんだ。・・・・・クレイズ、だから私達は貴女には絶対に負けない！！！。私達プリキュア、大人さんや琢磨さん、傑さ

ん、夕さんが変身する仮面ライダー、そしてティガ、アース、デュナミスという3人のウルトラマンは絶対にこの世界の人々の笑顔を・・・人々の心の光を壊させたりはしない!!!!!」

あの光はとても暖かく自分を包んでくれた・・・その光は仲間達の絆で生まれた大切なもの。だから自分に奇跡は起きた。今なら胸を張って言える。自分はもう影なんかじゃない。一人の人間でありつぼみ達の大切な仲間であると言う事を!!!!

クレイズ「ふふ・・・ふふふはははははははははははは!!!!!!!・・・・もぉ〜ういい。分かったよ・・・・なら貴様ら仲良く・・・この星ごと消え去るがいいぃ!!!!!!!!」

クレイズは吹っ切れた様に声を上げると無理やりクイーンエメラルダスを立たせると胸の装甲が開いていく。そこから巨大な砲身が出現してきた。

マリン「な、何をするつもりよ!?」

クレイズ「この機体クイーンエメラルダスが持つ最強にして最後の攻撃である「ハイパーデストリヤー」をお前達にぶち込んでやろうっていう事だよ・・・そんなにお仲間と一緒にいたいのならまとめて葬り去ってやるよぉ!!!!!言っておくがコイツはティガのゼペリオン光線の20倍の破壊力だ!!!!止めれるものなら止めてみやがれぇ!!!!!!!」

クレイズは完全に血迷った。そんなに仲間とやらの力が強大なものであるならこの自分の攻撃を止めてみろと言うのだ。このままではブロッサム達ごと地球が全滅してしまう。

ティガ「・・・フン!!!!」

ブロッサム「ティガ・・・・まさか・・・」

ティガは前に出てブロッサム達を見つめる。ブロッサム達は彼が言いたい事伝わったのか不安そうな声を上げた。

ムーンライト「クレイズを・・・止めたいのね」

ムーンライトはティガが考えているであろうことを言った。ティガ

はそうであると言う様に静かにうなずいた。
セイバー「でもどうすれば・・・」
ホーリーナイト「皆の必殺技を合体させればギリギリ何とかなりかもしれない。迷っていてもしょうがないよ。こうなったら私達の力に全てをかけよう!!!!!」
ブロッサム「やりましょう!!!私達の力の凄さを見せるときです!!!!」
セイバーの言葉にホーリーナイトがそう提案した。全員の必殺技をフルパワーでぶつければクレイズの技を退ける事が出来るかもしれない。でも失敗すれば・・・・1度しか無いこの方法に全てを託す。その提案に最初に賛同したのはブロッサムだった。ブロッサムは手を伸ばす。
マリン「しょーがないね・・・・クレイズに見せてやろうじゃん・・・アタシ達の本気を!!!!」
サンシャイン「皆の笑顔を・・・守るために!!!!」
セイバー「此処まで来たらもう引けないよね!!!!」
フェアリー「こうなったら全力でぶつかるしかないっしょ!!!!」
続いてマリン、サンシャイン、セイバー、フェアリーがそう言ってブロッサムの手の上に自分の手を重ねた。そして最後にため息をついてムーンライトが手を出した。
ムーンライト「失敗は許されないわ・・・皆、絶対に1秒たりとも手を抜いちゃだめよ?」
ホーリーナイト「勿論!!!!」
そのすぐ後に全員の手の一番上にホーリーナイトが手をのせた。全員の顔は笑顔であり不思議と緊張感や恐怖はなかったのだった。
ティガ・アース・デュナミス『ハァアア!!!!!』
そして最後にブロッサム達に向かってティガ、アース、デュナミスの3人が拳を向けた。全員の意思は一つになりそれぞれ離れるとクイーンエメラルダスの前を向いた。
クレイズ「あぁあ?死ぬ覚悟でも出来たのか?」

ホーリーナイト「違う・・・私達は・・・貴女を止める！！！」
クレイズ「何だと？」
ホーリーナイトの言葉を合図に全員が必殺技の準備に入った。
ティガ「ハッ！！！・・・フーーーーーーーーン！！！！！！」
アース「シャァ！！・・・ハァアアーーーーーーーー！！！！」
デュナミス「フッ！！・・ダァアアアーーーーーーーッ！！！」
ブロッサム・マリン・サンシャイン・ムーンライト・ホーリーナイト『集まれ花のパワー！！！』
ブロッサム「ブロッサムタクト！！！」
マリン「マリンタクト！！！」
サンシャイン「シャイニータンバリン！！！」
ムーンライト「ムーンタクト！！！」
ホーリーナイト「ホーリーロッド！！！」
フェアリー「フェアリーレイピア・ファイナルモード！！！」
セイバー「「鳴らせ、福音の奏をリリィフシンバル！！！！」」
ティガ、アース、デュナミスの3人は光を集めて必殺光線の準備体制をブロッサム、マリン、サンシャイン、ムーンライト、ホーリーナイト、フェアリーセイバーの7人はそれぞれの専用アイテムを取り出す。タクト、タンバリン、ロッド、レイピア、シンバルのそれぞれに光が集まりフルパワーのエネルギーがチャージされる。これを同時に放って融合されればクレイズのハイパーデストロイヤーを超えれると信じて
クレイズ「今更、足掻いても無駄だぁああ！！！！喰らえハイパーデストリヤぁぁああ！！！」
クレイズの砲身から大規模なエネルギー波が発射された。その威力はクレイズが言うと通りティガのゼペリオン光線をはるかに凌ぐ強大な破壊力であろうと推測されるほどの超エネルギー波であった。
コレをまともに受けたら一たまりもない。
ティガ「ハァアアアアッ！！！！！！」

アース「デヤァアアアアァッ！！！！」
デュナミス「タァアアアアァ！！！！！」
ブロッサム「花よ輝けプリキュア・ピンクフォルテウェイブ！！！」
マリン「花よ煌けプリキュア・ブルーフォルテウェイブ！！！」
サンシャイン「花よ舞い踊れプリキュア・ゴールドフェルテバースト！！！！」
ムーンライト「花よ輝けプリキュア・シルバーフェルテウェイブ！！！」
ホーリーナイト「花よ轟けプリキュアホーリー・フォルテストーム！！！！
フェアリー「ライダーバースト！！！」
電子音「ＲＩＤＥＲ　ＢＵＲＳＴ」
セイバー「プリキュア・スターライトチャージ・クラッシュ！！！！！」
それを迎え撃つべくティガのゼペリオン光線、アースのボルテックストーム、デュナミスのインブレイスバースト、ブロッサム達のフェルテウェイブ、フェアリーのライダーバース、セイバーのスターライトチャージクラッシュが合体した黄金の光線がクレイズのハイパーデストリヤーとぶつかり合い押し合う。威力は全くの互角でありどちらかが油断すれば勝負は決してしまうだろう。

ブロッサム「皆の夢を、希望を壊させたりしません！！！
マリン「今までどんな困難もアタシ達は力を合わせて乗り越えてきた・・・だから今だって！！！」
サンシャイン「絶対にあきらめない・・・私達には譲れない大切なものがあるから！！！」
ムーンライト「その大切なものを守るためなら私達はどんな事でも出来る！！！！」
フェアリー「大切な誰かの為に大切なモノのために頑張れる・・・それが無限の力を生み出す！！！！」

セイバー「例えどんなに辛く苦しくても仲間と一緒に乗り越えられるそれが私達の絆よ！！！」
ホーリーナイト「絶対に皆の大切な世界を壊させるものかぁあああああ！！！！！」
ティガ・アース・デュナミス『ハァアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！！』
全員の意思が一つになるとき全員のカラダが光り出す。全員の技の勢いが増していきクイーンエメラルダスのハイパーデストロイヤーを押し戻していく。
クレイズ「な、何ぃ！？」
最強破壊光線であるはずの自分の光線が押し戻されていくとクレイズは焦りが隠せない。必死に押し返すがフルパワーを出してもブロッサム達の光線の勢いが止まらない。そしてとうとう光線を押しのけてクイーンエメラルダスに光線が叩き込まれる。
クレイズ「ぐぁあああぁぁあああぁぁあああああああ！！！！！？？？？？？？？・・・・私も此処までか・・・だが我がサロメは決して諦めない・・・我がサロメの探究心は科学と共にありぃぃぃぃぃ！！！！！！！！」
クレイズは最後にソレだけ言い残すとクイーンエメラルダスと共に消滅した。

ブロッサム「はぁ、はぁ、はぁ・・・・・や、やりました！！！！！」
マリン「か、勝った・・・勝ったんだね！！！！」
サンシャイン「やった・・・・やったんだよ・・・・私達」
フェアリー「今度こそクレイズをやっつけた！！！！」
セイバー「うん！！！！」
ムーンライト「ええ。」
ホーリーナイト「でも・・・疲れたぁ～」
ブロッサム達は膝をついて脱力してしまう。その数秒後に変身が解

除される。自分の限界を超えた疲労感は凄まじいものでありしばらくは動けなそうにない。
ティガ・アース・デュナミス『シュワァアア！！！！！』
ティガ達もカラータイマーの点滅が激しくなっていた。ブロッサム達と同じく彼らも限界を超えたのだ。最後にグーサインを送り空を見上げるとその場から飛び上がり夕暮れの空に消えていった。

つぼみ「ありがとう・・・ティガ、アース、デュナミス。助かりました」
えりか「はぁ～今回は物凄い大バトルだったよね。そしてなによりホーリーナイトの誕生！！！いろんな事があった」
いつき「だね。・・・でもアンナさんのことを助ける事が出来て良かった」
つぼみ達は地面に寝っ転がり星が見える空を見上げていた。今回の戦いは物凄いものだった。だが一番のニュースはアンナがホーリーナイトとして蘇った事だろう。
アンナ「皆・・・本当にありがとう。皆のお陰で私は記憶を・・・うんうん・・・改めて皆の仲間になる事が出来たんだもん。こんなに幸せな事はないよ」
アンナは本当に感謝でいっぱいだった。自分がダークプリキュアであったとしてもつぼみ達は彼女を受け入れてくれた。今の彼女にとってそれほどの幸せはないだろう。
大人「お～い！！！！」
つぼみ達が空を見上げている時に大人達の声が聞こえた来た。彼らもつぼみ達と同じぐらいボロボロだ。
つぼみ「大人さん・・・無事に逃げれたんですね」
琢磨「当り前だよ。まだまだ死ぬわけにはいかんよ」
えりか「ホントだよ。アタシとの約束を守る前に死んでもらったら困ります！！！」
琢磨「・・・えりか。ああ当然だ」

えりかの言葉に琢磨は顔が赤くなりながらそう言う。その様にその場にいた全員はニヤリとなると・・・
つぼみ「えりか～約束って何なんですか？」
えりか「え？・・・いやぁ・・・それはぁ～」
大人「もしかしてお前達・・・」
琢磨「な、何言ってんだよ！？」
傑「（この二人・・・バレバレだな）」
普段弄られている分を返すようにつぼみがえりかを大人が琢磨を弄るようにからかう。そんなやり取りが続く事２０分後。
大人「さてと・・・丁度いい時間だし俺の家で飯でも食ってくか？」
全員『賛成！！！！！』
大人達は満身創痍の身体に鞭を打ちながらも戦いの打ち上げをしようとサロメ前線基地跡地を後にするのだった。今回の戦いは様々な事があった。しかし一つだけ言える事がある。姉の思いと仲間の絆は時に想わぬ奇跡を生みそれは闇の存在を光に変える事が出来るほど強大なモノになると言う事を・・・アンナが聖夜の光を手に入れた様に。

第２５話月の影計画編？「奇跡の光」（後書き）

さて月の影計画編はコレにて終了です！！！！長らく見ていただいた方ありがとうございました。次回からは暫しネタ考案と「カブト×ハトプリ」を優先させようと思うので更新がしばらく遅れてしまうかもしれませんがご了承ください。

第２６話「それぞれの休日」（前書き）

今回は気分転換にほのぼのデート＆日常回です。

先に言っておきます。今回はキャラ崩壊が凄まじくなっています

・・・・・・・・ごめんなさい！！！！！！！！！！！

ていうかすみません

第２６話「それぞれの休日」

クレイズの激しい激闘を終わらせてから一カ月が経とうとしていた。
あの激闘の後からは怪獣も宇宙人も現れず大人達は久々の平和をのびのびと過ごしていた。
大人「今日は久々につぼみとデート・・・・結局アレ以来まともに時間がなかったからデートどころじゃなかったんだよな・・・その分、今日はタップリ楽しむぞ！！！」
日曜日の朝・・・大人は自宅の自室で私服に着替えていた。今日の私服はベージュ色で両サイドにポケケットがついたコットンパンツ、フードがついたタートルネックパーカーの上にブラウンのジャケットというかなりラフなスタイルである。実は今日は久々につぼみとデートすることとなったのだ。
大人「さてとそろそろ時間だな。忘れ物は無し。・・・おっとそうだ・・万が一の時の為にコイツも持っていくか」
大人は自室の戸締りを確認し財布、携帯電話、カブトエクステンダーの鍵をバックに入れる。そして一番忘れてはならないスパークレンスをジャケットの胸ポケットにしまうと自宅を後にしてカブトエクステンダーでつぼみとの待ち合わせの場所に向かう。

琢磨「こんなもんか？・・・う～んデートなんぞした事ないからどういう服装にすればいいかわからんな（汗）・・・まあいつもどうりでもいいか？・・・ていうかデートと言うのかな？今からの行動は・・どっちかていうと荷物持ちの予感がするんだけど」
全く同じころに琢磨は自分の服で悩んでいた。というのもえりかにファッション部で使う服の材料やアクセの材料、リボンなどを一緒に買いに行かないかと誘われたのだ。琢磨はどうせ日曜は特にする事もないので軽く誘いを受けたのだがいざ考えてみると二人っきりという事はデートの誘いなのではという事に２日前に気がついたの

だ。
琢磨「店の人に勧められた物を買ってみたんだけどこう言うのってどうなんだろうな？・・・よし今日えりかに聞いてみるか。よし早く行かないと」
急いでいつもとは違う服を買ったりしたのだが正直なところ琢磨は彼女が欲しいという願望はあるが肝心なそれの為の経験は今まで皆無に等しいのだった。まあ今日は恐らく荷物持ちかもしれないからそんなに気張る必要もないと自分に言い聞かせて琢磨は荷支度を済ませて家を出る。

傑「何で毎週の日曜に俺はいつきと武術稽古せにゃならんだの！？・・・コレで一カ月だぞ・・・・ったくよぉ～（汗）」
傑は自室で独り言をぼやいていた。クレイズに捕まってから自分を鍛え直すと言う名目で傑は毎週日曜日はいつきと二人でトレーニングする羽目になっているのだ。傑は武道系の運動は苦手な方であり普段の戦いはダークカブトのスペックで切り抜けている部分があるので生身の肉弾戦はかなり弱いのだ。そんな傑を見かねたいつきは傑を強制的に鍛えると言い出したのだ。
傑「サボったら・・・ゴールドフォルテが飛んできそうだからサボれん（滝汗）・・・はぁ～愚痴ってもしょうがない・・・此処で逃げたら男が廃るってもんだし気合入れるか」
傑はそう言って立ち上がると私服に着替えて特訓に必要な物をそろえる。
傑「ライダーベルト、スポーツドリンク、タオル、着替え、財布、携帯、あとは・・・一応コイツも」
高校時代に使っていたスポーツバックにライダーベルトやスパークレンスなどの特訓に必要なものをそろえて鞄に詰める。その数分後に家を出る。

大人「ちょっと早すぎたかな？・・・まあいいか」

バイクを駐車場に止めて大人はつぼみとの待ち合わせ場所の希望ヶ丘駅にいた。その3分後・・・・。
つぼみ「すみませ～ん！！！お待たせしました♪」
つぼみが現れた。服装は赤いワンピースにピンク色のジャケットといういまどきの高校生らしい可愛らしい格好だ。
大人「そんなに待ってないよ。じゃあ行こうか？」
つぼみ「はい！！！」
大人とつぼみは手をつないで歩き始める。いつの間にか自然に二人はこの動作が出来るようになっていたのだ。
大人「今日は何処行く？」
つぼみ「そうですね～ショッピングセンターなんかどうですか？」
大人「おぉ～いいね♪」
大人はつぼみと楽しく会話しながらもある事を思っていた。3年前は中学生だったのにたった3年という月日で彼女は一人の女性に成長している。今からも彼女はどんどん成長して外見も心もどんどん成長していく。だから今のこの時間を一番大切にするべきなのかもしれないと。

えりか「遅いなぁ～・・・何してんだか」
グレーのショートデニムに水色の薄手のシャツの格好のえりかは琢磨との待ち合わせの場所である商店街にいた。待ち合わせの時間から既に10分は経っている。まさか忘れてるのか？なんて事を思いながらもただひたすら待っている。そしてその数十秒後に聞き覚えのある声が聞こえてきた。
琢磨「あ、いたいた。お～～～いっ！！！！」
えりか「あぁ！！遅いよもう～何してたのさ？」
えりかはそう言って膨れた顔を見せる。琢磨はその彼女に必死に謝る。よくある彼女に頭が上がらないといった関係を見ているようである。
琢磨「悪い・・・渋滞で混んでてさ～エクステンダーでも中々進め

なくて（汗）」
えりか「だったらもっと早めに出てきてよぉ～。ったく」
琢磨「はい（汗）」
えりか「なんてね♪実はアタシも5分くらい遅れてましたから」
だがえりかは琢磨の頬を指で付くと笑顔を見せて自分も遅れた事を告げる。それを見るなり琢磨は目が点になり固まる。
琢磨「はい！？」
えりか「えへへへ～」
琢磨「人を責めておきながら己はぁ～・・・・ふっ・・・まあいいか。じゃあ行くか？買い出しに」
今度は琢磨が拗ねたようにそう言うがすぐに笑顔を見せて二人は笑い合う。お互いに似た者同士でお似合いのカップルとでも言うべきであろう。
えりか「勿論♪今日は久々にデザインした服も作っちゃうんだから～琢磨さんも手伝って。」
琢磨「ああ。いいよ！！俺もそう言うの興味あるからさ」
二人は商店街にある服の材料を買いに歩き始める。だがこの後琢磨はえりかの人使いの荒さに苦労させられるという事はまだこの段階では分からなかったのである・・・・。

傑「お、いつきはもう来てるみたいだな。おはよ～」
いつき「おはようございます傑さん！！」
傑は河原に来ていた。特訓にはこの場所が最適である事や休日にはこの場所には人があまり来ないので変身して特訓するにはもってこいな場所なのだ。因みに二人とも服装はスポーツウェアである。
傑「今日も宜しく・・・じゃウォームアップも兼ねて組手する？」
いつき「珍しいですね～傑さんから組手したいって言うなんて」
傑「なぁ～に・・・此処一カ月はいつきにたいぶ鍛えられたからさその成果を見せようと思ってね」
いつき「ふふ・・・たった一カ月じゃボクには及びませんよ？」

傑「・・・どうかな？（確かにそうだけど俺だってやるときはやるってのを見せてやる）」
傑はいつきに習った武術の構えを取る。いつきも同じように構えを取るとその場に緊張した空気が流れていき春の風が吹く・・・・・。
傑「行くぞぉ！！！！」
先に出たのは傑だった。バスケで鍛えたダッシュ力でいつきとの距離をいっきに縮めていくのだったが・・・
いつき「はぁあああっ！！！！」
傑「なっ！？・・・ぐげぇえっ！？」
いきなり腕を掴まれてしまうとそのまま傑は綺麗に宙を舞い投げ飛ばされてしまうのだった。やはりたった一カ月鍛えただけでは実力はいつきに遠く及ばないのだった。
傑「い、いててて…ぇ～～～」
いつき「まだまだですね。」
傑「くっそぉ～・・・よしもう一本！！！」
いつき「いいですよ。どんどん来てください！！！！」
傑「おう！！！」
傑は立ち上がるともう一度いつきに向かっていく。本当ならば立場が逆かもしれないのだが傑はあの時の失態で自分がいかに弱いかを思い知らされた・・・だからこそ今度は絶対に脚を引っ張らない為に自分が強くならなければと思ったいたのだ。今日はいつも以上に自分を鍛えてもらうと傑はいつきと共に特訓に励む。

ゆり「平和ね～」
アンナ「そうだね～」」
ゆりとアンナは自宅で優雅なティータイムを過ごしていた。此処一カ月は敵の存在を忘れてしまうかのように平和続きであるため時間をもてあます事が多かった。
ゆり「いつまでもこの平和が続いてくれたらいいな」
ゆりは不意に本音を口走った。メンバーの中では彼女が一番苦労人

であるため当然と言えば当然だろう。。
アンナ「そろそろお昼だね。何か買い出しに行こうか?」
ゆり「そうね。一緒に行きましょう」
アンナ「うん!!!」
ゆりとアンナは昼食の買い出しに出かけるのだった。二人の距離はクレイズ事件以来で壁がなくなり姉妹として仲良く暮らしていたのだった。あの時の哀しい別れが嘘であるかのように今の二人は幸せで一杯だったのだった。

夕「暇だなぁ~最近平和すぎて身体がなまっちゃいそうだよ・・・・まあいい事ではあるんだけど」
夕はある公園にいた。今は独り身の彼女は日曜はする事がないとよくエクステンダーで走るのだ。綺麗な景色を眺めて心がいやされる・・・それが彼女のささやかな楽しみであった。
夕「・・・なんか怖いくらいだな・・・・って考え過ぎか。ふぅ~」
此処一カ月は本当に平和で正直怖いくらいだった。もしかしたら密かに敵が牙をといでいるかもしれないという考えがよぎってしまうからだ・・・だが考えていても仕方ないと彼女は今は時間が許す限り色々な場所に行って自分にないモノを吸収したい。そう思った彼女はヘルメットを被るとエクステンダーに乗り込んでまた走り出した。

それぞれの全員は平和な時を楽しんでいた。まだこの段階ではその平和が敵の新しい作戦の準備期間だとは知らずに・・・・・。

第２７話「不穏な影」（前書き）

大人達が休日を楽しんでいた頃にはダークは一ある人物とコンタクトを取りその人物の忠実なる部下が二人の男女の運命を動かす原動力となっていた・・・それはこれから起こる戦いの序章である事はまだ誰も気がつかなかった・・・・・

今回は次の長編に向けての準備を始めます。次回の長編は夢原さんとＧＡＳＨさんとのコラボです。どうかお楽しみに♪

第27話「不穏な影」

ダーク「クレイズは死んだか・・・キュアセイバーの登場のみならずダークプリキュアがまさか新しいプリキュアに覚醒するとは・・・やはりプリキュアとウルトラマンのどちらも油断ならんな」
とある海底の遺跡でダークはクレイズを失った事に動揺が隠せないでいた。また新しい仲間のキュアセイバーのみならずダークプリキュアがキュアホーリーナイトとして生まれ変わった事に焦りが生まれ始めていたのだ。
ダーク「このままでは邪神復活の前に奴らが私の存在に感づくのも時間の問題だな・・・仕方ない・・・本来はプライドが許さんのだが・・・奴にコンタクトを取るか」
ダークはマントを靡かせながらある場所に向かった。その場所とは全パラレルワールドの悪の組織と連絡を取る事が出来る通信室だった。
ダーク「今のところ・・・使えるのは奴の力しかないからな・・・プライドが許さんが仕方あるまい」
ダークは通信を操作してあるものと連絡を取った。そして数分後にその相手と連絡が取れた。
???「ダーク?・・・ダークか?貴様がわざわざ私に連絡を取るとはどういう風の吹きまわしだ?」
ダーク「・・・デスリード・・・貴様に相談があってな」
デスリード「この私にか?・・・いいだろう聞こうじゃないか」
ダークはデスリードに全てを話した。キュアセイバーの登場、ダークプリキュアがキュアホーリーナイトとして覚醒した事を。
デスリード「成程・・・つまりは傭兵が欲しいという事か?」
ダーク「そうだ・・・。キリエルとバルタン一族は邪神復活の為に今不在でな・・・今すぐに呼び戻すわけにもいかんのだ。そこで・・・貴様はあらゆるパラレルワールドを行き来できるガイアメモリの

パラレルメモリがあるだろう?それを使って手頃な用兵を数名ほど此方にしばらく貸してくれると助かるのだがな・・・」
デスリード「いいだろう・・・ただし私の部下が此方のブラックリストであるウルトラマンティガの上原大人、キュアセイバーの雨牙真夜を抹殺した暁には貴様は私の手の下で働いてもらおうか?」
ダーク「ふん・・いいだろう。ただし上手くいけば・・の話だがな」
デスリード「大丈夫だ。貴様の期待以上の者を遣そう。」
ダーク「期待しているぞ・・・デスリード」
通信を切るとダークは玉座の間に戻るのだった。本音を言えばかなりの屈辱なのだが今は邪神復活の為にも手段を選んでいる場合ではない。それに邪神さえ復活すればデスリードも含めたすべてのパラレルワールドは闇に堕ちる・・・そうなってしまえば自分だけの楽園が作れると確信している彼は玉座のまで一人高笑いをするのだった・・・。

???1「父さん、母さん・・・・どうして死んでしまったんだ?・・・なんでこんな下らなくて腐りきった世界の為に・・・・どうして・・・・」
???2「・・・・さん」
???1「・・・。もう俺にはお前しかいない。俺は全てを失ったんだ。大切な人、自分が帰る場所も・・・・今の俺にはお前しかいないんだよ」
???2「・・・さん。私も同じです。私は貴方のお父さんに生きる意味を教えてもらいました・・・・だから私はあの時決めたんです。貴方の右腕になると・・・だから共にこの世界を・・・」
???1「ありがとう。なら共にこの世界を変えよう。腐りきったこの世界をぶち壊そう。腐りきった人間は殺して腐りきったこの世界を浄化しよう」
???2「・・さん。私はずっと貴方についていきます。」
とある場所で男と女がいた。彼らは普通の人間・・・・だったのだ

がある事で人間に絶望してしまったのだ。男は全てを失った。愛する家族も帰る家も。女はその男の父親に一度命を救われていた。その日から彼女は男の右腕として自分の人生を捧げると決めた。そんな二人はあてもなく夜のネオン街を彷徨っていると・・・。

???3「力がほしいか?・・・世界を変える強大な力が」

???1「・・・!?・・・誰だ?」

???3「私の問いに答えろ。力が欲しいのかと聞いているんだ」

???1「ああ欲しいね!!!こんな腐りきった世界をぶち壊せるほどの強大な力がな!!!」

???3「ならその望みを叶えてやろう」

声の主は薄暗い影から姿を見せた。外見は中学生くらいの少女ではあるが雰囲気はタダ者ではないと言っているかのように禍々しいオーラを放っていた。

???2「あ、貴女は一体」

???3「私はジュニス。貴様らを同じ世界に絶望した者だ」

ジュニスと名乗ったその少女は二人に近づきながら不気味な笑みを見せてそう言った。

???1「・・・お前も俺達と同じ?・・・・どんな闇を見たって言うんだよ?」

男はジュニスにそう問うた。自分と同じ闇を見たという彼女を睨んだが目を見て彼は理解した。この子供は想像以上に自分達が知らない何かがあると。

ジュニス「言っただろ?世界に絶望した者って・・・お前達と同じさ。話を戻すぞ。力が欲しいのならコレをやるよ」

ジュニスは4枚の携帯電話ぐらいの大きさの板の様なものを取りだした。それには蟹、蛇、サイ、エイのエンブレムがあって色も黒、青紫、メタルブラック、紅色とカラフルなものであった。

???1「・・・コレは・・・何だ?」

ジュニス「仮面ライダーってのは知ってるだろ?」

???1「ああ。砂漠の使徒をプリキュアと共に壊滅させという伝

説の戦士」
ジュニス「その仮面ライダーになるためにキーアイテムだ。」
？？？２「コレが！？」
？？？１「仮面ライダーの変身アイテム・・・・」
ジュニス「それを一度手にしたらお前達はいつも死と隣り合わせになる・・・その覚悟があるのな私はお前達にコレを渡すが・・・どうする？」
男と女は少し考えた。だが自分達にはもう何もないという事を知っている男はすぐに蟹のエンブレムがついた黒い板を手に取った。男は光に包まれていくと左手に鋏を持った蟹をモチーフにした金色の仮面戦士へと姿が変わった。
？？？１「コレが・・・・ライダー？」
ジュニス「おめでとう。お前は仮面ライダーシザースに選ばれたようだな。正直オリジナルのシザースは外れデッキだがちゃんと強化はしてあるから安心しろ」
？？？１⇒シザース「仮面ライダー・・・シザース・・・それが俺の力か？」
？？？２「私にも・・・その力を・・・ライダーの力を頂戴！！」
女は青紫で蛇のエンブレムがついた板をジュニスから取る。すると女も光に進まれるとエンブレムと同じ蛇をモチーフにした群青の仮面戦士へと姿が変わる。
ジュニス「へぇ～女のお前がそれに選ばれるとは・・・おめでとう仮面ライダー王蛇の誕生だ。」
？？？２⇒王蛇「・・・・王蛇」
ジュニス「さて・・じゃあ付いてきてもらおうか？お前達に更なる力を与えるある方の所に」
シザース「・・・ああ。いくぞ王蛇！！！」
王蛇「はいシザースさん！！！」
二人はジュニスが開いた闇の扉を潜る。長い道のりの中２０分後にようやく目的地に着いたらしい。

シザース「此処は？」
ソコは一言で言うなら無限の闇。何処までも続く暗い部屋でいるのが苦しい。まるで自分達の世界とは別次元の空間であるみたいだ。
ジュニス「ダーク！！私だ。デスリード様から聞いているだろう？」
ジュニスはそう叫ぶ。すると空間が割れたかのように亀裂が入るとそこから黒いマントを羽織りジュニス以上に禍々しい空気を放った者が出てきた。
ダーク「ようこそ。ジュニス君・・・そして私の新しい同士達よ」
シザース「！？・・・貴様は？」
ダーク「私はダーク。かつてプリキュアとウルトラマンに封印された闇の戦士だ」
シザース「闇の戦士だって」
ダーク「左様。では付かぬ事を聞くようで申し訳ないが・・・君達は世界を本当に滅ぼしたいのか？」
シザース「・・・言うまでもないな。俺達はあの腐りきった世界などいらないんだよ。だからこうやってライダーの力も手にしたんだ！！！下らない能書は止めてさっさと取引を始めようじゃないか」
シザースはそう言ってダークに食ってかかった。もうつまらない能書は沢山だしこれ以上あの世界をあのままにしておきたくないと心から願っているからこその発言だった。
ダーク「ふふ・・・結構だな事だ。では本題に入ろう。君達には今から闇の力を自分のモノにしてもらおうか」
ダークは笑う本題に入るべく声のトーンが低くなりながらそう言う。
シザース「闇の力？」
ダーク「ライダーの力を手に入れたとはいえ所詮今の君達はただの人間だ。超人のウルトラマンやそれと大差ない力を持つプリキュアには遠く及ばん。だから君達には闇の力をマスターしてもらう」
ダークは指を鳴らすと別の扉がシザースと王蛇の前に現れた。中は雷に似た雷音が鳴っていた。
ダーク「ただし人間が闇の力を得るのは至難の技・・・失敗すれば

命はないが・・・やるかね？」
シザース「・・・上等だよ。そこまでしなきゃ世界をぶち壊せない・・・ならばこの命をかけてやる」
王蛇「シザースさん・・・・私も共に」
王蛇は彼に近づこうとしたがそれをジュニスが止めた。
ダーク「残念だが闇の力を得る事が出来るのは一人だけだ・・・君には別のプログラムが用意してある」
ダークはもう一度指を鳴らすと別の扉が出てきた。どうやらこの部屋は一人一つであるらしい。
王蛇「そんな・・・」
シザース「心配するな。俺は必ず帰ってくる。お前と共に俺とお前をゴミのように捨てたあの世界に復讐する為に・・・だからお前も頑張れ」
王蛇「・・・はい」
二人はそれだけ言うと同時に扉を潜った。
これは大人達の平和の影で行われたいたダークの新しい計画のスタートであったとは誰も知らない。シザースと王蛇の他に新しく戦士が加わるのもこのすぐ後のこととなる。

第27話「不穏な影」（後書き）

新しい長編のプロローグは既に始まっていました。それは近日公開されると思います。

さて次回の予定は未定です。もしかしたらいきなり長編が始まるかもしれません。

次回のお楽しみに♪

第２８話「超進化細胞」

？？？「コレがエボリュウ細胞・・・・コレがあればボクは人間の頂点に立てる・・・ナンバー１になる事がボクの生きる価値なんだ」

ある研究所で一人の研究員が自分の身体にあるものを移植した。それの学名は《エボリュウ細胞》と呼ばれている。

？？？「うっ！！・・・ぐぅ・・・す、スゴイ力だ・・・これならば《不死》という人間が求めていたモノが手に入るかもしれない・・・そうなればボクは！！！」

男は突然変異を起こすかのように光に包まれた。それは不死などではなく変異とも呼べるものに近いものかもしれない。

大人「《警視総監行方不明》か～最近多いよな行方不明事件。一週間前はは刑務所から３０人近くの囚人が一気に消えたってニュースもあったし」

大人達は相変わらず続いている日常を過ごしていた。月の影計画事件から既に２カ月近く立つのだがアレ以来怪獣の一匹すら出てこない。静かすぎる日常に嫌な予感が隠せなかったのだが騒いでいても仕方ないため過ごせるうちに普通の生活を楽しんでいるのだった。

今の彼は久々に琢磨、傑、夕を誘ってツーリングを楽しんでいて休憩所で新聞の一面記事を読んでいるのだった。最近は怪獣などは出ないのだが行方不明事件が多発している。しかし自分達は刑事ではないため同行できる問題ではないため何もできない。だが自然と大人は胸騒ぎがしていた。

琢磨「その話はかなり大題的なニュースになったよな。《集団脱走か！？》って話題になった記憶があるよ」

傑「たしかどうやって脱走したか未だに謎で解明されてなかったよな？」

夕「そういえば行方不明者関連でこんな都市伝説を聞いた事あるよ～」
大人・琢磨・傑『都市伝説？』
夕に3人の視線が集まる。夕はちょっと得意げの顔をしてその都市伝説について語り始めるのだった。
夕「うん。鏡に映る金色の蟹の怪人と群青の大蛇の話なんだけどね。噂だと行方不明者はその蟹の名怪人と群青の蛇に鏡の世界に引き込まれて《その2匹の餌になっている》っていう内容なんだけど実際に行方不明者が最後に言った所には必ず鏡があって一部の鏡には血が付いていたらしいよ～」
都市伝説の内容を聞いて3人は絶句してしまう。だが大人はすぐに鼻で笑う。それを見た夕は大人にツッコミチョップを食らわす。
大人「そんなバカな。ワームの噂ならともかくそんな非科学的な都市伝説なんてデマだよデマ。大体人を食うなんてあり得ないでしょ？」
傑「俺らが《非科学的》って言うのは不自然な気がするけどな」
琢磨「違いない」
大人のセリフに琢磨と傑はそう呟く。自分達は仮面ライダーでなお且つ知り合いはプリキュアである。そんな自分達が《非科学的》という言葉を使っていいのかはかなり疑わしいのだった。
夕「確かに・・・アタシ達は言う資格ないかもね」
夕もそれに同意したようにそう言った。
大人「・・・まあいいじゃないの。それはそれでさ。よぉ～しそろそろ休憩もこの辺で良いか？」
琢磨・傑・夕・『異議なし！！！』
休憩もそろそろいいだろうと大人は新聞をゴミ箱に捨てる。

同じころつぼみ達は学校が終わり下校中の帰路を歩いていた。
えりか「最近ホントに有名だよね鏡の金色の蟹と群青の蛇の噂」
いつき「ホントだね。確か行方不明者はその蟹の怪人と蛇に食べら

れてるってやつでしょ？」
つぼみ「え、えりか、止めてくださいよ！！！その話は」
明堂高等学校でもその噂はかなり有名になっていた。高校生生活を送っているつぼみたちも最近はその話題で持ちきりであった。だがつぼみは怪談話はかなり苦手でありその話を聞くたびに顔が青くなるのだった。
えりか「つぼみ～やっぱり怖いんでしょ？」
つぼみの反応を見てえりかの《つぼみ弄り》が始まる。もうすでにコレは二人の日々の日課と言っていいほどお馴染みの光景になっている。
つぼみ「だ、だからそんな事ありませんってば！！！」
いつきも次第につぼみの反応を見ていると悪戯心が出てくる。ちょっとからかってやろうと笑みを浮かべるといつき「あぁ～金色の蟹！！！」
といつきはつぼみに聞こえる様に叫ぶ。するとつぼみは顔が真っ青になって辺りを見回してしまう。
つぼみ「えぇえっ！？・・・ど、何処！？・・・何処ですかいつき！？」
いつき「なぁ～んてね♪」
そう言っていつきはつぼみのほっぺに指をむにゅと押しつけて冗談だと教えてやる。
つぼみ「うぅ～・・・もうぉ！！！いつきまで私を弄るんですかぁ！？」
するとつぼみは怒ったようでいつきとえりかに向かってツッコミパンチをポカポカと叩き込んでいく
いつき「ごめんて・・・だから泣かないでよ～」
つぼみ「謝るぐらいなら初めからしないでくださいよ！！！」
えりか「やっぱり怖いんじゃないの」
つぼみの言い草にそうツッコムえりか。

真夜「最近の行方不明事件はどう考えてもおかしいわ。何かあるとしか思えないのだけど」
ロモモ「真夜ちゃぁ～ん只の噂ロモよ?そこまで勘ぐらなくてもいい気がするロモ」
真夜「確かにそうかもしれないけど人がいなくなっているのは事実なの。こんなに連続に起こるなんて普通は考えられないでしょ?」
ロモモ「確かにそうロモ」
只一人この行方不明事件が不可解であると感づいていた真夜は密かに情報を集めていた。情報を集めるうちにある共通点が浮かび上がってきたのだ。
真夜「行方不明者は警察の上層部幹部、そして犯罪を犯した人間や過去に罪歴のある人間・・・か・・・どういう事なんだろう?・・・本当に私の思いすごしなのかな?・・・でもこんなに連続的に行方不明なんて・・・もっと情報を集めないと」
出てきたキーワードは《警察幹部》と《犯罪者》の2つだけ。流石の真夜も手掛かりなしではどうしようもなく頭を抱えてしまう。
ロモモ「しょがないロモ。ロモモを付き合うロモ!!!」
真夜「ありがとう。よし頑張るか」
だがいつまでもこうしていても仕方ないと真夜はもう一度集めた情報を整理して考え直す事にした。何かあるのは間違いないのだからと。

???「キシャァアアァアーーーーッ!!!!」
男「う、うわぁっ!?・・・か、蟹の化け物ぉ!?」
???2「お前は殺人を犯しながらも心神喪失を偽って罪から逃れた・・・その償いは貴様の命で支払え!!!!」
男「うわぁあああぁあああああっ!!!!!!!!!」
???「コレでまた一人腐った人間が消えた。俺のモンスターもかなりパワーアップを果たしてきてる。もうすぐだ・・・もうすぐ改

革は実現される！！！！」

一人の男はそう言ってその場を後にした。そこには血まみれになった衣服の様なものと血がついた鏡の破片が散らばっていたのだった。

その日の夜に希望ヶ丘で大規模な停電事故が発生していた。知らせを受けたＧＵＴＳのホリイと矢車が調査に出ていた。

矢車「職員の話では怪物が電気を吸い上げているのが目撃されたそうです」

ホリイ「んなアホな・・・電気を食う怪物なんてこのご時世に」

調査したところ停電の原因は怪物が電気を喰らった事によるものらしい。だがそんな事はあり得るとは思えないとホリイはすぐに懐疑的な態度を取る。

矢車「取り合えず他に情報もないようですし今日の所は一度引きあげましょう」

ホリイ「そやな。・・・あっ・・・すまんちょっとええか？」

矢車「はっ！？・・・ホリイさん！？」

ホリイは矢車にそれだけ言うと一人で何処かに言ってしまうのだった。

ホリイ「リョウスケ？リョウスケやないか！？」

？？？「・・・ホリイ！！久しぶりだな」

ホリイが矢車から離れた理由はこう言う事だった。久々に見かけた大学時代の友達に挨拶がしたかったのだ。声をかけられた男の名前はサナダ・リョウスケ。ホリイとは大学時代の友人で現在は宇宙開発センターで研究員として働いている。

リョウスケ「こんなとこで何してるんだよ？・・・あ、もしかして先日の停電の調査かい？」

ホリイ「まあそんなとこや。お前こそ宇宙開発センターで頑張ってるとちゃうんか？」

リョウスケ「今日は休みだよ。研究職も大変でね中々休みが取れなくてな」

ホリイ「そうか。お互いぼちぼちってとこやな。そやこんなとこで立ち話もなんやからその辺で飯でも食い行くか？」
リョウスケ「そうだな。久々に積もる話もあるしな」
二人は近くの喫茶店で仕事の愚痴や学生時代の思い出など様々な事を語り合った。
ホリイ「しかしホンマに人生って分からんわな・・・俺みたいなアホがＧＵＴＳに入れてお前は宇宙開発センターの一般職員・・・ホンマやったら逆やで」
リョウスケ「何を言ってるんだよそれはお前の実力だよ。ボクの力がたまたまＧＵＴＳの求める力に追い付かなかっただけさ」
ホリイ「いやいや・・・んな事は」
ホリイは今でも信じられなかった。何故ならばリョウスケはエリート中のエリートで自分なんかよりも実力は数倍も高い。故にＧＵＴＳには自分よりもリョウスケの方が相応しいのではないかと考えていたからだった。
リョウスケ「だけどボクは今の人生に凄く満足してるんだ。お陰で様々な研究が出来るんだからな」
ホリイ「ほう？・・・今はどんな研究をしとるんや？」
リョウスケ「・・・誰にも言うなよ？・・・今ボクのチームは不死をテーマに研究してる」
ホリイ「はぁ！？」
ホリイは思わずコーヒーを噴きだしてしまった。まさかこのご時世で《不死》を本気で研究する輩がいてしかもそれが自分の友人となればそうなるのは当り前であろう。
リョウスケ「《不死》・・・それは人間の憧れだ。ボクは必ずそれを実現させて見せる」
ホリイ「科学もとうとうそこまで来とるんかい？・・まあホンマに不死になれる人がおるなら拝んでみたい気もするけどな」
リョウスケ「すぐに・・拝めるさ。楽しみにしていろよ」
リョウスケは自信満々な表情でそう言った。まるで既にその研究成

果が出ていると確信しているかのように
矢車「ホリイさん!!こんな所にいたんですか。さあ早く戻らないと隊長に大目玉食らいますよ!!」
ホリイ「ああ、悪い。じゃあまたなリョウスケ」
リョウスケ「ああ。」
ホリイは矢車に連れられて喫茶店を後にした。その姿を見ながらリョウスケは自分の腕を見た。
リョウスケ「(やはりあの細胞は物凄い力だ・・・この研究が上手くいけばボクは・・・)」
彼は何かを隠していた。だがそれは誰にも言えない秘密であるため他言は出来ない。リョウスケはそのまま自宅に帰宅した。だがその直後
リョウスケ「うぅううっ!?・・・ま、また例の発作か!?・・・だがおかしいこんなに頻繁に起こる筈は・・・うぅぅ・・・がぁあああああぁああああっ!!!!!??????」
彼は光に包まれると姿が消えた。

???「ギシャゥゥウゥゥウゥゥウウッ!!!!!!」
その直後になんと巨大生物が街に出現したのだ。怪獣は電線に手を近づけるとそこから電気エネルギーを吸い上げていく。昨日の停電の原因はコイツの仕業なのか!?

第２８話「超進化細胞」（後書き）

今回はちょっと伏線が多いです。後の長編に関連してきますので覚えていてくれると助かります。
ではでは次回のお楽しみに♪

第２９話「異形な進化」（前書き）

前回までのあらすじ～
月の影計画事件から既に2カ月が経過しようとしているのだが敵の動きは全く見られない事に大人は不信感を抱いていた。そんな中で都市伝説となっている金色の蟹と群青の蛇が人を食うという噂と暗躍する謎の男の存在，
そして現れる電気を喰らう怪物、電気を喰らう怪獣の正体は自らの身体を使って進化の実験をしてしまった科学者リョウスケが異形進化怪獣エボリュウに変身した姿だった。

第２９話「異形な進化」

大人「久々の怪獣か！？」
琢磨「ったく平和だと思ってたらコレかよ！！！」
傑「ブツクサ言うな。行くぞ！！！」
大人・琢磨『おう！！！』
大人「ティガぁあああっ！！！！」
琢磨「アースぅうう！！！！！！」
傑「デュナミスぅう！！！！！！」
怪獣が現れた事に気がついた３人は大急ぎで現場に向かう。現れた怪獣は電気を吸い上げながら街を破壊している。大人達はスパークレンスと取り出し空に掲げて起動させてまばゆい光に包まれながら巨人の姿に変身する。
ティガ「ハッ！！！」
アース「ジュワァ！！！」
デュナミス「ヂュワ！！」
３人は構えを見せながら怪獣を止めに向かう。
エボリュウ「ギシャァアアッ！！！！」
ティガ「（コイツ今までに見たことないタイプだな・・・敵の尖兵ではないのか？）」
３人の姿を発見した電気を喰らう異形進化怪獣エボリュウはゆっくりと３人に近づく。ティガは今まで見た事のないタイプの怪獣に疑問を抱きながらも先行し取っ組みあう。力ではマルチタイプと互角で双方譲らない。
エボリュウ「グルルル！！！」
ティガ「グァアアァアッ！？」
突然エボリュウのカラダが稲妻を帯びた様に光り出すとティガの身体に雷撃が走る。吸収した電力で相手を攻撃する事が出来るらしい。
エボリュウ「キシャァアアッ！！！」

ティガが怯んだすきに鋭い爪でティガの身体を引掻きその後にパンチを食らわせてティガをふっ飛ばす。
ティガ「グゥウッ（くっ・・・迂闊に近づけない）」
アース「ハッ！！（ティガは休んでろ。今度は俺達が行く。行くぞデュナミス！！！）」
デュナミス「シャッ！！！（おう！！！）」
傷ついたティガを休ませて続いてアースとデュナミスが向う。奴が電気を食らいソレを武器にするのならば恐らく近距離は不利。そう考えた二人はバーニングシュートとスプラッシュトルネードを発射して遠距離戦法に徹する・・・のだがエボリュウは吸収した電撃で空間を歪めることでバリアの様なものを発生させて二人の攻撃を防いでしまう。
デュナミス「（何っ！？）」
アース「（アイツには光線技が効かない・・・近距離では電撃を直に与え遠距離ではバリアで完璧な守り・・・コレでは手が出さない）」
近距離では威力の高い電撃攻撃、遠距離ではバリアで攻撃を退ける。正に攻守のバランスが取れたオールラウンドのスタイルに手を焼く3人。この圧倒的不利な状況をどう打破するのか！？
エボリュウ「ギシュゥウゥウゥウウ・・・ギシュゥウアウアアアアッ」
3人が作戦を考えている最中エボリュウは突然苦しみ出すと光を放ってその場から姿が消える。
ティガ「（消えた・・・）」
3人は急いで消えたエボリュウを探すため辺りを見回すが姿はどこにもなかった。やむを得ず3人は空に飛びあがり姿を消すのだった。
大人「一体何だったんだ！？今の怪獣は」
傑「分からん。」
琢磨「戦ってみて分かった事と言えば今までに出てきた怪獣とは違

う気がするんだよな。何と言うか苦しんでいるって言うか」
大人「苦しんでる？」
琢磨「ああ。なんていうか何かに苦しんでいてそれで暴れてるって言うか・・・そんな感じがしたんだけどな」
傑「何れにしても突然消えたという事はまた出現する可能性もある。だから奴を倒すまでは気を引き締めていこう」
琢磨「ああ。」
変身を解いた3人は集まりエボリュウの事について作戦会議をしていた。奴が消えたという事は今後も出現するかの性は高い今後の方針を固めた。だがその日はエボリュウが再び出現する事はなかったのだった。

その日の夜とある町の裏通りではいつもでは不良が溜まり場となり騒ぎを起こしているはずなのだが今日は全く姿がみられない。だがしばらくすると2人の人影が見えてきた。二人の男の様な陰であった。
？？？1「やっぱりあの人の・・・さんの言うとおりだな。世界は落ちると個まで落ちた」
？？？2「全くだな・・・君」
？？？1「君をつけるな！！」
一人はショートヘアー、もう一人は肩までの長さのロングヘアーでショートの方は君付けしてきたロングの男にそう言う。どうやら君付けされるのが嫌いらしい。
？？？2「そうだったね。今日でもう20人も喰わせた。そろそろボク達のモンスターもプリキュアやウルトラマンに追い付いたんじゃないかな？」
？？？1「そうだな。・・・さんも闇の力を手に入れて今は自分のモンスターの強化に徹している。あとは彼の力であるシザースの強化が終わればもうすぐ革命が起きる。あの人を捨てた世界に復讐が出来る」

？？？２「あと少しでボク達の理想郷が出来るんだね」
？？？１「そうさ。俺達の望む争いのなく人々が平等な幸せを手に入れられる世界が！！！」
彼らは歩きながら自分達の野望について語り合った。後ろの鏡には銀色のサイと深紅のエイが映っていた。また近くには血まみれになった何かの残骸が散らばっていたのだった
大人「《行方不明者続出・・・・不良グループ関係者一斉に失踪！？》・・・この事件まだ続いてるのか。・・・」
翌朝大人は大学で新聞を読んでいた。新聞の一面記事は頻繁に続いている行方不明事件関連の事であった。また最近は金色の蟹、群青の蛇の他に銀色のサイと深紅のエイが目的されたという噂も流れている。
大人「蟹と蛇の次はサイにエイって・・・もしかしたら本当にワーム以外に怪物がいてそつらが人間を・・・・流石にコレだけ頻繁に行方不明事件が続いていると噂が本当って思えて怖いよな。・・・考え過ぎか？・・・いや現にワームがいたし・・・・くっ！！！！」
大人は頭の中で考えを纏めていた。もしも本当に夕から来た都市伝説が本当だとしたら？一連の行方不明事件者の近くには鏡があった。本当に化け物がいるとしら・・考えただけでもぞっとした。
大人「（昨日の昼からあの怪獣は出てきていない。あの怪獣と行方不明事件は関連があるのか？・・・だがあの怪獣が人を食うとは考えにくい・・・・あぁ～分からん！！！）」
新聞を読みながらも彼は必死に行方不明事件と例の怪獣の関連性を考えた。だが繋がる材料など見当たらない。判断材料がなければいくらなんでも憶測にしかならずイライラが募る。

エボリュウ「ギシャウゥゥウウゥウウゥウウウッ！！！！」
大人「噂をすれば影か・・・・今度は逃がさないぞ！！！」
色々考えているところに噂をすればとでも言うべきかエボリュウが姿を現した。大人は一人でも戦うとスパークレンスを取り出して起

動させてティガに変身する。
ティガ「ハッ！！！」
そのすぐ後にガッツウィング1号、2号が現れてティガのサポートに現れる。
ムナカタ「ウルトラマンティガを援護する。ホリイ、今度逃げられていいように例の発信機の準備は出来ているんだろうな？」
ホリイ「もちろんです。任せておいてください！！！」
GUTS隊も怪獣の出現に備えて準備は行ってきたのだ。そのひとつが新兵器の「モンスターキャッチャー」だ。これは怪獣に打ち込むことで例え地球の裏側に逃げようとも追跡できると言うホリイ開発の優れものである。ホリイはそれをエボリュウの身体に打ち込んで逃げられても追跡できるようにと自分は地上で待機しモンスターキャッチャーの発射準備を整えているのだった。
ティガ「ハッ！！！」
ティガは今度は逃がさないとパワータイプにチェンジしてパワーあふれる格闘線で一気に勝負を決めようとしていく。
エボリュウ「ギシャァアアアっ！！！！」
エボリュウは昨日の闘いと同じように電撃を放つがパワータイプの頑固なボディに傷は付けられずそのままティガのパワーパンチとブレーンバスターを受ける。更にGUTS隊の総攻撃とのコンボでホリイ「ティガ・・・そのまま動きを止めておいてくれよ～。発射！！！」
ティガが動きを止めている隙にホリイはモンスターキャッチャーを発射した。弾丸は見事にエボリュウの身体に組み込まれいく。
ホリイ「おっしゃ！！！」
これで逃げられても追跡は可能になった。例え逃げられても自分達の監視からは絶対に逃れられない。
ティガ「ハァアアアアッ！！！！！」
ティガはジャイアントスウィングを決めてエボリュウを弱らせる。
このまま勢いに乗りデラシウム交流を放てればこちらの勝ちだとテ

ィガは勇ましい構えを見せつける。
エボリュウ「キシャァアアアアアッ！！！！！！」
エボリュウはこのままでは不利だと察したのか雷光のような光を放っていくとそのまま姿を消した。
ティガ「クッ！！・・・・・」
姿が消える前にトドメを刺そうとティガはデラシウム交流を放とうとするのだが準備が整う前に逃げられてしまう。やむを得ずティガは空に飛び上がる。

その翌日からホリイはモンスターキャッチャーでエボリュウの居場所を割り出した・・・のだがその場所は何と希望ヶ丘のリゾートホテルであったのだ。
ホリイ「まさかこんな場所に怪獣なんぞ・・・・・はぁ～ええよなお気楽気分・・・というかこんな場所に奴がおるんかぁ？」
ホリイは思わずそんな愚痴をこぼしながらもモンスターキャッチャーの反応を確かめると反応が強くなっている。というよりは向こうから近づいてきている。
ホリイ「えぇ！？・・・向こうから来とる・・・まさかこの下か！？」
ホリイは地下に奴が潜んでいるのではないかと思いながらも反応がある方向に向かっていく。どんどん反応は強くなる。どうやら此処にいる事は間違いがないらしい。
？？？「わっ！？」
ホリイ「あ、スンマヘン・・・・ってリョウスケ！？」
リョウスケ「何だホリイか～どうしたんだい？君も休暇・・・ではないようだけど」
ホリイ「あ？・・・あぁ～ほら、例の怪獣の調査中や（な、なんでや？なんでリョウスケから反応が出とんねん・・・調子が悪いんか）」
リョウスケ「お前も大変だね。あちこち飛び回るなんて」

ホリイ「あ、あああまあな。そう言うお前は休暇か？」
リョウスケ「・・・そう言うわけではないんだけどちょっとね・・・悪いんだけど今用事があるんだ・・・だからまたあとでな」
ホリイ「あ、ああ」
ホリイは顔がモンスターキャッチャーの故障かと機械を弄ってみたが反応は変わらない。リョウスケの姿を見送っていると其処に見覚えのある女性が現れた。
？？？「リョウスケ！！・・・此処にいたのね。研究室に姿を見せないからどうしたのかと思ったわ。・・ねえやっぱり病院に行こうよ。体調が悪いなら見てもらったほうが・・・」
リョウスケ「うるさいな・・・僕の事は構わないでくれ！！！」
リョウスケはその女性にそれだけ言うとつかつかとホテルの中に行ってしまう。女性はため息をつきながらもその場を後にしようとしたがホリイの姿を見て驚いた顔をするとホリイに近づく。
？？？「ホリイ君？ホリイ組んだよね？」
ホリイ「・・・あぁっ！！！・・・サヤカ？サヤカやないか」
ホリイは思い出したようにそうった。彼女の名前はイジュウイン・サヤカ。ホリイとリョウスケとは大学時代からの友人でホリイとリョウスケの思い人でもあった。
ホリイ「どうしたんや？お前までこんなところに」
サヤカ「・・・実はリョウスケを追ってきたの」
ホリイ「はぁ！？」
ホリイはわけが分からなかった。リョウスケの話では彼は今休暇中でこの希望ヶ丘に来ている筈なのに・・・とにかく話を聞く為にホテルのレストランに二人は入った。
サヤカ「一か月前に隕石が落ちてきた事知ってるでしょ？」
ホリイ「ああ。確かその中に未知の細胞が発見されたってこっちでも話題になったな」
サヤカ「リョウスケはその隕石の分析チームのチーフをしていたんだけどココ最近無断で研究室を休むようになって・・本人は大丈夫

だって言ってるんだけど・・・・私、心配で・・・色々調べてリョウスケがココにいるって分かって・・・それで・・・」
ホリイ「・・・俺に会った時はそんな事一言も言ってなかったけどな」
サヤカ「最近はなんだか何かに怯えてるみたいなのよ」
ホリイ「・・・（アイツから反応が出たのもそれが理由か？）分かったこっちでも調べて見るわ。分かったら連絡するからもう少し此処にいてもらえるか？」
サヤカ「・・・分かった」
ホリイはサヤカにそう告げて本部に状況報告をするべくＰＤ？で矢車と影山を現地に呼び寄せた。そして１時間後ウィング１号に乗ってきた矢車と影山が合流する。
矢車「どうしたんですか？わざわざ呼び寄せて」
ホリイ「・・・二人とも落ち着いてきてくれ。モンスターキャッチャーの反応が・・・サナダリョウスケっていう男からでたんやけど・・・」
ホリイは慎重に報告に移った。リョウスケからモンスターキャッチャーの反応が出た事を。
影山「じゃあ至急本部に連絡を」
ホリイ「ああぁ・・待ちや！！実はそのサナダ・リョウスケは俺の大学時代からの親友なんや・・・だからこの事は白黒はっきりするまで本部には黙っておいてほしいんや」
影山「分かりました。では俺達を呼び寄せたのは何でですか？」
ホリイ「１か月前に落ちた隕石の研究班にリョウスケが参加しとるんや・・・リョウスケがかかわった研究の事について２人で調べてほしいんや・・・頼む！！！」
矢車「分かりました。すぐに調べましょう」
そう言うことならと矢車と影山は快く引き受けた。そして２時間後２人からリョウスケが行っていた研究の内容を聞かされてホリイは驚愕した。

ホリイ「まさか・・・リョウスケの奴自分にエボリュウ細胞を」
その研究内容とは隕石内に含まれていた未知の細胞のエボリュウ細胞を生物に移植すると言う実験だったのだ。エボリュウ細胞を移植された動物は飛躍的に能力が向上するのだがそれには致命的な副作用があったのだ。それは大量の電気エネルギーがなければ生き続けられないと言う事だ。ホリイはリョウスケに対する疑惑が決定的なものになったと確信してしまった。モンスターキャッチャーを打ち込んだ怪獣も電気を喰らっていた。・・・そしてリョウスケからモンスターキャッチャーの反応があったのはつあまりリョウスケがあの怪獣に・・・・・

リョウスケ「うぅ・・・日に日に発作が激しくなっている・・・やはりこの細胞の威力は凄まじい・・・・ふふふ・・・ははははは
っ！！！！」
リョウスケはホテルの部屋で一人笑っていた。その笑顔はないかに吹っ切れたかのようだった・・・彼を此処まで追い詰めたのは何なのか?それは意外なものであった

第２９話「異形な進化」（後書き）

ティガは感動できる話が多いですね。エボリュウやオビコ、うたかたのやガゾートなどなど今見ればかなり考えさせられるものばかりだと思います。

さて次回はナンバー１にこだわった彼の運命は・・・・

次回のお楽しみに♪

第３０話「友の最期」（前書き）

前回までのあらすじ～
リョウスケが行っていた不死をテーマにしていた研究それはエボリュウ細胞を使った恐ろしい内容であった。
エボリュウ細胞は摂取した者の能力を飛躍的に向上させるのだが致命的な欠点があり大量の電気エネルギーがなければ生命を維持できない危険極まりない代物である。
ホリイはリョウスケが自分の身体にエボリュウ細胞を移植したのではないかと言う疑惑を強めていくのだが・・・・・

第３０話「友の最期」

その次の日サヤカは一人でホテルの受付近くのソファーで人を待っていた。しばらくするとその相手が彼女に近づいてきた。
リョウスケ「食事の前に二人きりっで話でもしないか？」
サヤカ「・・・・うん」
サヤカが待っていた相手はリョウスケだった。リョウスケは彼女を誘ってホテルの外に出る。二人はホテルの外に出て二人は昔の事を語り合った。
リョウスケ「大学に入るまでの僕の人生は順調だった・・・・でも僕はその後２つの挫折を味わった。１つはＧＵＴＳに入れなかった事、もう１つは・・・・君に振られた事だ！！！！」
リョウスケは突然今まで自分の中に溜めていたものをサヤカにぶつけてきた。彼の中でＧＵＴＳに入れなかったこととサヤカに振られた事は相当ショックであったらしい。
サヤカ「リョウスケ、それは違う！！！」
サヤカは弁解しようと声を上げた。自分はリョウスケを振ったのではない・・・本当はサヤカもリョウスケの事が・・・。
ホリイ「リョウスケぇ！！！！」
突然ホリイが二人のもとに走ってきた。顔は汗が噴き出ていてかなり慌てた様子である。彼はリョウスケの腕を掴む。
ホリイ「お前ＴＰＣの医療班に身体を調べてもらえ！！！」
リョウスケ「な、何をするんだぁ！？」
リョウスケはホリイの腕を振り払うと彼から離れる。ホリイはリョウスケを悲しさと怒りが混じったような複雑な表情で見ながらも自分の推測を彼に問う。
ホリイ「お前・・・自分の身体にエボリュウ細胞を移植したんよちゃうか？・・・・そのままやったら死んでしまう！！！！」
こうなったら力づくでもリョウスケを連れて行こうとホリイは強引

にリョウスケに詰め寄るが彼はホリイを凄まじい怪力で投げ飛ばした。
リョウスケ「ボクはボクは常にナンバー1でなければならなかったんだぁ!!!・・・なのにボクは・・・ボクはぁ・・・」
リョウスケは今まで自分は常に頂点に立たなければならないと言うプレッシャーに押しつぶされていたのだ。勉強もスポーツも全てにおいてナンバー1になる事が彼が彼でいられる方法だったのだ。だがそれは大学までしか通用しなかった。2つの挫折を味わった彼は悩み苦しみながらもそれから解放されようと試行錯誤してきた・・・その結果が人間を超えることこそがその道だと思いこみ自分の身体にエボリュウ細胞を移植したのだ。
リョウスケ「うぅぅうっ・・・ナンバー1じゃないボクなんて・・・誰も誰も愛してくれない!!!!」
身体に稲妻が走りながらも苦しみ思いを吐き出すリョウスケ。彼の中のエボリュウ細胞が暴走を始めて彼でもコントロールが出来ない状態にまで突然変異を起こし始めたのだ。
サヤカ「リョウスケ・・・それは違うわ!!!。ホリイ君は脚も短いし太ってるし詰まらないギャグ言うし・・・欠点だらけの人間よ・・・でも欠点だらけでも皆に愛されてる!!!!」
ホリイ「・・・・・」
サヤカは彼を説得しようとホリイを例に欠点だらけでも人は愛されると言った。ホリイは後ろで自分の悪口を言われた事に複雑な心境であった。だがその説得ももう彼には届かないのかリョウスケは2人を睨む。
リョウスケ「お前達に・・・ボクの気持ちが分かるかぁ!?」
ホリイ「分かるよ!!!俺ら友達やないか!!!!」
ホリイは当然だと頷いてそう言う。だがリョウスケは信じられないと言う目で再度2人を睨む。
リョウスケ「・・・嘘だ・・・お前達なんかにボクの気持ちが分かってたまるかぁあっ!!!」

リョウスケは走り出して2人から離れる。二人は彼を追いかけるがエボリュウ細胞で強化された彼に2人は追いつけなかった。
リョウスケを見失って数秒後にリョウスケはエボリュウに変異し希望ヶ丘の町で暴れ始める。

ホリイ「止めろぉリョウスケ!!!!」
ホリイはエボリュウとなったリョウスケに呼びかけるが彼はそれも聞き入れずに町を破壊し大暴れする。そしてしばらくするとガッツウィング1号が2機そして怪獣のほうに向かっていたつぼみ達も姿を見せた。
つぼみ「ホリイさん!?・・・」
ホリイ「つぼみちゃん・・・・皆」
大人「どうしてこんなとこでボッとしてるんです?早く奴を止めないと」
大人はホリイにそう食ってかかった。ホリイは何も言わなかった・・・いや言えなかったのだ。あの怪獣の正体は自分の親友であるとは口が裂けても。何も知らないGUTSはエボリュウに攻撃を開始する。
サヤカ「あの怪獣は・・・・」
ホリイの代わりにサヤカが怪獣の事を離そうとしたがそれをホリイが止めると無線でウィングに乗っている他の隊員達に事の説明をした。
ホリイ「皆・・・聞いてくれ。アレは怪獣ちゃう。人間や・・・・・人間や!!!!」
全員『!!!??』
ホリイはかすれた声でそう言った。ホリイの報告を受けた面々は攻撃を躊躇する。その間にもエボリュウは町から電気を吸い取り家屋を破壊する。逃げる人々の悲痛な叫びが木霊する。
大人「・・・・・」
琢磨「大人!?・・・おい!!!」

つぼみ「待ってください・・相手は人間なんですよ!?・・・大人さん!!!!」

そんな面々の中で一番最初に行動を始めたのが大人だった。彼は無言のままバイクに乗りエボリュウが暴れている方面に向かう。つぼみ達の制止を無視して彼は一人でも戦うつもりなのだ。例え相手が人間だったとしても・・・・。

大人「止めろ!!!お前に人の心が残っているのなら・・・これ以上街を壊すな・・・じゃなければ俺は・・・」

大人はエボリュウに向かってそう叫んだ。だがエボリュウは大人を睨むと彼に向かって電撃攻撃を放つ。

大人「・・・ダメなのか・・・ならば仕方がない!!!!!」

大人はスパークレンスを取り出して天に掲げて起動させる。辺りに眩い光で包まれて彼はティガに変身する。

ティガ「ジュワァ!!!!!」

ティガは構えを見せながらも迷いが隠せない様子であった。相手が人間となれば当然だがこれ以上は被害は出せない。ティガは思い切ってエボリュウを止めに入る。

エボリュウ「ギシャァアウゥウウウっ!!!!!!」

ティガ「!?」

エボリュウは自分に向かってきたティガに電撃を浴びせながら怯ませると彼を投げ飛ばす。

ティガ「グゥウっ!?・・・ハアッ!!!!」

ティガは町に被害が出ない場所に移動させようと暴れるエボリュウを無理やり押さえつけるも力負けして身体が宙を舞うほど飛ばされる。やはり相手が人間であると理解しているが故に普段と違い思いっ切って戦う事が出来ないティガ・・・かなりの苦戦を強いられる。

つぼみ「このままじゃティガが」

えりか「くっ・・・アタシ達にも何か出来る事があれば」

いつき「でもあの怪獣が人間なら下手な事は出来ないよ！！！」
ティガが苦戦している様子を見てつぼみ達は自分達に出来る事がないかと模索するが例え今自分達がプリキュアに変身してもあの激戦の中ではティガの足手まといになってしまいかねない。何か他に手はないかと必死に考える。

ティガ「ウワァアアアッ！！！？？・・・ハァ、ハァ、ハァ・・・・・」

カラータイマー「ピコンピコンピコン・・・ピコンピコンピコンピコンピコンピコン！！！！！」

ティガ「・・・フン・・・・ウゥウ・・・・」

電撃攻撃を受ける続けるとカラータイマーが点滅を始める。いつもよりも点滅が激しくなっている。このままではマズイとティガはせめて安らかに眠れとゼペリオン光線の発射準備を始めるが・・・

ティガ「！！！！・・・アァアッ」

なんとゼペリオン光線すら打てないほど消耗していたのだ。既に身体は限界に近くフラフラだがそこにエボリュウはティガに止めと腕から触手を伸ばしてティガの身体に巻きつけると電撃攻撃で追い打ちをかける。

ティガ「グワァアアアアアアアアアッ！！！！！？？？？」

身体に電撃を浴びられながらも必死に耐えるティガだが彼には考えがあったのだ。エボリュウは電気を喰らう怪獣であるつまりは体内にある電気を消費続ければエボリュウは消滅するのではないかと・・・だが自分も既にエネルギーが尽きかけの状態でありどちらが先に限界を迎えるかが勝負であった。ティガは必死に電撃を受け続けエボリュウが消滅するのを待った。その間にも彼自身のエネルギーは消耗されて身体が悲鳴を上げる。

エボリュウ「ウゴォオオオッ！？？？・・・・ギシャウゥゥウゥゥウゥゥウゥゥウゥゥウゥゥウ」

もはや共倒れかと思われたその時エボリュウが先に限界がきて身体

が光り始めると粒子状になって消滅をした。
ティガ「ハァ、ハァ、ハァ、ハァ・・・・・・・ジュワァ！！！」
ティガはその場に膝をついて肩で息をする仕草を見せる。そして彼は天を見上げてそのまま空に飛び上がった。

ホリイ達はエボリュウが消滅した場所に向かうとそこには既に力尽きたリョウスケがいた。ホリイはヘルメットをその場に落としてもう二度と起き上がらない彼にの近くに寄った。
ホリイ「リョウスケ・・・誰にでも心の闇はあるわな。お前はその心の闇を開いてしまっただけの人間や。ゆっくり眠れよ・・・もう、誰とも競争せんでええんやど！！！！」
ホリイは涙にかすれた声で彼に呼びかながら涙で顔を濡らした。親友であるはずの自分が彼の心の闇に気が付けていればこんなことにはならなかったかもしえない。こんな辛い結果にはならなかったはずだと・・・ホリイは普段のひょうきんでムードメーカーであるその姿からは想像が出来ないほど泣いた。親友を助ける事が出来なかった自分への後悔と怒りがあるのかも知れない。

第３０話「友の最期」（後書き）

闇へのレクイエムはその後メタモルガ編、エボリュウ細胞は自作のウルトラマンダイナへと続きます。見ていた当時は子供心ながら悲しかった印象があります。

さて次回は長編突入です！！！

ゲストは豊富ですが既に出てくる人物は決まっておりますのでそれ以外の出演はお琴鷲させていただきます申し訳ありません。

ではでは次回のお楽しみに♪

長編予告～地球解放軍～

シザース「パワーアップは終わったな・・・いくぞ我が同志たちよ」

ザビー「貴様は一体？」

シザース「俺達は地球解放軍・・・・腐りきった世界を壊し新しい世界を作るもの」

ガイ「ボク達が新しい法律を作るんだ」

ライア「全ての人が平等な幸せを造るんだ・・・・シザースさんが人の頂点に立つ事で」

王蛇「誰にも邪魔させないわ・・・・私達を捨てた世界を必ず壊す！！！」

カブト「クロックアップが出来ない！？」

シザース「終わりだぁあっ！！！！」

電子音「ファイナルベント」

カブト「うわぁあああああぁあああっ！！！！？？？？」

ブロッサム「カブトぉおおおお！！！！」

？？？１「それ以上は手出しはさせない！！！」

シザース「貴様ら・・・何者だ!?」

???2「私達は通りすがりのプリキュアよ」

???1「大いなる希望の力キュアドリーム!!!!」

???3「情熱の赤い炎キュアルージュ!!!」

???4「青いバラは秘密のしるしミルキーローズ!!!」

???5「救済と新生を司りし閃光キュアエルス!!」

???6「ピンクのハートは愛あるしるしもぎたてフレッシュ、キュアピーチ!!!」

???2「平和を守護する星の輝きキュアコズミック!!!」

ダーク「おのれ、後少しの所で、新手のプリキュアに邪魔された。何なんだあいつは」

ジェニス「奴の名は星川勇奈、プリキュアとしての名はキュアコズミック。デスリード様に刃向かい、さらにヤイバの世界では武藤蒼牙を助け、メデューサを倒し、世界の支配者と自称するコンカラードを倒したダークエンジェルスにとってはもっとも邪魔な存在であり、別の所で会ったキュアエルスの仲間だ!そして、奴は天道総司にも面識がある」

織田「シザースの変身者の過去・・・それが今回の事件の根源だ」

啄磨「警視庁裏金汚職事件？」

いつき「それがシザース達が世界を憎むきっかけに？」

シザース「上原大人・・・ウルトラマンティガよ・・・本当にお前はこの世界を守るために戦う価値があると思ってるのか？」

大人「そ、それは・・・・・」

総司「何を迷っている？・・・・お前は大切な人を守るためにカブトに・・・光の戦士の力を手にしたんじゃないのか！？」

大人「天道さん・・・・俺は・・・」

つぼみ「貴方達の過去がどれだけ辛かったかは聞きました・・・でも私達は負けるわけにはいかないんです！！！！」

大人「うぉおぉおおぉおおおおおおおっ！！！！！！！！！！！」

シザース「その思いごと破壊してやるよ・・・消えされ！！！」

電子音「ファイナルベント」

ブロッサム・マリン・サンシャイン・ムーンライト・ホーリーナイト「うわぁあああああぁあああああああっ！！！！！！！！！！！」

ティガ「（皆・・・俺達の力を皆に託す）」

アース「（だから必ず勝て・・・・）」

デュナミス「（皆の勝利を俺達は信じてるぞ・・・・・）」

シザース「何っ!?・・・・これがダークの恐れていた力か!?」

ブロッサム・マリン・サンシャイン・ムーンライト・ホリーナイト「シザース!!!!!」

ホーリーナイト「憎しみに染まった」

ムーンライト「その心を」

サンシャイン「私達が」

マリン「キャッチする」

ブロッサム「私達のこの姿はティガ達の力が融合した姿。その名は世界に咲く奇跡の花・・・ハートキャッチプリキュア・ウルトラシルエット!!!」

第３１話地球解放軍編「復讐の始まり　前篇」（前書き）

平和の影で行われていた闇の契約。続く行方不明事件と都市伝説となっている金利の蟹の怪人、群青の蛇、銀色のサイ、深紅のエイの正体とは！？
世界を憎み４人の戦士の影・・・それを追う異世界の戦士。
これは世界に絶望した４人の若者の悲しい復讐劇である

第３１話地球解放軍編「復讐の始まり　前篇」

海底の玉座の間に準備を終わらせた４人の人影とダーク、そしてジェニスがいた。４人のうちは２人はシザースと王蛇でありもう２人は銀色の分厚い装甲を持つサイのような戦士、もう一人は深紅色が中心で左手に英をモチーフにした盾を持つエイのような戦士であった。

ダーク「遂にこの時は来た。シザース君・・・よく闇の力を自らの物にしたな？」

シザース「あれぐらい物に出来なければ世界を変えることなど出来んさ・・・では俺達の邪魔をする敵の事を教えてもらおうか？」

王蛇「私達の邪魔をするプリキュアと仮面ライダー・・・そしてウルトラマンの事をね」

ダーク「はっはっは・・・勇ましいなぁ～君達は」

？？？１「シザースさん落ち着いてください。パワーアップを果たして急ぐ気持ちは分かりますけど今は冷静になりましょう。敵にはプリキュアの中でも要注意人物のキュアセイバーもいるのですから」

シザース「・・・そうだったなガイ」

シザースをそう諭すように話しかけたのは銀色のサイの戦士である仮面ライダーガイであった。

？？？２「ホントお前はいつもクールだね～ガイ。まあお前らしいけどな」

ガイ「おほめの言葉、光栄だよライア君」

？？？２「だから君を付けるな！！！」

ライアと呼ばれた戦士はガイにそう怒鳴る。ダークはその姿を見て更に笑い声を上げる

ダーク「ははははっ！！！・・・さてそろそろ本題に入ろうか。われらの敵についてを・・・・」

ダークは映像を見せて説明を始めた。敵であるブラックリストのウ

ルトラマンティガ、ウルトラマンアース、ウルトラマンデュナミス、キュアセイバー、そして砂漠の使徒緒を壊滅させたハートキャッチプリキュアの面々の説明を始めシザース達は対策を練り作戦を明朝に開始する事になった。その作戦にはジェニスも加わる事になった。

シザース「パワーアップは終わったな・・・いくぞ我が同志たちよ」

王蛇「私達は貴方についてきます」

ガイ「全ては世界の為に」

ライア「全ては安らぎの世界を造る為に」

織田「いいか?万引きは小さくても立派な犯罪だ。分かったら二度とするなよ!!!」

少年「ごめんなさい。」

須藤「分かればいいんだ。これは俺達が店に返しておくから君はこのままっすぐ家に帰るんだ」

少年「はい。本当にゴメンなさい!!!」

希望ヶ丘で警察に努めている織田と須藤は万引きをした少年に叱責をしていたところだった。ゼクトが壊滅した後2人は無事警察にへと再就職をしたのだった。今は違う形で自分達に出来る事を必死にしているのだ。過去に自分達が犯した罪を少しでも償う為に。

織田「ったく最近のガキはゲーム感覚であいう事するからキリがないな」

須藤「ですね。俺達の今できる仕事はこういうことなんですから頑張りましょうよ」

織田「相変わらずだね~お前は。さてとそろそろ俺達も署に戻って報告書をまとめるか?」

須藤「はい」

二人は署に戻り事務仕事を片付けようと思い歩き始めるのだが・・・

少年「うわぁああっ!?・・・な、何だ!?」

須藤「あの声は・・・さっきの」

織田「何かあったのかもしれん。行くぞ須藤!!!」

須藤「はい！！！」
二人は悲鳴があった方向に大急ぎで走る。するとそこには万引きをした事を注意したさっきの少年が金色の蟹のような怪人と銀色のサイに襲われそうになっているところだった。
須藤「はぁあああっ！！！！」
須藤は金色のカニに飛び蹴りを喰らわせて怯ませる。その隙に織田が少年を救出して二匹から離させる。
織田「大丈夫か？」
少年「う、うん」
須藤「逃げるだ。此処は俺達は何とかするから」
須藤達は少年を逃がす。蟹とサイは逃がすものかと追い掛けようとするがそれを2人が阻む。
織田「お前ら・・・ワームじゃないな？」
？？？1「キシャァアアアアアアアッ！！！！！」
？？？2「グォオォオオォオオオオオッ！！！！！」
二匹は雄たけびを上げながらも獲物を変更したかのように2人に近づいてくるがそれをさえぎるように黄色い色をしたハチ型のメカと銀色のカブトムシのメカが飛んできたハチは須藤の手にカブトムシは織田の手に留まる。
須藤「久々ですね・・・行きますよ織田さん！！！」
織田「ああ。何だかしらねーが人を襲う輩は許さん！！！」
須藤・織田『変身！！！』
電子音『ＨＥＮＳＩＮ』
電子音「ＣＨＡＮＧＥ　ＢＥＥＴＬＥ」
二人はそれぞれ手に取ったメカを左手に付けているブレスレット型の変身アイテムであるライダーブレスに装填すると二人はヒイロカネの鎧に包まれていくと須藤はハチをモチーフにした仮面ライダーの仮面ライダーザビーに、織田はヘラクレスオオカブトをモチーフにした仮面ライダーの仮面ライダーヘラクスに変身する。
ザビー「行くぞ！！！」

ヘラクス「久々に暴れるぜ！！！」
？？？１「キシャァアアアアアッ！！！！！」
？？？２「グォォオォオォオオオォオオッ！！！！！」
二匹も少年からザビーとヘラクスに狙いを絞っらしく邪悪な眼光を２人に向ける。しばしの静寂の中２人と２匹は同時に突進する。

ザビー「はぁあっ！！！、うおぉおおっ！！！！」
？？？１「キシャァアアアッ！！！！」
蟹の怪人はザビーに狙いを定めて両腕の鋏と堅い甲殻を武器にザビーの打撃を受けとめながらも互角に殴り合う。
ザビー「やはり蟹だけに堅いか。ならキャストオフ！！！」
電子音「ＣＡＳＴ　ＯＦＦ」
須藤はザビーゼクターの翅を倒すと鎧が拡散し始めるそしてそのままゼクター本体えお１８０度回す。すると鎧が勢いよく飛び散る。
電子音「ＣＨＡＮＧＥ　ＷＡＳＰ」
ザビー「クロックアップ！！！」
その後ザビーはベルトの右の部分をタッチしていくと姿が消える。
姿が消えた事に蟹の怪人は驚き戸惑う。
ザビー「ついてこれるか！？」
声が響くと怪人は声のほうを見るが姿はない。その次の瞬間蟹の怪人の身体のあらゆる部分から打撃攻撃が突き刺さる。
？？？１「キシャッ！？」
わけが分からぬまま怪人は追い詰められる怪人。流石の怪人もザビーのクロックアップには対応が出来ないらしくザビーの猛攻を受けることしか出来ない。

ヘラクス「おおおおおおっ！！！！！！！！」
？？？２「グォォオォオォオッ！！！！！！」
ヘラクス「ちっ・・・パワーだけは奴が上か」
サイの怪人はヘラクスを寄せ付けなかった。サイだけに突進のパワ

ーで近距離ではライダーとはいえ苦戦を強いられることになった。
ヘラクス「ならコイツで攻めるまで。クロックアップ！！！」
電子音「ＣＬＯＣＫ　ＵＰ」
ヘラクスもザビーと同じようにベルトの右の部分をスライドさせるとザビーと同じく光速移動状態となりサイの怪人を惑わせる。
？？？２「グゥウウウゥウッ！！？？」
サイの怪人は得意の突進攻撃を放つのだがその前にヘラクスの姿が消える。戸惑うところにヘラクスのゼクトクナイガン・アックスモードの刃で斬りつける。
ヘラクス「おらどうしたぁ！？」
ヘラクスのアックスがサイの怪人を斬りつける。蟹の怪人とは違い防御力は低く長い攻撃には耐えられずあっという間にダウンしてしまう。

ザビー「行くぞライダースティング！！！」
電子音「ＲＩＤＥＲ　ＳＴＩＮＧ」
ザビーはザビーゼクターのフルスロットルボタンを入力してゼクターニードルにエネルギーを溜める。次の瞬間飛び上がって蜂の鋭い毒針を怪人の懐に叩きこもうとしたのだが何者かの拳がザビーに叩きこまれて建物の壁に身体を叩きつけられてしまう
？？？３「全く帰りが遅いから様子を見に来てみれば・・・パワーアップをしたからと言って油断するなと言っておいたはずだが？・・・大体なぜミラーワールドに敵引き込まない？・・・ったく」
？？？４「危なかった・・・」
ザビーに拳と叩きこんだ者の一人は金色の身体に左手に鋏を持った仮面戦士、もう一人は銀色の分厚いお装甲を纏った仮面戦士・・・そう仮面ライダーシザースと仮面ライダーガイだった。彼らがかばった蟹の怪人の名はボルキャンサーといいシザースの契約モンスターであったのだ。
ザビー「ぐぅ・・・か、仮面ライダー？」

シザース「アンタは仮面ライダーザビーだな？・・・俺のモンスターが世話になったようだな」
ザビー「貴様は一体？」
シザース「俺の名はシザース・・・仮面ライダーシザースだ。さて早速で悪いがアンタには死んでもらおうか」
電子音「ストライクベント」
シザースはベルトの蟹の紋章がほられたカードデッキからカードを一枚抜きとるとそれを左手に装備されている甲召鋏（こうしょうばさみ）シザースバイザーに装填するとボルキャンサーの腕の鋏と全く同じ武器のシザースピンチがシザースの右手に装備された。
シザース「はぁあああああっ！！！！！」
シザースはそのままとび上がりザビーの黄色いボディにシザーズピンチを振り下ろす。
ザビー「ま、待て・・・何故こんな真似を！？・・・ぐわぁあっ！！！」
ザビーは戸惑いが隠せないままシザースピンチがボディに叩きこまれる火花を散らして大きく身体が宙に舞う。
ザビー「くっ・・・戦うしかないか。クロックアップ！！！」
シザース「そうはさせない」
電子音「スローベント」
ザビーがクロックアップを起動させる前にシザースはカードを一枚引き抜いてシザースバイザーに装填する。何も起こらないと思われたが・・・
ザビー「・・・っ！？・・・クロックアップが出来ない！？」
クロックアップが封じられてしまったのだ。シザースはすぐにもう1枚のストライクベントでもう一度シザースピンチを装備してザビーに斬りかかる。ボルキャンサーと違いシザースは戦いになれている節があり自分と互角かそれ以上の格闘センスであった。
ヘラクス「須藤！！！」

ガイ「おっと・・・貴方の相手はボクがしよう」
電子音「ストライクベント」
ヘラクスの前に立ちふさがったガイとサイの怪人。サイの回診はメタルゲラスと言うガイの契約モンスターである。ガイははカードをデッキから引き抜いて肩に装備されている突召機鎧(とっちょうきがい)メタル バイザーに装填すると自身の契約モンスターであるメタルゲラスの頭を模したメタルホーンが装備される。
ヘラクス「きっ・・・貴様らどうしてこんな真似を!?」
ガイ「貴方達には関係ない事です・・・なぜなら今この場で死ぬのですから!!!」
ガイはメタルホーンの角の部分でヘラクスのボディを思いっきり突き上げる。ヘラクスが持つアックスとは相性が悪くヘラクスは一方的に責められる。接近戦では不利だと思いガンモードではガンモードでガイを狙い撃つがメタルゲラスが壁になりそれも無意味に終わった
ヘラクス「ぐっ・・・なんてパワーだ・・・・しかしこんなものはマスクドライダーシステムにはないはず・・・」
ガイ「当然ですよ。これはマスクドライダーシステムではないのですから・・・さあ最後です」
電子音「ファイナルベント」
ガイはヘラクスにトドメだと自分のカードデッキの紋章が描かれたカードを取り出してそれを装填する。とメタルゲラスが後ろに移動してガイにもう一度メタルホーンが装備される。そしてメタルゲラスの肩に足を乗せてメタルゲラスに跨る様な形になるとそのままメタルホーンを構えた態勢でガイとメタルゲラスはヘラクスに向かって突進する。これぞガイの必殺技ヘビープレッシャー
ヘラクス「!?・・・うわぁあああああぁあああああああああっ!!!!!!!!!!」
ヘラクスはヘビープレッシャーを受ける爆発に包まれる。爆炎が止むと変身が解除された織田の姿が現れて織田はその場に崩れ落ちた。

ザビー「織田さん！！！ぐあぁあああああぁあああっ！！！！！」
シザース「次はお前だ・・・消えろ」
電子音「ファイナルベント」
シザースはザビー虐めに飽きたとカードを一枚引き抜く。描かれている絵柄はカードデッキの紋章と同じ蟹の絵柄であった。そのままそれを装填するとザビーの前にいたボルキャンサーがシザースの後ろに出現する。
シザース「はああっ！！！！」
シザースは小さく飛び上がるとボルキャンサーが両腕で彼を上空に飛び上がらせるとそのまま身体を丸めて超高速前転をしてザビーに体当たりを仕掛ける。これがシザースの必殺技のシザースアタックである。
ザビー「ぐぅ！？・・・プットオン」
電子音「ＰＵＴ　ＯＮ」
シザース「無駄だ・・・　はぁあああああああああっ！！！！！！」
ザビー「うっ・・ぐぅ・・・・ぐぁあああああああああああぁあああっ！！！！！！」
ザビーは少しでもダメージを軽減しようと装甲が厚いマスクドフォームにプットオンする。だがこの程度ではそんなには軽減できずに爆発を起こしてしまう。爆炎、爆風が止むと変身が解除されてボロボロの姿となった須藤の姿が現れる。

シザース「ふん・・・歯ごたえのない奴め」
ガイ「ですね。この二人を此処まで簡単に倒せるのならカブトとプリキュアも余裕でしょう」
ガイとシザースは恐らく気絶した二人を余所に自分達の力を改めて認識する。此処まで強くなれば太陽の神カブトや救世の戦士キュアセイバーも恐れるに足らないと確信したかのようにシザースは高笑

いをする。シザースとガイは変身を解除して人間の姿に戻る。ボルキャンサーとメタルゲラスは鏡の中に姿を消して鏡の世界のミラーワールドからで彼らを見つめるのだった。

？？？５「いよいよですね・・・・太陽さん」

太陽「ああ。既に夏実と神崎・・・王蛇とライアもサソードでテストを開始している。結果報告が楽しみだな」

？？？５「そうですか・・・神崎君が」

太陽「君をつけるとまた奴に怒られるぞ？勇治（ゆうじ）」

勇治「そうでした。では我々は先に戻りましょう」

太陽「ああ。」

シザースに変身していた男の名は白夜太陽（びゃくやたいよう）ガイに変身していた男は冴島勇治（さえじまゆうじ）と言う名前らしい。何故彼らが此処まで世界を憎むようになったか・・・それが今回の事件のカギとなるのか？二人は闇の扉を発動させていた場所から姿を消すのだった。

第３１話地球解放軍編「復讐の始まり　前篇」（後書き）

シザースとガイ強すぎたか！？・・・・まあそれはボス補正と言う事で（汗）

さて次回は久々のサソード登場です！！！

ではでは次回もお楽しみに♪

第３２話地球解放軍編？「復讐の始まり　後編」（前書き）

前回までのあらすじ～
少年を助けようとした須藤と織田は都市伝説となっている金色の蟹と銀色の際に遭遇する。そしてその主であるシザースとガイに二人は敗れ去ってしまった。その頃解き同じくして群青の蛇と深紅のエイが活動を始める・・・・

第３２話地球解放軍編？「復讐の始まり　後編」

剣「俺は買い物においても頂点に立つ男のようだ。これだけた苦戦勝ったらじいや喜ぶだろうなぁ～」

神代剣は鼻歌を歌いながら今夜の夕食の食材を買いに出ていたのだった。普段ならばじいやと慕っている神代家の執事の仕事なのだが剣は彼に喜んでもらおうとこっそりと買い物に出たのだった。剣は買い物袋に一杯の食材を運びながら自分の家の帰路を歩いていたのだが・・・

女性の声「きゃぁあああああっ！！！！！！」

剣「何だ今の声は！？・・・まさかワーム！？おいお前悪いんだがこれを持っていてくれ！！！」

男「え！？・・・ちょ、君！！！」

突然女性の声が響いてきた。剣は食材が入った袋を近くにいた男に持たせて声がした方向に走る。彼の脳裏によぎったのはワームの存在だった。だがワームはＺＥＣＴが壊滅して以来は人を襲うことなど全くしていなかったはず・・・だとしたら一体・・・数十秒後に剣は自分が見た光景に目を疑った

剣「な、なんだアレは！？」

なんとそこには対象を２０メートルは超えているであろう超巨大な群青の蛇と体長５メートルほどの深紅のエイだった。蛇とエイは腰を抜かした女性に今にも襲いかかりそうであった。

群青の蛇「シャァアアアアアッ！！！！！！！！！」

深紅のエイ「ゴゴゴゴオゴオオオオッ！！」

女性「い、いやぁ！！！こ、来ないでぇ！！！」

剣「止めろっ！！！」

剣は蛇の巨大な口が女性を飲み込もうとする前に女性に飛びかかって自分の身体ごと吹っ飛ばすことで女性は事なきを得た。

剣「大丈夫か？此処は俺に任せて逃げるんだ！！！」

女性「は、はい！！！」
剣は女性を逃がし彼女の姿が見えなくなるのを確認すると蛇とエイを睨みつけた。
剣「貴様らが噂の蛇とエイの怪物か・・・その首を打ち取ってくれる。何故ならば俺は怪物退治においても頂点に立つ男だからな！！！！」
電子音「ＳＴＡＮＤＢＹ」
剣「変身！！！」
電子音「ＨＥＮＳＩＮ」
剣の足元からサソリ型のメカのサソードゼクターが彼の手に留まる。そして彼は右手に取りだした変身アイテムサソードヤイバーにサソードゼクターに装填するとヒイロカネの鎧に身体が包まれていき剣は毒牙を操る戦士仮面ライダーサソードに変身する。
サソード「行くぞ！！！」
サソードはサソードヤイバーで蛇とエイの身体を斬りつけるが二匹とも皮膚はかなり固く簡単には傷をつける事が出来ない。
サソード「このまま斬りつけても埒が明かんな・・・ならばキャストオフ！！！」
電子音「ＣＡＳＴ　ＯＦＦ」
サソードはサソードゼクターのサソリのしっぽの部分を持ち上げて鎧を広げさせる次に尻尾を元に戻すとサソードヤイバーからエネルギーが拡散して鎧に届くと鎧も勢いと区拡散していく。
電子音「Ｃｈａｎｇｅ　Ｓｃｏｒｐｉｏｎ」
ゴツイシルエットからシャープなシルエットにチェンジしたサソード。次にベルトの右側に手を伸ばすと・・・。
サソード「クロックアップ！！！」
電子音「ＣＬＯＣＫ　ＵＰ」
サソードは一気に決着をつけるとクロックアップで光速移動状態になると蛇とエイに無双のごと超光速剣技で斬りつける。蛇とエイはサソードを見失ったと辺りをきょろきょろと見回すのだが光速移動

状態の彼を捕捉することなど出来るわけがなく光速切りに体力を奪われて遂には倒れてしまう。

サソード「呆気なかったな?そろそろ止めだ!!!!」
電子音「ＲＩＤＥＲ　ＳＬＡＳＨ」
サソードはサソードゼクターをキャストオフと同じように操作してサソードヤイバーにサソリの毒のように相手を蝕むポイズンブラッドを染み込ませた刃でからアどぉ切り刻んでやろうと二匹に向かって行くが二匹にサソードヤイバーを振り下ろされる前に突然蛇と同じ色をした仮面戦士がサソードヤイバーを受け止めてしまった。
サソード「き、貴様・・・何故邪魔をする!?」
???1「それは私のセリフ・・・この子に乱暴はしないでくれるかしら?」
その正体は仮面ライダー王蛇だった。王蛇はサソードヤイバーを受けとまたままキックで蹴り飛ばしてしまう。
サソード「貴様・・・何者だ!?」
???2「俺達はアンタと同じ仮面ライダーだ・・・仮面ライダーサソードこと神代剣さん」
サソード「!?・・・もう1人?・・・貴様ら何故俺の事を?」
後ろから現れたには仮面ライダーライアだった。まるで自分の事を狙ったいたかのような言いぐさに動揺するサソード。
王蛇「簡単な事・・・貴方で私達の能力をテストするだけよ?私達のパワーアップが成功したかどうかをね!!!」
ライア「そう言う事だ・・・だからアンタには悪いがココで痛い目を見てもらう!!!」
サソード「貴様ら・・俺を舐めるなぁっ!!!!」
プライドが高いサソードは王蛇とライアに向かって剣を振り下ろすが二人の身体にかすりもしない。ならばクロックアップで決めるとベルトに手を伸ばす。それを見た王蛇はカードデッキからカードを引き抜く。

王蛇「クロックアップはさせないわ！！！」
電子音「スローベント！！！」
サソード「！？・・・何だ？・・・なぜ発動しない？」
牙召杖（がしょうじょう）ベノバイザーにそのカードを装填する。クロックアップを発動させようとしても発動しない事にサソードは何度もベルトの脇をスライドさせるが反応がない。
ライア「それがなければ怖い物は何にもないんだよ！！！」
電子音「スピンベント」
サソード「ぐわぁああああぁああああぁあっ！！！！！？？？？？」
ライアは飛召盾（ひしょうだて）エビルバイザーにカードを装填させるとライアに赤い鞭状の武器エビルウィップを装備してサソードの身体に巻きつけると電撃を浴びせる。そこから何度も何度も電撃を浴びせてサソードの動きが鈍くなる。

サソード「はぁ、はぁ、はぁ・・・・き、貴様らは一体・・・何者なんだ！？」
サソードはエビルウィップから解放されると膝をついて肩で息をする。その彼に向かって王邪がもう一度蹴りを入れて吹っ飛ばす
王蛇「教えてあげるわよ・・・私達は地球解放軍。腐りきったこの世界を浄化する者。さあこれに耐えきれるかしら？」
王者はベノバイザーに自分のカードデッキと同じ紋章が絵柄として描かれたカードを装填する。すると彼女の契約モンスターであるベノスネーカーが後ろに現れる。
王蛇「はぁあっ！！！！」
サソード「うわぁああああぁああああぁああっ！！！！！！！！？？？？？？」
王蛇後転するように飛び上がるとベノスネーカーの足に近づく。その後ベノスネーカーは毒液を撒き散らしてその勢いに乗って王蛇はサソードに連続け蹴りを放っていくと大爆発を起こす。爆炎を爆風が止むと変身が解除された剣が倒れていた。

ライア「流石ジェニスがくれたライダーシステムはものすごい力だ・・・これさえあれば俺達は・・・」
王蛇「ライア。行くわよ」
ライア「おい、コイツはどうすんだよ?まだ生きてるぞ?」
王蛇「いいのよそれで。これはあくまでも私達の力の最終テストなんだから」
王蛇は変身を解くと黒髪のロングヘアーの容姿端麗の美女の姿が現れた。
ライア「ったく・・・相変わらずだな～夏実(なつみ)さんは」
夏実「そう言う貴方もね耕輔(こうすけ)?」
女の名前は山梨(やまなし)夏実(なつみ)、男は神崎耕輔(かんざきこうすけ)と言う名前らしい。変身を解除した後ベノスネーカーとライアの契約モンスターであるエビルダイバーは鏡の中に消える。そのすぐ後に2人も闇の扉を発動させると姿を消えるのだった。

その翌日・・・
大人「須藤さん、織田さん、それに剣が襲われた!?」
矢車「ああ。3人とも重傷だ」
つぼみ「そんな・・・どうして?」
病院に大人、つぼみ、矢車が来ていた。3人ともかなりの重傷で予断を許さない状態であるそうである。
大人「あの3人をいとも簡単にあそこまで追い詰めるなんて・・・・・一体誰があんな真似を!?」
矢車「見つかった時に3人は呟いていた事があるそうだ。須藤と織田は金色の蟹と銀色のサイ・・・神代は群青の蛇と深紅のエイ・・・と」
大人「それって・・・・都市伝説の行方不明事件の元凶だって言われてる」
つぼみ「それは空想の産物じゃ!?」

矢車「強ちそうでもないらしい。ＧＵＴＳでも行方不明事件は調査していたんだが一部のカメラに・・・・映っていたんだよ鏡に映る金色の蟹の怪人が」
大人「なっ！？・・・・じゃあ都市伝説は・・・本当で人を食う怪人が・・・いるってことですか？」
矢車「そこまでは何とも言えない。だがその可能性も否定できん。二人とも今後は注意してくれ。この事は俺と影山、そしてお前達ライダーとプリキュアしか知りえない情報だ。もしも何か見たら俺と影山に報告してくれ。」
大人「分かりました。・・・つぼみ今日の所は帰ろう」
つぼみ「はい」
矢車「気を付けてな。まあお前たちなら心配はいらんかもしれないが・・・念には念を入れておけ」
矢車を残して大人とつぼみは状況報告をえりか達にしようと植物園に向かうのだった。だがこの時すでに復讐鬼となった４人の牙が２人に向けられていると言う事はまだ気がつかなかったのだった。

シザース「テストは終わりだ・・・プリキュアとライダー、そして最大の敵ウルトラマン狩りの始まりだぁっ！！！！」
シザース、王蛇、ガイ、ライアの４人はミラーワールドで先ずはつぼみ、大人にターゲットを絞り狙いを定めるのだった。だが彼らも１つ見落としている事があった。ジェニスを追ってきた者の影が既にこの世界にいると言う事を。

第３２話地球解放軍編？「復讐の始まり　後編」（後書き）

言っておきますが私はサソードは好きです＾＾；。酷い事してしまってゴメンぼっちゃま！！！！

さて次回はいよいよ彼女達の登場と闘いが始まる

次回のお楽しみに♪

第３３話地球解放軍編？「脅威の鉄と新しい戦士」（前書き）

前回までのあらすじ～

何者かに襲われた須藤達は重傷をおい病院に搬送された。様子を見に来た大人、つぼみは矢車から都市伝説はただの噂ではないかもしれないと言う推測を聞く。

病院の帰り道に自分達の能力をテストが終わりいよいよ本番だとシザース達の牙が大人、つぼみの２人に向けられた・・・・。

第３３話地球解放軍編？「脅威の鉄と新しい戦士」

病院の帰り道を大人とつぼみは警戒しながら歩いていた。まさか都市伝説が本当であって蟹の怪人が実在していたなんて考えがつかないから当然と言えば当然だ

大人「まさか本当にワーム以外の怪人がいたなんて・・・くっそ！！これは絶対に陰で暗躍する何かがいるとしか思えない・・・俺達が平和ボケしてる間にも人が襲われていたと言う事になる・・・・くっ！！！！」

つぼみ「信じたくはありませんけど・・・そうなりますね」

クレイズ事件以来不気味なぐらい平和が続いていたがそれも全ては新しい敵の準備の時間であって決して本当の意味での平和ではなかったのだ。つまり自分達は偽りの平和という甘い汁を吸わされたことで裏で起きていた怪奇事件をカモフラージュされたのだ・・・・大人とつぼみは悔しくて表情が暗かった。

？？？「暗い表情だな？仮面ライダーカブト・・・上原大人。キュアブロッサム・・・花咲つぼみ」

植物園に戻ろうとしていた彼らに４人の影が近づいてきた・・・。その正体は太陽率いる地球解放軍だった。

大人「！？・・・何だお前達！？」

夏実「ふふ・・・知ってるかしら？最近人が消えるっていう都市伝説を」

夏実が笑いながらそう言うとつぼみと大人はハッとした顔になった。今の子場で都市伝説の事を離されたら思いつく事は一つしかない。須藤達を襲った輩は今自分達の目の前にいる彼らしかいないと。

つぼみ「！！・・・まさか貴方達が須藤さん達を？」

勇治「須藤？・・・あぁ～仮面ライダーザビー達のことね・・・そうだ。やったのはボク達だ」

勇治は思い出したようにそう言った。何分テストで彼らを襲撃した

だけであり一々意識しないから当然かもしれないがその態度に大人は怒りを見せた。
大人「お前達があの3人にあんな事を・・・何でだよ?あの3人が何をしたって言うんだ!?」
太陽「ふん・・・邪魔者を消そうとして何が悪い?・・・奴らは俺達の力の実験台に過ぎん。そしてテストは終わった。次のターゲットはカブトの力を持つ上原大人・・・ハートキャッチプリキュアーの一人である花咲つぼみ・・・貴様らと言う事だ!!!!」
太陽達はポケットからカードデッキと手鏡を取り出して手鏡にカードデッキを向ける。すると4人の腰に銀色のベルトが巻かれる。
大人達が使うライダーベルトとは形が違う。
太陽・夏実・勇治・耕輔『変身!!!!』
4人はそれぞれ変身ポーズをとるとカードデッキをベルトに装填すると人間の姿から仮面戦士へと姿が変わる。
大人「仮面ライダー!?」
シザース「驚いたか?貴様らが変身するマスクドライダーシステムとは別のライダーだ。」
つぼみ「マスクドライダーシステムじゃないんですか!?」
つぼみと大人は驚いた。この世界ではZECTで造られたマスクドライダーシステムによって変身するのが仮面ライダーと呼ばれている。だがシザース達が変身したライダーはマスクドライダーシステムとは全く違うものであるらしい。
大人「くっ!!!・・・つぼみ応戦するぞ!!!」
つぼみ「はい!!。シプレ!!!」
シプレ「はいですっ!!」
シザース達に応戦するべく大人はカブトゼクターを呼び寄せる。つぼみはココロパヒュームを取り出してシプレを呼び出す。
その次の瞬間つぼみはピンク色の光に包まれて私服からプリキュアのコスチュームに変わる前のワンピース調の光の衣装に変わる。
シプレ「プリキュアの種いくですっ!!!!!」

つぼみ「プリキュア・オープンマイハート！！！」
つぼみはシプレから召還された赤いプリキュアの種を受け取るとココロパヒュームにそれを装填して自分の身体に光の香水を噴きかけると上から順番に衣装が変わり最後に髪の色が赤から明るいピンク色になりそれをリボンで止めてポニーテールとなり変身が完了する。
ブロッサム「大地に咲く一輪の花キュアブロッサム！！！」
大人「変身！！！」
続いて大人がカブトゼクターをライダーベルトに装填してヒイロカネの鎧に包まれる。その後彼はカブトゼクターの角を倒す。
カブト「キャストオフ！！！」
電子音「ＣＡＳＴ　ＯＦＦ　ＣＨＡＮＧＥ　ＢＥＥＴＬＥ」
カブト「光を支配せし太陽の神、仮面ライダーカブト！！！」

シザース「出ろボルキャンサー！！！」
シザースはアドベントのカードを一枚引き抜くと近くにあった鏡から契約モンスターのボルキャンサーを呼び寄せる。
カブト「こ、コイツが金色の蟹の怪人か？」
現れたボルキャンサーの姿を見てカブトとブロッサムはすぐに理解が出来たこの怪人が都市伝説で噂された蟹の怪人であると。
シザース「ふふふっ。ボルキャンサーを見て驚いているようだな？貴様らが知っている都市伝説は実在する。今まで行方不明となった人間は俺達の契約モンスターの血となり肉となったのだよ。こいつ等の餌として捕食させることでな！！！！！」
ブロッサム「どうしてそんな真似を！？人を餌にするなんて・・・・」
シザースは淡々とした口調で真相を語った。ボルキャンサーの金の鋏が光を見せつけながら唸り声を上げる中カブトとブロッサムは信じられないと言う表情になった。
王蛇「そんなに驚く事ないじゃないの？・・・私達は腐りきった人間を餌にしただけ」

ライア「その通りさ・・・今この世界は堕ちるとこまで堕ちた。それは人も同じ!!!」

シザースに続いて王蛇とライアが続いて語る。自分達が行った事をまるで正義の裁きだとでも言うかのように。

ガイ「怒っているようだね?・・・でもボク達は全く悪気はない。いらない人間を殺して何が悪いんだい?現に犯罪者や非行に走る人間がどんどん減っているのもボク達のおかげなんだよ?」

カブトは拳を震わせながら怒りで震えているその様子を見たガイは挑発がましくそう言った。そのセリフにカブトは完全に怒りが爆発した。

カブト「ふざけるなぁあっ!!!!!!人を怪物の餌にした揚句、須藤さん達にあんなけがをさせやがって・・・絶対に許さん!!!」

カブトはクナイガンを構えるとシザースと王邪にターゲットを絞り突進するがシザースと王蛇はカブトのクナイガンを紙一重でかわして余裕を見せつける

カブト「くっ!!・・・」

アックスではダメだとカブトはクナイガンの鞘を抜いてカブトはクナイモードに変形させてカブトはシザースと王邪に斬りかかる。がシザースはシザースバイザーでそれを受け止めてしまった。

シザース「ふん・・・許せないか。それは俺達も言える事だ!!!」

カブト「何!?・・うわっ!?」

王蛇「はぁああっ!!!・・・私達だって望んではなかった・・・・でも世界を元に戻すにはこうするしかない!!!!」

カブト「ぐはぁっ!?・・・くっ!!」

シザースの言葉に一瞬動きが止まるカブト。そのすきにシザースははシザースバイサーでカブトのクナイガンを受け止めその体制でキックでカブトを蹴り飛ばすを。そして次に王蛇がカブトを立たせてカブトの赤いボディにパンチを見舞わせる。

ブロッサム「カブト!!!」

ライア「お～っと行かせないぜ？・・・お前の相手は俺達だ」
電子音「スウィングベント」
ガイ「君達は全員揃うと脅威だがバラバラにしてしまえばそれも他愛のない。だからココで消えてもらおうか」
電子音「ストライクベント」
ブロッサム「そんなことさせません！！！」
ライア「ほざいてな！！！。おらぁああっ！！！！」
ガイ「ふんっ！！」
ライアはエビルウィップ、ガイはメタルホーンを装備してブロッサムに見に襲いかかる。
ブロッサム「ふっ・・・たぁあああっ！！！！！」
ブロッサムはライアのエビルウィップを身軽な動きで避ける。続いてきたメタルホーンの上に乗る様にして攻撃を受け流すとガイとライアの後ろを取る。
ブロッサム「ブロッサムシャワー！！！！！」
後ろから遠距離攻撃のブロッサムシャワーをライアとガイに浴びせる。流石の2人もスピードではブロッサムを下回り彼女の動きに翻弄しようとするが。
ガイ「させないよ」
電子音「コンファインベント」
ガイはさせるものかとカードを素早く一枚引き抜いてメタルバイザーにベントインするとブロッサムのブロッサムシャワーはガイ達に当たる前に跡形もなく消滅してしまった。
ブロッサム「そ、そんな！！！」
ガイ「ボク達にはこういう能力もあるんだよ・・・だから君達はボク達に決して勝てない♪」
ガイは勝ち誇ったような声を上げるとブロッサムとの距離をあっという間に縮めてメタルホーンで殴りつけた。
ブロッサム「きゃああっ！？」
ライア「大人しく俺達にやられれば楽だぜ？はぁああっ！！！！」

ブロッサム「あぁぁあああっ！！！！」
続いてライアのエビルウィップがブロッサムの叩きつけられるとブロッサムは飛ばされてしまう。ブロッサムは受け身と取って体勢を立て直そうと距離を取る為に離れる。

カブト「がはっ！？」
シザース「弱い・・・弱すぎるぞ！！！太陽の神と言うのもこの程度の実力か？」
カブトはシザースと王蛇と激闘を繰り広げていた。しかし形勢はカブトではなくシザース達に傾いている。二人は戦いになれているらしくカブトの攻撃を着実に受け流し彼にのみダメージが残るように考えた戦いをするためでもあるがそれ以前にカブトは敵が人間であることに戸惑いを隠せずに本気の闘いが出来ない事が大きな原因であった
カブト「黙れ・・・人を餌にした力なんかに俺は負けない！！！。クロックアップ」
電子音「ＣＬＯＣＫ　ＵＰ」
シザース「やっと本気になったか？」
カブトはクロックアップで一気に決めようと光速移動状態になりクナイガンでシザースと王蛇を斬りつける。だがシザースはカブトのクナイガンの斬撃を受け流すどころかそれを受け続ける。何度も着られるが彼はよろける素振りの一つすら見せないのだ。
電子音「ＣＬＯＣＫ　ＯＶＥＲ」
カブト「はぁ、はぁ、はぁ、・・・ば、バカな！？クナイガンの斬撃が効かないのか！？」
シザース「残念だったな？俺の・・・いやシザースの力は契約モンスターであるボルキャンサーの防御力を受け継いでいてる・・・故に物理的な攻撃では１００人近くの餌を喰らって強化されたこのシザースの鎧に傷を負わせることなど出来んと言う事だ。はぁあああっ！！！！！」

元々シザースはボルキャンサーの特性を受け継いだライダーであり元の防御力はかなり高いのだがこのシザースが操るボルキャンサーは人を何十人も食わせている為ポテンシャルは元々の数値の数倍にも跳ね上がっている。つまり今のシザースの防御力は鉄壁に等しいのだ。シザースはカブトのクナイガンをシザースピンチで受け止めるともうひとつの鋏であるシザースバイザーで斬りつけて怯ませる首をシザースピンチで挟む
シザース「終わりだな?仮面ライダーカブト」
王蛇「これで・・・一人減りましたね」
カブト「くっ・・・・」
カブトは完全に動きを封じられてしまい最早此処までかと思ったその時。
電子音「ＲＩＤＥＲ　ＢＵＲＳＴ」
シザース「!?・・・ちっ!!!」
シザースに見覚えのあるビーム砲撃が直撃するとシザースは怯みカブトを解放してしまう。その隙にカブトはガタックに救出された。
カブト「ガタック!?・・・そして今の破壊力の攻撃ははライダーバースト?」
フェアリー「危なかったね～大丈夫?」
ガタック「帰りが遅いから心配になってきてみて正解だったな」
ダークカブト「間に合ってよかった」
カブトを助けたガタックに続きフェアリー、ダークカブトが姿を見せた。どうやら大人達の帰りが遅く様子を見に来たらしい。
シザース「わざわざそちらから顔を出すとは効率がいい」
王蛇「そうですね。ただ楽しみがなくなると考えると少し残念ですがね」
シザースと王蛇は探す手間が省けたと助太刀に来たガタック達を睨む。ガタック達はその視線に気がつくなりそれぞれの専用武器を取り出して構える。
ガタック「お前達がどんな理由があるかは知らないが俺達の仲間を

傷つけたツケはでけぇぞ?覚悟しろ!!!!」
シザース「ふん・・・覚悟するの貴様らだ」
ガタックが唸るとそれを合図に４人は散りシザース達に向かう。

ブロッサム「くっ・・・はぁ、はぁ、はぁ」
ガイ「もう息切れかい?他愛もない」
ライア「ははははっ!!!」
ライアとガイを相手にしていたブロッサムも絶体絶命のピンチに陥っていた。ガイの所持するコンファインベントで自分の特殊攻撃は封じられたと思った彼女は打撃のみで戦っていたが武器を持っている2人には丸腰の彼女は不利であり思う様に戦えなかったのだから当然だ。ガイのメタルホーンが膝をつく彼女の頭に突きつけられる。これで自分は終わるのかとブロッサムは覚悟を決めたように目を閉じた。
ガイ「さようならキュアブロッサム」
ガイは止めとばかりにブロッサムにメタルホーンを突きつけた・・・が彼女を守るように銀色の光を放つ光の壁が現れた。
ライア「な、何っ!?」
ガイ「この技・・・・・」
ブロッサム「ムーンライトリフレクション・・・・!!!・・・皆ぁっ!!!」
ブロッサムがみた方向には仲間であるマリン、サンシャイン、ムーンライト、ナイト、セイバーが並んで立っていた。ギリギリのところで間に合ったと全員ホッとした様子だった。
マリン「お待たせ♪ブロッサム」
サンシャイン「ギリギリ間に合ったね」
ブロッサム「皆さん遅いですよぉ!!!」
ムーンライト「これでも急いできたのよ。見るからに敵なのは明白ね・・・ブロッサム、話は後で聞かせなさい!!!」
ブロッサム「はい!!!!!

今は時間がないと全員が散りガイとライアに向かう。
ガイ「流石にこの人数だと面倒だね」
ライア「ああ。だがそれもこれで解決だ」
電子音『アドベント』
ライアとガイは流石に6人を2人で相手をするのは分が悪いと思いアドベントカードをベントインしてメタルゲラスとエビルダイバーをを呼び寄せた。

シザース「4人集まったところで俺達には通用せん」
王蛇「まとめて私達のモンスターの餌食となるがいいわ」
電子音『アドベント』
シザース、王蛇は数合わせだとアドベントでボルキャンサー、ベノスネーカーを呼び寄せてダークカブト、ガタックに差し向ける。そして残ったカブト、フェアリーはシザースと王蛇が狙いを定めたカブト「それはどうかな？・・・一気に終わらせてやる！！！！」
カブトの合図に全員がクロックアップをしようとベルトに手を伸ばすがそれに合わせるかのようにシザースと王蛇がカードを一枚引き抜いた。
シザース「そうはさせると思ってるのか？」
電子音「スローベント」
カブト・ガタック・ダークカブト・フェアリー『！！！！？？？？』
カブト「クロックアップが出来ない！？」
ガタック「ば、バカな！！？」
カブト達のクロックアップを封じる特殊カードのスローベントでクロックアップを封じられてしまう。その隙にガタックはボルキャンサー、ダークカブトはベノスネーカーに苦戦を強いられることとなる。
カブト「なんてやつだスピード、防御、攻撃力のどれをとっても奴らが上だ・・・弱点が見つからない」
フェアリー「そんな・・・・」

既にヒイロカネの鎧はシザースのシザースピンチと王蛇の攻撃でボロボロにされていて今にも変身は解除されてしまうかもしれないほど追い詰められている。このまま負けてしまうのかとシザース達の力の強さに恐怖を抱いてしまうカブトとフェアリー。

シザース「そろそろ遊びは終わりだ」

王蛇「消えなさい」

電子音「ファイナルベント」

シザースと王蛇はカードを一枚引き抜き見せつけた。自分達の最強必殺技を発動させるつもりだ。カブトとフェアリーは対抗策は必殺技しかないとフルスロットルのボタンを押してエネルギーをチャージするが・・・。

カブト「くっ！！！」

電子音「ＯＮＥ　ＴＷＯ　ＴＨＲＥＥ」

カブト・フェアリー『ライダーキック！！！』

電子音『ＲＩＤＥＲ　ＫＩＣＫ』

シザース・王蛇『はぁあああっ！！！！！』

カブト「うわぁあああああぁあああああっ！！！！！！？？？？？？」

フェアリー「きゃぁあああぁあああああっ！！！！！！？？？？？？」

シザース、王蛇のシザースアタックとベノクラッシュ、カブト、フェアリーのライダーキックがぶつかり合い爆発を起こす。競い勝ったのは・・・・・

シザース「ふん・・・・・」

王蛇「・・・・・」

シザースと王蛇だったのだ。カブトとフェアリーは変身が解除されて大人と夕の姿になってしまっている。シザースは大人にシザースバイザーを突きつけていた。

ブロッサム「カブトぉおっ！！！！！」

マリン「フェアリー！！！！！」

ガイとライアを相手にしていたブロッサム達はカブト達に向かおうとするのだがガイとライアがそれを阻む・・・このままでは大人が

！！！ブロッサムは何としても彼を助けようとするがガイとライアがそうはさせないと隙を見せない。

王蛇「此処までね仮面ライダーカブト、仮面ライダーフェアリー」
シザース「終わりだぁあっ！！！！」
シザースはシザースバイザーを王蛇はベノバイザーで二人の身体を突き通そうと振り上げた・・・その時だった。
？？？１「待ちなさい！！！！」
全員『！！？？？』
一人の少女の声が響き渡ると全員の動きが止まった。全員がみた方向には６人の少女の姿があった。その少女達に見覚えがあるブロッサム、マリン、サンシャイン、ムーンライトは驚いた顔だった。シザースと王蛇は一度大人と夕を放り投げて解放する。
大人「・・・くっ・・・き、君達・・・に、逃げろ・・・け、ケガだけじゃ済まないぞ！！！」
？？？「大丈夫です。私達は貴方達を助けに来たんですから」
夕「私達を助けに？」
？？？３「はい。だから休んでてください」
投げられた大人を短いポニーテイルの女の事ベリーショートヘアーの女の子が駆け寄り二人を抱きかけて立たせるとそのまま安全な場所に移動させた。
シザース「貴様ら・・・何者だ！？」
シザースは突然現れた謎の少女達にそう問う。すると６人の少女達はシザースと王蛇を睨みつける。その姿を見たブロッサム達はその中の４人に見覚えがあった
ブロッサム「の、のぞみさん！？」
マリン「あの子はりん！？」
サンシャイン「アレはくるみ！？」
ムーンライト「ラブ！？・・・何で昔の姿なんかに！？」
そうその４人とは自分達と同じプリキュア仲間であるのぞみ達だっ

たのだ。だがあの身形は中学生の姿である・・・だがそれは明らかにおかしかった・・・自分達と同じく年をとっている筈なのにと・・・そしてのぞみと呼ばれた少女はブロッサム達に笑顔を見せた。

???2「私達は通りすがりのプリキュアよ」

王蛇「何っ!?」

ゆりと同じぐらいの女性がシザース達にそう言った。この世界にはプリキュアは数多くいるとは聞いてはいたが・・・まさかそれが援軍に駆け付けてくるとは思ってもいなかった為に戸惑いが隠せない。

???1「先ずは私達が変身するね。2人とも行くよ!!!!」

???3・????4『イエス!!!』

先ずはのぞみ、りん、くるみと呼ばれた少女が携帯電話のようなアイテムとパレットのようなものを取り出した。

???1・????3『プリキュア・メタモルフォーゼ!!!』

携帯電話のようなものを取り出した少女2人はピンクと赤い光に包まれる。そのまま光につつみこまれた彼女達はブロッサム達と同じように短いスカートやロングブーツと言ったプリキュア独自のコスチュームに変化する。赤い光が集まった少女からは炎が周りに溢れ熱い鼓動が伝わったきた。

???4「スカイローズ・トランスレイト!!!!」

続いてパレット型のアイテムを持った少女がペンのようなもので3つのボタンを押すと青い薔薇(バラ)と青い光が集まった。バラの花びらが辺りに散りながら次の瞬間に少女だった彼女も戦士の姿に変わる

???5「チェンジ・プリキュア・ビートアップ!!!」

更に続き金色のロングのツインテールの少女は手鏡のような変身アイテム「リンクルン」を取り出すと鍵を使って開く。次に中のボタンを押すと彼女の身体はピンク色の光に包まれてワンピーススカー

トのコスチュームに変わり短かった髪の毛もロングのツインテールの髪となった。

？？？６「プリキュア・ライトニング・トランス！！！」

次にロングヘアーの少女は小型の景帝電話のようなもの変身アイテムの「ライトニング・コミューン」を取り出して起動させると少女の身体を光で包んだ。その後キュアムーンライトを思わせるようなルックスの戦士へと姿が変わった。

？？？２「プリキュア・コズミック・チャージ！！！」

最後にメンバーの中で最年長と思われる女性はペンダント型の変身アイテム「コスモタリスマン」を起動させて藍と金を強調した戦士へと姿が変わった。

全員が変身が終わると６人は並びポーズをとりながら名乗り上げる。

？？？１「大いなる希望の力キュアドリーム！！！！」

？？？３「情熱の赤い炎キュアルージュ！！！」

？？？４「青いバラは秘密のしるしミルキーローズ！！！」

？？？５「ピンクのハートは愛あるしるしもぎたてフレッシュ、キュアピーチ！！！」

？？？６「救済と新生を司りし閃光キュアエルス！！」

？？？２「平和を守護する星の輝きキュアコズミック！！！」

６人が名乗り上げが終わるとポーズをとりなおし中央で眩い光が走った。シザース達はもちろんの事だが大人達やブロッサム達も言葉が出なかった。

ジェニス「キュアコズミック！？・・・それにピーチや他の面々まで何故この世界に！？・・・くっ！！こうなったからにはシザース達だけでは不利だ！！！」

その様子をダークが支配する全戦基地で見ていたジェニスはシザー

ス達の加勢に向かう為闇の扉を潜った。その目的はただ単にシザース達の加勢だけではなく自分の因縁を片づける為でもあったのだが・・・・。

シザース「プリキュアが他にもいるとは聞いた事があったがまさかこれだけいたとはなぁ？くくく・・・いいだろう～貴様らもボルキャンサーの餌にしてくれるわぁっ！！！！」

王蛇「何人増えようとも私達には勝てないわ・・・・そうよね？ガイ、ライア」

ガイ「当然です。」

ライア「面白くなってきたじゃねぇーか・・・そうでないとわざわざモンスターを強化した意味がないというものだ！！！」

シザース達は新しく表れたドリーム達を見て恐れるどころか逆に興奮が止まらなくなった・・・自分達の力を試す相手が増えた事は彼らが背負っている復讐を晴らす対象が増えたと言う事だからそう思うのも無理はないかもしれない。

ローズ「あら？アタシ達の実力を舐めてると痛い目見るわよ！？」

コズミック「貴様らの為に犠牲になった命の償い・・・それは必ず受けてもらう！！！」

シザース「ほざけ・・・元々は死ぬべきものを餌にしたのみだ・・・・貴様らなどに俺達の計画は邪魔させん！！！」

シザース達とキュアドリーム達は睨み合っていた・・・周りに風が吹く中風が止むとシザース、王蛇はそれを合図にしたようにドリーム達に突進していった。それに応戦するようにドリーム達も高速ダッシュをしてぶつかり合うのだった

第３３話地球解放軍編？「脅威の鉄と新しい戦士」（後書き）

今回は中途半端ですが此処までで～これ以上書くと区切りが分からわなくなってしまうので（笑）

さて次回はドリームチームＶＳシザース＆王蛇の予定です！！！果たして此処まで強いシザースを倒せるのか！？

次回もお楽しみに♪

オリジナルプリキュア設定～ホーリーナイト編～

キュアホーリーナイト
一度は命を落としたアンナがつぼみ達のプリキュアの種とスパークレンスの力が融合して誕生した戦士。ブロッサム、マリン、サンシャイン、ムーンライトの特性とティガ、アース、デュナミスのパワーを持つウルトラマンとプリキャアの力を併せ持つ光の戦士。この形態はいわばパワーアップ形態であるがナイトの変身を無視して直接ホーリーナイトに変身する事が可能。ただし消費のエネルギーが凄まじく1日に1度しかホーリーナイトには変身できないという弱点があり一度ホーリーナイトの力を使うとアンナは3時間はプリキュアに変身する事は出来なくなってしまう。

変身アイテム&専用武器
ホーリーパヒューム
ホーリーナイトへと変身するために専用アイテム。ナイトに変身している状態でも使用は可能でありナイトからまたはホリーナイトに二段階変身や直接ホーリーナイトに変身する事が出来る。

ホーリーロッド
ホーリーナイト専用武器。ブロッサム、マリン、ムーンライトのフラワータクトと類似しているがクリスタルドームがない事は最大の特徴。

必殺技

プリキュア・ホーリーフェルテストーム
ホリーナイト単独の最強必殺技。白い浄化光線で心を持つ敵には憎しみ、怒り、悲しみなどの負の感情を浄化させることで身体を傷つ

けることなく戦意を喪失させる。またブロッサム達には通用しない人工的に造られたロボットなどはを存在そのものを消滅させる事が出来る。ただし消費するエネルギーの量は凄まじくホーリーナイト自身の残りのエネルギーによっては不発に終わる可能性が極めて高く最後の切り札として使われる。

ホーリー・ディスエイブルメント
敵の光線系の攻撃をを無力化する防御光線。この攻撃の前にはプリキュアの特殊攻撃、ウルトラマンの必殺光線でさえも無力化されてしまう。ただし物理的な攻撃には無意味であるため光線による攻撃を防ぐのみに使用は制限されてしまう。

ホーリーシールド
サンシャインのサンフラワーイージスと同系統の技。敵の攻撃を跳ね返す事が可能であるがエネルギー消費が激しいため長くは維持できない。

ホーリーシュート
手裏剣のような白色光線。ティガ達のハンドスラッシュ系統の技。威力は低いが連射が可能で手数と素早さに優れる。

第３４話地球解放軍編？「攻防と休戦」（前書き）

前回までのあらすじ～
シザース達の脅威の力に手も足も出ないカブトとブロッサム。ピンチにマリン達がかけるがそれでも形勢は変わらずにカブトとフェアリーがシザースと王蛇に追いつめられてしまった・・・・。
絶体絶命の大ピンチを迎えた大人と夕を救ったのは新しいプリキュア達のであった。

第３４話地球解放軍編？「攻防と休戦」

突進してシザースと王蛇の拳とキュアドリーム率いる新プリキュア軍団の拳がぶつかると爆発が起きて辺りは爆風に包まれていく。双方ダメージは皆無で一度離れると再び睨み合い静寂が始まる。
シザース「ふぅん・・・何人増えようが俺達の計画の邪魔はさせん。」
電子音「ストライクベント」
シザースはもう一枚持つストライクベントのカードをベントインして右腕にシザースピンチを装備する。
王蛇「私達の行く手を阻むのなら例えどんな相手であろうとも粉砕するのみ！！！」
電子音「ソードベント」
続いて王蛇がデッキから唯一の武器であるソードベントのカードをベのバイザーに装填しベノスネーカーの鋭い尾を模した剣ベノサーベルを召喚し装備する。
コズミック「エルス・・・彼からシザース達のデータを受け取ったのわね？そのデータから貴女なりの数値の様相は出来るかしら？」
エルス「はい。恐らくボルキャンサーとベノスネーカーのＡＰが６０００以上であると推定されます。そこから考えるとかなりの人間を餌にした可能性が高いでしょう」
エルスは自分達の協力者であるとある男から貰ったシザース達の基礎データからボルキャンサーとベノスネーカーのＡＰを割り出した結果ボルキャンサーは通常の３０００から倍以上の６０００にまで強化されたのではないかと推測する。コレだけ強化されているという事はいくら自分達でも彼らを止める事は難しいかもしれない。
シザース「ふん・・・作戦タイムか？だがそれも無駄な事だ！！！」
シザースと王蛇は武器を片手にもう一度突進をするが彼ら２人の前に闇の扉が現れ一人の人影の姿が出てきたのだった。その姿を見た

コズミック以外の面々は驚いた。
シザース「!?・・・コレは扉?・・・・・!?お前は」
ピーチ「!!!!・・ジェニス!!何故此処に?」
ジェニス「私達はやはり切っても切れない宿命にある様ねキュアピーチ・・・今度こそ貴女を倒し私は自分の存在意義を手に入れる!!!」
ピーチを睨みながらジェニスはそう言う。ピーチとジェニスには何か深い因縁があるのだろうか?。
シザース「ジェニス?・・・・お前はダークのもとで待機しているはずではなかったのか?」
ジェニス「・・・・そのつもりだったが思わぬ客人が来たのなら相手をする必要があるだろう?・・・言っておくがキュアピーチにだけは手を出すな!!!・・・奴は私の獲物だ。誰にも邪魔はさせない!!!」
王蛇「・・・・・何かわけありの様ね?・・・分かったわ。その代わり残りのメンバーは私達が片付けるわ。それで文句はないわね?」
ジェニス「好きにしなさい・・・・私はキュアピーチさえ倒せればそれでいいのだから」
シザース「ふん。決まりだな?・・・・」
話は終わりだとシザースと王蛇はキュアピーチをジェニスに任せシザースはエルスとドリームとコズミック、王蛇はルージュとローズにターゲットに絞り戦いを始める。

その頃ライアとガイはブロッサム達残りのプリキュアを片付けようとメタルゲラスとエビルダイバーと協力し強化した力の差を見せつける。
ガイ「はぁああっ!!!!!!」
ブロッサム「きゃぁあああっ!?」
マリン「ブロッサム!!!」

メタルゲラス「グルルルルル！！！！」
マリン「！？・・・しまっ・・・うわぁあああああっ！！！！」
ガイのメタルホーンにブロッサムがメタルゲラスの突進にマリンが飛ばされてしまいコンクリートの地面に身体を叩きつけられてしまう。
セイバー「ブロッサム！！、マリンっ！！！・・・よくも二人をぉ！！」
セイバーはガイを睨みつけると銀色の剣と金色の剣を手に取りガイを斬りつけるがガイはメタルホーンでそれを受け止める。
ガイ「流石はキュアセイバー・・・聞いたと通りだね？だけどボク達がなんのために犯罪者を捕食させてモンスターと自分を強化したか知っているかい？それはプリキュアの中でも危険人物である君を倒す力を得るためさ」
セイバー「！！！。・・・そのためだけに貴方達は沢山の人々の命を利用したというの？」
ガイ「そうさ。でも勘違いはしないでほしいな。ボク達はあくまでも犯罪者のみを餌にしただけの事さ・・・その事に何か問題あるのかな？」
セイバー「・・・犯罪者のみね・・・・その目的は悪人が許せないから？」
ガイはメタルホーンをのツノを光らせながらセイバーの問いに優しい口調でそう答えた。セイバーは彼の答えに哀しい目をしながらそう聞き返す。
ガイ「そんな単純な問題じゃないさ・・・・ボク達の本当の目的をこの場で聞けばボク達の気持ちを君なら理解できると思ってるけど？」
ブロッサム「！？（セイバーに彼らの気持ちが分かる？・・・どういう事なの！？）」
セイバー「・・・・確かに貴方達は純粋な悪人とは違う何かを感じてる。でもそれが何であれ私はプリキュア・・・その役目は人々を

守る事!!!・・・今の私は過去の私とは違う・・・私は大切な人の誓いを絶対に忘れるわけにはいかない!!!」
ガイ「そうかい・・・残念だよ。本当に残念だ・・・仲間にできると思ったのだけど」
セイバーは双剣を見下ろしながら静かな口調でそう言った。セイバーの秘密を知っているガイはメタルホーンをセイバーに突き付けるがセイバーは双剣を盾にしてそれを受け止める。今まで彼と戦った中で感じ取った力加減で防ぎきれると思ったのだが・・・。
セイバー「はっ!!!・・・ぐっ!??・・・な、なんてパワーなの!?」
ガイ「まさか今までのが本気だと思っていたのかい?・・・・序盤は手の内の探り合いをするのが戦略の基本だよ・・・さぁ～果たして君一人の力でこのガイの力に耐えきれるかな?」
セイバー「ぐぅうっ!???」
セイバーの喉元に徐々にメタルホーンの鋭利な刃が突き付けられようとしている。双剣で受け止めながらも力ではガイの方が上であるため腕がしびれて手が震え始めて手の自由がだんだん利かなくなってきた。
ブロッサム「やぁあああぁあっ!!!!」
ガイ「ぐあぁっ!?・・・今度は君(きみ)か?へぇ～まだそんな体力が残っていたのかい?メタルゲラス!!キュアブロッサムにターゲットを絞って攻撃しろ」
後少しの所でブロッサムの飛び蹴りがガイの背中に炸裂してセイバーに逃げられてしまった。ガイはこうなれば完全に分断してくれるとメタルゲラスにブロッサムを集中攻撃させるのだがそのメタルゲラスに水が放たれてメタルゲラスはミラーワールドに戻ってしまう。
マリン「アタシがいる事忘れないでよね!!!」
ガイ「ふっ・・・やはり君達は面子がそろうと厄介だ・・・はぁあああっ!!!!!」
ガイはメタルホーンで3人に襲いかかるが徐々にガイに有利だった

流れはブロッサム達にも傾き始める。一人ならば他愛もないが面子がそろうと想像以上の力を発揮するのがプリキュアであるとダークから聞かされていたが此処までも計算を狂わされるとは・・・ガイは何としても此処でブロッサム、マリン、セイバーのうちで1人でもいいから倒そうと全力で襲いかかる。

ライア「はぁあああっ!!!!!」
サンシャイン「うわぁああっ!??」
ライアのエビルウィップで向ってきたサンシャインを叩き飛ばす。
サンシャインは受け身を取ると体勢を立て直す。
ムーンライト「サンシャイン大丈夫!?」
サンシャイン「はい。あの鞭がある限り近づく事が出来ない・・・何とかしないと。」
ナイト「それなら私が囮になる。だから2人は隙を見て彼に攻撃を」
サンシャイン「でもそれじゃナイトに危険が」
ナイト「私は大丈夫♪。だから気にしないで二人は思いっきり戦って!!!」
ムーンライト「分かったわ。ナイト頼んだわよ!!!」
ナイト「はい!!!」
ナイトはイリュージョンソードを発生させてライアに突進する。ライアはイリュージョンソードを盾の役割も果たせるエビルバイザーで受け止める。
ライア「そんな武器も出せるのか?・・・ならそれを使わせてもらおうか!!!」
電子音「コピーベント」
ライアはナイトを飛ばすと一枚のカードをベントインする。すると彼の手にもう一本のイリュージョンロッドが現れてイリュージョンソードが彼に装備された。
ナイト「なっ!?・・・私の武器をコピーした?」
ライア「驚いたか?・・・ははぁ!!・・・まだまだこんなもんじ

ゃないんだぜ？」
ナイト「くっ！？」
ナイトは力負けして膝をついてライアのイリュージョンソードを自分のイリュージョンソードで受け止める。ガチガチという金属音が響く。力で勝るライアの黒い剣がナイトの身体に近づいてい来る。
ナイト「・・・ふっ」
ライア「！？・・・何が可笑しい？」
ナイト「別に・・・此処まで貴方が単純だと思ったら・・・ちょっとね？」
ライア「！？・・・・・」
あと少しで切り刻まれるというこの状況でナイトは笑みをライアに見せてきた。ライアはその事を疑問に思い左を見る。
サンシャイン「サンフラワーイージス・インパクト！！！！」
ライア「！？・・・何っ！？ぐぉおおおおっ！！！！？？？」
なんとそこにはサンシャインがいて自分の目に前に特大サイズのサンフラワーイージスを発生させている所だったのだ。そしてそのままサンフラワーイージスの掌底をライアに叩きつけた。
ムーンライト「ムーンライト・シルバーインパクト！！！！」
ライア「！？・・・ぐぁぁあああああっ！？」
飛ばされた方向にはムーンライトがいて拳に銀色のエネルギーを溜めていて自分の所に飛ばされたライアに向けて掌底を叩きつけてライアをふっ飛ばした。
ライア「ぐっ！？・・・・ナイトは囮だったのか・・・くっ！！！」
ライアは飛ばされた状態から受け身を取るもダメージはかなりのものであった。逆転したとムーンライト達はライアに向かう。

シザース「はぁあああああっ！！！！！」
ドリーム「うっ！？・・きゃぁあっ！！！！」
シザースピンチとクリスタルフルーレがぶつかり合う。だがシザースは鋏である事を活かしてフルーレを挟んでドリームを投げ飛ばす

と宙に舞った彼女をシザースピンチで斬りつけた。
エルス「ドリーム!!!!!たぁあああ!!!!!」
シザース「ふぅん・・・・行(ゆ)けボルキャンサー!!!!」
ボルキャンサー「キシャァアアアアアアアッ!!!!!!」
エルス「なっ!?・・・ああぁあああっ!!!!!」
シザースはエルスが専用武器ライトニングロッドを巨大な剣にした状態で手に持ちシザースに向かうがミラーワールドで待機させていたボルキャンサーにエルスの攻撃を妨害させる。
コズミック「エルス!!!!」
シザース「ふぅん・・・アレだけ大口を叩いておきながら貴様らの力はこの程度か?ははははははっ!!!!!!」
コズミック「くっ!!!!!」
シザース「図星の様だな?・・・ならばここで消えるがいい!!!!!」
シザースはもう一度ボルキャンサーを呼び寄せて2人掛りでコズミックを畳みかけようとするが・・・。
ドリーム「はぁあああっ!!!!!」
シザース「!?・・・ほう?まだ動けるとは流石だな?キュアドリーム」
コズミック「ドリーム!!!!」
ドリームがギリギリで止めるとそのまま彼を受け流す。シザースは一度離れて再び睨み合いが始まるがすぐにシザースが口を開いた。
シザース「・・・分からんな。何故貴様らプリキュアは身を張って他者の為に戦える?・・・・何故だ?お前達に何の幸福がある?」
ドリーム「私達は幸福なんて求めてない。ただ誰かが傷つくのを黙って見てられないから・・・皆の大切なものを壊す事を許せないから・・・ただそれだけよ!!!!」
シザース「そのためだけに・・・お前達は身を犠牲にしてるというのか?」
ドリーム「そうよ」

シザース「そうか。ならばお前らはある日を境に権力者に自分の大切な人や大切なものを全て奪われたとしてもそのセリフが言えるというのだな？」
シザースは突然3人に意味有り気な問いをしてきた。ドリーム達はさっきまで戦っていた様子とは全く違うシザースに困惑する。
ドリーム・エルス・コズミック『！？』
シザース「答えろ！！言えるのか？」
エルス「それは・・・・」
シザース「ふぅん・・・何も言い返せんか。なら俺の出した答えを教えてやろう・・・答えはＮＯだ。何故ならお前たちがやっている事は自分達の自己満足に過ぎんからな」
ドリーム「そんな事ない自己満足なんかじゃない！！！」
シザース「違うな。お前達が戦う本当の理由・・・それは自分達が正義の味方だと他者から称賛される自分に酔っているだけだ・・・お前達は言葉では否定しても心の奥底では無意識にはそうなる事を望んでいる」
何も言い返せないドリーム達を鼻で笑うとシザーズは自分の理論を彼女達にぶつけて心を揺さぶる様にそう言うがすぐにドリームが反論してシザースを黙らせる。その態度を見てシザースは確信をついたようにドリーム達の戦う理由を自己満足だと言って嘲笑う。
コズミック「シザース・・・貴様ぁっ！！！」
シザース「・・・俺達はある日気がついたんだよ・・・自分の身を犠牲にしても人は自分が肥え太るために平気で他者を裏切り傷つける・・・そんなが簡単に出来るようになるほど人は落ちる所まで落ちた。どんなに他者の為に頑張ろうとも目障りと思う力を持つ権力者に潰される・・・それを正すには全てを破壊するしかない・・・・だからこそこの世界の全てをリセットしＯからスタートする事こそが今俺達がする事だとな！！！」
コズミックはシザースを睨みつけながらも低い声で唸った。だがそれに続きシザースは自分達がするべきであると信じた事を口にした。

彼らが此処までして世界をリセットする理由が分からない3人は戸惑いが隠せない
コズミック「どうしてそこまでして！！！」
シザース「話した所で貴様らには永遠に理解出来ん。・・・俺達の過去など話す価値もない！！！」
シザースはシザースピンチを光らせながらドリーム達に襲いかかる。ドリーム達は彼の抱える深い負のオーラを感じながらも相手が人間である事を考えて本気で戦う事はしなかった。

王蛇「はぁあああああっ！！！！！」
ルージュ「やぁあああっ！！！！」
ローズ「でやぁあああああっ！！！」
王蛇ＶＳルージュ&ローズの女性同士の戦いは均等を崩していなかった。ベノサーベルの一撃をルージュとローズは時には受けとめ時には避ける事でダメージを最小限に抑える。王蛇は2人の攻撃をベノサーベルやベノスネーカーを利用し受け流す。この様な流れが繰り返され互いに決定的なダメージを与えてはいなかった
王蛇「ちょこまかと・・・ベノスネーカー！！！」
ベノスネーカー「シャアアアアアアアアッ！！！！！」
このままでは埒が空かないと王蛇はベノスネーカに毒液をまき散らせる。1浴びでもすればプリキュアともいえども大ダメージは避けられない。ルージュとローズは毒液を避ける為に散る。
王蛇「やぁあああああっ！！！！？？？」
ルージュ「！？・・・あああぁあああああっ！！！！！」
毒液は囮だった。本当の狙いはバラバラにして1人ずつにダメージを与える事だったのだ。
ローズ「ルージュ！！！！」
王蛇「人の心配してる場合？はぁああっ！！！！」
ローズ「きゃぁあああああっ！！！！？？？」
王蛇「ふん・・・攻撃は強くても防御が疎かでは敵に勝つ事など

出来ない・・・それを思い知りなさい!!!」
ルージュ「つ、強い・・・流石に元々のポテンシャルが高い王蛇の力・・・こうなったら一気に決めないとヤバいね」
ローズ「ええ。幸い今の王蛇はファイナルベントは使えない。なら私達の必殺技を合体させれば」
ルージュ「でもただ出すだけじゃ彼女には通用しない・・・なら此処は一つ頭を使おうじゃん!!!」
ローズ「モチ。行くわよ!!!!!」
王蛇「まだ来るの?しつこいわね」
王蛇はいい加減に諦めろとでも言う様にベノサーベルを光らせながらローズ達に近づく。戦術では王蛇が有利だがローズ達には秘策があるようだ・・・・。

ジェニス「今日こそお前には消えてもらう・・・私が私になるために!!!」
ピーチ「・・・ジェニス」
キュアピーチをジェニスは睨みつけていた。その彼女を見てピーチは複雑な顔だった。ジェニスがどうしてキュアピーチに執着心を抱くのか・・・それには深い闇があった。彼女はとある世界で生み出された人造人間だったのだ。そしてその元になったデータの中にキュアピーチのデータが使われた。それが故に彼女は追害を受けてきた。
ジェニス「お前達がどうしてウルトラマンティガの世界に来たかは想像が出来る。上原大人の抹殺及び邪神の復活を止めに来たのだろ?」
ピーチ「邪神!?」
ジェニス「!?・・・なんだ知らないの?かつてこの世界に存在した超古代文明の世界を闇に閉ざした大邪神が存在した事を・・・その邪神の力は私たちも恐れる力」
ピーチ「ダークエンジェルズでさえ恐れる力・・・それは一体」

ジェニス「さぁ～ね？お話は此処までよ・・・今日こそお前を倒す！！！！」

お話は終わりだと二人は光を放ちながらぶつかり合った。力も技術も全て互角であるのだがピーチの表情は暗かった。

王蛇「ほらほらぁっ！！！最初の威勢はどこに消えたのよ？」

ローズ「うわぁあああああっ！！！！」

ルージュ「ローズ！！！ぐっ！？？・・・やぁあああっ！！！！」

王蛇「甘い！！！はぁあああっ！！！！」

王蛇の攻撃の勢いはどんどん加速していきルージュとローズを追いつめる。ローズはベノサーベルの一撃が直撃して飛ばされてしまう。そしてそのままルージュに刃を突き付けルージュのファイヤーフルーレの刃とぶつかる。受けとめられはしたが王蛇はルージュの足を刈り取り体勢を崩すさせてベノサーベルを彼女の首に突き付けた

王蛇「私の勝ちね？」

王蛇は勝利を確信した声を上げる。だがこれこそが二人の狙いであった。

ルージュ「ローズ今よ！！！」

ローズ「邪悪な力を包み込む、バラの吹雪を咲かせましょう！！ミルキィローズブリザード！！！！」

王蛇「ちっ！！・・・バカね～隙だらけじゃない？」

ルージュ「それはアンタもね」

王蛇「！？」

ルージュ「プリキュア・ファイヤーストライク！！！！」

王蛇「目的はコレか！？・・・・うわぁあああああぁあっ！！！！」

王蛇はすぐに飛びあがりブリザードを避けるがその後ろにルージュがいて王蛇にファイヤーストライクを放った。

ルージュとローズの作戦。それは1人が囮になり王蛇と零距離に組み合い動きを止めている時にもう一人が必殺技を放ち王蛇にワザと

避けさせる。そしてその隙に後ろから囮になったもう一人が必殺技を叩き込み必殺技で挟み撃ちにするというものだった。流石の王蛇もファイナルベントを使いきったこの状況では2つの殺技には対抗できず直撃して爆発が起こす。王蛇の変身は解除されそこには夏実の姿があった。

シザース「!?・・・夏実っ!!!!」

ガイ・ライア『!!!』

王蛇が倒された事に気がついたシザース達3人は戦いをやめ王蛇の変身者の夏実の元に走る。

夏実「太陽さん・・・すみません」

シザース「大丈夫か?・・・くっ!!!今日の所は引いてやる。だが夏実を傷つけた事は許しはせん!!!!」

シザースは夏実を抱きかかえてガイとライアと共に闇の扉を潜ってその場から姿を消した。その様子を見ていたジェニスもピーチとの戦いを中断する。

ジェニス「今日のお楽しみは此処までね。でもコレは始まりに過ぎないわ・・・次に会う時がお前達の最期だ!!!」

ジェニスはそれだけ言うと姿を消した。

つぼみ「大人さん大丈夫ですか?」

大人「ああ。何とかね・・・それよりも君達はプリキュアなのかい?」

つぼみは一番に大人の元に寄ってきた。大人はつぼみを安心させるように頭を撫でて落ちつかせると立ち上がる。

???1「はい!!。私達は・・・真夜さんと同じ別世界のプリキュアです!!!自己紹介がまだでしたね。私は夢原のぞみです」

???2「私は夏木りんです」

???3「美々野くるみです」

???4「桃園ラブです」

???5「私は光明寺御子です。」

？？？６「星川勇奈。大人君・・・君達には１度会った事があるはずだけど？忘れちゃったのかな？」
大人・琢磨・傑・勇『・・・・・・・・・ああああっ！！！！』
琢磨「あ、そう言えば何処かで見た事あると思ったら・・・前に見た事ある不審者！！！」
勇奈「誰が不審者だぁあっ！！！！」
自己紹介が終わり名前と顔が頭に入る。そう言えば自分達と年が変わらないこの女性は前に見た事があった事を大人達は思い出した。
そして琢磨がボケるがそれにすかさず勇奈のツッコミが入る。
つぼみ「ちょ、ちょっと待ってください。じゃあのぞみさん達は別世界の同一人物ってことなんですか？」
のぞみ「そう言う事だね。なんか変な感じだけど」
えりか「ていう事は・・・そっちの世界にはアタシ達もいるの！？」
ラブ「そう言う事になるね」
いつき「な、なんだかホントに変な気分だね」
ゆり「ええ。でも確かにそれならば説明は出来るわね。私達も知らないプリキュアの真夜や御子の存在を」
大人「それにしても・・・奴らは一体・・・・マスクドライダーシステム以外のライダーで尚且つ強大なパワー・・・・モンスターに人を食わせていたと言っていたけど・・・・」
御子「彼らが言っていた事は本当です。詳しい事は此処で話すのも何ですから何処か場所を移したいんですが・・・・」
つぼみ「でしたら植物園はどうでしょう？・・・・戦いの疲れもありますし」
大人「そうだな。よし植物園に行こう」
一行はつぼみの提案で植物園に向かうこととなった。そこで離されるシザース達の力の秘密と裏で操る敵の存在を大人達は知ることとなるのだった。

第３４話地球解放軍編？「攻防と休戦」（後書き）

人が増えると描写も大変になりますね～（汗）いや疲れた疲れた♪

次回の構想はまだできていませんがすぐに続きを上げようと思います～

ではでは次回のお楽しみに♪

第３５話地球解放軍編？「現状」（前書き）

前回までのあらずし～
シザース達に追いつめられた大人達を救ったのはつぼみ達とも面識のある４人のプリキュアと２人の新プリキュアであった。
シザース達は今回は始まりに過ぎないと言う言葉だけ残して一時休戦となった。

第３５話地球解放軍編？「現状」

大人達一行は植物園にいた。と言うのも自分達を助けてくれた夢原のぞみ一行にシザース達の情報を貰う為に集まっていたのだ。
大人「つまり君達は真夜と同じ別世界のプリキュアであり今回の事件を余地して俺達を助けに来たって言うわけだ？」
のぞみ「そういうことです！！！」
今回の事件はどうやら大人達が知りえない何か大きな力が働いている問う事らしい。大人はジザースの強さを思い起こしていた。
大人「地球解放軍・・・仮面ライダーシザース」
つぼみ「彼らはどうしてあそこまで世界を憎んでいるんでしょ？それにマスクドライダーシステムとは別のライダーの力・・・今までの相手とは違い強大すぎます。のぞみさん達はあの力について何か知っているんですか？」
大人はシザースである太陽の言葉を思い出していた。《世界の全てをリセットし０からスタートする事こそが今俺達がする事》・・・・・このセリフが頭から離れなかった。彼らはクレイズの様に純粋な悪者とは思えないのが引っ掛かっていたのだ。つぼみの質問に御子は自分達が知っているシザース達の力の正体について説明を始める。
御子「仮面ライダーシザース・・・彼らは大人さん達が変身するマスクドライダーシステムとは別物です。あれはミラーワールドの力を使ったミラーライダー」
琢磨「ミラーライダー！？」
御子「はい。ミラーライダーとは元々は別の世界である男が自分の妹に新しい命を与えるために造られたものなんです」
御子は語る。ミラーライダー誕生の経緯を。その説明に大人達は食い入る様に聞いている。
傑「妹に新しい命？・・・どうやって？」
御子「オリジナルの世界ではミラーライダーは１３人存在しており

まして最期の1人になるまで戦う事を強要させます。そして最期の1人となった者には強大な力が得られるです。つまり殺し合いをさせることで一番強い命を自分の妹に転換させる」

夕「そ、そんな非人道的を本気で!?」

夕は思わず大声で聞いた。普通の思考の人間ならば例え妹のためとはいえ他者の命を転換させるなどと言う事は考えもしないから無理もない。御子は冷静に答えを返した。

御子「はい。でも結局は妹に拒まれて失敗に終わりました。・・・・・」

大人「つまりは・・・今回の敵はどういう経緯かは分からないがこの世界に存在しないミラーライダーの力を手に入れたわけだ」

大人は話を整理を始める。つまりはシザース達はマスクドライダーシステムではなく自分達が知らない強大な何者かと手を結び力を手に入れたと言う事になる。つまりはあの強大な力をこの世界の人間が作る事が出来ないのは当然だし大人達が苦戦を強いらるのも必然だったと言う事なのだ。

御子「はい。それに私達の協力者であるある方から貰っていたデータから推測した結果を言うと仮面ライダーシザースがカブトに勝つ事は普通ではありえないんです。」

つぼみ「!?・・・ちょっと待ってください!!!だったらどうして大人さんや夕さんはシザースに負けたんですか?現に2人は殺されかけたんですよ!?」

夕「そうよ!!貴女達が来なかったらアタシ達はシザース達に殺(や)られてた」

つぼみと夕は信じられないよ言う様な顔をした。現に最初に大人とつぼみは彼らと闘ったがカブトの力をあしらい尚且つその後マリン達が来てもカブトとフェアリーはシザースと王蛇の必殺技に競い負けてしまい危うく命を奪われるとこにまでなったのだから無理もないだろう。つぼみと夕をりんとくるみが落ちつかせて話の続きを語る。

くるみ「・・・確かにそう。”普通”ならね」
琢磨「どういう事何だ？」
御子「シザース達が召喚したモンスターがいましたよね？あれはミラーモンスターと言います。ミラーライダーはミラーワールドという現実世界とは別の空間にに生息するモンスターでしてミラーライダーはモンスターと契約して力を発揮します。」
大人「じゃあモンスターが強ければ強いほどライダーも強いってことか？」
りん「単純に言えばそうなります。」
つぼみ「でも元々は弱いってことですよね？・・・じゃあ何でアレほどのパワーを？」
御子「シザースが契約しているボルキャンサーは防御力こそかなり高いですが攻撃力はかなり低いんです。だから本来ならばカブトを追いつめることなどあり得ないのです・・・でもモンスターを強化することでライダーのパワーを底上げする事が出来ます」
えりか「モンスターを強化する？・・・そんな事出来るの！？」
えりかが本当なのかと言う様な顔で聞いてきた。それに勇奈が答える。
勇奈「出来るのよ。ミラーモンスターを強化する方法が２つだけある。１つはミラーワールドに生息する野良ミラーモンスターを倒して得られるモンスターの生体エネルギーを契約モンスターに捕食させる事・・・そしてもう１つが・・・」
大人「人間をモンスターに食わせる事か？」
つぼみ達一同『！！！！！！！』
勇奈の言葉をさえぎり大人がそう言った。大人のセリフにつぼみ達はハッとなった顔になり青ざめた。・・・つまりはクレイズ事件の裏での行方不明事件の真相はこう言う事だったのである。都市伝説となっていた鏡の中の怪人の正体はミラーモンスターでありそれが人々を捕食して自分達の戦力を強化だったのだ。
御子「・・・そう言う事です。元々ミラーモンスターは人間を餌

にすることで生命を維持し自分の力も強化します・・・つまりシザース達は人間を大量にモンスターに捕食させることであそこまで強化されたと言う事になります」

いつき「そ、そんな・・・じゃあ本当に彼らは人間をモンスターの餌に!?」

ゆり「彼らはそこまでして力を得たのはどうして?・・・まさか私達を倒すためだけに!?」

全員が顔が青白くなっている中でいつきが信じられないと言う声を出した。それにゆりは推測を加えて御子に自分達を倒すたが為にそんな非道な事をしてきたのかと御子に問いただす。

御子「恐らくはそうだと考えられます・・・いくらライダーの力があったとしてもスペックではカブト達には敵いませんからね。故に彼らはモンスターを強化して自分達が動くべき時を影から見計らっていたんでしょう」

大人「成程な・・・行方不明事件じゃ流石の俺達も嗅ぎまわらないし奴らのモンスターの事が噂になっても現物を見ないといくら俺達でも信じない。・・・盲点をついていたわけだ・・・やられたよ・・・まんまと敵を強大なモノにしていたんだ俺達は」

大人はため息をつきながらそう言った。クレイズ事件から続いていたあの平和も実は敵の準備期間であった言われれば当然の反応かもしれない。あの平和の中で逆に新しい敵の存在を感知しろと言われて出来るわけがない。しかし行方不明事件が表面化している中で何かおかしいと思っていたがそれも”失踪”や”行方不明”となれば警察ではない自分達には専門外であると気にかけないのが普通だ。

大人「あと1つ気になった事がある。ジェニスって何者なんだい?もしかして彼女がシザースの地アkらを与えた黒幕?」

御子「ええ。彼女は今回の事件の首謀者であるシザーズ達やあなた達が戦っている相手とは別に、事件を影で操っている存在の仲間です。憎しみのタクトを振るう指揮者(コンダクター)の」

大人「・・・そんな奴がいるとは・・・何者だいそれは」

御子「その組織の名はダークエンジェルス・・・世界への憎悪に囚われ、全パラレルワールドのリセットを企む存在です」
つぼみ「世界のリセット!?・・・そんな事が出来るんですか?」
勇奈「出来るのよ。ラグナロクストーンの力があれば」
琢磨「ラグナロクストーン!?」
勇奈「そう。ラグナロクストーンとは此処とは別世界に存在した石・・・遡る事４００年前にドツクゾーンの支配者ジャアクキングが全世界に渦巻く負のエネルギーを結集させて創り出したといわれる破滅の魔石。だがその力はあまりに強大な力ゆえにジャアクキングさえも制御しきれず暴走してしまった。そしてそれは初代プリキュアたるキュアアンジュによって封印されたといわれるわ。私もおとぎ話上の伝説の産物って思ってたけど実在したの。悪魔の石がね」
いつき「じゃあダークエンジェルスはそれを使って全パラレルワールドにリセットを?」
のぞみ「うん。でも安心して私達はそれをさせないためにこの世界に来たんだから!!!」
のぞみはカプセルを取り出した。この中にラグナロクストーンの力を無力化させる事が出来るキーアイテムが入っている。
勇奈「大人君・・・君はウル・・・」
琢磨「!!・・・あぁああっ!!!後ろに虫が!!!!」
勇奈が大人の決して知られていけないである秘密を言う前に琢磨が機転を利かせてえりかが苦手である虫がいると言って一同をワザと驚かせる。
えりか「えぇ〜む、虫!?」
勇奈「!?・・・虫なんて何処にも・・・・」
大人「勇奈さん、ちょっといい?」
勇奈「え!?」
その隙に勇奈を離れさせるべく大人は彼女と共にその場から姿を消すのだった。
のぞみ「!?・・・どうしたんだろ?大人さん達がウ・・・・」

大人は勇奈を連れてその場を離れた。その様子に驚いたのぞみ達は勇奈が言いかけた大人達のセリフを口にしかけた所を傑が入る。
傑「おっほん!!!・・・・すまないがのぞみちゃん達もちょっといい？」
のぞみ達一同『え!?』
のぞみ達一同は傑に連れられて大人と勇奈の元に続く。全員一体何なんだと動揺と驚きが隠せない。
琢磨「つ、つぼみ達・・・悪いけど飲み物取ってきてくれる!?」
琢磨は子の状況を何とかやり過ごそうとつぼみ達に飲み物を取って来るように頼む。そして素早く人露性質の後を追う。
つぼみ「あ、はい・・・じゃあ皆さん手伝ってください」」
えりか「あ、うん」
いつき「!?」
ゆり「・・・・」
アンナ「ど、どうしたんだろ3人とも」
真夜「（勇奈・・・ダメよそれを言っちゃ）」
つぼみ達はわけが分からないが言われるがままに飲み物を取ってこようと園内の事務室に向かうのだった。

大人「・・・頼むからつぼみ達には俺達がウルトラマンである事は黙っていてくれ!!!!」
途中で合流した真夜の入れて大人達は植物園の裏庭にいた。大人達はのぞみ達に詰め寄ると強くそう言った。その勢いにのぞみ達も押されてしまい後ずさりしてしまう。
勇奈「!?・・・もしかしてつぼみ達は知らないの?君達がウルトラマンである事を」
琢磨「そんな事口が裂けても言えるわけないだろうが!!!!」
傑「絶対にばれるわけにはいかないんだ・・・特につぼみ達には」
真夜「皆・・・・」
普段見せない大人達の態度に真夜は悟ったように声を上げた・・・

それに続き大人が口を開く。
大人「最初はただでさえ信じられなかったんだ・・・俺達がウルトラマンだって・・・もしもこの力の事がつぼみ達にバレて俺達から離れていくんじゃないかって考えると怖くて辛い・・・今の関係が壊れるんじゃないかって考えたくないんだよ・・・だから絶対に黙っていてくれ!!!」
あの時3人の秘密であると決めた理由はつぼみ達に自分達が怪物であると思われるのが怖かったからである。ライダーの力はまだ理解できたかもしれないがウルトラマンとなれば話は違う。アレほどの強大な力を自分達が持っていると知ったらつぼみ達はどう思うだろうか・・・快く受け入れてくれるのだろうか?それとも・・・・・。後者を考えると3人は怖かったのだ。今の関係が崩れてしまったらと思うと怖くて怖くて仕方ないのだ・・・・。
のぞみ「・・・・でもいつまでも黙っているつもりなんですか?・・・仲間のつぼみちゃん達を騙し続けて自分達だけでウルトラマンの苦しみを背負い続けるですか!?・・・そんなの哀しすぎますよ!!!!・・・・そうやって逃げていても自分が苦しいだけじゃないですか!!!」
のぞみは彼らの思いが間違っていると強く反論した。確かに彼らの力は強大であり普通の人間ならば持つ事さえ躊躇(ちゅうちょ)するし力を捨てたいと思うのが人情というものだ。でも彼らは逃げているだけだと・・・つぼみ、えりか、いつきから逃げているだけだと言うかの目でそう言った。
琢磨「それは・・・そうだけど・・・・」
りん「間違ってますよ。つぼみ達は貴方達の苦しみを理解できるはずです・・・だって貴方達は何度もつぼみ達や数多くの人々の危機をその身を犠牲にして救ってきたじゃないですか・・・・もっとつぼみ達を信じてあげてください」
続いてりんが彼らを諭すように優しい口調でそう言った。今までだって大人達は数多くの命をその手で救ってきたはずだしつぼみ達を

助けた事だって何度もある事を思い出させるように
琢磨・傑『・・・』
くるみ「絶対に怖がったりしない・・・だって妖精と友達になれるんですよ?・・・そんな彼女たちがウルトラマンを怖がるはずはありませんよ!!!!」
大人「・・・・・」
真夜「私もそう思うな。つぼみ達は絶対に貴方達から離れたりしない・・・・大切な仲間・・・いいえ大切な人から逃げるはずないよ?」
大人達はスパークレンスを眺めた。今まで戦った事を思い出しながら・・・そしてしばらくしてスパークレンスをしまう。
大人「・・・とにかく俺達がウルトラマンである事をつぼみ達に明かすかどうかは自分で決める。だから今は絶対に言わないでくれ」
御子「分かりました。そこまで言うなら私達は黙っておきます。・・・いつか大人さん達自身からその事実を告白できる事を祈って」
大人「すまない」
大人達一同は裏にはから園内に戻る。
勇奈「さて・・・では今後の対抗策だけど彼らは話したとおりシザース達は本来ミラーワールドで戦うライダーだから今度出てきた時にミラーワールドに逃げられたらコレを使って。」
つぼみ「これは!?・・・ブレスレット!?」
御子「私達の仲間が開発したミラーライダー以外の戦士がミラーワールドに突入できる装置のミラーテレポーターです。これさえあれば彼らがミラーワールドに逃げられてもしばらくの間はミラーワールドで戦う事が出来るはずです」
えりか「凄いね~そっちの人はこんな物も作れちゃうんだ?」
のぞみ「うん!!凄いんだよホワイトは」
いつき「えっ・・・コレってほのかさんが作ったの!?」
りん「はい・・・一応は(汗)」
ゆり「す、すごいわね・・・・」

大人「ほのかって誰？」
つぼみ「えっとですねキュアホワイトの変身者なんですけど・・・・」
傑「・・・あ、そうだ！！！矢車さん達にもこの事を連絡しておこう」
大人「あ、そうだった（汗）よし矢車さんに電話っと」
大人達は勇奈達から様々な情報を聞きいれた。これで次にシザース達の攻撃があったとしても五分の戦いが出来る筈だ。傑の初点に思いだした様に大人は携帯で矢車に連絡を取るのだった。

その頃のとある海底ではダークが新しいプリキュアの事に驚愕していた。別世界からプリキュアが時空を超えて応援に駆け付けたとなれば無理もないだろう。
ダーク「おのれ、後少しの所で、新手のプリキュアに邪魔された・・・何なんだあいつは？」
ジェニス「奴の名は星川勇奈、プリキュアとしての名はキュアコズミック。デスリード様に刃向かい、さらにヤイバの世界では武藤蒼牙を助け、メデューサを倒し、世界の支配者と自称するコンカラードを倒したダークエンジェルスにとってはもっとも邪魔な存在であり、別の所で会ったキュアエルスの仲間だ！そして、奴は天道総司にも面識がある」
ダーク「天道総司と！？・・・ならば奴がこの世界に再び来る可能性も否定はできんか？」
ジェニス「恐らくは・・・・」
太陽「何をそんなにビクついているんだ！？」
ダーク・ジェニス『！！！』
２人の話を中断するように太陽が玉座の間に姿を見せた。
太陽「要するに俺達の敵であるだけであろう？・・・ならばこの手で粉砕するのみだ」
ジェニス「太陽・・・キュアコズミックの力を甘く見ない方がいい

ぞ?先程も言ったとおり奴はヤイバの世界で・・・」
太陽「そんな事どうでもいい!!!!」
ジェニス「!?」
太陽「例えどんな存在であろうとも俺は必ず敵を粉砕する。その為に俺はダークから闇の力を貰い受けあのカードを手にする事に成功したんだ・・・俺達は必ず計画を成功させ人間の頂点となり理想郷を造るのだ!!!!」
太陽は堂々とした態度で2人を見ながらも自分のするべく事を語る。今は此処でウダウダ言っていないで敵を粉砕する事こそ成すべきことだと力説するその態度は思わずジェニスとダークを納得させた。
ダーク「そうだったな太陽・・・君達にはクロックアップ封じのスローベント以外にもオリジナルのあのカードを渡したから負けるわけがないな?」
ジェニス「確かに・・・そうだったな。お前達にはオリジナルでは3枚しかないあのカードを1枚ずつデッキに入れてあったな。・・・・だが油断はするな?コズミック以外にもドリーム、ルージュ、ローズやピーチ、エルスの他のメンバーも強力だからな」
太陽「ふぅん分かっている。だがキュアピーチは貴様の獲物だろ?・・・それは自分で仕留めろよ?」
ジェニス「言われるまでもないな」
太陽「では次も俺達に任せてもらおうか?」
ダーク「いいだろう・・・ではジェニスはサポートを頼んだぞ」
ジェニス「はっ!!!」
太陽とジェニスは玉座の間を後した。太陽は暗い廊下を進んでいくと夏実の部屋の前に立っている勇治と耕輔を見つけて声をかけた。
太陽「夏実の様子はどうだ?」
勇治「はい。王蛇のパワーのお陰でかすり傷程度で済みました。傷も完治して今は寝てます」
太陽「そうか・・・次の作戦は俺と夏実がティガとセイバーをおびき寄せる。その間に残りの面々をお前達とジェニスがおびき寄せて

おけ」
耕輔「成程・・・先ずは敵のエースを一気に潰すんですね？・・・分かりました。適当に残りは相手をしておきます」
太陽「よし。作戦開始は明日の正午だ。それまで各人はコンディションを整えておけ」
勇治・耕輔『はい！！！！！』
３人はそれぞれの私室に戻った。明日はティガとセイバーを一気に潰すための作戦を展開し自分達の計画を確実なモノにする為に着々と行動するのだった。

矢車「何！？・・・そうか、分かった。詳しい話を後で聞かせてくれ」
影山「大人からですか？」
矢車「ああ。どうやら事の真相が分かったらしい。とにかく仕事片付けたら植物園に行くぞ」
影山「はい！！」
ＧＵＴＳ本部にいる矢車達は大人から報告を聞いて詳しい事を今夜聞くこととなった。その数分後須藤達がいる病院から連絡があり須藤と織田が意識を取り戻したらしい。２人は急いで病院に向かった。
須藤「すみません・・・こんなザマで」
矢車「いや・・命があっただけ設けモノだ・・・一体何があったんだ！？」
須藤「はい。万引きを補導した子が蟹の怪人に恐れていたんです。俺達はその怪人を倒そうとライダーに変身して戦ったんです」
影山「それで！？」
織田「怪物は追いつめたんだが突然ライダーの様な奴らが現れてクロックアップを封じられた上でやられちまった・・・・かなり強かったぜ」
矢車「ライダー・・・・マスクドライダーではなかったんだな？」
須藤「はい」

2人はあの時の思い出せる事を全て話した。今でも身体が覚えているあの圧倒的な力と身体が感じた痛み・・・・今考えたら生きているのが不思議だと思えるほどであった。

矢車「そうか・・・大人から聞いた通りだな・・・・分かった。とにかくお前達はしばらく休んでろよ?」

矢車は納得したようにそう言った。先程大人から聞いた情報と一致する。どうやら今回の事件は駄々ならぬものらしい。

須藤「待ってください」

矢車「何だ!?」

織田「動けない俺達の代わりに調べてほしい事があるだ・・・・お前達しかできない事だ」

影山「俺達にしかできない事!?」

須藤「極秘でお願いしたい事があるんです。お願いします!!!」

矢車・影山『!?』

矢車達を呼びとめた須藤はカバンからある資料を彼らに渡した。矢車と影山は何だこれと言う様な顔になっていたが須藤と織田の目付きは真剣でありただならぬ空気である事は理解できた。そしてこの資料に記されているものこそが太陽達が人間に絶望することの発端となった事はまだこの段階では気が付かなかったのだった。

第３５話地球解放軍編？「現状」（後書き）

いかん最近はこっちにのめり込んでいる・・・・早くハトプリ劇場版も書かないと（汗）

さて次回は太陽達の次の作戦が動き出します。

ではでは次回のお楽しみに♪

第３６話地球解放軍編？「太陽の過去」（前書き）

前回までのあらすじ～
シザース達が操るミラーモンスターが行方不明事件を起こしていたと御子から聞く大人達。太陽達は大人達を倒すためだけに犯罪者をモンスターの餌にしていたのだった。
その頃矢車と影山は須藤と織田に極秘にある事件の調査を依頼されることとなった。

第３６話地球解放軍編？「太陽の過去」

大人「《いつまでも逃げているんですか？》か・・・のぞみちゃんに言われてそう言われても仕方ないよな。いつかはこの力の話をつぼみ達にしないとければならないんだよな・・・つぼみ達を信じているつもりでも・・俺は・・・・」

もう時刻は深夜で月明かりが街を照らす。大人は自分の家で電気もつけずに窓で景色を見ながら1人で考えていた。のぞみ達に言われた事が身に染みていたのだ。自分達はこのままで本当にいいのか？そのジ自問自答を繰り返していたのだ。大人は分かってはいたのだつぼみは誰よりも優しく決して人を差別するような人間ではない事ぐらい・・・でも本当にいまの自分の秘密を知っても《今まで通り受け入れてくれるのか？》《本当に自分達を恐れないでいてくれるのか？》そんな事を考えると怖くて自分からは言い出せない。

大人「・・・（考えてみたら俺達が仲間になる前のつぼみも同じ気持ちだったんだろうな・・・仲間内で自分達がプリキュアだってバレないように必死になって自分の時間を割いて他人（ひと）の為に戦っていた・・・男の俺でさえこんなに苦しかったのに・・・立派だよなアイツらは）」

大人はもしかしたらつぼみ達もこんな風に悩んだ事があるのかもしれないと思いついた。自分が仲間になる前はえりか、いつき、ゆりを入れてもたった４人だけ。プリキュアとして傷ついた事も多くあったはずだ・・・なのに彼女達は力を投げ捨てることなくどんなに傷ついても戦ってきたし今だって自分達と共に自分を犠牲にして戦っている・・・・遠い過去につぼみを実の妹の様に可愛がりながらも過ごした記憶からは考えもつかない彼女のたくましさに大人は吹っ切れたような思いになった。

大人「・・・（例えウルトラマンの事がバレたとしてもつぼみ達ならきっと・・・・でも今ではない・・・その時が来るまで言うわ

けには・・・・）

だが今はその時ではない。今はその前に伝えなければならない事があった。ウルトラマンであると言う事実よりももっと大切な自分の気持ちをいつか彼女（つぼみ）に伝えるその時までは

琢磨「（信じるか・・・・そうだよな・・・仲間だから受け入れてくれる事を信じてもいいんだよな？・・・・・えりか・・・）」

琢磨は夜の街を1人バイクで走っていた。考え事があるとき彼は1人でひたすら走る事で答えを探すのだ。道を走りながら自分達が明かすべき秘密の答えを探していた。琢磨にとって今の仲間は本当に大切なものだった。ガタックとして覚醒した時は戸惑い事が多かったけどそれをえりかや大人達が支えてくれた。そして今アースとして戦っている時も仲間たちがいたからどんな苦痛にも耐えられた・・・どんな事があってもそれは変わる事はないと信じたかった。でも心のどこかでは今の絆が壊れるという懸念があったのだ。それは琢磨だけではなく大人や傑も同じだ。だからそうならない為にも自分達だけが苦しめばいいと思っていた・・・でものぞみ達の言葉を聞いて気づ化させられた事があった。今自分達がしてる事は結局は仲間から逃げている事なのではないかと・・・それは自分の弱さからも逃げている事にもなる。琢磨は走りながらも気持ちを整理する。今のままでいる事が本当の意味で仲間の為になるのかと言う事を考えながら・・・・。もしもえりかならこういう時どう言ってくれるだろうか

・・・琢磨はそれを考えながらバイクで夜の街を走り続ける。仲間の感情とは違う思いを抱く彼女（えりか）を思いながら

傑「つぼみ達は俺達から離れないか・・・この力の凄まじさを知っても本当にそうなのか！？・・・いつき・・・・俺は本当に彼女を信じていいのだろうか？・・・・」

傑は一人で希望ヶ丘にあるとある小山の丘で星を見ていた。のぞみ

や真夜に言われた言葉を思い起こしながら青い光を放つデュナミススパークレンスを見ながら本当にこのままでいいのかと考えていた。いつきならこう言う時あの太陽な笑顔を見せてくれるかもしれない・・・でももしも違ったら・・・・考えたくはないが考えてしまうのが人と言うものだ。だからこそ今まではバレない様に必死に努力してきた。でもそれは間違いだと言われた・・・・本当は自分のことしか考えていないのかもしれない・・・傑は星を見ながら考えを纏める。今の気持ちを何れ大切だと思っている彼女(いつき)に伝えられるように。

矢車「・・・組織ぐるみでこんな事を・・・・しかもこんな片付け方を」

影山「被疑者の妻は自殺し息子と娘は親戚に引き取られるもたらい回しにされてたみたいです」

矢車と影山は須藤から依頼を受けたある事件について調べていた。すると驚くべき真実が明らかとなり今回の行方不明事件の真相と思われる推測も出来上がった。

矢車「連続行方不明事件の被害者のリストには須藤からもらった疑惑の首謀者と思われる人物の名があった。今回の敵の目的は復讐だ・・・・そして復讐は終わったのだが怒りは鎮まることなくその復讐のターゲットが全人類とすり替わった・・・・。なんて皮肉な」

影山「どうします?この事は大人達にも知らせますか?」

矢車「そうだな・・・今回の敵が人間である以上は彼らも知っておいた方がいいだろう。明日会いに行くぞ」

影山「はい」

まだ断定はできないが一刻も早く大人達にも伝えなくてはならないと矢車達は整理した資料を纏める。早く伝えなくては・・・そしてこの悲しい復讐劇を止めさせなければ。

翌日の正午に太陽達は動き出した。先ずは敵のパーティーを絞るた

めに太陽と夏実のグループと耕輔、勇治、ジェニスのグループに分かれたのだった。
太陽「では作戦は予定どおり・・・お前達は協力して残りのメンバーを足止め手しておいてくれ」
夏実「その間に私達がセイバーとティガを仕留めてくるから」
耕輔「分かってますよ。俺達は出来るだけ時間を稼ぎます」
勇治「万が一失敗したら連絡しますのでその時は勇気ある撤退を」
太陽「ああ。分かっている」
ジェニス「では行くわよ!!!オペレーションウルティメイトブレイクの第2段階始動!!!!」
シザース達は止むの扉を潜り打ち合わせ通りに各人標的の元に向かう。
大人「・・・俺の思い・・・つぼみに伝えたい・・・今回の事件が終わったら必ず」
大人は昨日のぞみ達に言われた事を考えながら1日を過ごしていた。伝えるべき秘密と自分の気持ち・・・いつかは絶対に伝えなくちゃいけない。でもそのタイミングはいつなのだろうか?そんな事を考えていると・・・。
女性の悲鳴「きゃぁあああぁあああああっ!!!!!!!」
大人「!?・・、ま、まさかミラーモンスターが!?」
大人は急いで悲鳴のあった方向に向かうとボルキャンサーが女性に迫り襲いかかろうとしていた所だった。大人はボルキャンサーに飛び蹴りして怯ませて女性を逃がす。
大人「大丈夫か?・・・早く逃げろ!!!」
女性が逃げた事を確認してボルキャンサーがいた方を見るとボルキャンサーは既にミラーワールドに逃げていた。そして後ろから足音が響いてきた。
大人「!?・・・貴様!!!!」
太陽「ふぅん・・・やはり来たか?バカな奴め・・・お前には悪いが今日この場で消えてもらおうか!!!!」

後ろから上下黒の衣服を着た太陽が姿を見せた。あの女性を囮に大人をおびき寄せたのだ。
大人「黙れ。お前が何を考えているかは知らないがこれ以上は誰も犠牲にさせない！！！！」
太陽「出来るかな?今の貴様に」
太陽はシザースのカードデッキを取り出して鏡に掲げて変身ベルトVバックルを装備する。それに合わせて大人もライダーベルトを装着しカブトゼクターを呼び寄せる。
大人・太陽『変身！！！』
電子音「ＨＥＮＳＩＮ」
同時に仮面戦士の鎧を身に纏い睨み合う。風が吹く中も静寂が続く・・・。
シザース「貴様はミラーワールドに入る装置を手に入れたそうだな？・・・なれば我々に相応しい戦いの場に招待してやろう・・・・来い」
カブト「望むとこだ・・・ミラーテレポーター起動！！」
シザースは先に行って待っていると鏡の中に姿を消した。カブトは御子から受け取ったミラーテレポーターを装備して起動させて同じ要領でミラーワールド内に突入する。
カブト「っ！！・・・ここがミラーワールドか？・・・・誰もいない」
先にカブトが鏡の世界ミラーワールドに到着した。見た目は自分達の世界と大差はないが鏡の世界と言う名の通り看板などは左右反転であり人間の姿は見られなかった。そしてしばらくすると銀色のスクーターの様な乗り物がカブトの目の前に現れると底からシザースが堂々とした態度で姿を見せた。
シザース「クロックアップが使えない貴様では俺には勝てん・・・・今日この場で貴様を倒し俺達の計画を確実なものにする」
カブト「例えクロックアップが使えなくても俺は負けるわけにはいかない・・・行くぞ！！」

シザース「来い！！！」
カブトはクナイガンを構えシザースに向かう。対するシザースもシザースバイザーを構えながら応戦する。

つぼみ「シザース達の事が気になって授業どころじゃないですね」
えりか「言えてる。・・・こうしてる間にも敵は次の手を考えてるかもしれないもんね」
いつき「彼らがあそこまで人を憎み理由は何なんだろう？・・・人を餌にしてまで力を欲するのだからそれ相応の理由があると思うんだけど」
その頃つぼみ達は学校で授業を受けていた。彼女達は高校生である以上は平日は学校に行かなくてはならないのだが心情はそれどころではなかった。敵の次の手を考えると勉強よりもシザース達を探し出して一刻も早く暴走を止めたい・・・その思いが彼女達の心を焦らす。
つぼみ「とにかく今日からしばらくは学校が終わったら私たちもシザース達が何処にいるかを探しましょう。少しでも早くこの事件を解決するために」
えりか「そうだね。これ以上被害を増やさない為にも」
いつき「うん」
とにかく今は自分達が出来る事をするしかないとつぼみ達は焦る気持ちを抑えつつ学校の授業を受ける。

真夜「《君ならボク達の気持ちを理解できる》・・・か。彼らがあそこまで人を憎むのはどうして！？」
ロモモ「もしかしたらシザース達は昔の真夜ちゃんのように大切な人を奪われたのかもしれないロモ。だからあんな事を・・・」
真夜「・・・そうかもしれないね。私もかつてはアルティメットの誘いに乗って世界を破壊しようと暗躍しその結果もう1人の私を生み出して悲しみを背負わせた」

ロモモ「真夜ちゃん・・・」
真夜「でも私はあの時から決めたの。もう2度と私が受けた悲しみを生み出さないって・・・私の世界のつぼみや真夜との約束だから」
真夜はシザース達の手掛かりを探すために行方不明事件の被害者の詳細を調べていたが昨日の戦いでガイの言った言葉が離れなかった。
そうかつては真夜もシザースと同じく世界に絶望して自分の世界を滅ぼそうとした。1度目は自分の世界にいたつぼみに救われ光を取り戻したがその戦いの為にもう1人の自分を生み出してしまったのだ。そしてそのもう1人の真夜に哀しみを背負わせて自分の代わりに世界を滅ぼそうとしたのだ。真夜は2度の戦いの後に誓ったのだ。自分と同じような悲しみを生み出させず打ち消せるような存在になると・・・。それが親友ともう1人の自分と交わした約束であるから。今回のシザース達が自分と同じような悲しみを背負っているならその悲しみを打ち消してみせると真夜は決めていたのだった。
???「一人でお散歩かしら?キュアセイバー・・・雨牙真夜!!!」
何処からか女の声がしてきた。声の方向を見てみると闇の扉から出てきた夏実がいた。上下黒い革の衣服を身に纏った彼女は真夜に笑みを見せながらも近づく。
真夜「!!!・・・貴女は王蛇の」
夏実「自己紹介がまだだったわね?・・・私は山梨夏実。まあ今から消える貴女に名を名乗っても意味ないかしら?」
真夜「それはどうかしら?・・・私は消されない。そして貴女達を止めてみせる!!!」
夏実「言うじゃないの?・・・でもすぐに黙らせてあげるわ!!!」
夏実はカードデッキを取り出して?バックルを出現させて装備する。
真夜も変身しようとロモモがペンダント状のアイテムに姿を変化させるとそれを手に取る。
夏実「変身!!!」

真夜「プリキュア・セイントリバース！！！」
辺りが白い光に包まれると真夜と夏実の姿も見えなくなる。光がやむとそこには王蛇とセイバーの姿があり両者仁王立ちといった体勢であった。
王蛇「・・・此処じゃうるさいギャラリーがいるからとっておきの場所で戦ろうじゃない？・・・入れるんでしょ？ミラーワールドに」
セイバー「・・・ええ」
王蛇「ふふ・・・話が早いわねじゃあ来なさい！！！」
王蛇とセイバーは同時にミラーワールドに突入し姿を消した。

カブト「たぁあああああっ！！！！！」
シザース「ふんっ！！！・・・はぁあああああっ！！！！！」
アックスをバイザーで受け止めるとカブトのボディにパンチを入れ怯ませる。カブトはアックスで反撃しようするが身体は思う様に動かない。
カブト「ぐっ！？」
シザース「らぁあっ！！！！！！」
その隙にシザースはバイサーでカブトのボディを斬りつけて火花を散らせる。
カブト「ぐわぁあああああっ！！！！！！」
カブトはダメージに耐えきれずにその場に膝をついてしまう。やはり強化されたシザースはかなりの強さでありクロックアップが使えないカブトにとっては手に負えない強力な相手と化している。
シザース「ふぅん・・・やはりカブトでは相手にはならんな？」
カブト「くっ・・・・シザースどうしてお前はそこまで人間を憎むんだ！？・・・お前も同じ人じゃないか・・・なのにどうして？」
シザース「・・・冥土の土産だ教えてやろう。腐りきった人間の権力に己の夢と大切なものを潰された愚かなる男の話をな」
カブト「なんだと？」
シザースは構えていたバイサーを下ろすと突然話をし始めた。自分

が人間を憎むようになった理由のを・・・・。

またその頃矢車と影山は植物園にゆり達を呼び出していたのだった。理由は須藤と織田に依頼された調査から今回の行方不明事件との関連疑惑が出てきた事を報告するためだった。

矢車「・・・ゆり、アンナ。他のメンバーは？」

ゆり「つぼみ達は学校が終わったのですぐに来るそうです。琢磨と夕もすぐに来るでしょう大人と真夜は連絡が取れません」

矢車「そうか・・。まああの2人なら心配いらんだろう」

影山「君達が大人の話にあったプリキュアだね？宜しく！！」

のぞみ「宜しくお願いします！！！」

影山はのぞみ達に挨拶をし明るく振る舞う。のぞみ達も彼の態度に好印象を受けたのか握手を返した。そしてしばらくすると夕、傑、琢磨の残りの面々が集まった。

アンナ「で、話と言うのは？」

矢車「コレを見てくれ警視庁裏金汚職事件。覚えているか？」

ゆり「はい。確か首謀者として逮捕されたのは白夜総一郎でしたね？・・・これがシザース達に何の関係が？」

影山「実は当時犯人だとされた白夜総一郎は本当の黒幕のスケープゴートだったという事実が浮上してきたんだ。本当の犯人は現在の警視総監である矢田剛三郎だった」

ゆり一同『！？』

矢車「当時の白夜氏は警視庁の参事官・・・立場を利用すれば裏金作ることなど容易だった。ただ彼を知る者達は彼がそんな事をする人間とは思えないと言う意見一色だったし密かに単独で裏金の事を調べていたのも彼だったらしい。また当時の裏金事件の捜査は何故か警察内部でも特殊な部署の特捜部が主導権を握り外部は勿論のこと警察内部にさえ一切の捜査内容を公開しなかったそうだ」

琢磨「そう言えば確かにそうだったな。マスコミも情報の公開が一切なく騒いでた印象があった」

傑「!?・・・ちょっと待ってください・・・じゃあ警察が組織ぐるみで自分達身内の膿を嗅ぎまわっていた彼を潰したって言う事ですか?」

影山「ああ。そして逮捕された白夜氏には息子と娘がいた・・・・息子の名は白夜太陽。娘は白夜白湯(さゆ)。彼の一家は父親の総一郎氏が逮捕された後に母親は自殺し一家は崩壊・・・当時中学生だった彼と妹は親戚にたらい回しにされたそうだ。」

アンナ「矢車さん達はもしかしてその太陽って人がシザースだと?」

矢車「・・・ああ。行方不明者に警察幹部がいた事に不審に思った須藤と織田達が調べた結果・・・・本当の黒幕であったとされえる当時の白夜氏の上司であり現在は警視総監となった矢田もその1人だった・・・そして須藤達が逮捕状を取り身柄を拘束する前に行方をくらましたそうだ。」

琢磨「じゃあ・・・今回の事件は自分の父親の冤罪の復讐!?」

夕「ちょっと待ってよ・・・それなら何で他の犯罪者まで餌にしていたのよ!?・・・復讐の相手を手にかけたのならそれで終わりの筈じゃ!!?」

勇奈「恐らくジェニスが彼をそそのかしたのよ・・・・自分達の様な人間を増やさないようにするためには《自分達が世界を支配すればいい》とでもね」

傑「じゃあまんまとその言葉に乗ってシザースは俺達を倒すためにモンスターの強化を!?」

ゆり「その可能性はあるわね・・・・」

最悪の推測は疑惑に変わった復讐心に支配された人間は何をするかわからない・・・只でさえ強化されて手に負えないほどの強力な相手と化しているシザース達を止める手段はあるのか!?

シザース「俺はそいつ等に全てを奪われたんだよ・・・薄汚い大人(おとな)共に大切な家族も夢も全てな・・・そして俺はその日を境に悟ったんだよ。人間なんて所詮は自分の欲望の為に他者を犠牲にし自分が

甘い汁を吸い続ける為に本当の正義すら権力とう力で踏み潰す・・・・人はそうやって悪魔になれるほど腐りきってしまたんだ。それを正しこれ以上《本当の正義》を踏みつぶされないためには・・・この俺が人の頂点に立ち全てをコントロールする事だとな!!!!!」

カブト「・・・・・・」

シザース「そしてそれを実行する為には今の腐りきった人類に味方ウルトラマンとプリキュアを潰さなくてはならない・・・その1人ウルトラマンティガである貴様をなぁあっ!!!!!!!!!!!」

カブト「お前、俺がティガである事を承知で・・・・（コイツにそんな過去があったとは・・・コイツの他の仲間にも同じような過去が・・・・）」

シザース「死ねぇえカブト!!!!!。貴様の持つティガの力と共にこのミラーワールドに消えるがいい!!!!!」

カブト「!?・・・ぐわぁあああああぁあああっ!!!!!!!!!!」

シザースは某キャンサーを呼び出し更にシザースピンチを装備しカブトに斬りかかる。カブトは反応が遅れてシザースの攻撃を避ける事が出来なかった。カブトはクロックアップを発動させようとするのだがシザースはそれをも見逃さない。

シザース「させるかあぁあっ!!!!!スローベント発動!!!!!」

カブト「!?・・・ぐぁあああぁぁあああっ!!!!!!!」

スローベントの効果でクロックアップは封じられてしまったその隙にボルキャンサーに後ろを取られしまい動きを封じられるとシザースは容赦なくシザーズピンチでカブトのボディを切り裂いた。衝撃に耐えきれず変身は解除されてしまいカブトは大人の姿に戻る。

大人「ぐぅっ!?・・・あぁあ」

シザース「ふぅん・・・終わりだな?上原大人・・・・仮面ライダーカブト!!!!!」

大人「（ここまでか・・・・つぼみ、ごめん）」
今度こそコレで終わりだと大人の首にシザースピンチを押しつけられるシザース。最早此処までなのか!?今残されてる手はウルトラの力しかないがシザースはそれを使わせる隙を見せない・・・。

セイバー「シザースにそんな過去が・・・・でもどうして貴女も彼の野望に手を貸すのよ?」
王蛇「・・・・私は彼のお父さんに救われたのよ・・・・命をね」
セイバー「!?」
王蛇「彼のお父さんは本物の人格者だった。ネグレクトを受けて親に捨てられた私を預かり実の娘の様に可愛がってくれた。私は太陽さんのんお父さんに生きる意味を教えられたのよ・・・でも彼は正義を貫こうとして陥れられたの?・・・その結果太陽さんは全てを失った・・・自分が肥え太る為に邪魔者をゴミの様に潰す警察・・・そして遊び感覚で犯罪を犯す犯罪者・・・実の子供をゴミのように捨てる親・・・・・世界は本当に腐りきってしまったのよ・・・・人は自分の利益の為に平気で他人を落とし入れて夢や愛する者を奪い取る・・・。こんな社会をいつまでも許すわけにはいかないのよ!!!!!!!だから全てを破壊し0に戻す事で・・・私達の楽園を造るのよ!!!」
セイバー「・・・ふざけないで」
王蛇「!?」
セイバー「例えどんなに絶望の谷底に叩き落とされた落としても・・・貴女達が人を傷つけている事に変わりはないわ・・・そんな事をして生み出された楽園なんて本当の楽園じゃない・・・・そこにあるのは終わりなき怒りと憎しみの連鎖」
王蛇「黙りなさい!!!・・・綺麗事ばかりじゃ世界は変わらない!!!!それは貴女も知っているはずよ!!!」
セイバー「ええ。痛いほど分かる・・・でも私は貴女達を止める!!!!」

王蛇「やはり貴女は危険人物ね・・・・ウルトラマンティガである上原大人と同様このミラーワールドの塵となりなさい！！！！」
王蛇はベノサーベルを構えながらもセイバーに突進する。セイバーは本気で迎え撃つと双剣を取り出しながら一度目を閉じる。
セイバー「はぁあああああっ！！！！！！！！」
王蛇「！？・・・力が上がってる！？・・・どうして！？」
急に力がセイバーの力が上がった事に驚きが隠せない王蛇。そのまま飛ばされてしまう。セイバーは流石は双剣を振いながら王蛇に迎撃の斬撃とパンチを王蛇のボディに叩き込む。
王蛇「がぁあああっ！？？？・・・ぐぅうう！？（バカな・・・どうして此処までパワーが上がったの！？・・・こんな事あり得る筈は）」
セイバー「憎しみの力では私に勝てない・・・それを証明する！！！」
王蛇は体勢を立て直すため一度セイバーから離れる。さっきまでのセイバーとは違い力は数倍にも跳ね上がっている・・・・コレがセイバーの底力なのか！？

シザース「ははははははっ！！！。！終わりだぁあああっ！！！！上原大人」
シザースピンチを振り下ろし大人にトドメを刺そうとするシザース・・・だがその時。
電子音「ＣＬＯＣＫ　ＯＶＥＲ」
シザースピンチが当たる寸前で大人はシザースの目の変えから消えた。辺りを刑はいのする方向を見るとそこには大人を支えるもう１人のカブトの姿があった。
シザース「もう1人のカブト？・・・貴様まさか！！！」
カブト（？）「おばあちゃんが言っていた・・・弟子を助けるのが師の役目。師弟の絆は例えどんなに離れていても立ちきれるものではない・・・ってな」

シザース「天道総司！！！！」

大人を助けたのもう1人のカブトの正体は3年前に大人を鍛え上げた伝説の戦士の天道総司だったのだ。キュアコズミックと同じく時空を超えて大人を助けに駆けつけたのだ。

第３６話地球解放軍編？「太陽の過去」（後書き）

書きだしたら止まらなくなってしまった（汗）やっぱり人数が多いと描写が大変だ

ではでは～次回もお楽しみに♪

第３７話地球解放軍編？「憎しみの力」（前書き）

前回までのあらすじ～
明かされる仮面ライダーシザースの変身者である白夜太陽の過去。
彼の目的は冤罪をきせられた事で奪われた家族の復讐だったのだ。
そしてその復讐のターゲットは全人類へと切り替わり地球解放軍による総攻撃を行うにまで至ったのだった。
大人は彼の過去を知り戦う事を躊躇してしまい追いつめられることとなった。
追いつめられた大人を助けたのは彼の師匠である天の道を行き総てを司る男の彼であった・・・。

第37話地球解放軍編？「憎しみの力」

ダメージを受けた大人を総司は支えながらもシザースを睨んでいた。
折角久しぶりに師匠と再会したと言うのにこんなザマでは正直かなり恥ずかしかったのだった。
大人「天道さん・・・どうしてこの世界に？」
カブト（総司）「久々に弟子の様子を見に来た・・・とでも言っておこうか」
シザース「弟子？・・・成程、上原大人はお前の弟子だったようだな？・・・しかし同じ太陽の神の力を使う弟子がこの程度ではカブトの名が泣くな」
シザースは2人の会話で2人が師弟関係であると察し付くと大人の事をバカにするようにそう言う。大人は返す言葉がなく悔しさに拳を震わせる。
カブト（総司）「まあ仕方あるまいコイツは俺の様に完璧ではないからな。だが1つ言える事はあるな・・・今のお前に大人をバカにする資格はない！！！」
シザース「何！？」
カブト（総司）「お前の過去を聞かせてもらった。だがお前のしている事はお前から大切なものを奪った奴等と大差はない・・・違うか？」
シザース「・・・・・」
カブト（総司）「今のお前はただタダを捏ねている幼い子供に過ぎん」
シザース「！！！・・・貴様・・・貴様に俺の・・・俺達の闇が分かってたまるかぁ！！！」
シザースは総司の言葉に冷静さを削がれシザースピンチを構えながらカブトに突進する。シザースの攻撃が当たる前にクナイガンで受け止める。

カブト「おばあちゃんが言っていた。復讐は負の連鎖の始まり・・・どんな理由がろうともそれをしちゃいけないってな」
シザース「・・・黙れ。お前などに俺達の味わった地獄のような痛みや絶望が分かるはずない」
カブト（総司）「はぁあっ！！！・・・確かにそうかもな？」
シザースは総司の天道語録を否定するようにシザースピンチで総司を斬りつけようとする。総司はそれをクナイで受け流しながらも攻撃を適確に受け流す。
シザース「ふぅん・・・やるな？」
カブト「貴様も大した力量の様だな？」
クナイガンとシザースピンチがガチガチとぶつかり合いながらもそれぞれの力量を計るシザースと総司。力と技術ではほぼ互角と言うところであろう。

王蛇「流石じゃないキュアセイバー・・・でも遊びは此処までよ！！！」
セイバーのゴールドソードとシルバーソードが王蛇のベノサーベルとぶつかり合い火花が散る。王蛇はアドベントでベノスネーカーを呼び寄せる。
セイバー「！？」
セイバーの背後に出現したベノスネーカー。セイバーは後ろを振り向いたその瞬間に超強酸性の毒液を彼女に向かって発射したのだった。流石のプリキュアと言えどもコンクリートを溶かしてしまうほどの強酸性であるあの毒液を身体に浴びたら怪我程度ではすまされない。セイバーは難なくそれを避ける為に飛びあがったのだが・・・。
王蛇「防御が甘いわよ？」
セイバー「なっ！？」
王蛇「はぁあああああああぁあああっ！！！！！」
セイバー「きゃぁあああああっ！！！！！」

ベノスネーカーを囮にした王蛇はセイバーの懐に入り込み先程のお返しだとセイバーの胸をベノサーベルで切り裂いたのだ。王蛇は切り裂いた後姿をくらましてセイバーを翻弄させる。

セイバー「くっ！！！（今の状態じゃベノスネーカーの毒液を避けるので精一杯で王蛇のスピードについていけない・・・でも王蛇を探さないと・・・）」

白い彼女のコスチュームが血で赤く染まるがギリギリの所で後ろに下がったので致命傷にまではならなかったが傷の深さはそれなりでこのまま持久戦になれば体力的に持たない。血が滲んだ胸を件を握った手で押さえながらも消えた王蛇を探すがその間にもベノスネーカーの毒液の雨が彼女のカラダを溶かそうと降り注ぐ。傷を負った今のセイバーでは毒液を避ける事で精一杯で王蛇の姿を探す事にまで手が回らない。その間にも王蛇の毒牙はセイバーを追いつめるごとく静かに近付いていた。

王蛇「はぁあああっ！！！！今度は後ろががガラ空きよ？」

セイバー「がぁあああっ！？・・・い、いつの間に後ろに」

後ろからの斬撃と強烈なキックで飛ばされるセイバー。そしてその後王蛇の猛攻は続きセイバーは身体をプリキュアのコスチュームがズタズタにされるまで切り刻まれてしまう。そして最期の追撃のキックで地面に叩きつけられた身体はボロボロだった。しかし怯むこと鳴くセイバーはゴールドとシルバーのソードを王蛇に向かって振り回すが胸に受けた傷のせいで全力が出せずに避けられてしまう。

王蛇「どうしたの？・・・さっきの勢いはもうお終い？」

セイバー「はぁ、はぁ、はぁ・・・まだまだぁあっ！！！！・・・私は負けない！！！」

つぼみ「シザースの変身者にそんな過去があったなんて」

矢車「織田は言っていたよ。今回の行方不明事件はただの失踪なんかじゃないってな・・・だがこんな事実が隠されていようとは俺達も想像できなかったよ」

えりか「でも間違ってるよ!!!警察に裏切られ家族を失っからって人を犠牲にした得た力で復讐なんて・・・悲し過ぎるじゃん」
琢磨「えりか・・・」
いつき「シザースに慕っている残りのメンバーの詳細も分かったんですか?」
影山「ああ。須藤達の証言ですぐに正体を割り出せたよ。シザースの白夜太陽、王蛇の山梨夏実、ライアの神崎耕輔、ガイの冴島勇治。この4人はごく普通の高校生であったから特に問題視はしてなかったんだけど調べてみると最初の行方不明事件が発生した3か月前から行方をくらませていた。」
矢車「山梨は幼いころに両親にネグレクトを受けてゴミの様に捨てられた所を白夜氏の養女として引き取られた事が分かった。シザースである太陽を慕うのは恩義を感じているからだろう。だが残りの2人は普通の高校生であると言う事以外は何も掴めていない」
いつき「ごく普通って・・・本当に何もなかったんですか?」
矢車「ああ家庭環境も特に問題はなかった。だから不思議なんだどうして白夜と行動を共にしているのかがな」
つぼみ「その2人にも何か複雑な事情があるのでしょうか?」
??「流石のGUTSだね?・・・まさかもう此処まで調べているとは」
全員『!!??』
何処からともなく声が響いてきた。全員は思わずきょろきょろと辺りを見回すと植物園のミラーにガイとライアの姿があった。
つぼみ「ガイ、ライア・・・」
ライア「よく俺達の事を調べたな?TPCも伊達ではないと言う事か」
ガイとライアはミラーワールドからつぼみ達を挑発するようにポーズをとりながら見下した態度でそう言う。
矢車「冴島と神崎・・・今からでも遅くはない大人しく投降しろ」
ガイ「そんな事すると本気で思っているんですか?世界の復讐鬼と

化したボク達が・・・ね？」
ガイは矢車のセリフにそう返す。初めっから彼らの言う事など聞くつもりなど毛頭ない。彼らの態度につぼみは思わず声を上げた。
つぼみ「どうしてなんですか！！！！・・・どうしてそこまでして世界を憎むんですか！？貴方達は今までの生活に何が不満だと言うんですか？」
ガイ「・・・どうして世界を憎みのか教えてあげようか？・・・それはねボクと耕輔は太陽さんと夏実さん以外の人間を信じられなくなったからだよ」
全員『！？』
ライア「俺達・・・昔は華奢でシャイだったんだよ。そのせいで何かあるとイジメられてた。小学校までは助けてくれる奴もいたさ。ところが中学になると小学校まで味方だと思ってたやつらは知らんぷりだ・・・それどころか冷やかな目で俺達を見やがった・・・その時に俺達は悟った。人は自分に不利益な事は絶対にしないと・・・小学校の仲間は偽善者だったとな。殴られたり度が過ぎたイジメを受けていた俺達を中学の先公も助けようともしなかった。俺達がどんなに悲鳴上げてもどんなに助けてと叫んでも何もせず無視しやがった・・・・・。太陽さんだけだったんだよ・・・俺達を助けてくれたのは・・・あの人がいなければ俺達は自分で自分を殺していたんだよ・・・。」
ライアとガイは語り始めた自分達が世界を憎んだ理由を。それはつぼみ達には想像も出来ない彼らが受けた深い心の傷だった。彼らは昔のつぼみと同じシャイであった。そしてそれが原因でイジメを受けて身体だけではなく心に傷を負っていたのだ。イジメはそれを受けた人間にしかその苦しみや痛みは理解できない。弄られるとは違う。いや寧ろそれとイジメは紙一重で変わらないのかもしれない。しかし加害者は《弄り》のつもりでも実際に受けている人間からからすれば《弄り》ではなく《イジメ》と感じてしまうのだ・・・。
そんな彼らを助けてくれた太陽の仕打ちを聞けば人を絶望して世界

を憎むには十分すぎるほどの理由だったのだ。
ガイ「ボク達はその後太陽さんが受けた仕打ちを聞いて絶望したよ。人なんて所詮は他者の力になんて本音ではなるつもりなんてない。目先の利益の為に弱い者を犠牲にする。君達の様な偽善者は自分に酔う為に弱者を助ける素振りを見せる。世の中腐っていたのは教師だけじゃない正義を司る筈の警察までもが腐りきったんだ!!!。それなのに人を信じろだって？・・・出来るわけないよ。・・・ボク達は誓ったんだ。絶対に世界に復讐すると!!!!」
そして慕っていた太陽の家族の悲劇を聞いた彼らはかつての恩義を受け太陽と共に世界を破壊する事で自分達の苦しみを無くそうという単純な理由だったのだ。他者からすれば彼らが太陽の世界破壊計画に賛同した理由は小さいものかもしれない。しかし彼らにとっては十分すぎる理由なのだ。《イジメ》と言う法律では裁けず永久に無くなる事のない行為の被害者の彼らにとっては。
ライア「そして俺達は全ての人が平等な幸せを造るんだ・・・・シザースである太陽さんが人の頂点に立つ事でな!!!・・・誰も苦しまない夢の様な楽園を・・・」
つぼみ「そんなの楽園じゃない!!!!」
ガイ・ライア『!?』
ライアは興奮した口調でそう語った。自分達が受けて苦痛を他者に受けさせたくないという純粋な気持ちを。しかしつぼみは震えが混じった大声を上げた。その反応にガイとライアは驚いた。
えりか「アンタ達が・・・過去にどんなイジメを受けたかは分からない・・・でもだからってこんな事しちゃいけないんだよ!!!!・・・どんな理由があってもアンタ達がイジメをしてた奴らと同じことしてどうすんの!!!!」
いつき「自分達が憎い人間や憎いモノをひとつ残らず消し去って・・・一体何が残るんだい？・・・最後は一人ぼっちになるにきまってるよ!!!そんな事しても君達の苦しみは癒せない・・・永久に太陽のない暗闇を彷徨い続けるだけだよ!!!!」

ゆり「人は苦難を乗り越える事が出来る。貴方達は自分達の苦しみから逃げただけよ!!。そんな貴方達に世界を変えることなんて絶対にできないわ!!!」
アンナ「理性のない力からは何も生まれない。本当は分かってるんじゃないの?・・・こんな事無意味だって」
ライア「黙れ!!!お前達の様な温室育ちのお嬢さま、お坊ちゃんに俺達の傷の深さと痛みなど分かるわけがない・・・。俺達が強いられた苦しみなどな!!!!」
ガイ「そうだ。ボク達が信じられる人は仲間の太陽さんと夏実さんだけだ。それ以外の人間など絶対に信じない」
つぼみ「なら私たちが貴方達のその心をチェンジします。貴方達の闇を光で照らす為に!!!」
御子「その為に私たちも時空を超えてきたんです。絶対に貴方達の計画を止めて見せます!!!」
ガイ「なら止めてみなよ?・・・ボク達をね!!!」
ガイは指をクイクイっと動かしてこっちに来いと挑発をする。つぼみ達はミラーテレポーターを装着しながら変身アイテムを取り出す。
矢車「お前達はどんな闇を見てきたかは分からない・・・だが闇に堕ちるのならそれ相応の覚悟をしろよ?」
影山「本当の絶望なのか教えてやる」
矢車と影山の2人も久々に地獄スイッチが入ったのかホッパーゼクターを呼び寄せるとライダーベルトを装着する。
のぞみ「うわっ・・コレが地獄兄弟?」
りん「余分な事言わない」
御子「お二人もコレをどうぞ。これでガイとライアがいる場所に突入できます」
矢車「分かった。相棒、久々に行くぞ!!!」
影山「おう!!」
つぼみ「皆行きます。ミラーテレポーター起動!!!」
つぼみ達はミラーテレポーターを一斉に起動させる。そしてつぼみ、

えりか、いつきはパヒュームをゆりはココロポットにプリキュアの種を装填し琢磨達ライダーはライダーベルトにゼクターを装填して変身を開始する。変身と同時にブロッサム達はガイとライアがいるミラーワールドの植物園のガラスに突入する。全員ミラーワールドに突入すると同時に異様な空気に重苦しさを感じる一同にガイとライアが姿を現した。

ガイ「ふふふ・・今度は逃がさないよ?」

ライア「1人残らず消し去ってやる!!!」

ライアとガイはメタルホーン、エビルウィップを召喚して仮面の目を光らせながら睨みつける。必ず自分達の計画を成し遂げる為に。

セイバー「はぁ、はぁ・・・あの毒液さえなんとかできれば・・・・」

出血した事も重なり動きは鈍い。白いセイバーのドレスは血で滲み所々紅いシミが出来てしまっている。このままではまずい。こうなれば使いたくはないが彼女を止める為にスターライトチャージクラッシュを撃つしかないと双剣をしまいリリィフシンバルを取り出す

王蛇「ふん、今更スターライトジャージクラッシュを放つ気?その身体で出来るか見物ね?じゃあこっちも必殺技を行くわよ!!!!」

電子音「ファイナルベント」

王蛇は勝利を確信したかのように彼女の血が好いたベノサーベルを投げ捨ててベノサーベルと取り出しファイナルベントのカードをベントインする。今の状態で負けることなど万に一つあり得んという自信故の余裕だった。ベノスネーカーと共に王蛇は助走つけて走った。

王蛇「はぁあああああっ!!!!!!!!」

セイバー「くっ!!!プリキュア・スターライトチャージ!!」

シンバルにエネルギーを溜め始めるセイバー。このままでは負けるのはい自分。ならば相打ち覚悟だった。光が集約しエネルギーの充

填が終わる事には王蛇の身体は宙に舞っていた。
王蛇「でやぁあああああああぁあああああああっ！！！！！！！！」
セイバー「クラァアアアアアアシュッ！！！！！！！」
王蛇のファイナルベントのベノクラッシュとセイバーのスターライトチャージクラッシュがぶつかり合う。辺りに衝撃と光が発せられる。光がやむと1人が仁王立ちしもう1人は膝をついている姿が見えてきた・・・しばらくするとハッキリとした姿が見えてきた立っていたのは王蛇でありセイバーは力尽きそうになり息を切らしていたのだった。
セイバー「はぁ、はぁ、はぁ・・・・がぁあっ！！？」
王蛇「トドメよキュアセイバー・・・・！？」
王蛇は彼女の首を掴みトドメそ刺そうとするのだが彼女のカラダに異変が起きた。腕が粒子化を始めたのだ。そうミラーライダーとは言えミラーワールドに入れる時間は制限されているのだ。その時間は9分55秒であり時間が近づくと鎧が粒子となり知らせるのだ。
王蛇「ちっ、時間切れね。貴女は本当に悪運が強いわね？まあいいわ貴女の力量が分かったし今日は十分よ・・・・じゃあ～ね♪」
セイバーを投げ捨てて王蛇は闇の扉を発生させてその場から姿を消すのだった。ギリギリのところでセイバーは何とか九死に一生を得たとはまさにこの事であろう。
セイバー「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ・・・時間が私を救った・・・のね」
セイバーは身体の激痛が走りながらも何とか立ち上がりミラーワールドから脱出する。もしも王蛇が時間切れにならなければ自分は確実に倒されたいただろう。とにかく王蛇の事を全員に報告しなければとフラフラの身体を動かしながらつぼみ達がいるであろう植物園に向かう。
シザース「おぉおおっ！！！！！！！！！」

カブト（総司）「はぁっ！！！！」
クナイガンとシザースピンチがぶつかり合い火花を散らす中総司と太陽が変身するシザースの攻防は続いていた。総司の実力とシザースの力互角であるらしい。
シザース「ちっ・・・」
カブト（総司）「そろそろ本気で行くぞ」
電子音「ＣＬＯＣＫ　ＵＰ」
総司は一気に決めるとクロックアップでシザースを滅多斬りにするがシザースの強化された装甲にはクナイガン程度の斬れ味では効果は薄かった。蟹特有の頑丈な甲殻の前には総司といえども苦戦を強いられてしまうのだろうか？
電子音「ＣＬＯＣＫ　ＯＶＥＲ」
シザース「ふん。その程度ではシザースの鎧は敗れんぞ」
カブト（総司）「やるな・・・ならば此処は一気に決める」
電子音「ＯＮＥ　ＴＷＯ　ＴＨＲＥＥ」
シザース「ふぅん・・・」
電子音「ファイナルベント」
こうなってしまえば一気に決めるしか手はあるまいとカブトはクナイガンを投げ捨ててゼクターのフルスロットルに手を伸ばす。それを見たシザースはデッキからカードを引き抜きファイナルベントのカードをシザースバイザーにベントインする。
シザース「はぁああっ！！！！」
シザースの後ろにボルキャンサーが出現し飛び上がったシザースをアシストし身体を高速回転させて上空に飛びあがる。その後上空から急降下して総司の元に向かう。対する総司はゼクターから造り出したエネルギーを右足に溜めていきフルパワーのライダーキックを向ってくるシザースに放つ。光が起こったかと思うえばその直後に爆発と爆風に辺りを包んでいく。両者とも衝撃に飛ばされたらしく膝をついた城田であった。
シザース「ちっ・・・やるな？上原大人とは格が違ったか・・・・

！！・・・時間切れか。・・・覚えておけ我々の邪魔をするというのなら全員この手で倒す。必ずな」

カブト（総司）「出来るのならやってみるのだな」

シザース「上原大人・・・ウルトラマンティガよ・・・本当にお前はこの世界を守るために戦う価値があると思ってるのか？」

大人「そ、それは・・・・」

シザース「ふぅん・・・ままいい。俺達の戦う理由を知った貴様らがどう出るか・・・期待させてもらおうか」

シザースはふと腕を見ると自分のカラダが粒子化し始めている事に気がついた。どうやら今回は時間が来てしまったらしい。最後にシザースは大人にそれだけ言うと闇の扉の中に姿を消した。

大人「・・・・」

カブト（総司）「・・・何をしている。早くここから出るぞ」

尻餅をついたままの大人を起こすと総司は彼を連れてミラーワールドから脱出するのだった。大人もギリギリのところで師である総司に助けられた。しかし大人の心は複雑であった。シザース達が世界を憎んだ理由・・・もしも自分だったら同じ事をしたかもしれないと思いながらも・・・・彼の心は揺らぎ始めていたのだった。

第３７話地球解放軍編？「憎しみの力」（後書き）

強化されたシザースの前には天道でさえも互角であった。果たして次の彼らの作戦とは・・・・・

次回も楽しみに♪

第３８話地球解放軍編？「真夜と御子の過去」（前書き）

前回までのあらすじ～
総司の助けによって救い出された大人。ちょうどその頃つぼみ達の前にガイの勇治とライアの耕輔が現れつぼみ達を倒そうと勝負を挑む。そしてまた同じころ王蛇とセイバーの戦いも決着がつこうとしていた。

第３８話地球解放軍編？「真夜と御子の過去」

そして明かされた地球解放軍達の過去と抱える闇・・・大人は太陽の言葉に戦う事に迷いが生まれ始めるのだった。

大人「ありがとうございました助けてくれて」

総司「言っただろ？師弟の関係は断ち切れんと」

大人「そうでしたね」

シザースとの戦いを終えた総司と大人は最初に大人と太陽がミラーワールドに突入した裏路地にいたというのも大人の体力の消耗が激しくしばらく動けそうにないので休んでいたのだ。

総司「しかし、今度はお前と琢磨。傑がウルトラマンに選ばれとは思ってもいなかったぞ」

大人「・・・俺もですよ・・・まさか先祖の血筋からこんな物を受け継いでしまったなんて最初は信じられませんでしたよ」

久々に会った師に苦笑いしながらもそう言う大人。今まで押し隠していた力に対する迷いの気持ちをゆっくりと打ち明けるかのように。

総司「・・・その事はつぼみ達には？」

大人「・・・まだ言ってませんよ。いつかは言わないといけないんですけどね・・・でも・・・今はまだその時じゃないと思うんです」

総司「そんな事を言っているが本当は怖いのか？今の関係が崩れるんじゃないかと思うと・・・」

大人「・・・そうですね。それもありますけど・・・」

総司「そうか。明かすか明かさないかはお前達が決めろ」

大人「はい。だからこの事は・・・」

総司「分かっている。野暮な事はしない・・・お前の口からつぼみ達に伝えるんだ」

総司の言うとおりであった。やはり彼には隠し事は出来ない。大人は静かにそう言った。そしていつかこの事は自分の口から伝えなけ

ればならないという事も分かっていた。総司は大人を起こすと植物園に向かおうと歩き始めるのだった。

ロモモ「真夜ちゃん大丈夫ロモ？」
真夜「ええ、なんとかね。でも後少しで殺られてたわ・・・いっつぅ～・・・久々に斬られると痛いわね」
ロモモ「何を言ってるロモ！！！早く手当てしないとマズイロモ。とにかくつぼみ達がいる植物園に行くロモ！！！」
真夜「そうね。・・・携帯にも着信あったし何かあったのかも（王蛇の変身者、山梨夏実。彼女から感じ取った凄まじい憎しみと怒り・・・最初に会った時から感じてた威圧感の正体はコレだったのね）」
同じころ真夜も傷の応急処理を済ませ消耗した体力を回復させるために休んでいるのだった。今回の戦いは本当にギリギリだった。自分に軽傷とは言え傷を負わせただけでなく真夜が変身するセイバーの渾身のスターライトチャージクラッシュさえも通用しなかったのだ。とにかくいつまでも此処にいても仕方がないと真夜は痛む傷を手で押さえながら立ち上がると状況方向と傷の手当てをする為にゆっくりながらも植物園に向かうのだった。

ブロッサム・マリン・サンシャイン「プリキュア・トリプルインパクト！！！！」
ガイ「よっと。隙が大きすぎるよ！！」
ブロッサム・マリン・サンシャイン『きゃぁああっ！！！？』
ブロッサム、マリン、サンシャインの合体エネルギー光波を軽々と避けるとメタルホーンで3人をそれぞれ突きあげてダメージを与える。3人は飛ばされた後受け身を取り体勢を立て直す。
ガイ「おやおや、もうおしまいかい？張り合いがないねぇ～」
ナイト「3人とも大丈夫？」
ムーンライト「バカにして・・・ナイト次は私たちの番よ！！」
ナイト「オーケー！！！」

それに続くようにムーンライトとナイトがタクトとロッドを構えながらガイに突進する。ガイは2人のラッシュを避けれるものは避け避けきれない者はメタルホーンでガードをする。2人相手というハンデを背負いながらも2人の攻撃をものともしない。そして2人のタクトとメタルホーンがぶつかった瞬間・・・

ガイ「所詮この程度か・・・・はぁあああああぁあああっ!!!!!」

ガイはムーンライト、ナイトの武器を受け止めてガチガチと金属音をさせながらガッカリしたかのようにそう言うと今まで抑えていた力を解放する様にメタルホーンを振り上げて凄まじい力でムーンライトとナイトをふっ飛ばして凄まじいスピードで間合いを詰めると2人のお腹に向けて追撃のパンチを放つ。

ムーンライト「がぁあっ!?」

ナイト「ぐぅうっ!?」

2人は飛ばされた勢いにパンチされた事で加わった力で更に増したスピードで飛ばされるとミラーワールド内の植物園のガラスを突き破って身体はガラスを貫通して植物園内部まで飛ばされしまう。流石のあの2人も大ダメージは避けられずすぐに反撃に転じる事は出来なかった

ガイ「弱い・・・弱すぎる」

ダークカブト「2人とも大丈夫か!?」

ガタック「今度は俺達の番だ!!!」

フェアリー「いつまでも調子に乗ってるとものすごぉ〜く痛い目見るよ!?」

ガイ「そうかな?」

ダークカブト、ブロッサム、マリン、サンシャインがムーンライトとナイトを介抱している間に続いてガタックとフェアリーがガイに向ってきたがその攻撃もメタルホーンで受け流すように迎え撃つ。

ガタック「くっ!!!」

フェアリー「強い!!!」

ガイ「言った筈だよ？・・・ボク達は君達を倒す為にモンスターを強化したと。ボクは君たちの様な偽善者は大嫌いだ！！！君達はボク達と闘って何のメリットがあると言うんだい？・・・そんなに英雄と称賛される自分に酔いたいのかい？」

ブロッサム「違います！！！・・・確かに貴方の言うとおり他者から見ればプリキュアとして戦っている私達は偽善者かもしれません・・・でも私達は誰かが傷つくのが見たくないんです！！！・・・・悲しみの連鎖は誰かが断ち切らないといけない・・・だから私達は戦うんです！！！」

ガイ「・・・（君達の様な人間に会っていたらボク達もこんな事しなかったかもしれない・・・でも、もう手遅れだ）・・・もうすぐボク達の計画は最終段階に入る・・・全旧人類に対する総攻撃のカウントダウンは既に始まっているだ。それは例え君達でも止める事は出来ない・・・・」

ガイの問いにブロッサムは力強くそう答えた。ガイはその言葉を聞いて一度その足をとめてそう言った。あの時、自分にもブロッサムの様な人物がいてくれれば・・・そう考えると戦いに虚しさを感じてしまうのだがそれを振り払う様に首を横に振った。今のこの計画は自分の為だけではない。自分と耕輔を助けてくれた太陽の為でもあるのだ。ガイは迷いを断ち切った様にメタルホーンを振いもうすぐ自分達の計画は最終段階に入ると言う事を告げた。

ガタックだ「だったらお前達を倒してそれを無理矢理にでも止めさせてやる！！！。行くぞ！！！！」

ガイはメタルホーンを光らせながが再度動き始めた。ガタック達も武器を再度構えガイに突進する。

ライア「エビルダイバー、ライダーを攻撃しろ！！！」

ライアＶＳコズミックチーム&キック&パンチホッパーの戦いも激しさを増していた。エビルダイバーを戦うキックホッパーとパンチホッパーはクロックアップが使えない事で苦戦を強いられるがそれ

でも勝機を見いだす為に立ち向かう。
ドリーム「はぁあああぁああああっ！！！！！」
コズミック「でやぁあああああっ！！！！！」
ルージュ・ローズ『やぁあああああぁっ！！！！』
ライア「甘い！！！」
ドリーム、コズミック、ルージュ、ローズの攻撃を得意のムチ乱舞で防ぐようにして攻撃してきた彼女達を飛ばす。そしてそのまま彼女達。
エルス「皆！！！！」
ピーチ「よくも皆を！！！」
ピーチは怒りに任せてライアに突進するがライアと彼女の間に衝撃が走るとピーチは飛ばされてしまう。
エルス「ピーチ！！！」
ジェニス「貴女の相手は私よ・・・キュアピーチ！！！」
ピーチ「ジェニス！！！」
そう乱入してきたのはジェニスだったのだ。自分のオリジナルである彼女を倒す事がジェニスの最大のもうく敵である為にピーチがライアに傷つけられることすら嫌うのだ。
ライア「そう言えばそうだったな・・・ジェニスそいつはお前に任せるぞ！！！」
ジェニス「分かってるわよ。アンタは残りの面々を片付けなさい」
ライア「言われるまでもねぇな」
エルス「どうしてそこまでして人を憎めるのよ！！！！・・・・どうして人を傷つけられるのよ・・・」
ライア「お前の過去も俺達は知っている。不思議だよ・・・俺達と同じような絶望を見ながらも人間を守る側になれるお前がな・・・まあ所詮今の俺達とお前達は違う・・・俺達の計画を邪魔すると者は何があってもぶっ潰す！！！」
エルス「憎しみは憎しみしか生まない・・・だから私達は貴方達を救う・・・1人の人間として！！！」

ライア「ほざいてな！！！」
エルスとライアがぶつかり合い衝撃が走る。エルスの雷光のパワーとライアのライダーパワーがぶつかり合い反発しあっているのだ。
ガイ「・・・（そろそろ太陽さん達は上原大人と雨牙真夜を倒したかな？・・・）」
ガイはこの作戦の目的はあくまでも時間稼ぎであることを思い出していた。戦いながらも願わくばブロッサム達を倒して邪魔ものを消し去る事が出来るのが理想ではあったのだが・・・・。
太陽「勇治、聞こえるか！？」
ガイ「太陽さん？・・・此方は今のところ大丈夫ですがそちらはどうすか？」
太陽「予定が狂った。天道の奴が現れてな・・・とにかく作戦は中止だ帰還しろ」
ガイ「分かりました。皆、今日のお楽しみは此処までだ。帰還するぞ！！！」
ライア「ちっ・・・もう少しのとこで」
ジェニス「キュアピーチ・・・その命は今しばらく預けるわ」
ブロッサム「待ちなさい！！！」
ガイ「ちっ・・・今日は終わりだと言った筈だよ？」
電子音「フラッシュベント」
太陽からの無線が入り全員に作戦中止の指令が入る。やむを得ず全員は一枚のカードを発動して眩い光を放って姿を消すのだった。
マリン「逃げられた・・・・」
コズミック「仕方ないわね・・・私たちも此処から出ましょう！！！」
こうなったら長居は無用だとブロッサム達一行はミラーワールドから脱出する。戻った先には怪我をした大人と真夜の姿があったそしてなんと懐かしの顔もあった。
総司「よう。遅かったな？」

つぼみ・えりか・いつき・ゆり『天道さん！！！！』
そうそれは総司だったのだ。久しぶりの戦友につぼみ達のテンションも上がっていくのだった。
勇奈「天道君？・・・君もこの世界に？」
総司「久しぶりだな星川。まあそんなとこだ」
つぼみ「天道さんと勇奈さんはお知合いなんですか？」
勇奈「まあね」
御子「勇奈さんは色々な世界を旅しているんですよ。だから他の世界の英雄たちとも面識がありますよ」
えりか「なんか凄いね（汗）」
勇奈の顔の広さに一同は驚きが隠せないでいた。まあただでさえ今の状況がぶっ飛んでいるから今更驚く事でもないが。
アンナ「お姉ちゃんあの人は？」
ゆり「あ、そうかアンナは知らないわね。彼は天道総司よ。別の世界の仮面ライダーなの」
アンナ「そうなんだぁ～・・・あ、私は月影アンナです。宜しくお願いします」
総司「よろしくな・・・」
自己紹介が住んでいなかったアンナは総司に改めて自己紹介をするのだった。
大人「それよりも皆聞いてくれシザースの目的は」
つぼみ「復讐・・・ですよね？」
大人「！？・・・どうしてそれを？」
矢車「大人実はな・・・・・」
大人は矢車達からシザース達の事を聞いた。といってもシザースが言っていたことと夜矢車が調べていた事は全てが一致していたのだった。大人は信じられないと言う顔になっていて顔色も真っ青であった。
大人「そんな・・・本当に警察がそんな真似を組織単位で」
矢車「残念だが・・・そう言う事になる」

つぼみ「大人さん・・・」
大人は放心状態に近い状態になっていた。普通でいろと言われて無理があるだろう。そんな彼が心配になりつぼみが彼の手を握る。そして大人は震えている身体から口を開いた。
大人「俺さ・・・はじめて戦いに迷いが生まれてるんだよね・・・。今までの敵は人間じゃなかったから《人を守るために戦う》って自分に言い聞かせてた。でも今回の敵は人間だ・・・俺は人を傷つける為にこの力を使いたくなんてない・・・例えどんな理由でもさ。だから戦う事を躊躇し始めてる」
えりか「でも戦わないとアイツらの計画を止める事が出来ないですよ?・・・それなのにそんな事・・・」
大人は自分の今の気持ちを素直に語った。ワームや宇宙人ならば戦う事に迷いは生まれないだろうが相手が人間となれば話は別になる。それに大人は人間を傷つけたくない理由があった・・・それは3年前のＺＥＣＴとワームとの戦いでのあのトラウマだ。
大人「分かってるよそんな事は!!!・・・でもさアイツらだって被害者だろ?・・・欲望に取りつかれた人間のさ!!!・・・アイツらだって被害者になる前は俺達と同じように時間を過ごしていた筈だ・・・それなのに俺達はアイツらの主張を無視して牙を向けるのか?・・・そんな事しても根本的な解決にはならないだろ!?」
いつき「それは・・・」
大人が言う事は最もだった。彼の言うとおり力で相手を潰しても解決にはならない・・・それは彼の言うとりだ・・・でもそれだけで解決できるほど今回の事件は単純なものではない。
つぼみ「大人さん・・・気持ちは分かります。でも行くしかないんですよ・・・戦うしかないんですよ!!!。憎しみと悲しみの連鎖を断ち切る為には」
大人「つぼみ・・・お前・・・」
御子「大人さん・・・貴方の言う事は最もです。でも何もしないだけじゃ彼らは救う事は出来ません・・・私も彼らの気持ちは痛いほ

ど理解できる・・・」
ゆり「?・・・それはどういう意味?」
御子「・・・私も両親を殺されたんですよ。シザースと同じように正義を力で潰されたんです」
全員『!!!!!!!』
御子の衝撃発言に全員その場で固まってしまう。その間にも御子は自分の過去をゆっくりと語るのだった。
御子「私の両親はとある政府組織の科学者でした・・・その政府組織はこの世界で言う警察やＧＵＴＳのようなものです。当時の組織上層部の強引なやり口に私の両親は反発していたんです。そしてお父さんとお母さんは正義感ゆえに知ってはならないものを知ってしまったんです」
琢磨「知ってはならないもの?」
御子「はい。その内容は組織のトップポストの幹部たちが悪の組織の幹部と繋がっていた事でした」
傑「な、どういう事だ!?悪の組織ってまさかダークエンジェルス?」
くるみ「いいえ。ダークエンジェルスが出てくる前の組織・・・名は《スーパーネガショッカー》そして他にも悪のウルトラマンウルトラマンベリアルなんていう性質の悪い連中とね」
夕「じゃあ・・・その幹部たちはそれを闇に葬り去る為に御子ちゃんの両親を?」
御子「はい・・・最初は憎みましたよハラワタが煮えくりかえるほどに・・・しばらくしてエルスの力を手にしました。・・・でもお父さんが言っていた事を思い出したんです《プリキュアの力は闇に侵されていく世界を変えられるかもしれない》と・・・だから私は誓ったんです。これ以上悲しみを広げない為にもこの力このプリキュアの光でみんなを守ると」
大人「・・・・」
御子の過去を聞いた大人は更に複雑な気持ちになった。もしもシザ

ース達にも御子の父親の様な存在がいたとしたら・・・・考えると更に辛くなった。そんな彼の心中を察したのか今度は真夜が口を開いた。

真夜「私も・・・昔はシザースと同じだった」

つぼみ「真夜さん？」

真夜「私はかつて光を捨てて闇のプリキュアだった時期があるのよ」

つぼみ・えりか・いつき・ゆり・アンナ『ええぇえええっ！？？？』

まさかの爆弾発言につぼみ達はまた驚いてしまった。普段クールであるはずのゆりも大声を上げるほどの衝撃発言であったから無理もないだろう

真夜「私は昔ボランティア団体に所属してたのよ。いろんな世界を転々として苦しんでる人を助けてたわ・・・でもある日に私はボランティアしてた国ごと全てを失った・・・そして世界に絶望して闇の戦士キュアリベリオンとなった」

アンナ「・・・ダークプリキュアとはまた違うのね」

真夜「うん。だからシザース達の気持ちは痛いほど理解できるわ・・・でも私の世界のつぼみが私を全力で助け出そうと戦ってくれた・・・。そして私の憎しみは私に闇の力を授けた《アルティメット》に利用されていると知った時は本当に何もかも無くした気持ちになった。そしてお払い箱となった私はアルティメットに1度殺されたの・・・」

アンナ「私と同じだったんだね」

真夜「・・・ええ。でも私はロモモのお陰で生き返る事が出来たの・・・そして私を助ける為に戦ってくれたつぼみ達と共にアルティメットを倒した・・・でもそれだけじゃ終わらなかった」

大人「まだ続きがあるのかい？」

真夜「・・・私は光を手にしたけど闇の力を手に入れる時に契約を交わした怨念がもう一人の私・・・キュアリベリオンを生み出したのよ」

つぼみ「そんな・・・・」

真夜「私は一度光を手にした事で全てを償ったと思ってた・・・でもそれは違ったのよ・・・私が犯した罪は消える事はない・・・でもそれから逃げていても始まらない・・・だから私は罪の十字架を背負いながら生きていくつもりよ・・・これからもずっとね」

大人達は彼女が背負っているものの大きさに圧倒された。つぼみ達は特にそうかもしれない・・・自分達と同い年の女の子がこれ程の覚悟と闇を背負っていたとなれば当然だろう。そして2人の過去を聞いた大人もまた答えが分からなくなってしまう。こんな過酷な過去を持っているのに今の自分はただ迷っているだけ・・・情けなくて悔しくなってしまう。

御子「大人さん・・・貴方が迷う気持ちは分かります。でも彼らの心を救う為にも戦いましょう!!!。それが彼らを救う唯一の方法なんですから・・・私たちの力はその為にあるんです!!」

大人「シザース達を救う唯一の方法・・・。俺達の力の意味・・・・・・（頭で分かっていても迷いが消えない・・・そんな状態で俺は彼らを救う事が出来るのか?今の俺に・・・）」

総司「大人・・・ちょっと来い!!!」

下を向いたまま大人は必死に考える。彼の煮え切らない態度に突然、総司は彼の胸倉を掴んで外に連れ出した。珍しい総司の様子に大人は勿論のこと他の面々も驚いてしまうのだった。

総司「何を迷っている?・・・お前は大切な人を守るためにカブトに・・・光の戦士の力を手にしたんじゃないのか!?」

大人「天道さん・・・俺は・・・」

総司「お前も分かっているのだろう?闇に落ちたアイツらを救うには戦う事しかないことに・・・お前の力はその為にあるのだろう?」

大人「それは・・・そうだけど・・・今の俺にシザース達を救う事が出来るんですか?」

総司「らしくない事を・・・2人の話を聞いてお前はどう思ったんだ?・・・言ってみろ!!!」

大人「・・・分かってるんだよ・・・戦わないといけないことぐらい・・・そんな簡単なことぐらい!!!・・・・でも俺は人を傷つけたくない・・・傷つける為に力を使いたくなんかないんだよ!!!」

総司「・・・そう思うになったのは安西の事があるかだろう?あの時のようににしたくないのだろう?・・・だったら逃げるんじゃない!!!手遅れになる前に。今のお前はあの時とは違う・・・今度は絶対に救って見せろ!!」

大人「・・・・はい!!!(ありがとう・・・御子ちゃん、真夜。お陰で目が覚めたよ・・・俺はシザース達を憎しみの無間地獄から助け出して見せる!!!)」

大人が迷っていた理由・・・・それは3年前の戦いで安西を救えなかった事のトラウマだったのだ。彼はアレ以来人を傷つける為に力は使わないと決めた。だから今回の敵であるシザース達と戦う事に躊躇があったのだ・・・だが総司の言葉で目が覚めた。今の自分が人としてできる事を全力でするしかないと・・・それがシザース達を救う事になるのならそれをするだけだと。

太陽「天度総司が出てきたのは誤算だったな・・・・だがもうすぐ完成する。全世界破壊兵器の《バトルシップ》が・・・・そして4枚の《サバイブのカード》と《融合カード》のデータも完成も最終(ラスト)フェイズに入った・・・・もうすぐ幕が上がる・・・本当の戦いが始まるのだ!!!!!。その時こそこの俺が新人類の頂点に立つのだ!!!!!。はははははははははっ!!!!!!・・・はーーっははははははは!!!!!!!。わはははははっはははは!!!!!!!」

太陽はダークの拠点にある自分の私室にあるパソコンで計画の最終調整をしている所だった。地球解放軍は行うオペレーションウルティメイトブレイクの最終段階に必須な兵器も完成しつつあり今までの戦いで得た敵のデータも十分に採取が出来た。あとはその時を待つだけだ。部屋からは太陽は高笑いが響いたのだった。

第３８話地球解放軍編？「真夜と御子の過去」（後書き）

今回も長くなった（汗）。
大人の迷いはどの主人公も悩んだ事ではないでしょうか？
さて次回はいよいよ太陽達の計画の全貌が明らかに！！！
次回もお楽しみに♪

第３９話地球解放軍編？「総攻撃前夜」（前書き）

前回までのあらすじ～
相手が人間である事に迷いが生まれ始める大人。真夜と御子に隠された過去を聞き戦う意思を取り戻す。そんな中シザース達は全人類総攻撃計画の最終段階に入りキーアイテムの「サバイブ」「融合カード」の完成もカウントダウンに入るのだった

第３９話地球解放軍編？「総攻撃前夜」

太陽は自室でノートパソコンを弄っていた。以前の戦いで採取したハートキャッチプリキュア、救世の光キュアセイバー、光速を操る仮面ライダーカブト、そして突然現れた来客とでも言うべき存在のきゅあコズミック、キュアドリーム、ルージュ、ミルキィローズ、キュアエルスの戦闘データを整理し完璧にまでシュミレートている最中であった。

太陽「（光の巨人のデータはドクタークレイズがニセティガやキラートリニティを造った際のデータがある。今までのデータから整理し分析すると・・・・・）ふっ・・・・勝率は９８％と言うところか・・・・ふっ。・・・当然と言えば当然だな。ボルキャンサー達には１００人近くの生体エネルギーを吸収させただけではなくジェニスから受け取ったラグナロクストーンのパワーを埋め込んであるのだからな・・・・・」

今の段階での計算は上原大人達の勝率は２％以下ならば大番狂わせがない限りは自分達の計画には師匠はない。そして自分の手元に最強にして完璧な手札が揃う。そうなれば憎き旧人類を跡形もなく消し去る事が出来るのだ。その時こそ全てを束ねる帝王（ジェネラル）として白夜太陽は君臨する・・・笑みがこぼれてしまう太陽。

太陽「くくく・・・何かもがこの俺の為に動き味方する。」

太陽は歪んだ笑顔を造りながら作戦を練っていた。そしてしばらくすると夏実、勇治、耕輔の３人が入ってきた。

夏実「失礼します太陽さん。・・・バトルシップの最終調整が終了し《融合》と《サバイブ》のカードデータも完全修復が完了しました」

太陽「そうかとうとう揃ったな・・・我等の計画を完全なものにする為の手札（へいき）が。これで全ては終わる・・・では明朝にバトルシップで総攻撃を仕掛けるぞ！！！」

夏実・勇治・耕輔『はっ！！！！』
太陽「夏実、勇治、耕輔・・・よくここまでついてきてくれた・・・感謝している」
夏実「私には・・・太陽さんしかいませんから」
勇治「ボク達だって同じです。貴方がいたから今のボクがいる」
耕輔「我々の理想郷を作る為なら地獄だろうとお供しますよ」
太陽「ふっ・・・では各人明日の準備をしておけ」
太陽はノートパソコンを閉じる。自分が今まで積み上げてきた布石を解き放ち全てを0に戻すの事が出来るのだと思えば興奮が隠せないのは無理がないだろう。
太陽「いよいよ始まる・・・そして全てが終わるのだ」
明日に全て完結する。その時こそ太陽は自分の中に巣食う全ての憎しみに打つ勝つ事が出来ると信じて・・・。

その頃の大人達はシザース達の今後の対策を議題に話を進めている所だった。
大人「全人類に対する総攻撃だって？」
つぼみ「はい。全人類を総攻撃するカウントダウンは既に始まっていると・・・」
ガイの口から出た《総攻撃へのカウントダウン》。この言葉はただ単にミラーモンスターで一斉に人間を狩り始めると言う意味なのだろうか？だがそんな単純な話で済む様な気は全くしなかった。
琢磨「総攻撃って・・・一体何をする気何だ？・・・まさかミラーモンスターで人間を無差別に襲うとか？」
アンナ「それはないと思うよ。《総攻撃》って言うならクレイズみたいに巨大兵器を使うのが手っ取り早い筈だし・・・それに全人類をミラーモンスターで襲わせるなんて考えにくいよ。」
ゆり「アンナの言うとおりね。でも彼らは普通の人間である以上は巨大兵器なんて簡単に作れるものかしら？」
真夜「分からない。でも何か凄まじい切り札があると言う事は確か

ね」
御子「ダークエンジェルスのジェニスが絡んでいる事を考えるとゆりさんやアンナさんや真夜さんの言う通りです・・・ミラーライダーの力の他に強大な大物を隠している可能性は十分にあるかと」
傑「ミラーモンスター以外の切り札・・・一体何なんだ」
全員『う～ん・・・・』
全員が考え込むが全く思いつかない。太陽達が憎んでいる犯罪者はボルキャンサー達ミラーモンスターの餌にする事で簡単にすむ話だろう。だが全人類となると全く変わってくる。とにかく太陽達は全人類に対する総攻撃の準備をしている事は間違いない。
総司「・・・想像しても時間の無駄でしかないな・・・よし考えるのはここまでにして飯にするぞ」
全員『はいっ!?』
総司「おばあちゃんが言っていた。勝負の時には考えるな・・・・無駄な雑念は無駄しか生まないってな。とにかく今は飯にしようい時間だしな」
総司は総司が時計を指さすと全員の腹の虫が一斉に鳴りだした。口では否定的でも身体は素直に反応してしまう。女性陣は顔が赤くなる。
大人「んじゃそうしますか。俺も手伝います」
総司「よし決まりだな。では食材を貝に行くぞ」
かくして一度休憩も兼ねて全員で食事をする事になり大人、琢磨、傑そして総司は食材を買いに行くこととなった。つぼみ一同に総司は久々に自分の手料理をふるまった。夕食を堪能し戦いの疲れを癒し栄喜を養う。そして一同は解散することとなり総司は大人の家に、女性陣はつぼみ達の家にそれぞれ別れて一夜を過ごすこととなった。
大人「・・・・」
総司「大人」
大人「はい?」

総司「お前つぼみの事をどう思っているんだ？」
大人「！！！・・・な、な、な、な、何言ってんですか急に？」
夜になり大人は床に寝袋を敷いて寝ていた。というのも総司とのじゃんけんで負けてしまい総司が大人のベットを使う事になってしまったからである。総司に突然つぼみの事を聞かれると大人は顔も赤くしてそう聞き返した。
総司「とぼけるな。お前がつぼみの事を想っていることぐらい既に分かっている。だからお前がティガの力を明かそうか迷っている事もな」
大人「・・・・ホントに貴方には隠し事が出来ませんね・・・・そのとおり俺は確かにつぼみに対する思いが日に日に変わってきている・・・でも昔の事が断ち切れずに妹の様に思っている俺もいます。」
総司「・・・成程な」
大人「結局は逃げているだけかもしれませんけどね」
総司「おばあちゃんが言っていた・・・男がやってはいけない事が二つある。女の子を泣かせる事と食べ物を粗末にする事だってな。だからつぼみを絶対に泣かすなよ？」
大人「・・・・はい」
偉そうにそう言われるが総司の言う事は最もだった。大人はその後しばらく総司と積もる話をする。
その頃つぼみの家には真夜と御子が止まっていた。夜になってもなかなか寝付けないつぼみはベランダで星を眺めている。すると同じく真夜と御子が来た。
真夜「つぼみ・・・眠れないの？」
つぼみ「真夜さん・・・それに御子さんも」
真夜「ねえつぼみってさ好きな人とかいるの？」
つぼみ「えぇっ！？・・・い、い、いきなり何ですか！？・・・そ、そんな藪から棒に」

真夜は突然つぼみにそう言う、つぼみは顔が真っ赤になりながら聞き返すが反応を見る限りでは図星である事は明白であった。
真夜「いるんだね♪・・・どういう人なの？」
御子「聞かせてくださいよ」
つぼみ「しょうがないですね・・・その人は小さい時から私の事を守ってくれました。まるで私を本当の妹のように。私もその人を本当のお兄さんのように憧れを抱いてます。一緒にいると暖かくて・・・」
つぼみは自分が思っている人の事を丁寧に語り始めた。彼は幼いころに自分を守ってくれた。そして自分もそんな彼に甘えていた・・・・今も本当の兄妹であるかのように。
真夜「へぇ～今はその人はどうしてるのよ？」
つぼみ「今も近くにいます。私のすぐそばに・・・」
御子「もしかして・・・大人さんですか？」
つぼみ「／／／／／／／」
御子が大人の名を出すとつぼみの顔がまた真っ赤になってしまう。
真夜「あ、図星だった？（はぁ～お互い両想いなのにこうも進まないのは珍しいわね）」
つぼみ「はい。・・・さっきも言ったとおり大人さんは私の兄のような人だったんです。昔は彼に助けてもらってばかりでした・・・・でも今の彼は私に何か隠してる・・・そんな気がするんです。知られたくない何かがある。時々つらそうな眼をするんですよね」
真夜「・・・へ、へぇ～（的を射てる・・・つぼみってホント時々凄い）」
つぼみは大人に対する思いを打ち明けた。今の彼は何かを自分に隠している。そしてそれを明かされるのを恐れている事も・・・真夜と御子は彼女の思っている事が事実である事をバレない様に接しながらもつぼみの感の良さに驚くのだった。
つぼみ「大人さんの苦しみを少しでも無くしてあげたい・・・でも大人さんは私にそれを明かしてくれない・・・それは私の力が不十

分だからなんでしょうか?私が頼りないから大人さんは自分一人で抱え込んで1人で苦しんでいるのだとしたら・・・・」
真夜「それは違う。」
つぼみ「・・・え?」
つぼみは大人が何かを隠しているのは自分に力がないから・・・自分が頼りないからだと想っているのだ。そんなつぼみの意見を真夜は即座に否定した。
真夜「大人君はつぼみを傷つけたくないから・・・悲しい思いをさせたくないから黙っているんだと思う。それにつぼみだって大人君を何度も助けてるじゃない・・・頼りないと思ってないと思うよ?だから大人君自信が秘密を明かすその日まで待ってあげなよ。彼が勇気を手にするその日までさ」
つぼみ「・・・勇気」
御子「真夜さんの言う通りです。きっと彼もそうしようと努力しているはずです・・・だからその時が来るまで待ってあげてください」
つぼみ「・・・はい。(本当に何を隠しているんですか?・・・大人さん!!!)」
つぼみは星を見ながらも大人が隠している事が何なのかを知りたいと思う気持ちがあった。彼が自分にも言えない大きな秘密・・・何れ聞く事になるかもしれない

えりか「はぁ~」
えりかは眠れずにいた。自分の部屋にはコフレが寝息を立てながら熟睡しているのだが彼女は一向に寝れないようだ。
えりか「(アタシ達は偽善者なんかじゃない・・・そう思いたいけど・・・)」
ガイがいった言葉が未だに耳に残って眠れないのだ。えりか達が必死に頑張ってきた事を否定された上に偽善者と言われてしまえばそう思うのが普通だ。
えりか「(こう言う時琢磨さんならなんていうかな?・・・ちょ

っと電話してみるか）」
えりかは携帯を取り出し琢磨の番号にかける。遅い時間なので寝てるかもしれないがダメもとでもいいとためしにかけてみると・・・。
琢磨「もしもし・・・どうしたんだ？こんな時間に？」
えりか「もしもし。いや大したことじゃないんだけど寝れなくて」
琢磨「珍しいな？寝ることと食べる事ならすぐに実行できそうなのに」
えりか「むっ！？・・・何よそれ！！！（怒）」
琢磨「じょ、冗談だよ本気になるなって（汗）」
えりか「全くもう～・・・・」
琢磨「で、どうしたんだよ？」
えりか「うん。実は・・・」
えりかは琢磨に自分の考えを言って琢磨の考えを聞く。お互いに思っている事を聞ければ何かヒントになるかもしれないと思って。
琢磨「成程な。」
えりか「琢磨さんはどう思う？・・・アタシ達のしてる事偽善なのかな？」
琢磨「・・・答えはシンプルだな。偽善と正義は紙一重」
えりか「紙一重？」
琢磨「本の受け入りだけどな。正義とは己が正しいと思える行動でありそれは他者から見れば偽善に見える・・・っていう理論がある。だから正義と偽善は人の考えで変わるんだ」
えりか「人の考えで・・・・」
琢磨「だから俺達の正義をシザース達に押しつけても解決にはならない・・・でもやつらのやっている事は間違ってる。だから俺達は止める・・・そう言う答えじゃダメかな？」
えりか「・・・・そうだね。考えてもしょうがないよね・・・自分が信じれる事をすればいい・・・今までみたいに」
琢磨「ああ。それでいいんだよ」
えりか「ありがと琢磨さん♪」

琢磨「ああ。で、他には何か悩みごとはあるのかい？お姫様」
えりか「ちょと何ですか？お姫様なんて」
電話越しにお互いに笑うえりかと琢磨。２人は正にお似合いのカップルだった。

明堂院家にはのぞみとりんが泊っていた。深夜にいつきは眠れず部屋に一人でいた。
いつき「・・・・・」
のぞみ「いつき起きてる？」
いつき「のぞみ？・・・・うん一応ね。」
すると部屋にのぞみとりんが入ってきた。どうやら彼女達も眠れないらしい。
りん「やっぱ寝れないよね」
いつき「・・・・」
のぞみ「シザース達の復讐する理由が今だに信じられない？」
いつき「うん。大切な人を奪われた痛みはボクには分からない・・・もしもシザース達のような状況になったらボクも・・・って考えるとね」
シザース達が戦う理由を知った時はいつきも大人ほどではないが迷いが生まれていたのだ。自分ももし大切な人を失ったらシザース達のようになるかもしれない。そうならないと言いきれない自分が情けないのだ
のぞみ「いつきの大切な人ってやっぱりお兄さん？」
いつき「うん。そしてもう１人・・・大切な人がいる」
りん「もう１人？・・・初耳ね」
いつき「うん。その人はボクにとっては大切なかけがえのないさ」
のぞみ「じゃあその人を守る為に頑張るぞ。けってぇーい！！！」
りん「ったく緊張感がないんだから」
いつき「ふふっ。のぞみらしいけどね」
どの世界ノ存在であろうとものぞみは全く変わりがないといつきは

そう言うするとのぞみは膨れた顔を見せる。
のぞみ「あ、ひど～い」
のぞみはそう言って膨れた顔になる。だがすぐに笑い声が部屋を包んだ。

ゆり「・・・・」
アンナ「お姉ちゃんまだ起きてたの？」
くるみ「まあ私たちもだけどね」」
ゆりの家にはくるむが泊っていた。珍しく寝つきが悪いゆりはホットミルクを飲みながら時間を過ごしていたのだった。起きてきた2人にホッとミルクを出しゆりとアンナそしてくるみは眠気が来るまで話を始める。
アンナ「ねえ聞いてもいい？お姉ちゃんはわたしが1度死んだ時・・・どんな気持だった？」
ゆり「・・・あの時は私はクレイズに対する憎悪に支配されそうになっていたわ。私だけじゃなくて大人やつぼみも・・・・」
アンナ「でもお姉ちゃんはシザース達とは違った。憎しみに支配されることなく私を助け出そうと戦ってくれた・・・・」
ゆり「ええ。そして貴女を取り戻した・・・シザース達の憎しみと悲しみは私にも理解できるわ・・・でも彼らのやっている事は間違っている。憎しみや悲しみの連鎖は負しか生み出さない・・・彼らは私達に助けてほしいのよ・」
アンナ「そうね。憎しみに支配された心を解き放つ事が出来るのは私達だけだもんね」
ゆり「ええ。」
くるみ「シザース達にもちゃんとした理解者がいればあんな事しなかったかもしれないわね」
ゆり「そうね。彼らの心を癒すような存在がいれば」
話をして時間がどんどんたっていく。こうしている間にもシザーズ達はどうしているのだろうかと3人は考えていた。もしもシザース

達にも彼らの心を正すような存在がいたのならばこんな事にはならなかったかもしれないと思いながら・・・。

勇奈「・・・・・（この世界にいる黒幕は一体誰だ？もしもティガ伝説がオリジナルとは違うのもだったとしたらあの3地以外にも闇の巨人も存在する事になるが・・・ジェニスが言っていた邪神とはやはりあの強大な闇の事なのか？）」

ラブ「勇奈さん？」

勇奈「ああ、ラブまだ起きてたの？」

ラブ「勇奈さんこそ・・・どうしてこんな時間まで？」

勇奈「いや・・・ジェニスが言っていた言葉の意味を考えていたんだが」

ラブ「邪神の事ですか？」

勇奈「うん。もしも邪神が奴だとしたらこの世界どころか全ての世界は・・・・」

ラブ「大丈夫ですよ。この世界にはウルトラマンがいるんですよ？そんな簡単には・・・」

勇奈「それとも限らないのよ・・・・もしもティガが・・・」

ラブ「え？」

勇奈とラブは勇の家に泊っていた。勇奈はジェニスが言った邪神の事を考えたいたのだった。邪神とはかつて自分も聞いた事がある伝説の魔獣であるがダークエンジェルスが狙っているとなると伝説は実在するのかもしれない・・・・そしてティガ伝説は調べているが大人の世界にいるティガ達は違う点がある。もしも勇奈の考えが正しければ・・・・

シザース達の総攻撃前夜。復讐心に支配された闇の戦士たちと闇に落ちた戦士達を救おうとする希望の戦士達は自分達が心の中で正しいと思う《正義》を信じて前に進んでいた。それは決して明確な答えがあるものではない。それぞれが信じる信念、プライドが籠った

それを武器に戦う。決戦の火蓋は切って落とされようとしている。
果たして大人達は白夜太陽が率いる地球解放軍の復讐を止める事は出来るのだろうか？

第３９話地球解放軍編？「総攻撃前夜」（後書き）

今回は決戦前夜を書いてみました。主役の大人達そしてこの長編の裏の主人公である太陽。２人が歩んだ人生は全く正反対のものであった。

さて次回はいよいよ決戦に突入です！！！

ではでは次回もお楽しみ♪

第４０話地球解放軍編？「決戦～動きだす破壊戦艦～」（前書き）

前回までのあらすじ～
遂に完成したシザース達の計画の要の手札であるバトルシップ、サバイヴ、融合の３つの力。復讐鬼の戦士は自らの中に巣食う憎しみに終止符を打つべく戦いの準備を整える。
その頃それを止めるべくつぼみ達も戦いに備えるがそれぞれがシザース達の憎しみについて考えていた・・・・。

第４０話地球解放軍編？「決戦～動きだす破壊戦艦～」

翌日の夜明けを告げる太陽の光が希望ヶ丘の街を包み込んでいく。
清々しい朝日を受けてすべての生物は眠りから覚める。海底の奥底にいるシザース達も地上の朝日を眺める。この朝日が自分の復讐の終止符（ピリオド）となる事を信じて白夜太陽はシザースのカードデッキを取り出す。
太陽「コレで貴様らの見る最後の朝日の光だ・・・旧人類よ。そして全ての復讐は完結するのだ」
《この俺が受けた屈辱を貴様らを踏み潰して晴らす・・・そしてこの俺が人間の頂点に立つ》彼を縛りつける憎しみと闇はオーラを放っているかのようだ。
シザースはカードデッキをしまいダークとジェニスが待つ玉座の間へと向かう。玉座の前には既に夏実達が待機していて太陽が来ると会釈をして太陽に敬意を払う。
ダーク「遂に始まるようだな？オペレーションウルティメイトブレイクの最終段階が」
太陽「ああ。俺達の手の中に最強の手札（へいき）は揃った。貴様らが恐れるプリキュアなど跡形もなく消し去るほどのな」
ダーク「期待している・・・では行くがよい地球解放軍よ！！！」
太陽「ふぅん」
太陽達４人そしてジェニスは玉座の間から出る。そしてある場所に向かって暗い通路を歩きだす暫くすると玉座の間と比較すると倍以上の広さがあろう目的の部屋についた。その部屋には全長数百メートルはあろう超巨大な戦艦があった。これこそ太陽達の第一の手札（へいき）である超破壊戦闘母艦のバトルシップである。５人はその前に立つ。
太陽「とうとうこの時が来た。全てを破壊し０に戻す時が・・・・」
全てを捨てて此処まで来た彼にとってもう今の世界になど全く未練などない。全てを破壊して無に還す事が最大の目的である。その為

にモンスターをパワーアップさせて来ただけではなく自分達の死を覚悟してきた。
太陽「行くぞ!!・・・必ず俺達解放軍が勝利し全てを終わらせる為に!!!!!」
夏実・勇治・耕輔『はッ!!!!!』
バトルシップの前に立ち４人はカードデッキを取り出すと同時にＶバックルが出現。各人変身ポーズをとる。
太陽・夏実・勇治・耕輔『変身!!!』
４人同時にカードデッキをベルトに装填してミラーライダーの姿に変わる。その後５人はバトルシップに乗り込んでいく。
ガイ「エネルギータービン起動率１２０％」
ライア「ビームランチャーシステム、オールグリーン」
王蛇「ウィングスタビライザー出力２００％」
バトルシップのコンピューターを操作しバトルシップの各エンジン部位にエネルギーを集めて発進準備を開始する。順調に起動をし始めていき発進準備が整った事を王蛇から聞いたシザースは中央の席に座る。
シザース「バトルシップ発進!!」
そしてバトルシップ発進の合図を出すバトルシップはエンジンタービンを点火させるとバトルシップは浮き上がる。そして目の前に闇の扉が出現し勢いよくそれを潜る。そしてその数十秒後には地上にバトルシップが姿を全地球人お披露目することとなった。
シザース「ふぅん先ずは手始めに首都の東京を壊滅させてやる。レーザー発射準備、プリキュア共に見せつけてやるぞ」
王蛇「はっ!!!」
シザースは先ずは軽く街を甚振ってくれるとレーザー砲で街を無差別に攻撃を始めた。突然襲い掛かる破壊戦艦に人々は悲鳴をあげながら逃げ惑う。
シザース「さぁあ来いプリキュアぁ、ウルトラマン共!!!!!」
街を破壊し燃え盛る炎が辺りを包み込んでいく。勿論この程度の攻

撃では自分の持つ怒りは収まるものではない。ウルトラマン達を誘き寄せる為の陽動でしかない。

ニースキャスター「全国の皆様ご覧ください！！！突如空に浮かぶ巨大戦艦が東京を破壊しています。街は巨大戦艦のレーザー砲で焼き尽くされています！！！」

普段やる番組が突然中断となり東京が襲撃を受けている様を全国ネットの中継で放映される。当然すぐに大人達にもその情報が届いた。

大人「アレがシザース達が言っていた全人類を攻撃するという。アイツらあんな物で世界を跡形もなく消し去るつもりか・・・」

総司と大人はバトルシップが行う破壊活動の様子を見た後すぐに被害地域の救助に向かうべく荷支度を済ませていた。

総司「此処からじゃエクステンダーを飛ばしても間に合わんな・・・こうなれば行く方法は1つしかないな」

大人「ティガの力ですね？俺達だけでも行きましょう！！！」

大人はスパークレンスを取り出す。こうなれば自分達だけで行かないと被害は増え続ける。つぼみ達には悪いが先に行かせてもらおうと思ったのだが・・・。

つぼみ「大人さん大変です！！！し、シザース達が！！！」

大人「！！！・・分かってるって！！！と、とにかく落ちつけ！！！」

大人の自宅の扉を開けて外に出ようとするとつぼみ達が既にいて押し寄せていた。すぐに大人はスパークレンスをカバンにしまうと全員は外に出て大人が持つ携帯テレビに釘付になっていた。興奮するつぼみ達を落ちつかせようにそう言っていく大人。こうなれば時間はかかるが全員でバイクを飛ばして現場に行くしかないとヘルメットを片手に部屋を出ようとする一同だったが携帯テレビのアナウンサーの一言で動きが止まった。

ニュースキャスター「た、たった今入って来た情報です。戦艦よる攻撃は中断されたようです。繰り返します、攻撃は中断されたよう

です」
アナウンサーは額に汗を浮かべながらも情報を伝える。大人達は一度大きなため息をついてその場で脱力してしまう。だがそれも束の間だった。突然テレビの画面が真っ黒になる。大人はテレビが請われたのかと思い角っこを叩いていくが反応はない。そしてその直後にシザースの顔が現れた。
シザース「聞くがいい愚かなる旧人類よ!!!我が名は仮面ライダーシザース。貴様ら腐りきった旧人類を滅ぼし新たなる新人類の帝王となる者だ!!!!!」
大人「これは!?」
マントを羽織ったシザースのその何処かの部屋の椅子に座り足を組んだ状態で写されていた。その近くには王蛇、ガイ、ライア、ジェニスの４人の姿もあった。勿論電波ジャックを受けたのは大人のテレビだけではなく全世界の人々が同じ絵いぞを見ている。
王蛇「東京は我々が制圧した。そして今から２４時間後にこのバトルシップを全世界の首都に送り込み全世界の一斉攻撃を開始する。そして貴様ら旧人類は絶滅の時を迎えるのだ」
王蛇の説明に映像を見ていた人々は困惑をしながら怯える。
ガイ「言っておくがこれはイタズラではない。我々の兵器を見れば分かるであろう?」
ライア「何処へ逃げようとも無駄だ!!!貴様らに逃げ場はない!!!」
続いてガイとライアの発言に全人類はパニックを起こしてしまう。
大人達は様子を見ることしかできなかった。
ジェニス「貴様らには望みはない・・・精々残された時間を後悔のない様に過ごすがいい!!!」
シザース「そして思い知れ・・・・貴様らがいかに愚かであったかをな!!!・・・くくくく・・・あーはははははははっ!!!!!!!!!」
最後にジェニスとシザースはそう言ってシザースの高笑いを最後に

映像は消えてなくなった。今の映像を見たテレビキャスターは大慌
てでその場から逃げる様に姿を消しその直後にテレビの映像はしば
らくお待ちくださいと表示される。

つぼみ「皆さんシザース達を止めに行きましょう！！！まだ時間は
２４時間あるんです・・・今から行けば間に合います！！！」
沈黙を破って第一声を発したのはつぼみであった。それに続くよう
にえりかが頷きいつもの笑顔を見せる。
えりか「うっしゃー！！！やってやるぞぉ」
そして片腕を上に突き出してやる気十分だとアピールしていく。大
人もそれを見ると手を前に出した。
大人「つぼみの言うとおりだ。必ず止めよう」
大人の手に全員の腕が重なる。今こそ自分達が立ち上がる時である
と一致団結するように。
大人「皆・・・今俺達が持っているのは戦場への片道切符だ。もう
後戻りはできないだろう。だけど俺達は絶対に負けられない。故に
全員に守ってもらう事はただ１つだけだ・・・《絶対に何が何でも
も生きて帰る》これだけだ！！！！」
大人の言葉に全員が返事をし掛け声を上げる。

大人・琢磨・傑・夕・総司『変身！！！』
電子音『ＨＥＮＳＩＮ＆ＣＡＳＴ　ＯＦＦ』
ライダーベルト、ライダーブローチにそれぞれのゼクターを装填し
てヒイロカネの鎧に包まれていく大人達。そしてその後ゼクターを
瞬時に操作して重厚な鎧を脱ぎすててシャープな姿のライダーフォ
ームにフォームチェンジする。

つぼみ・えりか・いつき・ゆり『プリキュア・オープンマイハート
！！』

アンナ「プリキュア・ナイトイリュージョン！！！」

真夜「プリキュア・セイントリバース！！！」

のぞみ・りん『プリキュア・メタモルフォーゼ！！！』

くるみ「スカイローズ・トランスレイト！」

ラブ「チェインジ！プリキュア・ビィートアァーップ！」

御子「プリキュア・ライトニング・トランス！！！」

勇奈「プリキュア・コズミックチャージ！」

それぞれの変身アイテムを取り出して辺り一面に光を放ちながらプリキュアの姿に変わるつぼみ達。総勢１２人全員が変身終わりライダー達はバイクに乗りこみプリキュア達はブロッサム達と共に飛びあがってバトルシップがある東京へと向かう。シザース達との決戦に挑む為に。

第４０話地球解放軍編？「決戦～動きだす破壊戦艦～」（後書き）

次回からバトルシップ内部にて因縁の対決が始まります。対戦カードをどうかご想像ください。

ではでは次回もお楽しみに♪

キャラクター紹介？～敵キャラ編～（前書き）

今更ながら敵キャラを紹介しようと思います。

キャラクター紹介？～敵キャラ編～

ダーク／イメージＣＶ　緑川光
今作の事件の黒幕にして自称「闇の支配者」。４００年前に先代のプリキュアのキュアアンジェとウルトラマンティガに敗れてしまい海底に封印されることとなった。３年前の砂漠の使徒との戦いで心の大樹が一度枯らされた事で封印が弱まり復活する。かつてプリキュアの力を甘く見た事を後悔しておりプリキュアの力を危険視している。現在は自身の闇の力の増幅と邪神復活に力を注いでおり各世界に僕（しもべ）を派遣して密かに準備を整えさせている。普段はマントに身が包まれているがそのシルエットはウルトラマンティガと似ている・・・・。

キリエル人
第３話にて初登場。ダークの側近。ウルトラマンティガに勝負を挑むもブロッサム達の介入により敗れる。現在はダークの闇の力を増幅させて邪神を復活させる為に次元を超え世界を飛び回っている。

バルタン星人
第５話にて初登場。ダークの側近。主に生体改造を専門としておりバルタンの科学で改造した怪獣たちをティガに差し向けるが怒りに燃えるブロッサム達の活躍で怪獣を元の戻された揚句ティガ達に倒された。現在はバルタン一族の同胞が地球に向かっているらしいが・・・。

クレイズ
サロメ星人の科学者。サロメのロボット技術とダークプリキュアをキーとした作戦の『月の影計画』で大人達を倒そうと目論むがそれが皮肉にもキュアホーリーナイトを生み出すきっかけとなってしま

う。最後は最強ロボであるクイーンエメラルダスで心中を計るが覚醒したキュアホーリーナイトとブロッサム、ティガ達によって倒される。彼女の発明品のダークネスリング、ニセウルトラマンティガ、３体のキラートリニティーの性能は絶大なものであったのだが機械に頼った戦術故に咄嗟の支障に弱いのが最大の弱点である事に気が付かなかったのが最大の敗因であった。

邪神
かつて超古代文明を滅ぼしたと言われている伝説の存在。ダークは４００年前に邪神復活の儀式を行おうと暗躍していたがキュアアンジェと先代ウルトラマンティガの活躍で阻止され海底に封印されることとなった。超古代文明を闇に沈め光の英雄戦士と相打ちになったと言われるほどの強大な力を秘めているがそれ以外は謎に包まれておりその存在は今現在ダークしか知らない。邪神復活には大量の闇エネルギーが必要とされているらしいくダークは闇エネルギーを集める為に暗躍をしている。

◆地球解放軍

白夜太陽（びゃくやたいよう）　１８歳／仮面ライダーシザース　イメージＣＶ　津田健次郎
地球解放軍のリーダー的存在の少年。かつては優しい心の持ち主で将来は父と同じく警察官になる事が夢だったが彼が中学の時に父の総一郎が濡れ衣を着去られて逮捕された事で母親は自殺し一家は崩壊してしまう。その後彼は犯罪者の息子というレッテルを張られてしまっただけではなく親戚をたらい回しにされ愛情を受ける事はなかったために人を徐々に信じられなくなってしまう。そして高校生になった時に真実を知った彼は人を《自分の欲望の為に動く存在》と考えるようになってしまう・失意のどん底に落とされた彼はジェニスの誘いに乗ってしまい仮面ライダーシザースの力を手に入れる。

その後の彼は自身の闇は果てることはなく暴走してしまい憎しみの力を募らせてボルキャンサーに父を陥れた警察関係者や犯罪者を餌にしたり仮面ライダーザビーである須藤（すどう）を奇襲などを行うほど冷酷になってしまった。

山梨夏実（やまなし なつみ）　１７歳／仮面ライダー王蛇　イメージＣＶ皆川純子
地球解解放軍のナンバー2で太陽を慕う少女。かつて親にネグレクトや虐待を受けていたのだがそれを太陽の父総一郎に助けられ白夜家の養女となった過去を持つ。しかし現在は白夜家が崩壊した為山梨の性を名乗っている。太陽には絶対的な信頼と忠誠を持ち彼を傷つけるものは誰であろうと許さない。太陽と共に仮面ライダー王蛇の力を手に入れる。元々は繊細で傷つきやすい性格だったのだが親に捨てられた過去があるため太陽や勇治、耕輔といった仲間と認めた人間以外を信じる事が出来ない。かつて闇の存在だった雨牙真夜を敵視している。

冴島勇治（さえじま ゆうじ）　１６歳／仮面ライダーガイ　イメージＣＶ甲斐田ゆき
地球解放軍の作戦参謀役の少年。いじめられっ子の過去を持ちそれが原因で一時期は自殺も考えた事がある。しかし先輩である太陽に助けられた事で生きる勇気を取り戻した。しかしその後太陽の悲劇を知り太陽の計画に賛同する。

神崎耕輔（かんざきこうすけ）　１６歳／仮面ライダーライア　イメージＣＶ阪口大輔
地球解放軍のムードメーカー。勇治とは親友であり彼と同じいじめられていた過去を持つ。太陽と主に腐りきった世界を０にして自分の憎しみを晴らす事で全てをリセットしてようと考える様になる。君を呼ばれる事を嫌っていて偶に自分の名を君とつける勇治とはケンカになってしまうがケンカしてる様でじゃれているの様にも見える。

第４１話地球解放軍編？「決戦～それぞれの対戦者～」（前書き）

前回までのあらすじ～
太陽達の第１の兵器とは超破壊戦艦「バトルシップ」の事であった。
バトルシップの超火力で日本の首都の東京を壊滅させた太陽達は２４時間後に全世界の首都にこのバトルシップで一斉攻撃を開始すると宣言を始めた。
大人達は全世界を守る為にそして太陽達の復讐を止める為に東京のバトルシップへと向かう。

第４１話地球解放軍編？「決戦～それぞれの対戦者～」

大人達が東京に着いた時には無るも無残な状態へとなっていた。渋谷や銀座などの東京を象徴する街はバトルシップの攻撃で跡形もなく破壊され今もなお所々に火が舞い上がっていた。今の東京は太陽達の心の中に巣くう憎しみを現わすかのようでもあった。

ブロッサム「・・・・ひどい」

ブロッサムは空からその光景を見て目を覆いたくなった。そしてこんなにも非道な真似を簡単に行ったシザース達に対する怒りが込み上がってきた。

ナイト「見えてきたよ！！！」

ナイトの声にプリキュア達全員が前を向いた。そこにはバトルシップの禍々しい姿があった。全長数百メートルはあるであろうその巨体からは凄まじいほどの威圧感がありその外装を見ただけでもバトルシップの脅威は伝わってきそうだった。ブロッサム達は空から全体を見回していると大人の声が下から聞こえてきた。

カブト（大人）「ブロッサム、何処か入れそうな場所はないか？」

下にはエクステンダーから降りた大人達が何処か中に入れそうな入口を探しているところだった。

ブロッサム「いいえ。何処にもそんな場所は見当たりません」

ブロッサムは下にいる大人達に聞こえる声でそう言った。大人はそれを聞いて手を振って合図を送ると琢磨達と共に再び入口を探し始めるがその直後にバトルシップが変形を始めた。

フェアリー「な、何っ！？」

フェアリーは突然の事で驚いてしまう。全員は攻撃かと思い身構えるがバトルシップの下層部のゲートが開いただけであった。どうやらシザース達は自分達がいる事を知っているらしい。

カブト（総司）「中に入って来い・・・ということか」

マリン「舐められたもんね・・・だったらお望み通り入ってやろ

うじゃん。皆、行くよ！！！」
マリンを先頭に全員はゲートの中に入る。するとゲートは閉まり全員船内に閉じ込められてしまった。床などを見るとそこには鏡が敷き詰められていた。
サンシャイン「鏡？・・・・」
ムーンライト「まさか・・・・」
ムーンライトの直感は当たった。鏡から突然多数の影が出現してきたのだ。辺り一面にヤゴ型ミラーモンスターのシアゴート、メガゼール、オメガゼール、ギガゼールなどの野良系ミラーモンスターが大量に出現してブロッサム達に襲いかかる。当然大人達ライダー、ブロッサム達プリキュアは武器を片手に応戦を始める。
カブト・ガタック・ダークカブト・フェアリー『クロックアップ！！！！』
大人達ライダーははクロックアップと専用武器でシアゴートを攻撃して撃破して敵の数をどんどん減らしていく。カブトとダークカブトのクナイガンの斬撃、ガタックのライダーカッティング、フェアリーのレイピアから発せられるライダーストライク、様々な攻撃がミラーモンスターに炸裂し爆散していく勿論プリキュア達も負けず劣らず敵をを薙ぎ払う。
ブロッサム・マリン・サンシャイン『プリキュア・大爆発！！！！！』
ムーンライト「ムーンライト・シルバーインパクト！！！！」
ナイト「イリュージョンソード！！！！！」
セイバー「セイバー・サウンドウェイブ！！」
ドリーム「プリキュア・シューティングスター！！！！」
ルージュ「プリキュア・ファイヤーストライク！！！！」
ローズ「ミルキィローズ・ブリザード！！！！！」
ピーチ「プリキュア・ラブサンシャイン！！！！」
エルス「エルス・ライトニングスラッシュ！！！！！」
コズミック「プリキュア・コスモブレイカー！！！！！」

シアゴート以外のモンスターもブロッサム、マリン、サンシャインの合体技の大爆発で四方八方に吹き飛ばされムーンライとのシルバーインパクトで壁に叩きつけられナイトのイリュージョンソードで真っ二つに切り裂かれ、セイバーのサウンドウェイブで消滅しドリームのシューティングスター、ルージュのファイヤーストライク、ローズのブリザードが合体した攻撃が叩き込まれピーチのラブサンシャインで浄化されエルスのライトニングスラッシュで斬りつけられコズミックのコスモブレイカーでの光の拳でシアゴートは次々と倒されていく。だがミラーモンスターは倒されても倒されても代わりが出現してくる。

カブト（大人）「キリがないな・・・仕方ないブロッサム達は先に行け。此処は俺が引き受ける」

ブロッサム「な、何言ってるんですか！！！1人でこの数を相手にするなんて無謀すぎますよ」

全員ミラーモンスターに囲まれて背中合わせの状態になりながらも大人は時間の無駄だと判断し自分が此処に残り此処にいるモンスター達を引き受けると言い出す。ブロッサムは彼の提案を拒むように反論の声を上げるが大人はブロッサムの手を握ると彼女を諭すように優しい口調で声をかける。

カブト（大人）「大丈夫だこんな雑魚ぐらいじゃ俺はくたばらないよ。それに総攻撃までに時間がない。此処に誰かが残ってコイツらの相手をする以外に今の俺達に手段はない！！！！」

ブロッサムはうつむくように顔を下に下げるが前を向くとキリっとした顔を見せて静かに頷いた。今は迷っている場合ではない・・・多少のリスクは覚悟して先に進むしかない

ガタック「確かに言えてるな。・・・なら俺とダークカブト、天道さんも此処に残ろう。４人もいれば雑魚の相手は十分だ！！！」

ダークカブト「ああ。俺以外はハイパーフォームになれる。だから先に行け・・・そしてシザース達を止めて来い！！！」

マリン「ガタック・・・・ダークカブト」

サンシャイン「分かった。無理はしないでよ」
カブト（総司）「心配するな。この俺がいるんだから」
囲まれながらも全員は必ず生きて合流すると誓い合うように頷く。
それを合図にしたようにブロッサム達プリキュアとフェアリーが飛び上がる。それを見たモンスターたちは彼女達に襲いかかろうとするが大人達ライダーがそれはさせまいとクロックアップでモンスターを蹴散らす。

シザース「やはりそう来るか。だが易々と俺達の所に来れると思わない事だな」
ゲート周辺の様子を指令室のモニター画面から見ているシザース達。最初は歓迎の意味を込めて雑魚のミラーモンスターを大量に投入してみせたがやはり簡単に突破してきた。
ガイ「シザースさん。次はボク達が行きましょう」
シザース「ああ、任せたぞ。ガイ、ライア」
ガイ・ライア『はっ！！！！』
此方に向かってくるプリキュア達の相手はライアとガイは指令室を後にする。
王蛇「念には念を入れて私も待機しておきます」
ガイとライアが指令室をあとにすると王蛇も部屋を出ようと足を動かす。シザースは一度王蛇を呼びとめる。
シザース「・・・無理はするな」
ただ一言だけそう言うシザース。王蛇はそれにこたえる様に振り返ると頷く。
王蛇「・・・大丈夫ですよ。此処に帰ってきますから」
いつもになく明るい声でそう言う王蛇。そしてそのまま回れ右をして指令室を後にした。
シザース「・・・すまない夏実」
王蛇が出たのを確認するとシザースは下を向き力なくそう言った。
力ない自分の拳を作りながら彼はモニターを見直す。

ブロッサム達はバトルシップ内を走りながら上に上がる。途中にもミラーモンスターはいるがそれをなぎ倒しながらも大人達の思いを無駄にしないために先に進む。暫くすると大きな扉がある場所にたどり着いた。

ムーンライト「ここ以外は行く道がないわね。罠かもしれないけど行くしかなさそうね」

辺りを確認しながらもこの扉以外先に進む道はない。ならば罠かもしれないが行くしかないと扉を開ける。すると中にはメタルホーンを装備したガイとエビルウィップを構えたライアの2人がが待ち構えていた。

ガイ「来たね?でもここから先には行かさないよ」

メタルホーンを光らせながらそう言うガイ。恐らくガイは本気でむかってくるだろうし彼の契約モンスターはラグナロクストーンと生体エネルギーで強化されている。人数ではプリキュア達が圧倒しているがガイは力ではそれを凌がれかねない。手強い相手とどう戦うかと考えいる中でローズとルージュが前に出る。

ローズ「皆、先に進んで。」

ナイト「ローズ!?」

ルージュ「ガイは私とローズが引き受けるから」

ブロッサム「そんなっ!!!何を言って・・・・」

いくらなんでもこの2人相手に無茶し過ぎだとブロッサムが声を上げるがローズは振り返り余裕とでも言うような顔を見せる。

ローズ「大丈夫よ私達で十分。だから先に行って」

ルージュ「此処でつまずいてたら大人さん達に怒られるよ?」

続いてルージュも笑顔を見せてブロッサム達にそう言う。今の自分達の目的はシザースを止める事にある。だったらリスクはやむを得ない。

マリン「分かったよ。2人とも頑張って!!!」

2人の意思を受け継いだとブロッサム達は出口の扉まで全速力で走る。ガイはさせるものかとブロッサム達の元に向かうがルージュと

ローズがガイの前に割入り動きを止める。
ローズ「アンタの相手は私達って言った筈よ？」
ルージュ「ブロッサム達の邪魔はさせない」
メタルホーンを受けとめながらローズとルージュはガイに一発パンチを入れてガイをふっ飛ばす。ガイは舌打ちをするとやれやれと言う様なポーズをする。
ガイ「まあいいや。君達を先に倒させてもらうよ」
ガイはメタルホーンを振り上げてローズとルージュに向かって走る。
その後ブロッサム達はバトルシップ内部でシザースがいるであろう最上階を目指して爆進する。途中に出てくるメガゼールなどの雑魚モンスターを蹴散らしながら階段を上がり上に突き進んでいく。そして暫くすると広い渡り廊下がある場所に出ると渡り廊下の出口の前に第2の戦士仮面ライダーライアが立ちふさがっていた。
ライア「ここから先に進ませない」
エビルダイバーを既に呼び出しているライアは纏めて相手をするつもりらしい。ライアは鞭を振いながら構えるとそれに合わせてエルスが前に出る。
エルス「彼の相手は私が。皆さんは先に進んでください！！！」
ライア「・・・・キュアエルス1人だけとは俺も舐められたものだな？」
ライアはエビルウィップを振って床に叩きつけてそう言う。だが誰ひとりとして先に進ませないとライアは前に出るがそれと当時にエルスが飛び出してライアとぶつかる。
エルス「早く！！！！」
サンシャイン「エルス・・・ありがとう」
サンシャインはエルスに一言そう言う。そして全員渡り廊下の出口に向かって突き進んでいった。
バトルシップの内部の大部分を突き進んだブロッサム達はシザースを目指す。奥に進めば進むほどミラーモンスターの数は減っていく。まるで自分達を誘き寄せるかのようだったが此処は敵の本拠地であ

り何があっても自分達には進むしかない。突き進んで最上階の近くの階段を上ったその先には闘技場のような場所に王蛇とジェニスの姿があった。

王蛇「・・・ふん」

ジェニス「来たわねキュアピーチ」

ピーチ「ジェニス」

ジェニスは宿敵のピーチを睨みつける。ピーチにとっても彼女は因縁の相手であることは間違いない。

王蛇「この先の階段がシザースさんへと続く最後の階段だ。だが貴様らはここから先に行かすわけにはいかない・・・ここで纏めて消えてもらう」

王蛇はそう言って一歩前に出る。ここから先へは絶対に進ませないと威圧感を放ちながら・・・だがそれに反するようにドリームとピーチが前に出た。

ドリーム「ブロッサム・・・王蛇の相手は私がする。だから貴女達はシザースを」

ピーチ「皆の思い・・・託したよ」

ブロッサムは静かにうなずきパヒュームでレッドの種の力を使いクロックアップ並みの高速移動で階段へと突き進んだ。そして残されたのはドリームとピーチ、王蛇とジェニスだけとなった。

王蛇「ちっ・・・お前達を早々に片付けて奴らを」

ドリーム「そんな事させない・・・貴女達を救う為に」

王蛇「・・っ!!!。黙れ」

王蛇はドリームにターゲットを絞り攻撃を始める。ドリームもそれに応戦しながら闘技場に凄まじい走った。

ジェニス「貴様を倒し・・・私は私になるっ!!!!」

ピーチ「・・・・」

ピーチとジェニスの因縁の戦いも始まった。４人の死力を尽くした戦いは闘技場内に凄まじい衝撃を送りながらも４人の闘志は揺るがない。

ブロッサム達はその頃最後の扉の前にたどり着いた。そこを開けると大きい玉座のような椅子に腰かけてマントを羽織ったシザースの姿があった。

シザース「ふぅん」

ブロッサム「シザース！！！！」

ブロッサムの声にシザースは反応したように立ち上がりマントを靡かせる。そして玉座の椅子からゆっくりと離れてブロッサム達に近づく。

シザース「よくここまで来たな？・・・てっきり相手が人間である事に怖気づいたかと思っていたが」

シザースは腕を組んでそう言う。プリキュアやウルトラマンは人を守る為に戦う戦士である。その人間が敵となればどうなるか楽しみだったシザース。その言葉にブロッサムは静かに口を開く。

ブロッサム「貴方達の過去がどれだけ辛かったかは聞きました・・・でも私達はこの世界を守る為にプリキュアになった。だから例え敵が人間であっても逃げるわけにはいかないんです！！！」

ブロッサムの一言にシザースは鼻で笑いながら一度高笑いをする。プリキュア達は彼の様子に困惑する。高笑いが終わるとシザースは前を向く

シザース「ふざけるな」

ブロッサム達『！！？？』

シザース「この世界を守る？・・・俺達はなこの世界に捨てられた人間なんだよ・・・お前達のような人間の負の感情を知らない餓鬼共が一番腹立たしい！！！！」

シザースはマントを脱ぎすてて今の自分の思いを全て暴露する。荒々しい彼の口調にブロッサム達は思わず目をそらしてしまう。

シザース「ふぅん・・貴様らを倒しこの俺が新人類と新世界の帝王となるのだ！！！！苦しみのない楽園を造る邪魔はさせん！！！！！」

シザースはそう叫ぶとブロッサム達にダッシュする。ブロッサム達も応戦するべく専用武器を取り出してシザースに向かう。

第４１話地球解放軍編？「決戦～それぞれの対戦者～」（後書き）

今回はアンケートの対戦カードを一部採用しております。次回はバトルに突入とシザース達の価値観にプリキュア達が一喝します。

ではでは次回もお楽しみに♪

第４２話地球解放軍編？「決戦～心の闇～」（前書き）

前回までのあらすじ～
バトルシップ内に潜入した大人達はバラバラになりながらも思いは１つだと誓い合いそれぞれの戦いを挑む。ブロッサム、マリン、サンシャイン、ムーンライト、ナイト、フェアリー、セイバー、コズミックの８人は全員の思いを受け継いで仮面ライダーシザースに立ち向かう！！！

第４２話地球解放軍編？「決戦～心の闇～」

大人達ライダーはミラーモンスターを出来る限り倒していた。だがいくら倒してもまるで砂漠の使徒のスナッキーの様にうじゃうじゃとわいてくるので消耗戦を強いられている。このままでは自分達の体力が尽きるのは時間の問題だ。

ガタック「コイツら一体何匹いるんだよ？」

ダークカブト「知るかっ！！！・・・・一面に鏡である以上何体でもわいてくるぞ」

ガタックの愚痴にダークカブトがそう言う。そして２人は同時に走りミラーモンスターを斬りつける。

カブト（大人）「《鏡がある以上は何体もわいてくる》・・・鏡・・・っ！！！」

ダークカブトの言葉に大人は何かを思いついたかのように鏡に向かってクナイガンを投げつけて鏡を割り始めた。総司はその彼をみて「成程」と称賛するとそのまま彼と同じようにクナイガンで鏡を壊し始める。

ガタック「おい大人っ！！なんで鏡を？」

カブト（大人）「奴らは鏡から出てくる・・・だったらその出入り口を壊ししまえばこれ以上は数は増えない。いいか皆、徹底的に鏡になる様なものは壊すんだ！！！」

ダークカブト「成程な。バカ正直に相手するよりは敵を増やさない策を考えればいいと言う事・・・か！！」

ガタックとダークカブトは大人の意図を理解するとクロックアップを使い壁や床にある鏡を壊し始めていく。ミラーモンスターは元々鏡の世界のモンスター。此方に入れる時間は限れると御子は言っていた事を思い出した大人の機転を利かせた作戦だ。

ハイパーカブト（総司）「全員後ろに下がれ」

電子音「Ａｌｌ　Ｚｅｃｔｏｒ　Ｃｏｍｂｉｎｅ！！」

いつの間にかハイパーフォームとなった総司がパーフェクトゼクターを起動させて全ゼクターを合体させた最強のパーフェクトモードのするとそのままハイパークロックアップで鏡とミラーモンスターを同時に爆散させる。辺りに残ったのは鏡の破片とミラーモンスターであった残骸であった。

カブト（大人）「これで片付いた・・・行こう!!!」

かなり後れを取ってしまった。だが今ならまだブロッサム達に追い付くかもしれないと大人達は先に進む。急いでいけばまだ間に合うと。

ルージュ「プリキュア・ファイヤーストライク!!!」

ローズ「ミルキィローズ・ブリザード!!!」

ルージュの炎とローズのバラの衝撃波がガイに向かって放たれる。だがガイは一枚カードを引き抜くと余裕そうに「バカだね」とつぶやく。

電子音「コンファインベント」

2人の必殺技はガイに当たる寸前で消滅してしまった。動揺する2人にガイは一気に距離を縮めるとそのままメタルホーンで2人を殴り飛ばすと2人は壁に叩きつけられて身体が減り込んでしまう。2人は咳をしながらも立ち上がりガイの対抗策を考える。

ルージュ「たしかガイはコンファインベントのカードを複数所持してるっていうデータがあったけ？・・・」

ローズ「ええ。だからコンファインベントがある限り私達の必殺技はガイに届かない・・・あのカードを何とかしないと私達に勝ち目はない」

ガイの持つ特殊カードのあらゆる能力を殺す力があるコンファインベントを封じない限りルージュとローズに勝機はない。通常の場合はミラーライダーの持つカードは1回の戦闘で1度しか使えないのが基本だが中には同じカードを複数持つライダーもいてガイはその1人に入る。あと何枚コンファインベントを持っているか分からな

いため迂闊に必殺技を出せば自分達のエネルギーを無駄にするだけだ。
ガイ「・・・君達の必殺技はボクには通用しない。この圧倒的不利な状況の中でも君達は敗北を認めないのかい？」
ローズ「当り前よ！！！・・・先に進んだブロッサムや私達を信じてくれてる大人さん達の為にもね！！！」
ガイ「何なんだ・・・・」
ルージュ・ローズ『！？』
ガイ「何なんだお前達は！？・・・・どうしてそこまで他者の為に戦える！？お前達の身体は既にボロボロだろうが！！！・・・他人を助ける事に何の意味があるんだ・・・所詮自分が肥え太る為しか動かないクズを助ける事がそんなに楽しいのか！？」
ガイの態度の豹変ぶりに思わる引いてしまうルージュとローズ。そんな2人を無視してガイは吠える様に口を開く。
ガイ「ボクは・・・ただ怖かっただけだ。他人と触れ合うのだ・・・裏切られる事が怖かっただけだ・・・なのに周りの奴らはそれを知らず《弄り》と称してボクを身体だけじゃなく心まで傷つけた。どんなに嫌がっても、止めてくれとどんなに頼んでも耳を傾けようとしなかった・・・ボクは迷わず担任の先生にその事をに相談した。だが奴らは《お前のつまらない事で俺の貴重な時間を割けるか？》なんて言いやがった・・・奴らからすれば詰まらない事かも知れないさ・・・だがな当人にとっては重大な事なんだよ・・・」
ルージュとローズは彼の言い分に言葉が出なかった。自分の知っている人には同じように先生をしてる。同じ先生なのにこんなにも対応が違うなんて考えられなかった。
ガイ「それからだよボクが誰も信じられなくなったのはね。その時ボクの心は死んだ・・・ボクの気持ちが君達に分かるのか？・・・君達のように生温い友情ごっこをしている君達にね！！！。そしてボクは太陽さんの計画に喜んで参加させてもらったよ・・・ボクの苦しみを奴らに分からせてくれる機会を貰った・・・これ程、光

栄な事はないよ！！！ボクは必ず復讐をするんだ・・・・ボクの心を殺した奴らにねぇ！！！！」

ライア「行けぇエビルダイバー！！！」
エルスに向かってエビルダイバーを差し向ける。エビルダイバーは巨体に似合わないスピードでエルスに体当たりを仕掛けてエルスの身体を傷つける。
エルス「はぁ、はぁ、はぁ」
息切れになりながらもエルスはなんとかライアに近付く突破口を見つけようとしていた。自分を信じてくれた仲間の為にそして憎しみに配された耕輔を助けにために。
ライア「おらぁっ！！休んでいる暇はねぇぞ」
ライアは怯むことなくエビルウィップをエルスのカラダに絡ませるとそのまま電撃をエルスの身体に叩き込んでやる
エルス「あぁぁあああああぁあああああああっ！！！！！！！！！！」
エビルダイバーの攻撃を避けている事で体力が消費されいるのにその上エビルウィップの雷撃攻撃を喰らうと衣装から煙が発せられて身体もボロボロになっていく
エルス「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ、はぁ・・・・・」
肩で大きく息をしながらも立ち上がるエルス。その姿を一度見たライアは攻撃をやめる。
ライア「キュアエルス・・・お前は・・・大切な人を守る為にプリキュアになったのだな？・・・」
エルス「！？・・・ええ、そうよ」
突然ライアはエルスに話しかけた来た。エルスは彼の態度の変化に驚いた顔になるが質問の答えを返す。
ライア「・・・俺も勇治を守ってやれなかった」
エルス「・・・！？」

ライア「勇治はな俺以上に人見知りが激しかった。俺も不器用で人と接するのが苦手でよ・・・それをネタに勇治と俺を苛めてきた連中のイジメは陰湿なものばかりだった。俺は親友の勇治だけは傷つけまいとした・・・だが俺に力がないばかりに勇治は・・・俺も戦う事が怖くなり一度アイツと死のうとしたよ。」

エルス「ライア・・・貴方・・・・」

ライアは拳を振わせながらも過去を語った。自分に力がないから勇治や自分は弱者とみなされえてイジメられていたと思っていた彼は力が欲しかった。過去の自分を消しされる様な強大な力が。だから太陽の誘いに乗りライアの力を手にした。そして今度こそ誰にも大切な友達を傷つけさせはしないと誓ったのだ。

ライア「それを太陽さんが止めてくれた・・・そしてあの人は言ったよ。《腐りきった世界を0に戻す》。俺にはあの人が神に見えた・・・俺達のような弱者を支えてくれる神・・・それが俺達のとっては太陽さんだった・・・そして俺はライアの力を手に入れた時から誓った。もう2度と勇治や俺を傷つけさせない・・・その為に勇治と俺の敵となるものを排除するとなぁっ!!!!」

ドリーム「はぁあああああっ!!!!!!」

王蛇「ふんっ!!!」

ドリームのクリスタルフルーレとベノザーベルがぶつかり合い火花を散らす。だが力では年の差があるのかドリームが押されている。クリスタルフルーレを弾き飛ばすようにして王蛇はドリームを切り刻んでいくとドリームは悲鳴を上げて膝をついてしまう。

王蛇「この程度か?・・うらぁあああああっ!!!!!!」

ドリーム「がぁあっ!??・・・」

膝をついたドリームの腹に回し蹴りを叩き込み怯んだ彼女をベノサーベルで斬りつけていく。身体はボロボロだ。しかし王蛇は情けをかけることなくドリームの身体を切り刻み殴り飛ばす。

ドリーム「がぁあああっ!?・・・きゃぁあああああっ!!!!!」

だがそれでもドリームはフラフラになりながらも立ち上がる。王蛇はそれでも攻撃の手を緩めるつもりなどは全くない。
王蛇「キュアドリーム・・・貴様の持つ希望の力など私の持つ心の闇が呑みこんでやる」
ドリーム「心の・・・闇？」
王蛇「私は・・・人を信じる事が出来ない・・・私にとって太陽さんに会う前の過去なんて朽ち果てた石ころほどの価値もない。私は幼いころから親の愛を受けることなく育てられた。父親は職につかず酒浸り、母親は家事や押さない私を無視して2人して毎日毎日ギャンブルばっかり。私はそんな両親が大嫌いだった・・・周りの同世代の子が羨ましかった・・・沢山の親の愛を受けてる・・・でも私の両親はっ・・・そう言う風に考えるととても辛かった」
ドリーム「それが貴女の抱える闇？」
王蛇「いいえ・・・それだけじゃない。私は1度は太陽さんに助けられやっと飢えていたものを手入れる事が出来たと思っていたのにそれすら力を持つ者に奪われた・・・こんな理不尽な事ある？私はやっと幸せを手にれられると思っていたのにそれすら簡単に奪われた・・・私の心の闇は人に対する凄まじい憎しみと怒り・・・この闇は全人類を滅ぼさない限り晴れる事は絶対にない・・・」

同じ闘技場ではピーチとジェニスが宿命の戦いをしている所だった。
ジェニスは元いた世界ではフェイト・テスタロッサのＤＮＡとキュアピーチの戦闘データを併せる事によって誕生した人造人間。つまりはキュアピーチとフェイトのクローンという事になる。故にピーチとの力は互角であり一歩も引かない戦いが続く。
ピーチ「やぁあああぁあああっ！！！！！」
ジェニス「でやぁあああああああっ！！！！！」
二人のパンチがぶつかり合い衝撃波を生みながらも一歩も引かない。
睨み合いを繰り広げながらも2人の宿命の戦いは続いていく。
ジェニス「貴様を倒さない限り私は私の闇を振り払う事は出来ない

んだ・・・お前がいる限り！！！」
ピーチ「ジェニス・・・」
ジェニスがなぜ世界を憎むようになったかはピーチ自身も分かっていた。だからこそ無意識に本気が出せないでいる事もある。だがそれでは彼女を助けることなどできはしない・・・ピーチは持てる力を駆使してジェニスに挑んでいくそれが彼女の中に巣食う闇を振り払えると信じて。
ジェニス「喰らえぇッ！！！！！」
ジェニスはピーチの懐に潜り込むとダークに授けられた闇の力を利用しピーチに闇の波動を叩き込んで闘技場の壁に叩きつけてやる。その後闇の光弾を無数連発してピーチを追い詰めていく。光弾がやむ頃には傷だらけのピーチの姿があった。ジェニスは彼女に近づきながら『この世界』の破壊計画を自分達の破壊の計画の礎とする事を口にする。
ジェニス「この世界だけではない・・・全パラレルワールドを滅ぼしネバーエンドインパクトを遂行する事で私の中に巣食う闇は終わるのだ。そしてお前との因縁にも決着がつく」

シザースはシザースピンチをブロッサムとマリンに向かって振う。ボルキャンサーが強化された事でその刃は鋭く鋭利なモノになっていてプリキュアと言えどもアレに刺されたらひとたまりもないだろう。ブロッサムとマリンはすかさずそれを避けるとサンシャインが後ろでゴールドフォルテバーストの発射体勢に入る。
シザース「ふぅん・・・小細工は俺には通用せんぞ！！！」
サンシャイン「！？・・・ぼ、ボルキャンサー！？」
シザースはすぐにサンシャインの元にボルキャンサーを呼び出してサンシャインを襲わせる。ボルキャンサーの口が彼女を喰らい尽くそうとした時にムーンライトがボルキャンサーにパンチを見舞わせる。サンシャインから離させる。
ボルキャンサー「・・・・」

ムーンライト「き、効いていない！！？？」
だがボルキャンサーにはダメージは皆無でありそのままムーンライトはボルキャンサーの太い腕に殴り飛ばされて壁に叩きつけられてしまう。
シプレ・コフレ・ポプリ『ムーンライト！！！』
妖精達の声が響く。ムーンライトは気絶はしていないようだがダメージは凄まじいようですぐには立てないでいた。
ナイト「貴様ぁ・・・よくもぉ！！！！」
ナイトは姉のムーンライトを傷つけたボルキャンサーに仇打ちだとイリュージョンソードで斬りつけるがボルキャンサーにソードの刃がぶつかった瞬間に高い金属音が響き渡った。
ナイト「い、イリィージョンソードが折れた！？」
なんとボルキャンサーの剛殻の強度にイリュージョンソードが耐えきれずに真っ二つに折れてしまったのだ。うろたえているナイトにボルキャンサーは体当たりを仕掛けるてそのままナイトを壁に叩きつけた。
ナイト「あぁ・・あぁあ・・・」
セイバー「ナイト！！！」
シザース「よそ見している場合か？」
セイバー「！？」
いつの間にかセイバーの懐にいたシザースはセイバーの身体をシザースピンチで数回切りつけたあと彼女をシザースピンチで掴みあげると凄まじい力で締め上げていく。セイバーの悲鳴が部屋中に響き渡るのだが下手をすればシザースはそのままセイバーを絞め殺してしまうかもしれない。動けないでいるブロッサム達にシザースは鼻で笑って勝ち誇った。
シザース「この程度か？お前達の力とやらわ・・・・期待外れだな？」
コズミック「貴様ぁ・・・・人質を取っておいてよくそんな事を！！！」

その間にもシザースはセイバーを絞め上げながらブロッサム達を嘲笑う。その態度にコズミックは憤怒するが下手な抵抗は出来なかった。シザースはそんな態度を察したのかセイバーを投げ捨てる。セイバーは咳をして苦しみに悶えてしまうがブロッサムに介抱される。

シザース「ならば貴様も痛みを味わうがいい」

シザースはクロックアップのような高速移動でコズミックの前に立つと二刀流の鋏を使いコズミックを切り裂き蹴り飛ばしてやる。そして追い打ちとばかりに腹を踏み潰す。コズミックの苦しむ声が木霊するのに耐えかねたサンシャインとフェアリーが飛び出した。

サンシャイン「止めなさいっ！！！！！」

フェアリー「コズミックから離れろ！！！！！」

コズミックを助けるべくサンシャインが後ろから飛び蹴りをフェアリーが前からレイピアで斬りつけを放つがそれにものともせずシザースはピンチでサンシャインの足を挟むとそのままサンシャインを床に叩きつけてもう一度掴んで投げ飛ばしたあと動きが止まっているフェアリーの装甲にシザーズピンチを突き刺して火花を散らせるとフェアリーの変身を強制解除させる。そしてそのまま夕をピンチで掴んでそのまま投げ飛ばす。

ブロッサム・マリン『はぁあああああぁあああっ！！！！！』

こうなれば連携だとシザースのどてっ腹に向かってブロッサムとマリンのダブルパンチが炸裂するがシザースは鼻で笑いそのまま2人にピンチを叩きつける。7人のプリキュアをもってしても生体エネルギーとラグナロクストーンで強化された力には敵わないのか？。

シザースは高笑いしながらブロッサム達を嘲笑う。

シザース「プリキュア、仮面ライダーフェアリー俺は必ず貴様らを倒し大いなるものを手に入れる。だがそれは父の復讐などという単純な枠で収まるものではない」

ブロッサム達一同『！？』

シザース「俺がこの世界を破壊する事に何故ここまで執着したか・・復讐をしながらもその答えを探していた・・そして答えを見出し

たのだ」
ブロッサム「こ、答え？」
シザース「そうだ。俺達の戦いは全て警察の汚職事件で幕を開けた。正義を司るはずの警察が犯罪を犯したために俺は犠牲となった。・・・最初は矢田に対する復讐さえ終われば俺にとって後はどうでもよかった・・・だがそれだけで終わらせてはならないと俺は気がついたのだ。今の世界を見てみろ。腐っているのは警察だけではない。実の子をゴミの様に捨てる親、人を弄りと称して自殺にまで追い込む餓鬼共、イジメに気が付いていながらもそれを放置する教員・・・全ての人間は時代と共に進化するべき筈がいつの間にか退化していたんだ。本来は全ての人間に幸せになる権利がある筈なのにな」
マリン「・・・・幸せになる権利」
シザース「プリキュア、フェアリーよ貴様らは人の笑顔や希望を守るために戦うと言っているが俺はそんな安っぽい偽善的考えとは違うのだ。俺は絶対的な正義こそが人を幸せにすると考える・・・不完全である人間をコントロールする・・・いわば神にも匹敵する帝王となる人間こそが今求められるのだよ。・・・・そしてそれは俺がお前達を倒し全世界を０に戻る事でその輝かしい未来が訪れる・・・・全世界破壊計画を成し遂げ俺が帝王となったその時こそな！！！」
シザースの言葉を聞いて倒れていたナイトやムーンライトは立ち上がる。シザースが持つ心の闇は父を失っただけが原因ではなかった。父を失い薄汚い大人が作りだした酷な現実を知った事で彼の理想と夢が壊されたために全世界に絶望して自分達が望む夢をかなえる為に全てをやり直すつもりなのだ。
そして解放軍の面々は離れているのにも関わらずシンクロしたかのように一斉に声を上げた。
シザース・王蛇・ガイ・ライア・ジェニス『だからこそ全てを破壊するのだ・・・・そして我々が楽園をつくる為に・・・・そして全

ての人間が幸せになる理想の世界を築くのだ！！！！』

プリキュア一同&夕『そんなの幸せなんかじゃない！！！！』

プリキュア達は一斉にそう叫んだ。

ルージュ「確かに貴方達の気持ちは・・・今まで受けてきた痛みや苦しみは私達には理解できないかもしれない・・・でも！！！」

ローズ「全ての人がアンタ達の言うように人を傷つけて自分の事ばかり考えるてしまう事なんてない・・この世界には優しい人間だって沢山いる！！！」

エルス「憎しみは新しい憎しみしか生まない。破壊から生まれる物なんて何もない・・・だからこそ！！！」

ドリーム「その憎しみを断ち切り世界に生きる全ての人に希望を捨てさせないために私達は戦っているの！！！！」

マリン「例え何度も挫折しようともどんな苦しみやコンプレックスがあっても諦めずに夢を追う事を捨てちゃダメなんだよ！！！」

サンシャイン「この世界に希望を抱いている人がいる限り私達は世界を守る・・・絶対に滅ぼさせたりはしないよ！！！！」

ムーンライト「そして希望を失った人間にもう1度光を与える為に・・・悲しみの連鎖から解放する為にプリキュア、仮面ライダー、ウルトラマンは存在する！！！」

夕「人間は過ちを正す力がある・・・今の法律があるのだって人が犯した過ちの歴史なんだ・・・それを否定する事は人そのものを否定すること・・・アタシ達は人間を否定するアンタ達から世界を守る！！！！」

ナイト「闇から光にだってなる事は出来る・・・・人は悲しみを乗り越えて強くなって自分達の夢へと続く未来へと進めるんだ・・・お前達のような憎しみに支配された奴らにその未来を絶対に壊させはしない！！！！」

セイバー「貴方達が従えるモンスターやこの破壊戦艦は貴方達自身の心の象徴・・・憎しみを重ねて全てを破壊してもそこにあるのは

新しい憎しみを求めて彷徨い続ける地獄しかないわ！！！！」
コズミック「仮に私達を倒す事が出来たとしてもお前達は永遠に自分の心の闇から抜け出す事は出来ない！！！！」
ブロッサム「人は誰だって変わる事が出来るんです・・・だから世界だって絶対に変われる。貴方達は変えようとせずにただ自分の憎しみを全世界にぶつけているだけなんです！！！それは貴方達の未来を奪った人たちと何も変わらない！！！」
ボロボロになりながらも全員は立ち上がり目の前に相手にプリキュアとライダーはそう堂々と言い放った
プリキュア全員&夕『だから私達は貴方達の復讐を絶対に止める！！！！！！！』

王蛇「綺麗事ばかり言う奴らなどに邪魔はさせない！！！」
ガイ「何が・・・人の思いだ！！！！」
ライア「憎しみと怒りが俺達にパワーを与えてきた！！！・・・・・」
ジェニス「全てを支配する力をな！！！」
シザース「お前達に見せてやる・・・俺達の第2の兵器を」
それに対抗するようにシザース達は1枚カードデッキを引き抜いた。絵柄は翼の様なものが描かれている。そしてそれを引きくと当時に辺りには異様な衝撃が発せられると王蛇はメリケンサック、ガイはランス、ライアは弓、そしてシザースは2つの刃がついた剣にバイザーが変形していく。そして変形したバイザーにそのカードを装填すると・・・
電子音『サバイブ』
電子音と共にミラーライダー達の姿は光に包まれる。そこに現れたのは・・・・・・・。

第４２話地球解放軍編？「決戦～心の闇～」（後書き）

次回は強化されたシザース達との決戦と第３の切り札が・・・・

ではでは次回もお楽しみに♪

第４３話地球解放軍編ＸＩＩＩ「決戦～憎しみを撃て」（前書き）

前回までのあらすじ～
圧倒的な力を見せつけるシザース達の前にピンチに立たされるプリキュアやフェアリー。しかし彼女達は立ち上がり太陽達の憎しみと怒りを束にした力を否定する。太陽達は更なる力を見せようと第２の力のサバイブを発動させる。

第４３話地球解放軍編ＸＩＩＩ「決戦～憎しみを撃て」

光がやむと４人の姿の進化した鎧が露わになる４人とも全体的なシルエットが鋭くなっただけではなく装甲は強化されてカードデッキは、金、銀、マゼンタ、ネイビーへと変化したのだ。
ガイ・サバイブ「コレがボク達の最強の力の１つさ。この力で君達を粉砕する」
槍の様に鋭利となりドリルの機能まで備えたメタルバイザーツバイを構える。
ルージュ「・・・やれるものならやってみなさいよ」
ローズ「力に溺れたアンタのその心・・・必ず私たちが救ってみせる！！！」
まさかミラーライダーのパワーアップカードであるサバイブのカードを隠し持ったいたなどよようが出来るはずもない。ただでさえ不利なこの状況・・・ルージュとローズに勝ち目はあるのか？
ガイ「口ばかりなら何とでも言えるさ・・・だが現実は君達の敗北だ！！！！」
ガイは足に力を溜めて力強く地面をけると一気にルージュとローズとの距離を縮める。ローズとルージュも応戦するようにパンチとキックをガイの装甲に放つ。
ルージュ「き、効かない！？」
ローズ「そ、そんなっ！！！」
２人の渾身の一撃もガイの硬い装甲には届かない。動きが止まっている２人にガイはバイザーを振い彼女達に叩きつける。
ルージュ「がはぁあっ！！？」
ローズ「ぐぅうっ！？？」
２人はまたしても部屋の壁に身体を叩きつけられてしまう。土ぼこりが視界を奪う中ガイはゆっくりと近づき始める。
ガイ「君達は言ったな？この世界の人間は優しい人間は沢山いる・・

・と。それが本当だとしたらボクはこんな事はしなかった・・・・
もう何もかもが遅いんだ。ボク達はこの道から後戻りはできない」
ガイは自分の過去にもしも彼女達の言うような心優しき人間がいたとしたら自分と耕輔はこんな復讐気の道を歩んだりはしなかったかもしれない・・・・。だが今それを考えてももう後の祭り・・・自分達が歩んできたを今更になって後戻りなど出来ない事は分かっている。だからこそ全てを0にすることしか自分達が生き残る道はない・・・・。ガイである勇治は自分にそう言い聞かせながら首を振って足を進める。
ガイ「もう終わりだよ・・・キュアルージュ、そしてミルキィローズ」
ガイは2人が倒れているであろう場所で足を止めるとメタルバイザーを突き付けるように向けてそう言うが・・・反応がない。
ガイ・サバイブ「・・・!?」
ガイはまさかと思い急いでバイザーを思いっきり突き刺したのだがそこにはいるはずである2人はいなかった。そしてその瞬間に後ろから気配を感じた。
ルージュ「プリキュア・ファイヤーストライク!!!!!」
ルージュの炎の玉がガイに向かって放たれるとバイザーが地面に突き刺さった状態で身動きを封じられてしまっているガイに避ける手段はなくそのまま直撃する。流石のガイもノーダメージとはいかなかったがこの程度ではダメージは浅いほうであった。
ガイ・サバイブ「いつの間にボクの後ろに・・・・!?・・・・ローズがいない?」
土煙で視界を悪くした事が隙を生んでしまう結果となりまんまと攻め込まれてしまった。そしてガイはローズがいない事に気が付く。
ローズ「ミルキィローズ・ブリザード!!!!!」
ガイ・サバイブ「くっ!!」
電子音「ガードベント」
もう1人の敵であるローズはルージュとは別の方向からブリザード

を叩き込んでいく。咄嗟の事にガイは判断が遅れてしまい急いでガードベントを発動させて鉄壁の盾「メタルガードナー」を左手に装備してブリザードをガードする。
ガイ・サバイブ「・・・一体どこにこんな力が!?」
ルージュ「言った筈よ・・・私達は貴方達を止めるってね」
ローズ「そのための力ならいくらだって湧いてくるのよ!!!」
ガイ「ちっ!!!!」
電子音「ストライクベント」
まさかの反撃に徐々に押され始める。だがこの程で自分は押されてなるものかとガイは盾を捨て更にもう1つの武器であるストライクベントの「メタルクロー」を装備していくとそのままローズ達めがけてバイザーと共に攻めるがルージュのファイヤーフルーレとローズのミルキィミラーが受けとめてる。
ガイ・サバイブ「何故だ!?この絶望的な状況でも君達は諦めない。この世界は君達には関係のない世界の筈だぞ・・・それでも何故全力で戦える!?」
ルージュ「・・・その答えは単純よ。人を守りたいから」
ガイ「何?」
ローズ「苦しんでいる人を放置できないから・・・それがアタシ達がプリキュアをする理由でもあるのよ!!!」
ルージュ「だから闇の取られている貴方達を助け出すわ・・・もう1度前に進める様に!!!!」
ガイ「前に進む・・・・」
≪ボクは前に進めているのか?・・・いつも逃げているばかりで戦う事をしなかった・・・でもそれはボクに力がなかったからだったんじゃないのか?・・・・いや違う本当は・・・・≫
ガイは2人を一度跳ね飛ばすようにバイザーを振いながら迷いを断ち切るように腕を振った。彼女達の言葉を聞くと過去の自分を消せずに入れらない・・・どうしてなんだろう?ガイはその答えが知りたいと思う世になっていた・・・本来の目的を忘れてしまうまでに

なりながら。

渡り廊下ではマゼンタのエイの戦士とキュアエルスがまじまじと睨み合いながら2人とも更に高まる緊張感の中譲れない信念とプライドをぶつけ合う激戦が再開されようとしていた。

ライア「この姿を見てもまだ今みたいなセリフが吐けるか？」

エルス「・・・ええ。例え貴方の力がどれほど強くなろうとも私は貴方の憎しみに支配された心を闇から救い出す！！！」

ライア・サバイブ「ならばこの姿となった俺にお前がどこまでついて来れるか・・・今この場で試してやる！！！」

ライアは先ずカードを一枚引き抜くとそれをエルスに見せつけると自信にあふれたセリフを言ってそのままカードを装填する。

電子音「シュートベント」

ライアは弓矢となったバイザーエビルバイザーツバイを使いシュートベントのエビルキャノンを放っていく。紙一重で当たる前にエルスは飛び上がって光弾を避ける。ライアはそのままエビルキャノンを連発していって遠距離戦法をとっていく。近づけさせなければエルスの得意なライトニングスラッシュやライトニングスラッシューを発動させる事は出来ない。そしてこのままジワリジワリとエルスの体力を削っていき勝利を得るつもりなのだ。

ライア・サバイブ「ほらほらぁ～どうしてキュアエルス？・・・憎しみの力に打ち勝つんじゃなかったのか？」

ライアは勝ち誇った口調でエルスを見下しながら光弾の嵐を浴びせる。やはり口ほどにもないとライアは自分の勝利に揺るぎはないと確信するが・・。

エルス「・・・っ・・・はぁっ！！！・・・えりゃぁああっ！！！」

ライアの光弾の嵐を必死によけならがもライアの隙を伺うエルス。無数に来る光弾を避け時にはライトニングロッドの光弾で相殺させる。時には空を飛び光線が当たるギリギリの所を避ける。

ライア・サバイブ「ちっ！！！・・・ちょこまかと動きまわりやが

って」
ライアは当たらない事にだんだんと焦り始めていく。実はエルスを追いつめているようでライアはエルスの術中にはまり始めていくのだ。
ライア・サバイブ「（何故だ・・・狙った場所を避けられる）素早い奴がっ・・・・逃げてばかりで俺が倒せるとでも思っているのか！？」
徐々に距離を縮められてしまう事にも気がつかないままライアはエルスに狙いを定めるが紙一重で避けられてしまうと苛立ちが徐々にライアの戦い方を削いでいく。
エルス「当然思ってないわよ？」
そしてエルスはライアの懐に潜り込むように距離を縮めていきそしてとうとうライアと顔が向う合うほどにまで距離を縮められてしまう。
ライア・サバイブ「くっ！！！！」
エルス「遅い！！！」
エルスは近距離のエビルキャノンが自分に発射される前にライトニングロッドを剣に変えてライアを切り裂く。だがこの程度の攻撃ではライアの強化された装甲には軽い傷にしかならなかった。
ライア・サバイブ「ぐっ・・・・流石にやるな？・・・・だがまだまだここからだ！！！」
電子音「ソードベント」
ライアは弓を畳みカードをバイザーに装填させるとエビルウィップが進化したエビルウィップブレードを装備させる。
エルス「いくわよ・・・ライア！！！！」
ライア・サバイブ「来い、キュアエルス！！！」
ムチにもなり蛇刀のようなそれを構えながらエルスのライトニングロッドとぶつかり合い火花を散らしながらぶつかり合うとガチガチと刃がぶつかり合う金属音を辺りに響かせる。力ではライアはサバイブのカードで強化された自分の力と互角の事に驚愕するがライア

も自分の持っているプライドと魂をかけてキュアエルス挑んでいくがエルスは強化された筈のライアと互角かそれ以上の力で対抗してくるのだ。

ライア・サバイブ「俺はあの時決めたんだ・・・この力で必ず勇治や俺自身を守ると。傷つけてくる奴らから守るためにこの力を使うとな!!そしてその最終的な答えは全世界の破壊となったんだよ」

エルス「ライア・・・それは《守る》っていう事なんかじゃない」

ライア・サバイブ「何だと!?」

エルスはライアを哀れむような目で強い口調でそう言った。そして続けて彼に語りかけるように自分の意見を話す。

エルス「貴方がしてるのはイジメられた子への《復讐》でしかないんだよ?貴方は貴方や勇治君をイジメた子と同じ子をしてるの・・・・憎しみは新しい憎しみしか生み出さないんだから!!!!」

ライア・サバイブ「・・・・・っ!!・・・・綺麗事ばかり言いやがって。世の中はなお前が考えている以上に残酷で惨いんだ・・・理想ばかり言っても無駄なんだよ!!!!」

《俺のしてる事は守っている事じゃない・・・そんなはずはない!!!!。あの時だって力があれば俺達はイジメられることなんてなかったはずだ・・・俺は・・・俺はっ!!!!》

ライアはエルスを完全に叩き潰してやると吠える様に叫びながらエルスに猛攻を仕掛ける様になった。その彼の姿はエルスの言葉に迷いが生まれた自分を消し去るかのようにも見えたのだった・・・・。

闘技場での王蛇とドリームの戦いも激しさを増し始めていた。王蛇はメリケンサックとなったバイザーともう1つストライクベントのベノナックルを装備していくとドリームに殴りかかっていくがドリームはそれを避けると地面に辺り殴られた地面には穴が出来ている。

王蛇・サバイブ「コレが私の憎しみの力よ・・・・希望の力を粉砕

するね！！」
ドリーム「くっ！！！。・・・はぁあっ！！！！」
ドリームは王蛇の攻撃を避けながらも反撃をしようとパンチを放つのだが王蛇のベノナックルが盾のごとくドリームのパンチをガードするとドリームのボディにパンチが見舞われる。
ドリーム「あぁあああっ！！！！！」
お腹にめり込む王蛇の拳・・・ドリームは物凄勢いで飛ばされていくとそのまま闘技場の壁に叩きつけらてしまう。
ドリーム「ゴホゴホっ！！！！・・・はぁ、はぁ。はぁ」
王蛇・サバイブ「ほらほらぁっ！！！！この程度で根を上げる気！？」
王蛇はまだまだこの程度で終わると思うなよという様に立ち上がったドリームにに向かって走るとナックルを突き出す。ドリームは同じくパンチを返して応戦して辺りには岩をも持ちあげる衝撃が走る。
王蛇・サバイブ「ちっ！！！まだそんな力が残っているなんて・・・・」
まさか先程のダメージを受けても自分に抗える力が残っているとは思わない王蛇は驚く隙をついてドリームが王蛇の装甲に渾身のパンチを叩き込んでいくと今までとは逆に王蛇が今度は飛ばされてしまう王蛇はなんとかバランスを保ちながら着する。
ドリーム「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ・・・・」
肩で荒い息をするようになってきたドリームに王蛇はベノナックルを振り上げながらそう言うのだが追いつめられている筈のドリームの顔はその力に恐怖するどころか逆に彼女の闘志が燃えたぎるように王蛇を睨みつけていた
王蛇・サバイブ「へぇ～この追いつめられている状況でまだそんな顔が出来るの？」
ドリーム「王蛇、貴女はこの世界を晴らさないと永遠に消えることな言って言ったよね？」
王蛇「それがどうしたのよ・・・何度同じ事を言わせる気？」

ドリームは今までにない口調で唐突にそう王蛇に問いてきた。王蛇はその問いにウザったそうな態度でそう答えるとドリームは更に王蛇の中にある過去のトラウマを思い出させるようにそう聞いた。
ドリーム「その姿でこの世界にいる子供たちにも貴女と同じ目に合わせると言うの?」
王蛇・サバイブ「・・・それは・・・」
ドリーム「憎しみや怒りを束にして破壊するじゃけじゃ悲しみが増えるだけなんだよ?・・・貴女が受けて悲しみを他の人にも味合わせちゃうのよ!?本当にそれでいいの!!!???」
ドリームは悲しみが混じった声でそう訴えかけると王蛇の中にあった僅かな迷いが王蛇の心を揺さぶりをかけていくだが彼女は迷いを振り切るように首を横に振りながらドリームの方を向いていく。
王蛇・サバイブ「言った筈よ?これはリセットだとね・・・全てを0に戻る事で何もかも最初からやり直すだけよ!!!!!」
《これはただの破壊なんかじゃない!!!!私達が背負った悲しみを作らない世界を創造する為の正当なる行為なんだ・・・絶対にただの野蛮な殺戮なんかじゃない!!!!!》
必死にそう言い聞かせる夏実。それでも迷いは吹っ切れない・・・どうして?。なぜ彼女(ドリーム)は自分を悲しむめで見つめてくる?
王蛇・サバイブ「見るなぁ・・・そんな目で私を見るなぁあああああっ!!!!!!!!!!」
ドリームの目が王蛇に更なる迷いを生ませるようになってきているのがバイザーとナックルをガチガチを震わせるまでに王蛇の身体は震えだしてきていることで分かる。王蛇はドリームの悲しげな視線に対して怒鳴る様にそう言うとナックルを振りつけていく。

その頃近くでは因縁の戦いが繰り広げられていた
ジェニス「まだそんな事を言うつもりか?・・・話したはずだぞ私がこの世界を憎む理由を」
ジェニスが世界をうらむようになった理由。それはただ単純に人造

人間である事だけではなかった。ジェニスはかつてとある世界のとある夫婦によって失った娘の代わりとして生み出された事でこの世に生受けた。最初は彼女の両親も彼女の事を可愛がっていたのだが・・・・

ピーチ「貴女を生み出した親のエゴで貴女がどんなに傷ついたか私が知る事は出来ない・・・でもだからって全世界を憎んだって貴女の闇は晴れないよ!!!!。前にも言ったかもしれないけど貴女は貴女じゃない・・・他の誰でもないただ1人の存在じゃない!!!」

その後彼女は完全に自分の娘になりきれなかったジェニスに虐待を始めた挙句には自分達が二度と死なないようにとプリキュアデータを使って強化したにもかかわらず彼女を生物兵器と罵り彼女を傷つけ最後にはゴミのように彼女を捨てたのだ。その後の彼女は当てもなく彷徨っていたが人造人間というだけで怪物と称された揚句ある施設に隔離された。

ジェニス「黙れぇ・・・・所詮はお前みたいなやつに私や白夜達の闇が理解できるわけがない!!」

前に言われたその言葉。生まれて初めて自分を他の誰でもない1人の人間として認めてくれたのはピーチが初めだった事を思い出すジェニス・・・・。だが世界にすら捨てられてした自分を助けてくれたデスリードの為にも自分は成し遂げなければならない事があるのだからこそ憎しみを捨てることなど出来るわけがないのだ。自分の闇と自分の仲間の闇を晴らすためにも負けられない・・・・。

ガイ・サバイブ「はぁあああああっ!!!!!!!!!」

メタルバイザーツバイとメタルクローで攻めこんでいってもルージュとローズは諦めるどころか更に反撃の力を増していく・・・・。

ガイ・サバイブ「ちっ!!!!!」

ガイは理解が出来ないながらも絶対に負けるものかクローを盾にして攻撃を受けとめるが・・・。

ルージュ・ローズ『はぁあああぁあああああっ!!!!!!!!』

2人のフルーレとミラーがガイのメタルクローに罅をいれていくと・・・。
ガイ・サバイブ「な、何っ!?」
そのままバリーンとガラスが割れる様にクローが砕け散った。そしてガイが怯んだその隙を2人は見逃さずにボディにダブルキックを放っていきガイに肉体的にではなく精神的にダメージを与えてやる。
ガイ「ば、バカな・・・こんな事あり得ない」
ガイはフラフラになりながらも立ち上がる。こんな事を認められるわけがないとガイは言い放つがルージュとローズはガイの疑問に答える様に口を開く。
ルージュ「確かに・・・サバイブで強化された貴方は強い。でも憎しみなんかで強くなった力は脆い・・・だから貴方は私達には勝てない!!!」
ガイ「この力が脆いだと!?」
ローズ「ええ。本当の力は憎しみからは生まれてこない。強いだけが力なんかじゃないのよ!!!」
ガイは2人の言い分を行くと静かになり俯くように下に顔を下げる。その後ガイは迷わず顔を上げると同時にカードを引き抜いた。
ガイ・サバイブ「ならば思い知るがいい・・・君達の言う力など幻に過ぎない事を!!!!」
電子音「アドベント」
ガイはアドベントのカードを装填するとメタルゲラスから進化したメタルエンパイアとなった契約モンスターを呼び寄せる。その姿は二足歩行のサイの怪人の姿ではなく4足歩行となり巨大化して重厚感あふれるものであった。赤い目を光らせながら主人の隣まで走るのを確認したガイはもう一枚カードを引き抜いくと自分のカードデッキの紋章に翼のシンボルが描かれたそれをルージュとローズに見せる。
ガイ・サバイブ「この一撃で君達との戦いと決着をつける・・・行くぞっ!!!!」

電子音「ファイナルベント」
メタルガードナーの咆哮を合図にガイは飛び上がるとメタルエンパイアの後ろに飛び乗った。それを見たルージュ達2人も必殺技の準備を始める。
ルージュ「ローズ・・・私達の全力を彼にぶつけよう。彼の闇を消し去る為に!!!」
ローズ「ええ。行くわよ!!!」
ルージュは今出せる精一杯の炎をそしてローズはミルキィミラーにエネルギーを溜めるに構える。その間にガイが乗ったメタルエンパイアは変形して大型バイクに変形する。姿はライドシューターに酷似しているは先端はサイのツノを現わす様な鋭利なドリルが装備されている。
ルージュ「プリキュア・ファイヤーストライク!!!!」
ローズ「邪悪な力を包み込む煌くバラを咲かせましょう!!!。ミルキィローズ・メタルブリザード!!!」
ルージュのファイヤーストライクとローズのメタルブリザードが合体してガイに降り注ぐように向ってくるがガイもファイナルベントのヘビーメタルクラッシャーを発動させてぶつかり合うと力と力の押し合いが展開される。
ガイ・サバイブ「うぉおおぉおおおおおおおおおおっ!!!!!!!!!!!!!!」
ルージュ・ローズ『はぁあああああああああああああっ!!!!!!!!!!!!!』
炎と輝くバラが融合した2人の力はガイを包み込むように押しこんでいくがガイはエンパイアーのドリルを突き刺して風穴を開けさせて消滅させようと企てるがドリルで穴が開いたと思えば光が穴を封じて逆にメタルエンパイアごとガイを呑みこむように包み始めていくのだ。
ガイ・サバイブ「な、何っ!?」
メタルガードナーを包み始めた光はガイの身体も優しく包み込んで

いくとそれから数秒後にガイとメタルガードナーは全身を呑みこまれていった。
ガイ・サバイブ「うわぁあああああああぁあああああああああっ！！！！！！！！！」
生まれて初めて身体が光につつみこまれた勇治は不思議と心が落ちついていくのを感じた。この光は自分を傷つけるどころか自分の過去の傷を癒すように優しく身体を包み込んでいく。生まれて初めてかもしれない憎しみが優しく浄化される様なこの感覚にガイの仮面の下で勇治は涙を流した。
ガイ「っ！！？？？・・・ボクは負けたのか！？」
気が付くとガイの変身を解かれたその場で勇治は膝をついた。アレだけ戦った激しく戦った筈なのに身体を見れば自分には傷1つなかった。そして先程まであった憎しみも今の彼の心にすっかりと消え去っていたのだった。
ルージュ「立てる？」
勇治「・・・ああ」
今だに信じられない勇治の元にルージュが手を伸ばして彼を立たせた。自分とは違いルージュとローズの身体はボロボロで傷が痛々しく残っていた。どうして此処までして戦えるのか・・・その答えがやっと見えた気がした勇治は笑顔を見せると吹っ切れたように声を出した。
勇治「こんな気持ちは初めてだよ。1度は死のうとまで考えたのに・・・君達の言うとおりもう1度やり直せるかもしれない」
ローズ「そう思えるようになっただけでもアンタは1歩前に歩き出した・・・アンタの未来に向かってね」
勇治「全く君達の言葉は一々腹が立つ・・・と言いたいけど正論だな。もう1度足掻いてみるよ・・・ボクの未来を自分で切り開くために」
ルージュ「よかった♪これで貴方は大丈夫ね。じゃあ私達はシザースを止めに行くから貴方は此処にいて」

勇治「待ってくれ！！！！」
ローズ「え？」
勇治はひねくれた様にそう言うとルージュはグーサインを出しローズは笑顔を見せると早く先に進まない思い勇治に此処で待っているように言うと走り出すが勇治は1度引きとめる。
勇治「ボクが言えることではない事は分かってる。でもお願いだシザースを・・・太陽さんを助けてやってくれ！！！！」
ルージュ「分かってるよ。必ず助ける」
ローズ「だから貴方は此処で待っててて」
ルージュとローズはそれだけ言うと部屋の出口に向かって走りして部屋を出ると残された勇治はカードデッキを確認するとカードがない事に気づく。
勇治「メタルゲラスのカードが・・・契約のカードがない！？」

エルスに自分の守りを否定されたライアは怒りに任せて攻撃するようになったのだがそんな攻撃が彼女に通用するほど甘くはなかった。
ライアの攻撃は巧みに避けれるよエルスのテクニカルか戦術に追いつめられるようになってしまう
エルス「はぁあああっ！！！！！」
ライア・サバイブ「ちっ！！！！・・・・ぐっ！！？」
エルスの剣がライアの強化された装甲を傷つけていくのだがやはり簡単にはあの鎧を傷つけることなど出来るわけがなかった。
ライア・サバイブ「お前は俺のしている事が守っている事ではないと言った・・・・ならば力のない弱者が強者と対等に戦うにはどうすればいいと言うのだ！？ただ強者の言う事に従えと言うのか？」
ライアは自分の考える守りを否定されて明らかに動揺していた。自分は力こそが全てを守る己の武器であるはずだと考える故にエルスの言葉が理解できずにいるのだ。
エルス「そうじゃない！！！」
ライアサバイブ「じゃあなんだ？どうしろというのだ！！！！」

エルス「憎しみを募らせた力を使っても誰も守れはしないのよ・・・負の力を使っても負の連鎖が生まれるだけでしかないの・・・」
エルスは一度ライトニングロッドをしまうとキリっとした目でライアを見た。
エルス「貴方に見せてあげる・・・本当の守りの力を!!!」
エルスもかつては大切な両親を殺された。だからこそシザース達の気持ちは近い出来ているつもりだった。だがそれだけではなかった。憎しみの力を使って自分や自分の大切な人を守れたとしてもそこからは負の連鎖しか生まれない事に代わりなどないのだ。だからこそライアのしている事は守りという行為ではない。エルスは右手から光を発するとブローチ型のアイテムの「ライジングブローチェ」を召喚する。
ライア・サバイブ「本当の守りの力?」
エルス「ええ。そして今から私の光で貴方を悲しみから救ってみせる!!!」
エルスはそのままライジングブローチェを胸のリボンに装着すると光に包まれるとコスチュームが変化していく。ライトグリーンに変化していき袖やアームカバー、フリルも一新して天使を思わせるような姿になり背中に薄緑の天使の羽が生えスカートの丈が長くなっていた
???「悲しみを照らす救済の光・・・ライジングエルス!!!」
ライア・サバイブ「ライジングエルスだと!?」
自分と同じように隠し玉を持っていた事にライアは驚くがすぐ剣を振い笑い声を上げた。
ライア・サバイブ「何だよ・・・お前も力に頼ってるんじゃないか・・・なにが守りの力だよ?力って言うのはな敵を粉砕する為にあるんだよ!!!!!破壊こそ力の意味なのだぁあっ!!!!」
ライアは先手必勝とエビルウィップブレードでライジングエルスに斬りかかるのだがエルスは足を振り上げてライアのブレードを受け止めた。

ライア・サバイブ「なっ！？・・・・ぐぅううっ！？？・・・な、なんてバカ力だ・・・ぐっ！！！」
ライジングエルス「ふっ！！！はぁあああああぁああああっ！！！！！！！」
ライア・サバイブ「ぐうぉおおおぉあああああああっ！！！！！！！」
足で防御された上にそのまま剣を足ではじけれるように蹴られるとライアの鎧にライジングエルスのキックが放たれる。ライアはそのまま物凄い気多いで飛ばされると船内の壁に叩きつけられてしまった。
ライア・サバイブ「・・・ば、バカな・・・さっきまでのキュアエルスとは違う？何が此処までの差を生んでいると言うんだ！？」
ライアは信じられなかったがまだ自分には最後の切り札がある。こうなれば最後の切り札を使う以外は手はないだろうとライアはカードを引き抜いた。
ライア・サバイブ「・・・こうなれば全てを俺の全ての力をお前にぶつけてやる！！その力をお前は超えれるか？」
ライジングエルス「超えれるわ。貴方を悲しみをから救う為にもね」
ライア・サバイブ「だったら・・・それを俺に見せみろ！！！！」
電子音「ファイナルベント」
ライアは自分のカードデッキの紋章が描かれたカードであるファイナルベントのカードをバイザーに装填していく。それに合わせるようにエビルダイバーは進化してエキソダイバーへとパワーアップした姿を見せるとライアはその上に乗る。何倍にも大きくなったエキソダイバーの上に乗っかる様にしがみ付くとエキソダイバーは変形していきバイクの姿となった。そしてそのまま電撃を纏いながらエルスに突っ込んでいく。必殺技名はジャノサイド・ビックバン
ライジングエルス「ライトニングザンバー！！！」
ライジングエルスはライトニングザンバーというライトニングロッドが強化された武器を取り出すとそれに光と闇のエネルギーを集め

ていく。ライアのファイナルベントに撃つ勝つにはこの技しかないと思い全力でエネルギーをライトニング・ザンバーに溜めていくと。
ライジングエルス「プリキュア・ライトニングソニック！！！」
巨大な長剣をライアに向って叩き込んでいき双方のエネルギーはぶつかり合い光が辺りを包んでいく
ライア・サバイブ「でやぁあああああぁあああああああああっ！！！！！！！！！！！」
ライジングエルス「うぉおおおおおおおおおおおおおおおっ！！！！！！！！！！！！！」
ライアの雷撃とライジングエルスの雷光がぶつかり合い反発し合うかのように光を放っていく。だが徐々にライアの力が押され始める様に後退し始める。
ライア・サバイブ「っ！？・・・ば、バカなぁ・・・何故だぁあ！？」
ライジングエルス「コレが本当の力・・・破壊する力じゃなく守る力なのよ！！！！！」
一際ライトニングザンバーの光が強くなるとライアとエキソダイバーを一刀両断するように振った。これが憎しみのない力の強さ。他者を踏み潰すのではなく他者を救おうとする力。この力を持つのがプリキュアなのか・・・だとしたら俺は初めから勝てるわけがなかったんだ。ライアの仮面の下で耕輔は悟った様に目を閉じる。
ライア「っ！！・・・・痛くない？」
ライジングエルス「破壊だけじゃない負の連鎖を断ち切るのが私の力なの・・・貴方の心の闇を切り裂いて消滅させた・・・だからもう貴方は憎しみに打ち勝った」
剣で斬られた筈のカラダには痛みは感じなかった。寧ろ心の中の重荷が解けた様な解放感と爽快感があった。そして気が付くとライアの変身は解けてエビルダイバーも消滅した。
耕輔「見せてもらったぞライジングエルス。お前の強さを・・・俺の完敗だ」

耕輔は潔く負けを認めるとその場に座り込んだ。ライジングエルスは一度エルスの姿に戻り彼の顔を覗き込んだ。
耕輔「キュアエルス・・・お前のその力なら太陽さんを止められるかもしれない」
エルスは笑顔を見せると首を縦に振り頷いた。そしてそのまま耕輔を気遣いたたせようとしたが彼はその前に自分で立ち上がった。
耕輔「俺は大丈夫だから先に行け。そして改めて頼みがある。お前達の力で太陽さんも助けてやってくれ!!!」
エルス「勿論!!!」
エルスは耕輔の頼みにただ一言そう言うと彼をその場に残して先に進んでいった。残された耕輔はふと自分のカードデッキを見てみるとライアの紋章であるエイのマークが消えている事に気がついた。
ライア「っ!!!・・・まさか。やっぱり契約のカードがない!!!」

王蛇・サバイブ「はぁああっ!!!!」
ナックルとバイザーでドリームを追い詰めようと攻める。パワーでは強化された王蛇は絶大的な力を秘めている為に未だに防戦一方ではあるのだがドリームはそれでも諦めようとはしなかった。
ドリーム・王蛇・サバイブ『はぁ、はぁ、はぁ、はぁ、はぁ・・・・・』
肩で大きく息を切らす両者。一見すれば王蛇が圧倒的な力の差を見せつけて追いつめているようにも見えるのだが何度ナックルで身体を殴りつけられようとも何度キックを入れられようともドリームは立ち上がり王蛇に向かってくる。
王蛇・サバイブ「な、何でよ・・・どうしてボロボロになりながらも向って来れるのよ?こんな世界の為になんでそんなに我武者羅に頑張れるのよ?」
王蛇は信じられないとそして焦りが混ざった声で王蛇はそう聞く。
ドリームは顔を上げながら王蛇の問いに答える。

ドリーム「言ったじゃない。私達は希望を捨てさせない為に戦っているって貴女達がもう一度希望を取り戻すために私はどんなに強い力を見せられても諦めない！！！」
王蛇・サバイブ「希望・・・そんなものもう私達にはないのよ・・・この世界を破壊して新しい世界を創造する以外はね！！！！！」
ドリーム「そんなことないよ！！！貴女は1度大切なものを手に入れたんじゃない・・・もう1度頑張ればまた大切なものを手に入れることだってできるんだよ！！！！」
王蛇・サバイブ「だ、黙れ・・・お前に私の何が分かるのよ！？・・・何もかも失った私の気持ちなんか！！！」
ドリーム「未来の可能性は無限にある・・・その事を私が証明する！！！！」
ドリームは王蛇に向かって走っていきピンク色の光に包まれていき彼女のカラダに光が集約していく。王蛇もナックルを消滅させるとカードを1枚デッキきら引き抜く。そのカードは自分の切り札のあのカードだ
王蛇・サバイブ「何が・・・可能性だ・・・そんな戯言なんか私は絶対に信じない！！！！！」
電子音「ファイナルベント」
そしてカードをベントインするとベノスネーカが進化したベノヴァイパーが出現し彼女の周りに咆哮えを上げながらドリームに向かって強硫酸の毒液を撒き散らしながらバイクに変形する。
ドリーム「プリキュア・シューティングスター！！！！！」
それと当時にドリームは集めた光を一気に解放すると全パワーを出し切った渾身のシューティングスターを発動させる
王蛇サバイブ「消えされ、キュアドリーム！！！！！！」
対する王蛇もオリジナルの世界の龍騎サバイブと同等の破壊力のポイズントルネードクラッシュを発動させて硫酸を纏いながら猛スピードでドリームに突進していく
王蛇・サバイブ「うぉおおおぉおおおおおおっ！！！！！！

！」

ドリーム「はぁあああああああああああああああああっ！！！！！」

ドリームの光と王蛇の毒牙がぶつかり合いどちらも相手を呑みこんでやろうと勢いを増していく。王蛇の毒がドリームの光を溶かすように蝕んでいこうと力を出し尽くすが。

ドリーム「もう1度、希望を取り戻して！！！貴女なら絶対に幸せになれるはずだからっ！！！！」

王蛇・サバイブ「・・・っ！？・・・何？この光は・・・」

光が一層強くなると王蛇の身体をドリームが貫いていき包んでいった。この光を私は知っている・・・・あの時捨てられた私を助けてくれたあの人がくれた優しさに似ている？・・・・何年振りだろうこんなに優しい気持ちになれたのは・・・・王蛇の仮面の下で夏実は覚えがあるこの気持ちになりながら心が癒される。

夏実「っ！？」

変身が解除され夏実はその場に立っていた。身体を貫かれた筈なのに痛みは感じなかった。傷の1つもついていないその身体はドリームとは対照的だった。

夏実「ど、どうして？・・・身体を貫いた筈なのに」

ドリーム「プリキュアの力は傷つける為にあるんじゃない・・・・だれかを助ける為にある力なの」

夏実「助ける為の力・・・・」

その言葉に夏実は彼女の言ったいた言葉が身に染みてきて思わず涙が出てきた。夏実は最後にドリームにありがとうと一言言う。

ピーチ「はぁあああぁぁあああぁぁあああっ！！！！！！！！」

ジェニス「でやぁあああああああああああっ！！！！！！！！」

ジェニスとピーチの宿命の戦いにも決着がつこうとしていた。戦闘能力が同じなだけに互角の流れは全く崩れることなく2人の体力は限界を迎えようとしていた、

ピーチ・ジェニス『はぁ、はぁ、はぁ、はぁ、はぁ、はぁ・・・・・・』

恐らく後1発の必殺技が双方の限界だろう2人はそれを理解しながら立ち上がると最後の切り札を出すべく力を振り絞る。

ジェニス「コレで決めてやる・・・お前を倒し私が私になる為にもなぁっ!!!」

ピーチ「くっ!!!」

今の体力ではどこまでいけるかは分からない。だが負けるものかと2人は同時に必殺は技を放つ。

ジェニス「行くぞ!!!ダークネスバースト!!!!!」

ピーチ「プリキュア・ラブサンシャインフレッシュ!!!!!」

2人の光が周囲を包み込んでいくと衝撃が走り2人は勢いよく飛ばされてしまう。

ジェニス「またしても引き分けか・・・くっ!!!!」

フラフラになりながらも立ち上がりジェニスは舌打ちをする。

ピーチ「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ・・・」

ジェニス「まあいい。この世界にはシザース達以外にもデスリード様と同じ強大な存在がいるのだ・・・そして封印されている邪神が蘇るその時こそ・・・・全てが終わるのだっ!!!!・・・その時まで首を洗って待っておくんだな!!!」

電子音「パラレル・マキシマムドライブ」

ジェニスは最後にそれだけ言うとガイアメモリを使いその場から姿を消した。闘技場に残されたのはドリーム、ピーチ、そして夏実だけとなった。

夏実「・・・・・」

ドリーム「ピーチ!!!!!」

ドリームは倒れているピーチを起こしていくと何とか立ち上がる。

夏実「キュアドリーム、キュアピーチ」

夏実に呼びとめられるとピーチとドリームはどうしたのかと思った

のだが。
夏実「お願い、私を助けた様に太陽さんの憎しみを・・・彼の闇を消し去ってあげて！！！！！」
彼女の今までとは違う態度に驚いてしまうがすぐに2人は笑顔を見せて首を縦に振る。そして背を向けてブロッサム達の元へ合流しに向う。
夏実「お願い・・・私の大切な人を助けて！！！
夏実はその場に座り祈る様にそう言った。だが彼女は気が付かなかったのだカードデッキからベノスネーカーのカードが抜き去られている事に・・・。

第４３話地球解放軍編ＸＩＩＩ「決戦～憎しみを撃て」（後書き）

今回は今までで一番長くなってしまいました。（汗）
なのでシザースとブロッサム達の出番は次になりそうです

さて次回はシザースサバイブの力と第３の兵器が動き出します！！！
次回もお楽しみに♪

第４４話地球解放軍編ＸＩＶ「決戦～召喚される究極甲獣？蛇帝」（前書き）

前回までのあらすじ～
ガイＶＳルージュ＆ローズ、ライアＶＳエルス、王蛇ＶＳドリーム、ピーチＶＳジェニスの戦いはそれぞれプリキュア達の勝利で幕を閉じた。プリキュア達の光が絶望に落とされたミラーライダー達に希望をもたらすのだった。
だが彼らの契約のカードはある者によって回収されている事となった

第４４話地球解放軍編ＸＩＶ「決戦～召喚される究極甲獣？蛇帝」

シザースサバイブ「見るがいいプリキュア共よ！！！コレがこの俺を帝王とする未来へ導く力の姿だ！！！！」
シザースはブロッサム達に自分の考えを否定された事で自分の最強の姿を露わにするとブロッサム達は彼のもつ今まで以上にない全身を揺さぶる様なの圧倒的戦慄と威圧感を感じていた。
ブロッサム「それが貴方の心の闇の姿・・なんですね」
ブロッサムは彼の姿を見て恐怖をいだくどころか逆に悲しそうな声を出した。その様子にシザースはバカにした様な声を出した
シザース・サバイブ「ふふふ！！！・・・恐怖で言葉も出ないのか？くくくくっ・・・あはははははっ！！！！！」
シザースは高笑いしながらプリキュア達を嘲笑う様にそう言うのだった。そして更に高ぶる気持ちを発する。
シザース・サバイブ「貴様らを倒しこの手に世界を取り込んでやる・・・行くぞぉッ！！！」
シザースはシザースバイザーツバイを片手にブロッサム達めがけて振り下ろすが全員散り散りになる。
夕「っ・・・変身！！！」
電子音「ＨＥＮＳＩＮ」
夕はシザースの攻撃を避けた後にゼクターを呼び出して手早くフェアリーの姿になるとマスクドフォームのままレイピアをガンモードにしてを構えてシザースに向ってビーム砲撃を放ってシザースに直撃させるのだがシザースには傷１つすらつかない
シザースサバイブ「ふはははははっ・・・最早お前達の力ではサバイブで強化されたシザースにはついて来れまい」
電子音「ストライクベント」
シザーズはカードを一枚引き抜きベントインさせるすぐにバイザーを腰の鞘に差し入れていき両腕にシザースピンチの進化系武器のシ

ザースカタールが装備される。
ブロッサム「そんな事ありません！！！私達は皆の意思を受け継いで貴方の所まで来たんです・・・だから絶対に貴方に負けるわけにはいかないんです！！！」
シザース・サバイブ「そのガラス細工の自信などすぐに粉々に打ち砕いてやる」
ブロッサム・サンシャイン『やぁあああああぁあああっ！！！！！』
ブロッサムはシザースのカタールを避けながら隙を見て懐にはいこみパンチを入れるがただでさえ防御力が高い上にサバイブで強化されたシザースの鎧にダメージは皆無であり。
ブロッサム「っ！！！！」
サンシャイン「そ、そんなっ！？」
シザース・サバイブ「やれやれ・・・この程度だったとはなぁああ！！！！！」
ブロッサム「あぁあああぁあああっ！！！！！！！！」
サンシャイン「うわぁあああぁあああっ！！！！！！」
シザースはそのままカタールでブロッサムを数回切り裂きサンシャインを蹴りつけ最後には彼女達のボディにキックを入れて蹴り飛ばしてしまう
マリン「はぁあああああっ！！！！！」
飛ばされたブロッサムの仇打ちだとマリンが上から踵落としをシザースの肩に叩き込んだ後右脇腹に回し蹴りを打ちこむがコレも手応えがない。
シザースサバイブ「雑魚が俺に触れるな！！！」
マリン「っ！？・・・きゃぁあああぁあああああああっ！！！！！」
シザースの低い声にマリンが動揺した瞬間にカタールでマリンを殴り飛ばしてやるとそのままダッシュで近づいていきカタールを倒れたマリンの首元に向ける。
シザース・サバイブ「先ずら貴様からか？キュアマリン・・・死ね

ぇえええっ！！！」

シザースのカタールがマリンの喉を掻き切ろうとするがカタールがマリンに触れる前にヒマワリの形をした黄金の盾がマリンの身体を覆いかぶさる様に前に現れてシザースのカタールを防御する。

シザース・サバイブ「何っ！？」

ムーンライト「はぁあああぁあああっ！！！！」

突然の事でシザースは当然動揺してしまう。その隙にマリンはサンシャインに救出されムーンライトが後ろからシザースの背中に向かってに回し蹴りを叩き込んでいく。流石のシザースも不意打ちには完全に対応しきれずにそのまま回し蹴りが直撃して勢いよく飛ばされるがダメージはそれでもほぼ0に近かった。

シザース・サバイブ「ちっ・・・瞬殺は免れたか」

飛ばされながらもシザースはすぐに立ち上がり舌打ちする。やはりただの物理的な攻撃では今のシザースにダメージを与える事は不可能なのか？

セイバー「はぁあああああぁあああああっ！！！！！！！！」

ただの物理攻撃でダメならこの伝説の金と銀の双剣でならばとセイバーが飛び出していきそのままシザースに刃を振いシザースの右肩に向かって剣を振り下ろす。

シザース・サバイブ「ブラックリストメンバーの1人キュアセイバー・・・貴様の実力は他の雑魚と少しは違うと思っていたが・・・・ふぅん」

勢いよく火花が散りダメージを受けたと思ったブロッサム達だったがそれは見かけだけであったらしく鎧に傷1つ付いていなかった。

セイバー「そ、そんなっ！！！」

驚くセイバーをしり目にシザースはセイバーを振り払う。続いてコズミックとナイトが同時に前に出ていくとシザースにダブルパンチとダブルキックを放つが微動だもしない。

シザース・サバイブ「貴様たちもそれで本気か？・・・・喰らえッ！！！！！！！」

お返しにと回し蹴りとカタールの斬撃を見舞わせるシザース・全員が束になっても本当に敵わないのか？

マリン「アイツにはアタシ達の攻撃が全然通らない・・・どうすれば」

マリンは思わずシザースの圧倒的な力の前にそう弱音を吐いてしまう正に歩く鉄壁の要塞ともいえるシザースサバイブの圧倒的な力の差の前に追いつめられ地面に膝をつくブロッサム達。

シザース・サバイブ「これぐらいにしておけ。今なら命だけは助けてやろう」

全ては計算通りに進んでいる事にシザースは完全に勝ち誇りながらそう言う。だがブロッサムがすぐに反論の言葉を飛ばす。

ブロッサム「嫌です・・・まだ私達は諦めません！！！」

シザース・サバイブ「やれやれ・・・実に不毛な頑固さだな」

この圧倒的な状況でさえもブロッサム達はまだ諦めようとはしない。彼女達の力は何処から出てくるのかとシザーズは呆れた様にそう言う。これ以上足掻いた所でこの圧倒的な力を持つ自分に勝てるなど万に一ついや億に一つのあり得ないと言う事が分からないらしい。

セイバー「こうなったら・・・私達の必殺技を全てぶつけるしか方法はないかもしれないわね・・・・・でも彼に隙がないと通用しない」

サンシャイン「私に考えがあるわ。勝負は次にシザースがあのカタールで私達を狙った瞬間よ」

物理攻撃が全くシザースに通らないのならばプリキュアの必殺技を叩き込んでいくしかない。全員震える体に鞭を撃って立ち上がると専用アイテムを取り出しながら作戦を考える勝負は次の一瞬の駆け引きで決まる・・・ここはサンシャインの作戦に掛けるしかない。。

シザース・サバイブ「ふん。何かするのようだが俺には通用せんぞ？」

シザースはカタールを構えながらもどうするつもりかは知らないが今のこの状況で勝てる道理などあり得ない。
シザース・サバイブ「そろそろ消えろ・・・全世界の未来の礎となれ！！！」
シザースはカタールを光らせるとものすごいスピードで突進を始める。一気にカタールの刃で全員を切り裂くつもりだ。
サンシャイン「サンフラワーイージス！！！」
だがまたしてもギリギリの所でサンシャインのサンフラワーイージスがシザースを弾き飛ばしてしまう
シザース・サバイブ「ちっ！！！」
シザース地震にダメージは少ないのだが距離を思った以上に取られてしまう。勿論このチャンスをブロッサム達は逃すはずがなかった。
サンシャイン「集まれ花のパワー、シャイニータンバリン！！！」
シザース「っ！？」
シザースはすぐにカタールの装備を外すとカードを引き抜いてサンシャインの必殺技を防御する策を講じる。
サンシャイン「花よ舞い踊れ、プリキュア・ゴールドフォルテバースト！！！！」
電子音「ガードベント」
シザース・サバイブ「バカがそんな物！！！！」
両腕に盾を発生させるガードベントパーフェクトガードを装備してサンシャインのフォルテバーストを防ぎ切ろうとするシザースがだがそれがサンシャインの狙いであったのだ。
シザース・サバイブ「っ！？動けんっ！！！・・これは囮か」
盾で防いだはずだったのが沢山のヒマワリの形をしたエネルギー体はシザースの身体にまとわりついて動きを封じ打のだ。この戦法はかつて砂漠の使徒との戦いで対ダークプリキュア戦にて動きを封じ心の大樹を守った時と全く同じものであった。
サンシャイン「今よ！！！」
ブロッサム一同『うん！！！』

全員は専用武器に光のエネルギーを集約していき必殺技の準備を始める。シザースはその間にも必死にサンシャインの生み出した拘束を解こうと暴れるが完全に動きが封じられていてどうしようもなかった。

ブロッサム・マリン・『集まれ2つの花の力よ、プリキュア・フローラルパワーフォルティシモ！！！」

最初にブロッサムとマリンのフォルテッシモが発動しピンクと青の光がシザースに向う。

ムーンライト「集まれ花のパワー、ムーンタクト。プリキュア・フローラルパワーフォルティシモ！！！」

続いてムーンライトのフォルテッシモもブロッサム、マリンと合わせて発動し銀色の光がシザースに。

フェリー「ライダーバースト！！！」

電子音「ＲＩＤＥＲ　ＢＵＲＳＴ」

フェアリーの最強技のライダーバーストの発射準備が完了しエネルギー波がブロッサム達を包むように合わさる。

ナイト「邪悪の心を浄化する黒き波動を受けてみよ！！プリキュア・ナイトイリュージョンウェーブ！！！」

そして第2波としてナイトのナイトイリュージョンウェーブがシザースに向かう。

セイバー「プリキュア・スターライトチャージ・クラァアアアアアシュ！！！！！」

それに合わせてセイバーのスターライトチャージクラッシュがナイトウェーブと重なり融合する。

コズミック「プリキュア・コズモブラスター！！！」

最後にコズミックのコスモブラスターが全てを包み込んでいき全必殺技が融合した光線がシザースに向っていく。

シザース・サバイブ「己ぇ～この屈辱は俺の最強技が貴様ら全員を踏み潰して晴らす！！！！！・・・ぐぅうっ・・・・がぁああぁああああぁああああぁああああああぁああっ！！！！！！！！」

シザースの身体を光が包み込んでいき彼のカラダを貫いてブロッサム、マリン、ムーンライトは彼の魔後ろにワープする。
ブロッサム・マリン・ムーンライト『ハートキャッチ！！！！』
光がシザースを包み込んでいくとそのままブロッサム、マリン、ムーンライトはクリスタルドームに浄化のエネルギーを送り込んでいきシザースの心にある憎しみを消滅させようと力を込めるがシザースの周りに黒い波動が集まるとシザースを包み込んでいく。
ブロッサム「あ、アレは！？」
シザース・サバイブ「ぐぉおぉおおおぉおおおっ！！！！！！！！！！」
なんと全員の必殺技が融合した光を消し去ったのだ。流石のシザースも息を切らしながらも耐えきってやったぞという様な勝ち誇った態度を見せつける。ブロッサム達全員は放心状態になりその場に立ちすくんでしまうのだった。
シザース・サバイブ「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ・・・思った以上にやるな？どうやら俺は貴様らを少し甘く見ていたようだ」
まさかあんな隠し玉を持っているは流石のシザースも計算外だった。だがダークから貰い受けた闇の力が役に立ちブロッサム達の光の力を消し去る糧となった。シザースバイザーを取り出しそれを向けながらゆっくりとシザースは歩み寄るように近づいてくる。
ブロッサム「そ、そんな・・・私達の技が効かない？」
マリン「なんて奴・・・こ、こんな奴にどうやって戦えば」
渾身の必殺技を融合させた力をぶつけてもシザースには通用しなかった。全員の戦う意思が無くなりかけようとしていたその時・・・
？？？「プリキュア・ファイヤーストライク！！！」
見覚えのある炎がシザースに向かって飛んできた。シザースはバイザーでそれを叩き割ると炎が飛んできた方向に目をやる。するとそこには。
？？？「待たせたな・・・皆！！！」

ブロッサム「っ！！・・・・皆さん！！！」
そこには大人たち率いるライダーチーム、プリキュア5のドリーム、ルージュ、ローズ。フレッシュのピーチ、そして彼女達の仲間のエルスの姿だった。身形はボロボロだが気合は十分であると目をしていて闘志が溢れ出ているようだった
シザース・サバイブ「貴様ら・・・まさか夏実達を！！！！」
カブト（大人）「安心しな。お前の仲間は全員生きてるさ！！！」
シザース・サバイブ「何だと？」
エルス「彼らの憎しみは私達が消し去ったわ！！！。残るは貴方1人よシザース！！！」
ドリーム「あの子達は言ってたよ。『貴方を助けてほしい』って・・・もうこんな事は止めようよ。今からでも遅くはないよ！！！」
エルスとドリームはシザースにこれ以上の戦いは無意味だと言って降伏を迫る。だがシザースはそれに耳を傾けるつもりはなく「黙れ」と怒鳴り散らす。
シザース・サバイブ「（2パーセントの確率が大番狂わせをしてきたか・・・だがまだ手はある）・・・夏実達をどう洗脳したかは知らんが俺の答えは変わらんぞ・・・貴様らをこの手で倒す！！！」
シザースはもう1枚のストライクベントのシザースカタールを装備する。例え何人集まろうが自分の勝利は揺るがないと信じて戦うつもりだ。
ブロッサム「だったらシザース。貴方の心にある憎しみや怒りを今この場で消し去ります！！！」
シザース・サバイブ「ほざけぇえっ！！！！」
シザースはダッシュでブロッサム一同にカタールの刃を向けるがそれをブロッサムが受けとめる。
ブロッサム「やぁあああぁあっ！！！！」
シザース・サバイブ「ちっ！！！！」
カタールの刃を受けてブロッサムは片足を軸にしながらシザースの

ボディにキックを放つ。カタールで防御するがその次の瞬間にマリンのパンチがシザースの仮面に叩きこまれる。
シザース・サバイブ「っ！？・・・いつの間に」
怯んだその隙にサンシャイン、ムーンライト、ナイトのトリプルパンチがシザースのカタールに叩き込まれるとカタールは木っ端微塵に砕け散ってしまう。先程までとは違う何かの力がシザースの予想を覆していく。
シザース・サバイブ「な、何だと！？」
カタールが砕かれてしまったシザースは急いで新しい武器を召喚しようとカードを引き抜こうとするがそうはさせないとドリーム、ルージュ、ローズの3人がシザースに猛ラッシュを放ちカードを引かせる暇を与えさせない。バイザーで3人を振り払おうとするが攻撃は避けられて重厚なボディは次第にその強度を弱めていく。
シザース・サバイブ「くっ！！！」
カブト（大人）「まだ終わってないぞっ！！！！！」
電子音『ＲＩＤＥＲ　ＫＩＣＫ』
更に追撃のライダーキックを大人率いるライダー軍団がシザースに叩きこむと流石のシザースもダメージは避けられなかった。
シザース・サバイブ「ちっ・・・己ぇッ！！！」
飛ばされたシザースはこのままでは流石の自分もマズイと一度自分からブロッサム達と距離をとり一枚カードを引き抜いてバイザーにベントインさせる。
電子音「アドベント」
こうなればモンスターを呼び寄せて力でねじ伏せてやるとシザースはボルキャンサーの進化系のボルナハトゥマーを呼び寄せる。その姿は軽くウルトラマンを思わせるほどの巨大な姿となり金色の甲殻と爪は正に化け物蟹の一言であった。
ガタック「アレはっ！？」
エルス「サバイブで進化したボルキャンサーです！！！」
ダークカブト「なんてデカさだ・・・シザースのやつ何をするつも

りだ！？」
シザース・サバイブ「ふぅん、この場で貴様らまとめてこの俺の力で粉砕してくれる・・・先ほど言ったとおりこの俺の最強の力でなっ！！！！」
シザースはファイナルベントのカードを引き抜いた。この場にいる全員纏めて消し去るつもりだ。
カブト（大人）「くっ・・・今の俺達にシザースの技を相殺できる力はない！！！・・・どうする？」
ブロッサム「私達に任せてください！！！」
ガタック「な、何言ってるんだ！？・・・奴の技に対抗できる術なんて・・まさか、あれか？」
今の消耗したブロッサム達ではシザースの全力の攻撃を受け切る方法は1つしかない・・・それは危険なかけでもある。大人達はブロッサムだけにそんな危険な真似をさせたくはなかったのだがカブト（大人）「分かった・・・そこまで言うのならお前達に任せるよ」
だが今のブロッサム達は今何と言ってもこの場は譲らないつもりだろう。ならば此処はブロッサム達が持つあの奇跡の力を信じる以外はシザースを倒せる手段は残されていないかもしれない。
シザース・サバイブ「貴様ら5人で戦うつもりか？・・・いいだろう！！！」
電子音「ファイナルベント」
上等だとシザースはファイナルベントのカードをベントインしていくとボルナハトゥマーはシザースの後ろに現れる。
ブロッサム「皆、行きますよ！！！！」
マリン・サンシャイン・ムーンライト・ナイト『『うん！！！』』
シプレ・コフレ・『今こそプリキュアの力を見せるときですっ！！！！』
ポプリ「久々の出番でしゅ！！！！」

妖精達がブロッサム達に応えるようにハートキャッチミラージュを召喚。ナイトは光を発してホーリーパヒュームを呼び寄せた。

ブロッサム・マリン・サンシャイン・ムーンライト『鏡よ鏡、プリキュアに力を！！！！』

４人はポプリから受け取ったパワーアップの種をハートキャッチミラージュに装填、そのあと祈りをささげると光は４人を包んでいきコスチュームが変化していく。彼女達の背には天使の思わせる光の翼が装備されスカートやブーツも全体的に鋭利なものとなりカラーも淡くなる。

ブロッサム・マリン・サンシャイン・ムーンライト『世界に輝く一面の花！！ハートキャッチプリキュア・スパーシルエット！！！！』

ナイト「聖なる光よ、私に更なる力を！！！」

ナイトの掛け声にパヒュームに輝くが発せられたと思えば素早くイリュージョンロッドからプリキュアの種を取り出しそれをパヒュームに装填、その後ナイトは胸から香水を噴きかけると黒と銀がメインのコスチュームはホワイトに統一された者へと姿を変える。そしてナイトのおかっぱ頭も伸びてロングヘアーとなり変身が完了する。

ホーリーナイト「聖なる夜に輝く一輪の花、キュアホーリーナイト！！！！！」

シザース・サバイブ「ふぅん・・今更何をしようが無駄だ。、喰らえ、メルトバブル・バースト！！！」

シザースはボルナハトゥマーがバイクに変形したのと同時に変形したバイクに乗りこむ。そしてそのままスーパーシルエットとなったブロッサムとホーリーナイトに必殺技を叩き込んでいこうとする。

これが決まれば全てが終わる・・・だがブロッサム達も対抗する準備は既に出来ていた。

ブロッサム・マリン・サンシャイン・ムーンライト『花よ咲き誇れっ！！！プリキュア・ハートキャッチオーケストラ！！！！』

ブロッサム達４人はタクトとタンバリンを振い必殺技名を叫ぶと背後に巨大な女神が出現する。淡いピンクの髪と純白のドレス姿の女

神は向ってくるシザースとボルナハトゥマーに立ち向かう。
ムーンライト「ふん！！！」
最初にムーンライトが手をかざして女神をシザース達に前に降臨させる。
サンシャイン「はぁああっ！！！」
続いてサンシャインが女神の手を持ちあげさせる。
マリン「たぁあっ！！！」
それに続いてマリンが女神の手を拳に変えさせると光のエネルギーを集約させて拳の大きさを大きくさせていく。
ブロッサム「たぁあああああーーーーっ！！！！」
最後にブロッサムが女神の光の拳を憎しみに捕らわれたシザースとその象徴のボルハトゥマーに放っていき光の力でそれぞれを包み込んでいこうとする・・・が。
シザース・サバイブ「バカが・・・貴様らの浄化技など俺には通用せん！！！」
光の力には闇の力で対抗してくれるとばかりにシザースはダークから課された試練で自らの物にした闇の力で対抗すると溶解泡につつまれたバイクに黒い闇の力をも纏わせ女神の手から離れるとそのまま闇の力の波動を放ってくるのだがすぐにブロッサム達は女神を操り光のエネルギーをぶつけていくがシザースのた闇の波動と光の波動が激突するとブロッサム達は押され始めてしまい光のエネルギー波は押し戻されていく。
シザース・サバイブ「ははははははっ！！！！俺の勝ちだぁああっ！！！！」
ホーリーナイト「それはどうかな？」
シザースの闇がブロッサム達の光エネルギーを押し戻してやるとブロッサム達の必殺技を完全に押し返そうとしていこうとしていくがホーリーナイトがホーリーロッドを煌かせるように取り出す。
ホーリーナイト「花よ轟け、プリキュアホーリーフォルテストーム！！！！」

ホーリーナイトのホーリーロッドに光が集約するとそのまま自分の最強の必殺技のブロッサム達の光エネルギー波に取り込んでいくとシザースの闇の波動を徐々に押し戻す。
シザース・サバイブ「ば、バカな・・・何だ・・・この俺が負けるなど・・・・」
徐々に闇が押し戻されていき光がシザースの元の向ってくる。信じられないという声を上げた彼にブロッサムは声を上げた。
ブロッサム「コレが貴方にはない力・・・憎しみを打ち消す光の力なんです！！！」
シザース「ぐぅ・・・ぐあぁあああぁあああああああああああっ！！！！！！！」
ブロッサム・マリン・サンシャイン・ムーンライト・ホーリーナイト『はぁあああああああああぁあああああああああああっ！！！！！！！！！』
シザースの身体を光が完全に飲み込み浄化をし始めブロッサム・マリンはクリスタルドームを回してサンシャイン、ムーンライト、ホーリーナイトはタクト、タンバリン、ロッドを弧を描くように動かして光エネルギーをシザースとボルハトゥマーに送り込んでいく・・・が。

突然シザースを包み込んでいた光に黒い光線が放たれるとハートキャッチオーケストラとホーリーフォルテストームを消し去っしまう。
マリン「なっ！？・・・何っ！？」
その場にいたシザースを含めた全員が驚きを隠せない表情となる。
シザースは光から解放されたがダメージはかなりのものであるらしくその場に膝をついていしまう
シザース・サバイブ「っ！？・・・はぁ、はぁ、はぁ、はぁ。今のは・・・まさか」
シザースは光線が放たれた所をいてみるとそこには漆黒のマントに身を包んだ1人の人間と思われる人物は上空（うえ）に浮いていた。

？？？「シザース・・・危なかったな」
シザース・サバイブ「お前はダーク・・・なぜお前が！？」
シザースの様子に全員はその人物の方に目線が集まる。ブロッサム達は本能的な直感の様なものでその黒マントの人物がただの人間ではないと判断できた。
ブロッサム「貴方・・・一体誰ですか！？」
ダーク「そうか君達には紹介がまだだったね・・・我が名はダーク！！！全てを闇に呑みこませる闇の支配者だ」
サンシャイン「闇の支配者！？」
ダーク「ふふふっ」
ダークは上空から舞い降りると膝をついているシザースに３枚のカードを投げ渡した。
シザース・サバイブ「！？・・・これは夏実達の契約のカード！？」
ダーク「シザースよ君の今の力だけではプリキュア達には敵わない。だが私が渡した闇とあのモンスターを召喚すれば・・・な？」
シザース・サバイブ「ふぅん、止むを得んな。出し惜しみしている場合ではない」
電子音「アドベント」
シザースは立ち上がるとダークから受け取ったメタルゲラス、エビルダイバー、ベノスネーカーの３枚のカードをバイザーにベントインする。
ボルハトゥマーの後ろにサバイブ化した３体のモンスターが集まる。
そしてシザースは更にもう一枚カードを引き抜いた。
シザース・サバイブ「見るがいい、そして慄くがいい！！！我々４人の力を合わせた全てを超越し全てを破壊する究極の力を！！！」
電子音「ユナイトベント」
そしてそのままシザースはもう一枚のカードをベントインさせると４体のモンスターがいる自給が歪み始め４体のモンスターが１つに合わさっていく。４体のモンスターの咆哮と眩いばかりの光が辺り一面を包み込んでいく。

シザース・サバイブ「出でよ我が最強の僕(しもべ)！！！！」
シザースは両手を広げながらそう言うと徐々に自分と同士達の力を併せ持った最強を超える究極のモンスターの姿が現れていく。そして現れたその姿は・・・・
シザース・サバイブ「究極甲獣?蛇帝、アルティメットジェノキャンサー！！！！！」
腕と同体はボルハトゥマーの鋏と甲殻、足メタルエンパイア、背中にはエキソダイバー、そしてその上にボルハトゥマーの甲殻がそして頭と首にはベノヴァッパーとメタルエンパイアの兜のようなものを纏われたその邪悪にまみれた姿が出現した.
シザース・サバイブ「これぞ史上最強にして華麗なる究極の破壊兵器(モンスター)の姿だ・・・アルティメットジェノキャンサーで貴様らを倒す！！！」
遂に現れた太陽の最後の兵器の前にブロッサム達は対抗手段があるのだろうか?ハートキャッチオーケストラは通用するのか?

第４４話地球解放軍編ＸＩＶ「決戦～召喚される究極甲獣？蛇帝」（後書き）

とうとう出せましたオリジナルのモンスターを。

次回はつぼみ達に最大にピンチが・・・・

次回もお楽しみに♪

第４５話地球解放軍編ＸＶ「決戦～絶望を崩せ奇跡の融合！！～」（前書き）

前回までのあらすじ～
ハートキャッチオーケストラとホーリーフォルテストームの合体技にシザースは敗れ去ったと思ったのだがそこに闇の支配者を名乗るダークが現れシザース救出する。形勢不利と見たシザースにダークは夏実達から奪い取った契約のカードを太陽に切り札として渡し最後の切り札の究極甲獣？蛇帝アルティメットジェノキャンサーでブロッサム達を今度こそ追いつめようと反撃を開始する。

夢原さん、桔梗さん、ＧＡＳＨさんには感謝いたします！！！

第４５話地球解放軍編ＸＶ「決戦～絶望を崩せ奇跡の融合！！～」

おぞましい姿を見せた太陽（シザース）が従える最強を超えた究極のモンスターであるアルティメットジェノキャンサーは咆哮をあげてブロッサム達を威嚇するように睨みつけているその姿は蟹、蛇、サイ、エイの４体のモンスターが合体した文字どおりの最悪の殺戮兵器（モンスター）と言ってもいいだろう。それはは今まで戦ってきた怪獣とはケタ違いの威圧感と戦慄が感じられブロッサム達をすぐには動けなかった。

シザースサバイブ「これが俺の最後の切り札であり滅びの神にして究極の殺戮兵器（モンスター）・・・お前達はここで終わる。殺（や）れアルティメットジェノキャンサー！！！」

シザースは腕を胸のあたりで組んで自分の最狂殺戮兵器（モンスター）の威圧と戦慄に動けないブロッサム達を徹底的に見下す。そして先程やれた攻撃を倍にして返してやるとアルティメットジェノキャンサーに命令を下す。

ブロッサム達全員「っ！！！」

我に返った戦士達一同は近づいてくるアルティメットジェノキャンサーから距離をとるように散り散りになってアルティメットジェノキャンサーとの距離を確保しようとしていく。

アルティメットジェノキャンサー「ギシャァアアアアアアッ！！！！」

咆哮を上げるとベノヴァッパーの毒液を戦士達に撒き散らしながらその巨体で攻撃を仕掛けていくとブロッサム達は巨体の攻撃を避けるので精一杯で攻撃にまでは手が回らなかった。

ブロッサム「プリキュア・ピンクフォルテウェイブ！！！」

マリン「プリキュア・ブルーフォルテウェイブ！！！」

サンシャイン「プリキュア・ゴールドフェルテバースト！！！」

ムーンライト「プリキュア・シルバーフォルテウェイブ！！！」

ホーリーナイト「プリキュア・ホーリーフォルテストーム！！！」

いつまでもやられっ放しではいられないとブロッサム、マリン、サンシャイン、ムーンライトホーリーナイトの5人がフォルテウェイブを合体させてアルティメットジェノキャンサーに放つがアルティメットジェノキャンサーにはまるで通用しなかった。

シザースサバイブ「あははははははははははっ！！！無駄だぁ～貴様らにこの史上最強の究極殺戮兵器（アルティメットジェノキャンサー）を倒す事など不可能だ。蟹の甲殻を持つ防御力、サイの強靭なパワー、エイの俊敏さ、蛇の毒牙と攻撃力が融合したこの最狂怪物（モンスター）に勝つことなど出来ん！！！」

必殺技を防御した後5人をまとめて巨大な蟹の腕を振り上げるとそれをブロッサム達5人に向けて巨大なそれを振り下ろす

5人「うわぁああぁあああぁああああああぁああああぁあああっ！！！！！！？？？？？？」

5人は避けようとするのだが間に合わずに凄まじい力で飛ばされるとそのまま壁に叩きつけられる。その後に続いてプリキュア5のドリーム、ルージュ、ローズの3人に加えピーチとエルスが加わりがアルティメットジェノキャンサーの前に出るとそのまま必殺技を撃つ態勢に入る。

ドリーム「プリキュア・シューティングスター！！！」

ルージュ「プリキュア・ファイヤーストライク！！！」

ローズ「ミルキィローズ・ブリザード！！！」

ピーチ「プリキュア・ラブサンシャインフレッシュ！！！」

エルス「プリキュア・ライトニングスラッシャー！！！」

今度は物理的な破壊技も合わさった合体技がアルティメットジェノキャンサーに向けて放たれて爆風が包むがアルティメットジェノキャンサーには全くの無傷であった。

ドリーム「う、嘘っ！？」

ルージュ「こ、コイツ・・・なんて頑丈なのよ！！！」

戦闘力では上位クラスの5人の技をも受け付けないその強固な身体には通用しなかった。アルティメットジェノキャンサーは今度は自分の番だとドリーム達に向けて口から破壊光線「アルティメット・

シュート」を放つ。ドリーム達5人はすぐに逃げる為に移動するがビームの破壊力は凄まじく直撃は避けたものの爆風で飛ばされてしまう。

セイバー・コズミック『でやぁあああああああっ！！！！！！』

遠距離が効かないなら接近戦はどうだとセイバーとコズミックが同時に双剣とパンチを直接アルティメットジェノキャンサーに見舞わせていくのだがアルティメットジェノキャンサーは微動だもしない。

アルティメットジェノキャンサー「ギシャァアアアオオオオオオオオオッ！！！！！！！！！」

アルティメットジェノキャンサーは咆哮を上げながら目障りな2人を一掃するために口からアルティメットシュートを放って2人に反撃の光線を放つ。

カブト（大人＆総司）『ハイパーキャストオフ！！！』

電子音『ＨＹＰＥＲ　ＣＡＳＴ　ＯＦＦ』

このままでは全滅は時間の問題だと大人と総司は一気に勝負を決める為にハイパーゼクターを起動させてハイパーフォームになるとパーフェクトゼクターを呼び出す。

電子音『Ａｌｌ　Ｚｅｃｔｏｒ　Ｃｏｍｂｉｎｅ』

カブト（大人）「喰らえッ！！！！」

電子音『ＭＡＸＩＭＵＭ　ＨＹＰＥＲ　ＣＹＣＬＯＮＥ』

大人と総司のマキシマムハイパーサイクロンが合わさって巨大な光となってアルティメットジェノキャンサーに直撃すると今までで一番強力であろう爆発が起きて辺りに発生して閃光と爆風が起こる。

シザースサバイブ「・・・ふぅん」

アルティメットジェノキャンサー「ギシャァアアアオオオオオオオオオッ！！！！！」

カブト（大人）「ば、バカなッ！！！」

カブト（総司）「・・・っ！！！」

マキシマムハイパーサイクロンでさえもアルティメットジェノキャ

ンサーはやり過ごしてしまった。全員の最強クラスの必殺技を叩き込んでもアルティメットジェノキャンサーには傷1つすらつける事は出来ていなかった。ポーカーフェイスが得意の総司でさえもアルティメットジェノキャンサーの圧倒的な防御力を受けいる事は出来なかったらしく普段は見せない動揺した態度を露わにした。

シザース・サバイブ「茶番は終わりにしてやる・・・アルティメットジェノキャンサーよ全てを消し去るのだぁあっ!!!」

シザースはアルティメットジェノキャンサーに命令を下すとアルティメットジェノキャンサーは口に光を発していき邪悪に満ちたエネルギーを集約させ始める。ブロッサム達は何とか立ち上がるが既に反撃の力は残されていなかった。

シザースサバイブ「貴様らに望みはない・・・滅びの光で塵となれぇ!!!滅びのバーストビックバン!!!!」

全員『うわぁあああああああああああああああああっ!!!!!!!!!!!!!!!』

シザースの合図に合わせてアルティメットジェノキャンサーは口から超破壊拡散光線（バーストビックバン）を全員に向けて放つとブロッサム達の悲鳴がこだましました。そして凄まじい閃光の後玉座の間全体を包み込むかのような大爆発が起きる。

大人「・・・み、皆ぁ・・・だ、大丈夫か?」

琢磨「な、なんとか・・・」

傑「い、生きてる」

最初に第一声を上げたのは大人だった。全員アルティメットジェノキャンサーの凄まじい全体攻撃を受けて飛ばされ変身は解除されて身体はボロボロであった。大人の近くにいた大人達率いるライダーチームの夕と総司は気絶してしまっているが琢磨、傑はなんとか意識を手放さなかったのだった。他の仲間の生存を確認するために痛みが走る身体に鞭を撃ち立ち上がる3人の元にかすれた声が聞こえてきた

つぼみ「ひ、・・・ろと・・さん」
大人「つぼみ?」
えりか「た、たく、・・・ん」
琢磨「この声はえりか?」
いつき「す・・・る・・・さ」
傑「まさか!!!」
慌てて大人達3人はは激痛が走るな身体を動かしてつぼみ達らしきものの声がした方向に向かうとそこには・・・。
大人「つ、つぼみっ!!!!!み、皆ぁあっ!!!!!」
なんとそこにはプリキュアに変身する前のワンピース調の衣装を着たつぼみ達5人の姿があった。彼女達は身体が見てもすぐにただ事ではないと理解できるほどボロボロであり瀕死の重傷と言ってもいいほどだろうその傷は深く早く治療しなければ本当に死んでしまうかもしれない。そしてすぐ近くにはセイバー、ドリーム、ルージュ、ローズ、ピーチ、エルス、コズミックの姿もあった。どうやら彼女達は変身自体は解除されていなかったが傷が深い事には変わりはない。
シザースサバイブ「まだ息の根があると呆れ果てるほどのしぶとさだな」
大人「シザース、貴様ぁっ!!!」
シザースサバイブ「どれだけ足掻こうと結末は既に決まっている。上原大人、漆山琢磨、影山傑・・・貴様らがウルトラマンになった所でアルティメットジェノキャンサーに敵いはしないぞ。さぁ、どうする?」
大人「つぼみ達を死なせはしない!!!・・・俺達が大切な仲間を絶対の守ってみせる!!!!・・・行くぞ2人とも。」
琢磨・傑『おう!!』
こうなったら今戦える自分達が最後の力を解放するしかない。3人はスパークレンスを起動させて光の巨人の姿に変わりアルティメットジェノキャンサーの前に立つ。つぼみ達の事を考え本来の巨大な

姿には変身が出来なかったがそれでも今できる事をする為に3人は立ち上がる。
ティガ「チャァアッ！！！」
アース「デヤァアッ！！！」
デュナミス「ハァアッ！！！」
3人は同時にアルティメットジェノキャンサーに向かって走るとティガとデュナミスは飛び上がるりアルティメットジェノキャンサーの左右の腕にキックをアース胴体に向かってパンチを放つ。
アルティメットジェノキャンサー「・・・・ギシャァアアアアァアアアアアッ！！！」
ティガ・アース・デュナミス『グワァアアアアアアアアッ！！！！！！！』
アルティメットジェノキャンサー自体には3人のウルトラマンの攻撃でさえもダメージは皆無に等しくそのまま腕や足で殴り飛ばされる。
ティガ「ハァアアアアアッ！！！！」
アース「シャァアアアアッ！！」
デュナミス「ダァアアアアァッ！！！」
それでも怯まず3人は何度も何度も飛び上がってはキックやパンチ更にボディアタックを放って少しでもアルティメットジェノキャンサーにダメージを与えようと奮闘するが健闘もむなしくダメージを与える事は出来なかった。
ティガ「ハァアアっ！！！！！」
あの手応えでは格闘技は通用しないと判断したティガはゼペリオン光線をアルティメットジェノキャンサーの胸に放つがアルティメットジェノキャンサーから雷光の様な光が発するとそのまま全身を覆い尽くすように身体が包まれてゼペリオン光線を相殺してしまった。
ティガ「ハッ！？」
ゼペリオン光線すらも通用しない事にティガ達3人のウルトラマンの心にも焦りが生まれてしまう。その様を見たシザースは前に出て

いくと自信にあふれた声を出した。
シザースサバイブ「なぜコイツを倒せないか教えてやろうか？アルティメットジェノキャンサーにはプリキュアとライダー更にはウルトラマンの戦闘パターンのデータを組み込んであるのだ。故にお前達がアルティメットジェノキャンサーに勝つ可能性は０・・・・初めから貴様らが俺に勝つなど不可能だったと言う事だ。」
アルティメットジェノキャンサーは咆哮を上げるとティガ達だけではなくほぼ無差別にアルティメットシュートを放つと後ろには瀕死の状態のつぼみ達がいる事をすぐに思いだしたティガ達はつぼみ達を守れるほどの大きさに巨大化してつぼみ達を自分の身体を盾にして守る。
ティガ・アース・デュナミス『グアァアアアアアアアアアアッ！！！！！！！！！』
アルティメットシュートがティガ達の背中に直撃すると激痛で大声を出す。それと同時にカラータイマーが鳴り響いて絶体絶命のピンチに立たされてしまう。
つぼみ「・・・てぃ、ティ・・・ガ？」
ティガ「ッ！！！（このままじゃ本当につぼみ達が死んでしまう・・・せめてつぼみ達だけでも助ける方法はないのかぁ！？）」
下からつぼみの力のない声が聞こえた来てくるとティガ達でさえも不安が心によぎる。既につぼみ達の体力は限界に近くこのままでは本当に死んでしまうかもしれない。何かつぼみ達を助ける方法が無いか懸命に考えるティガの頭の中に突然声がよぎって来た。
？？？「一つだけ手がある」
ティガ「（！？・・・だ、誰だ！？）」
？？？「ティガの中に眠る残像意識の存在とでも言っておこう。今は時間が無い落ちついて聞け」
ティガ「（・・・分かった）」
ティガは突然聞こえた来た声に半信半疑だったが今は猫の手さえも借りたい状況である為に例えこの主の正体が幻想でも何でもいいか

ら今は頼らせてもらうと声の言う事を聞く事を了承する。
???「彼女達を助ける方法はただ1つ・・・お前達3人のウルトラマンの全エネルギーを彼女達に与えるのだ」
ティガ「（俺達のエネルギーを？）」
???「そうだ・・・そうすればあの怪物を倒せる力が誕生するはずだ」
ティガ「（それで本当につぼみ達は助かるんだな！？）」
???「ああ。だが彼女達の体力が君達の光エネルギーに耐えきれるかは一か八かの賭けだ・・・それでもやるか？」
ティガ「（・・・やるしかない・・・このままつぼみ達を死なせるわけにはいかない）」
???「・・・ならば光を託すのだ。そして世界を守れ！！！」
声の主は最後にそれだけを言うと何も言わなくなった。ティガは立ち上がる。
アース「（ティガ？・・・・）」
ティガ「（最後の手段だ・・俺達の全エネルギーをつぼみ達に渡すんだ！！！）」
アース「（何だってっ！？・・・・そんなことして大丈夫なのかよ？）」
ティガ「（分からない・・・でもこのままじゃつぼみ達がもたないし奴に勝てる保証だってはない。このまま全員倒れるよりも1％でもある僅かの可能性に掛けるしかない。）」
ティガの決意に溢れる視線にアースとデュナミスはティガの言う可能性に賭けてみると手を伸ばし3人は手を重ねる。
ティガ・アース・デュナミス『（・・・望みは最早1つだけ・・・ならばその希望に全てを賭ける！！！）』
このまま戦ってもアルティメットジェノキャンサーに勝てる可能性など殆ど無いかもしれないしつぼみ達の命が尽きてしまったら・・・。ならば僅かにある可能性に自分達の未来を託すとういう選択以外は今の自分達には残されていのならばそれに全てを掛けるとティ

ガ達は等身大の大きさに戻るとつぼみ達に駆け寄り手を伸ばした。
ティガ「（皆・・・俺達の力の全てをを皆に託す）」
アース「（だから必ず勝て！！！）」
デュナミス「（皆の勝利を俺達は信じてるぞ！！！）」
身体から光を発しながらも自分達の残っている光エネルギー全てをつぼみ達の身体に照射する。自分達に出来る事はもうこれしかない彼女達の力を信じて全てを託す事以外は・・・。

つぼみ「（この光は・・・・何？）」
えりか「（凄く暖かい・・・でも何で・・この光をアタシは知っている）」
いつき「（この光はいつもそばにいる・・・まるで・・・）」
ゆり「（絶望を崩す・・・希望の光）」
アンナ「（夢をあきらめない・・・勇気の光）」
プリキュア達の中に入るティガ達3人のウルトラマンの光。光は彼女達の折れた心にもう一度希望を思い出させる様な優しい光で痛みを全て吹き飛ばし戦う勇気を取り戻させる。
シザースサバイブ「ふぅん、何をしようがこの攻撃で俺に勝利はもたらさせる・・行くぞおっ！！！アルティメットジェノキャンサーよ最後の攻撃だぁあっ！！！！」
ドリーム「（『まだ終わっていない』って言うんだね？）」
ルージュ「（ウルトラマンにそこまでされたら）」
ローズ「（諦めるわけには行かないわね）」
ピーチ「（皆の幸せの為に！！）」
エルス「（この光をくれた彼らの為に！！！）」
コズミック「（憎しみに捕らわれたシザース達を倒し世界を守るために！！！）」
セイバー「（そしてシザース達を救う為に！！！）」
ティガ達3人の姿が消え全ての光がプリキュア達に注ぎ込まれるとプリキュア達は自分のカラダの中に燃え滾る凄まじいエネルギーを

感じながら戦う勇気と力をそして純粋にシザース達を救いたいと言う優しさが溢れ出る。
シザースサバイブ「アルティメット・バースト！！！！！」
シザースは腕をつぼみ達に向けたポーズをしながら最後の攻撃をアルティメットジェノキャンサーに放させる。凄まじい光のエネルギー波は動けないつぼみ達に向かっていく。
シザースサバイブ「ふはははははははっ！！！！！！プリキュア、貴様らの仲間の仮面ライダーそして最後の希望の象徴であるウルトラマン共に砕け散るがいい！！！！！」
先程の全体攻撃の何倍ものエネルギー波がつぼみ達を包み込んでしまとシザースは低い声で「勝った」と一言呟く。ダークはもう用はないだろうと闇の扉を出現させるが・・・。
ダーク「待てシザース。・・・様子がおかしい」
シザースサバイブ「何をバカな・・・奴らにはアルティメットジェノキャンサーを倒す事など不可能だ」
ダークの驚いた声にシザースはふざけた様な声でそう言。だがすぐにシザースの考えは打ち崩されることとなった。
シザースサバイブ「・・・な、何だこの光は？」
アルティメットバーストとは何か違う別の光がある事に気が付くとシザースはダークの言った事の意味が理解できたのか驚きの声を上げる。
シザースサバイブ「ば、バカな！？・・・あ、アレに耐えたと言うのかぁ！？」
ブロッサム・マリン・サンシャイン・ムーンライト・ホーリーナイト『シザース！！！！』
光の中でつぼみ達が声を上げたそして光が止むとそこにはスーパーシルエットとは違うコスチュームとなったブロッサム達ハートキャッチのメンバー更にはとドリーム、ルージュ、ローズ、ピーチ、エルス、コズミック、そしてセイバーの１２人のプリキュアの姿だったホーリーナイト「憎しみに染まった」

ムーンライト「その心を」
サンシャイン「私達が」
マリン「キャッチする」
色はそれぞれのカラーが淡くなっている事に変わりはないが胸のあたりのプリキュアを象徴するクリスタルの形がティガ達ウルトラマンのカラータイマーを思わせる形になる。更にクリスタルを中心に胸のにはティガのプロテクターを模った様な金色のラインが入ったその姿はスーパーシルエットの進化系だ。
シザースサバイブ「・・・・貴様らその姿は？」
ブロッサム「私達のこの姿はティガ達の力が融合した姿。その名は世界に咲く奇跡の花、ハートキャッチプリキュア・ウルトラシルエット！！！」
ブロッサム達はポーズをとりながら凛々しく神々しい姿を見せつけるとその後に続き残りの面々も生まれ変わったその姿を見せつけながら名乗り上げを始まる。
？？？１「未来を造る希望の光、ウルティメットドリーム！！！」
？？？２「未来を造る熱き光、ウルティメットルージュ！！！」
？？？３「未来を造る青い光、ウルティメットローズ！！！」
？？？４「未来を造る幸せの光、ウルティメットピーチ！！！」
？？？５「未来を造る新生の光、ウルティメットエルス！！！」
？？？６「未来を造る星の光、ウルティメットコズミック！！！」
？？？７「未来を造る救世の光、ウルティメットセイバー！！！」
絶望を打ち破る未来を造る戦士が誕生した。シザースのアルティメットジェノキャンサーと３人のウルトラマンの光を託されたプリキュア達の最後の決戦が始まる。

第４５話地球解放軍編ＸＶ「決戦～絶望を崩せ奇跡の融合！！～」（後書き）

目には目を融合には融合で対抗という事にしてみました。

さて次回は最終決戦の開始です！！！

ではでは次回もお楽しみに♪

第４６話地球解放軍編ＸＶＩ　「決戦～反撃開始！！プリキュア・ウルティメイト

前回までのあらすじ～
アルティメットジェノキャンサーの圧倒的な力の前にブロッサム達は瀕死の重傷を負ってしまう。彼女達を庇う様に大人達はウルトラマンとなり戦いを挑むがアルティメットジェノキャンサーにはプリキュア、ライダー、ウルトラマンの戦闘データがインプットされていてティガのゼペリオン光線すら受けつない。
絶体絶命のピンチに立たされた一同だったが最期の希望はあった。それはティガの光エネルギーをつぼみ達に託す事だった。最期の望みに掛けティガ、アース、デュナミスは自分達の全エネルギーをつぼみ達に託す事で新たなる戦士「ウルティメイトプリキュア」が誕生するのだった。

辺りを照らす眩い光が消えていくとそこには新しい力を得た１２人の戦士（プリキュア）が堂々とした態度で立っていた。その姿は神々しの一言で全ての闇を消し去ってしまうと錯覚してしまうかのようだった。
シザースサバイブ「ウルトラシルエットにウルティメットだと？」
ダーク「っ!!!」
シザースとダークは戸惑った声を上げるがシザースはすぐに鼻で笑うと余裕そうな声を漏らした。
シザースサバイブ「全く楽しませてくれる奴らだな」
シザースはまさかの展開に驚いた声しか出なかったがすぐに鼻で笑うとまるでこの展開を楽しむかのようにそう言う。
シザースサバイブ「この俺の憎しみに染まった心をキャッチするといったな・・・果たしてそんな事が本当に貴様らごときに出来るかな？」
もう一度カタールを召喚するとシザースは低い声でそう言う。例え相手がどんな力を得ようとも力で薙ぎ倒してやると言うかのようであったそんな彼を見てブロッサムは静かに口を開いた。
ブロッサム「必ず出来ます!!!。私達が得たこの光で」
シザースサバイブ「・・・・・・」
ブロッサムの言うとおりシザースは強欲な権力者の為に自分の憧れた父を犯罪者と罵られた揚句に母親を失い妹とは生き別れを強いられた。そしてその後の彼は犯罪者の息子という烙印を押されて周囲の人間に差別を受け心に深い闇を背負うこととなった。そして本当の事を知り自分の父と母の仇をとるだけではこの闇は消えることなく『全世界をリセットする』にまで発展してしまった。もしも今目の前にいるプリキュアの様な清く純粋な心を持った人間が数多くいたら今の自分はこんな事にはならなかったのかもしれない・・・・
シザースは自分の忌まわしい過去を振り返りそう思いながらもすぐ

に自分の心の中でそれを否定する答えが出た。
《もう俺は旧世界には存在する事は出来ない・・・いや旧世界を受け入れることすらできないと言うのは明白であろう。今更になって夏実達以外の人を信じることなど出来るわけがないのだ・・・そんな事はもう分かりきっている事。その為に俺は・・・・だが奴らは・・・プリキュアはぁっ!!!》
シザースサバイブ「・・・・ふぅん、だが貴様らの力ではアルティメットジェノキャンサーを倒す事など不可能だ!!!・・・貴様らが得た新しい力ごとこの手で粉砕してくれる!!!」
《奴らは本気でこの世界を守ろうとしている。・・・何故だ?この俺が復讐の為に戦っていると知りながら何故自分の命を賭けて戦う事が出来るのだ?・・・・ただ純粋に名も知らない他者の為に戦っていると言うのか!?・・・そんな事を本気で実行できる人間など・・・俺は1人しか知らない自分の父親しか・・・・・そしてプリキュア共がこの俺の邪魔をするのなら薙ぎ倒して進むまでだ》
シザースは自分の心の中でそう整理しながら吠える様にそう言った。
だがブロッサムは達は不敵な笑みを浮かべるいる事に気が付くとシザースは鼻で笑ったがそれに合わせてブロッサムは口を開いた。
ブロッサム「それはどうでしょうかね?・・・今の私達に溢れる勇気と力は貴方の究極殺戮兵器(アルティメットジェノキャンサー)、そして貴方の憎悪(サバイブ)をも凌駕します!!!」
シザースサバイブ「ふぅん、戯言を・・・そこまで言えるのであれば言葉などではなく貴様らの実力で示してみろ!!」
シザースのその言葉を合図にブロッサムを先頭にプリキュア達はアルティメットジェノキャンサーとシザースに向って突進していく。
シザースは装備したカタールを構えながらアルティメットジェノキャンサーに攻撃の指示を出すとアルティメットジェノキャンサーは動き出した。
フェアリー「う、うぅ・・・て、天道さん・・・だ、大丈夫ですか

？」

カブト（総司）「あ、ああ・・・何とかな。それよりも・・・ブロッサム達のあの姿は」

フェアリー「新しい力・・・でしょうか？・・・そうだ大人達は？」

カブト（総司）「・・・分からん。だがアイツらはそう簡単にくたばらん筈だ・・・うっ・・・流石に身体が動かんか」

目を覚ました総司とフェアリーは激痛が走る身体を動かしながらも今の自分達に出来る事がないかを考える。今できる事・・力が残されていない自分達には見守る以外は・・・・。

セイバー「ブロッサム達はシザースと戦って私達はアルティメットジェノキャンサーを引きつけるから！！！」

ブロッサム「分かりました！！！」

ブロッサム達ハートキャッチのメンバーは迷わずシザースの元に降り立つ。シザースはその勝負を受けて立つと言うかのようにカタールを光らせる。

シザースサバイブ「お前達だけでこの俺を相手にするとはな・・・まぁいいだろう決着（ケリ）をつけてやる！！！」

ブロッサム「皆、行きますよ！！！」

カタールを構えながらシザースとブロッサム達ハートキャッチメンバーの５人はお互いに睨み合うと同時に走る。

シザース・サバイブ「はぁああっ！！！！」

先手必勝とカタールで狙いを定め最初のターゲットはブロッサムとマリンに決めたシザースは彼女達２人をを斬るつけるが２人の腕にカタールを受け止められるとその場から姿が消える。

シザースサバイブ「なっ！？・・・後ろかぁ！？」

そしてシザースの後ろに現れたのをシザースはすぐに後ろに刃を振うが２人に紙一重で避けられるとそのまま今度は正面に移動したブロッサムとマリンのダブルパンチがシザースの腹に叩き込まれる。

シザースサバイブ「がぁあっ！？・・・舐めるなぁあっ！！！」

ブロッサム・マリン『きゃぁあっ！！！』
まるで自分の攻撃を予知していたかのような全く無駄がなくシザースを惑わすその動きはただ者ではないと直感で感じ取ったシザース。ウルトラマンとプリキュアの力が融合したウルトラシルエットはサバイブで強化され力は凄まじいものだろう。だが怯むものかとシザースは回し蹴りをブロッサムとマリンに叩き込む。
サンシャイン「次は私の番だよ。」
シザースサバイブ「来い！！！」
飛ばされた2人をサンシャインとムーンライトが受けとめると次はサンシャインが前に出る。サンシャインの得意の格闘技とシザースのカタールの剣技が火花を散らすようにぶつかり合う。両者とも正に互角というところだ。両者一体の攻撃を繰り広げていく。
サンシャイン「はぁあああああぁああっ！！！！！」
シザースサバイブ「たぁあああっっ！！！でやぁああっ！！！！」
シザースのカタールとサンシャインの拳と蹴りがぶつかり合う中とうとう流れを先に掴んだサンシャインがシザースのカタールを叩き折ってしまう。
シザースサバイブ「ちっ！！・・・ぐぅっ！？」
カタールが無くなったことで一気に形勢は逆転されると最後にサンシャインはシザースの顔に回し蹴りを叩き込んでやる
シザースサバイブ「ぐぉっ！？・・・ふぅん」
咄嗟に腕を組んで顔に直接ダメ―シが入る事は回避できたが衝撃波凄まじく後ろ身体が下がってしまう。
シザースサバイブ「やるなぁ？・・・だがこの程度で俺を倒せるなどあり得ん！！！」
まだまだ勝負は此処からであるとシザースは破壊されたカタールの残骸を腕から剥ぎ取るとシザースバイザーツバイを鞘から抜きとる。
アルティメットジェノキャンサー「ギシャァアアアオオォオオオッ！！！！！！」

アルティメットジェノキャンサーはアルティメットシュートを放ちながらセイバー達に攻撃を仕掛けるがセイバー達はアルティメットジェノキャンサーの攻撃を彼に避けながら距離を縮める。アルティメットジェノキャンサーは業を煮やしたのか滅びの爆裂拡散弾（バースト・ビックバン）で纏めて消し去ろうと口に比ケリを集約させるとそれを待っていたとばかりにルージュがパワーアップした炎を手に集めるてエネルギーを集約させる

ウルティメットローズ「プリキュア・ウルティメイトノヴァ！！！」

ティガのデラシウム光流をモチーフにした超高温の炎の玉がアルティメットジェノキャンサーの口に向かって放たれるとそのまま呑みこんでしまいアルティメットジェノキャンサーの腹の中で爆発が起こるとアルティメットジェノキャンサーは噎（む）せるような仕草を見せると怒りの咆哮を上げて巨大な腕を振り下ろしていくが当然全員は当たる直前に飛びあがって避ける。

アルティメットジェノキャンサー「ギシャァアアアアアアアアアアアアアアア！！！！」

怒りに燃えるアルティメットジェノキャンサーはアルティメットシュートを無差別に放つが理性のない攻撃がプリキュアに通じるわけがなくことごとく避けられてしまうと。

ウルティメットエルス「プリキュア・ウルティメイトライジング！！！！」

エルスの電撃を集めるとそのまま超電磁砲（レールガン）のような凄まじい雷撃の衝撃波がアルティメットシュートの胸と腕に叩き込まれると流石のアルティメットシュートもひとたまりもないのか痛みに悶える様な咆哮を上げる。

ウルティメットローズ「ミルキィローズ・ウルティメイトブリザード！！！！！」

ウルティメットコズミック「プリキュア・ウルティメイトブラスター！！！！」

このまま続けてアルティメットジェノキャンサーに反撃させまいと

ローズはミルキィミラーにコズミックは拳に光を集めるパワーアップした金色の薔薇の形をしたエネルギー波とコズミックの光の拳がその巨体に浴びせる。
反撃の隙すら与えないもう攻撃に徐々にアルティメットジェノキャンサーの体力が削られてダメージが蓄積されていく。
アルティメットジェノキャンサー「ギシャァアアアアオオオオオオッ！！！！！！」
咆哮を上げながらもアルティメットジェノキャンサーはこの屈辱は許しはしないとでも言うかのように鋭い眼光を光らせながら巨だな腕を振うのだがスピードではプリキュア達の方が上手であり攻撃が当たることなどなくアルティメットジェノキャンサーを惑わし体力を削り自滅への道へと進ませてやる。

シザースサバイブ「ふんっ、だぁああっ！！！」
ムーンライト「ううっ！？？」
シザースのパワーに対してブロッサム達はパワーアップした力と持ち前のチームワークでシザースと互角いやそれ以上の力で徐々にシザースを追いつめようとするが力ではまだシザースが上の様だ
シザースサバイブ「ははははっ・・・終わりだ！！！」
ムーンライトがタクトでシザースのバイザーを弾くように振うがパワーで押されてしまい組み伏せられるような体勢にされてしまうとシザースはバイザーをムーンライトの首に向ける。
ムーンライト「それはどうかしら？」
シザースサバイブ「何っ！？」
ホーリーナイト「他の仲間（プリキュア）の事を忘れてない？」
シザースサバイブ「き、貴様ぁいつの間この俺の間合いに」
たがそれはムーンライトの罠であったのだ。不敵な笑みを浮かべた事を疑問に思ったその隙にホーリーナイトがシザースに向けてロッドをブーメランのように投げつけると油断してしまったシザースは体勢を崩していしまう。その事にシザースは怒りの視線をホーリー

ナイトにぶつけるのだがその後ろには姉の姿が・・・。
ムーンライト「私の事も忘れてない？」
シザースサバイブ「何っ！？」
当然この反撃の機会を逃すはずがなくそれに続いて体勢を崩したシザースに向ってムーンライトがキックとパンチを素早く身体に叩き込まれるとシザースは後ろに数歩下がられる。
シザースサバイブ「己ぇ！！！」
彼女達（プリキュア）の動きはさっきまでとは格段に変わっている・・・まるで自分の力を読み取り受け流すかのように・・・シザースは徐々に焦り始めてしまう。
ブロッサム「まだまだ行きますよ！！！」
怯んでいるシザースに追撃のパンチがブロッサムが放ってくるのをシザースはバイザーを盾にするように構えて防御するのだがシザースサバイブ「ちっ！！！（なんて力だ・・・さっきまでとは比べ物にならんぞ）」
パワーアップしたブロッサムのパワーに力負けしそうになって思わず剣（バイザー）を前に振ってブロッサムをふっ飛ばすが彼女（ブロッサム）は身軽な動きで着地をする。
マリン「たりゃぁあああああっ！！！！」
シザースサバイブ「っ！？」
続いてきたマリンのラッシュの猛攻を避けながらも剣技と格闘技を混ぜながらも応戦するがマリンのスピードはシザース上回っていて次第に対応が追い付かなくなる。
シザースサバイブ「ぐぅっ・・・がはぁあ！！！」
マリン「はぁあああああっ！！！！」
最後にシザースのマリンの全パワーが注ぎ込まれたパンチを叩き込まれると踏ん張りが利かなくなったシザースはそのまま飛ばされる。
だがそれでもシザースはなお立ち上がってくる・・・己の譲れない信念の為に・・・自分のプライドと魂を賭けたこの闘いを征し必ず自分の夢をかなえる為に最後の最後まで戦うつもりだ。

アルティメットジェノキャンサーとセイバー達ウルティメットプリキュアの戦いにも流れが生まれ始めていた。アルティメットジェノキャンサーの強力な攻撃を巧みに避けながらもその強靭な身体に着実にダメージを与えて少しずつでも流れをプリキュア達が支配し始めているのだ。

アルティメットジェノキャンサー「ギシャァアアアアオオオオウウウウウウ！！！！！！」

アルティメットジェノキャンサーはちょこまかと動きまわるプリキュアという小さな的に向かって腕を振ったりベノヴァッパーの属性を持つ毒液を撒き散らしたりするが全くもってその攻撃は当たらない。ウルティメットドリーム「プリキュア・ウルティメットアタック！！！」

ドリームがピンクと金色の光を身体に集約していくとそのままシューティングスターの要領でアルティメットジェノキャンサーの身体を貫く。

アルティメットジェノキャンサー「ギャァアアアオオオオオオオオオオオオオッ！！！！！！」

怒りの咆哮を上げながらもなお攻撃の手を緩めようとはぜす今度は毒液をスプリンクラーの様に拡散させるように撒き散らすがそれをセイバーとピーチが前に出て手を翳していく。

ウルティメットセイバー「プリキュア・ウルティメトシャウト！！！」

ウルティメットピーチ「プリキュア・ウルティメイトサンシャイン！！！！」

毒液を防ぎながらもセイバーとピーチの光がアルティメットジェノキャンサーの巨大な身体をを包むと動きが鈍くなっていく。そう２人の放ったのは浄化光線でありアルティメットジェノキャンサーの中にある憎しみを消滅させて大人しくさせようとう魂胆なのだ。

ダーク「浄化光線か？・・・小癪な真似を！！！」

ダークはアルティメットジェノキャンサーに向けて腕を向けると闇のオーラをでアルティメットジェノキャンサーの身体を包み込んでいくとアルティメットジェノキャンサーの身体が一回り大きくなると身体も鋭くなり凄まじい咆哮を上げた。
ウルティメットピーチ「なんて事を!!!」
ウルティメットセイバー「まだ戦わせようと言うの!?・・・・そこまでして」
せっかく技が成功してあと少しで浄化できると言う所だったのに・・・。セイバー達全員の怒りがこもった視線が一気にダークに向けられるがダークは鼻で笑い蔑む様な視線を送る。
ダーク「当然だ。君達は私にとっても目障りな存在。此処で消せるのなら私は出来る事をするのみさ」
アルティメットジェノキャンサー「ギシャァアアアアアアアアアアアアアアアッ!!!!!!!」
ダークは更にアルティメットジェノキャンサーに戦いを強いる様にエネルギーを送り込んでやる。それに比例するようにアルティメットジェノキャンサーの声が部屋中に響き渡る。その声はまるで憎しみと闇に支配された自分を解放してくれと願うかのようにプリキュア達には聞こえたのだった。

シザースサバイブ「ぐぅ・・・己ぇ〜」
既に鎧からは煙が上がるほどの大ダメージを負ったシザースは膝をついて肩で息をするほど疲労が溜まっていた。力では自分がまだ有利な筈なのにソレもプリキュア達には通用しなかった。ブロッサム達はシザースに対する攻撃を止めるとその光り輝く凛々しい姿を見せながら口を開いた。
ブロッサム「シザース、もう勝負はつきました。貴方の負けです」
マリン「早くアルティメットジェノキャンサーを止めてよ。もう充分でしょ?」
サンシャイン「これ以上は・・・何をしても無駄よ」

ムーンライト「・・・・今すぐ降参するならこれ以上は私達も手は出さないわ」
ホーリーナイト「・・・貴方を待っている人がいる。だから今すぐに降伏しなさい」
これ以上の争いは何も生み出さない。素直に負けを認めてくれと優しく言葉を投げかけるブロッサムとマリンだがシザースは首を横に振った。
シザースサバイブ「ほざけ・・・まだだ・・まだ勝負はついとらんぞぉ・・・・アルティメットジェノキャンサー!!!!!」
シザースは残る体力を絞り出すように身体を動かすと立ち上がりアルティメットジェノキャンサーの名を呼んだ。するとアルティメットジェノキャンサーはセイバー達プリキュアに対する攻撃を中断するとシザースの元にまで移動し始めた。
シザースサバイブ「ダークが最後にくれた闇の力で貴様らを葬り去る・・・・俺と貴様らどちらが勝つか・・・最後の勝負だ!!!!!うぉおおおおおおおおおおおっ!!!!!!!!!!!!!」
ブロッサム「アレは・・・まさか」
ムーンライト「アルティメットジェノキャンサーに自分の心にある負の感情を注ぎ込んでいるのよ」
ホーリーナイト「最後の勝負・・・・全力をぶつけてくる気だね」
突然シザースの身体から物凄い勢いの黒いオーラが発生するとそれがアルティメットジェノキャンサーの身体に照射されていくとダークの闇の力で強化されたアルティメットジェノキャンサーの力を更に増幅させていくかのように見えた。
シザースサバイブ「これで、・・・コレで必ず終わらせてやる・・・・行くぞお、アルティメットジェノキャンサーの最後にして最強攻撃!!!!!」
シザースの合図に合わせてアルティメットジェノキャンサーの口と胸に禍々しいく光る黒いエネルギーが集約されていく。その勢いやオーラは究極砲撃(アルティメットバースト)をも超える程のものだと言う事はすぐに判断が出

来た。

マリン「アイツ、今度こそ本気で・・・・どうしよう!?」
ティガ達の力を受け継ぎパワーアップした自分達でもアレほどの破壊力を秘めるであろうあの攻撃を受けきれる保証はない。珍しく焦りの表情を見せるマリンだったがプリキュア達の不安を察した様な声が聞こえてきた。
???1「皆・・聞こえるか?」
ブロッサム達一同『!!!???』
???1「驚くのは無理がないが信じて聞いて欲しい。私はティガだ」
全員は当然どこから声がしたのだと辺りを見渡すが声の主は落ちつかせるように自分の正体を打ち明ける。
ブロッサム「ティガ!?」
マリン「な、何でティガの声が」
???2「ティガだけではないぞ。アースと」
???3「デュナミスだ」
サンシャイン「アースにデュナミスまで!?」
ムーンライト「・・・本当に貴方たちなの!?」
声の正体はプリキュア達に光エネルギーを与えた3人のウルトラマンであった。ブロッサム達は戸惑いを捨てきれないが。この閃きを今は信じるしかないと全員はアイコンタクトをしながら頷くとブロッサムが代表して口を開いた。
ブロッサム「分かりました、貴方達を信じましょう。教えて下さいシザースのあの技に対抗するにはどうすればいいんですか!?」
ティガ「方法は1つ。私達が与えた光エネルギーをブロッサム、マリン、サンシャイン、ムーンライト、ホーリーナイトに移すんだ」
ウルティメイトセイバー「光エネルギーをブロッサム達に!?」
セイバーの声に続いてアースが説明のバトンを受ける。
アース「そうだ、その後ハートキャッチミラージュとシンクロさせ

て一気に光エネルギーを解放すれば私達の力とプリキュアの力が真に融合する事が出来る筈だ」
デュナミス「そしてそれが成功すればアルティメットジェノキャンサーを完全に消滅する事が出来る。だがそれをすればブロッサム達の精神に多大な負担がかかる・・・成功するかは五分五分だし失敗すれば命の保証はない」
プリキュア『!!!!』
失敗すれば命を失ってしまうかもしれないほどのハイリスクな手段・・・だが迷っている時間など今の自分達には残されていない。プリキュア達は覚悟を決めた目をするとブロッサム、マリン、サンシャイン、ムーンライト、ホーリーナイトは胸に手を当てる。
ブロッサム「・・・私達は出来る事をするだけです・・・ティガ、指示をお願いします!!!」
もう今更逃げることなど許されない。ならば全ての希望をこの一撃に賭けるのみ・・・ブロッサムは凛々しくも力強く声を上げた。
ティガ「・・・そう言うと思っていたよ。ブロッサム達は前に出ろ!!!」
ティガはその言葉を待っていたと言う口調でそう言うとブロッサム達に前に出るよう指示を出す。
アース「セイバー達はブロッサム達の後ろに待機を!!!」
デュナミス「シプレ達はミラージュをブロッサム達に!!!」
シプレ・コフレ・ポプリ『はいですぅ!!!』
ティガ達の声に合わせてプリキュア達は動き始めシプレ達はハートキャッチミラージュをブロッサム達に渡してそれを受け取った5人は前に集まりその後ろにセイバー達7人はその後ろに集まる。
ティガ「今だ皆、全光エネルギーをブロッサム達に移せ!!!!」
準備は整ったとティガは合図を出す。
シザースサバイブ「まだ抵抗する気か・・・だが貴様らが束になろうともこの力で全てを打ち消してくれる・・・灰となれ!!!!」

シザースは自分の全闇エネルギーをアルティメットジェノキャンサーに送り込むとフラフラになりながらもその場に立ちそう言った。
腕を前に出して高らかに最後に攻撃の技名を宣言する
シザーズサバイブ「アルティメット・インフェルノ！！！！！！！」
放たれる青い閃光と衝撃波。究極砲撃（アルティメットバースト）の数倍の威力はある事はすぐに理解できた。
セイバー7人『私達の全ての思いよ光となって、ブロッサム達に届け！！！！！』
7人は手をブロッサム達にかざしティガ達の光と自分達の光のエネルギーをブロッサム達に注ぎ込んでいくとハートキャッチミラージュから眩いばかりに光が発せられると同時にウルティメイトセイバー達は光をブロッサム達に移した事で元の姿に戻ってしまう。
ブロッサム・マリン。サンシャイン・ムーンライト・ホーリーナイト『未来を造る希望の光よ、全ての闇をその光で照らせ！！！」
ハートキャッチミラージュと共鳴し5人は両腕を前に出すとシザースの闇の光線に向かって声を張り上げる。
ブロッサム・マリン。サンシャイン・ムーンライト・ホーリーナイト『プリキュア・ウルティメイトパワーソリューション！！！！！』
5人の両腕から金色の光のエネルギー波が放たれると究極地獄火炎（アルティメットインフェルノ）とぶつかり合う。
ブロッサム・マリン。サンシャイン・ムーンライト・ホーリーナイト『はぁあああああああああああぁあああああああああっ！！！！！！！！！！！』
シザースサバイブ「うぉおおおおおおおおおおおおおおっ！！！！！！！！！！！」
全てを賭けた光線のぶつかり合いを繰り広げられる最後の切り札のぶつかり合いはお互い譲らずらない。
シザースサバイブ「貴様らの光などこの俺の憎しみと怒りが粉砕する・・・この腐りきった世界を破壊し新世界を創造する為にぃ！！

！！！！！消えれされ愚かなる戦士共！！！！！」
シザースは最後の執念の力を怒りと憎しみに変え闇エネルギーを増幅させていく。光の波動が押し戻されるがブロッサム達は諦めない。
ブロッサム・マリン・サンシャイン・ムーンライト・ホーリーナイト『愚かなんかじゃない！！！！！』
シザースサバイブ「何だと！？」
セイバー「人は確かに愚かかもしれない・・・でもそれは全てじゃない」
ドリーム「間違っているって誰かが気づけば人は誰だって変われるの」
ルージュ「他者を思いやり助け合う事が出来ることだって出来る」
ローズ「そうやって少しずつでも良い方向に世界を変える事だって」
ピーチ「絶対に出来ると信じてる、だからこそ私達はそんな人々を守るために」
エルス「ボロボロになりながらも戦えるのよ！！！」
コズミック「それはシザース、君だって同じだ！！！」
シザースサバイブ「この俺が同じだと？」
マリン「そうだよ。アンタだってただ1人の人間じゃない！！！」
サンシャイン「ただ憎しみに捕らわれただけ・・・心の闇に呑みこまれてしまっただけなんだ！！！」
ムーンライト「でも人はやり直せる・・・何度だって絶望から立ち上がる事は出来るのよ！！！」
ホーリーナイト「絶望を乗り越えて光を掴む権利は誰にだってあるんだよ！！！！」
ブロッサム「だからこそ私達は貴方の心の闇を消し去りもう一度、光を掴んでもらうんだからぁあああっ！！！！！！」
プリキュア達全員の思いが集まり光の波動の中心が一瞬だけ輝くと闇を呑みこみ押し戻すほどの光が溢れ出てくると闇の波動を凄まじい勢いで押し戻していく。
シザースサバイブ「こ、この光は・・・何だ！？・・・何故これ

程の力が溢れ出てくるのだ・・・プリキュアよ・・お前達の力の源は一体どこから」

プリキュア達全員『はぁあああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！』

光は全員の意思とシンクロして全員の闘志が上がれば上がるほどその勢いも比例して伸びていく。そしてアルティメットジェノキャンサーと共にシザースの身体をを包み込み全てを呑みこんでいった。

シザースサバイブ「うわぁあああぁああああああああああああああああぁああああぁあああああぁあっ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

物凄い衝撃波と眩い光がシザースとアルティメットジェノキャンサーの負の感情を消し去っていく。そしてアルティメットジェノキャンサーは光の粒子となり消滅をし始める・・・・シザースには自分の目の前で兵器(アルティメットジェノキャンサー)のカラダが砕け散っていきバラバラに砕け散るのが見えた。最狂の兵器(アルティメットジェノキャンサー)の肉片は煙を上げている燃えカスの灰が崩れるのと同じように跡形もなく消えていく・・・・・。

シザースブラング「くっ！！・・・」

そしてそれと同時にシザースの金色の鎧は色を失い黒へと変色してしまっていた。ミラーライダーは契約モンスターを失うと全ての力を失ってしまうのだ。つまりもう完全に勝負は決した。

シザースブラング「・・・・・」

ブロッサム「（シザース、いいえ白夜太陽・・・今は辛いかもしれないけど必ずその先に光はあります。その光を貴方自身で掴んでください）」

第４６話地球解放軍編ＸＶＩ　「決戦～反撃開始！！プリキュア・ウルティメイト・ブラスト！！」

更新遅れて申し訳ありません（汗）
中々技の名前が決まらずに悪戦苦闘しておりました。

さて次回は遂に・・・・

次回もお楽しみに♪

第４７話地球解放軍編ＸＶＩＩ　「戦いの終焉」（前書き）

前回までのあらすじ～
最後の希望のウルティメットプリキュアはシザースとアルティメットジェノキャンサーを追いつめ形勢を逆転し始めた。
そして最後の攻撃のプリキュア・ウルティメットパワーソリューションがシザースとアルティメットジェノキャンサーを包み込んでいき憎しみと怒りを完全に消滅させた。

第４７話地球解放軍編ＸＶＩＩ　「戦いの終焉」

眩すぎる光で目が開けられなずそれと共に衝撃波にも等しい風が太陽(サバイブ)の身体に伝わって来た。シザース(シザース)は顔の前に手を置いてその風を防ぐ仕草をしながらも光がおさまると前を見た。そこには光り輝くウルティメットプリキュアの姿があり神々しい光に包まれた凛々しい姿があった。

シザースブラング「・・・・・くっ！！！」

シザースはただ呆然となっていた所だった今の彼は契約モンスターと共に完全に失われ鎧は光を失いただの飾りと大差はない。つまりは完全に勝負は決してしまったのだ。

シザースブラング「（俺の戦い・・・それは冤罪をきせられた父と亡き母の墓前に誓った新世界創造の為に経過(プロセス)・・・・プリキュア、それの邪魔となる貴様らを消す事が俺の目的・・・俺の新世界帝王の称号・・・・）っ！？？？・・・俺が負けた？」

震える手を上げながらも太陽(シザース)は自分が負けた現実を直視していた。膝をついて震える掌(てのひら)を見ながら・・・・そして気がつけば変身が解けてシザースの鎧から白夜太陽の姿となっていた。

太陽「俺の戦術に非などなかった・・・・全てにおいて完璧な手札がそろっていた筈・・・だが俺は負けた・・・・」

ブロッサム「・・・・・・・」

太陽の様子を見ながらも言葉が出ないブロッサム達。そして暫しの静寂の後ブロッサム達プリキュアのカラダが光を発すると３つに集まり３つの光は等身大サイズの人の形にへと変わっていくと徐々にその正体がはっきりとわかってくるようになるそう正体は３人のウルトラマンだ。ウルトラマンの姿が実体化すると同時にブロッサム達のプリキュアの変身も解けてつぼみ達の姿に戻った。

つぼみ「ティガ、アース、デュナミス・・・本当にありがとうございました！！！」

えりか「貴方達がいなきゃこの勝負は勝てなかったよ!!!!」
いつき「3人の光とっても暖かかった・・・助けてくれてありがとう!!!」
つぼみは頭を下げて礼儀正しくそう言いえりかといつきは感謝の視線を3人に贈った。ティガ達は振り返り頷くとそのままカラータイマーから光を放って姿を消した。

太陽「・・・・・」
負けた事に絶望のどん底に叩き落とされた太陽はゆっくりと立ち上がっていたがその様は下を向いて俯いた姿であり既に戦う覇気など完全に消え去っていたのは言うまでもないだろう。つぼみ達は彼にゆっくりと近づき会話が出来る距離までになる所で足を止めた。
太陽「勝機は完全に無くなった・・・殺せ」
もう覚悟は出来ていた。今の自分に残された道はただ1つだけしか無い事ぐらい・・・それはこの命を潔く散らす事・・・・《もう今の自分がこの世界で生きていても何の意味も持たない・・・ならばこのままいっそ楽に死ねたら・・・・このまま命を捨てて全ての重荷をすてされる事が出来ればどれだけ楽だろう?・・・もう俺を受け入れる仲間もいない。だったらもうこの場で・・・》・・・太陽は静かに目を閉じた。
つぼみ「・・・・・」
目を閉じた彼につぼみが近づいて行くとそのまま太陽の顔を思いっきり叩き飛ばしたのだ。その場にいた太陽を含めた全員の目が点になる。
太陽「っ!?・・・・」
つぼみ「今この場で貴方が死んで何の解決になるんですか?一体、誰が喜ぶんですか?・・甘えないで!!!!」
いつものつぼみらしからぬ行動に全員が動揺を隠せないがそんな周囲の心情などお構いなしにつぼみは口を動かす。
つぼみ「貴方が犯した罪は決して許される事じゃありません・・・

でもだからこそ生きて罪を償うんです・・・そして貴方自身が世界を変える未来を造り出すんですよ。今度は正しい方法で!!!」
太陽「・・・正しい方法だと?」
えりか「そうだよ!!・・・今度は誰も傷つけない方法で世界を変えようと努力してみなよアンタなりに我武者羅に突っ走ってさ!!!」
いつき「遠回りになるかもしれないけど夢を捨てなければ絶対に叶うよ。・・・だからもう一度頑張るんだ!!!」
ゆり「人には無限の可能性があるわ・・・今の貴方に何が必要なのかは自分で考えて行動しなさい」
アンナ「貴方は一度闇に落ちた・・・でも闇に落ちても人は何度だってやり直す事が出来る。だから闇と負けない勇気を持って!!!」

太陽「・・・・・」
つぼみ達の言葉を聞いて太陽は自分の頭の中で必死に考え始める・・・《今の俺に世界を変えることなど出来ようか?・・・一度は人である事を捨てて破壊新になったこの俺に・・・・・》
真夜「これから物凄く辛い事が貴方を待っているかもしれない・・・でもそれは貴方1人に背負わせたりさせないって彼女達が言いたそうよ?」
迷いが捨てきれない太陽の心中を察した真夜が後ろを向いてそう言った先には太陽の事が心配になりたまらず此処まで来た夏実達だった。
太陽「夏実・、勇治、耕輔」
夏実達は迷わず太陽の元まで走っていくと夏実は太陽に飛び付いた。顔は涙で濡れていて太陽のカラダから離れまいと力一杯抱きしめる。
夏実「よかった、本当に良かった!!!」
太陽「・・・夏実」
耕輔「太陽さん・・・・もう一度やり直しましょう」
勇治「今度は正しい道で・・・・人として」

夏実「私達は貴女にずっとついていきますから・・・だからもう一度0からリトライです
夏実は自分のカラダから離れようとしない様子を見て太陽は初めて人の笑顔を見せた。そして耕輔と勇治の言葉を聞いて太陽は吹っ切れた様に鼻で笑う。
太陽「ふぅん・・・夏実達にそう言われると俺が逃げ出すわけにはいかんか・・・いいだろう!!」
そして太陽は生気ある眼差しをすると自信にあふれた声でそう言った。その様子を見たつぼみ達も満面の笑顔となった。太陽にとっての闇を照らす本当の光は夏実達という仲間だったのかもしれない。

夕「ホントプリキュアって凄過ぎ・・・」
総司「ああ。俺達の想像を超える事を時にはやってのけるんだからな」
後ろで動けない総司達はそう言い合う。
大人「全くだよ」
夕「ひ、大人!!・・・琢磨に傑も」
動けない夕達に大人達が声をかけた。
琢磨「ったくよ~俺達が気絶している間にとんでもねぇ事をやりやがったみたいだな」
傑「見逃したのが惜しかったな」
夕「ホントよ。つぼみ達凄かったんだから♪」
大人「そうか・・・その話は後でタップリ聞かせてもらおうか・・・夕、立てるか?」
夕「・見て分からないかなぁ~?既に腰砕けで動けません!!!」
大人「ですよねぇ~ほれ肩貸すよ。」
琢磨「天道さんも大丈夫ですか?」
総司「すまんな」
夕と総司は大人達の肩を借りて何とか起き上がるとつぼみ達の元にゆっくりと向かう。そしてその後全員で悦びを分かち合うのだった

が・・・
？？？「くくく・・・・ははははは・・・・あーーーはははははは
はっははははっ！！！！！」
突然笑い声響き渡るとその空気は一気に壊されることとなった。声
のした方に全員の目線が集まるとそこには闇の支配者ことダークが
玉座の魔に座っていたのだった。
ダーク「プリキュア、ライダー共よ今回は負けを認めよう・・・・
だが忘れるなよ？私がいる限りこのような悲劇は何度でも繰り返さ
れる・・・・この私が世界を闇に包むその時までな」
ダークは戦いに敗れたと言うのに全くそれを気にしていない様子だ
った。そして立ち上がるとマントを靡かせて指を向けた。
ダーク「覚えておくがいい・・・コレは始まりにすぎん！！！」
ダークはそれだけ言うと黒い闇に包まれると姿を消した。
大人「上等だよ・・・ダーク。お前が俺達を闇で包もうと言うのな
ら俺達はそれを消し去る光になってやる！！！！」
大人の言葉に全員の結束は更に高まった。闇の支配者ダークとの決
戦の幕は上がり始めたのだ。遂に姿を現した全ての元凶との戦いを
プリキュア、ライダー、ウルトラマンの３戦士は乗り越える事が出
来るのだろうか！？

第４７話地球解放軍編ＸＶＩＩ　「戦いの終焉」（後書き）

次回で真夜以外のゲストキャラの活躍は終了となります。
夢原さんＧＡＳＨさん本当にありがとうございました！！！

ではでは次回もお楽しみに♪

第４８話地球解放軍編ＸＶＩＩＩ　「仲間の繋がり」（前書き）

前回までのあらすじ～
太陽の憎しみを消し去り地球解放軍の作戦を見事に打ち破った戦士達一同。ダークは最後に全ての始まりだと告げると姿を消すのだった。

今回でコズミック、ドリーム、ルージュ、ローズ、ピーチ、エルスの出番は終了となります。

夢原さん、ＧＡＳＨさんありがとうございました！！！

あと最初の方とうとう大人とつぼみが・・・・つぼみファンの方ゴメンなさい！！！

第４８話地球解放軍編ＸＶＩＩＩ　「仲間の繋がり」

全ての戦いが終わりバトルシップはＧＵＴＳによって回収されミラーライダーのカードデッキは大人達の手によって粉々に砕かれ永遠の闇へと葬られ太陽達は罪を継ぐうためにＧＵＴＳに拘束され裁判にかけられることとなった。

大人「ふぅ～」

そしてその数日後のある日曜日の昼下がり大人は希望ヶ丘市が見渡せるあの丘にいた。草原に横になりながら空を見上げて自分の気持ちを考えていたのだ。そして暫くすると・・・

つぼみ「・・・大人さん？」

大人「・・・来てくれたか」

現れたのはつぼみであった。つぼみはキョトンとした表情でありながらも横になっている大人を見下ろしながら声をかけると大人は起き上がる。

大人「わざわざ呼び出してすまないな」

つぼみ「いいえ。・・・それで話って言うのは？」

つぼみは大人に話があると言われて呼び出されたつぼみは少し緊張しているかのようだったが大人は普段から見せる笑顔を見せると彼女を落ちつかせる。

大人「前から言おうと思っていた事があるんだ・・・ずっと前から言おうと思っていた事が」

つぼみ「・・・・・」

二人は草原に座ると街と空を見る。いつもと全く変わらないこの景色。つぼみも幼い時はこの町に住んでいた。でも今となれば彼女にとってこの町は故郷であり大切な場所でもある。大人は自分の今の思いを言う場所は此処しかないと思いこの場所を選んだのだ。

大人「落ちついて聞いてほしい。俺は・・・上原大人は花咲つぼみの事が好きだ。だから君の時間を俺と共有する権利を俺にください

！！！」

つぼみ「っ！！！！！」

大人は勇気を振り絞り今まで隠していた自分の気持ちをつぼみに伝えた。つぼみは言葉が詰まり顔が真っ赤になる。だがすぐに大人の手を握ると。

つぼみ「はい。私も貴方の事が好きです！！！・・・だから私でよければ」

つぼみも彼の思いに応えるように今までにないほどの緊張を押し殺しながら自分の気持ちを伝えた。すると大人は彼女を抱きしめる。

大人「ありがとう。つぼみ」

大人は自分がウルトラマンティガである事がつぼみ達に知られるのが怖かった。だから今まで自分の気持ちを押し殺してずっと耐えてきた。でものぞみ達の言葉を聞いてそれは間違いだと気付いた。だからこそ大人は思いを伝えた。今度は自分の最大の秘密を彼女が受け入れてくれると信じて・・・。

そしてその次の日にのぞみ達が自分の世界に戻ると言う事になり大人達はお別れパーティーを植物園にて開くこととなった。

一同『かんぱぁ～い！！！』

久々のパーティー気分に大人達は心に余裕が出来る。この所は戦いばかりで気持ち的にもピリピリした事ばかりであったからこう言う事は久しぶりだ。

のぞみ「この世界ともうお別れかぁ～」

御子「なんか早かったよね。」

時間が流れていき夜も更けていくと月が出てきて月明かりが夜の街を照らす様子をバルコニーでのぞみと御子は眺めていた。たった１か月弱の出会いだったが物凄く懐かしく思えるのが不思議だ。のぞみ達は自分の世界に戻ったらまた戦いの日々が待っている。今度は自分達の戦いに決着をつけなければならない。明日には自分の世界に戻らなくてはならないという事を考えるとなんだかんだで少し寂

しいのかもしれない・・・・。
大人「何を言ってるんだよ」
其処に大人とつぼみがやって来た。
大人「君達が来なかったら今頃この世界は無かっただろう。感謝しているよ」
つぼみ「向こうの世界の私達にも宜しく言っておいてください」
御子「分かりました」
大人「あ、それとこれを」
のぞみ「これは？」
大人「太陽達が独自に解析したこの世界のブロッサム達ハートキャッチのメンバー、マスクドライダー、３人のウルトラマンの戦闘データだ。これをダークエンジェルスとの戦いに役立て欲しい」
つぼみ「この世界は私達が全力で守ります。だから貴女達は貴女達の戦いに決着を」
のぞみ「ありがとう。必ず終わらせます」

大盛り上がりになったパーティーも終わり翌日。
大人「元気でって言うのも・・・おかしいかな？」
のぞみ「そんな事ないですよ！！！。またこの世界に遊びに来ちゃいますから♪」
りん「んなわけないっしょ！！！」
のぞみのボケにりんのツッコミがすかさず入り周囲に笑いが起きる。
琢磨「向こうに戻っても頑張れよ」
傑「心配らいらないだろうけどね」
夕「身体にだけは気をつけてね」
総司「勇奈・・・残りの世界も頼んだぞ」
えりか「向こうの皆にも宜しくね！！！」
いつき「また遊びに来てよ。今度はそっちのボク達も呼んでさ」
ゆり「そうなると大盛り上がりね。貴女達も闇何か負けないように頑張りなさい」

アンナ「のぞみちゃん達の事は絶対に忘れないからね！！！」
大人「忘れないでくれよ。俺達は仲間だってこと」
つぼみ「離れていても繋がっています。この絆は絶対に切れません！！！」
皆それぞれ言葉を言い終える。最後くらいは笑顔でお別れをしようと涙をこらえながらのぞみ達は灰色のカーテンの様な空間に包まれるとそのまま姿を消したのだった。

その後数週間はダークによう攻撃はなかったが・・・・・・・・・・・・・・・。
つぼみ「（ティガ、アース、デュナミスと名乗ったあの声・・・・）」
えりか「（ただ聞き覚えがあるってわけじゃないよね？）」
いつき「（・・・・貴方なんでしょ？）」
つぼみ「（大人）」
えりか「（琢磨）」
いつき「（傑）」
つぼみ達はあの時の声の事が気にかかりある疑惑が出てきた。だがそれは信じがたいものであったためまだ胸の奥底にしまっておく事にする。もしも本当だったら・・・・・・・・。

第４８話地球解放軍編ＸＶＩＩＩ　「仲間の繋がり」（後書き）

これで地球解放軍編は終了となります。皆様の助言などもあり此処まで書く事が出来ました。
しかし始めて二カ月近くなっておりますが長編は大変です（汗）。
しかしティガ＆ハトプリはまだまだ続けていきたいと思いますので今後ともご期待ください。
さて次回は私のプライベートが忙しくなりますので今月は更新がかなり停滞するかもしれません。また中休みとして初のギャグ編を少し考えています。

では次回もお楽しみに♪

オリジナル設定～ミラーライダー編～

仮面ライダーシザースサバイブ

仮面ライダーシザースがオリジナルのサバイブー絶望ーの力を使って強化された姿。通常のシザースの数倍以上に強化されていて特に防御力はプリキュアやカブト達のクナイガンやパンチなどを何度も受けても傷一つ付かないほどである。また全ライダーの中でもステータスはマルチタイプでありオールラウンドに戦う事が出来。

『仮面ライダーシザースサバイブ　ポテンシャルデータ』

身長　１９８？
体重　　９８？
パンチ力　１９ｔ
キック力　２０ｔ
最大走力　１００ｍを３．２秒
ジャンプ力　５５ｍ
最高視力　３０Ｋ

甲召剣シザースバイザーツバイ
シザースバイザーが進化した姿。２つの刃を持つ剣となり強度と切れ味は鋼鉄やダイヤモンドをも砕くほど強力。

ストライクベント　シザースカタール　ＡＰ４０００

ガードベント　パーフェクトガード　ＧＰ６０００

ファイナルベント　メルトバブルバースト　ＡＰ１００００

『戦闘スタイル』

基本的にはカタールとバイザーによる近距離攻撃が可能であり更に持ち前の防御力を使い攻守一体の戦闘を得意としている。

契約モンスター　ボルナハトゥマー　ＡＰ９０００

ボルキャンサーの進化形態。２足歩行から完全な蟹の形態へと変化していてボルキャンサーの面影は既に全くない。防御力を受け継いだだけではなくキレ味が上がった鋏、更にはあらゆるものを溶かす強酸性の泡を出す事も可能となった。（ちなみにナハトゥマーとはドイツ語で絶望の意味である）

全長　１０ｍ

体高　５ｍ

体重　６００Ｋｇ

仮面ライダー王蛇サバイブ

仮面ライダー王蛇がオリジナルのサバイブー夢幻で進化した姿。元々攻撃的な性質であったがサバイブになる事で更に攻撃的となったがその分防御は捨てている形態である故に特殊能力を持つ敵とは相性が悪いため苦戦を強いられる事も多い。

『仮面ライダー王蛇サバイブ　ポテンシャルデータ』

身長　１９０？

体重　９０？（一応中の人は女性であるため体重は軽め）
パンチ力　１８ｔ
キック力　１５ｔ
最大走力　１００ｍを３．５秒
ジャンプ力　５０ｍ
最高視力　２５Ｋ

蛇召手甲ベノバイザーツバイ
メリケンサック型のバイザー。王蛇の強化されたパンチ力を更に高める事が出来る。

ストライクベント　ベノナックル　ＡＰ４０００
ソードベント　ポイズンブレード　ＡＰ５０００
ファイナルベント　ポイズントルネードクラッシュ　９０００

『戦闘スタイル』
毒の属性を活かして敵の動きを制限しながらも圧倒的火力で敵をねじ伏せるスタイルを得意としている。特にポイズンブレードの一刺しを受ければ毒が身体に回り１分以内に常人は即死してしまうほどの強力な毒を備えている。

契約モンスター　ベノヴァイパー　ＡＰ９０００

身長１５ｍ

体重４００Ｋｇ
王蛇の契約モンスターベノスネーカーがサバイブの力を受けてパワ

ーアップした姿。持ち前の毒牙や強靭な身体を使って敵をジワリジワリと追いつめていく戦法を得意としている。性格はパワーアップした事で更に凶悪なものとなった。

仮面ライダーガイサバイブ
仮面ライダーガイがオリジナルのサバイブー破滅を使ってパワーアップした姿。防御力はシザースを下回るもののかなり高くなっていて更にパワーは全ライダーでもトップレベル。動く要塞とも呼んでも過言ではない。しかしシザースとは違いパワーは高いがスピードでは劣る。

身長２００？
体重１００Ｋｇ
パンチ力２５ｔ
キック力２５ｔ
最大走力１００ｍを４．５秒
ジャンプ力３０メートル
最高視力２８Ｋ

突召機槍　メタルバイザーツバイ
槍とドリルの機能を持つバイザー。ガイのパワーを最大限に生かす事であらゆる敵のドテッ原に風穴を開ける事が可能。

ストライクベント　メタルクロー　ＡＰ３５００
ガードベント　　メタルガードナー　ＧＰ５０００
コンファインベント
ファイナルベント　ヘビーメタルクラッシャー　ＡＰ９０００

『戦闘スタイル』

スピードでは劣るが強力なパワーで敵をなぎ倒し攻撃を鎧で跳ね返すスタイルを得意としている。またコンファインベントのカードもまだ使える為ある程度なら敵の攻撃を無力化する事も可能。

契約モンスター　メタルエンパイア　ＡＰ８５００
メタルゲラスが進化した姿。２足歩行から４足歩行となりトリケラトプスにも似た外見。スタミナは全モンスターでトップレベルで赤く光る眼に映るあらゆる敵をプラチナよりも硬いツノで薙ぎ倒す。

身長９ｍ
体重６００キロ

仮面ライダーライアサバイブ
仮面ライダーライアがオリジナルのサバイブー破壊ーの力を得て進化した姿。全ライダーの中で唯一シュートベントの能力を持ち遠距離でも近距離でも戦う事が出来る。また視力が高く狙った獲物を狩るまで逃がす事はない。

身長２００？
体重１００Ｋｇ
パンチ力１８ｔ
キック力２０ｔ
最大走力１００ｍを４．５秒
ジャンプ力３０メートル
最高視力４０Ｋ

シュートベント　エビルキャノン　ＡＰ３０００
ソードベント　エビルウィップブレード　ＡＰ　４０００
コピーベント
ファイナルベント　ジャノサイド・ビックバン　ＡＰ　８０００

『戦闘スタイル』
遠距離と近距離の両方のスタイルで戦う事が出来る。またエキソダイバーの帯電能力を使い雷撃の属性攻撃を行う事が出来る。

契約モンスター　エキソダイバー　ＡＰ７０００
エビルだダイバーの進化形態。見た目こそはあまりエビルダイバーと大差はないが能力は大きく向上していて敵に雷撃の属性攻撃を行う事も可能。

全長８ｍ
体重３００Ｋ

究極甲獣？蛇帝　アルティメットジェノキャンサー　ＡＰ４５００００
身長２０ｍ
体重１ｔ

サバイブで進化した４体のモンスターが融合した姿。手と腹にはボルナハトゥマー、首と顔、尻尾はヘノヴァッパー、足と頭の鎧はメタルエンパイア、甲殻の下の翼はエキソダイバーという構造になっている。４体のモンスター全ての属性を備えている

アルティメットシュート　ＡＰ３０００

滅びのビックバンバースト　ＡＰ５０００

アルティメットバースト　ＡＰ３００００

アルティメットインフェルノ　AP450000

第４９話「夏祭りは恋を呼ぶ」（前書き）

ほのぼの恋愛＆日常パートの番外編と言っておきましょう。

＊恋愛系が苦手な人にはお勧めしません。

第４９話「夏祭りは恋を呼ぶ」

地球解放軍事件からあっという間に月日は流れて２ヶ月後の７月上旬。日差しは強くなりセミの鳴き声がうるさく響くようになって正に夏という雰囲気が溢れ出ていた。

大人「あぢぃ～」

猛烈な太陽の光が降り注いで肌を焼くのを感じながらも大人は１人自分の家にいた。この暑い中何処にも出かける気力など起きるわけがないのは当たり前だ。というか大人は季節では夏と梅雨が嫌いなのだ。

大人「も、もう嫌だ！！！。なんでこんなに暑いんだよぉ～・・・・地球温暖化のせいか？にしても暑すぎるっての！！！」

ハーフパンツにタンクトップというだらしのない格好で１人彼は愚痴をこぼしながら冷蔵庫にある水を取り出してがぶ飲みして一気に飲み干した。しかしそれでも暑さは和らぐことなどなかったのは言うまでもないだろう。

大人「・・・エアコン入れようかな～。でないと蒸しまんじゅうになっちゃいそうだぜ」

一応エアコンはあるのだが彼はあえて使わなかった。というのもエアコンを使用した時の電気代はバカにならずただでさえ今はお金がかかっている為そこまで回す余裕などはないのだ。というのも今の大人のお金の使い道と言えば１つしかないのだが・・・・。だがこのままでは熱中症になりかねないとたまらず大人はエアコンのリモコンに手を伸ばす。

大人「ん？・・・つぼみからメール？」

扇風機の風とうちわを仰いで作られる風を浴びながら体温を下げているとつぼみからメールが来た。内容を見てみると。『今日お祭りがあるので皆で行きませんか？えりかやいつき達も来るみたいですよ♪』という文面だった。

大人「あ、そう言えば今日はお祭りだったな・・・どうせ暇だし行くか」
大人は思いだした。そう言えばこのバカみたいに暑い季節と言えば夏祭りのシーズンではないかと言う事を・・・夏は嫌いではあるが楽しみの1つではある。そうと決まればいつまでもダラダラしてはいられないと行動に移す大人は着替える。

大人「待ち合わせ場所は此処だったな・・・しかし・・・俺達しかいないとは（汗）」
メールに書いてあった待ち合わせ場所に大人達男性陣は集まっていた・・・のだが肝心の女性陣の姿がなかったのだった。
琢磨「にしても言いだしっぺ達は遅いな・・・」
傑「色々と準備があるんじゃないか？」
大人「準備って・・・何だ？」
琢磨「さぁ？」
総司「（お前ら察する力が足りんな・・・）」
そんな会話を続ける事10分後に遠くから聞き覚えのある声が聞こえた来た。
大人「来たようだな・・・遅かった・・・！！！」
3人は声がした所に目線を集めるとそこには夏らしい涼しげな浴衣姿のつぼみ達の姿があった。
大人・琢磨・傑『・・・・・・』
つぼみ「・・・ちょと3人とも？」
えりか「ど、どうしたの？」
自分達の浴衣姿を見て固まっている大人達に声をかける女性陣。いつまでたっても反応がないので夕が3人の頭を叩くとようやく3人は反応し始める。
大人「・・・いや、その似合いすぎてて言葉が出なかった」
琢磨・傑『・・・うん』
男性陣の素直な反応につぼみ達は笑い声を零す。そして全員はお祭

りの場所に向かう。ちなみに妖精達は人形のふりをして一緒に行くこととなった。

大人「うわぁ～人が多いな」
つぼみ「ホントですね。しかも周りはカップルだらけです」
現地に着くと各自自由行動となった。つぼみと大人は手をつなぎながら辺りを歩く。お祭りという事もあり人はかなり多い。暫くすると金魚すくいの屋台を発見する
大人「お、金魚すくいか・・・やってみる？」
つぼみ「いいですね。あ、どうせならどっちが多く捕まえるか競争しません？」
大人「・・・いいだろう♪でも手加減はしないぞ？」
つぼみ「望むところです！！！」
何やらカップル同士での金魚すくい対決が始まった・・・そしてその対決の結果はというと・・・・
つぼみ「うぅ～負けちゃいました」
大人「言いだしたのに弱いなつぼみ（汗）って俺もそんなに威張れるほどの結果じゃないけど」
と言っても2人とも金魚すくいはあまり得意ではなく結果は大人が2匹でつぼみが1匹というものであった。
金魚すくい屋を後にするとつぼみの機嫌直しに大人は杏子飴を買ってやるとようやく機嫌が良くなった。大人は少し我儘なお姫様を世話しているかのような気分だったがとても楽しかった。

えりか「うわぁ～綿飴だぁ・・・イカ焼きもあるじゃん♪」
琢磨「えいかは食いしん坊だな・・・そんなに沢山買えないだろ？」
えりか「ふぇ？・・・奢ってくれないの？」
えりかは琢磨の方を見てねだるように見つめるが琢磨は3秒で即答した。
琢磨「んなわけあるか！！！。第一、俺はお前の財布か？」

えりか「冗談だってば～」
実は半分は本気で奢ってもらおうと思っていたのであったのだがそれを言うと琢磨に怒られると思いえりかは悪戯っ子の様に笑顔を見せて誤魔化す。そんなえりかの態度を見て琢磨は自然と顔が笑顔になった。
琢磨「お前はそう言う所が何故かいいんだよな・・・何故か心が落ちつくんだよ」
えりか「え？」
琢磨「・・・独り言だから気にするな」
琢磨は無意識に出た言葉をえりかに聞かれるとそう言って誤魔化す。だがえりかにはハッキリ聞こえていたようで少し嬉しそうな顔になっていた。そしていつの間にか2人は手をつないでいた。

いつき「傑さん頑張ってぇ！！！」
傑「よぉ～し・・・今度こそ。・・・行くぞ！！」
いつきと傑はと言うと輪投げ屋の前にいた。いつきがぬいぐるみに一目ぼれしてしまったのを察した傑が輪投げに挑戦していたのだが中々上手く決められず既に4回目の挑戦となっていた。そして結局は屋台の店主のお情けでいつきのお目当てのぬいぐるみはもらう事が出来たのだが傑は面子が立たず落ち込んでいたのだった・・・・・。
傑「・・・・うぅ～」
いつき「そ、そんなに落ち込まなくても（汗）・・・お目当ての物は手に入ったんだし・・・・あ、あははは（大汗）」
いつきのフォローにならない言葉を聞いて更に落ち込む傑。暫くして機嫌を直そうといつきが傑にたこ焼きを買ってきた。流石の傑もいい加減に引きずるのは止めたのか機嫌が元に戻っていた。
傑「本当は・・・俺がとってあげたかったんだけど・・・はぁ～情けないな」
いつき「・・・その気持ちだけでもボクは嬉しいですよ」

傑「・・・ありがと」
いつきの笑顔を見ると傑は吹っ切れたらしく再び祭りの道を歩き始める。

アンナ「うわぁ～凄い、凄い！！！」
ゆり「アンナったらあんまりはしゃじゃ駄目よ」
アンナは初めて見るお祭りの光景に大興奮していた。彼女にとっては何もかもが始めてみるものであり興奮が抑えきれないのは当然かもしれない。そんな彼女についていくゆり。ゆりにとっても夏祭りは久々であり無意識に楽しんでいるのだった。
夕「そう言うゆりも珍しく楽しそうじゃん？」
ゆり「ふふふ・・・バレちゃってた？」
真夜「見ればバレバレよ？」
アンナ「3人とも早く！！」
アンナは歩みが遅い3人を急かすようにそう言うと先に進んでしまう。ゆり、夕、真夜はアンナを見失わない様に近くに駆け寄る。

えりか「うん～おいひい♪」
えりかはやっぱり琢磨に奢ってもらっていて綿飴を食べているのだった。琢磨も自分の分を頬張りながら隣にいるえりかを見ていた。
えりか「ん？・・・どうしたの？」
琢磨「い、いや・・・その」
えりか「何よ？・・・らしくないわね」
なにやらいつもと違う様子の琢磨にえりかも戸惑うが琢磨はふとあの時の約束の事を聞く。
琢磨「覚えてるか？あの時の約束の話」
えりか「・・・日本一周とジャケットの話？」
琢磨「ああ。その、どうせならさ・・・えりか、俺はお前の事が・・・」

琢磨は言葉が詰まる。自分の気持ちは恐らく本物である。だけど自分の秘密がバレるかもしれない・・・だが心は彼にその事を忘れさせる様に言葉をつづけさせた。
琢磨「俺はお前の事が好きだ。」
えりか「・・・・・」
えりかは琢磨の告白に言葉を失う。普段の彼女なら考えられないほど動揺した顔だったがすぐに笑みを浮かべると・・・。
えりか「アタシで・・・いいんだね?」
それだけ聞き返すえりか。琢磨は何も言わずに頷くとえりかは笑顔を見せて「いいよ」と言った。どうやらえりかも琢磨の事を想っていたらしくいつもとは違う笑顔を見せて琢磨を受け入れた。

いつき「そろそろ花火の時間ですね。とっておきの場所があるからそこに行きません?」
傑「?・・・ああ」
なにやらいつきの様子が急に違う事に気がついてはいたが特になにも聞かなかった。
それから5分後に2人は花火がよく見える地元では有名な場所についた。周りはカップルだらけであり傑は場違いではないかと思うほどではあったがいつきが手をつないできた。
傑「いつき?」
いつき「あの・・・その・・・ボクは・・・いや私は・・・」
傑「・・・待ってくれ。そこから先は俺に言わせてほしい。」
いつきの言葉を遮ると傑は言葉を続ける。せめてこう言う時ぐらいは自分がと持っての事であった。
傑「・・・いつき、俺は・・・いつの間にか君を仲間以上な気持ちが芽生えた。その気持ちはこう言う事なんだと思う。だから俺と・・・付き合ってくれ」
自然と言葉が出た・・・驚くぐらいに。其の後ベストタイミングで花火が夜空を照らす。

花火の音「ヒュ～～～～～～ッ！！・・・・・パァアアアン！！！！」

夜空に色とりどりの花火が夏祭りに来ている全ての人の心を照らす。
その光はただの爆発でしかない筈なのに人の心はその美しい光で癒されていく。

つぼみ「うわぁ～綺麗です」
大人「正に夏の風流だな」

えりか・琢磨『たまやぁ～！！』

アンナ「アレって花火？」
ゆり「そうよ・・・綺麗ね」
夕「ホントだね」
真夜「ふふっ♪」

夏を象徴する花火は多くの出会いと見ているのかもしれない・・・・
夏祭りは恋を生み新しい出会いも生み出す正に魔法の様なものであるのかもしれない・・・・これは戦いの本の合間の休息と恋の物語（ストーリー）である。

第４９話「夏祭りは恋を呼ぶ」（後書き）

恋愛パートいかがだったでしょうか？・・・一度こう言うのをやってみたかったので書いてみました♪
ちなみに天道は・・・・別行動です（汗）

他にもご要望があれば書いていこうかなと思います。

さて次回は・・・夏と言えば海、海と言えば・・・・・・

次回もお楽しみに♪

第５０話「思いのこもった贈り物」（前書き）

今回から数話にかけてちょっとした番外編をお送りしたいと思います。

えぇ～ただし・・・非常にカオスになる可能性がありますのでソコはご容赦を。そして苦手な方はご遠慮を

第５０話「思いのこもった贈り物」

大人の家に琢磨達が集まっていた。彼ら大学生も夏休みになり折角の夏休みをどのように使うかを話し合っていたのだった
大人「旅行？」
夕「そう。せっかくの夏休みなんだしさ～何処かに行こうよ！！！」
夕は旅行のパンフレットを大人達に見せるのだった。パンフレットの内容はビーチが近くにある貸しペンションのレンタ内容であった。
琢磨「へぇ～結構いい感じじゃん？しかも安い」
夕「でしょ！？しかも団体様割引ってのもあるからさらに安くなるんだって」
傑「それは凄いなぁ～」
夕は力説して3人を説得するかのようにであったが大人は唐突に口を開いた。
大人「でもさ、旅行中に怪獣とか出たらどうすんだ？あのダークって奴があのまま引きさがるとは俺には思えない」
その一言で全員は口を閉じる。たしかにその通りであった。
琢磨「まぁ～でもさ、たまには息抜きしないと・・・この所は怪獣も減ってきているし」
確かに最近は怪獣の出現は減少傾向にあった。地球解放軍の時のように全くいなくなったのではないが怪獣の急襲が無くなってきているのは確かだ。
夕「そうだよ～偶にはアタシ達も羽を休めないと身体や精神が持たないわよ」
大人「・・・・」
確かにティガになったからというものまともに心安らぐ日々など今までなかった。ギリギリの中を戦いぬいてきた事を考えると休息は確かに必要だ。だが万が一という事があるのも事実だ。
傑「大丈夫だって。もしも敵が出てきたもクロックアップですぐに

現地に行ける・・・だろ？」
大人「・・・・そうだな。なら偶にはこう言うのも悪くない」
夕「じゃあ決定！！！」
大人は傑の意見を聞き入れたまにはいいだろうと夕の提案を受け入れた。そうときまれば色々と準備をするぞと夕は張り切り始める。

その頃海底では・・・・
ダーク「闇の力は先の解放軍達のお陰で大分集まった・・・・あと少しだ、あと少しで邪神は完全なる復活を遂げる・・・そして兄さんを取り戻せるのも」
玉座の間にてダークは一人でそう呟いていた。先の戦いでシザース達の心の闇のエネルギーをかなり集める事が出来た。そのお陰で自分が考えていた以上に邪神復活の為のエネルギーが集まりあと少しで邪神復活も近い。不気味に笑い声を響かせながら次の作戦を考えていたのだが突然闇の扉が出現し中からキリエロイドが出てきた。
ダーク「キリエル？・・何しに来たんだい？」
異世界に闇エネルギーの調達に行かせたはずのキリエルがノコノコと戻ってきた事に腹を立てたようにそう問うダーク。するとキリエルは一礼して跪く。
キリエル「ダーク様、ドクタークレイズの殉職によって欠員が出た幹部に入りたいと申し出たモノがいるのですが・・・・」
ダーク「幹部に申し出？・・・・ふぅん、通せ」
キリエル「はっ！！！」
ダークは面白いと新幹部候補を通させるとそこには3人組の影があった。
ダーク「君達、名前は？」
？？？1「はっ。我らは騙す事なら宇宙一『漆黒の翼』という団体でございます。そのリーダである私ザラブ！！！」
？？？2「漆黒の翼？2に漆黒の怪盗ヒマラ！！！」
？？？3「？3にして怪獣使いのチャリジャ！！」

ザラブ「3人揃ってっ、我ら漆黒の翼！！！」
3人の宇宙人トリオは自分達で考えたであろうカッコイイと思われるポーズをとっていくが・・・・・。
ダーク「漆黒の翼？・・・聞いたことないね」
ダークのその一言に3人の宇宙人トリオはその場にずっこけて倒れてしまう。その様を見てダークは少し不安になったが使える手ごまが欲しい彼にとっては丁度いいと思うのだった。
ダーク「で？君達は我々の軍団で欠員が出た幹部の仲間に入りたいと言うんだね？・・・だったら条件がある。・・・なぁに簡単な事さ。コイツらを消してくれればそれでいいんだ」
ザラブ「コイツらが・・・例のウルトラマンとプリキュアですか？」
ダーク「そうだ。私がこの忌々しい海底に封印されることとなった元凶だ。コイツらを倒せたなら私は君達を喜んで幹部として迎え入れようではないか」
ダークは指を鳴らすとそこに大人達た映し出された。そしてティガ、アース、デュナミスに大人達が変身する姿、つぼみ達プリキュアの戦闘シーンが映し出され今までの戦いのデータをザラブ達に見せる。
ザラブ「お安いご用で・・・この程度の餓鬼どもなど我々が必ずやこの世から消し去って御覧に入れましょう」
ダーク「そうか。期待しているよ？・・・漆黒の翼の諸君」
ザラブ達はお安い御用だと意気揚々と引き受けると闇の扉をくぐって姿を消した。
キリエル「ダーク様、奴らごときに倒せるとは思えませんが？」
キリエルは疑問だった。何故あの程度の小物をわざわざ差し向けたのかと。するとダークは鼻で笑いながら答えた。
ダーク「まあ、そうだろうね？・・・でも余興には丁度いいだろう？それに闇エネルギーが集まる事にさえ貢献してくれればそれだけの利用価値はある」
ダークは冷徹にそう言い放った。例えティガ達を倒せなくても多少は闇のエネルギーが手に入れられる。その程度でも役に立ちさえす

ればあの程度の存在など彼にとってはどうでもいいのだ。

翌日。

大人「さてと旅行は来週の月曜日だったな。しかし、どうしてスイカが俺の担当なんだろうか・・・」

旅行まであと一週間であり大人が持っていく担当の者はなぜかスイカという事になっていた。海となれば必然的に持ち物は決まってくるので夕が割り振ったのだった。スイカを買いに行こうと出かけよう外に出ると家の近くにアンナの姿があった。

大人「アンナ？・・・どうしたんだい？こんな所で」

何事だと思い大人はアンナに声をかける。

アンナ「大人・・・ちょっと相談があるんだけどいいかな？」

大人「相談？どうしたんだよ改まって」

何やらかなり深刻そうな表情であるアンナ。もしかしたら何か重大な悩みを抱えているのかもしれないと大人は自分でよければ快くそう言う。

アンナ「実は・・・・」

何やら真剣な表情をしながら相談の内容を離し始める。この事で大人はつぼみにちょっとした誤解を受ける事になるのだが・・・・。

つぼみ「んん～♪いい天気ですね♪」

えりか「だけど暑っ～」

つぼみとえりかも同じく夏休みを迎えており久しぶりに2人で買い物に行くこととなった。

つぼみ「言いだしたのはえりかですよ？早く行きましょうよ～」

暑さにだらけるえりかに呆れたような顔になりながらもつぼみはえりかの手を引っ張りながら目的地のショッピングセンターへと向かう。そしてしばらくすると2人はショッピングセンターに着いた2人は色々なモノを見に回るのだった。

えりか「これと、これかなぁ～。お、水着の新作だって～ちょっと見てこうよぉ！！」

つぼみ「えぇぇ!?・・・べ、別に水着なんていいじゃないですか」
えりか「なぁ～に言ってんのよ・・・夏と言えば海なんだからちゃんと用意しとかないと～」
えりかは強引につぼみの手を取っていくとそのまま水着コーナーへと進んでいく。
えりか「うわぁ～色々あるね～・・・おぉ～こういうのとかセクシーじゃない?」
えりかは色々な水着をみながら唐突に黒い色のビキニを取り出す。
つぼみにそれを合わせるとつぼみは何故か顔が少し赤くなる。
つぼみ「そ、そうですね（大汗）こ、これなんかも・・・可愛いですよね?」
最初は嫌そうにしたいたのだが満更でもないようでありなんだかんだで好みの柄の水着をそれぞれ1つずつ買ってしまうのだった。
つぼみとえりかは久々のショッピングをエンジョイするが・・・ふとつぼみの視界に信じられない光景が目に入った。
つぼみ「・・・・・」
えりか「ん?つぼみ～どうしたの?」
つぼみの動きが突然止まった事に気がついたえりか。つぼみが見ている方向を見てみるとそこには何と大人とあアンナが一緒にいる決定的場面があった。
えりか「ひ、大人にアンナじゃない・・・何で2人がこんなとこに!?」
流石のえりかも驚いたのか開いた口がふさがらなかった。するとつぼみは大人とアンナがいる方に見つからないように近づいていく。
えりか「ちょ、つぼみ!?」
突然動きだしたつぼみについていくえりか。つぼみの様子が明らかにおかしくなった事もあり心配が隠せないが。
大人「・・・・・・」
アンナ「・・・・・」
大人とアンナはアクセサリーショップで何かを話し合っているよう

だった。外から見れば2人は正にカップル同士であるのだがつぼみは信じられなかった。

つぼみ「（大人・・・なんでアンナと一緒にいるの？）」

つぼみはアクセサリーショップの外からその様子を見ていた。大人がまさか自分を裏切るようなことなどするわけがないと信じてはいたが今の大人の行動は・・・・・。つぼみは手を振わせながらも声をかける勇気が出ずただ見ることしかできなかった。

えりか「つぼみ？・・・」

つぼみの近くで同じくその様子を見ていたえりか・・・つぼみと大人が付き合い始めたことはつぼみから聞いたばかりである為えりか自身も信じ難かった。だが今の2人の行動はまるで・・・。えりかはつぼみの手を取るとその場から離れる。

つぼみ「え、えりか！？」

えりか「違うとこに行こうよ、あれは他人の空似だって！！！」

つぼみ「いいえ。アレは間違いなく大人とアンナです・・・あ、2人がお店から出たようですね。えりか、2人を追いかけますよ！！！」

えりか「あ、ちょ、つぼみ！！！」

今は取り合えず別の所に行こうとつぼみにそう言うがつぼみは聞き入れなかった。アクセサリーショップを2人が出たのを確認するとつぼみはえりかの制止を振り切るように2人の後をつけ始める。何やら2人は会話をしているようだが見つからない距離を保っている為つぼみ達には内容までは聞こえなかった。

つぼみ「・・・・・」

えりか「つ、つぼみ～やっぱり止めようってば。ちょっとつぼみ！？」

壁によりかかりながらも追跡を続ける2人だったがつぼみからは何やら凄まじい勢いで異質なオーラが放たれていて壁に罅が若干入っている。

つぼみ「えりか・・・ちょっと黙ってて・・・？」

えりか「つ、つぼみが怖いっ・・・」
普段なら滅多にこんな事は無いのでえりかはつぼみが放つ戦慄の様なものに恐怖してしまい目に涙を浮かべて震えてしまうのだった。
アンナ「今日はありがとう大人♪」
大人「大した事は無いよ。家まで送ろう」
つぼみ「・・・・・」
つぼみは2人のやり取りを見てどす黒い嫉妬オーラが前回になる・・・後ろでえりかは怖々とそれを見ているのだった。

???「見つけたぞ!!!」
そんな2人にいきなり声を掛けられた。なんとその正体は漆黒の翼の例の3人組だ。
つぼみ・えりか『!?』
チャリジャ「貴様ら、ハートキャッチプリキュアのキュアブロッサムとキュアマリンだな!?」
えりか「何よアンタ達!?」
ザラブ「我々はダーク様の名を受け貴様らの命を狙うモノだ!!!。貴様らには悪いが此処で死んでもらおうかぁ!!!」
ザラブ達3人はそう言うと構えを見せて2人に近づいてくる。つぼみ達には今シプレ達がいないので変身は出来ない・・・ヤバい状況だと思ったえりかだったのだが・・・。
えりか「つぼみ!?」
つぼみは何やらどす黒いオーラを出しながら漆黒の翼3人衆を睨みつけるように鋭い眼光を放っていく。それを見た3人は威圧感と戦慄の様なものに恐怖してしまい動く事が出来なくなってしまう。
ヒマラ「ちょ、な、何だお前?」
つぼみ「すみません・・・私、今ちょっと物凄く気分が悪いんですよ・・・だから貴方達3人には申し訳ありませんが・・・・」
ザラブ「な、何っ!?」
目と鼻の先までつぼみとの距離が縮まった。そして次の瞬間に3人

はつぼみの恐ろしさを知ることとなった。
つぼみ「何処かに吹っ飛んでください！！！！！」
つぼみは3人に近づくとオーラを纏った拳で3人を殴りつける。
ザラブ・ヒマラ・チャリジャ『ぎゃぁあああああああああああああっ！！！！！！！！！！！』
なんとつぼみは素手で3人をふっ飛ばしてしまった。3人は空に飛ばされると夜でもないのに星のように輝くを放ってそのまま消えてしまった。
えりか「う、嘘ぉ！？」
プリキュアになってもいないのにあんな凄まじいパワーを出せるとはとえりかは驚きが隠せず声をもらししまう。だが驚いている暇をつぼみは与えてくれなかった。
つぼみ「あぁ～もう！！あの3人のせいで大人を見失ってしまいました。えりか、追いかけますよ！！！」
えりか「う、うん（汗）」

えりかはどうツッコミを入れていいかわからずそのままつぼみにリードされるまま大人達を探すが見つける事は出来なかった。そして無情にも時間だけが過ぎて行った
えりか「つぼみ・・・・」
つぼみは落ち込んでしまい今にも泣きそうになっていた。えりかは意を決したかのような顔をするとつぼみの肩に手を置いて正面からつぼみの顔を見る。
えりか「こうなったら大人にこの写真を突き付けて本当の事を聞きだそう！！！。コソコソしても前に進めないよ！！！」
つぼみ「えりか・・・・・・はい！！！」
こうなったら本人に直接聞き出すしかないとえりかは思いきった事を提案する。そして2人は意を決して大人の家の前まで着いた。時刻は夕がたで夏の夕日が辺りを照らしていた。
つぼみ「・・・・・っ」

つぼみは大人の部屋の前にきてチャイムを鳴らす手が止まってしまった。やはり怖いのだ・・・もしも大人がアンナと関係を持っていたら・・・信じたくはないがその為には大人を信じる為の絶対的な確信が欲しい。心臓が爆発しそうなのだが恐怖故に実行できない。
そんなつぼみの手にえりかの手が乗せられた。
つぼみ「!?・・えりか?」
えりか「つぼみが本当に大人を信じてるなら絶対に大丈夫だって」
つぼみ「はい!!」
1人だったら此処までは出来なかっただろう。えりかの存在はやはりつぼみのとっては大きい存在だ。つぼみは意を決してチャイムを鳴らす。
大人「はぁ〜い・・・つぼみ?、えりかまで。どうしたんだ?」
つぼみ「大人・・・話があるんですがいいですか?」
大人「話?」
大人は何やらいつになく真剣な態度のつぼみに大人はわけが分からなかったが。
大人「で、・・・話って何?」
つぼみ「たまたま見てしまったんですけど・・・今日アンナと一緒にアクセサリーショップにいましたよね?」
大人「っ!!」
えりか「正直に答えてよ・・・なんでアンナといたのよ?しかも楽しそうに」
大人はつぼみ、えりかの詰め寄ってくる態度になにやらバツが悪そうな態度になる。やはりつぼみの思っている通りという事なのか?
つぼみは今までにないぐらい緊張してしまう。
大人「見てたならしょうがないか・・・実はな、アンナに今日偶々会って相談したい事があるって言われてさ」
つぼみ「え!?」
えりか「相談!?」
大人の言ってきた答えに2人は思わず目が点になった。それを無視

しながら大人は話を続ける。
大人「そう。アイツゆりに何かプレゼントしたいらししくてな。それでその相談を俺にしてきたんだよ」
つぼみ「じゃ、じゃあアクセサリーショップにいたのは」
大人「俺がアクセサリーでもどうだって言ったらアンナが『だったらどんなものがいいかな?』って聞いてくるもんだからさ近くに会ったあのアクセサリーショップによって一緒に選んであげてたんだよ。・・・おい2人ともどうしたんだ?」
つぼみ・えりか『・・・・・・』
説明が終わるとつぼみとえりかは固まっていた。全ては自分達の勘違いであったのだと頭の中で整理すると恥ずかしくて堪らなかった。特につぼみは泣きそうになったのにそれがただの勘違いとなるともうどうしようもなかった。
大人「あ、まさかつぼみ・・・お前」
つぼみ「う、う、うぅぅっ!!!」
大人「えっ!?・・ちょ、つぼみ!?」
なんとつぼみは溜まっていた感情が爆発して泣き始めてしまった。
大人とえりかは慌ててつぼみを宥めようとアタフタする。そしてしばらくするとつぼみはやっと泣きやんだ。
大人「・・・ご、ゴメン・・・とにかくゴメンなさい!!」
大人はつぼみに土下座した謝った。理由はともあれ自分が泣かせてしまったのだから悪いの自分だと反省し必死に謝った。
つぼみ「グス・・・いいいですよ。もう〜心配した私がバカでした!!!!」
えりか「ホントだよ〜。もう金輪際(こんりんざい)、誤解を招くような事はしないでよね!!!!(怒)」
大人「は、はいっ!!!き、肝に銘じておきます!!!」
大人はそう言うとつぼみとえりかは笑った。もう完全に誤解は完全になくなった。大人はどうにか2人の機嫌がよくなった事にホッとするとカバンから何かを取り出した。

大人「・・・つぼみ、こんなタイミングで悪いんだけど」
それはラッピングされているプレゼント用の箱だった。つぼみは何だろうと思いそれを開けてみると中にはピンク色の石が装飾されている花の形をしたペンダントだった。宝石には「ＴＨ」のエンブレムがあった。
つぼみ「これは？」
大人「あのアクセサリーショップで買った物だよ。今、流行ってる花型のペンダントってあそこの店長さんに勧められたんだ・・・つぼみに似合うと思ったんだけど・・・どうかな？」
大人は少し照れた表情になりながらどうだろうかとつぼみに聞く。
つぼみは素直な感想を一言言った。
つぼみ「・・・綺麗」
ペンダントは本当に綺麗だった。つぼみが一番大好きな色のピンク色の石はさっきまであった感情を洗ってくれるかのようだ。
えりか「いいなぁ～！！！」
大人「これで機嫌を直せとは言わないよ。でもつぼみに宣言するよ・・・もう二度とお前を悲しませない！！！・・・えりかが証人だ」
大人はつぼみにそう宣言した。もう二度とつぼみを悲しませる真似はしない。それはいつか離すと気が来るであろうあの力の事も含まれているのかもしれない。
えりか「あ、アタシが！？」
大人「此処にいるんだからいいだろう？」
えりかは思わずそう突っ込んだが大人はえりかのツッコミをそう受け流した。だがその後つぼみとえりかは大人に誤解を与えた罰として手作りパスタを作らせたりと大人を色々とこき使う事になるとはその時の大人は思いもつかなっただろう。
今回はとんだ事で一騒動起きだがそれはつぼみと大人の絆を確かめる機械であったのかもしれない。大人はつぼみの意外な一面を見る事が出来てうれしい半面怒らせたらひどい目にあうと確信するのであった。

第５０話「思いのこもった贈り物」（後書き）

話の都合により前回の予告とは違ってしまいました。
次回はえりか＆琢磨編に突入します。。勿論あの３人組も・・・・・・

ではでは次回もお楽しみに♪

第５１話「ザラブの罠・・・ニセえりか参上！！」（前書き）

＊今回はキャラ崩壊が激しいです。特にえりかが・・・・・・

それでも大丈夫な方はどうぞ～！！！

第５１話「ザラブの罠・・・ニセえりか参上！！」

大人と傑は琢磨に旅行の打ち合わせに琢磨に家に来たのだが其処に現れた琢磨はというとなぜか包帯でグルグル巻きになっていた。
大人「琢磨・・・お前どしたの？」
大人は琢磨の家の玄関前で思わず絶句してそう問う。目以外は顔や身体に包帯が巻かれていてまるでミイラ男だ。琢磨は疲れたような目つきになりながらも大人達を招き入れる。
琢磨「まぁ、入れよ・・・話は中でするからよ」
大人「あ、ああ。」
傑「お、お邪魔します」
何やらただ事ではない空気ではあった。一体、琢磨の身に何が起きたと言うのだろうか！？
琢磨「話は今から数時間前にさかのぼる・・・とにかくひどい目にあったんだよ！！！！」
琢磨の部屋で取り合えず琢磨は泣きながら自分に降りかかった悲惨散々珍騒動劇を大人と傑に語り始めたのだった・・・・。
話の本編は今から数時間前の事。
琢磨「さてと俺の担当は花火とかのお遊びグッズか・・・何処で買うとするかな」
琢磨は夕に頼まれた物を買いに行く為に外に出ていた。夏の定番と言えば花火だろうがそれだけでは面白くない・・・やはり何か１つ捻った物が欲しいのだが何がいいのかが思いつかない。何がいいかなぁ～と考えながらショッピングセンターに足を運んでいたのだった。
琢磨「う～ん・・・やっぱりあれしかないか？」
無い知恵を絞って考える琢磨は何やら思いついたらしい。花火を購入した後、彼は何やら白い布生地などを買いあさるのだった。

ちなみにその頃の海底ではというと・・・・
ダーク「全く・・・君達に期待した私がバカだったかな?（怒）たった数分で帰って来やがって・・・」
ダークに怒られているのはあの漆黒の翼の3人のバカ・・・・ごほん、宇宙人トリオであった。
ザラブ「ナレーション、うるさいぞ!!!（激怒）」
失礼。とにかくこの3人が怒られている理由は前回つぼみとえりかを奇襲したと思ったら僅か数秒でつぼみに素手で殴り飛ばされてそのまま何の活躍も無しに昼間にしか見えないお星様になったからであった。
ヒマラ「だ、ダーク様・・・お願いします今一度だけ我等に汚名返上のチャンスを!!!」
ダーク「ふぅん・・・・まあいい。今は少しでも邪神復活の為に闇エネルギーが欲しい所だ。好きにするといいさ」
ダークはため息をつくと仕方がないとばかりにそう言う。今は利用できるものは何度も利用したい・・・役に立ちそうは無いがやむを得ないとダークは心にそう決めた。
ザラブ「あ、ありがとうございます!!!（泣）今回こそは必ずやぁ!!!」
そう言うと3人は闇の扉を潜りそのまま現実世界へと向かうのだった。
キリエル「（アイツら・・・・本当に大丈夫か?）」
キリエルは内心心配になるのだったがその不安は的中することになった・・・・。

その頃えりかはというとコフレ共にファッション部の夏休み活動物資の調達の為に色々と買い出しに出ていたのだった。ちなみに今日はリボンやビーズなどの装飾品を目当てに買いに行っているのだったえりか「～～♪」
コフレ「えりか、買いすぎですよ」

えりか「しゃーないでしょ～今日は思った以上にいいものが手に入っちゃったんだから」
目当てのビーズやリボンがかなり手に入ったのでかなり上機嫌であったえりか。今日は何やらついているぞと思ったのか鼻歌を歌っていた。その陰にはあの3人組の影があるとは誰も思いつかないだろう・・・・。
ザラブ「いたぞ・・・キュアマリンと妖精だ」
ヒマラ「今は1人みたいだな」
チャリジャ「どうする？・・・妖精だけだったら造作もないし今すぐにでも襲って片付けるか？」
3人組はえりかの姿を見つけるなりどうするかを話し合っていた。
ザラブ「いや・・下手に手を出したらまたお星様ってことになりかねん」
ヒマラ「じゃぁ～どうすんだよ！？」
どうやら3人組はつぼみに素手で飛ばされた事がかなりのトラウマになっているようだ。するとザラブは何かを思いついたように手を叩いた。
ザラブ「私にいい考えがある・・・いいか？ゴショゴショゴショ」
ザラブは2人の耳に手を当てて離し始める。話を聞いた2人は薄気味悪い笑い声を浮かべながらえりかに近づいていくのだった。
えりか「さぁ～てと今日はこんなもんかなぁ？・・・早く帰ってつぼみから借りた映画を見ないと♪」
コフレ「また夜更かしですか？」
えりか「うるさいなぁ～」
えりかはコフレと話しながら上機嫌に帰路を歩いていたがその目の前に突然チャリジャとヒマラがえりかの前に現れた。
えりか「あ！！！・・・アンタ達はつぼみに素手で殴り飛ばされたヘタレ怪人！！！」
ヒマラ「だ、誰がヘタレ怪人だ！！（激怒）」
チャリジャ「お、俺達は漆黒の翼だ・・・覚えておけ！！！」

えりかの発言に怒るヒマラとチャリジャ。あの衝撃的な出来事があればヘタレの烙印を押されても仕方ないかもしれないが・・・。
ヒマラ・チャリジャ『ナレーション黙れぇ！！！（怒）」
ごほん・・・失礼。
コフレ「な、何か変な奴らです（汗）」
えりか「・・・漆黒の翼だか虫歯だか知らないけど（呆）とにかくアタシに何の用？」
何かいつもの敵とは違い調子が狂うえりか。取り合えず用があると言えば自分を倒すぐらいしかないだろうが何故か聞きたくなったのでそう問う。すると後ろからザラブの影が・・・。
ザラブ「お前を人質にしに来たのだよ！！！」
えりか「っ！？」
何やら声がしたと思ったその瞬間に鈍い音が頭から響いていきた。
そうザラブが後ろからえりかの後頭部を殴りつけるとえりかは気絶してその場の倒れてしまう。
コフレ「え、えりかぁ！！！」
チャリジャ「貴様も来い！！！」
コフレ「う、うわぁあ〜〜〜っ！！！！」
その後コフレも袋で身体を覆い被されてしまった。２人はマヌケ・・・失礼。漆黒の翼に捕えられてしまうのだった。

その数十分後・・・。
えりか「・・・こ、此処は・・・何処？」
何やら見知らぬ天井が見える。起き上がるとそこは牢屋だと言う事が分かった。
えりか「こ、コフレ、大丈夫？」
となりにはコフレが倒れていた野を見つけるとえりかは声をかける。
幸い気絶しているだけであったがえりかは一気に機嫌が悪くなった。
？？？「お目覚めかな？」
えりか「っ！？・・・」

声がした方を見てみるとそこには何と自分とそっくりいや瓜二つの人物が牢屋の外に立っているのだった。
えりか「あ、アンタ誰よ!!!」
えりか（？）「ふふん・・驚いたか？・・・これがザラブの変身能力だ」
なんとその正体はザラブであった。自らが得意とする変身能力でえりかに擬態して成り澄ましたと言う事なのだ。
えりか「アタシに化けて何するって言うのよ!?」
いきなり襲われたと思ったら自分に変身されたとなるとえりかは黙っているわけがなく大声を上げてそうザラブに問いただす。すると笑い声を上げながらヒマラとチャリジャも姿を現した。
ニセえりか「何って・・・貴様の仲間を1人ずつ血祭りにあげるのさ!!!・・・仲間に殺されるとなるとその絶望は計り知れないからな・・・そうなれば我々はダーク様に認められ新幹部として迎え入れられるのだ!!!」
これがザラブのやり方なのだ。信頼する仲間に化けて心を許した隙をついて確実に倒す。卑劣極まりない・・・だがえりかはその言葉を聞くと笑い始めた。
えりか「ふふふ・・・はははは・・・アンタ達さぁ～アタシ達を舐めてるでしょ？」
ヒマラ「何っ!?」
えりか「そんなニセモノ何かにアタシの仲間は騙されないわよ!!!」
えりかは堂々とドヤ顔を浮かべながらそう言った。すると宇宙人トリオは途端に挙動不審となるがザラブは冷静さを取り戻すと。
ニセえりか「ふん、何とでも言うがいい・・・すぐに貴様のその自信を粉々にしてやるわ!!!」
そういうとニセえりかは姿を消す。残された2人はえりかの見張りをする事になった。

琢磨「やっぱり夏と言えば肝試しっしょ！！！これで幽霊グッズを作ったら大ウケ間違いなし♪」
琢磨が考えたのは肝試しの幽霊グッズだったのだ。これでつぼみ達を脅かしてやろうと言うちょっと意地悪ではあるが定番と言えば定番のものだ。
琢磨「さてと・・・幽霊と言えばあの魂が抜けたような感じのあれとミイラ男っているのもありだな・・・あとは火の玉とかもあるな・・・ふふふ、だんだん考えるのが楽しくなったきたぞ」
琢磨は意地悪タップリの目になりながら家に帰って早速グッズ作成に取り掛かろうと張り切っていた。
ニセえりか「琢磨ぁ～！！」
琢磨「？・・・あれ、えりかどうした？」
後ろから声がしたので振り返ってみるとそこにはザラブが変身したニセえりかがいた。
ニセえりか「偶然ね、その荷物どうしたの？」
琢磨「え、あ、ほら今度の月曜に皆で出かけるだろ？その時に使うやつだよ」
ニセえりか「（ほう、コイツら此処を離れるのか・・・覚えておこう）あ、そうか。にしても重そうだね～1つ持ってあげるよ♪」
琢磨「あ、ありがとう」
琢磨はいつもと何か違うえりかに少し戸惑うがまあいいかと一緒に歩くのだった。
その様子を漆黒の翼の秘密基地にあるモニターから見ていた本物のえりかはというと・・・・
えりか「・・・・・」
ヒマラ「意外と単純だな？お前の仲間とやらも・・・」
えりか「（た、琢磨のバカぁ！！！）」
琢磨が少しヌケている事は分かってはいたがまさか此処までとは・・・・えりかは拳を作ってプルプルと震えさせて怒りを溜めこみ始める。

琢磨「・・・なんか今日は優しいな?・・・どうしたんだ?」
だが流石の何かえりかの様子がおかしい事に感付き始めるが偽物はそうはさせるかとすぐに演技を始める。
ニセえりか「え?そんな事ないわよ~」
琢磨「ホントか?・・・いつもなら荷物なんか持ってくれないよな?」
ニセえりか「(こ、コイツ男の扱いが悪いのか)」
琢磨「・・・さては俺にまた何か集ろうとでももしてるのか?」
琢磨は少しニセえりかにカマをかけるようにそう言うがザラブは何かいいセリフを考える・・・暫くして男なら言ってほしいであろうセリフを考えついた。
ニセえりか「そんな事ないよ・・・ただ琢磨が大変そうだなって思って・・・いつもいつも私は自己中心的な事言ってるからさ・・・偶にはこれ位しないって思って」
琢磨「えりか・・・(な、なんだ今日のえりか無性に可愛い・・・こ、こんな奴だったけ?)」
えりか「コラぁ琢磨ぁ、アタシはそんな事言わんぞぉ!!!なぁ~にデレデレしとんじゃぁあああ!!!!!!!!」
コフレ「え、えりか怖いです(汗)」
えりかは琢磨の普段以上にデレデレした態度に怒りのオーラを燃えさせていく。その威圧感にコフレは一歩引いてしまう。
ヒマラ「お、女って怖いな」
チャリジャ「あ、ああ。これは宇宙共通なのかも知れん」
見張りをしていた2人もその怒り狂う容姿を見てかなりビビっていた。今にも檻を破って暴走しそうなライオンの様なその姿を見てビビらない方がおかしいと言うものだ。
琢磨「・・・え、えりか・・・お前、ホントに今日は優しいな~いつもなら人使い荒くて図々しくて一緒にいるのが少し疲れるんだけ

ど（汗）」
ニセえりか「言ったでしょ?今日ぐらいは優しくさせてよ♪・・・だって琢磨は色々大変じゃない?」
琢磨「え、えりか／／／／／」
琢磨は完全にこのえりかがザラブが変身したニセモノであると言う事に気がつこうとしない・・・その様子を見ていた本物のえりかはとうとう・・・。
えりか「海より広いアタシの心も・・・此処らが我慢の限界よぉ！！！！・・・コフレぇ！！！プリキュアの種！！！」
とうとうえりかは堪忍袋の緒が切れたらしくココロポットを取り出すとコフレにマリンの種を出すように言う。
コフレ「あ、あわわわ・・・は、は、はいですぅ！！！（泣）」
コフレは怯えながらも種を召喚していきそれをえりかの手に渡す。
えりか「プリキュア・オープンマイハート！！！」
そしてそのままそれをココロポットに装填していく。それを見た見張りの2人はえりかから変身アイテムを取り上げる事を忘れていた事に今更気が付く
ヒマラ「し、しまった！！！」
チャリジャ「や、ヤバい！！！」
2人はダッシュでその場から逃げだしてしまう。もはや完全にマヌケとしか言いようがない失態だ。
マリン「海風に揺れる1輪の花、キュアマリン！！！」
マリンは高らかに名乗り上げるとそのまま檻を蹴り飛ばして壊していき基地から脱出する。

琢磨「～～～♪」
ニセえりか「（早くコイツを始末しなければ・・・よぉ～し今が絶好の機会だな）」
そろそろ本性を出そうとザラブは琢磨に手を伸ばしていく・・・・首を絞めてやるつもりだ・・・。

マリン「ちょぉ〜〜〜っと待った！！！！」
琢磨「え？」
だがその前に本物のえりかが変身したマリンが琢磨の前に現れた。
琢磨はえりかが2人いる事に驚愕してしまう。
マリン「よくもアタシに化けてくれたわね！？」
マリンは今まで怒りをニセえりかに向けるがにせりかはすぐに琢磨の後ろに隠れる。
琢磨「え！？・・・ど、どういう事だ！？」
ニセえりか「騙されないで！！偽物はアイツよ！！！」
琢磨「はいっ！？」
琢磨はわけが分からず混乱してしまう。業を煮やしたマリンがニセえりかに向かってマリンシャワー発射する。
マリン「あぁあ〜〜〜、もう！！！これじゃ埒が明かない。いい加減に正体を見せなさいっての！！！マリンシュート！！！」
ニセえりか「ぐぉおっ！？？？」
マリンシュートのダメージによりとうとうニセえりかはザラブの姿になってしまう。これには流石の琢磨も驚いた。
琢磨「な、なんじゃこりゃぁあああ！！！！！！！」
急いで偽物から離れる琢磨。ザラブはアタフタとなりながら何とかしようと考える。
ザラブ「あぁ〜〜っ！！！（汗）あとちょっとだったのにぃ〜〜〜〜」
アタフタしているザラブにマリンが近づいていく・・・その様は鬼のように恐ろしく戦慄は半端なものではなかった。
マリン「プリキュア・お星様パンチ！！！！！」
ザラブにありったけの力で拳をぶつけるとつぼみに飛ばされた時のようにザラブは綺麗に宙を舞っていく。
ザラブ「ぎゃぁあああああああああああああああっ！！！！！！！！！！！！！！」
そしてそのまま技名どおりにお星様となって昼間の空に輝きを放っ

て消えていくのだった。
琢磨「な、なんていうパワーだ（大汗）・・・・あ、ありがとうマリン。・・・あれ、マリン？」
琢磨はお礼を言うがマリンは何も言わずにそのままえりかの姿に戻る。後ろではコフレがガクガクと震えているのが見えた。
えりか「たぁ～くぅ～まぁ～？」
琢磨「は、はい！！！」
何やらいつもと物凄く違う様子に琢磨も身体に震えが走った。振り返ったえりかの顔は笑ってはいるが物凄い戦慄を威圧を放っていた。
琢磨「あ、あわわあわ・・・あぁ・・・わわわ（泣）」
えりか「・・・恋人なら一番最初にニセモノって気が付くよね？なのに鼻の下伸ばしていつも以上にデレデレしちゃってさぁ～・・・ていうかアタシの事をあんな風に思ってたんだぁ～！？（パキペキ）」
えりかは指をならしながら琢磨に近づいていく・・・琢磨は動けないまま震えが止まらないのだった・・・そしてその数秒後には・・・。
琢磨「いやぁあああああああああああっ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」
琢磨の断末魔にも似た悲鳴が希望ヶ丘中に響き渡るのだった。・・・・
琢磨「というわけなんだ（汗）」
これが冒頭に琢磨が包帯グルグル状態になった経緯であったのだ。
大人「な、成程。そ、それはお大事にとしか言えないな（お、女って怖い）」
傑「・・・し、しかし良かったじゃないか。その程度で済んで（い、いつきだったら俺・・・死んでるな）」
２人も琢磨の話を聞いて身体から震えが止まらなかった。３人が恐

怖に震えていると誰かが来たらしくチャイムが鳴った。来客はなんと・・・えりかだった。
琢磨「・・・・ゴメンなさいっ！！！！」
琢磨は途端に土下座して謝った。えりかはそれを見てドヤ顔をしながら頷いている。
えりか「・・・もういいって」
琢磨「は、はいっ！！！」
琢磨の姿を見て大人と傑は琢磨がどれだけひどい目にあったかを想像するのも恐ろしかった。
大人「・・・じゃぁ、俺達はこの辺で（汗）」
傑「お邪魔様でした～」
2人は逃げるように帰っていた。琢磨の静止する暇も与えてくれ無いほど高速でありまるでクロックアップのごとく迅速であった。
琢磨「あ、あわわあわわ」
琢磨はこの後何をされるかと思うとこわくてしょうがなかったが・・・。
えりか「ったく。あの2人も気を使わなくてもいいのに♪」
そう言うと何やらケーキの箱を取り出すえりか・・・琢磨はそれを見たとたんに緊張が解けた。
琢磨「・・・・はぁ～」
えりか「何よ?また苛められるとでも思ったの?」
琢磨「だ、だってぇよぉ～（汗）」
えりか「もういいって言ってるでしょ?・・・ほら一緒に食べよう♪」
琢磨「は、はい・・・」
琢磨はえりかのいう事を黙って聞く事にした。今回の琢磨の珍事件はその後・・・大人達の間では伝説となったのだった。

そのころのあの3人組は・・・・。
ザラブ・チャリジャ・ヒマラ『ぎゃぁあああああぁあああああ

あっ！！！！！！！』
ダーク「何なんだい君達は？・・・・全然役に立っていないじゃないかぁ！！！！」
なんとダークのお仕置きを受けていた。電撃によるお仕置きによって3人は肩こりが取れた・・・らしいが・・・
ザラブ・チャリジャ・ヒマラ『んな問題じゃなぁいいっ！！！！！・・・ギャァアアアス！！！！」
果たして彼らに未来はあるのか？

第５１話「ザラブの罠・・・ニセえりか参上！！」（後書き）

カオスすぎる・・・・

えりかファンの方ゴメンなさい！！！

次回は傑＆いつき編です。

ではでは次回もお楽しみに♪

第５２話「真夏日の空夢ー前篇ー」（前書き）

＊今回もカオス回となっております・・・苦手な方はご注意を。

第52話「真夏日の空夢1前篇1」

えりかによって琢磨がボコボコにされてミイラ男となった日の数日後には準備が完了し大人達一行は夕が予約したペンションへとはるばる向かっていた。その場所は電車で2時間ほどの場所でありペンションの近くに海と山があり遊ぶには正に天国と言ってもいいほどであり普段の町の生活で曇った心が癒されるかのようだった。

大人「ん〜〜〜っ・・・風が気持ちいいねぇ〜」

琢磨「だなぁ。凄く気持ちがいい」

傑「同感」

荷物を持ちながら大人達3人は山と海から吹いてくる風を身体にいい浴びて伸びをするとすがすがしい気分になった。ウルトラマンになってからこんなに心が休まる日などなかった。キリエル、バルタン、ドクタークレイズ、地球解放軍・・・そしてそのすべてを束ねている闇の支配者ダークとの闘いでギリギリの闘いをプリキュアや仮面ライダーフェアリーと言う仲間（パートナー）と共に戦ってきたから無理はない。

つぼみ「本当ですね!!。ふぅ〜空気が美味しいです」

つぼみが3人と同じように伸びをしながら空気を腹いっぱい吸いこんでいく・・・するとえりか達も荷物を持ちながら自分達に近づいてきたのが見えた。

夕「なぁ〜に物思いにふけてんのよ?折角来たんだし思いっきり楽しもうよ!!!」

そしてその秘密が彼女達にばれるのではないかと恐怖もしながら日々を過ごしていた事も3人の心に大きな重圧（プレッシャー）となったいた事も紛れもない事実・・・常人ならばとてもではないが耐えられない重み・・・そんな事を考えていると夕の言葉で現実に引き戻される3人・・・この夏休みぐらいタップリ楽しみもうと3人は荷物を持ってペンションへと向かう。

大人「つ、ついたぁ～」
駅からは少し離れていたので２０分程度歩いた一行。蝉の声が山から響き海からは潮の音が聞こえてくる・・・一行は荷物を部屋に運ぶと先ずは貸しペンションの掃除だと備え付けの掃除道具を使い掃除を始める。
琢磨「安い理由が分かった気がするかも・・・まさか掃除まで俺達がするなんて」
安さの理由は利用契約にあった。なんと此処の掃除は借主が全て行うものであったのだ・・・そうとなれば安くせざるを得ないしそこまでさせておいて高かったら誰も利用などするわけがないのだ・・・。全員部屋の隅々を掃除したまりにたまった埃などの汚れを掃き取る・・・そしてその後１時間もすれば粗方は綺麗になった。
傑「だいぶ綺麗になったな。・・・ふあぁ～眠い」
９人がかりでペンション中のあらゆる場所を綺麗にしたのでかなりの重労働であったために疲労もそれなりに溜るし傑はこのキャンプの準備をしていた事もあり前日は寝不足であった。
大人「傑、お前寝てないのか？」
傑「ああ。ちょっと大学のレポートやゼミ論文とかを一気に片付けてたからな・・・若干、寝不足気味だよ・・・」
徹夜で論文とレポートを片づけた傑はかなり眠気がしんどかった・・・電車の中でも思わず熟睡してしまうほどだった
傑「やばい・・・ホントにしんどい」
大人「大丈夫か？・・・しんどいのなら部屋で休んでろよ。夕食の買い出しは俺達がしてくるからさ」
傑「すまん・・・頼めるか？」
思わずフラフラになってしまう傑・・・そんな彼に気を使ったのか大人、つぼみ、夕、琢磨の４人がが今夜と明日以降の食糧、その他の生活必需品を近くのスーパーで買い出しを行うことになり残りは留守番と言う事になった。
傑「じゃ、俺は少し昼寝するよ・・・何かあったら起こしてくれ

～」
いつき・えりか・アンナ『はぁ～い』
ゆり「ご飯が出来るぐらいには起こすからゆっくり休んでおきなさいよ」

迷わず傑は割り振られた自分の部屋のベットに直進してそのままベットに転がり込んでいく。そして深い眠りについていくのだった・・・。

ザラブ「んふふふ・・・・」
ヒマラ「おいザラブ・・・本当にオフ中の奴らを襲うのかよ？」
全く同じ頃にえりかにパンチで飛ばされたザラブ率いる例の漆黒の翼の一行も大人達が旅行に出かけると言う事を知ってコソコソとついて来たのだった。
チャリジャ「しかしこのまま帰ったらまたダーク様に怒られるぞ・・・今度は電撃3時間だけでは済まされん（汗）」
ザラブ「そうだ・・・我々が幹部になる為にも手柄を立てて置かねばならんのだ！！！・・・それに今回は秘密兵器があるのだ！！」
ヒマラ・チャリジャ『秘密兵器～？』
ザラブが取りだした兵器・・・もとい何かの機会のようであったそれは一体何なのだろうか？

傑「・・・あれ？此処は・・・・何処だ？」
気がつくと傑はペンションの外にいた・・・目の前には綺麗な青い海が広がっている・・・さっきまで自分はペンションのベットで眠ろうと思っていたのに・・・・周りを見てみると後ろから聞き覚えのある声がしてきた。
？？？「傑ぅ～！！！」
傑「？・・・いつき・・・か？」
振り返るとそこには五木の姿があった。いつもの彼女の姿が・・・

・傑は冷静になって考えてみる。そうだ今の自分はいつきに大切な話があると言われて浜辺に来たのだった。

いつき「待たせちゃったね・・・・」

傑「い、いや・・・で、話ってなんだい?」

夏祭りの日から傑といつきは距離が一気に縮まった。・・・・あの日から・・・まだ全然時間はたっていない・・・あの夏祭りから・・・・

いつき「傑・・・今度はボク・・・いいえ私から言わせてほしい事があるの」

傑「言わせてほしい事?」

一体なんだろうと傑は頭を傾げる。いつきは一度深呼吸をすると思い切って傑に告白する。

いつき「私と・・・結婚して下さい!!」

傑「・・・・えぇえええええええええっ!!!!??」

まさかの衝撃発言であった。確かに今の自分達は付き合ってはいるが・・・・いきなり結婚だなんて・・・流石の傑も戸惑いが隠せない。

傑「ちょ、ちょっと待ってくれ!!!・・・・・・」

とりあえず冷静になろうと頭の中で必死に状況を整理する傑・・・今はとにかく落ち着こうと深呼吸を始めながら心を落ち着かせる。

傑「・・・俺でいいのか?・・・本当に俺なんかで」

改めてそう聞く傑。もしも本当にいつきが本気で自分の事を想っていて共に人生を歩みたいと言うのなら・・・いつきは彼の言葉に頷いた。これで本当に後戻りは出来ないと確信した・・・がいつきは何やら何か伝えなければならないと言いたげな顔になっている

いつき「その・・・結婚にはちょっと問題があって」

傑「も、問題?」

何やらかなり大事であるらしくかなり真剣な顔となっている。傑は徐にいつきに問い掛ける・・・するといつきは重く閉じている口を開いた。

いつき「実は明堂院家には古くからの伝統があって・・・結婚する際には明堂院家が出す試練を制覇しないといけないんだ」
傑「試練？」
まるでよくある漫画のような展開に戸惑いが生まれる傑・・・まさか本当に現実でこういうがあるなどとは思いもしていなかったから無理はないだろう。しかし傑だっていつきの事を想っているのは同じ事・・・こうなれば試練だろうが何だろうが受けてやると心に決めた。
傑「ふぅん・・・試練だろうが何だろうが受けて立ってやる・・・・で、その試練とやらは何処で受ければいいんだい？」
いつき「実は明堂院家には古くからの伝統があって・・・結婚する際には明堂院家が出す試練を制覇しないといけないんだ」
傑「試練？」
まるでよくある漫画のような展開に戸惑いが生まれる傑・・・まさか本当に現実でこういうがあるなどとは思いもしていなかったから無理はないだろう。しかし傑だっていつきの事を想っているのは同じ事・・・こうなれば試練だろうが何だろうが受けてやると心に決めた。
傑「ふぅん・・・いいだろう受けて立ってやる・・・・で、その試練とやらは何処で受ければいいんだい？」
もう覚悟は決まった。此処で逃げれば勇気を振り絞ってくれたいつきに申し訳が立たない。どんな試練だろうが何でも受けてやろうといついに強い視線を送る。
いつき「そう言ってくれると思ってたよ。じゃあ皆には内緒で希望ヶ花に戻ろう」
傑「分かった」
怒涛の急展開となってしまった。２人は旅行中ではあるが最早そんなことなどどうでもよくなってしまった・・・とりあえず２人は急いで希望ヶ花市にまで戻ることになった。
２時間ぐらいかかるのでついたのは夕方の６時ぐらいと言ったとこ

ろだ・・・そのまま2人は明堂院家に足を運んでいく。
傑「（一体どんな試練があると言うのだろう?）」
明堂院亭に入るとその中はかなり広くて庶民からすれば小さいお城のようにも思えるほどだ・・・とりあえず先に進もうと2人は歩き出す。

???『フハハハハハハハハッ!!!!!』
しばらく歩くと突然笑い声が聞こえてきた
傑。いつき「!?」
突如してきた声の主の正体を探す・・・・・。すると何処からか2人組が現れた。1人は赤いカブトの仮面もう1人は青いクワガタの仮面をしている・・・まるでカブトとガタックのようであった。
???1「来たようだな・・・明堂院家の試練を受けるものよ」
???2「先ずは我々が相手をしよう」
傑「試練って戦いかよ（汗）・・・ていか誰だ貴様ら!!!」
仮面戦士達「我々は血統でいうならばいつきの義理兄に当たるものだ・・・貴様がいつきが惚れたという男か?」
傑「だったら何だ?ていうか・・・試練ってまさか・・・」
まさかと思いつついつきのほうを見る傑・・・・
いつき「そう・・・私と傑が協力して四天王達を全員倒さないといけないの・・・受けてくれる?」
いつきは済まさなそうにそう言う。本当はこんな事したくはない・・・だけどそうしなければならないらしい・・・傑は一度ため息をつくといつきに笑みを返す。
いきなり現れた謎の2人組・・・どうやら試練とは四天王ポジションのような輩と闘わなければいけないようだ.
傑「まるで漫画だな・・・いつき、行くぞ!!!」
いつき「はい!!!」
もう今更迷っていられるかと傑は持ってきていたライダーベルト、いつきはパヒュームを取り出す。

傑「変身！！！」
いつき「プリキュア・オープンマイハート！！！」
そして2人は変身し戦士の姿となる。仮面の2人は変身し終わった事を確認すると・・・・
カブト仮面の男「行くぞお！！！」
クワガタ仮面の男「貴様の実力溜めさせてもろうか！！！」
変身し終わると同時に2人の男がダークカブトとサンシャインに向かって走り出すがすぐに応戦するべくダークカブトはクナイガンをサンシャインはタンバリンを取り出し応戦を開始する。

ダークカブト「はぁあっ！！！（この手ごたえ何処かで・・・ていうかこのカブトの仮面ってアイツにそっくりだ）」
ダークカブトは赤いカブト仮面の男のと戦いながら何処かがアイツに似ているとふっと思う。まさかな？・・・やつが・・・そう思いながらもクナイガンで男の身体を斬りつける・・・がカブト仮面の男「はぁあああっ！！！！」
ダークカブト「グォっ！？」
男はクナイガンを弾くとそのままダークカブトに数発パンチを入れて彼を吹っ飛ばす。地面に転がってしまう・・・ダークカブトはすぐにクナイガンの射撃で攻撃するが紙一重で避けられる。
ダークカブト「は、早い！？」
サンシャイン「はぁあああああっ！！！！！」
クワガタ仮面の男「でやぁあああああああっ！！！！！」
その頃サンシャインはというと青いクワガタの仮面を被った男と格闘線で戦っているところだった。一進一退の攻防でありお互いに優勢を取ろうと譲らない。
サンシャイン「はぁ、はぁ、はぁ・・・強い！！（でも、この戦闘スタイル何処かで見覚えが）」
クワガタ仮面の男「・・・・・」
この男もカブト仮面の男と同じ戦闘スタイルが誰かに似ている・・・

・サンシャインはそう考えながら戦いを続けるが中々相手が隙を見せる事がない為思う様に進める事が出来ない。
ダークカブト「このままじゃ埒が明かないな・・・・サンシャイン、俺に1つ手があるが・・・乗るか？」
サンシャイン「作戦でも思いついたの？」
ダークカブト「ああ、成功する確率は五分五分といったところだが多分大丈夫だ・・・いいか、やつらが攻撃を仕掛けた瞬間に・・・・」
このままじゃ時間だけが過ぎていく・・・だが1つだけ一気に決着（ケリ）をつける方法を思いついたのかダークカブトはサンシャインの耳元に顔を近づけて作戦の概要を説明する。
カブト仮面の男「何を考えているか知らないが我々を簡単に倒せると思わない事だな」
クワガタ仮面の男「黒いカブトの男よ・・・貴様は所詮その程度の器だったと言うことだ」
そんな2人の考えなど知る術もないまま勝気なまま向かっていく。
カブト仮面達は2人が何かを仕掛ける前に一気に決着（けり）をつける気らしい。
ダークカブトは身構えながら仮面男達がどう来るかの様子を伺う・・・チャンスは一瞬・・・黒点の太陽と黄金の太陽の技を一気に叩きこんでいく事さえできればあの2人をも葬り去ることもできるはず・・・
カブト仮面の男「終わりにしてやる」
クワガタ仮面の男「ふふふふ」
2人の男はまるでクロックアップのごとく動き始める・・・だが光速移動をする相手との闘いはもうかなり慣れたもの・・・今更驚くことなどなくダークカブトとサンシャインは動きを見極めるように目で動きを追う・・そして仮面男たちは同時に2人に飛びかかる・・・が。

仮面男2人『何っ!!?』
仮面男の攻撃が当たる前にサンシャインとダークカブトの姿は消えていた。戸惑う2人に向かって金色のヒマワリ型の光弾が2人の身体を拘束する。
ダークカブト「まんまとハマったな?」
サンシャイン「思惑通り・・・って言ったらちょっと卑怯かな?」
ダークカブトは勝ち誇ったような声で2人の前に姿を現した・・・
その後ろにはサンシャインがシャイニータンバリンを構えた姿があった。
カブト仮面の男「う、動けん?・・・」
どんなにもがいても動く事が出来ない仮面男達・・・その間にダークカブトとサンシャインは2人に向かっていく。
ダークカブト「攻撃を仕掛けられる瞬間に俺とサンシャインはお前達の攻撃範囲から脱出、その後距離を確保してサンシャインのゴールドフォルテバーストを発射したと言うことだ」
クワガタ仮面の男「わずかな間に此処までの連携を見せるとは・・・」
カブト仮面の男「割れ話の負けか・・・」
仮面男たちはこの状況で勝ちを取ることは不可能と判断したのか下を向いて抵抗を止める
ダークカブト「あっさりだな・・・じゃあ俺達は先に進ませてもらおうか・・・サンシャイン」
ダークカブトはもういいだろうとフォルテバーストを消滅させる。
2人の男は潔い態度で仮面を外す・・・その素顔は・・・・
ダークカブト「!!??」
なんと大人と琢磨にそっくり・・いや瓜二つと言ってもいいだろう・・・あまりの出来ごとにダークカブトの仮面の下にある傑の顔は開いた口がふさがらないという感じになっているのは言うまでもないだろう・・・・
大人と瓜二つの男「さあ先に言ってこい・・・我らはお前の力量

を見させてもらおう・・・」
琢磨と瓜二つの男「ふん」
何やらとんでもない展開となってきているが・・・今後は一体何が
待っているのだろうか？

第５２話「真夏日の空夢ー前篇ー」（後書き）

更新が遅れてすみません。
大学が夏休み中で実家の事業の手伝いで時間がなかなかとれなくて
どうしても時間がかかってしまいました・・・・

次回も傑いつき編となります・・・ギャグが出来るか心配だけど・・・

ではでは次回もお楽しみに♪

第５３話「真夏の空夢１後編１」

３人組の宇宙人軍団はつかの間の休みに心身を癒している傑達の影にいる。・・・ザラブは何やらラジオサイズの機械（マシン）を持っているザラブ「ぐふふふっ」

チャリジャ「此処が奴らが借りてる宿か？」

ヒマラ「奴ら案外広いの借り手やがる・・・俺達の宇宙船よりも広いんじゃねぇか？」

案外大きい貸しペンションに思わずヒマラはそう呟く。この３人組は懲りずに何を考えているのだろうか？

ザラブ「よし、では手筈通りに眠眠打破作戦（オペレーション・ノンスリープ）を開始するぞ」

チャリジャ「・・・本当にうまくいくのかよ？」

ラジオサイズの機械をもったザラブが先頭に２人に指示を出す。チャリジャはザラブの案が成功するかは正直信用し難かった。現に前回はザラブが変身して琢磨（アース）をだましたは言いが本物の登場（マリン）によってあっという間に正体をばらされた揚句また昼間に輝くお星様となってしまったから心配であるのは仕方あるまい。

ザラブ「黙らっしゃい。今度こそは必ず成功する！！！」

ヒマラ「（ホントかよ）」

何処からか出てくるのか分からない自信にヒマラが心の中でそうツッコミを入れる。

ザラブ「では透明迷彩（ステルス）作動！！！」

３人は腰につけていた迷彩機能（ステルス）を持つ機会を始動させてると姿が消える。そして貸しペンションへと足を忍ばせていく。

傑「・・・大人達・・・だよな？」

いつき「傑？」

仮面２人組を倒した傑といつきであったが何やらすっきりしない・・・ああの２人の正体がまさか仲間であるはずのあの２人・・・のそ

っくりさんだったとは。・・・何かがおかしいと傑は疑問視し始めるがその傑にいつきが声をかけてきたので思考は中断してしまう。
傑「ん？・・・あぁ、何でもない」
何やらすっきりしないまま先に進む傑といつき・・・しばらく歩いていくとまた大きい扉の前についた・・・「いつきの家ってこんなに異様な広さだったけっ？」と傑は思うが。
傑「ま、まあいいか・・・開けよう」
扉を開けるとまた広い広場のような場所が広がっている・・・何やら嫌な予感しかしないと思っていた傑だったがその予感は的中することとなった。
？？？『おーほほほほほほほほほほっ！！！！！』
傑「・・・」
やっぱりフラグだったのかと傑は少し呆れたように溜息をついた。
声からして女であると言う事は分かったしもしかしたらあの2人組かと推測も立ってしまった。身形は先程と同じく仮面を被った姿だった。今度はピンクとライトブルーという何処かで見た事ある2人組のパーソナルカラーと同じ・・・傑はまさかなと思うのだったがその予想は的中することとなった。
謎の仮面少女ズ『ここを通りたければいつきの妹である私達二人・・・大地と海に咲く可憐な花シスターズを倒していきなさい！！！』
突然現れたピンクの花と青い花の形のような仮面をかぶった2人の少女が現れた・・・この声、そしてあの背格好・・・あの2人しか考えられなかった・・・あからさまの事に普段は冷静の傑も傑は思わず興奮した様子を見せながらものすごい剣幕で口を開いた。
傑「お前らつぼみとえりかだろうがーーーっ！！！　ついでにさっきの二人も大人達だろうが！！　なんだ、そんなに俺の恋路を邪魔したいのか？　というかなんなんだこの試練わよ～～！！！」
だんだんと傑も何が何だか理解できずらしくないツッコミを入れてしまう・・・というか明らかにつぼみとえりかだと分かってしまっているだけにツッコミを入れずにはいられないので無理もないかも

しれない・・・
傑「えぇ～い！！こうなりゃ何でも来い！！」
いつき「ちょ、傑！！」
もうこうなったら自棄(やけ)だと傑はゼクターを呼び出してダークカブトに変身する。いつきも急いでサンシャインに変身していく。
ダークカブト「もう一気に片付けてやる！！！」
電子音「ＣＬＯＣＫ　ＵＰ」
こうなれば開幕一気にクロックアップを決めるとベルトの腰の部分のスイッチを勢いよく叩いて起動させると一気に間合いを詰めるとすかさずゼクターのフルスロットルスイッチに手を伸ばす。
電子音「ＯＮＥ、ＴＷＯ、ＴＨＲＥＥ・・・」
ダークカブト「ライダーキック」
「ＲＩＤＥＲ　ＫＩＣＫ」
そのまま下段回し蹴りを叩きこんでいくダークカブト・・・だったが紙一重で２人の姿はまるで蜃気楼のごとく歪んで消える。すぐに辺りをダークカブトは確認するが何処にも姿は見えない。
ダークカブト「何処に行った！？」
必死に探すダークカブトの前にピンク仮面の少女が現れたかと思うとそのままダークカブトに回し蹴りを返す。
ダークカブト「だ、なんつースピードだ」
ダークカブトは驚愕する。クロックアップは光速の領域でありこれに対抗できるのはダークカブトと同じマスクドライダーシステムまたはその基礎となっている怪人ワームでしか対抗手段はない・・・ある１つの手段を除いては。
ブルー仮面の少女「驚いた？」
ダークカブト「まさか・・・レッドの種？（だがアレはブロッサム達プリキュアでなければ使えないはず・・・ま、まさかこの２人は本当に・・・）」
もしも仮に今目の前にいる少女達がつぼみとえりかと何か関連性があるとしたらパヒュームのレッドの種以外は考えられなかった・・・

だがそれを使う仕草すらあの2人は見せていない・・・まさか最初からダークカブトがクロックアップを使う事を予想したいたとでも言うのか？

ピンク仮面の少女「まだまだ行きますよぉ！！！！」

追撃の攻撃を緩める来なく当然放っていくピンク仮面・・・ダークカブトは序盤から流れを掴まれる苦しい戦いとなってしまった。

ライダーシステムのスペックではあの2人以上である筈であるのに・・・ダークカブトは冷静さを装いつつも動揺は隠せないのか防戦一方となってしまう。

サンシャイン「ダークカブト！！！」

サンシャインは見ていられないとピンク仮面少女をつけ放す。

ダークカブト「さ、サンシャイン・・・」

サンシャイン「落ち着いて。貴方らしくないよ・・・こんなに我武者羅な戦い方なんて」

ダークカブト「っ！！」

確かに今の戦い方はダークカブトもとい傑らしい戦い方ではない。

焦りからか冷静さがなく分析力が欠如している・・・ダークカブトはサンシャインの言葉に目が覚めたのか一度クナイガンを取り出す。

そして黄色い目を光らせる。

ダークカブト「サンシャイン・・・ありがとな。お陰で目が覚めたぜ・・・俺は俺らしく・・・な」

ピンク仮面&ブルー仮面『！？』

仮面少女達はないやら異様な空気を出してきたダークカブトの様子に驚くが何か仕掛ける前に一気に片付けてやると2人同時に前に出るが・・・。

ダークカブト「ダークネス・ソードブレイカー」

ダークカブトは静かにそう言い2人の少女を斬りつけた瞬間に黒い閃光が放たれる。その様はまるで侍が敵を一閃するかのようにものすごいスピードとテクニカルな技・・・・それにより2人の仮面少女はその場に膝をつき咳を込む

ピンク画面の少女「ぐふぅ!?」
ブルー仮面の少女「がはぁぁ!!」
突如限界突破したダークカブト・・・変身者の傑は何かに覚醒したのか?
ダークカブト「・・・ただ単に気力を集中させた・・・それだけだ」
ピンク仮面少女「何故トドメを刺さない?」
そう言うとクナイガンを収めるダークカブト・・ピンク仮面はそう問うた。するよダークカブトは落ち着いた口調で答える
。今の彼女たちに反撃の力などは残されていない・・・仮面少女達は立ち上がると仮面を外した。やはり外見はつぼみとえりかと売り2つであったが・・・別人ということらしい
ダークカブト「(一体どういうことなんだ?・・・どうしてこんな茶番が・・・これ本当に現実なのか?)」
ダークカブトは次第にこの事態に疑問を抱き始める・・・本当に今のこの状態はハッキリ言ってカオスすぎる・・・これは本当に現実なのだろうか?
その後には何とゆりやアンナ更には加々美新と瓜二つのそっくりさんまで登場すると言う展開が待っていた・・・

傑「・・・(もう何が起きても驚かんなこれは)」
殆どわけのわからない事になってきているがとにかく次がラストだと言うことらしいが・・・扉を開けた先には誰もいなかった・・・。いや1人神父のような格好をした天道総司がいた。
傑「つ、次は・・・神父?」
最期の最後で大玉が来たなと傑は身構え始めたが
神父「待て、お前の相手は俺ではない」
傑「はい?」
神父が相手ではないと言う事は・・・不意に後ろを見るといつきはいつの間にかサンシャインに変身しているのだった・・・傑はまさかと思い冷や汗をかく。

いつき「最後の相手は・・・私だよ」
傑「は、はいぃ!?」
ウソだろうと傑はかなり戸惑う。彼を落ち着かせる為にいつきは説明に入った。
いつき「最後に相手を見極めるのは・・・私自身の役目なの。それは・・分かるよね?」
傑「・・・そう言うことなら避けられない・・・よな?」
そう言うことならもう何でもやってやると傑はゼクターを呼び寄せそのまま装填し最期の変身を行う。
ダークカブト「行くぞサンシャイン!!!」
サンシャイン「いつでもいいよ!!!」
漆黒の太陽と黄金の太陽の闘いが始まった。先ずは小手調べだと2人は突進して拳と拳をぶつけ合う・・・周りにはものすごい衝撃波が放たれていき力では互角の鍔迫り合いになりそうだ。
サンシャイン「やるね・・・私が鍛えた甲斐があるってもんかな?」
サンシャインは不敵に笑みを浮かべてうれしようにそう言った。いつきが傑を強制的に鍛え上げた甲斐はあったというものだろう。
ダークカブト「ああ。誰かさんに散々苛められた成果かな?」
ダークカブトはサンシャインのセリフにそう言い返す。元々は体力がなくそれが弱点であったが今となってはそれはいつきとのトレーニングで完全に克服し体術もかなりレベルアップしている・・・今は技は互角とならないが力では傑が有利であるところにまでなった。
サンシャイン「・・・それって嫌味?」
ダークカブト「バレた?」
ダークカブトの嫌味にそう聞くサンシャイン。声は穏やかであるは表情は真剣そのものであり2人は拳の鍔迫り合いを一度止め離れる。
離れたその瞬間ダークカブトはクナイガンのガンモードを構えサンシャインに射撃の嵐を見舞わせてやる。だが当たる瞬間にサンフラワーイージスで全て弾かれてしまう。
ダークカブト「ちっ・・・やっぱり遠距離は通用しないか」

遠距離はサンシャインには全て弾かれてしまう・・・攻守一体スタイルの彼女の攻略法・・・何かある筈だとダークカブトはフルに頭を回転させて考える。

サンシャイン「言うまでもないと思うけど今更クロックアップなんか通用しないよ？・・・分かってるよね？」

３年前のワームとの戦いでプリキュア達にも光速移動（クロックアップ）の対処法は考案済みであるから今更それで彼女（サンシャイン）を撹乱することなどは出来はしない事は分かっている。しかしどんな相手でも必ず弱点はある筈だと傑は必死に思考を集中して考える・・・何かある筈だと。

ダークカブト「（サンフラワーイージスは正面からの攻撃は通用しない・・・だがあの技にも死角はある！！！）」

ダークカブトは一か八かの賭けに出ることにする。成功する確率は高いがサンシャインの動き次第でそれは変わってくる・・・だが試してみる価値はあるとキャストオフしマスクドフォームからライダーフォームに変わる。そしてクナイガンの連続射撃をサンシャインに向かってもう一度放っていく。

サンシャイン「サンフラワー・イージス！！！」

当然サンシャインはそれを全て防御する。土埃が舞い視界が悪くなる・・・しばらくすると土埃がおさまるのだがその目の前からダークカブトの姿が消えていた。

サンシャイン「っ！？」

まさかと思いサンシャインは真横ロ向くとそこにはダークカブトがクナイガンの銃口を額に向けている姿が見えた。

ダークカブト「・・・パン」

作戦は見事に成功した。土埃で視界を悪くさせたことでサンシャインの注意を前方に引き付けたその隙にクロックアップでサンシャインとの距離を縮めたのだ。ダークカブトはクナイガンの引き金（トリガー）に手をかけていていつでも発射できる状態であるのでサンシャインは下手な動きは出来ない・・・勝負はどうやらダークカブトの作戦勝ちに終わったようだ。

サンシャイン「負けたよ・・・傑」
2人は同時に変身を解いた・・・やっと長い長い試練が終わった。
これで目音の契りが出来ると思ったのだが・・・・傑が見たのは・・
・

ザラブ「いたいた、さっそく昼寝している奴を発見したぞ」
ヒマラ「コイツ・・・初めて見る顔だな」
その頃ザラブ3人組はペンション内に侵入していた。そして例の凡
骨マシン・・・ごほん、もとい作戦（オペレーション）に使う兵器を1人寝ている男に
試そうと準備を始める。その相手とは・・・・
傑「ｚｚｚｚｚｚｚｚｚｚｚｚｚｚｚ」
なんと傑であった。爆睡していてまるで死んだように寝ているのだ
った・・・3人の宇宙人は睡眠妨害マシンを起動させようとするが
その前に突然傑が
傑「う、うわぁあああああああああっ！！！！？？？」
ザラブ・チャリジャ・ヒマラ「！！？？」
突然大声を上げる傑、そしてそれを聞きつけたいつき達が部屋に過
去こんできた・・・因みにいつきはなぜか白いタキシード姿であっ
た。なぜそのような姿であるのかというとこのキャンプでファッシ
ョンショーをやろうとえりかが考えておりサプライズコスチューム
として花嫁&花婿衣装という者があったからだ・・・傑が寝てしま
ったので仕方なく傑とせ恰好が近いいつきが衣装合わせをすること
となったのだった。
傑「・・・・・」
傑はそれを見て再び気絶してしまった。何が何だか分からない宇宙
人のトリオの前にえりか達が超威圧オーラを放って近づいて生きた
えりか「アンタ達・・・・何しに来てんのよ？」
ザラブ「ちょ、・・いや・・・その・・我々も休暇で（大汗）」
えりか「ウソをつけぇえええええっ！！！！！」

えりかは先日の恨みがあったのだろうか3人を開いている窓から思いっきり投げ飛ばしてやった。

???「す・・」
傑「?」
???「すぐ・・・」
傑「う、う~ん・・・」
何処からか声が聞こえた。傑はとりあえず目を開けてみる・・すると何やら心配そうになっていたいつきが目の前にいたのだった。
傑「ん?あれは・・・夢?」
傑は頭がボーとするなか傑は自分に起きた事を整理し始める・・・・自分はこの部屋で仮眠を取っていた・・・つまりはいつきと結ばれる話は・・・夢?
傑「いつき、聞いて言いか?・・・俺は今まで何をしていたんだ?」
傑は確かめるにはいつきに問いただすのが一番早いと思ったからだ。
いつきはわけが分からないがすぐに答え始めた。
いつき「何をしていたって・・・ずっとこの部屋で昼寝してたよ?・・・どうしたの?急に」
傑「い、いや・・・その実はな・・・」
傑はいつきに自分が見た夢の話を語り始めた・・・そして衝撃の最後の事も。
いつき「僕と傑が結婚!?・・・そんで衣装がボクが花婿で傑が花嫁衣裳だった?・・・ふふふふ・・あははははははっ!!!!」
いつきは思わず笑い出してしまった。そんなあり得ない夢の話を聞いたら笑うしかないだろう・・・
傑「わ、笑うなよ!!!・・・マジで俺だったビビったんだからな」
傑は笑ういつきにそう不機嫌そうに言い返した。あんなあり得ない事はやっぱり夢であったと内心ほっとしてはいるが・・・もしも夢みたいなことになったらと冷や汗を浮かべるのだった)

第５３話「真夏の空夢ー後編ー」（後書き）

やっぱり私にはギャグは向いていないかも・・・・
次回はゆりアンナの姉妹編です

ではでは次回もお楽しみに♪

第５４話「父との再会ー幽霊珍騒動ー」

傑の夢落ち騒動から時間はあっという間に流れていき大人達一行はつかの間の休暇を楽しんでいた。腕の海で泳いだりスイカ割りや波乗りえりか主催のファッションショー更には怪談話と色々な事をした・・・そして今夜は・・・。

大人「今日はいよいよ・・・肝試し大会やるぞぉおっ！！！！」

今宵は夏最大のイベントの１つである肝試し大会をペンション近くの山でやろうと言うことになったのだこれを考案したのは琢磨でありお化け役となっているのは・・・なんと男性陣全員であった。

つぼみ「ほ、本当にやるんですかぁ！？」

えりか「つぼみ、もしかして怖いの～？」

つぼみは幽霊の類は苦手であり肝試し大会は正直やりたくないものであった。だがえりかが後ろからつぼみに抱きつきからかい始める。

つぼみ「ひっ！？・・・べ、別に怖くなんてないですよ！！！」

大人「（つぼみ・・・強がりがバレバレだ）」

大人はつぼみの強がりがすぐに分かった。これから自分達がおばけ役となって盛大に脅かす事になるのだが大人は少し申し訳なくなるのだった。

琢磨「よし、じゃあ俺達はお化けトラップを仕掛けてくるから・・・合図が出来たら連絡する」

そう言うと大人、琢磨、傑の３人は先に山に入る。夜の山の森林は昼間と違い禍々しく嫌な雰囲気を放っている・・・本物のお化けが出てきそうで女子陣はゆり以外冷や汗を浮かべるのだった。

そして１０分後になるとトラップがしけか終わったと連絡が入ったのでじゃんけんでつぼみ達は２人ひと組のペアに分かれる。

最初のペアはつぼみといつきとなった。

つぼみ「・・・（い、嫌だなぁ～こういうの）」

いつき「つぼみ、顔真っ青だけど大丈夫？」
つぼみ「だ、大丈夫です！！！」
明らかに顔色が真っ青なつぼみにいつきがそう声をかける。つぼみは身震いをしながらも先に進んでいく・・・すると草むらがガサガサっと音がした。
つぼみ「ひっ！？・・・・い、今のは？」
いつき「風・・・じゃないよね？」
つぼみはともかく流石のいつきも恐さゆえに声が震えている。恐る恐る2人は草むらに近づいていく・・・と
？？？「グォオォオオオオっ！！！！！！」
つぼみ・いつき「ぎゃぁあああああああっ！！！！！！！」
なんと草むらから狼男の仮面をかぶった誰かが出てきた。唸り声につぼみといつきは抱き合って悲鳴を上げる。そして大急ぎで逃げる。
つぼみ「いやぁ～～～っ！！！！・・・来ないでえでえええええっ～～～～」
いつき「ちょ、つぼみ、待ってぇええ～～～～っ！！！！」
つぼみは半泣きになりながらものすごい勢いで狼男から逃げる。いつきもパニックになっているのか大慌てで逃げること2分・・・突然目の前に人影が見えてきた。
つぼみ「あ、あれは・・・人？」
大人（？？？）「よぉ！！つぼみ、いつき」
つぼみ「大人？・・・よ、よかっ・・・・」
いつき「・・・・・」
声の主は大人・・・だったのだが彼の顔は・・・なんと！！！
大人「大丈夫かぁ～～！？」
懐中電灯で照らしたその顔には血まみれとなっていた・・・勿論メイクで造ったものではあったがつぼみといつきの顔は一気に血の気が引いたように真っ青になった。
つぼみ・いつき『い、いやぁあああああああ～～～～～～っ！！！！！！！』

大声を上げるとまわれ右で2人は後ろに走り出すが狼男が前から姿を見せると挟み撃ちとなってしまった。
狼男「ガオオオオオオッ！！！！！」
血まみれ大人（？）「何で逃げるんだよぉ～～～？」
つぼみ「あ、あわわわわわわわぁ！！！！！」
いつき「ひい～～～っ！！！！！」
挟み撃ちとなってしまった事で完全にパニックになってしまった2人だが本能だけは健在であり完全に逃げ道がなくなる前に2人は別の方向に全速前進で走っていく。すると今度は前から包帯グルグル巻きのミイラ男の姿が。
ミイラ男「ウオオオオオオッ！！！！」
つぼみ「ぎゃぁあああああああっ！！！！！」
いつき「か、囲まれたぁ！！！！」
3人に取り囲まれてしまったことでとうとう2人は逃げ道がなくなってしまう。パニックと恐怖で2人は既に半泣き状態になっている。
・。
オオカミ男（？）「ははははっ！！！・・・そんなに怖がってくれると企画したかいがあるな♪」
ミイラ男（？）「だが・・すこしやりすぎたか？」
もうそろそろいいだろうと思ったのか吠えるのをやめるとオオカミ男とミイラ男はその場に立ち止まると狼男は顔のマスクをミイラ男は包帯を外し始める・・ミイラ男は傑、狼男は琢磨であった。正体を知った2人はとたんに態度が一変する。
つぼみ・いつき「3にん共ぉお～～～～っ！！！！！（激怒）」
つぼみ「冗談が過ぎます！！！」
いつき「女の子を虐めるなんて最低！！！」
いつきはまだ落ち着いているが対するつぼみは最早泣きが入っていて3人に近づいてもう抗議タイムに入る。流石にやり過ぎたと3人は謹んで2人の意見を聞き入れる。
大人「ごめん、ごめん・・・ていうか言いだしっぺは琢磨だぜ？」

琢磨「お、俺のせいにするのかよ!?・・・お前らだってノリノリだっただろうがぁ!!!」
責任転嫁し始める大人に琢磨は猛反発し始める。そんな2人を置いておいて傑は2人に近づくと・・・
傑「なぁ、次はお前たちもおばけ役・・・やらないか?」
つぼみ「え?」
いつき「ボク達も?」
傑「衣装は用意してあるから好きなのを選ぶといい・・・脅かされた分はタップリと脅かしてやればいいだろう?」
何やら物凄く黒い笑みを浮かべている傑。つぼみといつきも最初は躊躇したがこれは面白いかもしれないとノリノリになって衣装を選び始めるのだった。

その頃。あの宇宙人3人組はというと・・・。
ザラブ「きょ、今日こそは彼奴等(きゃつら)に我々の怒りと恨みをぶつけてくれる!!!」
なんと大人達がいる山に大型の機械を持ってきていたのだ・・・この3人は懲りずに今回も大人達に奇襲をかけるつもりであるようだ。
ヒマラ「なぁ、これで本当に幽霊(ゴースト)なんて呼び出せるのかよ?」
その機械(マシン)は銀河連邦のとある宇宙ショッピングにて購入したものでありその機械(マシン)の効果とは幽霊を呼び出し持ち主の思い通りに操れるというものであった。しかし宇宙でも幽霊なんてものはまだ未開拓の分野であり胡散臭さが隠せない。
ザラブ「心配するな!!!今から試せば問題ない」
チャリジャ「今から試すんかい!!!」
ザラブ「しっ!!!。静かにしろ!!!・・・誰か来たようだ」
ザラブのボケにチャリジャがそうツッコミを入れる。そんな会話をしていると人の足音が聞こえてきたので3人は機械(マシン)を持って草陰に隠れるのだった。
えりか「さ、流石に雰囲気出てるなぁ〜」

夕「うん。・・・ちょっ、えりか押さないでって！！！」
えりか「だって～・・・夕さんこういうの得意でしょ？」
夕「得意じゃないって！！！」
来たのはえりかと夕のペアであった。流石のえりかと夕も暗いのだけは逃げてであるのかおっかなびっくりになりながらお互いにくっ付いた状態で進んでいた。ザラブ達はこの２人であの機械（マシン）を試してみようと考える。
ザラブ「よし、スイッチをオンにして・・・先ずはオーソドックスに着物を着た女で行ってみようか。あの生意気なガキを泣かしてやる！！！」
ザラブはえりかにこの前殴り飛ばされた事を思い出すとあの時の借りを数倍にして返してやると思っているのか何やら声に怒りがこもっている。
えりか「つ、つぼみ達・・・大丈夫かな？」
夕「た、多分大丈夫じゃない？・・・いつきもいるし」
？？？「・・・や」
２人は何か会話しないと間が持たないらしく何でもいいから話を続いていく・・・だが突然声が聞こえると動きが止まってしまう。
えりか・夕『・・・・・』
２人は顔を見合せながらも何が起きたのか気になって動けなくなってしまう。風が草や木の葉をなびかせて擦れる音が響いていくが静かすぎて逆に怖い・・・・。
？？？「うらめしや」
えりか「い、今の声・・・・」
夕「つ、つぼみ？・・・それともいつき？・・・い、悪戯にしちゃ性質が悪いよ！！！」
今度は確かに聞こえた。女の人の声だったのだが恐怖で混乱して誰の声かわからない。夕は強気にそう言うが身体は少し震えていて明らかに恐怖が隠せていない・・・えりかは夕の後ろに隠れてしまっている状態だ。２人は声がした方向に近づいていくと其処にあった

のは・・・。
???「うらめしやぁあ～～～～っ！！！！！！！！」
着物のを来た女の霊がいた。2人はその姿を見て氷のように固まってしまう事3秒後・・・・
えりか・夕「出たぁあああああああああああっ！！！！！！！！！！！！！」
2人はそう言うと半泣きになりながら大急ぎで走り去ってしまったのだった。
ザラブ「ふふふ大成功だな・・・これが逆襲じゃぁあああ！！！！」
大成功したことで機械（マシン）の能力は本物だとザラブ達は幽霊マシンを本格的に起動させるのだった。

その頃一番最後に山に入ったゆりとアンナはというとアンナ「く、暗い」
ゆり「大丈夫よ。こんなの子供だましなんだから」
アンナはそれなりに怖がっていたのだったがゆりは流石にしっかりしているようで全く怖がっていなかった。流石にメンバーの中でクールビューティー且つ戦士としての経歴が長い事はないようである。
そんな姉の姿を見て頼もしそうにくっ付いているアンナ。
アンナ「強いなぁ～お姉ちゃんは」
まるで微動だもしないゆりにアンナはそんな姉を頼りにしているぞというかのように後ろに隠れながら前に進んでいく。
ゆり「？」
アンナ「どうしたの？」
ゆり「いえ、今・・夕とえりかの声が聞こえたような気がして・・・」
アンナ「夕とえりかの？」
ゆりは突然立ち止まるよ耳を澄ませてそう言う。アンナは分からなかったがゆりは目が何か感じ取ったかのような目になっている。

ゆり「嫌な予感がする・・・この前の宇宙人たちがまた何かを仕掛けているのかしら?」
アンナ「ま、まさか・・・いやあり得るかな?あの宇宙人ってなんかしつこいからね」
ゆりの予感は当たっていた。・・・その頃のザラブ達はというと・・・
大人・琢磨・傑・つぼみ・いつき『いやぁあああああああああ~~~~~~っ!!!!!!!!』
大人達5人を襲っていた・・というより幽霊たちに襲わせていた。
大人達はガイコツと鎌を持った死神に追いかけられており全速前進で逃げていた。しばらく逃げていると大人達は何かにぶつかって飛ばされた。
大人「いっつ~~・・・一体何だ?・・・・えりか、夕・・・どうしたんだよ?」
大人は前を見るとそこにはえりかと夕がかなり動揺した様子になっている・・・こちらもものすごく大変であったが何事だと思わずえりか達にそう聞いてしまうのだが直ぐにえりか達は大人達の後ろを指差した。するとガイコツと死神がすぐ傍にまで来ていた。
全員「ぎゃぁあああああああああああっ!!!!!!!!!!」
全員パニック状態となり大慌てで逃げ始める。脅かしていた大人達も半泣き状態となっている。その頃ゆりとアンナと言うと・・・
アンナ「あ、アレって幽霊?」
ゆり「・・・・」
流石のゆりも目の前に幽霊が大行進しているのを見ると信じ難い光景に動きが止まるが冷静さは削がれていなかった。すぐにこの状況を分析しようと頭を回転させるのだが幽霊たちの中に見覚えのある影が・・・
ゆり「あ、あれは・・・お父さん?」
なんとその正体は3年前に死んだ父の姿だった。ゆりは思わずその

霊のあとを追ってしまう。
アンナ「お、お姉ちゃん!?」
珍しく動揺した姿の姉の姿にアンナも戸惑いながら彼女の後を追った。するとアンナにもそしてしばらく追いかけると2人の前に月影博士の姿がはっきりと見えるようになった。
月影博士「久しぶりだな・・・ゆり・・そしてダーク・・いやアンナ」
ゆり「お父さん・・・本当に貴方は」
ゆりは信じられなかった・・・3年前に死んだはずの父親が今目の前に姿を現しているのだから無理もないだろう。ゆりは再会した父と何を話したらいいか分からず口を閉じたまま黙ることしか出来なかった・・・
アンナ「お父さん・・・お父さん・・・なの?」
アンナも過去の記憶が蘇ってきた。3年前に一度命を失い消える寸前に父親が見せてくれたあの顔・・優しさと哀しさが混ざった父の顔が・・・間違いない彼は自分の父親だ。
月影博士「成長したな。ゆり・・・とてもたくましくなったよ」
ゆり「はい。私は・・・大切な仲間とともに大切なこの世界を守るために・・・今日まで色々な事がありました。」
ゆりは自然と言葉が出てきた・・・今自分が守るべきもの。大切妹(アンナ)の事も・・・妹の事を話すとアンナも自分の思いを語り出した。
アンナ「お父さん・・・今度は私、お姉ちゃんや大切な仲間と一緒にいるよ。三年前(むかし)とは違う。もう影なんかじゃない(ダークプリキュア)。・・・だから心配しないで」
今の自分はもう闇の存在などではない。姉(ゆり)と共に光の戦士として戦っている。アンナの笑顔を見て彼(月影博士)も安心したのか安堵の表情を見せた。
月影博士「お前達2人がいれば仲間も安心だな。・・・私はこれからもお前たちを見守っているぞ」
ゆり「ま、待って!!!まだ・・話したい事が」

アンナ「お父さん！！！」
月影博士はそう言って姿がだんだんと薄くなっていく。ゆりとアンナは思わず彼に近づいくが障る事は出来ない・・・煙を掴んでしまう様に手はすり抜けてしまう。
月影博士「私はお前達の心の中にいる・・・お前達が私を忘れない限り私はお前達の心(なか)で生き続ける・・・だから忘れるな」
最後に彼は屈託のない優しい顔を見せるとそのまま姿が消えていった。ゆりとアンナは彼が戻る姿をしっかりと見届けた。

その頃・・・ザラブ達はというと・・・
ザラブ・チャリジャ・ヒマラ『ぎゃぁあああああああああああっ！！！！！！！！！』
なんとこの3人も幽霊たちに追いかけられていた。機械(マシン)が暴走し始めてしまったのだこの機械(マシン)で出てきた幽霊は敵味方の判別がつかないと言う致命的な弱点があったのだ。
ザラブ・チャリジャ・ヒマラ『ぐぉおおっ！！！？？』
そしてとうとうひたすら逃げ回る3人は同じく逃げ回っていた大人達と遭遇してしまう。
大人「あ、お前らぁ！！！・・その機械は何だ！！！」
ザラブ「あ？これは幽霊を呼び出す・・・っ！！！・・ヤバっ！！！」
大人達全員『黒幕は貴様らかぁあああああっ！！！！！！』
ザラブ・チャリジャ・ヒマラ『ぎゃぁあああああああああああっ！！！！！！！！！』
ザラブが思わずポロリと機械(マシン)の事をばらしてしまったので大人達の怒りの鉄拳が3人に降り注がれたのは言うまでもないだろう。

ゆり「お父さん・・・」
その頃のゆりとアンナは先にペンションに帰っていたのだった。というのもアンナが父と別れに耐えられずに泣きだしてしまいそれを

宥める為に一度戻ったのだ。ゆりも思いを堪えながら泣きじゃくるアンナを落ち着かせる。

アンナ「ひぐ・・うぅ・・・お姉ちゃん・・・お父さんが行ってた言葉・・・私一生忘れない」

ゆり「・・・」

アンナ「私・・・強くなる!!!お姉ちゃんみたいに・・・誰にも負けないぐらい」

ゆり「・・・頑張りなさい。私も精一杯強力する」

今宵は月影姉妹にとっては一生忘れる事が出来ない1日となった。

彼女達は父に誓い誰も悲しませない戦士になると決意を新たにするのだった

第５４話「父との再会ー幽霊珍騒動ー」（後書き）

ちょっと今回はシリアス面を濃くしておきました・・・公式でもゆりはお父さん子だったと思います。さて次回からは新長編スタートでありウルトラの初ゲストも登場予定！！！

ではでは次回もお楽しみに♪

長編予告「バルタンの大逆襲ー地球総攻撃計画ー」（前書き）

今回が次回の長編内容の確定版となります。

概ねはこの流れにそろうと思いますが変更も十分あり得るのでご了承を～

長編予告「バルタンの大逆襲ー地球総攻撃計画ー」

？？？1「われらの同胞の敵を取らせてもらおうか・・・プリキュア、そしてウルトラマン共よ」

ダーク「君達・・・復讐しようと言うのか？同胞の為に・・・・・」

ティガ「（青のバルタン？）」

バルタン（？）「フォフォフォフォフォフォフォフォフォフォっ！！！！」

突如現れる青い身体のバルタン星人。その強さはこれまでの闘いで強くなったティガ達をも圧倒してしまう。

マリン「つ、強い・・・・う、ウソでしょ？」

アース「アァア・・・（こ、このままじゃ・・・負ける・・・・）」

絶体絶命のその時・・・空から青い彗星がティガ達の前に現れバルタンの攻撃から身を守る。その彗星の正体は・・・・・。

ブロッサム「青い目の巨人？」

銀色の体色に青い目の巨人・・彼は敵か？味方か？

つぼみ「貴方は？」

そしてつぼみたちの前に現れる青年。

???2「俺の名前は・・・パワードと言っておこうか」

???3「そしてその相棒です!!!」

青年と共にいるバルタン星人の子供・・・・彼らの正体は・・・・

???1「貴様らのデータを取らせてもらおうか・・・・わが宇宙恐竜が完璧に強くなる為に・・・・」

???4「ギシャァアアアアア!!!!」

???5「・・・・ピポポポポポポ」

いつき「バルタン星人はどうしてあそこまで人間を蔑むんだい?」

???3「それは・・・バルタン星の過去にあります。・・・ボク達の星が爆発してしまったことがバルタン星人にとっての明けない夜の始まりでした。」

語られるバルタン星の過去・・・・バルタン達の抱える闇を聞いた大人達・・・そして同時に現れる黒い影

???6「アンタ達が光の巨人?・・・・どれほどの力が見せてみなよ!!!」

大人「お前は・・・・真夜!?」

真夜と瓜二つの漆黒の身を纏った衣装(コスチューム)を纏った戦士(プリキュア)・・・彼女の正体と目的とは?

？？？１「貴様ら下等生物に我らの気持ちが分かってたまるか・・・行けぇえ惑星サウリアの奴隷たちよ！！！！この美しき星を我れらの第２の故郷に！！！」

バルタンはサウリアから採取した怪獣たちを改造して誕生させた改造怪獣たちがバルタンの命を受け総攻撃を開始する。バルタンはそのまま暴走し独断で地球を壊滅させようと目論む。

？？？５「ゼットン！！！」

そして解放される宇宙恐竜・・・・果たして大人達はこの危機を乗り越える事が出来るのかぁ！？

近日執筆開始予定！！！

第５５話バルタンの大逆襲ー地球総攻撃計画ー？「青い復讐者と銀色の追跡者」

今回より長編の始まりです。以前アンケートした怪獣たちも登場予定なのでどうかご期待下さい！！！

第５５話バルタンの大逆襲ー地球総攻撃計画ー？「青い復讐者と銀色の追跡者」

宇宙空間にある巨大な戦艦がまっすぐに地球に向かってきていた・・
・戦艦は禍々しい雰囲気を放ちながら刺々しくシャープながらも巨大であった、全長は軽く５００メートルを超えているだろうか？その戦艦は一度月の真後ろで止まる。
？？？１「行け、光の巨人を殺し我らが同胞の敵を討つのだ・・・そしてこの美しき星を我らの第２の故郷にする！！！」
その号令を受けると戦艦の先端のドーム状の部分が開いていくと３つの緑色の光を放ったモノが地球に向かって放たれていく。この時はまだ誰も知らなかった・・・その光の正体ともう１つの光の戦士次元を超えてこの世界にが向かってきている事も・・・。
その数日後に大人達が住む地球では希望ヶ丘のとある廃業となった町工場から不気味な笑い声が聞こえてくると言う通報を地元警察が受理し所轄刑事が現場へと急行した。
刑事Ａ「此処が連絡のあった町工場か？」
刑事Ｂ「ネコか何か入り込んだんじゃねぇのか？・・・ったく積まんねぇ通報受けやがって」
一人は何処にでもいるような感じの刑事だがもう一人は明らかにやる気がなさそうな感じが見受けられる。２人は工場の中に入るとその中から物凄い異臭がしてきた・・・まるで虫の死骸が何カ月も放置されたような生物的な独特の臭いが。
刑事Ｂ「うわっ・・・なんだこの臭いは」
刑事Ａ「虫の死骸のような臭いか？・・・凄い臭いだな」
長居をしたら本当に体調がおかしくなりそうだ・・・さっさと調べて帰った方がよさそうだと２人は奥へと進んでいく。所々に謎の繭の残骸のようなものが転がっており異臭の原因はどうやらこれであるようだ・・・よく見ると繭は数種類あり羽化して古いものと中身が羽化してからまだそれほど時間は立っていないようなものもあっ

たのだった。そして暫くすると人間の成人男性程度の大きさの抜け殻のようなものを発見した。
刑事Ａ「な、何なんだこれは」
真面目そうな刑事は今まで見たことのないその物体に戸惑った様子だった。しかもそのグロテスクな様に思わず吐き気が出てきそうになったそれを見てもう1人はだらしないと蔑んだ目線を送った。
刑事Ｂ「ったくだらしねぇ～な。しっかし通報があった声の主はこの中身かもな・・・一体何だこいつは？」
この抜け殻はほんの数時間前に羽化した感じで辺りには体液のようなネバネバした液体が撒き散らされていて臭いも凄まじかった。この正体不明のその抜け殻をまじまじと見ていた2人であったが突如その抜け殻の主が2人に迫っていたのはこの時は予想できなかっただろう
？？？２「フォフォフォフォフォフォフォフォフォフォっ！！！！！」
突然笑い声のような声がした来たので2人は辺りを見回した。これが通報のあった声の主の正体であるのかと思ったその時上を見るとその主が2人に姿を見せるのだった。
刑事Ａ「こ、コイツが声の正体か！？」
上を見るとそこには無数に分身している青い体色の巨大な鋏の腕となっているその異形な姿は以前見た事がある。
刑事Ｂ「こ、コイツはＧＵＴＳの仕事だな！！！」
刑事は苦笑いしながらそう言った。2人は銃を取り出すとそれに合わせてバルタン（？）「フォフォフォフォフォフォフォフォフォフォっ！！！！」
刑事Ａ＆Ｂ「うわぁあああああああ～～～～～っ！！！！！！！！」
2人の刑事の声と銃声がその日は響き渡った・・・そしてその翌日にはＧＵＴＳにも出動要請が入り矢車と影山が調査を開始するのだった。

矢車「・・・・何だこれは」
廃工場の中には巨大な繭が数多くあった。羽化したのも最近である様で中身は湿っていて液体のようなものが残っていた。矢車達はそれを採取するとすぐに極東本部に戻る。採取した液体と繭は地球外生物のモノであるという結果が出た。

その頃に大人達はというと夏が終わり残り少ない大学の夏休みを楽しんでいたのだがつぼみ達は学校が始まっていて実質いえば大人はかなり暇人であったいのだった
大人「全く・・大学生という者は時間がたっぷりあるな・・・・つぼみは学校だし高校生と大学生の違いってちょっと大きいかもな」
大人は時間をどう潰そうか考えているのだったが家でこうやってボーとしているのもただの時間の浪費でしかないと考えつくと突然立ち上がり部屋着から私服に着替えると家を出た。そしてそのまま宛てもなくカブトエクステンダーに乗り込み希望ヶ丘の町を走るのだった。
大人「（闇の支配者ダーク・・・奴が俺達の闘いの元凶。アイツを倒さない限り太陽達のような復讐心に堕ちる人間は絶対にいなくならない・・・・くっそ!!!俺がウルトラマンになっても助けられない人がいるなんて・・・・何の為に俺はこの力を手に入れたんだよ!!!!）」
バイクに乗りながら大人は地球解放軍事件の事を思い越していた・・・。彼らはダークに心の隙を付け入れられて自分達と闘う事ように仕向けられた・・・ただ愛や人としての感情に飢えていただけの人間を利用すると言う卑怯極まりない方法で・・・・あの時はつぼみ達が奇跡を起こし彼らの闇を切り裂いて消滅させたが今度も同じ奇跡が起きるなんて保証はない。
それから大人は自分の力の無さを思い知らされた・・・・だからこそもっともっと大人が心も身体もともに強くならなければならない・・・・

圧倒的な力が欲しい・・・・誰にも負けないような・・・全ての人を守りとおせるような絶大な力が・・・敵を完膚なきまでに叩きつぶす事が出来るような力が・・・。

大人はアレ以来ずっとある事を考えていた。例え1人でも大切な人を守れるような存在になる・・・誰も悲しませない完ぺきな戦士になる事が超人(ティガ)の力を手に入れた自分の宿命。光(ティガ)その為にある筈なのだ。彼女(つぼみ)に頼ることなく守る存在になる事が・・・男(ウルトラマン)としての自分に課せられた義務なのだと。

大人「（その為に俺はまだつぼみに言う事は出来ないんだ・・・・今の中途半端な状態じゃつぼみの不安を増やすだけだ。力(ティガ)の事は俺自身の中で留めておくのが今の俺自身の責務なんだ・・・例えつぼみが感づいて俺に問い掛けてきたとしても全てを隠しやり通さなければ！！！）」

いつかは力(ティガ)の秘密がばれるときが必ず来るはずだ。3年前に自分がカブトの力に覚醒した時につぼみ達がプリキュアだと発覚した時のように。

大人「・・・・・・」

もしもそうなったら本当につぼみは俺を受け入れるのだろうか？一歩間違えば怪物と大差がない力を持つこの俺を・・・つぼみと付き合い始めてつぼみの見えていない部分が見えてきた最近はその不安が更に強くなってきている・・・

考え込むと色々な事が頭を回ってきて脳が疲れる・・・考える議題が大きすぎるだけに簡単に答えが出せないから当然だ。

あてもなく走る事1時間も立つと町の全体を一周してしまった。もう家に帰った方がいいと家に向かってバイクを走らせていく大人・・・。

矢車「これは・・・この工場は地下道に繋がっているのか？」

？？？1「フォフォフォフォフォフォっ！！！フォフォフォフォフォフォフォフォ！！！」

矢車と影山は廃工場を調べていると秘密の抜け穴がある事を発見した。そこには上の階と同じように物凄い異臭に包まれているだけなら同じだが笑い声が聞こえてきた。
影山「この声は・・・バルタン星人？」
以前戦ったことのある星人の声を忘れるわけがない。そのまま奥に進んでいくと広いホールのような場所に出た。そこには案の定３匹のバルタンがいたのだが以前見たバルタンとは姿が異なり青い体色に身体が全体的にシャープになっている
矢車「三匹いるな・・・」
影山「なら３匹とも仕留めてやる！！！」
２人は同時にＧＵＴＳハイパーを取り出し乱射する。辺りは煙に包まれていき３匹の姿は見えなくなったが何かが軋(きし)むような音がしていくと地下道が崩れ始めたのだ。２人は大急ぎで脱出しＧＵＴＳ隊の他のメンバーも廃工場から脱出する。
３体のバルタン星人は１人に合体していき巨大化する。だが以前とは違い身体は青で鋏は開き威圧感が以前のものとは全然違う種族と言ってもいいかもしれない。
バルタン星人（？）「フォフォフォフォフォフォフォフォフォフォフォフォフォっ！！！！！！！！」
巨大化したバルタンは町をバイオビームで破壊していく。ビルから火が上がり人々は逃げ纏う・・・・
シンジョウ「今度はバルタンかよ・・・ふざけやがってぇ！！！！」
すぐにガッツウィングが出動しシンジョウ、ホリイのウィング１号がバルタンにレーザー砲で攻撃を開始するが鋏でレーザーを弾き返されてしまう。
矢車「これならどうだ！！！！」
ウィング２号に乗り込んだ矢車達がデキサスビームをバルタンの顔面に向かって発射するとバルタンの顔に大きな火花が散らばるとバルタンは頭から地面に向かって倒れる。
影山「やった！！！」

バルタンが倒れたのを喜ぶ影山だったがバルタンはすぐに虫が抜け殻を剥ぐかのように倒れた個体とゆっくり分離するように立ちあがっていく。

ホリイ「なんちゅーやっちゃ」

並みの怪獣程度なら一発で倒せるほどの威力があるデキサスビームを受けてもびくともしない。動揺するGUTS隊にバルタンのバイオビームが放たれる。

バイオビームをギリギリで回避するGUTS隊。レーザーもミサイルも通用せずバルタンはただ町を破壊しつそうと迫る。

その頃の大人はというとエクステンダーで家に帰ろうとしていたとこにバルタンの急襲を聞き入れ大急ぎでバルタン元へと向かっていた。そして目と鼻の先までエクステンダーで近づくとエクステンダーから飛び上がり・・・

大人「これ以上・・・お前の好きにはさせない!!!!」

スパークレンスのスイッチを入れ光に包まれ超人(ティガ)へと姿を変える。

光の巨人、ウルトラマンティガの降臨だ

矢車「ティガ」

バルタン（？）「・・・・待ッテイタゾ・・・光ノ巨人」

ティガ「（青いバルタン？）」

ティガ登場の開口一番に青いバルタンはそう言った。赤い目は鋭く光を放ち敵意むき出しにティガに迫る。ティガは以前現れたバルタンを倒した時に言い捨てた最後の言葉を思い出した。

バルタン「我々バルタンの同胞はまだ全宇宙に散り散りとなっているのだ・・・その同胞が貴様らを!!!!」

バルタン（？）「我々ハ貴様ラガカツテ倒シタバルタン星人ノ同族・・・パワードバルタン!!!!」

ティガ「（あの言葉はハッタリではなかったのか・・・・そんな事どうでもいい・・今はコイツを倒すのが先決だ!!!!）」

ティガ「ハァアアアッ!!!!」

ティガは走りバルタンに向かっていくと回し蹴りをバルタンの右脇腹に放つがバルタンの鋏でそれを受け止めるとそのまま巨大な鋏でティガの片足を刈り上げ押し倒す。
パワードバルタン「フォォオッ！！！」
ティガ「ウォオ！？」
そしてそのまま倒れたティガの顔面に向かって鋭利な鋏を衝きいれる。ギリギリでパワードバルタンの鋏を回避するとそのままバルタンの下腹部にキックでバルタンを吹っ飛ばすと立ち上がる。
ティガ「ハァアッ！！！」
立ち上がった瞬間飛び上がり空中（そら）で身軽なその動きを見せつけていくととび下りる勢いを付けて威力を上げた踵落としをバルタンの頭に放つ。
バルタン「フォオオッ！！！！」
だがパワードバルタンは分身の術で透けるように回避する。
ティガ「！？」
踵落としが外れ地面に落ちるティガ。だが着地には成功しすぐに後ろを見るがバルタンの姿はない・・・気配は感じるのだが姿が見えない事にティガは必死に辺りを見回してパワードバルタンを見つけ出そうとするのがパワードバルタンの痕跡は一切見つからない。
パワードバルタン「・・・フォフォフォフォフォフォっ！！！！」
見つけ出すのに戸惑っているティガの真後ろに突然姿を現すとそのまま零距離のバイオビームをティガの背中にぶつけていく。
ティガ「！？・・・グオオオオっ！！！！！」
気がついた時にはもう遅かった。真後ろからのバイオビームの攻撃は例えティガでも大ダメージは避けられない。そのまま前のめりになる様に飛ばされてビルに仰向けに倒されてしまう
ティガ「グゥ・・・・ハァアッ！！！！」
すぐに前を向くとハンドスラッシュを放って反撃をするティガ。だがそれも分身の術で避けられる。

パワードバルタン「フォフォフォフォフォフォフォフォフォフォフォフォ！！！！！」
明らかに以前のバルタンより戦術がトリキーで隙がない。此方の攻撃を受け流しつつも確実にティガにダメージを与えるその戦術は口ばかりではないと言うことだろう。
パワードバルタン「ドウシタ？・・・攻撃ヲ受ケテイルバカリデハ勝テナイゾ」
流れは完全にバルタンが掴んでいると言っていいだろう。ティガの動きを見切り常に先をいくパワードバルタンの戦術に翻弄されるティガ・・・このままでは勝ち目はない。膝をついて息を切らすティガにパワードバルタンは鋏を向けた。
ティガ「グゥ！！！」
バルタンは向けた鋏でティガの首根を掴み上げていと持ち上げ宙に身体を浮かせる・・・ティガは暴れるがしっかりと掴まれたままで抵抗は無駄でしかなかった。
パワードバルタン「死ネ！！！」
パワードバルタンはそのままバイオビームのエネルギーをもう片方の鋏に集中させる。鋏で首を掴まれた状態では身動きが取れないこのままではバイオビームの攻撃がモロに直撃してしまう。
？？？「ブロッサム・シャワーっ！！！！」
パワードバルタン「フォォッ！？」
？？？『はぁあああああっ！！！』
パワードバルタンに向かって花弁の雨が降り注いだ。バルタンがそれに気を取られている隙に何かがバルタンの鋏に当たり思わず手を離してしまう。
パワードバルタン「・・・誰ダ？・・・邪魔ヲスルノハ」
姿が見えない敵にそう問うパワードバルタン・・・するとその正体は下から声を張ってきた。
ブロッサム「私達です！！！」

その正体は当然ブロッサム達であった。姿が見えない事をバルタンと同じように利用し瞬時にティガを救出したのだ。

ティガ「！！！」

今度も助けられてしまったことにティガ（大人）はバツが悪そうになってしまう・・・がブロッサムはティガの方に飛び上がってきた。

ブロッサム「ギリギリ間に合いましたね・・・助けられてよかった」

ティガ「（・・・情けない。またしても俺はブロッサムに助けられるなんて）」

拳を作り自分の不甲斐なさに心でそう呟くティガ（大人）・・・もっと強くならなければと立ち上がるとパワータイプにタイプチェンジする。

パワードバルタン「フォォオ・・・フォフォフォフォフォフォフォフォフォっ！！！！！」

バルタンが1笑いすると更に2体のバルタンの援軍が現れた。1体でも苦戦させられる相手だと言うのに・・・ティガは焦りが生まれるのだがバルタン達は待ってなどくれなかった。

パワードバルタンA・B・C『フォフォフォフォフォフォフォフォフォフォフォっ！！！！！』

3体の連続バイオビームを放つパワードバルタン。ティガとサンシャインがすぐウルトラシールドとサンフラワーイージスを張りバイオビーム3連弾を防御するも3連続のバイオビームを受けきるには無理があった。

ティガ「グゥウッ！！！！」

何とかして防ぎきろうとするのだがティガは耐えられてもプリキュア達は耐えきれるかどうかは分からない・・・。

サンシャイン「っ！！！・・・も、持たない！！」

やはり先に精神力に罅が入ったのはサンシャインの方だった・・・その証拠にイージスにも罅が入り亀裂が大きくなっていく・・・このままではティガよりも先にブロッサム達が・・・

ティガ「・・・ダァアアアアッ！！！・・・グワァアアア

アアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！」
そうはさせないとティガはバリアを解きサンシャイン達の前に出て身体でパワードバルタンの攻撃を防御し始めたのだ。ティガの悲鳴が響き渡るとブロッサム達はその行動に驚いてしまう。
ブロッサム「ティ、ティガ！！！」
それはいくらなんでも無謀だった。１体ならまだしも３体のパワードバルタンのバイオビームを一気に身体で受け止めるなど超人（ウルトラマン）でも耐え難いダメージが身体に襲いかかり最悪は命を落としてしまいかねない。ブロッサム達は一気にムーンライト「・・・・皆、早くバルタンから離れるわよ・・・ティガが食い止めてくれている今のうちに！！！」
ティガの気持ちを察したムーンライトが全員に一度離れるように指示を出す。ブロッサムは一度ためらったがティガの思いを無にしない為にとやむを得ず一度離れる。
ティガ「・・・・（そ、それでいいんだブロッサム。ぐぅ・・・いつまでもお前らの思い通りにさせるかぁああ！！！！！）」
体の字になりながらバイオビームを受け止めているティガはブロッサム達が離れたことを確認するとティガクリスタルをオレンジ色に発行させて組んでいた腕を一気に振り下ろしバイオビームを消滅させた。だがエネルギー消費は激しくカラータイマーの点滅は既に始まっていた。
パワードバルタンＡ「貧弱ダナ・・・ヤハリ光ノ巨人の弱点ハエネルギー消費・・・莫大ナエネルギーヲ生ミ出ス代償ハ大キスギル」
フラフラになり膝をつき両肩で大きく息を切らしてしまうティガに向かって再度３体のバルタンはバイオビームの発射準備に入る。
ブロッサム「ティガ、逃げてぇえ！！！！！」
ブロッサムの声が響くがティガは力が出せず身体を動かす事が出来ない。先程の防御でエネルギーの消費が激し勝った証拠にカラータイマーの点滅もいつもより早い。
パワードバルタンＡ・Ｂ・Ｃ『消エロ！！！！！』

バルタンは止めの一撃とバイオビーム3連弾をティガに放つとティガは爆炎に包まれる。煙と爆炎に包まれて数秒後・・・・ティガは2つの光に助け出されていた。
パワードバルタン『！！？？』
ティガを助けたのは赤き炎の戦士ウルトラマンアースと青い氷結の戦士ウルトラマンデュナミスであった。2人はティガにエネルギーを分け与え回復させる。
アース「シュワッ（何とかギリギリ間に合ったな）」
デュナミス「デヤァッ（無茶しやがって）」
2人はティガを立たせると3体のバルタン星人に向かってファイティングポーズを見せる。
パワードバルタンA「来タカ・・・3人ノ光ノ巨人・・・フォフォフォフォフォフォフォッ！！！」
これで役者はそろったとバルタンは不気味な笑いを受けべるように独特の笑い声を発すると姿を6体に分裂させた・・・今までは本気を出していなかったということなのか？
ブロッサム「向こうは今度こそ本気で私達を倒す気ですね・・・・ならば私達も最初から本気で！！」
ブロッサムのセリフに全員は頷くとナイトがホーリーパヒュームを取り出しもう1つの姿を発動させる準備を整えていく。
ナイト「聖夜の光よ漆黒の戦士に更なる力を！！！」
フェアリー「キャストオフ」
電子音「ＣＡＳＴ　ＯＦＦ　ＣＨＡＮＧＥ　ＢＵＴＴＥＲＦＬＹ」
ナイトはパヒュームに白い種をセットし白い光に包まれもう1つの姿、「キュアホーリーナイト」へと強化変身（パワーアップ）をフェアリーもマスクドフォームからライダーフォームにキャストオフする・・・これでブロッサム達の方の準備は整った。
パワードバルタン「フォフォフォフォフォッ！！！！！！
分身して6体に増えたパワードバルタン達はそのままティガ達ウルトラマン、ブロッサム達プリキュアチームを翻弄しようと目論むが

サンシャイン「どれが本物か分からなくても纏めて動きを止めてしまえば・・・花よ舞い踊れ、プリキュア・ゴールドフォルテバースト！！！！！」

サンシャインの一斉射撃をパワードバルタンは当然分身の術を使って撹乱しようとするのだがヒマワリ型の光弾はバルタン達の身体に纏わりつき動きを封じる。

サンシャイン「今よ、皆！！！」

その瞬間にティガ、アース、デュナミス達ウルトラマンはそれぞれの最強必殺技の発射態勢に取り掛かりブロッサム、マリン、ムーンライト、ホーリーナイトのペアに分かれそれぞれのタクト、ロッドの先端を重ね合わせる。

ブロッサム・マリン・ムーンライト・ホーリーナイト『プリキュア・フローラルパワー・フォルテッシモ！！！！』

それぞれ2組のフォルテッシモがバルタン達に突撃する。その数秒後には

ティガ・アース・デュナミス『ジュワァアアアアアアアッ！！！！！』

フェアリー「ライダーバースト！！！」

ティガのゼペリオン光線、アースのボルテックストーム、デュナミスのインブレイスバースト、フェアリーのライダーバーストが1つに重なり合いブロッサム達のフォルテッシモを包み込む。これぞプリキュアとウルトラマンの合体技・・・その名も

ブロッサム・マリン・サンシャイン・ムーンライト・ホリーナイト『プリキュア・ウルティメイト・フォルティシモ！！！！！』

この新必殺技が決まれば例えパワードバルタンと言えど大ダメージは避けられない・・・だがバルタン達は直撃の前に笑い声を上げ不敵に目を光らせる。

パワードバルタン『ソンナ策略ナド読メテイルゾ！！！！」

突如バルタン達の胸が開くとウルティメイトフォルテッシモのエネルギーが吸収されてしまう。それにより直撃前に技を不発に終わら

せられてしまったのだ1つに集まった全員のエネルギーは拡大膨張させられると・・・
パワードバルタン『《アンチウルティメイト合金》ニヨル「スペゲルン反射光」ノ威力ヲ貴様ラ自身デ味ワウガイイ!!!』
そのままエネルギーはブロッサム達に叩きこまれてしまいプリキュア達は変身を強制解除させられてしまうそして生身同然の彼女たちに更にエネルギー光線が降り注がれるが間一髪ティガ達がその身を盾にしつぼみ達に被弾するのを防ぎきった。
ティガ「ハァ、ハァ、ハァ・・・・・」
だがこれにより3人はエネルギーを使い果たしカラータイマーが点滅をし始める。それでも必死に身体を地に伏せることなくつぼみ達を守る抜く
つぼみ「み、皆・・・無事ですか?」
えりか「な、なんとか」
いつき「だ、大丈夫だよ」
何とか命だけはつなぎとめた・・・不意に上を見ると自分たち以上にボロボロになりながらも身体を盾にしブロッサム達を落下物や光線から守っているティガ達の姿があった。・・・つぼみ達はその姿を見て声を失った・・・・。
つぼみ「このままじゃティガ達や私達も・・・」
えりか「でもアイツ強すぎる・・・このままじゃ今度こそ本当にアタシ達が負けちゃう」
いつき「・・・・・」
バルタン達は完全に自分達の行動パターンを分析し生半可ではない対策を立てていた。一歩先を行くその戦略を打ち崩す手立てはないのだろうか!?
パワードバルタン『トドメダ・・・今度コソ消エロ!!!』
バルタン6体は一斉射撃体勢に入る・・・町ごと完全に消し飛ばすつもりなのだろう・・・今度は本当に避けられない・・・・。絶体絶命のその時、突如赤い彗星がバルタンとティガ達の合間に割入

ってきた・・・その彗星は色が赤から青に変わり徐々に人の形に変化していく・・・光を放ちながら地上に着地するとバルタン達もその彗星の方に近づいて戦闘対象を入れ替えたように見えた。

つぼみ「あ、あれは・・・ウルトラマン？」

青い光は消えてその主の正体が明らかになる。なんとその主の正体は青い目に銀色の体色をした巨人であった・・・ティガ達と同じ超人（ウルトラマン）の仲間なのか？

パワードバルタンＡ「貴様・・・マサカ！！！」

？？？「バルタン・・・この次元でも侵略を繰り広げると言うのなら私は何処へでも現れる・・・わが名はＭ７８星雲光の国の戦士、ウルトラマンパワード！！！！」

銀色の巨人は構えと取るとバルタンに向かっていった・・・対するバルタン達も彼を返り討ちにするべく鋏を振りかざしながら走っていく。

第５５話バルタンの大逆襲ー地球総攻撃計画ー？「青い復讐者と銀色の追跡者」

いきなりブロッサム達大ピンチ・・・・

次回はバルタンＶＳパワードの因縁対決！！！

ではでは次回もお楽しみに♪

第５６話バルタンの大逆襲ー地球総攻撃計画ー？「バルタンの悲劇」（前書き）

前回までのあらすじ～
新たなる敵・・・その正体とは以前倒したバルタン星人の同胞の「パワードバルタン」であった。
分身の攪乱攻撃に更には対ウルトラマン&プリキュア対策としてバルタンが開発した「スペルゲン反射光」よりティガ達は絶体絶命のピンチに追い込まれてしまう。今度こそ負けると思った全員を助けたのは青い光を放つ彗星、その正体は青い目の巨人であった。

第５６話バルタンの大逆襲ー地球総攻撃計画ー？「バルタンの悲劇」

青い光と共に現れた銀色の巨人・・・その名はウルトラマンパワードと言うらしい。彼は素早く身体を動かし一気に距離を縮めるようにパワードバルタンに向かっていくのに対して３体のバルタン星人は即座に分身を行い６体に増える。

パワードバルタンＡ「死ネッ！！！」

バイオビームを放ってパワードにダメージを与えてやろうとしていくのだがパワードはバイオビームを手で弾き返して分身を打ち消してしまう。

パワードバルタン「何っ！！？」

全く微動だもしないパワード。そのまま腕を前に組み右腕に青い光を集めると光の輪の様なものを形成すると一気に腕を振り落としていき光の輪をバルタンに向かって投げつけて行った。

パワード「ダァアアッ！！！！！」

右手から光のノコギリ状のカッターを発射する。高速に動くカッターは２つにわかれると３体のうち２体のパワードバルタンに炸裂し真っ二つに切り裂かれると大爆発を起こして消滅した。これはパワードの独自の切断技の「パワード・スラッシュ」だ。

パワードバルタン「オノレェ！！！！！」

パワードバルタンはこのままでは不利になると背中から羽を出すとそのまま上空に飛び立っていく。

パワード「・・・シュワッ！！（バルタンめ・・・時間稼ぎのつもりか？・・・逃がさんぞ！！！）」

パワードもすぐに飛びあがりパワードバルタンを追いかける。

それまでの様子を見ていたつぼみ達はティガ達のカラダの下でパワードパワードバルタンの戦いを見ていた。

つぼみ「す、凄い」

つぼみは彼の強さを食い入るように見ていた。自分達が束になって

も手も足も出なかったバルタンをいとも簡単に倒してしまったのだから当然の反応と言えるだろう。
セイバー「皆！！！」
食い入るように見ていたつぼみ達にセイバーが声をかけてきた。セイバーのとなりには何と妖精サイズのバルタン星人の姿があった。
えりか「ば、バルタン！！！」
えりかは思わず驚いたようにそう声を上げるがすぐにセイバーが説明に入る。
セイバー「落ちついて皆、この子は味方なのよ。そしてあの銀色の巨人も」
セイバーがそう言うと皆落ちついたのか警戒を解くと隠れていたバルタンの子供は顔を出す。
その頃パワードとバルタンの戦いは空中戦での攻防の応酬が繰り広げていた。パワードとバルタンの戦いは戦いは互角でありながらも徐々に流れが付き始めていたのだった
パワードバルタン「グォオオッ！！！」
パワードの回し蹴りを受けるとそのまま街に叩き落とされたパワードバルタン。パワードはゆっくりと舞い降りるように地上に戻っていく。反応がない事に誰もがパワードバルタンが死んだと思ったのだったが
パワードバルタン「フォフォフォフォフォフォフォフォフォフォッ！！！！！！！！！！！！！」
パワードの真後ろに瞬間移動ししており両手の鋏から連続バイオビームがパワードに向けて放たれていくのだった。
パワード「グォオオッ！！！！」
両腕で何とか腕でバイオビームを防いでいくパワード・・・パワードバルタンの猛攻は勢いを先ずばかりであったが全てを腕の身で受けきっている。
いつき「このままだとあの巨人まで！！！！」
その様子を見ていたプリキュア達は援護しようともう一度変身しよ

うとするだがパワードの様子に変化が現れる。
右手をカラータイマーの前に添え置き左手は足の方に伸ばすポーズをとるとバイオビームがパワードに直撃してもパワードは微動もしなくなったたのだ。パワードバルタンはパワードの様子の変化に気が付かないまま何発もバイオビームを放っていく・・・だが何発当たろうともパワードはダメージを受ける様子などなかった。流石のパワードバルタンも焦りが生まれてきたのかバイオビームの連射速度が速くなっていくのだがビクともしない。
徐々にパワードの上に青い稲妻の様なものが集まり始める。そして疲れて動きが止まってしまっている
パワード「ジュワァアアッ！！！！！」
そして次の瞬間にはバルタンに向かってパワードは腕を十字に組んでいくと青い光の光線が放たれていく・・・光線はパワードバルタンの身体に十字を描いて貫かれていくように降り注がれてる・・・これぞパワードの最強必殺光線の「メガスペシウム光線」だ！！！。
パワードバルタン「グォォオオォォオオオオオオオオッ！！！！！！！！！」
暫く光線を受け続けたパワードバルタンは緑色の光を放っていきながら断末魔を上げていく・・・暫く抵抗のそぶりを見せていくのだが何もできないまま消滅していった。
ティガ「・・・・（凄い）」
ティガ達は立ち上がるとパワードに近づいて行った。光の巨人の本能的な感とも言えるものがパワードが自分達の味方であると感じる事が出来た。パワードも同じようにティガ達を見つめながらゆっくりと光線のポーズを解いた。
パワード「・・・・・」
気がつけばパワードは目を赤く光らせている・・・青だったその目は鮮やかな真紅色に輝きを放ちながら下からの目線に気がついたのか下を見る。
つぼみ・えりか・いつき・ゆり・アンナ『・・・・・・・』

思わず威圧感を覚えたのかつぼみ達は若干引いてしまう。
パワード「シュワァッ！！！」
カラータイマーの音を響かせながらもパワードは素早く飛び上がり空の中に姿を消していった・・・それに続きティガ達3人も飛び上がる。
つぼみ「何者なんでしょう・・・あの巨人は」
つぼみは不思議そうにそう呟いた。アレだけ苦戦したパワードバルタン達をいとも簡単に打ち倒したのだから謎が多いのも無理はないだろう。
えりか「分からない・・・でも物凄く強いってのは分かったね」
つぼみの問いにえりかはそう答えた。ただ1つ言える事と言えばあの銀色の巨人・・・パワードの強さは自分達とは比較にならないほどという事ぐらいだろう。
セイバー「とにかく私たちも一度此処を離れよう。いつまでも此処にいるわけにもいかないし」
セイバーがそう言うとつぼみ達は街を後にした。とにかく今は状況を整理する必要がある・・・今この場にいない大人達も呼び出すべきだろうかと悩んでいたのだが大人達からも連絡が入り全員で集まることとなった。

全員はいつもの会議場となっている植物園へと集まっているのだった。セイバーと共にいたバルタン世人の子供も会議に参加するのだった・・・そしてもう1人青い瞳の謎の青年も。
つぼみ「貴方達は・・・何者ですか？」
つぼみは少し鋭い口調で聞いた。青年は少し考え込むと口を開いた。
？？？「私の名前は・・・パワードと言っておこうか」
青年は静かにそう言う。そして真夜の近くにいたバルタン星人の子供はパワードのとこにとんでいくと元気っぱいに自己紹介を始めた。
？？？「そしてその相棒のタイニーです！！！」
えりか「あ、あの聞いてもいい？・・・もしかして貴方ってあの銀

色の巨人?」
えりかの思わぬ発言に全員は息をのんだ。するとパワードはしてやられたなと言う様な顔になったが静かにうなずいた。そもそもバルタン星人の子供と共に行動をしている時点で只の人間というのは無理があるのだから仕方ないだろう。
大人「パワード、タイニーだね?宜しく俺は上原大人だ。後の面々も紹介しよう」
大人はそう言って握手を求め手を伸ばした・・・その瞬間に突如脳裏に声が聞こえてきたのはそれと同時だった。
パワード「(お前が光の巨人・・・ウルトラマンティガだな?)」
大人「!!!」
パワードはテレパシーで大人にそう聞いてきた事に大人は驚いた・・・どうして彼は自分の秘密を感ずいたのだ?・・・色々話したい事があったが今この場ではまずいと思い残りの面々の紹介をし始めた。そしてお互いに名前と顔が分かった所で本題に入る。
大人「バルタンの同胞・・・《パワードバルタン》」
つぼみ「あの強さは私達の戦い方を今まで見たいたとしか思えません。最初のバルタン星人が最期に言っていた言葉をもっと深く考えているべきだったのかも」
あの時のバルタンの最期の捨て台詞の意味はこの事だったのだ。バルタン星人達は何かの手段で自分達の戦いのパターンを分析し対ウルトラ、対プリキュア用の兵器まで開発していた。地球解放軍事件の時も陰ながらバルタン達は自分達を静観していたとしたらかなり不味い状況なのは言うまでもない。つぼみがそう言い終えた後にパワードが続けて口を開いた。
パワード「まさかこの次元にもバルタンがいたとは私も思いもよらなかった。・・・そして私達ウルトラ一族以外にも光の力を持つ戦士がいた事も。」
ゆり「ウルトラ一族?・・・貴方達はティガの仲間ということでいいのかしら?」

パワードの発言にゆりはそう聞いてきた。パワードのゆりの感の良さに驚いたように彼女を見る。

パワード「《同類》という意味ではこの世界のウルトラマンのティガ、アース、デュナミスもそう言えるだろう。・・・君達には話した方がいいかもしれないな・・・私の故郷である《光の国》そして《宇宙警備隊》について」

パワードは説明を始める。自分はこの世界とは別次元にある宇宙のM78星という光の速度で何億光年もかかると言われている星雲にある《光》という名に相応しく光り輝く美しき星からやってきたという事。宇宙警備隊とはパワード達ウルトラマンが宇宙の掟に背くモノから弱きものを守るための銀河の平和を守る組織であると言う事を。

つぼみ「じゃあ、貴方達は此処とは別次元の地球を守り抜いた英雄・・・という事なんですか？」

パワード「簡単に言えばそうなるだろう」

えりか「どうしてそこまでして地球を？」

パワード「・・・その理由は私達の祖先がこの星と同じ人間の姿をしていたからだ。かつて私達の祖先は・・・」

パワードは再び語る。自分達の祖先のウルトラ一族はかつて人間と川なる姿をしていたのだが突然太陽が爆発した事で多くの人々が死んだ。彼らは暗黒の中再び太陽を取り戻そうと人工太陽を開発したんだ・・・長い長い時間をかけて。そしてようやく完成した人工太陽（ウルトラマンコア）の光を浴びた彼らは超人（プラズマスパーク）の力を手に入れたと言う事らしい。そしてウルトラマン達は自分達の故郷と似ている地球を守る事や弱きものを守る事が力を得た意味だと結論づけたらしい。

夕「・・・なんかスッゴイよ。ウルトラマンって」

いつき「うん。・・・ボク達プリキュアなんか目じゃないぐらい。・・・でも分からないのがバルタン星人はどうしてあそこまで人間を蔑むんだい？まるで地球人を憎んでいるように見えるんだけど」

壮大すぎる話を聞いて力が抜けそうになった。世界には自分達が知

らない戦士達がいると言う事を知れば誰もがそうなるだろう・・・
だが1つ気になる事があったバルタンがなぜあそこまで地球にこだわるかだ・・・・・・その質問にはタイニーが答え始める。
タイニー「その質問には私が答えますね。理由は・バルタン星の過去にあります。・・・私達の星が爆発してしまったことがバルタン星人にとっての明けない夜の始まりでした」
タイニーはバルタン星の歴史を語り始めた。バルタンの故郷に当たるバルタン星は科学者の実験のミスで星が爆発してしまったのだ。
タイニーを含めた宇宙旅行に出ていたバルタン星人達は宇宙を漂流するうちに精神が追いつめられていってしまい内部でも分裂が起こり始めてしまったと言う。・・・そして宇宙船が故障した事でたまたま立ち寄った地球を過激派達が第2の故郷にすると言い始めた事が全ての始まりだったと。もちろんタイニー達穏健派のバルタンは反対したのが現代のバルタン一族の長が過激派であったがためにタイニー達は一族に追われる身となってしまったとのことだ。
琢磨「・・・だからってあんな真似は」
タイニー「・・・パワードバルタンは恐らくどんな手を使ってでも地球を手に入れようとする筈です。この世界の様々な事件の黒幕である闇の支配者ダークから受け取った次元転移装置でこの次元の宇宙にやってきたという情報を私は独自に掴んだんです・・・・でもそのことを貴方達に伝える前に過激派達に見つかって・・・・・」
パワード「私が助けたと言う事になる・・・私が此処に来たのは自分の次元の太陽系をパトロールしていた時のことだった・・・」
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜パワード登場時の回想シーン〜
パワード「最近は太陽系ものどかで平和だな。カイザーベリアルが死んでから侵略者が現れないからかもな・・・さて地球まで一回りしたらパトロールは終わりだ」

太陽系をパトロールしていた時だった。謎のワームホールを見つけた事がパワードが此処に来るきっかけであったのだ。

パワード「・・・なんだあれは？」

土星付近を飛行していると何やら空間が歪みワームホールが出来ているのを発見する。何やら禍々しい空気とはなっているので迂闊には近づけないと思っていたのだったが突如吸い込まれるように次元の裂け目から重力派がはなたれていくと彼の巨体もその威力は生半可なものではなかった。

パワード「んぐっ！？？・・な、何だ・・・この力は！！・・・・・うわぁあああああああ～～～～～っ！！！！！！！！」

パワードはそのままワームホールに吸い込まれてしまった。異空間に吸い込まれて数分後にはさっきと同じようである宇宙空間に飛び出されてしまった。

パワード「こ、此処は・・・別の宇宙か？」

パワードは普段とは違う感覚に自分がさっきまでいた宇宙とは別次元であると判断が出来た。ワームホールはまだ健在であるからまた此処に入れば元いた場所に戻る事は出来るだろう。とりあえず今いるのがどの宇宙領域か判断する為飛び立とうとしたが小さな物体がこちらに向かってきた。

？？？！「助けて下さい！！！」

パワード「わっ！？・・・き、君は？」

？？？２「お、追われてるんです！！！・・・あぁ、来た！！！」

巨人の懐に飛び込んできたのは何とバルタン星人の子供であったのだ。慌てている様子で何やらただ事ではないと巨人は察した。そしてその数秒後になんと青い身体をしたバルタンが現れた。

バルタン兵士Ａ「見つけたぞ・・・タイニー―！！！」

バルタン兵士Ｂ「貴様の処分は既に将軍から通達が来ている。バルタン一族でありながら命令に背いた罪で貴様を即時排除だ」

タイニー―「ひいっ！！？」

どうやらバルタンの子供はタイニー―という名前らしい。巨人はタイ

ニ―を自分の後ろに下げさせると自分は前に出る。
パワード「そうはさせん！！！」
パワード身構え独特のポーズをとる。目の前で弱きものが困っているのに見す見す放っておくなど毛頭ないようだ。
バルタン兵士Ａ「銀色の体色・・・貴様Ｍ７８星雲のウルトラ一族のウルトラマンパワード！！！」
バルタン兵士Ｂ「貴様らには我等先祖の恨みがある・・・貴様には悪いが先祖の仇を取らせてもらおうか！！！」
パワード「バルタン、この世界でも殺略を繰り広げているのか・・・目的の為なら身内にまで手をかけるなど絶対にさせん！！！」
巨人の正体・・・銀色の体色に清い輝くを放つ青い目を持つ彼の名はそうかつてバルタン星人の侵略から地球を守り抜いた電ゼつの戦士の１人ウルトラマンパワードであったのだ！！！。彼は青い目を紅く光らせるとそのままバルタン兵士達と闘うべく勢いよく前に飛び出すと同時にバルタン達も迎え撃とうと鋏を光らせながら前に出る。
パワード「ハァアアッ！！！」
その頃の銀色の巨人ことパワードとバルタン兵士の闘いは互角の一途を辿っていた。最初は２人相手に苦戦を強いられてはいたのだがそれでも伊達に戦闘訓練を受けていないのか敵の攻撃パターンをあっという間に見切るとパワー溢れる体術でバルタン達の懐にチョップやパンチを放って徐々に流れを掴み始めていくのだった。
バルタン兵士Ａ「お、おのれぇ～・・・初代サイコ様の計画を打ち破った戦士だけの事はあると言うことか」
バルタン兵士Ｂ「・・・こうなればコイツは後回しだな・・・死ねぇえタイニ―！！！」
バルタン兵士の１人はこうなればパワードよりも裏切り者を倒す事を優先すると離れていたタイニ―にバイオビームを放つ。
タイニ―「ひ、ひぃ！！！」
身動きが取れないタイニ―・・・赤い閃光が迫ってきて身体を包み

こんでいこうとしていく・・もう終わりだと諦めかけたその時青い閃光がギリギリタイニーを守り抜いたそしてタイニーの周りには青く輝くシールドが発生していたのだった

パワード「大丈夫か!?」

タイニー「は、はい!!!」

そう守ったのはパワードだったのだ。ギリギリのところでバイオビームを光線で相殺しシールドを発生させてタイニーの身を守ったのだ。

バルタン兵士Ｂ「き、貴様ぁ!!何故ウルトラ一族がバルタンを庇う?」

パワード「一族など関係ない!!!・・私達は弱きものをただ守るだけの事。貴様らのような宇宙の掟を破る者からな」

バルタン兵士Ａ・Ｂ『き、貴様ぁあっ!!!!ならば貴様から死ねぇええ!!!!!』

バルタン達は遂に激昂しバイオビームを連発するがパワードはそれを身体で受け止めそのまま凝縮したエネルギー弾をバルタン２匹に叩きこんでいった。

パワード「シュワァ!!!!!!!」

バルタンＡ・Ｂ『グォオォオッッ!!!??』

２匹のバルタンは幸い命だけは助けられた。このまま戦っても勝ち目はないと判断したのか何も言わずに消えていった。

パワード「大丈夫かい?」

タイニー「は、はい。ありがとうございます!!!」

タイニーに張っていたシールドを解除させるとパワードはそう言った。よく見るとタイニーの身体はよく見るとボロボロであったのが確認できる・・逃げるさなかで追った傷であるのだろうとパワードは判断した。

パワード「で、一体何で奴らに追われていたんだ?・・・君もバルタンだろ?」

早速本題に入るパワード。バルタンの考える事はかつてバルタン星

人と闘ったことのあるパワードは大体察しがついてはいる・・・そしてこの世界にもあの星があるのなら・・・パワードはそう思っていた。
タイニー「私達の同胞が・・・地球に総攻撃を仕掛けようとしているんです。仲間が光の巨人に倒されたその仇を討とう・・・それだけじゃなく地球支配を目論んでいるという情報を掴んだので今地球を守っている光の巨人にこの事を伝えようとしたら彼らに見つかってしまって・・・」
パワード「光の巨人！？（まさか彼らがこの次元の地球に・・・確認した方がよさそうだな）わかった。案内してくれるか？」
タイニー「はい！！！」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

大人「そうだったのか」
パワード「ああ。気をつけた方がいい・・・バルタン達はあの程度で侵略を諦めるような奴らじゃない・・・恐らく私が君達の助けに入った事でまた新しい策を練っているはずだ。・・・以前レッドキング達の星を奇襲したという事もタイニーから聞いてるからそれで手に入れた怪獣達をまた利用するかもしれない。」
パワードはバルタン達はまだ諦めていないと忠告を始めた。確かにもしもタイニーの言う事が本当だとしたら新しい策を練っているに違いないからだ。だが今更この程度で動じるほど大人達は器が小さいわけではない・・・大人はパワードに対して上等だと言うばかりに目を見せて口を開いた。
大人「もしもそうなったら・・・今度は絶対に負けないようにする・・・それだけだ！！！」
大人は静かにそう言った・・・それに続きつぼみは立ち上がった。
つぼみ「そうです！！！。また怪獣達が来たら私達プリキュアが助け出すまでです！！！」

えりか「バルタン達が相手でも今度は絶対に負けない・・・絶対に！！！」

いつき「うん。今度も負けられない戦いになるね」

つぼみに続きえりか、いつきもそう言って覇気を見せる。相手は仮にも以前に戦った相手・・・どんな理由（わけ）があろうとも殺戮を許すわけにはいかない・・・今この場（希望ヶ丘）には自分達の世界を守れるのは自分達しかいないから・・・今度も負けないと全員の意思はすぐに決意へと固まった。

ゆり「当然ね。でも敵が策を練っている以上は私達もバルタン達の対策を考えた方が良さそうね」

今時点での問題はただ1つ・・・それは自分達の光線や特殊攻撃（フォルテッシモ・フォルテウェイブ）を無力化する「アンチウルティメイト合金」だ。あれを何とかしなくては勝ち目はないのは明らかだろう・・・するとパワードは笑みを見せて立ち上がる。

パワード「それに関しては考えがある。君達にはこれから【気力】を鍛えてもらう」

大人達全員『気力？』

パワード「そう、【気力】だ」

パワードは全員にそう言った。パワードが言う【気力】とは一体何なのだろうか？

その頃の地球の衛星の月の裏側では全長５００メートルのバルタン戦艦内でバルタンの総司令官のサイコバルタン星人がいた。

サイコバルタン「ウルトラマンパワード・・・コノ次元ニモ姿ヲ見セルトハ」

バルタンの過激派とパワードバルタン星人を統括する高い知能を持ったバルタン星人・・・それがサイコバルタンであるのだが別次元からパワードがやってくる事までは想像が出来なかった事は彼にとっては誤算であった。

サイコバルタン「マァ、イイ。貴様ラノ更ナル【データ】ヲ取ラセ

テモラウダケ・・・我ガ宇宙恐竜ガ完璧ナル強サニ得ル為ニ」
バルタン兵士「サイコ様・・次ノ手ハ如何致シマショウ？」
サイコバルタン「次ハ例ノ改造怪獣達ヲ投下シロ！！！・・ソシテ・・・【ドラコ】モ共ニナ」
サイコバルタンはそう指示を出した。次なる手はすでに考えているようであった。以前ウルトラマンパワードと戦った事がある彼ならではの作戦があるようであった。
着々と進んでいくバルタン総攻撃計画を大人達は阻止する事が出来るのであろうか！？

第５６話バルタンの大逆襲ー地球総攻撃計画ー？「バルタンの悲劇」（後書き）

パワードが光の巨人に反応した理由とは？・・・・

次回からはアンケートで要望がある怪獣達が登場します！！まだ第３のアンケートは期限があるので要望があればどうぞ～

ではでは次回もお楽しみに♪

第57話バルタンの大逆襲ー地球総攻撃計画ー？「特訓開始」（前書き）

前回までのあらすじ～
明かされるバルタン一族の過去とウルトラ一族の真実・・・つぼみ達は着実進みつつあるバルタンの地球総攻撃計画を止めるべくパワードから気力の鍛錬を課される事になった。
一方バルタンの長「サイコバルタン」は次なる策として惑星サウリアから採取した改造怪獣達の投下準備に入った。
※小説内で気力について説明する部分がありますがあくまでも私の設定ですので公式でいわれている気力とは全く無関係です。

第57話バルタンの大逆襲ー地球総攻撃計画ー？「特訓開始」

パワード「訓練は此処で行ってもらおう。」
先ずはプリキュア達の始動が先だと言う事で大人、琢磨、傑以外の面々はパワードに光に包まれた空間につれてこられたのだった。その光は物理の法則を完全に無視していて地平線が果て無く広がっていた。この異空間は一体何なのだろう？・・・外と比べると身体が重く感じた・・・それになんだか夏は過ぎたというのに気温も蒸し暑くも感じた。
つぼみ「此処は一体？」
つぼみ達は何が何だか分からなかった。プリキュアパレスとはまた違う雰囲気だ・・・パワードはつぼみ達の方見る。
パワード「此処は私達ウルトラ一族が惑星間を光速で・・・いわば光の速度で移動するときに発生させる異空間だ。外とは時間軸が違うし此処でどれだけ騒いでも外には何も影響がない。」
つまりはパワードの宇宙船の中とも言ってもいいだろう。
えりか「へぇ～・・・すっごいなぁ！！！」
えりかははしゃいだ様にそう言う。これからどんな特訓があるのだろうと誰もが思っているとパワードは先ず全員に【気力】の講義を始めると言い出した。
パワード「先ずは【気力】の事について理論を学んでもらう。【気力】とは誰にも存在するんだ・・・・人の感情、つまりは怒り、悲しみ、喜び・・・心にある様々な感情が複雑に混ざり合いながら形成される。」
いつき「じゃあ、一般の人間でも気力を操る事は出来るの？」
パワード「ああ、使い方さえ覚えれば子供でも扱える・・・ただしそれなりの素質（センス）が必要となる。」
パワードが言うには気力とは人間の生体エネルギーを具現化したものであるとのことらしい。パワードのメガスペシウム光線やパワー

ドスラッシュがバルタンの「アンチウルティメイト合金」に競り勝ったのはスペシウムエネルギーの中に自身の気力のエネルギーを送り込んだことで破壊力が増大させた事とスペルゲン反射光がパワードのエネルギーを跳ね返す前に一気に蒸発させるほどのエネルギーを撃ちこんだ事がバルタンに勝った原因であると告げた。

真夜「成程ね・・・だからああも簡単にアンチウルティメイト合金を持ったパワードバルタンを倒せたと言うわけね」

真夜も納得したようにそう言った。ティガ達のゼペリオン光線すら跳ね返す筈のスペルゲン反射光がパワードに通用しなかった理由が気力のエネルギーを混ぜ合わせていたと言うからくりがあると言うのなら納得がいくからだ。

パワード「そうだ。アンチウルティメイト合金の唯一の弱点は君達の中の光エネルギーしか反射できないと言う事・・・つまりは他のエネルギーと混合させてしまえば簡単に突破できるんだ。」

パワードは更に解説を進めていく。【気力】が持つ無限の可能性を・・・攻撃以外にも応用さえできれば回復術も行えると言う。

パワード「さて、ではそろそろ始めようか・・・気力の鍛錬を」

パワードはそう言うと自分の上着のポケットからカプセルを取り出すとそのままカプセルを空に掲げるとそのまま青い光に包まれるパワード「・・・この空間では私の時間制限も無くなる。君達も変身するといい」

等身大の姿となったパワード。青い稲妻を辺りに放ちながら余裕そうにつぼみ達にそう言う。

つぼみ「分かりました。」

それぞれココロパヒューム、ココロポット、イリュージョンロッドを取り出す5人は5色の光を放ち妖精達から種を受け取ると変身準備は完了する・・・

つぼみ・えりか・いつき・ゆり・アンナ『プリキュア・オープンマイハート!!!』

5色の光に包まれていくとつぼみ達の姿は戦士（プリキュア）の姿に一瞬で変化し

ていた。それに続き夕はゼクターを呼び寄せる。
夕「変身」
電子音「ＨＥＮＳＩＮ」
ブローチにゼクターを装填すると白銀の鎧に包まれた仮面戦士（マスクドライダー）へと変身する。それに続き真夜とロモモも準備を始める
真夜「ロモモ、私達もいくよ」
ロモモ「オッケーロモ！！！」
ペンダントに姿を変えたロモモ。それを手に取り真夜は念じるように眼を閉じた。
真夜「プリキュア・セイントリバース！！！」
真夜も一瞬にして救世の戦士キュアセイバーへと変身を完了させた。これで完全に役者は揃った・・・パワードは青稲妻を光らせながら全員の姿を見た。
パワード「・・・・（コレがこの世界の守護者の姿か）よし、では特訓に入る」
7人の前にパワードは岩石の様な物体を召喚する・・・見た目は青く輝く水晶の様に透き通っていてガラス玉にも見えた
パワード「先ずは、全員でこれを素手のみで砕いてくれ・・・1人でも全員でも構わない・・・とにかく素手だけで粉々に砕いてみろ」
意味ありげな口調でそう言うパワード・・・全員は一体何の訓練なのだろうかと不思議そうな顔になる。
ブロッサム「じゃ、最初は私がいきます」
わけが分からないがとにかくこの岩を砕けばいいだけの話であるのだろうと最初にブロッサムが前に出た。一度大きく息をして集中力を高めると勢いよく腕を岩石に向かって打ちこんだのだが・・・。
ブロッサム「い、いたぁ～～いっ！！！！」
ブロッサムの全力パンチを受けても岩石はビクともしない・・・逆にブロッサムの手が赤くはれ上がってしまった。
マリン「だ、だいじょーぶ！？」
慌ててマリンが駆け寄りブロッサムに駆け寄る。その様子を見てい

たパワードは少し高圧的になっていて腕を組んでそのそう見ていた・・・。その様子を見てマリンは少し膨れた表情になっているのも完全無視であったのだが。

パワード「さぁ、どうしたんだ？・・・早く砕いてみなよ」

少し高圧的な態度を見せてパワードはプリキュア達にそう言い放つ。

ブロッサムに続き少しムッとしたマリンとサンシャインが前に出た。

マリン・サンシャイン『はぁあああああっ！！！！！！！』

ムーンライト・ホーリーナイト『たぁあああああああっ！！！！！』

セイバー・フェアリー『でやぁあああああああぁああっ！！！！！』

マリンとサンシャインがダブルパンチを放ったが岩石はびくともしなかった。・・・それに続きムーンライト、ホーリーナイトの【月影姉妹】、フェアリー、セイバーの一斉攻撃を放っても素手では傷1つ付かなかった。その後全員がかりで岩石に向かって全員の一斉パンチ、一斉キックを放っていくのだがどんなに力を叩き込んでいっても結果は変わらなかった。

プリキュア一同『はぁ、はぁ、はぁ、はぁ、はぁ』

体力ばかりが削られてしまい全員一度小休憩を取り始めてしまう。

パワードはそれを見てそろそろ種明かしをしよう岩石に近づく。

パワード「砕けないのも無理はない。この岩石はＭ７８星雲のメタル星特有の純度の高い【ブルーライト鉱石】・・・この星にあるダイヤモンド以上の強度を持つゆえに”力だけ”では簡単に砕ける筈はない・・・だが」

パワードは腕に青い稲妻をバリバリと溜め始めるとそのままブルーライト鉱石に向かってパンチを放つ・・・すると次の瞬間には粉々に砕かれた。

プリキュア達一同『・・・・・・』

一瞬で砕け散った事に驚かない方がおかしいだろう。パワードは驚いているプリキュア達の目線を感じながらも涼しい態度を見せている。

パワード「コレが【気力】の力だ・・・純粋な力では砕けない壁

も砕く」
腕にバチバチと青い稲妻を放ちながらパワードは全員にそう言った。
これが【気力』の可能性と力（パワー）・・・これを自分達の力としてモノにできれば今までと違い超人（ウルトラマン）と対等に戦う事が出来る・・・ブロッサム達は更に気合が入りパワードと共に血の滲む様な特訓を開始した。

その頃大人達はというとパワードに言われて現実世界で待機ささられていた。流石に全員で特訓を開始してしまうとバルタン達の襲撃に対して誰も応戦出来なくなってしまうと言う事をパワードに言われて自分達で残ると言ったからである。
大人「・・・・・・」
大人は落ち着きのない様子であった。・・・パワード曰く現実世界の1日で修業は終わるとのことらしいがその間にバルタン達の攻防に自分達が耐えきれるかどうか分からない。
琢磨「落ちつかないな・・・大人」
落ちつけと言う方が無理なのは琢磨も傑も分かっている。今の自分達の力でバルタン達のアンチウルティメイト合金に敵わない。修行出来ると言うのに待たされる歯痒さに苛立ちを覚え始める。
傑「・・・嫌なぐらいの静けさだな・・・まあ、まだあの襲撃から1時間も経っていないから当然か」
数時間たっても何もない・・・いや、何もない事が逆に恐怖を煽っているのだ。もしも今唯一パワードがいない状態でアンチウルティメイト合金を持ったバルタン（バルタン）の尖兵が街を襲撃でも始めた・・・・
そんな事を思うと怖くて堪らない。
琢磨「・・・今は奴らが来ない事を祈るばかりだな」
琢磨も傑も同じ気持ちなのか落ちつかない様子であった・・・・嫌な予感しかしない。つぼみ達がパワード度と共に異空間に入ってから約3時間がたったころだった・・・・
爆発音「ドゴォオォオオォオオオンッ！！！！！！！！」

大人「・・・変な予想するんじゃなかったかも」
琢磨「言えてるな・・・」
傑「・・・行くぞ」
3人の予想が的中したかのように街から爆発音が響いてきた。大人達は大急ぎで爆発があったと思われる街へと向かう。
パワードガギ「ギシャァアアアウウウウウウウウッ！！！！！！！！！」
パワードテレスドン「グォオォオォオォオォオォオォオォオォオォオォオ！！！！！！！！」
パワードビサーモ「ウォォオオオオォオオォオオォオオォオオォオオォ！！！！！！！！」
パワードシルバゴン・パワードゴルドラス『ガァアアアアアアオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！！！！！！！！！」
パワードジェロニモン「ゴゴゴォオオオオオオオオオオオオオオオオッ！！！！！！！！！！！！！！！」
そこには生体改造を受けた6体の怪獣が剛炎の中で合唱をしていた。かつてバルタンが襲った惑星サウリアで捕えた怪獣たちだ。その目には生気は無く只の機会の様に暴れ回っている姿を見て大人達は憤怒の感情が一気に心から込み上げてきた。
大人「バルタンめぇ！！！！」
クレイズや白夜太陽も非道ではあった・・非道以外にも白夜の場合は復讐心があったかもしれないがバルタンにはさらに別のものが感じられる。
大人達3人は一斉にスパークレンスを取り出す・・・そのままスパークレンスのスイッチを押し光を解放し怪獣達の前に立ちふさがった。
ティガ「ハァアア！！！！」
アース「デヤァア！！！！」
デュナミス「ハァアッ！！！！」
3人はこれ以上は好きにさせるわけにはいかないと6体の怪獣に向

かって走る。ティガはシルバゴン、ガギにアースはテレスドンとビサーモにデュナミスはゴルドラスとジェロニモンに分担する。3人は怪獣隊の被害を食い止めながらもこれ以上は被害が出ない所まで引きつけた。よって場所は街から離れた山岳地帯に移り変わった。

ティガ「ハァアッ!!」
シルバゴン・ガギ『グォオオオオオオオオオオオォオッ!!!!!!!』
極力怪獣たちを傷つけないようにしようと格闘戦のみを駆使する・・・だが生体改造を受けたシルバゴンとガギが腕力が強力でティガを押し飛ばしてしまった。
ティガ「グゥ・・・・（なんて馬鹿力だ。仕方ない）」
ティガは上を前に組むとティガクリスタルに赤い光を集めてその腕を一気に振り下ろすとマルチタイプからパワータイプにタイプチェンジする。すると何やらシルバゴンはそれを見て物珍しそうになり・・・。
パワードシルバゴン「グォオオッ!?グルルルル・・・・・ガァアアアアッ!!!!!・・・グゥゥ!!!・・・・・?」
なんとシルバゴンもティガと同じようなポーズをとって同じように構えと取る。だがシルバゴンのカラダの色は当然変化するわけがなかった・・・それを見てシルバゴンは怒ったような仕草をしながら思わずガギに張り手を喰らわした。
パワードガギ「ギシャアァアアッ!!???・・・・グルルルルルッ!!!!!!!!」
ガギは何やら納得がいかない様な目になったが力では敵わないと言う事が分かっているのだろうか?睨みつけはしたがそれ以上の事はしなかった。
ティガ・パワータイプ「・・・・（漫才コンビ?）」
思わずティガは心の中でそう呟きながらも暴走を止めようとシルバゴン、ガギに向かう

アース「ハァアアアアッ！！！！！」
パワードテレスドン「ギシャァアアアアアアアアッ！！！！！！」
アースとテレスドン、ビサーモの対決は格闘戦で優れるアースは序盤は追いこんでいた。だが防御力はテレスドンは負けておらずアースの剛腕をも防ぎきる。
パワードビサーモ「グォオォオォオオオ！！！！！！！！！」
アース「グアァアアアアアアアッ！！！！！！！！」
さらにビサーモがテレスドンの援護に入り雷撃弾を放ちアースのカラダを痺れさせる。その隙にテレスドンがアースのカラダに圧し掛かり巨体でアースを押し潰そうとしていく。
アース「グゥッ！？・・・・ウォオオ・・・・アァアアッ！！！！！」
だがアースも潰されるのを黙っているほど優しい性格ではない。持ち前のパワーを使って下からテレスドンを持ちあげるとそのままビサーモに向かってテレスドンを投げ捨てた。テレスドンの重量に辺り軽い自身がおるほど揺れる。
アース「ハァ、ハァ、ハァ、ハァ・・・・デヤァアッ！！！！」
息が切れそうになりながらも立ち上がるアース。そして慌てている2匹に向かって飛び蹴りを放つ。しかしちゃんと加減はしているようで必要以上には攻撃はしない。

デュナミス「ハァアアアっ！！！！！」
パワードゴルドラス「ギシャァアアアアアアアッ！！！！！！！！」
パワードジェロニモン「ゴォオオオオオオオオオオオッ！！！！！！！」
パワーでは押されてしまうデュナミス、シルバゴンの同族のゴルドラスとジェロニモンの対決はパワー勝負では分が悪いと判断したデュナミスがスピード戦法で攪乱しながらゴルドラス達に攻撃を行っ

ていた。しかしセイバーは使わず素手のみで攻撃をしているその様は忍者を想わせた。

デュナミス「シュワァッ！！！」

光速移動（クロックアップ）を思わせる超高速攻撃をゴルドラスとジェロニモンに見舞わせ敵に反撃の隙を与えない。だが流石のジェロニモン達もいい気にはさせまいと白色光線をデュナミスに浴びせるとデュナミスは重力に逆らう様に飛び上がらせられるとそのまま地面にたたきつけられてしまった。

デュナミス「グゥ・・・っ！！！！」

そのまま一気に接近戦に持ち込まれてしまうとデュナミスはピンチに立たされる。何とか距離を置かなくてはと離れようとするがゴルドラスとジェロニモンに挟まれてしまい身動きが取れない。

デュナミス「ウゥウッ！？・・・・・デヤァアアアアアアアアアッ！！！！！！！！」

このままでは自分がやられてしまうと判断したデュナミスはエネルギーを身体内部で爆発させてそのまま2匹をふっ飛ばしその瞬間に離れる。そして今度は上空に飛び上がる。

デュナミス「ハァアアアアアアアアアッ！！！！！！！！！！」

そのまま垂直に飛び下がり上空から2体の怪獣に足を突き刺す。体力を奪うだけならばこれだけでも十分なダメージを与える事が出来るだろう。

サイコバルタン「フゥン・・・ヤハリ下等生物デハ生体改造ヲシテモコノ程度・・・ダガ・・・コイツニハ勝テマイ」

バルタンが母艦から怪獣達の様子を見ていた・・・サイコバルタンは少しがっかりしたような声になっていたがすぐにその声は自信にあふれる口調に変わった。

ティガ・パワータイプ「（このまま戦っても傷つけるだけ・・・・だがそれでも奴らを気絶させる事が出来れば）」

あくまでも殺しはしない・・・バルタン達を倒す以外には根本的な解決は望めない以上は無益な殺生はしたくはない。・・・今の状態ならばあの技で何とかなるかもしれない。そう思ったティガはテレパシーで2人に話しかけた。
ティガ「アース、デュナミス・・・今ならば6体を封じ込めるかもしれない・・・あの技を使おう！！）」
アース「アレを？・・・そうだな。実戦で試すのは初めてだけど・・・やるしかないな）」
デュナミス「ああ。・・・今から使えばつぼみ達が戻るまでの間なら時間もある筈だ」
3人は空に飛び上がり上空で体内の光エネルギーを解放しピラミッド型のフィールドを作り始める・・・そのフィールド内に弱った怪獣達は閉じ込められた。これぞ3人のウルトラマンの力で唯一敵を封じ込める技でありその名は「ウルトラ・トリニティーフィールド」
ティガ「（コレでしばらくはコイツらを封じ込められる。・・・後はつぼみ達が戻った後にこのシールドを解放しプリキュアの力で浄化してもらえば・・・殺さずに済む）」
大量のエネルギーを消費したが目的は達成できた。ティガ達は飛び上がろうと空を見上げるのだが・・・・。
ドオオオオオオオオオオオオオン！！！！！！！！！！！！！！！！！！
突然自分達の魔後ろに巨大な隕石の様なものが落ちたきた。3人はすぐに後ろを振り返ると巨大な隕石が姿を見せていた・・・そしてその隕石は卵が割れるように罅が入ると中から新たに別の怪獣が姿を現した。
？？？「ギシャァアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！！！」
巨大な羽を持ち手は袋状になったいるその姿からは不気味さを漂わせている・・・体色はその不気味さにはあわないピンク色で目は

バルタン星人を想わせるように白目がなく赤い光を放っていた。
サイコバルタン「フォフォフォッフォオフォッ！！！・・・サァ、行ケドラコ・・・パワードトプリキュアガ姿を現サナイ今コノ時に3人のウルトラマンノデータを採取シロ！！ソシテ願ワクバ・・・ソノ力デ殺シテシマエェ！！！！」
パワードドラコ「ギシャァアアアアアッ！！！！！！！！」
口を横に開かせて袋状の手から巨大なカマを取り出しドラコはサイコバルタンの命を受け3人のウルトラマンの前に向かっていく。ゆっくりと殺し屋がターゲットに近づくかのように・・・・
ティガ「（な、何なんだコイツは！？）」
ティガ達はドラコを見てすぐにタダならぬものを感じ取った・・・コイツは今さっきまで戦っていた怪獣達とは格が違う・・・コイツは恐らくバルタンが造り出した造獣（キメラ）・・・生体改造の跡など見られないし何より目の光に生物特有のオーラと言うべきものが何1つも感じられない・・・本能的な何かが自分達に言っている・・・コイツには本気で戦わなければならないと。つぼみ達が戻るまで何としても守り通さねばならない3人のウルトラマンは全力で暗殺者（ドラコ）に向かっていく。

第57話バルタンの大逆襲ー地球総攻撃計画ー？「特訓開始」（後書き）

怪獣は今回出た以外にもまだまだ登場しますので楽しみにしていたくださ
い♪

さてさて次回はドラコに挑むティガ達・・そしてつぼみ達の特訓により開花した力
ではでは次回もお楽しみに♪

第５８話バルタンの大逆襲ー地球総攻撃計画ー？「闇のプリキュア・・・キュア

前回までのあらすじ～
パワードの特訓による強化を計るつぼみ達。同じころ６大怪獣達の奇襲を何とか退けていたティガ達であったのだがサイコバルタンの造獣・・・ドラコが現れた。

第５８話バルタンの大逆襲ー地球総攻撃計画ー？「闇のプリキュア・・・キュア

パワードドラコ「ギシャァアアアアアアアッ！！！！！」
パワードラコは口を開いて声を上げるながらもゆっくりと近づいてくる。その動きからは何かしらか戦いに対しての余裕を感じられる。
最初にティガがパワータイプのまま向っていくと一発胸に重たいパンチを放っていくが袋状の右腕に受けとめられるとそのまま逆にドラコの左手で飛ばされてしまった。
ティガ・パワータイプ「（見かけによらずパワーが強い・・・防御力も堅そうだな）」
飛ばされたティガは身軽な動きをしながら着地しながらドラコの動きを観察する。仕草にも隙は見られない・・・接近戦でダメならばとアースとデュナミスは光線技で勝負だとバーンシューターとスプラッシュトルネードを同時発射すると赤と青の光が混合しドラコのカラダに降り注がれたが・・・。
ドラコ「・・・・・・」
全くもって効いている様子はない・・・身体は後ろの仰け反らせるような仕草はするもダメージを受けた様な様子などは無い。口を開きながらもドラコは天空に顔を上げる仕草をする・・・それは特殊な音波が空に向けて放たれているとはこの時のティガ達は知る由もなかった。
サイコバルタン「・・・来タカ」
サイコバルタンはドラコが送ってきたデータを戦艦内部に転送しある培養液ポットにインプットする・・・データを送信した瞬間に培養液に入っているソレは鼓動が始まる・・・まるで心臓が動くかのように。
？？？「ピポポポポポポポポポ」
ティガ「ハァアッ！！！！、デヤァアアアッ！！！！！」
光線技も通用しないのならば格闘戦で弱らせてから一気に倒すしか

ないとティガがスカイタイプにチェンジしスピード戦法に持っていくも全て避けられて効果が見られない。上手く当たっても腕で防御されてしまい直接的なダメージは与えら得ない・・・・只でさえエネルギーを消費した今の状況では短期決着が望まれるが・・・ドラコの攻撃は素早く的確で自分達は動きについていけない・・・・このままではと焦り始める3人。

カラータイマー「ピコン、ピコン、ピコン」

遂にはカラータイマーも点滅をし始めてしまう・・・エネルギーが切れる前に早期決着を狙ったが故にまともな攻撃もできずに時間だけが過ぎていく・・・流石にもう躊躇ってはいられないとティガはゼペリオン光線、アースはボルテックヒート、デュナミスはインブレイスバーストを同時発射しドラコに浴びせるもドラコのカラダからまるで鏡が光を反射するかのようにティガ達に光線が跳ね返されると身体に直撃してしまった。

ティガ「グゥウッ!!・・・・グォオオォオ」

アース・デュナミス『アァアア・・・ッ』

カラータイマーの点滅が早くなりからがに力が入らなくなってしまう・・・ドラコは手からカマを取り出しそれを上に振りかざす。

このままではティガ達3人は切り裂かれてしまうだろう・・・

ティガ・アース・デュナミス『!!!!』

カマが振り下ろされた瞬間に3人は力を振り絞りジャンプしてドラコと距離を置くと一時撤退するように空へと飛びあがった。

ドラコ「ギシャァアアアアアッ!!!!!!」

ドラコは逃げたティガ達を見て勝ち誇ったかのように翼を広げて雄叫びを辺りの轟かせた・・・そしてゆっくりと何か怪しい光に包まれると何処かに姿を消すのだった。

大人「な、なんて奴だ・・・俺達の光線を跳ね返すなんて」

変身を解いた大人達は傷だらけのカラダに鞭を撃ちながらも植物園に戻っていた・・・ドラコが並大抵の怪獣でない事は見た瞬間か

ら分かってはいたがこれほどまで強敵であるとは想定外もいい所だった。
琢磨「怪獣たちを閉じ込めていた事でエネルギーを消費していたのもあるけど・・・アイツは例え全力であったとしても・・・勝つのは難しかっただろうな」
傑「ああ。あの鏡のように光線を反射する皮膚は・・・恐らくアンチウルティメイト合金だろう・・・とにかく早くパワードに【気力】を教えてもらわないと・・・奴に勝てる手段は無い」
痛みが突き刺さるように大人達に襲いかかってくる・・・もうこれ以上はバルタンの奇襲がない事を祈るばかりであった・・・それから約半日は何もなかったが勿論それはバルタン達の優しさなんかではない。
サイコバルタン「マズハジョウジョウト言ッタ所カ・・・ダガマダマダ足リン!!!次ハ、パワード、プリキュアノデータヲ採取シナクテハ」
サイコバルタンは初代の長の事を聞いていた。かつても同じようにパワードを追いつめ一度は地球侵略まで追い込んだものの寸前の所で地球人とパワードの同胞の邪魔が入り全てを崩されたと。今度は徹底的に穴がない様にすべてのデータを取りつくし完全勝利を手にする事・・・それが開けない夜を開けさせる唯一の方法。サイコバルタンはその野望を実現するべく次の手をすでに考えていた・・・次で願わくば地球を我がものに出来るという完璧な作戦を造る下準備を着々と進めているのだった。
そして翌日・・・
大人・琢磨・傑「・・・・・」
植物園で大人達は一晩過ごしていた。昨日の戦いで疲れ切っていたのか照らすのテーブルにうつ伏せとなり椅子の上で爆睡している状態だった。彼らの事を気遣った薫子が毛布をかけてくれた事で風邪はひかなかった・・・朝日が自分達を照らすが大人達は一向に起きない・・・しかし突然赤い光が彼らの目の前で発生してその光で

3人は目が覚めた。
大人「んっ？・・・つぼみ？・・・皆・・・っ！！！！」
光の方向を見てみるとそこには修行を終えたつぼみ達の姿があった。
少し背が伸びた感じがしたがそれ以外は特になにも変わった様子はない。大人は立ち上がるとつぼみ達に近づいた。琢磨と傑も気配に気がついたのか目をこすりながらつぼみ達を見つめるといつもと変わらない彼女達の顔がそこにはあった。
大人「少し背が伸びた？」
つぼみ「はい。それに・・・ちょっだけ、たくましくなりましたよ♪」
つぼみは大人のセリフにそう返した。彼女の態度から察するに気力をマスターしたようだ。後は自分達の番だ。
大人「次は・・・俺達の番だな。そうだ、お前達が修行している間にバルタン達が怪獣たちを送り込んできたんだ・・・中でも1体・・・最悪の奴が・・・・」
大人は自分達が修業を始める前に6体の怪獣の事ととドラコの事をつぼみ達に報告する。中でもドラコの事を離すとパワードは目の色が変わった。
パワード「そいつはドラコだな・・・バルタンめ・・・最悪の怪獣を呼び寄せるとは。こうなればグズグズしてはいられないな・・・大人達の修行に入る。真夜、君も来てくれるか？」
真夜「ええ。」
大人・琢磨・傑『！？』
どうして真夜も一緒に来る必要があるのだろう？・・・大人達は一瞬わけがわからなかったが今は一刻の有余もない。パワードと共に光に包まれ赤い空間に瞬間移動すると大人達はすぐにティガに等身大サイズに変身する。
ティガ「・・・この空間は異空間？」
パワード「そうだ。ここでの時間は外とは時間枠が違うから現実世界での少しの有余でも十分にトレーニングは出来る。それにウルト

ラマンであるお前たちなら気力の基礎は基礎はすぐにマスターできるだろう」
気がつくとパワードもウルトラマンの姿に変わっていた。そしてティガ達はパワードから気力の基礎理論を教え込まれ早速訓練に入ろうと思ったが何やらパワードは少し離れる。
パワード「お前達には彼女と戦ってもらう」
ティガ「彼女？」
パワードが見た方向には既に人影た見えた・・・何とのその正体は・・・真夜だ。いや正確には真夜であって真夜出ない誰かであった。
？？？2「へぇ～・・・コレが光の巨人ってやつ？」
ティガ・アース・デュナミス『！！！？？？』
真夜の声であるはずだが何か雰囲気が違った・・・良く見ればいつもの真夜・・・とでも言うべき名のあろうか？・・・とにかく真夜が2人になっているではないか。
ティガ「ま、真夜が2人？・・・な、何かのマジックか！？」
分身の術かと思ったティガだったがどうやらそうではないようだ・・・何故ならばもう”1人の真夜”には右目に眼帯が付いてる・・・いやそれればかりか”いつもの真夜”とは違い何か邪悪で底知れぬ負の感情が感じられる。
アース「お前・・・真夜・・・だよな？」
真夜（？）「ええ、真夜よ・・・ねぇ？真夜」
真夜「・・・ええ。私よ」
デュナミス「な、何がどうなっている！？・・・わけがわからない」
3人のウルトラマン達の戸惑いなど眼中にない様に眼帯を付けた真夜は3人をクスクスと嘲笑い始めた。隣の真夜は彼女の態度に少し呆れたよ巣になっている。
真夜（？）「答えは単純（シンプル）よ？・・・私は今からアンタ達の光を試す・・・闇のプリキュア・・・此処まで言えばアンタ達でもわかるでしょ？」

何やら妖艶な目付きを見せながらも真夜はそう言うと何かを取り出した・・・それは口紅だ・・・ティガ達は彼女のタダならぬ殺気の様なものにドラコと戦った時・・・いやそれ以上の恐怖が身体に染み付いてしまう。

真夜（？）「プリキュア・ダークネス・エヴォリューション！！！」

真夜はその声と同時に全身を漆黒の闇に包み私服から蛇の目のような紋章がが変えた漆黒の衣装に変わる。そして髪は黒いリボンで結ばれたツインテールとなった彼女はギロリとティガ達を睨みつけると高らかにこう言った。

？？？２「全てを無へ誘う(いざな)漆黒の堕天使、キュアリベリオン！！！」

キュアリベリオン・・・それはかつて真夜が世界に絶望し闇に落ちた時の姿・・・・プリキュアでありながら闇の力を自由にに操る漆黒の堕天使にして死神。何故彼女が今復活したのかは分からないがそれはこれからティガ達にとっては自分の中にある限界という壁との戦いを意味しているのだった。

第５８話バルタンの大逆襲ー地球総攻撃計画ー？「闇のプリキュア・・・キュア

・

此処で予告していた通りとうとう彼女にも登場して頂きました・・・

第５９話バルタンの大逆襲ー地球総攻撃計画ー？「ＶＳリベリオンー覚醒する怒り

前回までのあらすじ～
ドラコの驚異的な力に一行も有余もないと大人達も遂に特訓を開始した。しかし特訓の相手とはパワードではなく真夜のもう１つの姿・・・闇のプリキュアにして死神・・・・キュアリベリオンであった！！！

※今回は基本は大人視点になりますが今後の章の伏線を多く含みます。

第５９話バルタンの大逆襲ー地球総攻撃計画ー？「ＶＳリベリオンー覚醒する怒

漆黒の闇から眼帯をした少女はティガ達をその片目で睨みつけるように視線を送り込んでいた。その姿はナイトの黒ではなく闇を象徴するような邪悪なる黒・・・しかし大人達(ティガ)はその闇に対して恐怖は既に無くなっていた・・・寧ろその吸いこまれそうな闇に見惚れてしまいそうになるほどであった。

リベリオン「どう？真夜(わたし)のもう１つの姿は・・・・見惚れちゃってるの？」

だがそれもリベリオンの言葉を聞いてすぐに現実世界に引き戻された。

ティガ・アース・デュナミス『っ！！！！』

何を考えているのだろうか？・・・闇に心がときめくなど光の戦士では絶対にあり得ない事。だが今の感覚は一体何なんだ！？まるで故郷の空気を物凄い久しぶりに吸うような懐かしいようでとても清々しい心地よさとでも言うかのようなこの安堵感。自分はかつてこの闇を知っている？

パワード「では特訓に入るぞ。・・・・ティガ、先ずはイメージを強く持ってもらおう。君の大切な人が今目の前にいるリベリオンに殺された・・・としよう。そのイメージを持ちながらリベリオンに勝ってみろ。」

パワードの唐突言葉にティガは理解に苦しんだ。俺の大切な人がリベリオンに殺された事にしろ？・・・そんな事急に言われても出来るわけがない。その様子を見たリベリオンはニヤリと意地悪な笑みを見せると突然指をパチンと鳴らした。

リベリオン「なら・・・無理矢理にも持たせてあげる♪」

リベリオンはそう言うと眼帯から突然闇を発生させていく・・・ティガ達は声を上げる間もなく闇に包まれてしまった。漆黒の闇のドームが赤い空間内部で形成されるのを見ていたパワードは一言口を

開いた。
パワード「つぼみ達もこの試練に耐えた・・・お前達も耐えろ・・・光の巨人としての宿命を本当の意味で受け入れる為にも」

大人「・・・・こ、此処はどこだ?」
闇の空間に呑みこまれたかと思ったら何処か別の場所に飛ばされていた大人。超人に変身した筈なのに人間の姿も戻っている自分の目の前には全く覚えのない街が広がっている。少なくとも希望ヶ丘ではなさそうだ。この町はどこか見覚えがあるが思いだせない・・・非常に懐かしい・・・でも自分はこんな場所に来た覚えなどない筈だ・・・でもこの風景・・・何処かで
大人「外国か?・・・前に来たフランスの街に似ている気がする」
そう言えばこの街並みは日本と言う感じではない。何処かで見た事あると思ったら3年前につぼみ達と一緒にフランスのパリでファッションショーに参加する事になって一緒に来た時に見たパリの街の雰囲気にも似ていた。だから懐かしいと思ったのか?・・・いやそれにしても故郷に帰る様な懐かしさなどたった1度しか行っていないない国で思うだろうか?
ドゴォオオオオオオオオン!!!!!!!!!!
突然爆発音が響き渡ったかと思うと空にリベリオンの姿があった。死神の様なカマを持っている姿は破壊神・・・いや悪魔とでいう方が適切だろうか?とにかく人がいないといえ早く止めなければと大人はスパークレンスを起動し等身大サイズのティガに変身するとそのままリベリオンの前に飛び上がった。
ティガ「止めろ真夜!!!・・・何をするんだ!!??」
黒い炎を辺りに撒き散らしながら街を破壊する真夜(リベリオン)にそういいかけるティガ。あの真夜のかつての姿であったとしても”同じ真夜”であるのなら優しさがあるはずだと・・・だが大人(ティガ)に向かって真夜(リベリオン)は冷徹で嘲笑う目を向ける。
リベリオン「ふふふっ♪そんなに慌てることないのよ?・・・ここ

は私が造った幻想世界（ワープワールド）なんだから」
ティガ「幻想世界（ワープワールド）？」
リベリオン「そうよ。此処は貴方の潜在意識の中にある記憶（ヴィジョン）を立体化した世界・・・つまりは実態じゃないの。だからどんなにこの町をめちゃくちゃに破壊しても誰も困らないのよ」
この現実感あふれる世界が仮想現実？・・・壁や地面の感触だって感じられる筈なのにコレが仮想の空間だって？・・・今だに信じられないティガを余所にリベリオンは淡々と説明を始めた。
リベリオン「じゃあ、今からトレーニングのルールを説明するわ。とっても簡単な事よ・・・私がこの町を私が全滅させる前に私を倒しなさい。でもただ私を倒すだけじゃ意味がないから条件を付けるわ・・・その条件はただ1つ。そこにいる女の子を守る事だけ」
ティガ「女の子？」
幻想世界（ワープワールド）は仮想現実なのだろう？・・・だったら人なんているわけが・・・ティガはリベリオンの言葉に半信半疑になっているがその疑いはすぐに消える事になった。
リベリオン「ほらぁ、そこにいるわよ？・・・さぁ私から守ってみなさい！！！」
リベリオンはニヤリと悪魔の様な表情をティガに見せながら突然黒炎の塊を発生させるとある一点に狙いを定め始めている。その標的（ターゲット）をティガは確認するないやな
ティガ「っ！！？？・・や、止めろリベリオン」
まさか本気でこの女（リベリオン）は少女を殺す気なのか？ティガは黒炎の塊を放とうとしているリベリオンに向かってハンドスラッシュを放ち黒炎を無理矢理消滅させる。
ティガ「逃げろ！！！・・・リベリオンは俺が全力で食い止める！！！！」
少女「！！！」
ティガの声を耳にいして少女は必死に逃げるように走っていく。ソレを確認するとティガは迷いを捨てた様にリベリオンを睨みつけた。

リベリオン「ふぅん、案外やるじゃない？」
真夜はそうでないと面白くないと突然片腕に黒炎を発生させると巨大な鎌・・・「希望狩（ウィッシュ・ハント）」を召喚するとソレをティガに向かって振り下ろした。
ティガ「ッ！？・・・・グゥウッ！！！！！」
何とか両腕で巨大な鎌を受け止めるティガ・・・こんな大きなものをあの華奢な身体で持ち上げているあたりは相当な腕力がある。
マルチタイプではこの大鎌を受け止め続けるのはキツイものがある。
ティガ「ううっ・・・・ウーーーンッ！！！！・・・・ハッ！！！！」
ティガクリスタルを輝かせるとティガはパワータイプにチェンジしていき巨大な大鎌を握りしめながらリベリオンを投げ飛ばそうとパワー対決を申し込む。例えプリキュアであろうとも超人（ウルトラマン）の力を超えることなどは出来ないはずだと思ってはいたが・・・・。
リベリオン「流石に【光の戦士】って言うだけの事はあるじゃない・・・・でも力だけじゃ・・・・勝負は勝てないよ？」
大鎌を握りしめながらティガの赤いボディに向かって蹴りを一発放っていくと怯んだ隙にそのままティガを思いっきり鎌で斬りつけて地面まで飛ばしてしまった。
ティガ・パワータイプ「ぐぅっ！？・・・・力だけじゃない・・・スピードはスカイタイプ並みじゃないか」
腕力はパワータイプ、スピードはスカイタイプを思わせるほど戦闘能力（スペック）に地面にたたきつけられたティガは信じられないという口調になりながらそう言った。

リベリオン「さぁ～て・・・獲物は何処に行ったのかなぁ～？」
リベリオンは戦いを楽しみながら狩り（ハンティング）もスッカリ楽しんでいた。逃げ出した少女を上空探し出してやろうと辺りを見回すと西のほうに走っているつぼみと思われる少女を見つける。
リベリオン「みぃ～つけた♪」

リベリオンは笑みを浮かべるとリベリオンはものすごいスピードで獲物に向かっていく巨大な大鎌が少女の首に向かって振り下ろされる・・・・。

ティガ・スカイタイプ「はぁあああああっ！！！！！！」

だがギリギリのところでティガが受け止めに入った希望狩（ウィッシュ・ハント）の重たい刃をティガの蒼の身体（スカイタイプ）が受けとめているがスカイタイプではスピードの代償にパワーが削がれてしまうのでいつまでも受けとめられはしない・・・ティガは身動きが止まっている少女に向かって震える声を上げた。

ティガ・スカイタイプ「に、逃げろぉ・・・・・・・・は、早く！！！」

ティガは何とか逃がそうと全力を絞り出す・・・リベリオンは今この場ではタイプチェンジする隙も与えてはくれないだろう。少女は震えているがティガの言葉に我に返ったのかその場に大急ぎで走りって逃げる。

リベリオン「ふん、残念でした～！！！」

だがソレも既に計算済みだと逆に斧に体重をかけながらリベリオンは少女に向かって片腕を伸ばすと・・・

リベリオン「リベリオン・デストロイド・ボール」

最初に出した漆黒の炎の方塊を少女に向けて発射した・・・ティガは急いでリベリオンから離れ少女に向かっていく・・・ティガは何とかと様と飛び出すも間に合わない。

ティガ・スカイタイプ「逃げろおぉおおおおおっ！！！！！！！！」

少女の背中に向かってそう叫ぶティガ（大人）。だがティガの声も虚しく響くだけで少女は動けないまま炎の中に身が包まれて消えてしまった・・・そしてその少女の顔は・・・見覚えがある顔だった。

ティガ・スカイタイプ「あぁ・・・・・・つぼみ？・・・・・・・・」

その顔はつぼみに似ていた・・・いやそっくりなんてものじゃな

い・・・本人ではないかと思うほどだった。ティガはその場に膝をつくと大人の姿に戻ってしまう・・・

大人「うあ・・・ぁあ・・・・うわぁああああああああああああああぁあああああああっ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！・・・・あぁああああああああぁあああああああああああああっ！！！！！！！！！！！！」

仮想現実であるという事を忘れ大人は心の中にある怒り、悲しみ、憎しみ・・・心の中にある全ての感情が大爆発を起こしてしまった・・・その場に腕を振り下ろし地面を何度も叩きながら大声で絶叫を上げる・・・そしてリベリオンを睨むと。

大人「リベリオン！！！！！」

リベリオン「・・・ちょっと落ちつきなさいよ・・・・今の娘は只の幻想（ビジョン）であって。本物じゃなくて実態は無いんだから・・・そんなマジになんないでよ」

大人「そんな事関係ない！！！！例え幻想（ビジョン）であったとしても・・・俺は貴様を絶対に許さない！！！！・・・絶対に！！！！！！・・・・今この場でお前を倒す！！！！」

大人はスパークレンスで光を解放すると超人（ティガ）の姿に変身した。周りにはパワードと同じ独特の稲妻の様なものが発生している。稲妻を見たリベリオンは何やらつまらなそうな顔になると口を開く

リベリオン「ふぅん・・・第一テストは合格ね。もう終わりか」

ティガ「第一テスト？・・終わり？・・どういう意味だぁ！？・・・・答えろぉ！！！！！」

リベリオンのセリフに敵意がむき出しになったその口調で大人（ティガ）は問いただした。答えによっては本気でリベリオンを襲いにかかるほどの勢いだ・・・・。流石にこれ以上はマズイと思った様な顔になったリベリオンはネタばらしでもする様にまた淡々と説明をし始めた。

リベリオン「全ては計画通り・・・ってことよ。他の空間でも私の分身（コピー）が同じように琢磨や傑にもテストをしてるはず。いい？これまでの事は全部パワードに指示された事よ・・・」

大人自身の怒りや憎しみ、悲しみが複雑に混ざり合い大爆発を起こした事こそが全てはパワードが計画した試練という事であったのだ。気力を会得するには自分自身の心に一時的に無意識にかけている理性(リミッター)を壊す必要があるという事らしい・・・その為には自分の一番大切ものを目の前で壊される等の深い絶望と喪失感で満たす必要がある。つまり大人の場合のソレはつぼみが目の前で殺されるという事なのだ

普通の人間ならば暴走を起こして暴れ回るのだが超人(ウルトラマン)やプリキュアは違う。己の心の闇を制御し今まで戦ってきた人間だからこそ理性(リミッター)を外しても暴走は起こさない。そして限界を超えたその時こそ新しい力は目覚める。リベリオン曰くつぼみ達もこの仮想空間でパワードに大人達が殺される幻を見せられて覚醒したらしい。

ティガ「お前は全てを知った上で今までの行動をしていたというのか!?・・・・俺を怒らせ理性を潰すためだけに・・・・」

リベリオン「えぇ、そうよ?」

ティガ「お前・・・本当に真夜の片割れなのか?・・・・プリキュアを名乗っている癖に何でこんな非道な真似が淡々と出来る!?・・・お前は俺がどんな思いになったと思ってるんだ!?」

ティガはリベリオンの態度に更に怒りが込み上げてきた・・・・いくらパワードと打ち合わてがあって手筈を決めていたとしてもこんな非道な真似を楽しそうに出来るものだろうか?・・・激昂しているティガに対してリベリオンは鼻で笑うとらしておぞましく微笑を見せた。

リベリオン「お生憎様・・・一応私はプリキュアだけど“悪”のプリキュアなの・・・真夜(セイバー)との前の戦いである程度改心はしたけどね。」

邪悪なオーラを全身から放ちそう言い放つリベリオン。正に完璧だ・・・完璧な悪魔を演じ切ったと思っているリベリオンだったがティガはゆっくりと近づきリベリオンの顔に向けて拳を飛ばした・・・・が寸止めどで止めてしまった。

リベリオン「・・・・殴らないの？」
ティガ「・・・悪のプリキュアであろうと俺には女の子を殴る趣味などない。だが1つ言っておく・・・お前、悪魔だな」
リベリオン「褒め言葉どうも♪・・・あ、琢磨と傑も気力に覚醒したみたいよ？」
リベリオンは皮肉にそう返すとコピーから琢磨と傑のテストも完了したとの知らせを受けたようだ。ティガが拳を下ろすと同時にリベリオンは幻想世界（ワープワールド）を消滅させてようと眼帯から光を放つと辺りの風景はガラスが割れるように崩れていく・・・リベリオンが発生させた幻想世界は一気になくなり闇のドームになるもソレもすぐに崩れいく・・・。そして気がつけが赤い空間が広がってきた・・・辺りを見ると自分と同じようにそれぞれのパーソナルカラーの稲妻を身体に纏ったアースとデュナミスがいた
パワード「戻ってきたか」
ティガ「ああ。・・・パワード、気力を発生させる事は出来た。あとはどうすればいい？」
パワード「お前達の場合、後はコントロールする術と光線への変換術をマスターすれば完璧だ・・・3人とも・・・すまなかった。いくら覚醒させるとは言えむごすぎる事をしてしまい」
パワードには一応罪悪感はあるようで謝った。3人は今更どうでもいいと言う様な態度で受け流した。
パワード「では今から急ピッチでトレーニングに入るぞ！！！！」
ティガ・アース・デュナミス『おう！！！！』
リベリオン「私はお役御免？」
真夜「そうね。もう充分よ」
これからが本番だ。これからが本当の地獄の始まりだと覚悟を決めたティガ（大人）達は怒涛の訓練が待っているのだった。時間は制限されているが今から絶対にマスターしてやると血の滲む特訓が始まった。

第５９話バルタンの大逆襲ー地球総攻撃計画ー？「ＶＳリベリオンー覚醒する怠

リベリオンが悪魔すぎる。・・・・ちなみにリベリオンの出番はコレで終わりではりませんがこの章では此処で出番は終わりになります。

ではでは次回もお楽しみに♪

第６０話バルタンの大逆襲ー地球総攻撃計画ー？「修行完了ー大乱闘開始ー」

前回までのあらすじ～
パワードとリベリオンの強力で気力を覚醒させた大人達３人は急ピッチで修業を開始する。その頃バルタンたちは第２戦備態勢を整えておりドラコを超える更なる兵器を開発しそれも完成段階に入りつつあったのだった

第６０話バルタンの大逆襲ー地球総攻撃計画ー？「修行完了ー大乱闘開始ー」

バルタン戦艦ではティガ達のデータを分析が行われていた。全ては着々と進んでいるのだ・・・培養ポット内に入っているソレに向けてティガ達のデータを送り込む事・・・ドラコさえも只の御取りでしかないという事を・・・・

サイコバルタン「ドラコノメンテナンスハ終ワッタカ？」

バルタン尖兵「ハイ・・・第ニ戦備態勢モ整ッテオリマス」

サイコバルタン「ソウカ」

作戦の最後は決まっている・・・それは地球を我がものにする事だ。サイコバルタンは笑いが込み上げてくるのを必死にこらえ冷徹な視線を先兵に送り通信室に足を運ぶ。

サイコバルタン「奴ニモ教エテヤルカ・・・・・」

サイコバルタンが通信していた相手・・・・その相手とは・・・・・。

？？？「サイコバルタン・・・君はどういうつもりだ？・・・私の許可なしに地球を支配しようなど・・・」

サイコバルタン「黙レ・・・貴様ノ様ナ負ケ犬ナドハ初メカラ利用シテイテイニ過ギンノダカラナ・・・・我々ガ地球ヲ支配スルノヲ海底デ眺メテイルガイイ」

その相手とは何と海底にいる筈のダークであったのだ。通信が来るなりダークはサイコバルタンに文句を言いたてるがサイコバルタンは以前同胞のバルタンが利用されていた事を根に持っているのか冷たい口調でそう言い返した。

ダーク「ふぅん・・・まあいいや。どうするかは君達次第・・・精々自分の策に捕らわれない事だね」

サイコバルタン「忠告ハ受ケテオコウ」

ダークはそう皮肉を言って通信を切った。サイコバルタンはその姿に滑稽とでも思ったのだろうか鼻で笑いながら通信室を後にした。

同胞の為に・・・いやそれだけではない。自分達（バルタン）の宇宙漂流という

最悪の暗黒時代を終わらせて永遠に終わる事のない安らぎを得るために・・・・。

その頃はパワードの造り出して異空間では既に気力のコントロールを自在に出来るようになったティガ達の最後の特訓に取り掛かっていた。

ティガ「チャァアアアッ!!!!」

セイバー「はぁあああっ!!!!!」

セイバーとティガの戦いがその最後のテストになった・・・その内容はセイバーを倒す事だ。プリキュアでもムーンライトと並ぶほどの実力がるセイバーと大人達の世界でも無限の可能性を秘めたティガ。この2人の戦いはどちらも譲らず互角の一途をたどっていた。

ティガ「はぁ、はぁ、はぁ・・・強い・・・伊達にニセティガを倒した事は無いってか?」

セイバーと始めて手合わせしたティガは肩で大きく息をするようにそう言った。かつてサロメ星人クレイズが制作したニセウルトラマンティガを簡単に倒した事が頷けるほどの強さだ・・・だがあの時とは今の自分(ティガ)は違う。セイバーとの互角に立ち会えるほどにまで成長したという事だ。

セイバー「はぁ、はぁ、はぁ・・・貴方もね。思った以上に強くなっちゃて・・・私もうかうかしていられないわ」

対するセイバーも大人(ティガ)の強さに驚いていた。気力に覚醒したのは自分も同じであるのだがソレも関係なくなるほど大人達は強くなっている。真夜効果(リベリオン)とでも言うべきものがあるのだろう。

ティガ「さて・・・そろそろ本気で行くぞ!!!!」

ティガは稲妻をスパークさせるとセイバーに向って勢いよく飛びついていくように前に出る。

セイバー「私も全力で行くよ!!!」

タイプはマルチタイプのままであるが以前よりも格段に攻撃力、守備力、パワー、スピードと逝った様々な部分が格段に強化されてい

る。
ティガ「ハァアッ！！！、チャァアッ！！！、デヤァアアアッ！！！！！」
セイバーのポテンシャルもかなり高く戦闘能力（スペック）もそれに比例する。
つまりはつぼみ達プリキュア勢の中ではトップレベルの実力なのだ・・・だが今の大人（ティガ）はそれと対等に戦っている・・・パワードに課された試練の成果とでも言えるものであろうか・・・セイバーと互角に渡り合うティガはパンチ、チョップ、キックを複雑に混ぜながらセイバーに反撃の隙を与えない・・・だがセイバーも簡単には優位を保たせるわけがなく・・・反撃を開始する。
セイバー「やぁあああああっ！！！！！！」
ティガ「っ！？・・・グオオオッ！！！」
自分の方に伸ばされたティガの右手を掴んでいくとそのまま一本背負いの要領で床にたたきつけてしまう。そしてそのままジャイアントスウィングの要領で腕を掴まれたままティガの身体は振り回される。
ティガ「グゥっ！？・・・・オオォオ・・・・ンーーーー・・・ハァアッ！！！！」
まるでメリーゴーランドのように回されると三半規管を襲われ平衡感覚が麻痺しそうになる・・・だがティガはこれ以上は好きにさせるものかとタイプチェンジを行いパワータイプにチェンジする。
セイバー「っ！？」
ティガ・パワータイプ「ンンンーーーーッ！！！！！・・・・チャァアアアッ！！！！！！」
回されながらもティガは強化された強力（ごうりき）を活かすようにして相手いる左手で自分の右手を掴んでいるセイバーの腕を掴むとそのまま主導権を奪うように彼女の身体を強く引っ張った。
セイバー「きゃぁあああっ！！！？？？・・・ぐぅ・・・・な、なんて力なの・・・・うぐぅ！！！」
流石のセイバーも超人（ウルトラマン）ましてやパワーに特化したティガのパワータ

イプに力勝負で勝てるわけがなく逆にティガにジャイアントスリングをもらう事になってしまった。
ティガ・パワータイプ「ダァアアアアアアアアアーーーーーっ！！！！！！！！・・・ハァアアアアっ！！！！！！！！！」
セイバー「きゃぁあああああああっ！！！！！！！！」
ティガはセイバーが反撃に出る前にセイバーを投げ飛ばす。セイバーは勢いよく飛ばされたがなんとか空中でバランスを維持し受け身取るように着地する。
ティガ・パワータイプ「ハァアアアアッ！！！！」
セイバー「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ・・・・っ！！！」
パワータイプの弱点であるスピードの退化・・・それもパワードとセイバーの鍛錬により多少なりとも克服されつつあった。大人自身の身体が鍛えられた事がティガの弱点を補う事になっているのだろうか？。セイバーにパンチを見舞わせて押し飛ばす・・・だがセイバーも飛ばされた勢い利用し壁に足を付けると・・・
セイバー「でやぁあああああああっ！！！！！！！！」
ティガ・パワータイプ「グォオオッ！！！？？」
ティガに空中からの飛び蹴りを見舞わせたのだ。
格闘戦ではお互いに互角・・・後残されているのは自分の必殺技による競り合いのみ・・・ティガはタイプチェンジを行いマルチタイプにタイプチェンジを行う・・・それはセイバーに対してのメッセージでもあった。
セイバー「ロモモ・・・まだいけそう？」
ロモモ「後一撃ぐらいなら大丈夫そうロモ！！！」
セイバー「そう・・・じゃあその一撃に全力をかけるよ！！！！」
ロモモ「オッケーロモ！！！」
ティガがわざわざマルチに戻った意味を察したセイバーも必殺技の準備態勢に入る・・・リリィフシンバルを召喚し高速回転させてエネルギーを集約し始める。対するティガもゼペオン光線の発射態勢に入る。

セイバー「プリキュア・スターライトチャージ・クラッシュ！！！」

ティガ「ジュワァアアッ！！！！！」

必殺技と必殺技が放たれるとの銀色の光線がぶつかり合い押し合い周りには衝撃波が走る・・・光線の破壊力はティガが上だが質量ではセイバーの方が勝る・・・だがこの勝負は意外の方向に進む事になった。

ティガ「グゥ・・・ウゥ・・・・・・・・ハァアアアアアアアアアアアアッ！！！！！！！！！！」

突如ティガの身体に白い稲妻が走ったかと思うとゼペリオン光線の質量が上がっていく・・・2倍いや3倍の質量になるとセイバーの必殺技を呑みこんでいくのだ。

セイバー「うぐぅ・・・・こ、これ以上はもたない・・・・っ！！！」

予想外の事態にはセイバーも対応が出来ない・・・そのままゼペリオン光線に必殺技が全て飲み込まれると彼女は光線の衝撃に飛ばされてしまう。勝負はティガの勝利に終わった・・・・だがティガの身体も満身創痍である事に変わりはない。

ティガ「ハァ、ハァ、ハァ・・ハァ、・・・・・・」

そのまま膝をつくとティガの姿から大人の姿に戻る・・・・そしてそのまま仰向けに倒れて大きく息を吸いこんでいく。何とか勝ったがそれは本当にギリギリであった・・・・・それでも確かに確信を得る事は出来たのだ。

大人「コレで・・・・バルタンに勝てる！！！！」

気力の会得そしてティガの唯一にして最大の弱点を補えるだけ戦い方を学びパワーとスピードが格段に上がった。これで奴らと対等に戦え彼女達とを守る事が出来る。

真夜「強くなったね・・・・大人」

大人「ああ。コレで・・・・やっと・・・・アイツを守れる」

自分に自信が持てる・・・そう言おうと思ったら突然ロモモがペン

ダントから元の姿に戻ると大人に文句を言ってきた
ロモモ「でもやり過ぎロモ!!!・・真夜ちゃんを怪我させる気かロモ？」
大人「悪かったよ。でも俺でもあそこまで力が出せるとは思ってなかったからさ・・・真夜、怪我はないかい？」
どうやら真夜が負けた事に納得がいかないようだ。大人はすぐに謝ると真夜のカダラの事が気になったが真夜は大丈夫とそう言う。
パワード「よくやったな大人・・・コレでお前もバルタンに勝てるだけの力は備わった。後は・・・ドラコを倒しバルタンの野望を打ち砕くだけだ」
他の空間から突然パワードが現れる。別の空間ではパワードがアースとデュナミスの最終テストを行っていたのだ・・・後ろでは琢磨と傑が少しシャツやズボンに数か所穴を空けた状態になっていたが顔は笑みを浮かべていた。
大人「よし・・・じゃあ、バルタンとの戦いに戻るとしようか！！！」
大人はそう言うとパワード共に赤い異空間からワープする・・・つぼみ達が待つ植物園へと。

つぼみ「大人、お帰りなさい！！」
大人「ただいま、つぼみ」
えりか「ボロボロじゃない・・・後で服を縫ってあげるね」
琢磨「ああ、頼むよ」
いつき「髪もボサボサ・・・後で綺麗に散髪しないとね」
傑「ああ」
帰ってくるとつぼみ達が出迎えてくれた・・・現実世界ではたったの5時間程度であったのだがつぼみ達にとってはその何もの時間に感じられたのだろう。だが再会を喜んでいる暇などは自分達に残されてはいなかった。
大人「・・・つぼみ、そろそろ改造された怪獣達の封印がとかれて

しまう時間だ。つぼみ達が修行に行っている時にティガ達が怪獣たちを殺さないように・・・お前達が来るのを信じて一時的に怪獣たちを閉じ込めていたんだが・・・その封印は明日で解かれてしまうそうだ」

トリニティーフィールドの効力が明日で切れてしまう事を思いだしたのだ・・・明日までまだ時間はあるがバルタンが第2戦備態勢にも入っているはずだから油断はできない。

つぼみ「ティガ達が怪獣の封印を?・・・・でも明日までまだ時間があるのでしょ・・・なら今はゆっくり休みましょうよ。今の状態で行っても全力は出せませんから」

大人「しかし!!」

効力はあるがバルタン達の攻撃があるかもしれないこの瞬間に休んでなどいられない・・・そう大人は焦った様に言うがパワードが間に入った

パワード「まぁ待て。つぼみ達の言う事はもっともだ・・・それにバルタンも準備は整えるのに時間はかかる筈だ・・・だから今は身体を休める事だけを考えろ」

大人の焦る気持ちは分かるが身体を万全な状態にすることも1つの作戦だと諭すようにそう言う。

つぼみ「だから・・・今は休みましょう。ね?」

大人「・・・・」

時間があるのならそれもいいかもしれないと大人は考え直し始める。

つぼみの顔を見ると無理に焦る事もする必要はないかもしれない・・・・考えてみたらさっき真夜(セイバー)と戦ったばかりじゃないか。

大人「分かった」

身体を休める事も作戦である・・・そう自分を言い聞かせて無理矢に納得させる。今日はそれぞれの家に戻り万全の態勢に身体を整える事にしたのだった。

その翌日の早朝。

パワードガギ「ギシャァアアアアアウウウウウウウウウウッ！！！！！！！」

パワードテレスドン「グォオォオォオォオォオォオォォォオォォオオオ！！！！！！」

パワードビサーモ「ウォォオオオオォオォオォオォオォオォオォオォ！！！！！！」

パワードシルバゴン・パワードゴルドラス『ガァアアアアアアアアアアオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！！！！！！』

パワードジェロニモン「ゴゴゴォオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！！！！！！！！！！！」

ピラミッド状のバリアに罅が入り請われてしまうと6体の怪獣の封印は説かれてしまった。怪獣たちは自分達が閉じ込められた怒りを露わにするかのように咆哮をあげるとその声に街の人々は起こされる・・・待ちを破壊しつくそうと活動を開始するが突然その巨体の足が止まった・・・その理由は1つ・・・自分達が今前に出ようとしているその目前につぼみ達が待機していたからであるのは言うまでもないだろう。

つぼみ「バルタン星人・・・自分達の目的の為に手段を選ばないばかりか何の罪もない怪獣たちを無理矢理改造し利用するなんて・・・・私、堪忍袋の緒が切れましたぁ！！！！」

温厚なつぼみは怪獣達の姿を見るなり心から怒りが湧きあがってきた。かつてレッドキングの夫婦を利用した時以上に酷い生体改造を受けているその惨めな姿を見たらそうなるのが当然だろう。えりかもいつきもゆりもアンナも夕も真夜も全員が同じ気持ちだ。

ゆり「今こそパワーアップした私達の力・・・バルタンに見せてあげましょう・・・行くわよ！！！」

つぼみ・えりか・いつき・アンナ『はい！！！！』

夕「オッケー！！」

真夜「うん！！」

大人・琢磨・傑『おう！！！』

パワード「・・・・」
つぼみ達はあくまでも自分達で怪獣たちを助けたい・・・その思いを聞いたパワードはドラコが現れるまでは変身しない事を誓った。
彼は少し離れた場所から彼女達の戦いを静観する・・・彼女達の戦い方をみる為に・・・そして大人達の成長を確認する為に。

つぼみ・えりか・いつき・ゆり・アンナ『プリキュア・オープンマイハート！！！！』
先行してつぼみ達4人が戦士（プリキュア）に変身していく。ピンク、ブルー、ゴールド、シルバー、ホワイトの5色の光に包まれパヒュームとポットから光を受け瞬時に戦士（プリキュア）に変わる。
ブロッサム「大地に咲く1輪の花、キュアブロッサム！！！」
マリン「海風に揺れる1輪の花、キュアマリン！！！」
サンシャイン「陽の光浴びる1輪の花、キュアサンシャイン！！！」
ムーンライト「月光に冴える1輪の花、キュアムーンライト！！！」
ホーリーナイト「聖夜に輝く1輪の花、キュアホーリーナイト！！！」
5人『ハートキャッチ・プリキュア！！！！！』

真夜「ロモモ、私たちも行くよ！！」
ロモモ「ガッテンロモ！！！」
ロモモの
真夜「プリキュア・セイントリバース！！！！」
続いて真夜もロモモをペンダント状のアイテムに姿を変えそれから発せられる光に身を包み私服から姿が変わる。光が消える頃には戦士（セイバー）になる
セイバー「全てを希望へ導く救世の光、キュアセイバー！！！」

大人「さぁ来い、カブトゼクター！！！」
琢磨「出番だぞ、ガタックゼクター！！！」

傑「来い、ダークカブトゼクター！！！」
夕「行くよ、バタフライゼクター！！！」
それに続き大人、琢磨、傑、夕の４人は手を空に伸ばし相棒（ゼクター）の名を呼ぶとその声を聞き次元を超えて４つのゼクターが集まる・・・それを手に取った４人はそれぞれベルト、ブローチにゼクターを同時に装填する。
電子音『ＨＥＮＳＩＮ』
４人は赤、青、黒、白銀の光に包まれながら仮面戦士（マスクドライダー）の重鎧（アーマー）を装着し変身が完了する。今度はカブト、ガタック、ダークカブトはゼクターの角をフェアリーはゼクターを右にずらす。
４人『キャストオフ！！！！』
電子音『ＣＡＳＴ－ＯＦＦ』
カブト、ガタック、ダークカブトの３人はゼクターの角を逆方向にフェアリーはゼクターを右に反回転させていくと鎧がはじけ飛び蛹（マスクドフォーム）から成虫（ライダーフォーム）に更なる変身を行う
電子音「ＣＨＡＮＧＥ　ＢＥＥＴＬＥ」
電子音「ＣＨＡＮＧＥ　ＳＴＡＧ－ＢＥＥＴＬＥ」
電子音「ＣＨＡＮＧＥ　ＢＥＥＴＬＥ」
電子音「ＣＨＡＮＧＥ　ＢＵＴＴＥＲＦＬＹ」
仮面戦士（ライダー）はそのシャープな姿を見せるとそれぞれの武器を構えてポーズをとる
カブト「光を支配せし太陽の神、仮面ライダーカブト！！！」
ガタック「戦いを支配せし戦いの神、仮面ライダーガタック！！！」
ダークカブト「闇を支配せし黒点の神、仮面ライダーダークカブト！！！」
フェアリー「聖なる翼を持せし白銀の神、仮面ライダーフェアリー！！！」
全員『我ら、チーム・ウルティメイト！！！！！』
コレで役者はそろった。シルバゴン達は目の前にいる小さな敵に咆

哮を上げながら近づいてくる・・・だが絶対に怪獣たちは殺さない。
今はただ本能的に暴れさせら得ているだけに過ぎないのだ・・・だ
からこそ必ずバルタンの呪縛から解き放つ。
ブロッサム「皆さん・・・分かっている思いますが。あの怪獣たち
はなるべく傷つけないように」
カブト「ああ。タダアイツらは利用されているだけに過ぎない・・・
だから」
全員『助ける！！！』
全員そう言うと散り散りになり怪獣達に向かっていった。カブト、
ブロッサム、セイバーがシルバゴンとガギにガタック、マリン、ム
ーンライトがテレスドンとビサーモにダークカブト、サンシャイン、
ホーリーナイト、フェアリーがゴルドラスとジェロニモンに向って
いった。

サイコバルタン「フゥン・・・懲リズニ抗ウか・・・プリキュア、
ティガ・・・マァイイ・・・改造怪獣ハマダマダ有ルゾ・・・ソ
シテ【ドラコ】ト最後ノ切リ札モ控エテイル」
勿論その様子はサイコバルタンが戦艦からみてはいたが・・・残り
の会場怪獣と暗殺者（ドラコ）の出撃準備も完了させているのでいつでも奴ら
に奇襲をかける事も出来るのだ・・・そして最強にして無敵の殺戮
兵器がまだ控えている事も・・・

第６０話バルタンの大逆襲ー地球総攻撃計画ー？「修行完了ー大乱闘開始ー」

久々の変身シーンはやっぱり燃える！！！

次回は大乱闘そいて大人達３人の力が遂につぼみ達に・・・・・・・・

ではでは次回もお楽しみに♪

第６１話バルタンの大逆襲ー地球総攻撃計画ー？「明かされる正体」（前書き）

前回までのあらすじ～
トリニティーシールドの封印がとかれ解き放たれた６体の怪獣たち。
バルタンの呪縛から解き放つ為にチームウルティメイトは出陣する。

第６１話バルタンの大逆襲ー地球総攻撃計画ー？「明かされる正体」

パワードシルバゴン「グシャァアアアアオオオオオッ！！！！！！」

パワードガギ「ギシャァアアアアアアアアアアっ！！！！！！！！」

シルバゴンとガギの前に立ちふさがった大地の戦士、太陽の神、救世の光・・・シルバゴンの巨体が３人に迫るのを可憐に避ける。

ブロッサム「ブロッサム・シャワー！！！！！」

セイバー「セイバー・サウンド・ウェイブ！！」

ブロッサムの花弁の吹雪、セイバーの超音波攻撃にシルバゴンとガギは怯む。その隙にカブトは２匹の脚にクロックアップで移動すると。

カブト「ライダーキック」

電子音「ＲＩＤＥＲ－ＫＩＣＫ」

２匹のバランスを崩し地面に倒す。シルバゴンとガギは姫に似た声を上げながら倒れるがすぐに立ち上がるとガギはツノから熱戦をシルバゴンは口から火炎弾を３人に向けてはなった。

ブロッサム「ふっ！！・・・はああっ！！」

セイバー「んっ！！・・・やぁあああぁ！！！」

カブト「ほっ！！！・・・とぉっ！！！」

熱戦と火炎弾を避けると素早くブロッサムとセイバーは飛び上がり後ろに回るそして後ろから２匹に向かって急降下キックを背中に叩き込んでいく。

パワードシルバゴン「グォオオオオオオオオオ！！！？？？」

パワードガギ「ギシャァアアアアアアアアア！！！？？」

前のめりに倒される２匹。的が小さいために自分達の攻撃が当たり難い・・・その事に苛立ちを覚える。

パワードシルバゴン「グォオォオォオォオオオォオオオッ！！！！！

！！」

シルバゴンは業を煮やしたのか近くにあった岩を持ち上げる・・・・まどろっこしい3人を一気に潰すつもりなのだろう。

カブト「喰らえ！！！

それを察したカブトはクナイガンをシルバゴンが持ち上げた岩盤に向けて放つとシルバゴンは驚いたのか思わずもっていた岩を離してしまうと自分の脚の上にその岩を落としてしまうのだった。

パワードシルバゴン「グググギイッ！！？？・・・グオオ、ウゴオオオオオオッ！！！！！」

カブト「今だブロッサム、セイバー！！！！！」

ブロッサム「はい！！！！」

セイバー「任せて！！！！」

今のうちにシルバゴンとガギを浄化する準備を始めるのにガギとシルバゴンが気がついた時にはもう後も祭りであった。

ブロッサム「プリキュア・ピンクフォルテウェイブ！！！！！」

セイバー「セイバー・リカヴァリング・アレスト！！！！！」

セイバーの光の環とブロッサムのピンク色の花型エネルギー弾が放たれる。シルバゴンとガギは悲鳴の咆哮を上げて抵抗していくが次第にそれも無くなり暴れる事もなくなっていく・・・そして2匹はその場に眠るように横になった。

カブト「フォルテウェイブ一発で浄化してしまうとは・・・やるな」

自分と同じく強くなった彼女（つぼみ）に仮面の下で笑みをつくる大人（カブト）。だがそんな気分も束の間であり第2の刺客が現れた。

パワードゴモラ「ギシャァアアオオオオオオオオッ！！！！！！！！！！」

パワードバードン「キシャァアアアアアアアアアッ！！！！！！！！！！」

古代怪獣ゴモラを改造したパワードゴモラ、火山怪鳥バードンを改造したパワードバードンが現れた。

カブト「新手か・・・バルタンもしつこいな」

クナイガンをクナイモードに変形させるとそのままカブトはブロッサムとセイバーに続き前に出る。

パワードテレスドン「ガァアアアアアアアアッ！！！！！！」
パワードビサーモ「ギシャアァアアアアオオオオオっ！！！！！」
ガタック、マリン、ムーンライトに対してテレスドンとビサーモは捕まえようと暴れ回る。だがスピードでは追い付けないのか紙一重で逃げらる。
マリン「こっちだよぉ～～～！！！」
おちょくるマリンに対してテレスドンは尻尾（テイル）を向けるがマリンはそれを難なく避ける。
マリン「はぁあああっ！！！！」
テレスドン「グォオオッ！！？？？」
テレスドンの喉に向かってパンチを入れると溜まらず噎せながら喉を押さえる・・・それに追撃を放つようにガタックのカリバーの刃をテレスドンの剛殻の皮膚に立てる
ガタック「流石に硬いか・・・」
しかし小さい刃では傷すらつかない・・・流石に改造された事で皮膚の強度も最高レベルに強化されたのだろう・・・しかし押してダメなら引いてみるだけのこととガタックはプットオンするとガタック「これならどうだぁあっ！！！！」
ガタックバルカンの砲弾をテレスドンの口に中に叩き込んでやると腹の中で爆発すると溜まらずテレスドンはまた噎せかえる。
パワードビサーモ「ギシャヤアアアアオオオオッ！！！！！！」
怯んだテレスドンに変わりビサーモが電撃弾をマリン達に放つがガタックの高速移動（クロックアップ）とそれと対等な速度でマリンとムーンライトも電撃を避ける。
ムーンライト「はぁあああああっ！！！！！！」
ビサーモの攻撃を避けながら一気に距離を縮めたムーンライトはビ

サーモの腕にキックを放ち雷撃を止めさせるとその後ろでガタックとマリンがビサーモに向かって笑みを見せるとマリン「行くよ、ガタック！！！」
ガタック「ああ！！」
追撃のマリンシュートとカリバーブーメランを放ちビサーモの体力を奪う・・・もうフラフラ状態のこの状態なら浄化技は通るはずだ。
ガタック「後はお前達が決めろ・・・」
マリン・ムーンライト『うん！！！』
2体が倒れた今がチャンスだと
マリン・ムーンライト「プリキュア・フローラルパワー・フォルティシモ！！！」
2人は同時に飛び上がるとビサーモとテレスドンの身体を突き破り爆発する。その後ろには当然マリンとムーンライトが達タクトを振う。
マリン・ムーンライト『ハートキャッチ！！！』
テレスドン・ビサーモ『・・・・・・』
爆風から出てきたのは改造される前の身体となったテレスドンとビサーモだった。2匹はそのまま眠さをこらえるように眼をこするが耐えきれずその場に横になった。
マリン「よっしゃぁあーーーっ！！！」
歓喜の声を上げるマリン・・・だが新手が出現するのはそのすぐ後のことだった。
パワード・ブルトン「ドクン、ドクン、ドクン」
パワードメンジェラ「ギシャシャシャシャシャ！！！！！」
現れたのはメンジェラの改造怪獣パワードメンジェラ、四次元怪獣ブルトンの改造怪獣パワードブルトンが現れた。
ガタック「団体さんのお出ましか」
だが3人は望むところだとブルトンとメンジェラに向かう。
パワードゴルドラス「グオォオォオオォオオオオオッ！！！！！！

！！」

パワードジェロニモン「ゴォオオオオオオオォっ！！！！！！！！」

ダークカブト、サンシャイン、ホーリーナイト、フェアリーの４人はゴルドラスとジェロニモンの攻撃を分析していた。ゴルドラスのバリアで攻撃が弾かれるがパターンを把握するとサンシャインはゴルドラスの顔の前に飛び上がる。

サンシャイン「花よ、舞い踊れプリキュアゴールドフォルテバースト！！！！！」

サンシャインのゴールドフォルテバーストでゴルドラスのツノを覆い被せて機能を停止させる。

ダークカブト「でかしたぞサンシャイン！！！」

ホーリーナイト「次は私の番！！！」

混乱しているゴルドラスを差し置いてジェロニモンが４人に無重力光線を浴びせようとするがホーリーナイトがそれを防御する。

ホーリーナイト「ホーリー・ディスエイブルメント！！！！！」

銀色の光線がジェロニモンの無重力光線を無力化する。ならばこれならばどうだとジェロニモンは頭についている羽を４人に向けて発射する。

ダークカブト「フェアリー、行くぞ！！！」

フェアリー「ええ！！」

ダークカブトはクナイガンをフェアリーはフェアリーレイピア・ガンモードを準備すると羽を狙い撃つ。羽はクナイガンとレイピアに満遍なく破壊される。ジェロニモンは攻撃が決まらず怒りの雄叫びを上げる。

ダークカブト「クロックアップ」

ダークカブトがクロックアップを発動しジェロニモンとゴルドラスの足にライダーキックを見舞わせ一気に倒す。だがすぐに２匹は立ち上がるとダークカブトに向けて腕を伸ばすがダークカブトの前にヒマワリ型のエネルギーバリアで守られる。

ダークカブト「ナイスアシスト」
サンシャインに向けてそう言うとダークカブトにサンシャインは笑みを返した。ナイスコンビネーションプレイの後2人は素早く2匹から離れる
ダークカブト「さてと、サンシャイン、ホーリーナイトそろそろお前達のアレを決めてやれ!!!」
サンシャイン「うん!!!。行くよホーリーナイト」
ホーリーナイト「オッケー!!!」
ダークカブト「フェアリー、俺達は2人のサポートを」
フェアリー「アイアイサー!!!」
フェアリーとダークカブトはジェロニモンとゴルドラスの攻撃がサンシャインとホーリーナイトに向けられるのを阻止するように2匹にクナイガンとレイピアの射撃を見舞わせる。
サンシャイン・ホーリーナイト『プリキュア・フローラルパワー・フォルティシモ!!!』
黄金と白銀の光が2匹の身体に直撃しハート型の穴をあけて貫通した瞬間に2人は2匹の後ろに瞬間移動しているのは言うまでもない。
サンシャイン・ホーリーナイト『ハートキャッチ!!!』
爆発後に2匹はその場に倒れ眠りについた。だがその直後・・・・
パワードザンボラー「ギャァアアアアアアアッ!!!!!」
パワードケムラー「ガアアアゴオオオオオオオッ!!!!!」
今度は灼熱怪獣ザンボラーと毒ガス怪獣ケムラーの改造体が現れた。
4人はすぐに戦闘態勢を整える。

カブト「ちッ!!!」
ゴモラとバードンの強さはシルバゴンやガギとは比べ物にならなかった・・・俊敏なゴモラと空を飛び翻弄するバードンのコンビネーションの前にブロッサムの技も中々通らない。
ブロッサム「こんな時にティガがいてくれれば」
ブロッサムは弱気な口調でそう言った。こんな時怪獣たちと対等に

戦う事が出来る彼（ティガ）がいてくれればと・・・それを聞いた大人は複雑な心境になるがすぐに喝を入れるように怒鳴った。
カブト「！！！・・・諦めるなブロッサム！！！。ティガは・・・ウルトラマンは俺達が何どんなに頑張っても倒せな敵が現れた時に来てくれるんだ・・・今はまだ俺達は戦える・・・だから最後の最後まで”俺達”が頑張るんだ！！！」
ブロッサム「カブト・・・・はい！！！」
カブトの言葉を聞き闘志を燃え上がらせるブロッサムはシプレと合体しバードンに向けて飛び上がった。セイバーはゴモラを引き寄せ何とか大人しくさせようと懸命に奮闘する。
カブト「くっ！！！」
思わずブロッサムのセリフにムキになってしまう事に苛立つカブト・・・今この場では変身が出来ない。この場で変身するという事はそれはつぼみにティガの正体をばらすという事になる。・・・・今は絶対にライダーの力で対抗してやるとカブトはハイパーゼクターを呼び寄せ手に取るとそれをベルトに装着する。
カブト「ハイパーキャストオフ」
電子音「ＨＹＰＥＲ－ＣＡＳＴ－ＯＦＦ」
ハイパーフォームにフォームチェンジするとパーフェクトゼクター呼び寄せて先ずは飛び回るバードンを地面に落としてしまおうとドレイクゼクターと合体させる。
電子音「ＨＹＰＥＲ－ＳＨＯＯＴＩＮＧ」
ハイパーカブト「うぉおおおおおおっ！！！！！！！！！！」
バードンの羽にハイパーシューティングが命中するとバードンは地面に落ちた。ゴモラもセイバーの格闘技で地面に身体を落としている今がチャンスだとブロッサムとセイバーの２人は浄化技の準備を始めようとするが。
バードン「ギシャォオオオオオオオッ！！！！！！！！！」
バードンがさせるものかと２人に向かって火炎放射を発射したのだ。
咄嗟の事で２人は動けないまま灼熱の炎が迫りくる・・・いくらプ

リキュアといえど至近距離であの炎を喰らったらひとたまりもない。
カブトは変身を解き大人の姿になり何とかしようと2人に向かう。
大人「つぼみぃいいいい!!!!!、真夜あああああっ!!!!!!!!」
ブロッサム「!!!!・・大人、来ちゃダメぇえ!!!!!」
2人を助けようとする大人を見てブロッサムは叫ぶが大人は助けようと必死に走ってくる・・・このままでは生身の彼は灰に・・・ブロッサムの声が木霊する中で大人は決意を固めた目になる。
大人「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ!!!!!!!!!!!!!!」
もう迷っていられない・・・今こそ自分の本当の力で彼女(ブロッサム)を助ける時だ・・・スパークレンスから光を解放しつぼみ達の前に立ちふさがり炎を身体で受け止めた。
ブロッサム「・・・・!?・・・ひ、大人?・・・・っ!!!!!」
自分の目の前にはバリアを炎で防いでいる大人(ティガ)の姿があった・・・必死に炎を受け止めるその姿は間違いなく彼(ティガ)の姿は間違えようがない・・・大人は本当にウルトラマンティガであった・・・。
ティガ「ハァアアアアッ!!!!!!!」
炎を跳ね返すとバードンに向かってハンドスラッシュを放つとバードンは怯み炎を消滅させた。
ブロッサム「大人・・・本当に貴方なんですね!?・・あの時の光も・・・ずっと私たちを守ってくれたウルトラマンティガは・・・貴方なんですね!?」
ティガ「・・・・」
ブロッサムの言葉に対してティガは静かにうなずいた。そして立ち上がった怪獣達に向かう為に巨大化しゴモラとバードンに向かっていく。

パワードメンジェラ「ギシャシャシャシャシャ!!!!!!」
ムーンライト「はぁあああああ!!!!!!!」
マリン「でりゃぁあああああっ!!!!!」

マリンとムーンライトのコンビネーションで双子のエイリアンのメンジェラもコンビネーションを発揮しようと1つの身体を分離してマリンとムーンライトに迫る。
金パワードメンジェラ「ギシャシャヤヤヤヤァアアッ!!!!!」
マリン「とおっ!!!!!」
金色のメンジェラのはマリン向けて光線を放つがそれは当たることなく逆にマリンのキックに追いつめられる事になってしまった。
銀パワードメンジェラ「ギシャギシャギシャシシャシャァアアアッ!!!!!」
銀メンジェラはツノを出してムーンライトを突き刺そうとするもそんな単調な攻撃は彼女に通じるわけがない。
ムーンライト「やあぁあああああっ!!!!!」
素早く後ろに回り込んでいくとそのままメンジェラにムーンライト・シルバー・インパクトのエネルギーを叩き込んで地面に自らの爪を突き刺すという間抜けな事になってしまった銀メンジャラ。そのまま2人で1体という感じの怪獣のメンジェラを翻弄しムーンライトとマリンは一気にメンジェラを追いつめた。
マリン「プリキュア・ブルーフォルテウェイブ!!!!!」
ムーンライト「プリキュア・シルバーフォルテウェイブ!!!!」
そしてフォルテウェイブを受けるとメンジャラはその場に倒れる。
2人のコンビネーションを見ていたガタックは喜びの声を上げたガタック「よっしゃぁーーっ!!!!後はあのフジツボみたいなヤツだけだ」
残りはあの奇怪な形をしたブルトンだけであったがブルトンは触角の様なアンテナを出すと2人をカプセルの様なんので閉じ込めてしまった。
マリン「な、何これ!?」
ムーンライト「っ!!!!!・・・あぁあああああっ!!!!!!!」
マリン「ムーンライト?・・きゃぁあああああっ!!!!!」
カプセル内部から電撃を身体に浴びせられる2人は苦しむ・・・捕

まっていなかったガタックはカリバーで斬りつけるもカプセルには傷も付かない。
マリン「ガタック・・・あああぁあああっ！！！！！」
ムーンライト「あぁあっ！！！・・・私達の事はいいから・・・貴方は逃げて・・・うううぅあああああっ！！！」
ガタック「バカ野郎そんな事出来るかぁああ！！！・・・・2人を離せフジツボ野郎！！！！」
ガタックはカリバーブーメランを投げつけてもブルトンにはダメージが通らない。ブルトンはガタックに向けて反撃のエネルギー砲を放つとガタックは飛ばされてしまった。
ガタック「アースの力よ俺にマリンを・・・ムーンライトを・・・俺の大切な仲間を助けさせてくれ！！！」
ガタックはカリバーを構えながらブルトンに特攻する。絶対に助ける為にブルトンの砲撃を避けながらガタックは飛び上がり変身を解除すると・・・
琢磨「アーーーース！！！！！！」
スパークレンスを起動し赤い光に包まれ変身する。等身大の姿のアースはそのまま空に飛び上がりカプセルに向けて赤い光線を放ち子ぷせると粉々に破壊した。
マリン「琢磨が・・・ウルトラマンアース？」
ムーンライト「そうだったのね」
目の前でウルトラマンに変身した琢磨に言葉を失うマリンとムーンライト。アースは2人の前に立ち巨大化すると強敵パワードブルトンに勝負を挑む。

パワードザンボラー「ギシャァアアオオオオオオオオッ！！！！！」
パワードケムラー「グガァアアオオオオオオオオオオッ！！！！！」
ザンボラーの灼熱の体温とケムラーの毒ガス攻撃をなんとか受け流すも2匹のトリキーな戦いに思うように戦えないダークカブト達。
ダークカブト「奴らに近づく事が出来れば」

何とか距離を縮める事が出来れば浄化する事が出来るのだがそれをさせない灼熱の熱波と炎、毒ガスの攻撃がそれをさえまいと立ちふさがる。
パワードザンボラー「ギシャァアアアオオオッ！！！！！！！」
ザンボラーがマグマを思わせる灼熱の熱戦を４人に向けて発射する。
呼びあがって避けるにも後ろにはケムラーの毒ガスが迫ってきている・・・やむを得ずサンシャインとホーリーナイトがサンフラワーイージスとホーリーシールドを発動し熱戦と毒ガスを防ぐ
ダークカブト「こ、このままじゃ！！！・・・・（もう迷っていられない・・・今こそ）」
いくらなんでもこのままでは・・・ダークカブトはいきなり変身を解きすぐの姿に戻る。もう迷っている場合ではない・・・コレも運命なのならばそれに従うまでだ。
サンシャイン「す、傑！？」
ホーリーナイト「何で変身を解いちゃうの！！！・・・早くダークカブトに変身を！！！」
フェアリー「何考えてるのよこの状況で！！！」
変身を突然解いたといた事に慌てる様子でそう言うが傑はサンシャイン達に笑みを見せる。・・・そしてスパークレンスを上着から取り出す。
サンシャイン「そ、それは！！！」
ホーリーナイト「あの時の！！！」
フェアリー「あ、アンタ、何をするつもり！？」
見覚えのあるあの神具。アンナが転生した時に現れたあの３つの神具のうちの１つ。傑は３人の問いに笑みを見せてこう答えた
傑「俺のもう１つの姿・・・それでお前たちを助ける・・・今まで隠してた力で！！！」
傑はそのままスパークレンスを起動し青い光に身を包む・・・光はそのまま上空に飛び上がるとそこに傑（デュナミス）の姿があった。
デュナミス「ジュワ！！！」

上空から2匹にむけてデュナミスセイバーで斬りつけて熱戦と毒ガスを中断させた。傑（デュナミス）は巨人となったその姿でサンシャインたちを見下ろした

サンシャイン「傑がウルトラマンデュナミス？」

ホーリーナイト「あの時私を助けたの光は・・貴方だったの？」

フェアリー「ウソでしょ？」

デュナミス「フッ！！！」

パワードザンボラー「グオォオオオオオオッ！！！！！！！」

パワードケムラー「ガアアゴゴオオオオオオッ！！！！！！！！」

ザンボラーとケムラーの咆哮を聞きデュナミスは氷剣（デュナミスセイバー）を構えたまま立ち向かう。それに続きサンシャイン達も飛び上がる。

ティガ「ハァアッ！！！」

パワードゴモラ「ギシャァアアアオオオオッ！！！！！！！」

角を掴みティガはゴモラと取っ組み合いになる。生体改造を受けたゴモラの力は強靭で身体が押し戻されそうになる・・・

ティガ「ンーーーーっ！！！！・・・チャァアアアアアアッ！！！！」

身体が少し下がった瞬間にティガは白い稲妻を発生させる・・・早速パワードから教わり得た力をゴモラで試すつもりなのだ。ゴモラの腕素早くつかみ背負い投げで投げ捨ててやる。

パワードゴモラ「ギシャァアアオオオオッ！！！！！！！」

ティガ「ハッ、ンンンーーーーっ！！！！・・・ハァアッ！！！」

立ち上がってきたゴモラの突進を避けるとティガは上空に飛び上がる。そしてそのまま高速回転し光の輪を発生させゴモラの身体を拘束する。新技、ウルトラバインドだ。

パワードバードン「ギシャァアオオオオッ！！！！！！」

ゴモラの動きが封じられた事にバードンは飛び上がり頬のを上げてティガに向かってくる。ティガはそれを避けながらスカイタイプにタイプチェンジすると空に飛び上がりバードン空中戦を挑む。

ブロッサム「いつもより強い」
セイバー「（流石に私を倒した事はあるわね）」
ティガ・スカイタイプ「ハァアッ！！！」
バードンの後ろを取るとランバルト光弾をバードンの翼の付け根に放ち地面に落とす。そして足にむけてティガフリーザーを放ち身動きを止めさせる。
ティガ・スカイタイプ「後はお前が決めろブロッサム！！！」
ブロッサム「はい！！！。花よ輝け、プリキュア・ピンクフォルテウェイブ！！！！」
テレパシーでブロッサムにそう伝えると彼女はそのままタクトを取り出し特大のフォルテウェイブを作り上げるとゴモラとバードンに向けて発射した。
パワードゴモラ「ギシャァアアオオオオオオオオオッ！！！！！！！！」
パワードバードン「ギシャァアアアアアアアアアッ！！！！！！！！！」
２匹はフォルテウェイブが直撃すると悲鳴をあげる・・・しかし光が２匹の身体を包み込んでいくと悲鳴も小さくなっていく。
ブロッサム「ハートキャッチ！！！！」
ゴモラとバードンの姿が元に戻った。ブロッサムがティガの顔の方まで飛んでいくと目の前まで近づく。
ブロッサム「ありがとう、大人」
ティガ「（何を今更・・・俺の方こそ）」
それは自分の言うセリフだと大人（ティガ）は言いたかった。この力の事がばれるのは怖くて堪らなかったでもブロッサムは恐れることなく自分を仲間として見てくれる。不安は一気に消し飛んだ。。
アース「グゥ！！・・・ハァアアアっ！！！！！」
ブルトンの四次元を利用した攻撃に思った以上に苦戦を強いられるアース達。常識が通用しない四次元の攻撃に時空が歪むとアース達

はブルトンの中に吸い込まれてしまった。
アース「ジュワっ!?・・・グゥ・・・」
マリン「こ、此処は怪獣の体内?」
巨大化した筈のアースもムーンライト達と同じサイズに縮小されてしまった。取り込まれたブルトンの体中は果てしない空間が広がっているだけだ。
ムーンライト「っ!!!2人とも後ろよ!!!」
アース・マリン『!!!???』
背後にブルトンの本体が現れる衝撃波を浴びせようと触角を出す。
3人はすぐにブルトンから離れるもブルトンは間合いを詰める様に瞬間移動して離れさせない。
パワードブルトン「ゴオオオオオンッ!!!!!!!!!」
距離を縮めたまま衝撃波を放つ。だがそれをアースが我が身を盾にしてマリンとムーンライトを守る。
マリン「琢磨ぁ!!!大丈夫?」
ムーンライト「この空間じゃ本体を捕えられない・・・このままじゃ無抵抗にやられてしまうわ」
このままじゃ何もできないまま自分達が倒されてしまう。アースは何か考えついたように2人を自分から離れさせる。
アース「ダァアアアアアアアアッ!!!!!!!!!!」
アースは突然その場で高速回転をし始めるたのだ・・・まるでドリルのように赤い光と稲妻を放ちながら辺りの歪んだ空間を相殺する程の異空間を自分の身体で発生させるつもりなのだ。
ビキ!!!!!
突然空間が割れるとブルトンの身体から煙が発生するそして空間が砕け散るとマリン、ムーンライト、アースは外に脱出できた。
パワードブルトン「ゴオオオオオォオォオオンッ!!!!!!!!」
ブルトンはその場に浮き上がると赤色の石と青色の石の姿になってしまった。アースはそれが接触しないようにバリアで隔離する。

アース「・・・・・」
なんとか四次元を操るブルトンを倒したアース。もう役目は終わったとアースは空を見上げ飛びあがろうとするが
マリン「ちょい待ち！！！」
アーし「グオッ！？」
それをさせないとマリンがアースの身体を掴んで押し倒してしまった・・・アースはやれやれという様に掴まれたマリンの手を取った。
マリン「まだ・・・お礼言ってない」
アース「・・・・・」
意外な言葉に少し反応に困ってしまった・・・だがアースはそのまま手を取りただ黙ってうなずいた。
ムーンライト「後で色々聞かせてもらうわよ？貴方が今までその姿の事を黙っていた理由もね」
いつもと変わらない口調でいつもと変わらない目で見てくれる。その事に本当にうれしかった。アースは黙っていたが頷く

パワードザンボラー「ギシャァアアオオオオオッ！！！！！！！！」
パワードケムラー「ガアアゴオオオオオオオッ！！！！！！！！！」
ケムラーと毒ガスを氷剣（デュナミスセイバー）で防ぎきる。下手に攻撃は出来ないがでは近づく事が出来ない・・・ならばやむを得ない
デュナミス「ハァアアアアッ！！！！！！！！」
ケムラーの尻尾を切り裂き毒ガスの発射口を封じる。
パワードケムラー「グオオオオオッ！！！！！！・・・ガァアアアッ！！！！！」
尻尾を切られた事に悲鳴を上げるケムラー。毒ガスは封じられてしまったがまだ自分にはこの巨体があると言わんばかりにデュナミスに体当たりを仕掛けてきた。流石に氷剣（デュナミスセイバー）を出したままではケムラーにも危険が及ぶので氷剣をしまいケムラーと取っ組みあう。
サインシャイン「いけない！！・・パワーじゃ押し負けちゃう！！！」

あの巨体をティガのスカイタイプよりも非力なデュナミスがいつまでも耐えられるとは思えない。サンシャインとホーリーナイトが加勢しようと前に出ようとする・・・のだがデュナミスが止めた。
サンシャイン「どうして!?」
ホーリーナイト「1人で・・・戦うつもりなの!?」
デュナミスは唸り声を上げながら両腕に力を込めていくとそのままケムラーを持ちあげる。
デュナミス「デヤァアアアアアア」
そのままケムラーを投げ飛ばして地面に仰向けになる様にたたきつけてやる。そして高速移動してザンボラーに近づく
パワードザンボラー「ギシャァアアアアアッ!!!!!!!!」
ザンボラーは熱戦を吐こうと口を開いていくのだがデュナミスは熱戦が来る前に水をザンボラーに向けて放ちザンボラーの体温を急変化させるそして氷で足を固めさせるて身動きを封じてしまう。
デュナミス「今だぁサンシャイン、ホリーナイト」
サンシャイン・ホーリーナイト「うん!!!!!」
ザンボラーとケムラーの攻撃が出来ない今のうちにサンシャインとホーリーナイトは飛び上がりザンボラーとケムラーに向かって必殺技(フォルテウエイブ)を叩き込む。
サンシャイン「花よ舞い踊れ、プリキュア・ゴールドフォルテバースト!!!!」
ホリーナイト「花よ轟け、プリキュア、ホーリーフォルテストーム!!!!!」
サンシャインのゴールドフォルテバーストとホーリーナイトのホーリーフォルテストームが融合しザンボラーとケムラーを呑みこんでいく・・・爆風と光がやむ頃には眠りにつき元の姿に戻ったケムラーとザンボラーの姿があった。
デュナミス「・・・・・・」
無邪気に眠る2匹を眺めると下からサンシャインが自分を呼ぶ声が聞こえた来た。デュナミスはそのままの姿で身体を等身サイズ縮小

する。
サンシャイン「デュナミス・・・いいえ傑。」
デュナミス「皆・・・黙っててていてゴメンな」
ホーリーナイト「そんな事今言わないでよ」
フェアリー「今更驚かないよ」
3人はいつもと変わらない笑顔を見せてくれた。自分を仲間として見てくれるその視線にデュナミスは歓喜し拳は震えてしまう
デュナミス「・・・ありがとう」
小さい声でそうつぶやいた。一気に重荷が取れた。もう隠す必要はない・・・・。

サイコバルタン「ハハハ、カカッタ!!!」
サイコバルタンは衛星で3人ウルトラマンがそろったのを確認するとバルタン戦艦からドラコを投下した。投下されたドラコはワープし怪獣たちを浄化し終えたブロッサム達の前に現れた。
ティガ・アース・デュナミス『!!!!!!』
パワード「ドラコ!!!」
現れたのは暗殺者ドラコは束の間の勝利を喜んでいた彼らの前に禍々しい鎌(ナイフ)を見せていきゆっくりと近づいていく。
ティガ「ブロッサム達は下がってろ」
アース「パワーアップした力を今こそ見せてやる」
デュナミス「お前達は十分に頑張った。後は・・・・」
ティガ・アース・デュナミス『俺達に任せろ!!!!!』
3人のウルトラマンは巨大化しドラコの前にたった。それに合わせ青い稲妻と共にパワードも姿を見せる。前に戦った時とは違う・・・

強化されたその力で今度はドラコを絶対に倒す！！！！

第６１話バルタンの大逆襲ー地球総攻撃計画ー？「明かされる正体」（後書き）

次回はドラコとの怒涛の大乱闘！！！！！

次回もお楽しみに♪

第６２話バルタンの大逆襲ー地球総攻撃計画ー？「もう何も怖くない」（前書き

前回までのあらすじ～
怒涛の快進撃で怪獣たちを浄化するチームウルティメイト・・・戦いの中で大人達は迷いを捨て自分達がウルトラマンである事を明かす。
そんな一同に暗殺者ドラコが迫り来る。パワーアップした自分達のパワーを見せる為大人達は戦いを挑む！！！

第62話バルタンの大逆襲ー地球総攻撃計画ー？「もう何も怖くない」

パワードドラコ「ギシャァアアアアアアッ！！！！！」
ドラコは口を開きながら生気のない目でティガ達を睨みつける・・・
しかしティガ達はもうその目には動じない。ジリジリと静寂の時が流れる中先に動いたのはウルトラマン勢であった。
ティガ「ハァアッ！！！」
ティガがドラコにパンチ、キックを2発ずつ放つと僅かにドラコが怯んだ。強化された事に驚いているのだろうかだがすぐにティガにパンチを返しティガを飛ばす。
ティガ「グッ・・・チャァッ！！！」
ハンドスラッシュをドラコに向けた放つと身体に火花が散った。生体反射外骨格で覆われたドラコの皮膚に傷を付けることなどは1戦目ではありえなかったこと。ドラコは両手に鎌を装備するとそのままティガに向かって斬りかかる。
ティガ「ッ！！・・・グオオオッ！！？？」
斬られる寸前に両手を受け止めるティガ・・・タイプチェンジできない今の状況では流石にティガ1人ではきつい・・・するとアースとデュナミスがそれぞれドラコの腕をつかみティガを解放させる。
ティガ「ンーーーーッ・・・ハッ！！！」
すぐにパワータイプにチェンジすると力を込めた一撃をドラコの右胸に放つとそこから火花が散りドラコは後ろに下がるその後アースとデュナミスのダブルパンチも同じとこに放たれるとそこに傷が入った。
パワード「ダァアアアアッ！！！！！」
更にパワードのパワードチョップ更にキックを数発放ちドラコに大ダメージを与えてやる。依然戦って経験から光線技は使わず鎌（ナイフ）に気をつけながら攻撃を行いドラコにダメージを蓄積させる
パワードドラコ「ギシャァアアアアッ！！！！！」

ドラコは突然離れると上空から新たに3体に出現した。サイコバルタンもいくらドラコといえども1対4では分が悪と判断したのだろう。

ティガ・パワータイプ「チャァアッ！！！」
パワードドラコ1「ギシャァアアアアッ！！！！」
1体目のドラコとティガは睨み合いながら間合いを徐々に詰め始める。ドラコの隙のない構えに対してティガも1戦目とは違い動じない。ナイフを取り出したドラコはゆっくりとティガとの間合いを詰め始めた。それを見て対するティガはパワータイプのまま走りドラコと取っ組み合いを始める。
パワードドラコ1「ギシャァアアアアア！！！！！」
ティガ・パワータイプ「ハァアアアアアアアアッ！！！！」
ナイフをティガの首元の落とそうとするがティガはそれを受け止めそのままドラコを地面に投げ飛ばした。
ティガ・パワータイプ「チャァッ！！！！」
パワードドラコ1「グオオォオオオッ！！！！！」
以前とは違うティガの強さに冷静ながらも戸惑いを見せるドラコ。ティガの猛攻はまだ終わらない。ドラコの上半身を掴んでやるとそのまま頭から地面に突き刺す様に投げ飛ばしてしまう。地面を貫いて動けなくなったドラコは暴れるように足を動かす。ティガはそのまま上空に飛び上がりドラコのの距離を十分に取るとそのまま登場時のポーズをとりながら紅い光で身体を発酵させて一気にドラコに突っ込んでいく・・・としてドラコに空中特攻（ティガ・バーニングダッシュ）を叩き込んでやる・・・爆円の中現れたティガのカラータイマーは点滅を始めていた。

アース「デヤァアアアアアッ！！！！」
アースのボディアタックを喰らわせると2体目ドラコのマウントを奪いパンチを何発もお見舞いさせていた。パワー溢れるその攻撃でドラコに反撃の隙など与えないつもりだ。同じ部分を何度も殴り生

体反射外骨格に罅を入れる。そんなドラコだったが下からアースに向かって光線を放って上から退かせてやる。
アース「グオオッ!??」
体勢を立て直す前のアースに向かってドラコは鎌(ナイフ)を振りおろした。
アース「・・・・・」
パワードラコ2「!!!!!」
振りおろされたナイフをアースはなんと左手のみで受け止めた。
アース「ヘヤァアアアアアアアッ!!!!!!」
そのままゆっくりと立ち上がると腕を下ろさせそのまま右手を手刀の形にすると鎌に向かって振りおろしを叩き折るとドラコの顔に向かってパンチ1発叩き込んだ後一度離れる
アース「ハッ・・・オオオオオオォオオッ!!!!!!!!」
突如彼の右腕全体に炎が纏われると右腕に赤い光が集まる。赤い光からは高熱が発せられ周囲にもその熱は伝わるほどだ・・・アースはその腕をドラコに向かって思いっきり突き出し叩きつけていく。気力会得の際に考案した新必殺技「メルトダウン・ナックル」だ。
アース「ハァアアアアアアアアアアアッ!!!!!!!!!!!!」
ドラコはたかがパンチごとき受けとめてくれると胸を張りパンチを受けとめるがそれが間違いであった・・・ドラコの身体の生体反射外骨格はアースの炎をも超える高温には耐えきれずドロドロに溶け始めていくのだ。気がついた時にはもう手遅れだ・・・ドラコの身体はドロドロに液状化していきながら最後には爆発炎上し消滅して行った。
アース「ハァアアア〜〜〜ッ!!!!!」
腕に集まった炎を体内に戻す。腕をおさえながら少し苦しそうな様子であった。自分の炎の力を極限にまで高めた反動なのだろう。
デュナミス「ハッ!!!」
デュナミスセイバーでドラコのナイフを弾き合わせながらドラコの

体表に傷を付ける。生体反射外骨格の強度をも上回るようで接近戦を自分から挑みセイバーでドラコの身体に滅多斬りのオンパレードを浴びせてやる。そして遂にはドラコの鎌以外の象徴ともいえる両羽根を切り裂いてしまう。

パワードドラコ3「キシャァアアアッ!!!!!!」

羽を着られると悲鳴を上げるドラコだが羽にはプライドの様なものがあるのだろうか鎌を両手にだし2刀流になる。だがデュナミスは自信からくる涼しい態度で剣を構え直しドラコに向かう。

デュナミス「シュワッ!!!」

鎌と剣がぶつかり合いながらも剣技ではデュナミスが圧倒するように徐々に攻めに徹する。鍛え上げた剣術と持ち前のスピードで弱点を克服しながらドラコに反撃の隙など全く与えない迅速の攻撃を見せつけていく。

デュナミス「ンーーーー!!!・・・ハァアアアアアアアッ!!!!!」

そして一度ドラコから離れセイバーを光らせるとセイバーが細長い形態に変化する。走しりながら構えたそれで一閃斬をドラコのボディに叩き込む。

パワードドラコ3「ギシャァアアアッ!!!!!」

ドラコは斬撃を受けても振りかえり前に進んでいきその場に止まり微動だにしないデュナミスに反撃しようとナイフを構えた腕を振り上げるが・・・・

パワードドラコ「ギシャァアア・・・・・っ!?・・・・・・」

ドラコの2つの鎌が真っ二つに折れるとそのままドラコは後ろに倒れ爆発する。

デュナミス「・・・・・・」

一度剣を振うとデュナミスはセイバーを消滅させドラコが爆発したその場を眺めるとそのまま後ろをゆっくり歩き始める。

パワード「シュワァアッ!!!!」

かつて戦った事のあるドラコの攻撃をパワードは避けながらパンチ、キック、チョップといった得意の格闘技でドラコの身体に傷を付けていく。
パワードドラコ４「キシャァアアア」
ドラコの鎌攻撃を避けられパワードの巧みかつダイナミックな攻撃にドラコはすぐに劣勢になる。かつての敵の対策は既に打たれており同じ手はツウ好しないという事は正にこの事だろう。
パワード「ダァアアアアッ！！！！」
パワードの両腕はドラコの胸元に叩き込まれて１億トンのダメージを受けると生体反射外骨格のドラコの皮膚に大きな亀裂が入る。それを見た瞬間パワードは離れていくと
パワード「シャァアアッ！！！！！」
メガスペシウム光線を一点発射し亀裂の入った部分に光線を注ぎ込ませていった・・・ドラコは大の字になりながら倒れる間もなく大爆発を起こし消滅した。

ブロッサム・マリン・サンシャイン・ムーンライト・フェアリー『・・・・』
ティガ達は仲間達の前に立つと４つの光の塊となり地上に降り立つ・・・そこからは４人がゆっくりと歩いてくる姿が見えた。
つぼみ「・・・・」
それに合わせブロッサム達は変身を解き人間の姿に戻った。そしてパワード以外の４人につぼみ達は爪寄る様に近くと。
つぼみ「何で今まで黙ってたんですか？・・・自分達がウルトラマンだった事を」
大人・琢磨・傑『・・・・・』
開口一番はやっぱりこれだ。「何で黙っていたのか？」誰もが言うセリフだ・・・心に刺さる様な視線に対して最初に大人が口を開いた。
大人「怖かったから・・・お前達に”化け物”って言われるんじ

ゃないかって怖かったから」
琢磨「ライダーやプリキュアとは違う。あの姿は”人”じゃない・・・しかも自分が望んだ力でもない・・・それに俺達は・・・」
傑「いつまでもお前達と共にいたい・・・でもこの大き過ぎる”力”の事を知ったお前達が俺達を今までのように接してくれるか・・・それが不安だった」
次々と語る大人達の本音。一度はこの力を捨てようとさえ思った事・・・正体がばれたときは自分達はつぼみ達の前から去る覚悟もあったという事も。
大人「それに俺達はお前らに助けられてばっかりだったし・・・これ以上お前達に徒な重圧を・・・不安を抱えてほしくもなかった」
声が震え始めてきた・・・自分の本音をこんなに語ったのは始めただったからなのか？しかも言える筈のない事を。

つぼみ「・・・・」
その全ての不安を聞きいれたつぼみは突然大人に近づくとそのまま彼を抱きしめた彼の大きな身体を優しく包み込むように・・・・大人は当然驚いて咄嗟に離れようとしたがつぼみは彼を落ちつかせるように「もう苦しまないで」と言った。
大人「え？」
つぼみ「もう1人で苦しまないでください。例え貴方がウルトラマンでも仮面ライダーでも・・・何であったとしても貴方は上原大人という1人の人間です。違いますか？」
大人「・・・・つぼみ！！！」

えりか「仲間のアタシ達が蚊帳の外ってのは納得いかないよ・・・無理してカッコつけないでよね！！！」
琢磨「いてっ！？・・・な、なんでゲンコツ！？」
それに対して琢磨に向かってえりかは一発ゲンコツを入れた。当然琢磨は納得が出来ず反論しようとしたがそれはえりかのドヤ顔で飲

み込まれてしまった。
えりか「うーるーさい！！！今まで隠してた罰！！」
琢磨「な、何でそうなるの～・・・・ふっ」
やはりいつものように自分を構ってくれる・・・今まで必死に隠していた事がバカのように思えた琢磨だが自然と笑みが出てきてしまう。

傑「いつき・・・俺は結局ただの臆病者だったのかもな」
いつきは何も言っては来なかったが心の中では分かっているだろう・・・俺の気持ちが・・・そう思っていると・・・。
いつき「これからは傑の不満も苦しみも・・・一緒に背負う。・・・だからそんな事言わないで」
傑「・・・お前らしいな」
彼女らしい言い方で自分を励ましている・・・というよりも秘密を共有してくれる。それだけでも傑は嬉しかった。

アンナ「私達の入る隙がない・・・・どうしようかお姉ちゃん」
ゆり「・・・今はほっときましょう」
真夜「（予想通り。でもこれで3人は少し楽になったわね）」
入る隙のないゆり達3人は少し戸惑ったが今入りこむというのも野暮な話・・・今は空気を読んでそっとしておこう。

？？？「「束ノ間ノ勝利ニ酔ウガイイ・・・チームウルティメイト！！！！」」
だがそんな彼らにも空気を読まない斟酌者の影が現れた。その正体はサイコバルタンであるのは言うまでもなかっただろう。
サイコバルタン「既ニ最終戦備態勢ノ準備ハ終ワッタ・・・次デ貴様ラハ確実ニ死ヌ！！！ソノ時ヲ楽シミニシテイロ！！！！」
わざわざそれだけ言い残すとサイコバルタンの幻影は姿を消してしまった。

大人「わざわざご苦労だな・・・だがそれは絶対にできない相談だ」
つぼみ「当然です」
今更そんな事はあり得ない。いやさせるわけにはいかない・・・・
バルタンの最終作戦と最終決戦の幕は切って落とされた。

???「ピポポポポポポポポポ」
その同時刻にバルタン戦艦から巨大な炎を上げた彗星が近付いていることは大人達は気がついてはいなかったが・・・・・

第６３話バルタンの大逆襲ー地球総攻撃計画ー？「放たれたキメラ」（前書き）

前回までのあらすじ～
ドラコを撃退した3人はつぼみ達に自分達が持つ力事を包み隠さずすべて打ち明けた。つぼみ達は彼らの不安を受け止めこれからも仲間であるといい聞かせ大人あっちの不安はすべて消し飛んだのだった・・・その矢先にサイコバルタンは最終作戦の準備は整ったと宣戦布告し地球に向けて炎を纏った最後の彗星を送り込んでいくのだった。

第６３話バルタンの大逆襲ー地球総攻撃計画ー？「放たれたキメラ」

つぼみ達一行はバルタンの攻撃に備えるために一度もはや前線基地ともいつていい植物園に戻る事にした。特に大人達３人はボロボロであり軽い傷の手当ては必要であったからもあるがまだまだ聞き足りない事もあるので話を聞く為でもあった。

大人「バカだったよな俺達は・・・真夜やのぞみ達が言っていた通り・・・今更俺達がウルトラマンだって打ち明けても皆が離れていくわけがない・・・そんな事分かっていた筈なのに」

大人は今更になって何で隠していたのか自分でもわからないと思っている所だった。考えてみればつぼみ達がプリキュアであると知っても自分達は驚くどころか寧ろ彼女たちを助けたいと思ったではないか・・・それなにの自分達は彼女を裏切る様な真似をした。

つぼみ「・・・・」

大人「怖かったっていうのは間違いじゃない。この力が本当に怖かった・・・でもそれ以外に俺はもしかしたら上原大人ではなくウルトラマンティガと呼ばれる事に酔っていたのかもしれない・・・。ティガの正体が自分であるという事実を自分しか知らない事に」

琢磨「それはあるかもな。自分達しかない力に酔っていなかったとは言い切れない」

傑「・・・かっこいいしな。秘密を背負った男って言うのは」

もしかしたら本当に心の中でそう思っていたのかもしれない。自分しか知らない秘密を持つ事で他人にない優越感のようなものを何処かで抱いていたのかもしれない。

つぼみ「それは違いますよ」

大人「え？」

つぼみは３秒も経過しないうちに大人の言った事を否定した。大人はつぼみの顔を見る。

つぼみ「貴方達はそんな人じゃない。ただ自分が怖かっただけです

強大過ぎる力を持った自分が」
えりか「ていうか柄にあわないよそう言うの・・・普段の行動からさ～」
琢磨「ちょ、それひっどっ！！！！」
全員『ははははは』
つぼみの真面目な言い分にえりかの悪ふざけがプラスされると周囲に笑いが起こる。こうやって心から笑えるのも超人（ウルトラマン）なってから本当に久しぶりなことかもしれない。だがその辺女時間の中でもバルタンの最終兵器は着々と自分達との距離を縮めているのだった・・・・。

その日の夜は晴れていてとても静かな夜だった。静寂な闇が人々を眠りにつかせて誰もが熟睡し夢を見ている・・・そんな夜に突如赤い炎を纏った黒い塊がＴＰＣ極東本部基地海域に落下した。
？？？「・・・・・」
その中から現れたのは黒い身体で胸と顔の部分に黄色く光る発光体を持つその怪物はその場にノッシリと立ち上がると拳にした手ををガツンと合わせ・・・「ゼットン」と低い声を上げた。
矢車「アイツは！？」
ＧＵＴＳウィング１号で偵察に来た矢車はその巨大な相手に底知れぬ違和感を感じていた。まるでロボットの様なその存在感と無機質感。威嚇射撃をしようとレーダーにロックオンを仕掛けるとゼットンは動き始める。
パワードゼットン「・・・・・」
矢車「うわっ！？」
黄色い発光体から突然放たれたその炎を何と避けると矢車はすぐにレーザーで反撃を開始するが当たっても微動だにもしない。レーザーが無理ならナパーム弾はどうだとばかりにウィングのあらゆる攻撃を試すもまったく効果は見られない。
矢車「くっ！！！・・・何なんだコイツは」

何をしても効果がないためやむを得ず隊長指示もあり矢車は一度(ダイブ)令本部(ハンガー)へと帰還する。その1時間後にはTPCのウィング1号と2号の5機の一斉攻撃を始めるもゼットンには通用せず全滅という結果になってしまう。

夜が明けゼットンにGUTS隊の攻撃が待った通用しなかったことが早朝のニュースに流れ大人達の耳に入る。情報によればゼットンは希望ヶ花の方に向かっているらしい。

大人「パワード・・・アレがバルタンの言っていた」

パワード「ああ。最終兵器・・・ゼットン」

琢磨「・・・なんかヤバそうだな」

テレビの映像からしてゼットンは恐らく対ウルトラマン用に作られた兵器である事はすぐに理解が出来た。これがバルタンの最後の作戦の最終兵器(キーモンスター)であるならばアイツさえ倒せばバルタンの攻撃は全てが終わる。

大人「・・・よぉし、なら今すぐに戦いに行こう!!!。奴の狙いは俺達であるのならいつまでもこうしてはいられない」

琢磨「ああ!!」

傑「うん!!」

大人の意見に琢磨と傑はすぐに首を縦に振る。今更逃げることなど許されるわけがない。だったら例え敵の罠だとしても立ち向かうしかない・・・今までだってそうやって勝ってきたのだから。

つぼみ「そうやって1人で行く気ですか?」

大人・琢磨・傑『!?』

突然声がしたのでその方向を見てみると正体はつぼみ達だった。学校であるはずのなのにどうやらサボってきたようだ。

大人「お前達・・・・・」

えりか「もう大人達だけを苦しめはしない・・・だからアタシ達は嫌でもついていく」

いつき「ボク達だって・・・今まで戦ってきたんだもの。今更抜け

駆けはさせないよ！！！！」
アンナ「うん」
ゆり「３人よりも全員よ」
夕「サポートもないよりはマシでしょ？」
真夜「皆、気持ちは同じだよ。だから一緒に戦わせて！！」
またしても俺達は３人で戦おうとしていた・・・つぼみ達に打ち明けた今のこの時でも・・・・彼女達の決意を胸に受けた３人は手を出す。
大人「・・・皆、ありがとう」
琢磨「今更抜け駆けは出来ない・・・よな！！！」
傑「バルタンに見せてやろう。俺達の強さを！！！！」

パワードゼットン「ゼットン！！！」
ゼットンはのっしりと動きながらも着々と希望ヶ花に向かって進んでいた。途中には防衛軍の戦艦や戦闘機が行く手を阻むのだが火炎弾で全て撃ち落とし破壊すべて無駄な抵抗となってしまった。そして希望ヶ花の目と鼻の先の近くまでに到達する。
パワードゼットン「・・・・・」
その前で動きを止まる。目的のターゲットが現れるまで・・・・・
そのすぐ後にそのターゲットは姿を見せた、
大人「どうやら狙いは完全に俺達のようだな」
琢磨「バルタン・・あんまり俺達を舐めないでほしいもんだぜ」
傑「全くだ・・・本当に１体だけとはな」
１１人はゼットンの近くでそう言っている所だった。
つぼみ「皆、・・・今度も負けられません！！！・・・・絶対に勝ちます！！！！」
つぼみの合図に全員はそれぞれの変身アイテムを手に持ち叫ぶと光が発生し辺りは輝き始めた。
大人「ティガァアアアアっ！！！！！！！！」

琢磨「アーーースゥウウウっ！！！！！！！！！！」

傑「デュナミーーースゥウウウウ！！！！！！！！！！」

つぼみ・えりか・いつき・ゆり・アンナ『プリキュア・オープンマイハート！！！！！』

真夜「プリキュア・セイントリバース！！！」

夕「変身！！！！」

電子音「ＨＥＮＳＩＮ」

パワード「ふっ！！！！！」

眩いばかりに光がゼットンの周りに発生すると目の前には４人のウルトラマン、６人のプリキュアと仮面ライダーが立ちふさがった。ゼットンを倒すべく全員ファイティングポーズを構えるとブロッサム達ハートキャッチのメンバーはそれぞれのパーソナルカラーのマントを纏い飛び上がるとティガ、アース、デュナミス、パワードと共にゼットンに向かっていく！！！。

今此処に最強怪獣との激戦が始まった！！！！。果たして彼らはゼットンを倒しサイコバルタン星人の野望を打ち砕く事が出来るのだろうか！？

第６３話バルタンの大逆襲ー地球総攻撃計画ー？「放たれたキメラ」（後書き）

とうとう始まったゼットンとの対決・・・・原作ではパワードを圧倒したその実力はパワーアップしたティガ達はどうなるのか？・・・・

ではでは次回もお楽しみに♪

第６４話バルタンの大逆襲ー地球総攻撃計画ー？「最強怪獣人ゼットバルタン誕

前回までのあらすじ～
放たれた宇宙恐竜パワードゼットンとチームウルティメイトとの激戦は始まった。バルタンたちの採集兵器にチームウルティメイトは勝てるのか！？

第６４話バルタンの大逆襲ー地球総攻撃計画ー？「最強怪獣人ゼットバルタン誕

ティガ「チャッ！！！」
アース「ハァっ」
デュナミス「デヤッ！！！」
パワードゼットン「ッ！！！！」
ゼットンに向かってティガ、アース、デュナミスの３人は懐にストレートパンチを入れるようとするがゼットンの細い両腕を前に出すティガ・アース。デュナミス『ッ！！？？・・・ウワァアっ！！！』
パワードゼットン「・・・・・・」
パンチが当たる前に３人に向けて赤色光線を放って吹っ飛ばしてしまった。仇を撃つと上空からプリキュア達はゼットンに急接近する。
ブロッサム・マリン・サンシャイン『プリキュア・トリプルキーーーック！！！！』
浅瀬に大の字の倒れる３人に続いてブロッサム、マリン、サンシャインがトリプルキックをゼットンの顔面に向けて放つ。だが急降下してくる彼女達にゼットンは顔を向けるとパワードゼットン「ゼットン！！！！」
ブロッサム「！！」
黄色発行体から火球を放ったのだ。勢いががついた今の彼女達は止まるにも間に合わない！！！
ホーリーナイト「ホーリーシールド！！」
だが間一髪ホーリーナイトのホーリーシールドが炎を防ぎ切りブロッサム達は無傷で済んだ。
マリン「サンキュー！！ホーリーナイト」
サンシャイン「危なかったよ」
あの少し遅かったら丸焼きになっていた所だっただろう。
ティガ「ったく・・・少しは気をつけろ！！！」
ティガは立ち上がるとすぐにパワータイプにチェンジしてブロッサ

ム達に注意を促した。ブロッサムは申し訳なさそうに「すみません」と小さい声で謝罪する。
それを聞いたあとティガはハンドスラッシュを放ちちながらゼットンと一気に距離を縮めていく。パワータイプの力技で一気に片付けようという作戦であった。
ゼットン「ゼットン！！！」
だがゼットンもその動きは既に分析済みであり火球をティガに向けてはなっていくがその前にアースが達炎の拳、バーンナックルで火球を粉々に砕いて相殺する。
アース「行けぇティガ！！！」
デュナミス「俺達がこの火球を何とかするからお前は奴に一発叩き込んでやれ！！！」
次々と放たれる火球をアース、デュナミスが相殺しティガをサポートする
ティガ・パワータイプ「ハァアアアアッ！！！！！！」
ティガはゼットンに向かって肘を突き出し怒涛のエルボーアタックを胸の発光体に叩き込んだ。これは相当なダメージであるはずだ。
ゼットン「・・・・ゼットン！！！」
ティガ・パワータイプ「ハッ！？・・・ウワァアアアッ！！！？？？」
アース・デュナミス『ウオオオオッ！！！？？』
だがティガの超パワフルなエルボーアタック攻撃を受けてもゼットンは微動だにせずとそのままティガを押し飛ばし火球弾を何発も放ちアースとデュナミスにもダメージを与える。
ムーンライト「花よ輝け、プリキュア・シルバーフォルテウェイブ！！！！！」
パワード「メガスペシウム！！！！」
素手での攻撃が効かないなら光線技で攻めてやるとムーンライトとパワードの合体技をゼットンに浴びせるもゼットンはそれを胸の発光体で吸収しそれを2人に跳ね返す。

パワード「ハッ！！！！」
パワードはムーンライト守るため青いウルトラシールドを張り跳ね返された攻撃を防ぐ。光線技も通用しない・・・だがそれでもあきらめはしなかった。
セイバー「はぁあああああっ！！！！！」
空からセイバーが急降下しながらゴールドソードとシルバーソードを構えその2つを一気にゼットンの頭に向かって振り下ろす・・・この不意打ちは決まったかと思われたのだが。
セイバー「ば、バリア！？」
パワードゼットン「・・・・・ゼットン！！！」
セイバー「きゃぁあああああっ！！！！！！」
黄色い光波バイアによってそれも防がれてしまった。セイバーに向けてゼットンの赤色光線が放たれて彼女は飛ばされてしまった。それをブロッサムが受けとめて全員一度体勢を立て直すためにゼットンから離れた。

ムーンライト「あの怪獣全く隙がないわね。私達の動きを完全に分析して常に先手を取られてしまうし不意打ちをしても完璧な対応策と反撃の手を撃ってくるわね・・・このままだと私達に勝ち目はないわ」
ムーンライトの冷静な言葉に全員は何もできないのかと必死に策を講じる。パワードは一か八か・・・かつて自分がゼットンを倒した時の策を試すしかないと思うと・・・・。
パワード「・・・1つだけ手がある。前に私が奴(ゼットン)を倒した時の方法が通用すれば奴を倒せるかもしれない」
ティガ・パワータイプ「本当か！？」
アース「その方法は？」
パワード「奴の背中に向けて光線を放つ事が出来れば・・・・奴は胸の発光体で光線を吸収するんだ。だからあの発光体唯一存在しない背中に光線を集中させれば」

デュナミス「奴を消滅させる事が出来るという事だな？」
パワード「ああ・・・だが奴の背中を向けさせるためには後ろから囮の光線を奴の背中に向けて放ち隙を作らなくてはならないし背中を向けた瞬間に光線をあてる必要がある。・・・何か私のメガスシウム光線を反射するモノさえあればいいのだが」
ゼットンに背中を向けさせるには囮の光線を後ろからゼットンに向けて放つ仕掛けがいる。だが単純に後ろから攻撃してもゼットンはすぐに行動を分析し対策を講じられてしまう。つまりは機械的な処理に追い付く”手段”がいるのだ。
ムーンライト「私のムーンライトリフレクション・・・それをゼットンの真後ろに発動させれば何とかならないかしら？」
マリン「それだ！！！。ムーンライトのあの技ならメガスペシウム光線も跳ね返せるはずだよ！！！」
唯一の突破口は見えてきた。勝負は一瞬で決まる・・・失敗は許されない！！！
パワード「よし、なら次に私がメガスペシウムを出す時にムーンライトはリフレクションを頼む・・・リフレクションが跳ね返した２発目のメガスペシウムに気を取られた奴の背中に一斉射撃を叩き込むぞ！！！」
ティガ・パワータイプ「分かった！！！」
ティガはマルチタイプにチェンジし全員散り散りになりゼットンの隙を伺う・・・静寂な間が発生すると海風が流れ緊張感が心を焦らせる。
パワード「シュワッ！！！！」
一発目のメガスペシウムがゼットンの胸吸収されるとすぐにパワードは２発目のメガスペシウムをゼットンの魔後ろに向けて放つ。
ムーンライト「ムーンライト・リフレクション！！！」
パワードが狙ったポイントに向けてムーンライトリフレクションが発生しメガスペシウムを跳ね返しゼットンの背中に向けて光線が反射する。

パワードゼットン「・・・・・」
だがそれも後ろを向いたゼットンによって吸収された。
ティガ・アース・デュナミス・パワード『ハァアアアっ!!!!』
その瞬間にティガのゼペリオン光線、アースのボルテックストーム、デュナミスのインブレイスバースト、パワードの3発目のメガスペシウム光線がゼットンの背中に直撃する。3人のエネルギーの集約は間に合わないので破壊力自体は全力ではないがそれでも4代光線の破壊力であればゼットンに致命的ダメージを与えられることは間違いない。
パワードゼットン「!!!!!・・・・ゼ・・・・ットン!!!!」
一瞬の出来事にゼットンの反応は間に合うわけがなく背中に光線が直撃すると背中が大爆発する。爆発がおさまるとゼットンの身体は4人の光線によるダメージで身体に大穴があいておりその場に前のめりになる様に倒れた。
ティガ「倒した・・・」
アース「おっしゃぁああっ!!!!」
デュナミス「・・・はぁ、はぁ、はぁ」
ブロッサム・マリン・サンシャイン・ホーリーナイト・セイバー『やったぁああ!!!!!』
パワードゼットンを何とか倒す事が出来たブロッサム達高校生プリキュアは喜びハイタッチをするがムーンライトとパワードは何やらふに落ちないという表情だった。
ホーリーナイト「どうしたのお姉ちゃん?」
ムーンライト「・・・おかしいわ。こんなにも簡単に作戦が成功するなんて」
マリン「?・・・それはアイツが予測できなかったからじゃないの?」
パワード「いや、そうではない・・・ドラコの事もあるが・・・まるで今回の戦いは私がかつて戦った時の作戦をなぞっただけだ・・・奴らがこんな単調な作戦を考えるなど・・・」

？？？「ソノ通リ」
全員『！！？？』
喜びムードだった一同の空気を突如黒い大きな影が切り裂いた。上空にバルタンの巨大戦艦が現れそこからボスのサイコバルタンが現れたのだ。
パワード「サイコバルタン！！！！」
サイコバルタン「久シブリダナ・・・ウルトラマンパワード！！・・・フフフフ！！！・・・貴様等ノデータハ完全ニ採ラセテモラッタ！！！・・・全ては計画通リ」
ティガ「何っ！？」
サイコバルタン「オオオオォォオォオオオォオオオッ！！！！！！」
サイコバルタンの号令を聞くように大穴が身体に開いたゼットンが浮き上がる・・・そしてバラバラになるとサイコバルタンの身体に呑みこまれていきバルタンの身体が黒く変色し巨大化していく・・・生々しい音と共に吸収合体する残骸と宇宙人・・・・。そして次第に形はハッキリわかるようになってきた・・・胸はゼットンの黄色発光体・・・背中は蝉を思わせるような昆虫の羽とゼットンの黒い翼が生え鋏は肥大化して鋭くカマキリ虫の鎌を思わせるように鋭く変形していく・・・顔も目は赤いバルタンの目であるがその下にゼットンの四角い目を思わせるものが出現しサイコバルタン独自の脳の両脇にゼットンの銀色の角が飛び出るように生える
？？？「コレゾ最強ノ殺戮兵器ゼットバルタン！！！！・・・・更に、出でよサイコカオスゼットン！！！！！」
そして戦艦からパワードバルタンの身体を思わせる青い身体に細く鋭い鋏を装備したパワードゼットンの強化形態・・・サイコカオスゼットンが現れたの。
ティガ「・・・本物の大ボス登場か！！！」
まさかの大ボス出現に緩んでいたチームウルティメイトはまたもや

ファイティングポーズをとり警戒する・・・バルタンの本当の狙いは自らの身体強化だったのか?・・・・真の最強の敵を前にチームウルティメイトに勝機はあるのか!?

第６４話バルタンの大逆襲ー地球総攻撃計画ー？「最強怪獣人ゼットバルタン誕

原作通りに終わっちゃ詰まらないよねってことでオリジナルの敵登場です！！！

チームウルティメイトの運命やいかに！！！

次回もお楽しみに♪

デビュー1周年記念特別企画長編予告!!!

ふたりはプリキュアＭａｘ　Ｈｅａｒｔ

ふたりはプリキュアＳｐｌａｓｈ☆Ｓｔａｒ

Ｙｅｓ!プリキュア５ＧＯＧＯ!

フレッシュプリキュア!

ハートキャッチプリキュア!

スイートプリキュア♪

かつて２１人のプリキュアが倒した『ブラックホール』・・・・・しかし彼女達が倒したのは只の方割れでしかなかった・・・・・・・・

キュアアンジェと共に戦った『先代ウルトラマンティガ』・・・・・彼以外にも光の巨人はある地に自分達が封印した闇を監視している・・彼らの名は・・・『ウルトラ兄弟』

ウルトラマン

ウルトラセブン

帰ってきたウルトラマン

ウルトラマンＡ（エース）

ウルトラマンメビウス

彼らが力のすべてを出し切り自らを犠牲にして封印した邪悪なる敵の陰謀によってプリキュア達の因縁の相手が復活する。

闇の世界の魔女／デビル

ゴーヤーン

カワリーノ

ノーザ

クライン

デューン

アルティメット

最悪の敵が復活しプリキュアオールスターズ、大人、琢磨、傑に襲いかかる!!!

神戸にて来海家主催のファッションショーをする為にハートキャッチプリキュアメンバー更には彼女達の仲間のプリキュアオールスターズと共に行動をしていて大人、琢磨、傑一行の前に現れたかつての因縁の相手・・・そして彼らと手を結んだのは宇宙人連合軍とティガを付け狙う闇の支配者ダーク。彼らはブラックホールの怨念とその兵器の封印を解き放つ為にウルトラマンティガとプリキュアオールスターズに挑戦状をたたき込んできた。

そんな中大人は1人の少年と出会い彼の心を知り自分の力だけでは助けられない人間もいる事を知る・・・

大人「俺は・・・ウルトラマンだったのに!!!」

???「人間の心は・・複雑だ。私達は君の活躍をずっと見てきた・・・太陽の神、仮面ライダーカブト、光の巨人ウルトラマンティガ・・いや上原大人と呼ぶべきかな」

大人「もしかして貴方は!!!」

???「ウルトラマン。地球での名はハヤタだ」

ハヤタ「大人、我々ウルトラマンは決して【神】ではない。どんなに頑張っても救えない命、届かない思いもある」

落胆する彼の前に1人の男が・・・伝説の戦士の1人が超人（ウルトラマン）は何であるかを語る。

???「ふはははははは!!!かかったなぁ～ウルトラマンティガ、アース、デュナミス!!!・・・貴様らはこのまま消滅されるのだぁ!!!・・・あっはははははははははは!!!!!!」

ダーク「（?）「お兄ちゃん・・・今度こそ必ず取り戻すからね・・・私のただ一人の大切な家族・・・」

同時刻宇宙人連合軍と手を結んだダークは神戸の海に封印されているブラックホールの怨念兵器を合体させかつてない恐怖を生み出そうとする。

つぼみ「大人!!!!!」

ウルトラ兄弟の意思を継ぎ立ち向かうティガ、アース、デュナミス、そして因縁の相手を倒すべくプリキュアオールスターズもかつてない奮闘を見せる!!!!

大人「最後まであきらめず・・・不可能を可能にする!!!それが・・・ウルトラマンだ!!!!」

全ての人々の声援と諦めない心が奇跡を生み出す!!!!

デビュー1周年記念特別企画【プリキュアオールスターズ&ウルトラ兄弟編】

11月執筆開始!!

第６５話バルタンの大逆襲ー地球総攻撃計画　？「諦めない心」（前書き）

前回までのあらすじ～
パワードゼットンの盲点をついてなんとか倒すことに成功したチームウルティメイトであったがそれもバルタンの作戦の１つでしかなかった。サイコバルタンは自らの身体にゼットンの残骸を合体させると自らを最強の敵「ゼットバルタン」となった。そしてパワードバルタンのパワーアップ体の「サイコカオスゼットン」までもを出現させた。
この絶対的危機にチームウルティメイトはどう立ち向かうのか！？

第６５話バルタンの大逆襲ー地球総攻撃計画　？「諦めない心」

フェアリー「な、なんて奴よ・・・この上まだあんな怪物を！！」

フェアリーは街に待機しパワードゼットンとの戦いを見届けパワードゼットンを倒した事を喜んでいたのだがその喜びもすぐに壊されてしまった。

フェアリー「私も空飛べたら・・・助けに行けるのに！！！！」

海を渡っていける手段さえあれば自分も加勢に行けるのだが・・・・自分が肝心な時に何もできない悔しさに自分を呪いたいとさえも思えてきた。

カオスサイコゼットン「ゼットン！！！！」

ゼットバルタン「フォフォフォフォフォフォフォフォフォフォフォッ！！！！！！！」

２大怪獣はの圧倒的な威圧感と戦慄はドラコもパワードゼットンも軽く凌駕するほどのものを感じられた。

ティガ「チャァアッ！！！！！」

アース「ハァアアっ！！！！」

戦慄を断ち切るべくティガがゼットバルタンにアースがサイコカオスゼットンに向かっていく・・そしてティガとアースの２人の攻撃はバルタンとゼットンの顔面に直撃する・・・・が。

サイコカオスゼットン「ゼットン！！！！」

アース「ウゴッ！？」

ティガ「アース！！！・・・ガァアッ！？」

突然首を鋏で掴まれてしまうとそのまま２人は投げ飛ばされてしまった。首を手で摩り抑えながらも何とか立ちあがると次はデュナミスとパワードが共に前に出る。

パワード「シュワァアッ！！！！」

デュナミス「タァアアアアッ！！！！」
デュナミスはデュナミスセイバーを召喚し右手に纏いながらパワードと共にコンビネーション技で挑む。パわドが正面かに立ち2匹にパワードスラッシュを正面から振りつけてやると2匹はそれを鋏で粉々に叩き割る。
デュナミス「はぁあああああああっ！！！！！！！」
その真後ろから氷剣による斬撃を2匹に浴びせるデュナミス・・・であったのだが2匹の身体全体にセイバーのソードを防いだときに使用したあの光波バリアが発生し氷剣を欠けさせてしまった。
デュナミス「っ！？？・・・ウワァアアアアアアアアッ！！！！！！」
その直後に首を回転させたサイコカオスゼットンが顔の発光体からパワードゼットンの何倍もの規模がある火球を浴びせてデュナミスを吹っ飛ばした。さらにゼットバルタンがパワードとプリキュアに向けてハイパーバイオビームを連射し彼らを希望ヶ花の街の方まで吹き飛ばしてしまった。
ティガ「・・・・強い！！！」
カオスゼットンとゼットバルタンの圧倒的な力は以前戦った地球解放軍シザースの最終兵器アルティメットジェノキャンサーと同レベル・・・いやそれ以上の力だ。これほどにまでの力だがそれでも自分たちだってあの時とは違う・・・・
ティガ「ンーーーー、ハァアッ！！！」
ティガはパワータイプにチェンジしていくとそのまま再度ゼットバルタンとカオスサイコゼットンに向かっていく・・・火炎弾とハイパーバイオビームがティガの身体に当たりながらもティガは一気に距離を縮めるように飛び出すとそのままカオスサイコゼットンにターゲットを絞り・・・・。
ティガ・パワータイプ「チャァアアアアアアアアッ！！！！！！！！」
捨て身覚悟でティガはサイコカオスゼットンに組みつきパンチを何

発も叩き込んでいく。例え効果がなくても何かしら倒す突破口さえ見つける事が出来れば・・・それだけでもいいとティガはパワータイプの腕力を叩きこんでいく・・・が。

カオスサイコゼットン「・・・ピポポポポポポポポポ！！！！！・・・ゼットン！！！！」

組みついた手を払いのけられるとゼットンの角から青と赤の光線がティガのプロテクターに注ぎ込まれるとそのままゼットンの腕にティガの身体をパワータイプの身体を押し飛ばしてしまった。

ティガ・パワータイプ「ウワァアっ・・・ッウウゥ・・・」

ブロッサム「ティガ！！！」

倒れたティガにブロッサムが彼に声をかける・・・その声にティガは頷き大丈夫さと言うように。

ティガ・パワータイプ「くっ！！！！」

隙がない攻撃と防御に前には何もできないのか？・・・いやどんな相手にでも絶対に弱点は存在するはずだ・・・それさえ見つける事が出来れば例えゼットバルタンやカオスサイコゼットンであったとしても倒す事は出来るのだから。

パワード「奴の泣き所（カオスサイコゼットン）・・・吸収版が無い部分は背中だけだが今更【同じ手】が通用するとは思えん・・・なんとか奴の背中に攻撃が当てられれば」

背中が弱点なのは恐らく間違いはない。しかしながらどうやって光線を当てるのだ？ムーンライトのリフレクションを利用してもそれは今となってしまっては予測されてしまうのは目に見えている。リフレクション”だけ”を利用する以外の方法を探さなくては。

ティガ・パワータイプ「一か八かだが俺に考えがある。ブロッサム達にも協力してほしい・・・頼めるか？」

プリキュア一同『！？』

ティガが考えだしたカオスサイコゼットンを撃破するための策を思いついたティガは全員にそう言う。果たしてティガの作戦とは・・・テレパシーでティガは全員に咲く伝える。

ブロッサム「・・・・・分かりました。やりましょう！！！」
成功すれば流れは一気に自分達の有利に傾けるが失敗すれば負ける・・・ウルトラマンのエネルギーがフルに近い今しかできない。
ゼットバルタン「何ヲスル気カ知ランガ何ヲシヨウトモ無駄ダ！！！！」
ティガ「それはどうかなぁ！？」
ティガのタイプチェンジを合図に全員が散り散りとなり飛び出す。
ゼットバルタン「無駄足掻キヲ」
今更になってこの最強パーティを前に何もできまいとゼットバルタンは嘲笑う声あげる、

ティガ「行くぞっ！！！」
ティガの合図をウルトラマン達は光を集約し始めていくとゼットバルタンに向かってゼペリオン光線、ボルテックストーム、インブレイスバースト、メガスペシウム光線を合体させた巨大な光線を放っていく・・・ゼットバルタンはスペゲルン反射光が装備されている胸を開いていくが・・・。
ゼットバルタン「ナ、何！？」
ゼットバルタンの頭上を通り過ぎサイコカオスゼットンに放たれるもそのままでは吸収されてしまう・・・だが。
サンシャイン「サンフラワーイージス！！！！」
それをサンシャインのイージスが弾き返すとゼットバルタンの方向に軌道修正される。
ゼットバルタン「馬鹿ガ！！！」
それではパワードゼットンを倒した時と全く同じではないか後ろを向きスペゲルン反射光を上空に跳ね返す・・・・が
ムーンライト「ムーンライトリフレクション！！！！」
それを見たムーンライトがすぐに2枚のリフレクションを発動させて光線の軌道を更に返させる・・・そしてそれはサイコカオスゼットンの真後ろに光線が降り注がれるサイコカオスゼットンはすぐに

後ろを向き４人の光線を吸収する。
ゼットバルタン「ハハハハハハ！！！！！！同ジ手ガ通用スルトデモ思ッテイルノカァ！？」
その後すぐに正面を向かせて背中を攻撃させまいとするがプリキュア勢が全くいない事に気がつく。
ゼットバルタン「？・・・プリキュア勢ガイナイ！？」
何処に行ったと辺りを見回し始めるゼットバルタン・・・すると後ろからブロッサムの声が発せられ・・・
ブロッサム・マリン・サンシャイン・ムーンライト『プリキュア・フローラルパワーフォルティシモ！！！』
ホーリーナイト「プリキュア・ホーリーフォルテストーム！！！！！」
セイバー「プリキュア・スターライトジャージ・クラッシュっ！！！！！」
ゼットバルタン「狙イハコレダッタノカ！！！」
後ろからの攻撃を防ごうとスペルゲン反射光を開こうとするゼットバルタンだったのだがティガ達も更に第２派の光線を放ってきた。
ゼットバルタン「ナ、何ダトォ！？」
ティガが考え出した作戦内容はこう言う事だったのだティガ達の光線に気を取られている隙にカオスサイコゼットンとゼットバルタンの背後を取り”彼女たち”のフォルテウェイブそして自分達の光線を叩き込んでいくというものであった。吸収されたり跳ね返されたりしたとしても前後ろから同時に叩き込まれたらどうなる？・・・いくら吸収出来たり跳ね返す事が出来てもそれは技を受け止めた場合のみに限られる・・・・技を受け流すという盲点をついたティガの作戦だ。
ティガ・アース・デュナミス『ハァアアアアアアアアアアアアアア！！！！！』
『ピコン、ピコン、ピコン』
しかしこの作戦には重大な欠点が１つだけある・・・それはウルト

ラマン達のエネルギーが持つか持たないかの問題だった。パワードは既にパワードゼットン戦で4発、ティガ達は2発放っている状況で彼らの光エネルギーの残量が足りるかは予想が出来ない・・・既にカラータイマーは囮の光線を放った段階で鳴り始め限界が近い・・・

サイコカオスサイコゼットン・ゼットバルタン『！！！！！！』

ハートキャッチチームが2体の身体を貫きウルトラマンとセイバーの必殺技が叩き込まれると大爆発を起こす・・・・・作戦は成功か！？

サイコカオスサイコゼットン『ゼ・・・・ットン！！！！』

サイコカオスゼットンの黄色い発光体がハート型の穴があき火花がバチバチが走り倒れてしまった。作戦の最低ラインは何とかクリアできたがゼットバルタンには大したダメージが与えられなかったのか！？

ゼットバルタン「オノレ・・・・我ガ最終兵器ヲ（サイコカオスゼットン）！！！！！」

ティガ「ハァ、ハァ、ハァ、ハァ」

カラータイマー『ピコンピコンピコンピコンピコンピコン！！！！！』

完全成功とまではいかなかったようだがサイコカオスゼットンを戦闘不能にまで追い込めた・・・あとはゼットバルタンを倒すだけなのだがティガ達のエネルギーは既に限界が近い・・・カラータイマーの点滅音が早くなり今にもその光が消えてしまいそうだ。

ゼットバルタン「フォフォフォフォフォフォフォフォフォ！！！！！」

お互い満身創痍であるのだがティガ達が動きの限界が近いのは言うまでもない・・・トドメの一撃をゼットバルタンが発射された。

サンシャイン「サンフラワーイージス！！！！！」

ホーリーナイト「ホーリー・ディスエイブルメント！！！！！」

サンシャインがゼットバルタンの攻撃を防ぎ直撃を返しながらホーリーナイトがディスエイブルメントで消滅させた。その後ブロッサ

ム達は彼らの周囲に集まる。何をするつもりだとティガ達は彼女たちを見ると彼女達は笑みを見せた。
ティガ「・・・はぁ、はぁ、はぁ・・・ブロッサム？」
ブロッサム「今度は私が貴方を助ける番です・・・私達のエネルギーを使ってください！！！」
プリキュア達の光エネルギーがティガ達４人のカラータイマーに注がれていく・・・暖かい光・・・・自分達（ウルトラマン）が持つ光とは別の光が彼らに注がれてカラータイマーの色が澄んだ青に変わる。
ティガ「ハァっ！！！！」
アース「ダァアッ！！！」
デュナミス「シュワ！！！」
パワード「ヘヤァア！！！」
４人は立ち上がりゼットバルタンに対峙するようにに立ちあがった。
ゼットバルタン「オノレ・・・マダ我ラに歯向カウトイウノカァ！！！！！」
ゼットバルタンの憤怒の叫びに対してウルトラマン達は「ジュワァっ！！！」と声を上げるとティガが反論するように声を出す。
ティガ「無駄だ！！。どんなにお前達が強くなろうとも、どんなに俺達のデータを採ろうとも・・・大切な人を守るために俺達は戦う！！！！・・・ハッ！！！、デヤァアアアアアッ！！！！！」
アース「ダァアアアアッ！！！！！」
デュナミス「ハァアアアアアッ！！！！！！」
パワード「シュワァアアアアッ！！！！！！」
そして４人のウルトラマンは仲間（プリキュア）達から受け継いだ力を爆発させるように必殺技を放とうとそれぞれポーズをとっていくとティガはパールホワイト、アースはバーニングレッド、デュナミスはマリンブルー、パワードはコバルトブルーの光に身を包まれて光線が１つに重なっていき黄金の光線になっていく。
ゼットバルタン「グオオオォオォオォオォオォオオ！！！！！！？？？？？？？」

ゼットバルタンの身体に黄金の光に身体の全体が包まれていく・・・
・全身に光を受け大爆発を起こすとゼットバルタンサイコバルタン
の姿に戻されてしまう。
サイコバルタン「ナ、何ダト・・・・カ、身体ガ！！！？？？・・・
・、身体ガ光ニナッテイク・・・・・」
そのままサイコバルタンの身体は粒子状になっていき光の粒子にな
っていく。暖かい光に身を包まれながら消滅していった・・・・

今度こそ力を使い果たしたウルトラマン達は変身がとけてしまう・・
・・上空で人間の姿に戻った彼らをブロッサム達が受けとめる。
バルタン戦艦はサイコバルタンという司令塔（トップ）、更にはサイコカオス
ゼットンが敗れ去った事に血迷ったのか戦艦の先端のドームがひら
いてくとそこに光を集めていく。
大人「あ、アイツら・・・しつこすぎるぞ！！！」
いい加減にしてくれよと言いたくなる。満身創痍である今の自分達
には限界を迎えてしまった為何もできない。
タイニー「待ってぇ！！！！！」
これ以上は全く意味がないとタイニーが駆けつけ同胞のバルタンた
ちを説得しようとするも聞き入れるわけがなく光線の集約が止まら
ない。
ブロッサム「プリキュア・ピンクフォルテウェイブ！！！！」
ブロッサムは諦めるものかとフォルテウェイブを放っていくも全長
５００メートルもある戦艦の砲撃を相殺するほどの力には程遠い・・
・・・このままでは希望ヶ花が・・・・今度こそ絶体絶命か？
サンシャイン「？・・・見て」
絶体絶命のその時２つの紅い光の球体がバルタン戦艦の前に現れた。
新たなる敵か？大人達は更なる敵に脅威を抱いてしまうもパワード
が「違う」と声を上げていくと。
ムーンライト「アレは・・・もしかして」
パワード「私の・・・仲間だ」

２つの紅い光から真紅色の光線が放たれていバルタン母艦を攻撃していく数秒が経った瞬間に大爆発を起こし消滅した。その２つの光はパワード達に向かってきた。

パワード「・・・・」

光玉にパワードに躊躇なく入っていくと等身大のウルトラマンの姿になり大人達の方を見て名残惜しそうな様子を見ていくと。

パワード「どうやら・・・私が君達と戦えるのは此処までのようだ。これからも多くの戦いと恐怖が途方もなく君たちを襲うだろう。だが君達の力があればどんな困難も乗り越えていけるだろう」

大人「パワード・・・・タイニー」

パワード「忘れないでほしい・・・我々ウルトラマンはどんな世界の地球であろうとも見守っている事を」

タイニー「私もパワード共に行きます。バルタン一族の代表として・・・今までの罪を償う為に。・・・さようなら皆さん！！！」

最後の一言を言い終わると同時にパワードとタイニーは紅い光球になると先に上がった２つの光に続き空に帰って行った。

ブロッサム「さようなら・・・・ウルトラマンパワード、タイニー」

光が完全に見えなくなるまで空をみて手を振る。

そして宇宙空間では

パワード「ずっと見ていたのですか？・・・ゾフィー、ヒカリ」

？？？１「ああ」

？？？２「流石にあの状況では助太刀に入らんとマズイと思ってな」

ワームホールに向かっていく途中でパワードは仲間に向かってそう話しかける。パワードと同じ銀色の巨人と群青の体色の巨人はそれぞれそう答えた。パワードはやれやれと言うかのように声を出したがなんだかんだ助けた事に感謝しているようでもあった。

大人「・・・・取り合えず終わったな」

ボロボロになった大人一行は植物園に着くなりデロデロとだらけるようにテラスの椅子に腰かけた。今回も色々とあったが今回ほど絆

が強くなった戦いは無かっただろう。
つぼみ「お疲れさま」
一番の功労者である3人に飲み物が入ったペットボトルを渡しながらそう言う。・・・いつもの代わりないその顔を見て大人は笑みを見えた。
えりか「さてと・・・今更だけど聞かせてよ、ウルトラマンになった時の事を」
琢磨「えー今か?」
ゆり「聞かせてくれる約束よ?」
文句を言う琢磨にゆりは少しきつめの口調でそう言われてしまうと少しため息をついた後に一晩かけて語り始めるのだった。

第６５話バルタンの大逆襲ー地球総攻撃計画　？「諦めない心」（後書き）

オマージュ入れまくってしまった。

次回からは特別企画長編に入りますのでそちらもお楽しみにください♪

ではでは、次回もお楽しみに！！！

第６６話プリキュアオールスターズ＆ウルトラ兄弟？『封印されし悪魔』（前書

ドツクゾーン、ダークフォール、ナイトメア、エターナル、ラビリンス、砂漠の使徒、の力を吸収し生まれた最悪の敵「ブラックホール」を倒したプリキュアオールスターズ、数々の多くの敵を倒し地球と宇宙の平和を守ってきた伝説の戦士集団「ウルトラ兄弟」・・・・そして初代プリキュア「キュアアンジェ」と共に戦い闇を封印した光の巨人「ウルトラマンティガ」
彼らが出会うとき封印された「悪魔」をめぐり戦いの幕が上がる。

第６６話プリキュアオールスターズ＆ウルトラ兄弟？『封印されし悪魔』

雲ひとつない夜空には星星が輝くを放っていて人々を眠りにいざなっていくのは誰もが想像できるだろう・・・「平和」という二文字が正に合うこの雰囲気を味わっている人類の影では身を徹して悪の存在と戦っている英雄の姿がある・・・【プリキュアオールスターズ】が現れる前の以前に英雄・・・彼らは今この時地球を遠く離れた月で壮絶な死闘を繰り広げていた。

『シュワァアアっ！！！！！』

５人の戦士たちは月面で側転、空中前転などなどのアクロバットな動きを見せながら光線を避ける。まるで流星群のような勢いではあるが華麗にそれを避けると５人のリーダー格の初代ウルトラマン、サブリーダーのウルトラセブンが目の前にいる敵に正面から向かっていく

ウルトラマン「シュワァッ！！！」

セブン「ジュワァアッ！！！」

ウルトラマンとセブンのダブルパンチを受けるが間をおかず敵は反撃を開始するように筋肉が発達したその腕で２人の首を掴んでしまう。その腕はかつてウルトラマンが戦ったどくろ怪獣レッドキングの腕と同じものである・・・。ウルトラマンとセブンは暴れるも敵にはビクともせず２人を持ちあげる。

？？？１「シュァッ！！！」

？？？２「トゥウウッ！！！！」

？？？３「ハァアアアっ！！！」

２人を助ける為に左右から白色、虹色。金色の３つの光線が敵の腕に降り注ぎその手元緩ませる。ウルトラマンとセブンはすぐに飛び上がり上空に避難しその光線の主の元に行く。

ウルトラマン「すまん・・ジャック、エース、メビウス」

ウルトラマンが声をかけた３人の戦士・・・彼らの名を順に紹介す

るとウルトラマンのボディーラインだが右手に金色のブレスレットを持つ戦士ウルトラマンジャック、光線技の「エース」という異名を持つウルトラマンA（エース）、ウルトラ兄弟のニューフェイスの若き戦士ウルトラマンメビウスの3人であった。

??4「ギシャァアアアアオオオオオオオン!!!!!!!!!!」

5人がいる宇宙（そら）にむけて咆哮を上げながら流星群の勢いがある光弾を放っていく敵の姿はかつて海王星で誕生した暴君怪獣タイラントを思わせるような合成怪獣（キメラ）であった。その外見は頭がシーゴラス、無数に生える触手はツインテール、腕はバラバとレッドキング、胴体はベムスター、ゴモラとエレキングの尻尾、グドンのツノなどの様々な怪獣の特徴を模ったそれに5人のウルトラ戦士たちは距離を縮めながらも光弾を避けていき月の地表に降り立つ。

A（エース）「フゥウンッ!!!」

地表に降りた後真っ先にA（エース）が正面から向かっていき取っ組みあうが腕2本で上半身を掴まれるとそれだけで力負けしそうになってしまう。

ジャック「フッ!!!・・・ッ!??・・ウワァアっ!!??」

メビウス「ジャック兄さん!!!・・ウワァアっ!!??」

2人に気を取られていその隙にジャックがスペシウム光線でダメージを与えようとするがそれを読んだように彼に向かって背中から生まれた合成怪獣（キメラ）の触手に胴体が掴まれて飛ばされてしまう。慌ててメビウスが左手のメビウムブレスを輝かせて助け出そうとするがその前にメビウスも触手につかまってしまった

ウルトラマン「ジャック!!、メビウス!!」

セブン「おのれっ!!!」

ウルトラマンとセブンはA（エース）を助ける為に前に出て合成怪獣（キメラ）の胸板を殴り腕を掴んで押し込んでいくがそれが鬱陶しいと感じたのか合成怪獣（キメラ）の発光体から紅い光と衝撃が放たれて3人を月の地面に向かって吹っ飛ばしてしまった。

？？？５「【グランドタイラント】は貴様らかつて戦った怪獣達の【怨念達】全てを集めそこに我がブラックホールの”闇”を融合させ誕生した最強にして無敵の究極怪獣であり我が最強の器だ！！！！ウルトラ兄弟、貴様らに勝ち目はない・・・此処で死んでおけ！！！！・・ふはははははははっ！！！！！」

ブラックホールと名乗るそれは５人のウルトラ戦士こと通称【ウルトラ兄弟】に高笑いをしながらそう言ってくる。初代ウルトラマンは何とか立ち上がりながらも合成怪獣（キメラ）のグランドタイラントの恐ろしさに不安感を募らせる。

ウルトラマン「なんて強い奴なんだ」

今まで数多くの怪獣や宇宙人と戦った彼もこれ程の強大で最強クラスの敵と戦った回数は５本指に入るほどしかいない。

セブン「もし、コイツが”我々ウルトラマンが存在しない”【アナザースペースの地球】に飛来したら大変な事になる」

Ａ（エース）「そんな事になったら”この次元の地球”が死の星になってしまう！！！」

セブンの言葉に続きＡ（エース）が立ち上がりこの”次元”に存在する地球の危機を訴える。

ジャック「絶対に防いでやる・・・例えこの命に代えても！！！」

メビウス「そうです、ボク達は負けるわけにはいかないんです！！！。この【アナザースペース】の平和を守るために！！！！」

メビウスとジャックはそうはさせないと意気込んだ声を上げると腕を胸の前で組んで身体に光を集めていく・・・そしてそれを勢いをく振りおろし巻かれた触手を離れさせると素早い動きで安全域へ避難する。

ウルトラマン「今だ！！！」

ソレを見たウルトラマン達３人は彼らに合流するように飛び上がり５人はグランドタイラントと十分距離がある場所まで移動するとそれぞれの必殺光線を放ち５本の光線を合体させて破壊力を最大限に引き出したソレを浴びせてやろうとする。

グランドタイラント「ギシャァアアッ！！！！」
だが距離が離れ過ぎた事が失敗だったのか当たる寸前でグランドタイラントは飛び上がり地球に向かってしまう。ソレを見たウルトラ兄弟たちも宇宙(そら)飛び上がり追いかける。
グランドタイラント「ギシャァアアオオオオオオオッ！！！！！」
後ろ見て彼らが追ってきていることを確認したグランドタイラントは背中の鋭利な突起を分離させて彼らに向けて発射する。なんとそれは巨大なロケットミサイルであり破壊力でいえば小さな隕石ぐらいならば粉々に砕けるほどはあるだろう。ウルトラ兄弟達はそれを宇宙空間でよけつつも数を軽減させていきやがて隕石群ほどあるそれの数も少なくなり全てが爆発し終えたのを見計らって必殺技を放とうを上でを十字に組もうとしていく・・・が
ウルトラマン「！！！・・・待て！！！」
ウルトラマンの声に全員の動きが固まった。グランドタイラントの後ろには青く綺麗に輝く地球があった。もう自分達と地球の距離は紙一重の差でありブラックホールはそれも計算に入れていたことを今になって気がついたのだ。
セブン「もしもこの状況で攻撃を外したら・・・・俺達の攻撃が・・・」
メビウス「地球に直撃してしまう」
グランドタイラントが地球を背にしているこの状態で光線を放ったら彼らの光線は間違いなく地球に降り注がれてしまうだろう。つまりもうウルトラ兄弟達は光線を封じられたと言ってもいいのだ。
ブラックホール「愚か者め！！！！」
地球を守る事が使命の彼らにとっては最大の泣き所と言ってもいいだろう。ブラックホールの声が響くと彼らはグランドタイラントの光と衝撃波によって飛ばされ更に触手でウルトラマンとセブンが遠くに叩き飛ばされてしまう。
ジャック「このままで5人全員がやられてしまう・・・・A(エース)！！！、

メビウス！！！」
A（エース）「よぉし！！！行くぞメビウス！！！」
メビウス「はいっ！！！」
遠距離の光線技が使えないのならば切断技しかない。万能兵器を持つジャックと切断技が得意のA（エース）そしてこのメンバーの中で唯一ブレードが出せるメビウスがこの絶対的不利な状況を打破しようと飛び上がりながらもグランドタイラントに近づいていく・・・が触手は無限に奴の身体から造られる為次第にその動きに付いていけなくなりとうとう3人は捕まってしまった。
ブラックホール「ふはははははっ！！！捻り潰してやる・・・・？」
3人を捕まえた事に浮き美奈笑いを浮かべてそう言うブラックホールだったがジャックを掴んでいた触手が光のカッターで切られてしまった。
それが飛んできたウルトラマンが飛んできており更にそれに続けてブーメランがA（エース）とメビウスの触手を切り裂いて助け出した・・・そのブーメランはセブンの頭部にあるアイスラッガーであった。気がつけばこの2人が自分の方に向かってくるではないか・・・何をするつもりだ？と気がついた時にはもう遅かった。
ウルトラマン「シュワッ！！！！」
セブン「ジュワっ！！！！」
2人は同時に自分達が最も得意とする必殺技のスペシウム光線とワイドショットを同時に放つ。この距離であれば避ける事も出来ないはずだから確実にグランドタイラントに傷を負わせる事が出来ると踏んでの上であった。
グランドタイラント「ギシャァアアオオオオウウウウウウ！！！？？？？？」
ウルトラマンのスペシウム光線が右腕2本をセブンのワイドショットが左腕2本を削ぎ落して大ダメージを与えるとそれに続きメビウス達3人がグランドタイラントの真上に飛んでいくと・・・
ジャック・A（エース）・メビウス『シュワァアッ！！！！！！』

ジャックのスペシウム光線、Aのメタリウム光線、メビウスのメビュームシュートが融合して出来た巨大な虹色の光線が頭から身体全体に降り注がれていくとバランスを崩し合成怪獣は地球の重力に呑まれるように地球に落ちて行った。

ウルトラ兄弟『シュワッ！！！！』

大気圏に入るとグランドタイラントの身体からは火を纏い始める・・・地球に向かって落ちていくと落下地点は日本それも神戸港から少し離れた海であった。ウルトラマン達もその後に続いていき奴の巨大な身体が海に沈んだの見ると生きているのか死んでいるのか確認する為に夜空から落ちた場所の様子を数秒ほど見ていると・・・禍々しく海が光り輝き始めた。奴はまだ生きているようだ。

ブラックホール「おのれぇウルトラ兄弟！！！」

禍々しく邪悪なその姿・・・黒炎に巨大な顔を見えつけて恨みの声を上げるだけであった様子から察するに器であるグランドタイラントは使えなくなったようだ。一安心と言いたかったがブラックホールは怒りの口調で話を続けた。

ブラックホール「だが我が闇は不滅・・・グランドタイラントが使えないのならば我が破滅の種を使いこの星を恐怖と絶望で包んでくれるわぁ！！！あーーっはははははは！！！！」

ブラックホールの周りに黒光りする空間が現れるがそれはすぐに別の所に消えていく・・・そのうちの1つは宇宙に飛んで行ったのはウルトラ兄弟にも確認できた。

ウルトラマン「何という執念だ」

A「我々の次元に存在する怪獣墓場から怪獣達の怨念を集めるのみならず自分で怪人を造り出せるのか？・・・ヤプールよりも凶悪ではないか！！！」

Aはかつて戦った異次元人ヤプールの事を思い出しながらそう言う。これほどまでに強大な敵はそうはいない・・・だが今この宇宙には守護者とも呼べる存在は自分達しかいない。何とかしてこの強大な敵を倒さなければ・・・それが自分達ウルトラマンの責務であるの

だ。
セブン「こんなにも強烈なマイナスパワーを封じ込める方法はたった1つしかない」
ジャック「ファイナルクロスシールド」
ジャックの言葉にセブンは無言で静かにうなずく。そしてセブンはその方法について説明を続ける。
セブン「ただしその技を使えば我々の光エネルギーの殆ど全てを使い果たしてしまう・・・もしそうなれば・・・」
その後のからはセブンが言うのを躊躇する・・・それを無理矢理ウルトラマンが続けるように説明を代わった。
ウルトラマン「そうなれば我々は変身能力を失ってしまうだろう」
ウルトラマンはブラックホールの後ろにある街を見ながらそう言った。つまりは自分達の戦う力・・・いや彼らが元に戻る手段を失うと言うことは故郷にすら帰れなくになるという事にもなる・・・だが今ここでコイツを封印しなければあの街は火の海になってしまう。どうすればいい？迷うウルトラマンにむけて一番年が若いメビウスが決意に固まった目を向けて「やりましょう」と言った。
メビウス「例え次元が違ってもボク達が愛した【地球】である事に変わりはありません。それに今”この次元の地球”を守れるのはボク達だけなんです」
メビウスの力強い物言いにジャック達も頷きA（エース）が続ける。
A（エース）「例え俺達がいなくても人間は自らの力で立派に戦い続けるでしょう」
ウルトラマンは全員の方を見て目を見る。そしてセブンが頷き全員の思いは同じであると言う事を確認したかのように彼も頷きそれぞれ5人はブラックホールの周りに向かって飛んでいく。
全員がブラックホールの周囲に集まり五芒星（ペンタグラム）になるようにブラックホールを取り囲む。そしてウルトラマン、セブン、ジャック、A（エース）、メビウスの順番で腕を横に伸ばしそこから黄金色の光を発生させて光のフィールドを発生させていく。

ブラックホール「ッ！？・・なっ！？」
そしてそれぞれの光エネルギを凝縮させると腕を胸の前で組み金色の光をブラックホールの頭上に集めると結界が作られていく。
ブラックホール「や、止めろぉっ！！」
流石のブラックホールも自分が封印されるという事に気がついたのか抵抗するように暴れていく・・だが闇を振り払う力があるとされているファイナルクロスシールドの前では如何なる敵も抵抗は無駄に終わる。
セブン「ジュワァアッ！！！！」
最後の一息だとウルトラ兄弟たちはカラータイマーを鳴らしながらも力を振り絞り幽霊のような身体となっているブラックホールを海の下に押し潰すようにエネルギーを叩きつけとうとうブラックホールの身体は完全に押しつぶされてしまい光の結界に半永久の封印をされる事になったのだ。
ブラックホール「おのれぇえっ！！！！・・・タダでは封印されんぞ！！！おおおおっ！！！っ！！！！！」
だがブラックホールも封印際に自分の方割れの一部をほんの僅かに分離させて宇宙にはなったのだった・・流石のウルトラ兄弟たちもそれには手が出せない・・・やむを得ず本体のみを封印し海中に指示めて行くのだった。
この闘いはウルトラの星で語られるウルトラ歴史史上でもウルトラ兄弟の最後の戦いでもあると記録されることとなった・・・・・・・またこの戦いは地球でも都市伝説の１つとして語り継がれることとなった。

それから十数年ほどの時が経った後・・・・・・・ブラックホールが生み出した邪悪なる種はドツクゾーン、ダークフォール、ナイトメア、エターナル、ラビリンス、砂漠の使徒と様々なものへと変身、進化を遂げたがそれら全ては別の戦士達によって倒される事になった。そしてそれらの闇を再び集め宇宙に”分身の片割れ”として復

活したブラックホールもその戦士達に倒され消滅した。・・・・・・・・それらを倒したのは言うまでもなくプリキュアという「ウルトラ兄弟」に変わって【アナザースペース】を守る勇者たちであった。そしてもう1人・・・今この地球を守っているのは彼女達の祖先とも言える「キュアアンジェ」と共に戦った光の巨人「ウルトラマンティガ」もその1人である。

そして時代はウルトラマンティガとハートキャッチプリキュアの面々が希望ヶ花を舞台に戦っていると頃にまで流れる。バルタン侵略から数カ月が経ち大人達は久々にして束の間の平和を満喫していたのだった。そんな彼らはある事情で神戸に足を運んでいたのだった。

大人「はい、チーズ!!!」

神戸港をバックに大人はつぼみ、えりか、いつき3人を写真に撮ってやる。彼らが神戸に来た理由はえりかの姉のももかが神戸にて某有名デザイナーが主催するファッションショーに参加する事になりえりか達も特例として参加する事になったからである。

つぼみ「わぁ～凄い景色です!!!」

大人「ホントだねぇ・・・夕も来ればよかったのにな・・・」

今回は夕は大学の都合もあり来る事が出来ないのが残念であったのだが大興奮の一同はショーの前日に神戸に行きただ今は観光の真っ最中であった。折角はるばる来たのだからと楽しむとえりかが意気込んだのでゆり、アンナ、ももか、真夜、4人とつぼみ、えりか、いつき、大人、琢磨、傑の6人という2組に別れて楽しんでいる所であった。久々のデート兼旅行につぼみ達はワクワクしていたのは言うまでもないだろう。

えりか「そう言えばパパから聞いたんだけど神戸には昔5人の銀色の巨人が出たんだってよぉ～!!!」

琢磨「銀色の巨人？」

何やら聞きおぼえがある単語に琢磨はすぐに反応した。ていうか銀色の巨人知り合いはこの前出来たばかりだから反応しない方がおか

しいというものだ。
大人「またそんな類の噂を・・・よく飽きないね？」
大人はまたかという様な顔になりそう言う。というのも自分と自分の仲間２人もその類の力を持っているから驚かないのは仕方ない。
いつき「もしかしたら・・・大人達の他にもいたりして」
傑「おいおい・・・勘弁してくれ」
いたら色々と面倒だと傑は少し困った口調でそう言った。だいたいそういう類の噂なんて信憑性の欠片もないのだが自分達はその力を持っているので考えただけでゾッとしない。
大人「そう言えばつぼみの【お仲間】さん達はいつ来るんだい？集合時間はとっくに過ぎてるけど？」
つぼみ「・・・そ、それは・・・わかりません！！！」
大人「はい！？」
不意に聞いてきた大人の質問につぼみは濁したようにそう答えたというのも今の彼らはある１９人の方々を待っている所であったのだ・・・つぼみの【プリキュア仲間】を。・・・遅れている理由は勿論それぞれのチームのリーダー格の人物が原因であったりするが。
大人「まぁ、とにかく会うのが楽しみだよ。お前達の【お仲間さん達】にね」
実は大人、琢磨、傑、夕そしてアンナの５人はつぼみたち意外のプリキュアがいることなど知ってはいたとが・・・その総人数が彼女たちを入れて２３人もいるとは思ってもいなかったので会うのが楽しみでもあった。その中でプリキュア５の一部のメンバーは知ってはいるが”この世界”で会うのは初めの事だ。

それと同時刻の神戸のビジネスホテルの食堂ではある家族が食事をしていた。その家族は久々の家族旅行であるのか一番楽しそうにしていた少女がグラスを落としてしまった・・・少女はやってしまったと言う顔になるもそのグラスは床のギリギリのところでシェフが掴んだのでわれる事は無かった。そのシェフの右手の中指にはア

ルファベットのAの字を模り先のほうにダイヤのような宝石が付いている指輪をしていた。
シェフ「危なかったね？ふっ」
彼は怒る様子などなく少女にそう言って笑顔を見せた。彼の名は北斗星司といいこのホテルのオーナーシェフを務めていて彼の作る料理には笑顔が起きると神戸のみならず料理ファンの間では大評判であった。

レースコーチ「よぉし、あと1周！！！」
また同じころ神戸にはあるサーキットではレーサーを夢見る少年たちが日々己の技術を磨く為に練習に明け暮れていた。そのチームの鬼教官として有名な人物がストップウォッチを押すとタイムを見てご機嫌な顔を見せていき無線機に指示を出した。彼のジャケットにはＭＡＴと描かれた小さなエンブレムバッチがつけられていた。彼の名は郷秀樹といいプロのレーサーを厳しくも温かい目で育て上げる事で有名で彼を慕う少年たちが日々練習に通うのは神戸市内では有名である。

牧場主「それ、えいやぁっ・・ふぅ～」
また神戸のとある牧場似て羊に餌をやっている男は空を見上げると深く空気を吸っていた。「今日も良い空気だ」とつぶやきながらも羊たちに餌をやる。
牧場主「来たか」
カウボーイハットを被り黒いジャケットには紅い独特の形をしたバッチを付けている姿は実に優雅に見える。神戸港を見ながらも何かを感じた顔になっていた。彼の名はモロボシ・ダン。彼が世話する牛から採れる牛乳は格別であると知られている。

空港職員「新人ですが・・・宜しくお願いします！！！」
空港長「ははは。ようこそ神戸空港へ」

また神戸の空港に1人の男が仕事をしながら新人の部下に挨拶をしたいた。彼は実にさわやかで部下からの信頼も厚い人物であった。彼の名はハヤタ・シン。元々は宇宙飛行士志願であったがその夢を断念し今は空に携わる仕事として神戸空港の空港長として立派に働いていた。

幼稚園児「ミライせんせぇ～～～ッ！！！」

ミライと呼ばれた青年「おぉ～タカト君・・・こらこら慌てると転んじゃうよ」

神戸のある幼稚園にミライと呼ばれた青年がいた。彼の名はヒビノ・ミライといい彼はその持ち前の優しさと誠実さから園児の子供とその保護者である親のみならず職場の同僚にも人気があった。彼は日々の生活を子供と触れ合うことで費やしていたがそれは彼にとっては共も充実していた日々であったのはあの清々しい笑顔を見てわかるだろう。

一見するとただの人間でもあるが彼らには重大な秘密があったのだ。この神戸にとどまっている理由・・・それがこれから起こる戦いのカギでもあった。

第６６話プリキュアオールスターズ＆ウルトラ兄弟？『封印されし悪魔』（後書

先ずはプロローグ・・・プリキュアオールスターズの登場は次回
になると思います～

ではでは次回もお楽しみに♪

第67話プリキュアオールスターズ&ウルトラ兄弟？「伝説の戦士との出会い」

前回までのあらすじ～
大人達が訪れていた神戸ではある都市伝説があった。それはかつてこの神戸の街に「銀色の巨人」が出たと言うものであった。彼らはその都市伝説が本物であるとは間が気がついてはいなかった・・・・伝説の英雄達が神戸にいると言う事も。

※この作品のプリキュアオールスターズは全員3歳年をとっておりますのでソコは勘違いなさなるようお願いします

第67話プリキュアオールスターズ&ウルトラ兄弟？「伝説の戦士との出会い」

また同時刻に地球の大気圏を容易に突破し神戸の空の上を宇宙船が飛んでいたのは誰も気が付かなかった。何故ならばその宇宙船はだにも見えないように明細機能（ステルス）が備えているからだ。その中には４人の宇宙人たちがかつてウルトラ兄弟がブラックホールとその器の合成怪獣封印（グランドタイラント）した海域を映像に映し出すとリーダー格の暗殺宇宙人の別名を持つナックル星人が指揮を取り始めた。

ナックル「この場所だ。この海の底に奴は封じ込められている（ブラックホール）」

指さしながらそう言うナックルに続き隣にいる変身怪人ことゼットン星人が続く。

ゼットン（星人）「物凄い怨念のパワーを感じるぞ・・・コイツを解き放てば人間どもは大混乱となる」

ガッツ「その機に乗じ我らが【アナザースペースの地球】を侵略するのだぁ！！」

ゼットン星人に続きさらに隣にいる分身宇宙人ことガッツ星人が続いて愉快口調で話を続ける。彼らは宇宙人連合軍という同盟を組み双方の知性と力を合わせて地球侵略を目論んでいるのだ。

ナックル「厄介な存在のウルトラ兄弟は既に変身能力を失ったという情報がある。つまり我等の計画の”障害”となるもの【あの方】曰く光の巨人ウルトラマンティガ、ウルトラマンアース、ウルトラマンデュナミス・・・・そして！！！」

ガッツ「奴の邪悪の種（ブラックホール）から育った数多の敵ををすべて倒しつくしたという伝説の戦士プリキュアの２つのみ」

ゼットン「全てのプリキュアの戦闘データは【あの方】からいただいてはいる。そして奴らと戦うべき相手の準備もあの方が手配してる所だ。戦闘データがいるとすればウルトラマンティガ達３人の光の巨人だけだ」

星人達が言う【あの方】とは？突然「やぁ」と声が響くとまるでそ

れに応えるかのように突然空間に闇の扉が造られた。その中からダークが姿を見せた。
ダーク「その通りだ。今のウルトラマンティガはいや、ティガだけではない。アース、デュナミスを含めた3人はお前達の次元にいるウルトラマンパワードの手ほどきを受け凄まじ程にパワーアップした。データは十分に採った方がいいだろう・・・それと報告があるプリキュア達に会いたがっている彼らの準備も整った・・・彼らも連れていけ」
ナックル「コイツらは・・・ははっ!!!」
ダークの闇の扉から邪悪な目を光らせた悪魔の種達がゆっくりと姿を見せていく・・・・かつてプリキュア達が倒したはずの因縁の相手が。
ナックル「では、準備もできたことであるし・・・先ずはウルトラマンティガ、ウルトラマンアース、ウルトラマンデュナミスの戦闘データを・・・・」
ナックルがそう続けていた所に突如勇ましさ溢れる口調で「そんな必要はない」と割りこまれてしまった。その声の主の正体は青い身体の極悪宇宙人テンペラ星人であった。
テンペラ「そんな3人など俺が叩き潰してやる・・・そのあかつきにはこの俺様が宇宙人連合軍のリーダだ。文句はないな?」
ナックルと他の宇宙人は暫し考えるような仕草をするもナックルはすぐに「いいだろ」と言い放ちテンペラの出撃許可を出した。

大人「【お仲間】さん達が集まったて?・・よし、じゃ早速会いに行こう!!!」
琢磨「なんか大人のヤツ妙に機嫌がいいな?」
傑「ああ。・・・何なのだろう?」
大人達は神戸観光をいったん打ち切っていた。というのもお目当てのプリキュアオールスターズ達がやっと到着したとの連絡を受けたからであった。彼らはすぐに神戸のビジネスホテルに意気揚々と向

かうのだった。
大人「此処まで多くのプリキュアがいたとは・・・ホントに驚いたな（汗）」
つぼみ「そうでしょ？私も最初はそうでしたもの」
ビジネスホテルの前には既に彼女達（プリキュア）は集まっていた。総勢２３人とは聞いていたが本当に２３人が集まるとかなりの緊迫感の様なものが出てきた。というよりもこれだけ多くの人数がいるなんて繋がりがない限りは絶対に分かるわけがないためそうならない方が不思議と言うべきだろう。
大人「えっと、初めまして！！つぼみの幼馴染の上原大人です。宜しく」
琢磨「漆山琢磨。大人と同じく希望ヶ花出身でーす！！！」
傑「同じく影山傑。宜しく」
３人が順番に自己紹介すると１９人の自己紹介に入った。
〜〜
〜〜
先ずは順当に【ＭａｘＨｅａｒｔ】チームから追っていく事にしよう。
？？？「どうも、キュアブラックこと美墨なぎさです！！」
？？？「初めまして。キュアホワイトの雪城ほのかです」
？？？「シャイニールミナスの九条ひかり」
大人「どうも宜しく！！！。ちなみに聞きたいのだけど、君達の必殺技ってどんな感じ？」
なぎさ「必殺技ですか？」
琢磨「つぼみ達から聞いたんだけど・・・物凄いらいいいじゃない？【マーブルスクリュー】ってやつ！！」
ほのか「まぁ、軽く怪獣ぐらいなら消せるかも」
傑「嘘ぉ！？」
ひかり「あはは（汗）」
大人「んで、この妖精たちが君達のパートナー？」

メップルなぎさのパートナーのメップルだメポ！！！」
ミップル「ほのかのパートナーのミップルでミポ！！！」
ポルン「ポルンだポポ」
ルルン「ルルンだルル！！」
琢磨「ケータイみたいなのに変形できるの？ほぉ～何か便利そうだ」
傑「ソレわざわざ言う事か？」
～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～
続いて【Splash☆Star】チーム。
咲「こんにちは！！！キュアブルームの日向咲です！！！」
舞「キュアイーグレットの美翔舞です！！！」
フラップ「咲のパートナーのフラップだラピ」
チョッピ「舞のパートナーのチョップだチョピ」
ムープ「ムープだムプ」
フープ「フープだフプ」
大人「このチームは2人か」
琢磨「2人だけだと戦うの大変そうだな」
傑「ああ。風邪とか引けないな」
傑「いやそう言う問題じゃないと思うんだけど（汗）」
～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～
3つ目は【5GOGO！】チーム。
のぞみ「どうも！！キュアドリームの夢原のぞみです！！！」
りん「キュアルージュこと夏木りんです」
うらら「キュアレモネードの春日野うららです！！！」
こまち「キュアミントの秋本こまちです」
かれん「キュアアクアの水無月かれんです」
くるみ「ミルキィローズの美々野くるみ。でもその正体は・・・・」
くるみが突然煙に包まれると小動物のような小さい姿になった。ソレを始めてみた大人達は一瞬固まり・・・・
大人・琢磨・傑『はいっ！！？！？？？』
当然の反応が返ってきた事に5のメンバーから笑いが起きたのは言

うまでもない。その後すぐにその後ろにいたイケメン3人も小動物もとい妖精の姿となった。
大人「・・・・えっと、君達は人間に変身できるった事？」
ココ「そうだココ。ココだココ！！」
ナッツ「ナッツだナツ！！」
シロップ「シロップだロプ」
ミルク「そしてミルクだミル！！！」
琢磨「どうでもいいが名前を合わせると【ココナッツミルクシロップ】って・・・物凄い甘ったるい」
傑「いや、それホントにどうでもいいから（汗）」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

続いて【フレッシュ】チーム！！！。
ラブ「どうも初めましてぇ！！！キュアピーチの桃園ラブですっ！！！」
美希「キュアベリーこと蒼乃美希です。宜しくお願いします」
祈里「キュアパインの山吹祈里です」
せつな「キュアパッションの東せつなです」
タルト「ワイはこの４人のサポートをする可愛い可愛い妖精さんのタルトや」
大人「関西弁・・・ていうか自分でいうかそう言う事」
タルト「なんやと！？」
自分で「可愛い」なんて言うかという大人のツッコミにツッコミで返す乗りがいかにも関西風・・・琢磨と傑はどう突っ込んだやら良いのやら困ってしまうのであった。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

最後は【スイート】チーム！！！
響「やって出番が回ってきた。キュアメロディの北条響です！！！」
奏「キュアリズムの南野奏です！！！」
エレン「キュアビートの黒川エレンです」
アコ「キュアミューズの調辺アコです」

ハミィ「ハミィだニャァ！！！」
大人「妖精が・・・猫？」
琢磨「ていうか君、中学生だよね？ってことは現役時は小学生？」
傑「ゆりより早いってことかいな」
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

全員の顔と名前を覚えたことでつぼみ達は久々の仲間と和気あいあいと大人達との初対談はかなり盛り上がった。
大人「他のプリキュアリームのリーダ格さんは元気だねぇ〜」
なぎさ「そうですかね？私たちはそんな意識ないけどな」
大人はピンクチームの面々と様々な事を離す。ハートキャッチのリーダー格といえばつぼみになるのだがつぼみと比べると元気が有り余っている感の娘が多い事が意外だったのかそう言った。
大人「うちのつぼみも少しは見習ってほしいな・・・なんつーか偶にさ元気ない時あるからさ」
つぼみ「余計な事言わないでくださいよ！！！」
大人「痛い痛い（汗）ゴメンなさい！！！・・・すみませんっ！！」
後ろからつぼみが顔を赤くしながら耳を引っ張られると溜まらずそう言う。
そんな和気あいあいの空気だったのだが・・・・・・それはすぐに壊される事になった。一番最初に気配の異変に気がついたココが「何か出たっ！！！」と叫ぶと妖精たちがざわつき始めたのだ。時に押さないポルンやルルンは泣き始める始末だ・・・・自分達のパートナーのいう邪悪な気配・・・その正体は既に神戸の上空にとんでいた。

テンペラー「出てこいっ！！！ウルトラマンティガァ！！！・・・貴様がこの場所の近くにいる事は分かっているんだぁあっ！！！・・・はぁああっ！！！」

テンペラー星人が神戸港の港を襲撃し紫色の光弾を腕から発射して港の積み荷を爆発させる。さらにその後ろには暴君怪獣アーストロン、古代怪獣グドンの怪獣たちも辺りに炎を吐き散らし暴れ回っている。人々は突如現れた怪獣と宇宙人に恐怖し逃げ回る。神戸の混乱の様子はすぐにＴＰＣ極東本部基地にもはいり矢車と影山が現地に向かう。

ハヤタ「！！！」

その様子は５人の彼らにもすぐに伝わった。取引先との打ち合わせの為に外出していたハヤタ牧場にいたダン、サーキットにいた郷、厨房にいた北斗、保育園にいたミライは急いでテンペラが暴れる場所にと向かう・・・そして同じころ

２５人の少女たちはテンペラにこれ以上暴れさせないと変身アイテムを取り出すがそれを大人が静止させる。

なぎさ「大人さん？」

大人「あんな奴は俺達が片付ける。君達は街の人たちを頼む」

のぞみ「俺達っていくらカブトの力でもあんなのには１人でなんて無謀だよ！！！」

琢磨「ライダーの力じゃ確かに無理だ。だけど・・・俺達にはもう１つ力がある」

ラブ「もう１つの力？」

つぼみ達から彼らが仮面ライダーであると言う事は聞いてはいた。しかしまだもう１つの力の存在など聞いた事がないからつぼみ達７人以外はその言葉の意味が理解できていないだろう。

傑「さっさと片付けるには人数が少ない方が効率がいい。・・・なにあんな奴ら何かすぐに片付けてくるさ」

３人は前に出てスパークレンスを取り出しウィングを開いて光を集める。

大人「ティガァアアっ！！！！」

琢磨「アーースっ！！！」

傑「デュナミス！！！！」

スパークレンスを空に突き出し3人は白、赤、青の光に包まれもう1つの力を解放する。後ろで少女たちは彼らのもう1つの姿に釘づけになった。

なぎさ「大人さん達がう、ウルトラマン!?・・・あ、ありえなーーーい!!!!!!」

なぎさの口癖が大きく響くのと彼らが着地して地面が少し揺れたのは同時であった。そして地響きにグドンとアーストロン、更に親玉のテンペラが彼らの方を見る

テンペラー「現れたな!?」

3人のウルトラマンが現れたのを見てテンペラは満足そうに彼らを睨みつけながら戦闘が始まる。3人はそれぞれ3方向に別れティガがテンペラー、アースがグドン、デュナミスがアーストロンを担当しそれぞれ正面から掴みあう。だがそれと同時に更に時空が歪み黒いワームホールが形成された。

つぼみ「あれは!?」

シプレ「気を付けるです!!!・・・まだ何か来るですぅ!!!!!」

ワームホールから更に邪悪なる気配を感じ取った妖精たちの反応に応えるように中からかつてプリキュア達が今まで戦ってきたザケンナー、ウザイナー、コワイナー、ホシイナー、デザトリアンという怪人たちがと更には謎の機械兵器が同時に複数体に現れたのだ。流石のティガ達もテンペラー達を相手にしているこの状況では怪人たちまでには手が回らない。

つぼみ「あれはデザトリアン!!?」

なぎさ「ザケンナー!!!」

咲「ウザイナー」

のぞみ「コワイナーにホシイナーもいるよ!!!」

ラブ「それにロボットみたいなのも出てきちゃった・・・流石にあの数はウルトラマン達だけじゃ相手しきれないよ!!!」

かつて戦った怪人たちはウルトラマン達がテンペラ達と戦えない隙を狙いザケンナー、ウザイナー、コワイナー、ホシイナー、デザト

リアンそれに加えて敵の尖兵の機械兵士は破壊の限りを尽くし人々は混乱に逃げ惑い叫び声が上がる。少女たち人々を今こそ自分達の出番だとそれぞれの変身アイテムを取り出し叫ぶ。

なぎさ・ほのか『デュアル・オーロラ・ウェーブ！！』

ひかり「ルミナス！シャイニングストリーム！」

咲・舞『デュアル・スピリチュアル・パワー！』

のぞみ・りん・うらら・こまち・かれん『プリキュア！メタモルフォーゼ！』

くるみ「スカイローズ・トランスレイト！」

ラブ・美希・祈里・せつな『チェインジ・プリキュア・ビィートアーップ！』

つぼみ・えりか・いつき・ゆり『プリキュア！オープン・マイ・ハート！』

響・奏・エレン・アコ『レッツプレイ！プリキュア・モジュレーション！』

アンナ「プリキュア・ナイトイリュージョン！！！」

真夜「プリキュア・セイントリバース！！！」

２５人の少女の影声と共に一斉に眩い光が辺りから発生しザケンナー達の注目が集まる。その目にはかつて戦ったあの因縁の相手が映

るのはその数秒後の事だった。

真倍ばかりの光にテンペラとティガ達の動きも一瞬止まりその光に目線が集まる。そして次の瞬間には伝説の戦士の姿となった少女たちの凛々しく神々しく美しい姿が現れた。

メロディ「爪弾くは荒ぶる調べキュアメロディ！」

リズム「爪弾くはたおやかな調べキュアリズム！」

ビート「爪弾くは魂の調べ、キュアビート！！！」

ミューズ「爪弾くは女神の調べキュアミューズ！！！」

ブラック「光の使者、キュアブラック！」

ホワイト「光の使者、キュアホワイト！」

ルミナス「輝く命、シャイニールミナス！」

ブルーム「輝く金の花、キュアブルーム！」

イーグレット「煌く銀の翼、キュアイーグレット！」

ドリーム「大いなる希望の力、キュアドリーム！」

ルージュ「情熱の赤い炎、キュアルージュ！」

レモネード「はじけるレモンの香り、キュアレモネード！」

ミント「安らぎの緑の大地、キュアミント！」

アクア「知性の青き泉、キュアアクア！」

ローズ「青い薔薇は秘密の印、ミルキィローズ！」

ピーチ「ピンクのハートは愛ある印、もぎたてフレッシュ！キュアピーチ！」

ベリー「ブルーのハートは希望の印、つみたてフレッシュ！キュアベリー！」

パイン「イエローハートは祈りの印、とれたてフレッシュ！キュアパイン！」

パッション「真っ赤なハートは幸せの証、熟れたてフレッシュ！キュアパッション！」

ブロッサム「大地に咲く一輪の花、キュアブロッサム！」

マリン「海風に揺れる一輪の花、キュアマリン！」

サンシャイン「陽の光浴びる一輪の花、キュアサンシャイン！」
ムーンライト「月光に冴える一輪の花、キュアムーンライト！」
ナイト「漆黒の闇から生まれた戦いの戦士、キュアナイト！」
セイバー「全てを希望へ導く救世の光、キュアセイバー！」
プリキュアオールスターズ『全員集合っ！！プリキュアオールスターズ！！！！！！』
全員が高らかに名乗り上げポーズを決めていくと集まった２５人の伝説の戦士プリキュア達ははポーズを決めると全員同時に高らかに名乗り上げた。それにようやくザケンナー達が動き始め突進していく。

ティガ「よし、怪人たちはお前達に任せたぞ！！！・・ハァアッ！！！」
これで安心して戦いに集中できるとティガ達ウルトラマンはプリキュア達の戦いに危害が及ばない場所までテンペラー達を引き寄せる。ティガはマルチタイプのキック技でテンペラーの胸ぐらを殴り飛ばすがそれを受け止められ逆に鋏で掴まれて飛ばされてしまった。だがすぐに立ち上がると身軽な動きで反撃していく
アース「デヤァアッ！！！」
その頃グドンの鞭攻撃に苦戦しながらもアースは得意のパワー主体の戦法で果敢にグドンの硬い皮膚にパンチを叩き込んでいく。だがグドンもかなりの強敵であり鞭が首に巻かれてしまうとアースは体勢を崩してしまう。
アース「グオオッ！？・・アアアァ！！？？」
そしてそのままグドンの腕力に身体が宙に浮いて投げ飛ばされてしまった。
デュナミス「ハッ！！・・・ハアァアアッ！！！」
アーストロンの火炎を避けながら俊敏な動きで翻弄していくデュナミス。辺りが炎で焼かれるのを水の結界「デュナミス・フィールド」を発動させて被害を食い止めながらの戦いは中々骨が折れる。空に

飛び上がりながら上からハンドスラッシュとダブルバスター等の光線技で徐々にアーストロンのペースを砕く。
ブラック・ホワイト『プリキュア・マーブルスクリューーー！！！』
ブラックとホワイトの連携がザケンナーの身体を貫いていくとザケンナーは後ろに倒れてしまう。そしてその後2人の黒と白のエネルギー波が合体したマーブルスクリューが叩き込まれるとザケンナー達は抵抗もできないまま光に包まれた
ブルーム・イーグレット『プリキュア・ツイン・ストリーム・スプラッシュ！！！！』
そのすぐそばではブルームとイーグレットの必殺技がウザイナー達を包む込む。
5チーム『プリキュア！！！』
ドリーム「シューティングスター！！」
ルージュ「ファイヤーストライク！！」
レモネード「プリズムチェーン！！」
ミント「エメラルドソーサー！！」
アクア「サファイアアロー！！」
更にウザイナーとホシーナーには5チームの5つの技が融合し砂が崩れるようにウザイナーとホシーナーは砕け散る。
ブロッサム・マリン「プリキュア・フローラルパワー・フォルティシモ！！！！」
無数のデザトリアンの身体を一斉に貫き一気にデザトリアン達を浄化するブロッサムとマリン。その横ではフレッシュチーム、ムーンライト、ナイト、セイバー達が機械兵士にダメージを与え再起不能に追い込んでいくが・・・・
機械兵士「グゴオオオオオンッ！！！！！」
ワームホールから更なる機械兵士とデザトリアンの吸収に不意をつかれてしまう。
ナイト「きゃぁあっ！！？」
ムーンライト「ナイト！！・・・ああああっ！？？」

ムーンライトとナイトは機械兵士の腕につかまれてしまった。太く冷たい機械の腕に締め上げられると身体が潰されそうになってしまう・・・腕が動かせない為タクトで反撃が出来ない。絶体絶命のその時光の輪が機械兵士に向かって飛んできた。
メロディ・リズム『プリキュア・ミュージックロンド』
その正体はメロディとリズムだ。２人が同時にミュージックロンドを機械兵士の腕に放ちムーンライトとナイトを救出する。
ナイト「ありがと！！！」
だがその間にもデザトリアンが迫り機械兵士はミサイルランチャーを放ってきた。このままでは街が・・・だがそれをさせまいとスイートチームのビートとミューズが同時に飛び上がる。
ビート・ミューズ『プリキュア！！！』
ビート「ハートフルビートロック！！！」
ミューズ「プリキュア・スパークリングシャワー！！！」
ビートとミューズの必殺技が機械兵士とデザトリアンを飲み込み機械兵士はショートし爆発、デザトリアンは浄化されて消滅した。
ミサイルランチャーはサンシャインとムーンライトのバリア系の技でなんとか防ぎきった。
ナイト「っ！！・・・皆、気をつけて。敵はまだまだ来るよ！！」
だが敵はまだやむ事を知らずに襲いかかってくる。だがそれでもかつて倒した敵や只の機械兵士などにはプリキュア達は屈しはしない。そして怪獣とテンペラーと戦っていたティガ達も反撃を開始する。
アース「ンーーーっ！！！ハァアアアっ！！！！」
首に巻かれたグドンの鞭を引きちぎるとアースは炎を腕と足に纏い新技のバーンナックル&フットで剛炎の炎をグドンに叩きこんでいく。炎に苦しむグドンを十分に弱らせた事を確信したアースは腕光を集め必殺技のボルテックストームの発射態勢に入り紅い光線をグドンの身体に叩き込んでいった。
グドン「ギシャァアアオオオッ！！！？？？？？」
断末魔の声と共にグドンは大爆発を起こして消滅をした。

デュナミス「ハァアッ！！！」
デュナミスの手に氷剣（デュナミスセイバー）が纏われるとそのまま一気にアーストロンと距離を縮める。
アーストロン「ギシャァアアアッ！！！！」
アーストロンは火炎弾を吐いてデュナミスの動きを止めさせようと目論むがデュナミスの剣が炎を全て切り裂くとそのままアーストロンの身体に剣を振り下ろした。
アーストロン「ガァア・・・・・・」
アーストロンはその場に倒れると爆散して消滅した。
ティガ「ハァアッ！！！」
テンペラーの光線鞭をティガは空に飛び上がって避けるとそのままテンペラを神戸の海まで誘導させるように引きつける。テンペラーはティガの作戦に気がつかないまま神戸の海まで誘き寄せられるとティガに向けて光弾を浴びせるが全てティガは避け逆にハンドスラッシュで反撃するがテンペラーはその巨体にはあわないぐらいの意外過ぎるほどの俊敏で動きを見せて器用に全て避けきった。お互いに空中で動きを止める。
テンペラー「今度こそコレで木っ端微塵だぁあ！！！！！」
ティガのゼペリオン光線の準備中にテンペラは光線を叩き込んでいくがティガはそれを白い稲妻の結界で防ぎきる。
ティガ「木っ端微塵は・・・お前の方だぁあああっ！！！！！！」
フルパワーのゼペリオン光線をテンペラーに放って反撃する。テンペラーはそれを一度は両腕で防ごうとするも長くは持たず断末魔を上げて大爆発を起こして消滅してしまった。

これにより神戸を襲った敵は全て倒されただがテンペラーと怪獣たち以外に現れたかつて戦った敵・・・プリキュア達は戸惑いが隠せないようで彼女達はすぐに話し合う。
その頃大人は人間の姿に戻り急いでプリキュア達が話し合いを始めている場所に自分達も合流するべく向かうのだが・・・途中で1

人膝を抱えてふるている少年を見つけた。
大人「？」
３人はすぐに声をかける。見たところ怪我はないようだが少年の頬には涙の筋が出来ていた。どうやらさっきの戦いにおびえていたようだ。
琢磨「怪我はないみたいだな。」
笑顔を見せて３人は彼を励まそうとするが彼は立ち上がると無言のまま歩き始めてしまった。
大人「おい、待って！！・・・・君ホントに大丈夫？お父さんやお母さんは？・・・１人じゃ危ないよ。なんなら俺が家まで送っていく・・・・」
大人はほっておけないのか思わず彼の後を追いかける。無愛想だが何かこの子は何処か様子がおかしい・・・少年に声をかけて何とか間を持たせようとしていると少年はただ一言「ウザい」とハッキリ言い大人を睨みつけた。
大人「！！」
少年「アンタみたいな人は嫌いだ・・・ウルトラマンみたいで大嫌いだ！！！！！」
大人「ウルトラマンみたいって・・・そのウルトラマンは俺なのに」
少年はそう言って走っていってしまった。『ウルトラマンみたいで嫌いだ』とはどういう意味なのだろう？ウルトラマンティガである彼にとっては二重に嫌われたみたいでかなり気分が悪くなってしまった。１人立たずでいる所に琢磨と傑が追い付き大人に何が有ったんだと聞いてくるが言葉が入って来ない。
？？？「人間の心は複雑だ。それは人間である君達が一番分かっているはずじゃないのか？」
大人・琢磨・傑『？』
すると後ろから励ますような優しい声がしてきたので思わず大人は後ろを見た。そこにはメガネをかけた男がいた。彼は大人に近づきながら笑顔を見せて続ける。

？？？「私達は君達の活躍をずっと見てきた・・・仮面ライダーとして人々をワームや砂漠の使徒から人々を守る君達を、光の巨人として傷つきながらも怪獣や侵略者ち戦う君達を。ウルトラマンティガ、ウルトラマンアース、ウルトラマンデュナミス。いや上原大人、漆山琢磨、影山傑とそれぞれ呼ぶべきかな」

自分達が仮面戦士（マスクドライダー）であることのみならず超人（ウルトラマン）であることまで知っている・・・彼の口調に大人はパワードから聞いた事を思いだした。パワード達が住む光の国の中でも伝説のウルトラ戦士達がこの”アナザースペースの地球”にいると言う事を・・・・。それは今目の前にいる彼の事なのか！？

大人「もしかして貴方は」

？？？「ウルトラマン。地球での名はハヤタだ」

そう彼はウルトラ兄弟の二男の初代ウルトラマンの【ハヤタ・シン】だった。彼からは溢れるばかりの優しさが感じられ普通の人間と全く変わらない。でも自分達には分かる・・・彼も光の戦士であると言う事が。

第67話プリキュアオールスターズ&ウルトラ兄弟？「伝説の戦士との出会い」

２５人は大変だ・・・でも頑張って彼女達にも暴れてもらいます！
！！

さてさて次回はプリキュア達の因縁の怪物登場・・・・
次回もお楽しみに♪

第６８話プリキュアオールスターズ＆ウルトラ兄弟？「強敵復活ープリキュア磔

前回までのあらすじ～
突如神戸を襲ったテンペラー星人とプリキュア達が戦った怪人たち
を見事退けたプリキュアオールスターズと光の巨人一行。
大人達はとある少年にウルトラマンは嫌いと言われてしまい複雑な
心境になってしまう。そんな彼らの前に１人の男初代ウルトラマン
ことハヤタが現れた。

大人、琢磨、傑の３人はハヤタに連れられ神戸港のフェリーに乗った。ハヤタが言うには自分達に会いたいと言う者がまだあと４人いるらしい。神戸のきれいな海を優雅に走るフェリーの甲板にいたのはウルトラセブンのモロボシ・ダン、ウルトラマンジャックの郷秀樹、ウルトラマンＡ８（エース）の北斗星司、ウルトラマンメビウスのヒビノ・ミライの４人の姿があった。

大人「あ、貴方達は」

大人の第一声を聞いて海を眺めていた４人は待っていたとばかりにゆっくりと大人達に歩み寄っていく。大人達は興奮のあまり目は少年の目になっていた。

郷「来たな？この星の英雄」

北斗「中々良い面構えじゃないか」

大人「光栄です。パワードから貴方達の存在は聞いていました。」

ミライ「そうか。君達はパワードからボク達の事を」

琢磨「はい！！！。でも皆さんが神戸にいたなんて知りませんでした」

ハヤタ「知らなくて当然だ。我々５人はウルトラマンである事を捨てたのだからね」

傑「ウルトラマンである事を捨てた？」

ダン「この町の都市伝説ことと君達の仲間のプリキュア達がブラックホールという敵と戦った事を知っているかね？」

【ブラックホール】という名前は聞きおぼえがある。かつてつぼみ達が命をかけて戦った強敵・・・一度はシプレ達との別れを強いられたと言う・・・その時の自分達はつぼみ達と共に戦う事が出来なかった・・・ブラックホールによってゼクターを呼び寄せるのを封じられてしまい戦う事が出来なくなったという歯痒い過去も思いだしてしまった。

大人「はい。つぼみがいえ、キュアブロッサム達プリキュアオールスターズが光の花「プリズムフラワー」を守るために命をかけた戦った最悪の敵ですよね？」
ミライ「実はあのブラックホールはボク達が封印した”本体”のほんの一部に過ぎないんだ。」
琢磨「本体！？・・まさか本物のブラックホールはまだ生きているんですか？」
ハヤタ「そうだ、今から十数年前・・・まだこの【アナザースペース】に守護者がいなかったころ我々の次元の宇宙に存在する怪獣や宇宙人の魂が眠る場所『怪獣墓場』で異常現象が起こったんだ」
北斗「その異常の元凶がブラックホールだった。奴は俺達ウルトラ兄弟や仲間のウルトラ戦士たちが過去に倒した怪獣達の怨念を集め自分の器として究極合成怪獣の【グランドタイラント】を造りこの【アナザースペース】を侵略しようと目論んだんだ」
郷「ソレを未然に防ぐために我々はこのアナザースペースに飛び奴と戦った。その時の戦いでなんとかグランドタイラントを再起不能にし我々はすべての光エネルギーを使いブラックホールをこの海の底に封印したんだ」
ミライ「その結果、ボク達はウルトラマンに変身する力を失い”人間として”生きる道を選んだんだ」
えりかが言っていた都市伝説は本物であった。自分達の戦いが始まる前からこうやって人柱として自分達に尽くしてくれた戦士がいた事に3人は感動する。
ハヤタ「だが・・・我々は後悔などしていない」
ダン「愛する星で愛する人々と暮らす事は寧ろ望んでいた事なのかもしれない」
郷「そして今も我々は学んでいる」
北斗「人間として」
ミライ「人間について」
宇宙人であるはずの彼らはどうしてここまで人間を愛する事が出来

たのだろう?大人達は人間である自分の中に応えはないのかと考えながら彼らの話を夢中で聞く。ハヤタの神戸空港での空港長として部下と共に働く日々、ダンの牧場経営での自分が世話する牛たちを見に来てくれる人々との日々、郷のレーサーを夢見る子供たちとの日々、北斗の自分の料理を笑顔で食べてくれるお客との日々、ミライの保育園で子供とその保護者達との日々。人間は自分勝手に振る舞い傷ついた事もあれば優しさに心が温まった事があったと言う過去の経験談を。

大人「俺はどうしても貴方達に聞きたい事があるんです・・・同じ人間としてそしてウルトラマンとして。パワードに貴方達のことを知りどうして貴方達のような偉大な英雄が地球の人々を心から愛し自分の命を投げ出す覚悟があって多くの敵と戦うのかを」

この星に生まれた人間としての質問を大人はウルトラマン達に問いただした。どうして彼らは自分が元の姿に戻れなくなり故郷に帰れなくなるリスクを背負ってまでブラックホールを封印したのかを。

ダン「その答えは自分で見つけるしかない」

5人は彼の人間としてそしてウルトラマンとしての質問に真剣にどう答えようか悩んだがすぐには答えられないようだった。ダンが代表してそう答えると3人は落胆して3人そろって「ですよね」と言った。

北斗「どうした?急に自信を無くしたのかぁ!?」

琢磨「そう言うわけじゃなくて・・・ただ、俺達は」

傑「自分達に全てがかかってるって考えるのが怖いんです」

ミライ「怖い?」

大人「以前に復讐に走った人間と戦った時は自分の力では何もできずつぼみ達・・仲間のキュアブロッサム達にティガの力のすべてを託した事がありました・・その時は力を与えることしかできない自分の無力さに情けなくて・・・とても悔しかった。」

地球解放軍の時の最後の戦い。アルティメットジェノキャンサーを自分たちでは倒す事が出来ず瀕死の状態だったつぼみ達に力を与え

ることしかできなかった時は本当に悔しかった。あの後から数週間は力が欲しいが故に必死に身体を鍛えた事もあったぐらいだ。
琢磨「でもその次のパワードバルタン星人との戦いでは自分が強くならなければ焦ってしまって大切な人を不安にさせてしまった事がありました。結局自分の器にこの力が適していないのかなって思う事もあって」
そして咲のバルタン星人との戦いでは焦るが故に仲間のつぼみ達を心配させてしまい独りよがりの部分があった事を思い知らされた。
傑「そんな俺達が・・・今の貴方達にとっても故郷であるこの地球の運命を背負ってるって考えると胸が張り裂けそうになって・・・なんだか自信が」
ハヤタ「大人、琢磨、傑・・・人間である君達がそう思うのは当然のことだが超人（ウルトラマン）の力は決して【神】ではない。どんなに頑張っても救えない命もあれば届かない思いもある」
大人「ですよね・・・・」
ダン「そう落ち込むな。大切なのは最後まであきらめない事だ」
ダンはハヤタの重みある言葉に更に落ち込んでしまうがそれはげますようにダンは語りかける。自分達が戦っている時に信念として決めている事を。
ダン「どんなに辛い状況でも未来を信じる心の強さが不可能を可能にする。信じる力が【勇気】になるんだ。そしてそれは君達も我々も同じなんじゃないのか？」
言われてみれば俺達もそうだ。今までの戦いも最後の最後まであきらめた事などなかった。シザースとの戦いの時もパワードバルタンとの戦いのときも未来を信じ俺達は諦めなかった。絶対的な力を持つ筈の彼らと自分達が同じであると言うダンの言葉を聞き3人は少し自信が出てきた。
？？？「我は不滅・・・闇が全てを包むまでは・・・今こそ復讐の時だぁ！！！」
大人「今の声は！？」

ミライ「ブラックホールだ」
北斗「奴の怨念はまだこの海の底で生き続けているんだ」
海を見ながらブラックホールは今もなお生きていると言う北斗は声を荒げている。
傑「やっぱりシールドが解けかかっているんですか？」
ミライ「ボク達がこの神戸の街に住んだのも奴の封印を監視する為でもあったんだよ」
郷「だか最近何者かの干渉のせいでシールドが不安定になってきている。君達が倒したテンペラー星人やかつてプリキュア達が倒した怪人たちが蘇った事と何か関係あるに違いない」
ダン「敵はブラックホールの強大な力を復活させて利用しようと考えているのだろう」
ハヤタ「もしそんな事になれば・・・・」
ミライ「この星の尊い命が数多く奪われてしまう」
大人「大丈夫です！！そんな事は絶対にさせない。俺達が貴方達の遺志を継いだからには」
琢磨「先輩たちに負けにようにこの地球を守ってみせます」
傑「それに戦士は俺達だけじゃないです。ブラックホールを倒したプリキュアだって今この神戸の街にいるんですから絶対に負けません！！！」
ハヤタ「気負う気持ちも分かるが十分に注意するんだぞ」
ダン「敵は狡猾な侵略者だ。人間である君達の心に揺さぶりをかけてくるかもしれない」
大人「俺達の心」
郷「そうだ。俺達ウルトラマンも過去に敵の卑劣な策略に心を乱し罠に落ちた経験があるんだ」
北斗「決して油断するな。自分の力を過信すると必ずその力に足音を巣食われて敗北する事になる」
ミライ「その時になってからでは遅い・・・それを忘れないでくれ」
過去に自分達がまだ戦士として青かったころの彼らも敗北し絶体絶

命の危機に追いやられた事を大人達に忠告する。先人たちの忠告を大人達は胸にしまいこみ大人達は彼らウルトラ兄弟と別れた。
その道中。またあの少年と出会った。一人で神戸の海を眺めているその姿はどこか寂しそうだった・・・大人達はやはりほっておけないのか彼に声をかけた。
大人「やぁ、また会ったな」
少年「・・・・」
だが彼はまた無言で走り去っていってしまうが大人は追い掛けず大きな声で「待ってくれ」と言った。すると今度は止まって後ろを向いた彼に笑顔を見せて宥める。
琢磨「3分間だけ俺達と付き合わないか?」
少年「3分?」
傑「そう。ウルトラマンが戦える時間だけ」
近くの公園にのベンチに案内されると先ずは自己紹介から始めた。
少年の名は安藤大樹(あんどうだいき)という名前であると言う事。そして何故ウルトラマンがきらになってしまったかという事も。
大人「そうか。怪獣にお父さんとお母さんを」
大樹「・・・ボクのお父さんとお母さんが怪獣に殺された時・・・ボクは陰で震えることしかできなかった。ティガが助けてくれる・・・そう思っていたのに・・・ウルトラマンは助けに来なかった!!」
大人「・・・そうか。だから君はウルトラマンが嫌いだって言ったんだね」
大樹の言葉にハヤタが言っていた事が頭をよぎった。【助けられない命】があるという現実。だが今はそれを悔いても仕方がない。
大人「大機、確かにティガが君のお父さん、お母さんを助けられなかったのはとても残念だ。でもティガだって本当は助けたかったと俺は思うだ」
大機「どうして?」
琢磨「それは、ウルトラマンが人間が好きだから」

大樹「？」
傑「今までだって彼等は諦めず戦ってきたんだ。誰一人の犠牲をださまいと我武者羅になってな。愛する人々を守るために」
これは彼等の本音であった。本当は誰1人も死なせることなく守りたい・・・自分が選ばれた人間である以上は果たすべき責務。だが大樹は下を向いて「そんなの信じられない」と突き放すようにそう言う。
大人はこのまま彼の心に影をさしたままにはしておけないと思いある事を思いた。
大人「次にウルトラマンティガが現れたて恐ろしい怪獣や宇宙人に勝った時大樹にブイサインをする」
大樹「え？」
大人「ウルトラマンが今度は君の思いを裏切らない約束をする。そしてお前はこれからはウルトラマンを精一杯応戦する事を約束する。ティガに俺が頼んでおく」
大樹「ホント？」
大人「約束する！！！」
大人は大樹の手を取り約束を交わす。大樹は始めて笑顔を見せて握手を交わした・・・少年とウルトラマンとの約束が。

そのころプリキュア達は２５人という大メンバーは広いある施設に集まっていた。
えりか「何でアイツらまで出てきたんだろ？」
ゆり「分からないわ。気になるのがティガ達が倒した宇宙人と一緒に出て来たって言う事・・・でもあの宇宙人があれだけのデザトリアン達を従えていたとは思えない」
ほのか「じゃあ他に黒幕が？」
ラブ「でも誰が！？」
自分達が過去に戦った敵は全て倒した。中には生き残った者もいるがその輩はすべて改心し今更になってこんなバカな事をするとは思

えない。・・・分からない・・一体誰がこれほどまでに無意味な事を?

大人「遅くなってごめん!!!」

其処にようやく大人達3人が合流する。そして彼等はすぐに自分達が持つ情報を伝えた。自分達の先人のウルトラ兄弟達から聞いた過去の戦いの話とブラックホールはまだ生きているという話を。

つぼみ「そ、それじゃ私たちが倒したブラックホールはまだ」

大人「生きているだ。この神戸の海の底にね」

なぎさ「しかもほんの一部って・・・あり得ない」

かつて自分達が決死の覚悟でやっと倒したブラックホールが只の片割れに過ぎないと言われてしまったら無理もないだろう。

琢磨「恐らくはテンペラー星人やデザトリアン達が蘇った事につながる何かがまだどこかにいる。だけど心配いらないさ」

傑「俺達ウルトラマンと君達プリキュアが力を合わせればどんな敵も必ず乗り越えられる」

いつになく頼もしく見える。【ウルトラ兄弟】に有った事も彼等の自信につながっているのだろうか。

ココ「ま、また何か出たココっ!!!!」

突然またしても妖精たちは何か邪悪なる気配を感じ取ったようでざわつき始める。急いで28人は施設の外に出ると空が割れ時空の割れ目が出来ている。

そしてそこから赤と黒が混じった邪悪な入りを纏った光が地表に落ちたその7つの人影が現れ

邪悪キングを復活させる為にブラックとホワイトの前に立ちふさがった闇の世界の魔女デビル

ダークフォールの真の支配者にして泉の郷を手に入れようと目論んだゴーヤーン

5チームの最初の敵ナイトメアの上層部のトップのカワリーノ

ラビリンスの支配者(メビウス)によって造られた人工生命体のノーザとクライン。

砂漠の使徒の王にしてにして大人達の最初の敵デューン

真夜の大切な人達を奪い真夜が闇のプリキュアのキュアリベリオンになるきっかけになった因縁の相手アルティメット。

邪悪なる姿を見せつけて神戸の街に降りたった7人のすぐ後ろに闇の飛びかからティガをつけ狙う闇の支配者ダークも姿を見せプリキュア達である彼女達に怒りと憎しみの混ぜた視線を送り込んできた。

第６８話プリキュアオールスターズ＆ウルトラ兄弟？「強敵復活ープリキュア磔

遂に出た最悪の敵・・・そして彼等の目的は！？

次回からはＤＸ３のようにシャッフルバトルが始まります！！！

ではでは次回もお楽しみに♪

第６９話プリキュアオールスターズ＆ウルトラ兄弟？「シャッフルバトル！！

前回までのあらすじ～
ウルトラ兄弟に聞かされるブラックホールあ封印されている事実と
それを狙う邪悪なる侵略者の存在。大人達は彼等の遺志を継ぐと決
意する。
そんな中宇宙人連合軍と手を組んだダークはかつてプリキュア達が
倒した敵と共に大人達の前にその邪悪なる姿を見せつける。

第69話プリキュアオールスターズ&ウルトラ兄弟？「シャッフルバトル！！！」

なぎさ「ドツクゾーンの魔女！！！」
咲「ゴーヤーン？」
のぞみ「ど、どうしてカワリーノが？」
ラブ「ノーザとクライン」
つぼみ「デューン！！！」
真夜「アルティメットまで・・・・」
かつて倒したはずの敵が目の前に立っていることに全員は驚きが隠せない。妖精たちもあまりに出来ごとに今まで以上に動揺してしまう。
大人「ダーク・・貴様の仕業か！？」
7人を統べるように真ん中にいるダークに対して大人はそう問いかける。するとダークは鼻で笑って嘲笑っていく。
ダーク「そうだ。私がプリキュア達にどうしても会いたいとう彼らの願いを叶えてあげたのさ・・・彼等はお礼が言いたいそうだよ。タップリとね」
ダークがそう言うと全員笑いながら邪悪なオーラを放って笑い始める。
なぎさ「大人さん、あの真ん中にいる奴は？」
大人「闇の支配者ダーク。初代プリキュアのキュアアンジェと先代ウルトラマンティガとの戦いに敗れて封印されていた闇の支配者だ。俺達が今まで戦っていた怪獣や宇宙人を影で操っていた黒幕でもある。ダーク、今度は何を企んでいる！？」
ハートキャッチのメンバー以外は驚きの声を上げる。大人の言葉にダークは前に出ると両手を広げて語り始めた。。
ダーク「ふはははははっ！！！。何が目的だって？相変わらず鈍いなお前は・・・目的はただ1つこの海の中に眠るブラックホールを復活させる事だ！！！！」

デビル「その通り。我々はウルトラ兄弟によって封印されたブラックホール様のマイナスエネルギーの集合体のグランドライタイランントを解き放ちこの地球を今度こそ絶望の闇に沈める。」
ゴーヤーン「そして今度こそ我々の理想郷を完成させるですよ・・だがその前に」
カワリーノ「私達に苦々しい思いをさせてくださった貴方達にお礼がしたいのですよ・・・絶望という闇に呑みこんでやることでね！！！」
ノーザ「私たちが受けた屈辱・・・怒り憎しみ・・・」
デューン「潰された野望・・・絶望・・・・」
アルティメット「地獄で受けた痛み苦しみをタップリお前らにも味合わせてやるよぉ・・・イヤって泣きたくなる程なぁあっ！！！！」
ダーク「今回のパーティの主役は君達と・・彼ら7人だ・・・盛大に楽しみたまえ。観客たちも君達がやられるのを心待ちにしているだろうからね・・・ふふふふ・・あっはははははははははははっ！！！！！！」
最後にダークのおぞましい声似合わせて全員が高笑いをするが大人が「ふざけるな」と言って止めさせた。
大人「そんなバカげた真似をさせると思っているのか？・・・見す見す俺達がブラックホールを復活させたりお前達にやられるとでも？・・・舐められたものだな」
つぼみ「そうですよ。私たちプリキュアが、そして仲間の仮面ライダーが貴方達の邪悪な野望を絶対に阻止します！！！！」
大人「皆、行くぞ！！！！」
大人の号令に全員が変身アイテムを呼び寄せ一週にして２５人の少女たちは光に包まれてプリキュアの姿に変わる。対する大人達は空からゼクターを呼び寄せると
大人・琢磨・傑『変身！！！』
「ＨＥＮＳＩＮ」

大人達はカブトムシとクワガタの鎧に身を包み仮面戦士装備（マスクドライダーシステム）を解放する。そして3人はゼクターの角や顎を操作していくと重厚な鎧が広がり始める。

カブト・ガタック・ダークカブト『キャストオフ』

『ＣＡＳＴ－ＯＦＦ』

「ＣＨＡＮＧＥ　ＢＥＥＴＬＥ」

「ＣＨＡＮＧＥ　ＳＴＡＧ－ＢＥＥＴＬＥ」

「ＣＨＡＮＧＥ　ＢＥＥＴＬＥ」

マスクドフォームの鎧を脱ぎすててライダーフォームの姿に変わり昆虫の複眼を思わせるマスクの目を光らせていく。

カブト「光を支配せし太陽の神、仮面ライダーカブト！！！」

ガタック「戦いを支配せし戦いの神、仮面ライダーガタック！！！」

ダークカブト「闇を支配せし黒点の神、仮面ライダーダークカブト！！！！」

3人のライダー名乗り上げプリキュアと共にポーズをとり凛々しい姿を見せる。

プリキュアチーム&ライダーチーム『ブラックホールの復活は絶対にさせない！！！！私たち（俺達）が絶対に止めて見せる！！！！！』

全員ろそってポーズをとり直しながらそう言うと後ろで光がきらめいた。

ダーク「ふふふ勇ましいがそれはどうかな？・・・ナックル星人！！！」

ナックル「了解しました。貴様らの特設ステージはすでに用意してある。デスマッチの始まりだぁあ！！！」

ダークの合図を受けて上空の宇宙船にいるナックルは船内のボタンを押す。すると宇宙船が変形していきカブト達２８人にターゲットを絞る。

カブト「ッ！？・・・皆、散れっ！！！何か来るぞぉ！！！」

そのすぐ後に宇宙船から光線が放たれてしまった。
全員『うわぁあああああああああああああああああっ！！！！！！！！！！！』
光線を浴びると無重力の様な状態になってしまい全員バラバラにされてしまいまるで洗濯機の中にいるかのような感覚になりそうだった。
そして全員異空間に飛ばされてしまい姿が消されてしまった。
ダーク「さぁ、出番だよ」
ダーク以外の７人が２８人の姿が消えたことを確認してテレポートして自分達も異空間にワープする。１人残されたダークはマントと仮面を取り神戸の海を眺める。
ダーク（？）「お兄ちゃん・・・・今度こそ取り戻すからね」
その声はいつもように機械で加工されたような声ではなくあどけない少女の様な声であった。そしてただ１人闇の扉にダークは入っていくのだった。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
カブト「うわぁああああああああああああああああ！！！！」
異空間に飛ばされたカブトはアスファルトの地面に落とされてしまった。「いてててて」と痛がっていると上から少女たちの声が聞こえて思わず上を見るとブロッサム達が地面にもとい自分に向かって落ちてきている・・・慌てて避けようにも既に時は遅く・・・
カブト「ん？・・・うごおおおおっ！！！？？」
カブトは盛大にピンクチームの面々の下敷きになってになってしまう。
カブト「つ、潰れる・・・・お、重ぃ」
ブロッサム「あぁあ〜〜〜っ！！！す、すみません！！！」
ブラック家族の面々は傷などなかったが一番下にいたカブトは結構

ダメージが大きいようだった。
大人「ぶ、ブロッサム・・・・っ！！・・・ブラック、、ブルーム、ドリーム、ピーチ、メロディも一緒か？・・・ていうか早く退いてくれ！！！」
頭がボーとする中辺りを見回すと何処か別の街に飛ばされたみたいだ。ココは前にリベリオンと戦った時に出てきた幻想世界（ワープワールド）の時に出てきた風景に似ている？
カブト「ココは・・・どこだ？この景色は・・・あの時リベリオンと・・・うぅっ！！」
ブロッサム「だ、大丈夫ですか？」
頭痛に頭を押さえるカブトにブロッサムが身体を支えた。過去にに見た事があるこの景色。幻想世界（ワープワールド）の時にもあったこの懐かしい気持ちは一体何なんだ？
ブラック「此処は一体どこ？」
カブト「分からない。・・・とにかく此処からでなければ」
今はとにかくこの場所から出るのが先決だと思っていた矢先に上からやってきた光線がふってきた。カブト達は慌ててそれを避けるとあどけない少年の様な笑い声が聞こえてきたのでその方向を見てみる。
デューン「久しぶりだね・・・キュアブロッサム♪・・・そして仮面ライダーカブト」
カブト・ブロッサム『デューン！！！』
カワリーノ「私もいますよ」
ドリーム「カワリーノ！！！」
デューンとカワリーノが上空から大人達レッドチーム。懐かしき相手の前喜びの笑みと復讐のオーラを放っているのが分かった。更に後ろには以前に戦った地底怪獣テレスドン更に放電怪獣エレキング、デザトリアンとコワイナーも出現し彼等の前に立ちふさがった
カブト「皆、行くぞぉ！！！」
カブトの号令に合わせピンプリキュアと太陽の神は勢いよくデュー

ンとカワリーノに向かっていく

〜〜

ガタック「アマゾンか此処は？・・・ていうかすげぇ熱いな」

ガタックはその頃ブループリキュアチーム達ことホワイト、イーグレット、アクア、ミント、ベリー、マリン、リズム達と共に火山と森林が広がる大自然のフィールドに落とされてしまった。火山が近くにある事もあるのか暑さに体力が奪われしまいそうになる。一同は此処から出る方法を探すべく歩き始めたが・・・・突如地面を揺るがすと古代怪獣ツインテールが姿を現し奇襲を仕掛けてきた

ツインテール「キシャァアアアア！！！！」

マリン「な、何よあの気持ち悪い奴！！！・・い、いやぁああ！！！」

顔が下にある事が少女たちにはかなり怖気を呼ぶのかガタック以外は後ろに逃げしまった。

ガタック「お、おい！！！ちょ、逃げるなって！！！・・あぁ〜もう！！！・・・きやがれシャチホコ野郎！！！３枚に下ろしてやる」

こうなれば自分だけで戦うしかないとガタックはカリバーを構えてツインテールに挑む。

そして逃げてしまったブルーチーム達はというと・・・・。あまりに奇形の姿をしたツインテールにビビって逃げてしまいガタック１人にしてしまった事を今更ながらに後悔している所だった。

ホワイト「あ、あまりの事に逃げちゃったけど・・・ガタックさん大丈夫かな？」

マリン「大丈夫！！！。ガタックならアタシ達の代わりにあの怪獣を倒してくれるって」

ベリー「おいおいお前というやつは」

マリンの他人事のような態度に思わずベリーのツッコミが入るが彼女達の前にも復讐の牙を研いだ影が現れた。

ノーザ「おやおや・・・そんな事でいいのかな？」
ベリー「ノーザ、クライン！！」
クライン「わざわざ私たちが何故彼とお前達を引き離したか分かっていないようだ」
ゴーヤーン「彼が怪獣に気を取られいる隙にお前達は私たちが倒すのだよ！！！」
イーグレット「ゴーヤーン！！」
３人の後ろからは更に神戸を襲った機械兵士とウラン怪獣ガボラ、ウザイナーを従えブルーチームに襲いかかった。ガタックは放たれところでツインテールと戦いながらも何とかこのシャチホコ野郎を倒そうと必死になるが形が奇形な故に中々ペースがつかみにく。そしてブルーチームには怪獣を倒せるだけの戦力があるとは言いにく。ガタックよ急ぐのだ！！。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

ダークカブト「此処は・・・海底？」
その頃新規加入プリキュアチームことイエローチームとダークカブトは深海の海フィールドにいた。といってもプリキュア達は息が出来るので本物というわけではないが果てしなく広がる青い海に思わず身をゆだねたくなってしまう。
ムーンライト「気をつけて！！！何か来るわ！！！」
ムーンライトが何かを感じ取ったその先には何と大だこ怪獣タガール、大ガニ怪獣ザンガがイエローチームを奇襲する。
ダークカブト「タコに蟹なんて結構贅沢じゃないか！！！」
だがダークカブトはクロックアップで２匹の間合いを一気に詰めるとクナイガンでザンガの鋏を斬り落とす・・・だが
ダークカブト「何っ！？」
何と鋏がすぐに再生してきたのだ。戸惑ってしまい動きが止まってしまったダークカブトをザンガが見逃すはずはなく。
ザンガ「ギシャアアアアッ！！」

そのまま硬い鋏で彼を吹っ飛ばして岩に叩きつけてしまった。
サンシャイン「ダークカブト!!!大丈夫?」
急いでサンシャインが駆け寄りダークカブトを介抱する。だが幸いダークカブトには大した傷はないようであった。
デビル「此処が貴様らの墓場だ!!!」
ルミナス「魔女デビル!!」
アルティメット「此処で海の藻屑にしてやるよ・・・・ふはははは!!!!」
セイバー「アルティメット!!!」
タガールとガンザに加え更にザケンナーとアルティメットが従える亡霊軍団が出現するもダークカブトは鼻で笑い飛ばす。
アルティメット「あぁあ?其処の黒い奴・・・何がおかしい?」
ダークカブト「いや、聞きなれたセリフばかり聞いていると・・・怖さよりかは笑いが出てきてな?・・・すぐに此処から出てやる!!!!」
ダークカブトは珍しくも好戦的な様子にを見せてプリキュア達よりも先に向かっていた。何が彼そそうさせたのかはまだわからなかったが。それに続くようにプリキャア達もなれない海底の海フィールドではあるが答えは彼と同じであると言わんばかりに向かっていた。

ハヤタ「3人とも気をつけろ。何かある・・・わざわざ奴らが敗れ去った敵を蘇らせた事には必ず・・・何か裏があるはずだ。・・・・自分を見失うなよ」
ウルトラ兄弟の5人は彼らが取られた一部始終を見ていたが何か胸騒ぎがしてならなかった。奴らが何故こんな手の込んだ事を?・・・そしてナックル星人すらも従えるダークという存在は一体何だ?・・・彼らの不安は後に的中する事になる。
その頃宇宙船では・・・・・
ナックル「計画の第1段階は成功だな。ガッツ星人対プリキュアようの装置は既に完成しているか?」

ガッツ「ああ。後は奴らが”此方の予定通り”にあの異空間から脱出してくれればあの装置によって奴らの力は封じられる」
ゼットン「そしてそうなればあの3人は変身する以外手は無くなる・・・そしてそうなれば・・・ふふふうふ」
ナックル「計画は・・・すべて完了する!!!」
邪悪なるもの達の計画は既に始まっていた。それには7人の復讐者たちも利用されていると言う事には彼等も知らなかったのだ。既に計画は始まっていたのだ・・・それにプリキュア達もライダーチームも気がつくことなは出来はしなかった、。

第６９話プリキュアオールスターズ＆ウルトラ兄弟？「シャッフルバトル！！！」

次回からバトルバトルバトルになるでしょう！！！。大変だろうけど頑張ります（汗）

ではでは次回もお楽しみに♪

第７０話プリキュアオールスターズ＆ウルトラ兄弟？「大乱闘！！！」（前書き）

前回までのあらすじ～
ダーク達によって復活したプリキュア達のかつての敵はプリキュア達をバラバラさせてしまう。カブト率いるピンクチーム、ガタックがいるブルーチーム、ダークカブトがいるイエローチームはそれぞれの敵と対峙する。

第７０話プリキュアオールスターズ＆ウルトラ兄弟？「大乱闘！！！」

カブト「ハァアアっ！！！」
クナイガンを片手にテレスドンを斬るつけるカブトだがテレスドンの硬い皮膚にはクナイガンの刃も大した効き目を成さない。テレスドンの巨大な尾にカブトは飛ばされて建物に叩きつけれてしまった。
ブロッサム「カブトぉ！！！大丈夫ですか？」
カブト「あ、ああ。なんとかね」
立ち上がるカブトの前にテレスドンの業火が降り注ぐがカブトはブロッサムを抱えて飛び上がった。
カブト「くっ！！！」
だが前方にはデザトリアンとコワイナーが既に彼等２人を捕えていた。怪人の太い腕が彼等２人に向かってくるがブルームが間一髪バリアを張り２人は逃げる事が出来た。
カブト「サンキュー、ブルーム！！！」
数では恐らく此方が圧倒的に不利。何とかこの状況をどうにかするには敵の数を減らすしかない・・・ならば方法は１つしかないだろう。
カブト「クロックアップ！！！」
電子音「ＣＬＯＣＫ－ＵＰ」
光速移動状態となったカブトは目に前にいるデザトリアン、ウザイナーを全て斬りつけて消滅させる。
カブト「ブラックとブルームはテレスドンを頼む。ドリームとピーチとメロディはあの白い怪獣を。ブロッサムと俺はこのデザトリアン達を片付ける・・・先ずは尖兵を叩き潰すぞ！！！！」
ピンクプリキュア『はい！！！』
カブトは此処から出る為には先ずは邪魔な敵をすべて排除した後にデューンとカワリーノを片付けるのは一番手っ取り早いと判断しプリキュア達に指示を出す。流石に彼は戦いになれている事もあるの

か適確に司令塔として機能するだけあり戦いに混乱は生まれる事はなかった。
カブト・ブロッサム『はぁあああっ！！！』
カブトとブロッサムの絶妙なコンビネーションはデザトリアンとウザイナーを切り裂き押し飛ばす。
ブラック「す、凄い。ていうかブロッサムってあんなに強かったけ？」
ブルーム「う、う～ん・・・・何かちょっと違和感が」
ブロッサムとカブトの無双とも言える戦いぶりに此方も負けてはいあれないとブラックとブルームのペアはテレスドンの喉に向けてダブルキックを放つ。
カワリーノ「流石に”男”がいるだけあり中々の統率力があるようですね」
デューン「ふふん・・でもいつまで持つかな？・・・まだまだ数は多いよ」
カブトとブロッサムの奮闘ぶりにデューンとカワリーノは驚くもまだまだ尖兵はいくらでもいるらしく次々とデザトリアンとコワイナーを繰り出してくる。このままでは消耗戦になってしまうだろう。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～
～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～
ガタック「うわぁあっ！！？？？」
ガタックはツインテールとの戦いに夢中になりすっかりプリキュア達の事は頭から離れてしまっていた。奇形の身体は頭上から鞭が叩かれるので思った異常に攻撃が出来ないのだ。
ガタック「ったく・・・あの鞭さえなんとかなればこんな奴・・・？」
何やら突然大地が揺れ始め地面から怪獣が出てきたではないか。なんとそれは昼間に戦った地底怪獣グドンであった。
ガタック「ちょ、あの怪獣倒したはず・・・って2対相手は流石に

無理だぁあああっ！！！！！」
流石に2体の怪獣にはライダーのままでは無理だと思いガタックはスパークレンスを取り出す。こうなればウルトラマンに変身するのもやむを得ない・・と思っていたのだが突然ツインテールが逃げ出すように後ずさりしていくではないか・・・そしてグドンはガタックの方ではなくツインテールに向かっていく。
グドン「グォオォオォオォオォ！！！！！！！！！」
ツインテール「キシャァアアアアアアアアッ！！！！！」
なんと突然グドンとツインテールが戦い始めた。知らない人の為に解説を行うとグドンはツインテールを常食としておりいわばライオンとシマウマの関係であると言ってもよい。
ガタック「なぁ～るほど・・・ってんな事いっとる場合か！！！。
今のうちにマリン達を探さないと！！」
ガタックはグドンとツインテールが争っている隙に2匹から逃げるように走り去っていた。早くマリン達を探さなければならないがこの広いジャングルの何処にいるのだろう?探すのには骨が折れそうだ。
その頃のマリン達ブループリキュア達はと言うと・・・。
プリキュア全員「うわぁあああああああああああっ！！！！！？？？？」
ガボラとノーザ達の襲撃にあい空中に全員飛ばされていた。
ガボラ「ガオオオオォオオォッ！！！！！」
ガボラの放射能光線をよけつつもノーザ達との格闘戦を受け流さなければならない。この忙しい作業をこなしながらも機械兵士のレーザー光線も合わさったらもうパニック起こしても仕方ないだろう。
ノーザ「ははははははっ！！！どうしたプリキュア共ぉッ！！！」
ゴーヤーン「やはりお前達等私達の敵ではない」
マリン「はぁ、はぁ、はぁ・・・アイツら強くなってる！？」
ホワイト「森での戦いになれていないのもあるけど・・・それ以上に奴らのパワーが凄まじすぎて思うように戦えないわ」

マリン「もぉ～ガタックのヤツ何してんのよ！！！！」
ベリー「お前がそれを言うか！！！」
マリンのボケにベリーがツッコミを入れているがそんなやりとに中でも怪獣とノーザ、クライン、ゴーヤーンの攻撃の手は緩まない。
森林という動きずらいフィールドでブルーチームは作戦を考えつつも行動に出る前に隙のない攻撃の嵐の対処に追われてしまう。
ガタック「あそこか？・・・待ってろよマリン・・・すぐ行くからな！！！
ガタックは爆発がする方向に向かって急いで向う。早くしなければブルーチームが危ない！！！。

〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

ダークカブト「はぁあああっ！！！！！」
その頃ダークカブトを含めてイエローチームはなれない海中でなんとか戦っていた。操る敵も海になれたザケンナーであったり魚介類系の怪獣であっので海になれた相手との戦いはかなり厳しい者となってしまう。
タガール「シャァアアアアアアアアアア」
サンシャイン「し、しまった！！！」
パッション「うぐぅっ！！？？」
ムーンライト「サンシャイン、パッション！！・・きゃぁぁあっ！！！」
ナイト「ムーンライト！！」
タガールはその自慢の脚で次々とプリキュア達を捕まえてしまうと口を大きく相手彼女たちを食べようとするがダークカブトはそうはさせるかとクロックアップで近づき。
ダークカブト「タコはタコ焼きにでもなってしまえ！！！！」
クナイガンで全ての脚を切り裂いてタコの輪切り状態にしてしまうとタガールはすみを吐いて目暗ましをする。

ダークカブト「くっ！？・・・逃げたか。」
どうやらタガールは形勢不利と思い逃げてしまったようだ。
アルティメット「ちッ！！・・・使えないタコめ・・・ならば行けザケンナー、そして蟹の怪獣！！！」
逃げてしまった腰抜け怪獣などには用がないとアルティメットはザケンナーとガンザを視界を奪われたダークカブトに差し向ける。
ダークカブト「しまった！！！？」
だが華麗攻撃が当たる前にサンシャインとビートのバリアが攻撃を防いだ。
ダークカブト「サンシャイン！！、ビート！！」
そして素早くその場から離れると今度はアルティメットがギガバルトナイザーをダークカブトに振り下ろしてきた。
ダークカブト「っ！！・・・はぁああっ！！！」
それを振り払いアルティメットに周り蹴りを叩き込んでやろうとするもアルティメットの攻撃が彼よりも早くダークカブトはギガバトルナイザーで飛ばされてしまった。
ダークカブト「くっ・・・強い」
セイバー「はぁあああああっ！！！！」
飛ばされたダークカブトと入れ替わるようにアルティメットにセイバーがゴールドソードとシルバーソードの刃を向ける。当然アルティメットのバトルナイザーがそれを受け止めてしまうがセイバーはそれでも剣を押しつける事を止めなかった。
セイバー「アルティメット！！！」
アルティメット「ははぁは！！懐かしいじゃねーかよ・・・その憎たらしい目がよ！！！！」
アルティメットの目が白から赤に変わるとそのままセイバーの剣をギガバトルナイザーで薙ぎ払いセイバーの腹を突くとそのまま彼女を蹴り飛ばしてしまった。
ミューズ「セイバー！！！」
そしてセイバーが飛ばされた瞬間アルティメットの光線技が全員に

降り注いでしまう。全員の悲鳴が海のフィールドにこだました。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

その頃残された妖精たちは自分達には何もできない事におのれの無力さを嘆くしかできなかった。だが自分達には彼らを信じる以外には何もできない。それは紛れなく変えられない事実だ。

シプレ「・・・シプレ達には何もできないです・・・こうやって祈ることしか」

タルト「・・・・悔しいけどワイらには何もできへん・・・プリキュアさんらとカブトはん達の帰りを待つことしか」

？？？「そんなことないよ。」

残された自分達が唯一出来る事は本当に限られてしまっている。自分達にもローズのように戦える力があれば。そんな彼等に１人の青年・・・正体はウルトラ兄弟のルーキー「ウルトラマンメビウス」のミライであった。

ポプリ「あ、貴方は？」

ミライ「ボクはまたの名をウルトラマンメビウス。地球での名はミライ。」

妖精一同『！！！』

ミライ「今、彼女達は頑張っているだ。この世界を守るために・・・・そして君達の為に」

ハヤタ「そうだ。だから信じるんだ。君達の祈りが彼女達に届けば必ず帰ってくる。」

そしてミライに続きハヤタ達４人のウルトラ兄弟も優しい顔で妖精たちの不安を掻きけすようにそう言った。彼等も戦う事は出来ない・・・いわば妖精たちと同じなのだ。だからこそ自分達が出来る事を今はするしかないのだ・・・仲間として。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

カブト「はぁ、はぁ、はぁ・・・これじゃキリがない。・・・こうなればやむを得ない・・ブロッサム・・・合図をしたらお前はブラック達に合流するんだ・・いいな？」

ブロッサム「そ、そんな・・１人であの数と戦うつもりですか！？？・・そんな無茶は！！」

カブト「分かっている！。だけどブラック達は怪獣との戦いになれていないしこのメンバーで怪獣を抑えられるのはお前だけだ。俺は大丈夫だから・・・行くんだブロッサム。俺も必ず後から合流する。・・・必ず出口を見つけるんだ！！！」

ブロッサムはカブトの必死な説得を聞きやむを得ず苦戦しているブラック達の元にとんでいく。カブトはそれでいいとブロッサムの後ろ姿を見るとハイパーゼクターを呼び寄せハイパーフォームにフォームチェンジを行う。

ハイパーカブト「来いよ・・・此処から先には行かせない！！！」

ハイパーフォームになったカブトはパーフェクトゼクターを構えてデザトリアン達を斬りかかった。プリキュア達が出口を探すための時間を稼ぐ為に。

ブラック・ブルーム『きゃぁあああああああっ！！！！！』

テレスドンの巨体の前に苦戦気味のブラックとブルーム。ブルームの技を上手く活かしブラックが攻撃に回るがテレスドンはパワーで圧倒する。尻尾によって２人は地面にたたきつけられてしまうと身動きが取れなくなってしまった。

ブラック「くっ・・・」

テレスドンの火炎が２人を焼きつくそうとするがその前にブロッサム達が２人を抱えて飛び上がった。

ブラック・ブルーム「ブロッサム！！！」

ブロッサム「大丈夫ですか？２人とも。此処は私に任せてください！！！」

テレスドンと距離を置いたブロッサムはタクトを取り出しテレスドンに向けるとピンクフォルテウェイブを放ち一気にテレスドンを眠りにつかせてしまった。。
ブラック「う、嘘ぉ！？」
ブルーム「私達も結構苦戦したのに」
まさか一瞬でテレスドンを片付けてしまうとは・・・やはり伊達に今現在戦っているだけの事はないと言う事だろう。
ブロッサム「さぁ行きますよ。ココから出る為の出口は必ずあるはずです」
ブラック・ブルーム『うん！！』

『プリキュア』
ドリーム「シューティングスターーっ！！！！」
ピーチ「ラブサンシャイン・フレッシュ！！！」
メロディ「ミュージック・ロンド！！！」
エレキングの放電光線と3人の必殺技がぶつかりエレキングの放電光線と相殺させると同時に咄嗟にメロディが煙を利用してエレキングの正面に立ちエレキングの角を叩き折った。
エレキング「キシャァア・・・キシャァ・・・ァ・・・」
エレキングは角を折られてしまうと電源の切れたロボットのように動きが止まってしまった。なんとか危機を乗り越えられたと一安心の3人。そこにブロッサム達も合流しカブト以外の全員がそろった。
ドリーム「それにしても出口は一体どこにあるんだろう？」
メロディ「前みたいに上にあったりして？」
ブロッサム「それは流石にないですよ。私ももしかしたらと思って上を見てみたんですが扉の様なものはなかったですし」
ブラック「でも何処かに出口はあるはずだよ。だから諦めずに探そう！！」
ピーチ「そうだね」
いつまでも此処にいても仕方がないと思いブロッサム達一行はこの

広い広い幻の世界にある筈の出口を求めて歩き始めるのだがその彼女達の前にいよいよデューンとカワリーノ達が姿を見せた。

デューン「そうはさせないよ？」

カワリーノ「貴方達には此処で消えていただくのですからね！！！」

そしてすぐにピンクプリキュア達に向かっていき格闘戦が繰り広げられる。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

その頃宇宙船ではナックル星人達がプリキュア達の映像を監視し作戦の経過を見ている所であった。

ナックル「よし、順調に奴らは体力を使い消耗しているな・・・我々が作った出口を通らせるのもあと少しだ。・・・ふふふ。はははは」

そうこの作戦の本当の目的は今戦っている魔女デビル達も知らないのだ。ナックル達にとっては彼等も只の捨て駒でしかないと言う事に・・・ナックルとダークが考案した作戦は既に第２段階の最終ステージまで到達しつつあるという事に。

第７０話プリキュアオールスターズ＆ウルトラ兄弟？「大乱闘！！！」（後書き）

バトルは楽しいのだが中々むずかしいですね～目立っていないモノたちをどうやって目立たせるか。もっと勉強しなくては。
ではでは次回もお楽しみに♪

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5245q/

ウルトラマンティガ＆ハートキャッチプリキュア！～光と闇の超決戦～

2011年11月5日02時22分発行